



織切の音色

青潟大学附属シリーズ
高校編
第五シリーズ 4

舞夜じよんぬ

その一 高校一年始業式（1）

夏休み中何度も通ってあまり休んだという感じのない校舎に向かい、教室へと急ぐ。

「立村くん、おはよ！」

高校構内に入り、生徒玄関で新しい上履きに履き替えていると聞きなれた声に迎えられた。ロビーに目をやる。すでに電話脇のベンチで女子がひとり、座って待っている。

「清坂氏か、早いな」

「だって始業式だもん、遅れたら大変でしょ」

「俺と同じくらいの時間だと相当だろ。あれ、羽飛は？」

「たぶんちょっと遅くなるんじゃないかな。昨日は宿題の追い込みで大変だったみたいだし」

上総も腕時計を覗いてみた。まだ八時少し前。遠距離通学の上総にとってはさほど到着するに珍しい時刻ではない。ただ美里の場合は比較的學校から近いし、さほど急がなくてもいいような気がする。もっと言うなら、連れの羽飛がないのがおかしい。

——けど、ああ、そうか。宿題な。

美里は上総の心を見透かしたように説明する。隣に座るよう手でベンチの脇を叩いた。

「立村くんは割と早めに宿題片付けて置いちゃうタイプだもんね。私もそうだけど、貴史はぎりぎりまで粘りたいみたいね」

「けどさ、俺、羽飛から理科と数学のコピー答えもらったけど」

違う違うと美里は首を振る。

「そういうのはもう終わってるの。むしろ、あいつが力入ってるのは自由研究のほうじゃないかなって気がするの。ほら、自由研究の装丁とかあるでしょ。それぞれの。貴史がすべて最終構成まとめるでしょ」

「ああそうだった」

今年の夏に指定された自由研究は、青大附高教師たちの意向により、それぞれグループを組んで作成するようにとのご沙汰だった。いつものパターンだったら上総は自分ひとりで何か洋書を探し出してきて適当に訳して提出すればよかったのだが、それを避けるための対策というところもあるらしい。幸い上総には美里や羽飛といった附属上がりの仲間が側にいたこともあり事なきを得たが。テーマは「青潟から旅立ち海外で花開いた若き画家の人生」を三人三様の視点で分析したものだった。それなりに頭つき合わせて議論したり推敲したりして、がんばった代物ではあると思う。

「絶対、褒めてもらえると思うけどなあ、あの研究」

半そでのブラウスと、襟元の赤いリボンを調べながら美里がつぶやいた。

「そうかな」

「そうよ、そうに決まってる！ だって私たちほんとがんばったよね！ 資料だってどっさり集めたし、じっくり勉強したし、ほら、立村くんだって小説書いたりしたじゃない！」

「小説、っていうのか、あれ」

美里が言い張るのも無理はない。今回の自由研究で上総が担当したパートは、青潟から地縁を捨て旅立った若き洋画家の心を自分なりに想像して描いた物語だった。もちろん羽飛たちの集めてくれた資料を参考にしたけれども、「小説」と言われてしまえば否定はできない。上総の頭に入っている妄想、そのものかもしれない。

「うーん、わかんないけど。でもね、絶対私たちの個性出てると思うよ。貴史が芸術命で語ってるし、私は年表命だし、立村くんは」

「小説命か」

「そういうこと！」

思わず笑った。顔を見合わせた。じっくり美里の顔を眺めると、やはり浅く日焼けしているし、頬もどことなくつやつやしている。今日はめずらしく二つわけに髪の毛を結っている。リボンやぼんぼんの飾りは校則を省みてかつけていない。

「とにかく！ 自由研究受け取った時の先生たちの顔が見ものよね」

「でも他の奴もみなそれなりにやってるみたいだけだな」

たとえば、関崎とか。青潟市内の石碑を巡る研究を、大量の写真資料とともにまとめていると聞いている。その他天羽たち元男子評議連中たちは、

「シャーロック・ホームズ研究？ それほんと？ 難波くんの趣味を手伝わされてるだけじゃない！」

説明すると美里は両膝を押さえてうつぶした。笑いをこらえている。

「当たってるよそれ。もともとあるネタを利用したほうが楽だし、深く研究もできるという判断らしい。もっともさ、研究センターに立ったのはやはり難波だったようだし、三人でどういう分担をしたのかまではわからないけど」

「なんだかそれ、不公平な話だよ。笑っちゃう」

しばらく美里と自由研究のネタで盛り上がった後、上総は一年A組の教室に向かった。

もう朝練習の連中が学内をうろついているし、今後のことも考えると美里と仲良くふたりで語り合っているのを見られるのはあまりいいことに思えない。上総はともかくとして、美里の立場が、である。

朝の夏の日差しが露となる濃いめの影。

教室の扉を開くと、すでに先客が何名か席についていた。ほとんどが女子だった。

「あ、おはよう」

「おっはよ！」

ひとり男子連中の輪で荷物を整理している女子のみ、返事がきた。

言うまでもなく朝のさわやかな、

「あーら、立村、あんたずいぶんすっきりした顔してるよねえ。さては朝早く一発抜いてきたの？ そうだよ、学校に来る前にはそれ常識だよ」

「あのさ、古川さん」

いつもの下ネタトークは挨拶代わり。今年で四年目。交わせないでどうする。上総は自分の席

に着き、さっさとかばんから道具を取り出した。始業式の後すぐに授業が始まるのが高校のしきたりだ。筆箱も、ノートも、もちろん宿題の準備も揃っている。

「立村も早いな」

「そうでもないけど」

古川こずえと組んでいるのはやはり関崎だった。奴も早く到着しているであろうことは想像していたが。ただそうすると、生徒玄関で上総と美里が語り合っているのを見かけたということか。

上総はあえて問うのをやめた。古川こずえに自由研究の話振ってみた。

「古川さんは結局、自由研究何にしたの」

「ああ、あれね。みんなで英語の絵本の翻訳で終わらせたわよ。うちのクラスの子たちも交えてね」

ちらと教室内を見渡しなが、相手がいなかったことを確認して、

「ほんとは図書館の子たちとやろかって考えてたんだけど、いろいろあってね。まあ評議委員は辛いってところよ。ねえ、関崎」

「そういうものなのか。藤沖はそんなこと言ってなかったが」

朴訥に答える関崎。後ろでだんまりしている片岡の相手を時々しながら、こずえにも答える。ちなみにまだ、藤沖は到着していない。

「あいつは今、応援団のことで頭がいっぱいだからねえ。使い物になんないわよ。ね、立村もそのあたり想像つくでしょうが」

——いや、別の意味で想像はつくけども。

教室では余計なことを口にしないのが一番安全だ。四年間の青大附属生活でいやというほど思い知らされてきたことだった。

こずえがまだ話を一方的に続けている。上総は適当に聞き流しながら、

——あとで、中学寄ってこようか。

本日の予定を組み立てることにした。

「そーなのよ。ねえ片岡も聞いてよ。そろそろ合唱コンクールの曲も決めなくちゃなんないのにさ。藤沖の奴全然捕まんないんだもん。こちらだって緊急の連絡だってあるのにねえ。今日の放課後、ほんとは緊急会議したいんだけど、どう思う？」

その一 高校一年始業式 (2)

しばらくわやわやおしゃべりにふけるうちに鐘が鳴り、タイムラグもほとんどないまま麻生先生が現れた。さすがに担任が出てくるとみな黙る。

「よお、お前ら、元気だったか」

「起立、礼、着席」

麻生先生の挨拶と同時に藤沖が号令をかける。ちらっと見上げた時にも気がついたのだが、藤沖の丸刈り頭にはいまだ違和感を禁じえない。単純に夏休み中暑くて耐え難かっただけなのかもしれないが、どことなく気持ち悪さすら感じる。

「さてと、夏休み中はお前らもさぞ羽根を伸ばしてきたことと思うが、それも今だけだぞ。これから始業式が終わったらすぐ授業に突入するからな。気を引き締めていけよ。それと提出物、忘れてきたなんて奴、いないだろうな。まずはさっさと出せ。俺たちはもうお前らの自由研究がどんなものか見たくてなんなくてわくわくしてるんだぞ。藤沖、古川、手分けして回収しろ」

「はい」

何が楽しみなんだか分からないが、言われる通りに提出物一式を机の上に載せた。男子と女子それぞれの評議委員に渡すだけなので楽なものだ。その他の宿題はそれぞれの授業で提出すればいい。ただし自由研究は羽飛にトータルで渡すよう頼んであるので上総からは何もしなくてもいいのが楽だ。思ったよりもA組で提出する奴が多いということは、まとめ役に当たる生徒が集まっているということか。

「よーし。まあ他の奴に預けているのもいるだろうしなあ。なんだかんだ言って、夏休みは顔も合わせる機会あっただろうしなあ。さてとだ。自由研究についてなんだが、簡単に述べておくと、このまま教師たちのお慰みにするだけではなくてだ」

——また予告なしの自由研究コンクールなんてやるんじゃないだろうな。

羽飛や美里たちともその点は危惧していて対策を取っていた。といっても誤字脱字がないかどうかとか、第三者に読まれてもみっともない外見かどうか、くらいだが。

「せっかくお前らが汗水たらして書いたものなんだから、もっと有効に活用できないかとな、ものによっては大学の専門担当の教授にお読みいただくとか、場合によっては学外のコンクールに出すとか、それなりに活用する可能性もある。その点は覚悟しとけよ」

「先生、原稿料はいくら？」

こずえが即、つつこんだ。麻生先生もにやにやしなげら返す。

「ずいぶんと細かいことチェックするなあ。原稿料かあ、現物支給じゃだめか。たとえばみんなでは一っつ焼肉食いに行くとか」

「焼肉はともかく何かおいしいものならいいけど、でも先生、冗談抜きで何かに使うってことだったらいわゆる、許可とか著作権とかめんどくさいこと考えなくちゃあいけないんじゃないですか？ すごく私気になるんだけど」

軽い調子でつつくこずえ。上総も頷きたくなる。教師連中が自由研究をなんらかの形で活用するのはかまわないにしても、無断で流用されるのだけは勘弁してほしいと思う。もっとも上総の

関わった自由研究で何がどうということもおこりそうにないので、あえて知らん振りをしているところもある。

「面倒なことになりそうだったらその時は直接呼び出すから、ま、そんなとき考えようか。それと、あとでこれは五時間目のホームルームでも相談しなくちゃあなんないことだがな」

相変わらずの脂ぎった顔をタオルで拭き拭きしながら、麻生先生は藤沖に向かって語りかけた。

「まだ先だが九月末の合唱コンクール、そろそろ準備しないとまずいんじゃないのか、藤沖」

「はい、わかりました」

短く答える藤沖。声がいつそう太くなった。麻生先生は頷き、次に関崎へ振った。

「関崎も手伝ってもらえるよな」

「もちろんです」

自信満々に答える関崎。こいつがカラオケボックスでマイク握り締めたつきり離さない姿を知っているだけに、上総としては複雑なものがある。

「課題曲、自由曲、それぞれ決めて早めに練習に入ったほうがいいだろう。十月末には学祭もあるしそちらに重ならないように先手の対策を取ったほうがいい。それと、そうなる古川、お前も忙しくなるぞ。わかってるな」

「あたりまえでしょー！ とっくの昔に準備してますよ、ね、みんな？」

女子たちに声かけするこずえだが、どこことなくクラスの女子連中ののりはいまひとつだった。ひそひそ話のみ。まあこれもわからないことではない。合唱コンクールは担任だけが盛り上がり生徒はしらけるのが普通じゃないだろうかと思はれている。へそ曲がりと言いたければ言え。これで三年間どれだけあの野郎と戦ったことか。

「本当かあ？ まあお前らがすっからかんに忘れていなかっただけでもよしとするか。さあさ、全員廊下に整列しろ。そろそろ講堂で始業式の始まりだぞ」

タイミングよく全校放送の整列案内が流れた。みな勢いよく廊下に並んでいくのを上総は眺めつつ、ゆっくり立ち上がった。急ぐ必要はない。列にもぐればいいことだ。特段、麻生先生も何も言わなかった。

評議から遠く離れ、さまざまな学校行事を眺めやる。

校長先生の二学期に向けての激励も耳からすり抜ける。

集会途中で貧血起こして倒れた生徒も四、五人いる。

——そうか、九月は合唱コンクールか。

なんとなく気にはなっていた。中学時代はなぜか中学二年しか行われなかった合唱コンクールだが、高校では毎年全学年が参加するものと定められているようだ。口を大きく開けて合唱するなんて上総の性格上耐え難いものではあるのだが、評議委員イコール指揮者という逃げ場を失った以上どうしようもない。あきらめざるを得ないだろう。

上総は後ろに並んでいるはずの関崎を肩越しに見やった。まじめな顔してじっと壇上を眺めている。

——もう歌いたくてならないんだろうな。

本当だったらソロパート与えたいくらいだが、さすがに合唱コンクールではないだろう。水鳥中学ではどういう扱いされていたのかわからないが、とりあえずカラオケ好きの関崎と評議委員コンビの藤沖と古川こずえ、この三人に任せておけば間違いはないだろう。上総の出る幕はない。

——それよか、早く放課後にならないかな。杉本と一緒に写真受け取りに行かないとな。

その一 高校一年始業式 (3)

始業式後何事も内容に授業が始まるのはいつものこととしても、やはり提出物が多いこともあり内容は控えめだった。夏休み中の講習である程度の部分を進めているというところがあるのかもしれない。適度にノートを開き適度に聞き流しているうちに無事放課後と相成った。

「あのさあ立村、ちょっといいかなあ」

即座に荷物をまとめて教室を出て行こうとする上総に、こずえが呼びかけた。まだA組の教室には女子が中心になり固まっている。A組の生徒はさほど多いわけでもない。珍しく他クラスの連中はいない様子だ。

「何？」

「これから美里や羽飛と遊ぶ予定？」

「いや、今日は用事あるからまた後にする」

「あっそっか。一回で用事片付くと思ったんだけどなあ、どこ行くのさ」

「どこって、中学に」

こずえは何度も頷きながら、

「そういうことなら止めるわけいかないな。わかった、じゃあ明日悪いけど時間もらってもいいかなあ」

「何か用事でも？」

「あるんだよそれが。いろいろとねえ。お姉さんはもう頭が痛いつたらないの」

——清坂氏たちのことかな。

ちらと頭をよぎる一学期末の出来事。はたして美里が上総宅で行われたひとつの出来事をこずえに打ち明けているのか、それに伴う羽飛の感情も把握しているのか、そのあたりはまだわからない。ただ言えるのは、こずえも夏休み中図書館で上総たち三人が自由研究について熱く語っているところをしっかりと見ていたし、たまには割り込んできたという事実のみだった。全く気づかないとは思えない。

「いいよ。明日なら特に問題ないし。羽飛たちにも声かけたほうがいいか」

「そうだね、そっちのほうがいいかも。あ、美里には今夜連絡入れとくからさ」

こずえはため息をふっさるようにさわやか笑顔を浮かべた。

「それにしても、そう尻尾振ってなんで中学に行くのかねえ。理由はもう聞かないけどさ」

言いたいこと言わせておけばいい。理由はほぼ、こずえの予想通りと言っていいのだから。

中学の始業式も高校とほぼ同様に五時間目で終了のはずだった。前もって聞いていた。

——ということは、そろそろ杉本も中学の生徒玄関出てくるかな。

中に入って待つといろいろな面倒なこともあるし、できれば杉本だけひっそらって行きたい気持ちの方が強い。いろいろな面倒な過去を持つ上総としてはネタにされるのも出来れば避けたいし、何よりも先に顔を合わせてしまい長話になりそうな相手も今日のところは遠慮しておきたい。上総は玄関に急いだ。

高校の生徒玄関から出ようとした時、不意に、

「立村先輩」

さっと前を遮られた。入り口付近に隠れていたのだろうか。脳天あたりに結い上げた高いポニーテールの中学女子といえば、ひとりのみ。

「杉本、お前来てたのか」

間抜けな問いを返してしまう。半そでのブラウスに白いレースのショールをかけている。同じ中学女子、いや高校女子の持つ雰囲気とは違う何かがある。二の腕をすっぽり隠しているからかもしれない。

「はい、本日お約束いたしましたから」

杉本が約束を忘れるわけがない。なんと当たり前な真理。すっかり忘れていた。

「けど、今日、授業は」

「早いです。特に用もございませんので」

「桜田さんとは」

「彼女は職員室に呼び出されているようです」

短い言葉に、二人の置かれている面倒な事情が透けて見える。杉本は現在すでに、もとのクラスである三年B組に戻されて授業を受けているはずだが、すでにクラスの連中からは無視状態かつ担任からも慇懃無礼な扱いのみ、トップに立つ佐賀はるみの「庇護」の上逆らうことを許されない状態だ。もっとも、一学期に起きたある事件の関係で佐賀との関係も逆転したのはというところがあるが。詳しいことは上総もまだ把握していない。桜田はもちろん、学校内の要注意人物という扱いもあって、新学期早々いろいろと呼び出し食らうなにかあったのだろう。パーマが残っていると、口の周りに食べこぼし以外の色がついていたとか。

上総はすばやく杉本を大学方面に足を向けさせた。すでに高校の連中は教室を出てさっさと帰宅したらしく、さほど人の気配は感じなかった。見られて困るわけではないが、面倒なことはできれば避けたいのも本音だった。

「写真、取りに行ってくださいか」

「はい。それとお支払いは」

かばんの中から財布を取り出し、じっと上総を見つめる杉本。上総は押しやった。

「だからさ、これは俺の趣味だって言っただろ。俺が保管するものだから」

「そういうわけには参りません。先輩に余計な出費を増やすわけには参りません」

「それならさ、どうしようか」

無理に逆らってもしょうがない。ここは妥協策を出してみる。

「別のところで何か食べようか。そっちでご馳走してくれればいいよ」

「もうおなかが空いたのですか？」

あきれかえったように杉本が問い返す。

「そりゃそうだよ。もう給食から一時間たってるし」

「ほんとうに、もう」

あえてその次の言葉を発せず、杉本は黙って大学方面へと歩き出した。途中、顔見知りの生徒たちとすれ違ったらしく、ひそひそ話が聞こえてきたがあえて無視しているかのようにだった。上総の知り合いにはほとんど会わなかったがそれでも、まゆをひそめる様子は伺えた。

——本当は杉本もかなり辛いんだろうな。

いつもながらつややかな黒髪を眺める。この暑い中、なぜ白いショールなんか羽織ってくるのが謎だが、それも杉本らしいこだわりと考えれば納得できる。まだ明るい日の光がところどころ髪に白く溜まっている。真っ白い肌も、少しぼんやりしたような顔立ちも。いや、

——どうしたんだろ。なんか、おかしくないか。

上総はそっと杉本の横顔を覗き込んだ。つい二日前には見かけなかった陰が残っているように見えた。

「杉本、学校で何かあったのか」

表情を変えず杉本が顔を挙げた。つんと澄ましたままで、

「別に、いつものことです」

「渋谷さんとのことでまた何か言われたのか」

「この前も申しましたように、そのことはすでに終わっております」

「なら、桜田さんのことか」

「いいえ、そのこともおとといに」

「じゃあなんだよ。なんで」

途中で言葉を飲み込んだ。決して口にしてはいけない言葉だと、関所が留めた。

「まあいいけどさ。それと杉本」

「立村先輩、それではこういたしましょうか」

話を無理やり方向転換するかのよう、杉本はじっと上総を見据えた。

「写真をいただきましたら、私がアルバムを購入いたします。大学食堂でアルバム編集いたしますでしょうか。もちろん立村先輩が相当飢えてらっしゃるようであればケーキ程度であればご用意いたします。ただ、カロリーが高すぎると将来成人病への道をひた走る可能性大ということも、ご承知いただければと存じます」

「あ、それ大丈夫。俺、食べても太らない体質だから」

「その過信どこから出てまいりましたか」

しょうもないやり取りを繰り返している間に大学生協へ到着した。

さっき尋ねたかった言葉をもう一度飲み込んだ。

——杉本、やはり変だ。なんでわざわざ俺を玄関で待っていたんだろう。あそこにいたら、関崎と顔を合わせてしまって佐賀さんとの約束を反故にしてしまう可能性があるって分かっていたのにさ。夏休みから杉本、自分じゃないみたいだ。どうしたんだろう。

その一 高校一年始業式 (4)

生協で現像した写真の清算を済ませ、上総は杉本梨南とふたりで一階のカフェテリアに向かった。あまり杉本を連れて生協で時間をつぶすことはそうなく、大抵は外に出て「おちうど」などでお茶を飲むのが普通だった。しかし、少しテーブルを汚したりする可能性もあるので今日は仕方ない。杉本も特に文句を言うことなく従った。

「アルバムは」

「こちらにございます」

薄いアルバムが五冊で一箱に収まるタイプのもを購入していた。杉本は席に着くなり包んだ袋と中のビニールを手早くはがし、かばんにしまった。

「立村先輩、それではお写真を」

「あれ、何か食べないの」

「なぜそんなに食べることに執着なされるのですか」

それでも飲み物くらいは用意してもいいだろう。杉本の文句を無視して、紙コップのジュースを用意した。冷たい紅茶を二人分運んでおいた。

「恐れ入ります」

すでに写真整理に入った杉本も、「なぜ私に払わせていただけないのですか！」などと怒鳴ることはなく簡潔に礼を述べたあと、黙々とファイル整理に励んだ。さほど難しいことでもなさそうので、プリントした順番に一ページ五枚ずつはめ込んでいけばいいだけの話だった。

「俺も手伝おうか」

「いいえ、結構です。途中で順番がずれては大変です」

手持ちぶたさをごまかす意味で、上総はカフェテリアに向かった。やはり口寂しいものがあるので、冷たいチーズケーキを二人分お盆に載せて運んだ。

「立村先輩、私は別に」

「いいよ、あまったら俺が食べるから」

「立村先輩はこんなに中学自体食べ物に執着するお方でしたか」

「昔と変わったわけじゃないけど」

変なところで誤解をされているらしい。ちなみに青潟大学の学食で出るケーキは正直、さほどおいしいものではない。単純に腹を満たすための高カロリー食品としかみなしていないところがある。だから杉本の前で食べる機会がさほどなかったとも言える。

「せっかくですのでいただきます」

「もうここまで終わっているなら十分だろ」

ケーキを選んでいる間に杉本の作業もほぼ完了していた。あとはのんびり、紅茶飲みながら話していればいいだけのこと。そうだ、これからが本番だ。

ちらちら、上総たちの様子を伺う気配を感じる。すでに覚悟は済んでいる。

「誰かに何か言われなかったか？」

「いつものことです。たいしたことではありません」

つんと澄ましたまま、杉本は上総の顔をまっすぐ見つめて言い切った。

「ありもしないことをあげつらう男子連中に話すべき言葉もありません」

例の、修学旅行濡れ衣事件だ。杉本の意向で真犯人をあえて内密にする方向で進んでいる。学校側の希望を飲んで、ひとりの女子の命を守るために。事情を知る上総としてその判断が正しいとは全く思っていないが、杉本の意思を尊重しなくてはならないのも事実。

「それにしてもすごい分量だよな。こうやって見るとさ」

アルバムを受け取り、上総はゆっくりページをめくった。暗くて一部読み取りづらいものもあるけれども、大まかな内容は明らかだった。「舞姫」を始めとし、英単語の辞書漫画あり、理科室でのラブストーリーあり、しばらくは家でめくって楽しめそうだ。

「これ、俺が預かっていいよな」

「そのつもりとおっしゃいましたでしょう」

杉本は頷き、函ごと差し出した。

「少なくとも本日の領収書があるわけですから、今後誰がまねしても私たちがオリジナルと言い切ることができるわけです。桜田さんの才能を超える人がそうそういるとは思えませんが」

「俺もそう思う。ところで杉本、第二弾の編集会議はいつごろなのかな」

「公立の授業がどのような展開を迎えるかによります。青大附中の授業とは進度が大幅に違いますから、できるだけ合わせないといけません。それに公立高校入試の場合は公民が対象になりますけれども、大抵の学校はそこまで手が回らないと聞いたこともあります」

「毎年、三月半ばに試験回答が新聞に載るけど」

「過去五年分は集めてあります。自分のためにも」

——自分のため、なのか。

杉本は決して嘘を言わない。それならば、信じてもいいのだろうか。

——本当に、自分のためなのか？

上総は杉本の顔を見つめ返した。コンクリートにボールを投げつけたがごとく、まっすぐ跳ね返されてきたその眼差しを、逃さなかった。

「立村先輩！」

横入りする声に遮られ、上総はつい目を杉本から逸らした。男子の声、声変わり前の甲高い響き、とくれば相手はもう、ひとりしかいない。

——なんだってあいつが来るんだよ。

「先輩？」

杉本も小首をかしげて一緒にその声の方向に振り返り、驚いた表情を見せた。

「まさか、あの彼、ですか」

「そう、あの彼だよ」

杉本に詳しい事情をまだ話してはいなかった。霧島ゆいの麗しき弟でかつ骨肉の争い中という触書もあり。杉本も霧島真についてはあまりよい感情を持っていないだろう。霧島ゆいとはこま

めに連絡を取っているということだから、当然弟の真に対してもそれなりの情報を得ているはずだ。もっとも、それは霧島ゆい経由のつながりだ。まさかあいつが上総の家にわざわざ料理一式セットを持ち込んでがつがつ食い漁るような猫かぶり野郎とは、たぶん知らないだろう。

——杉本とお世辞にも相性が合うとは思えないな。

その他、あまり知られたくない事実もいろいろと潜んでいる。できればこの一年、杉本と霧島とを顔つき合わせて語り合わせるなんて場面を作りたくはなかった。だが、世の中は甘くない。霧島の嗅覚を甘く見てはならないと、夏休み中何度思い知らされたことか。それをすっかり忘れてしまっている自分の鳥頭にも腹が立つ。

「ちょっと、挨拶してくるから待ってろよ」

せめて距離を置いて話をしたい、腰を浮かして立ち上がる間もなかった。霧島がつんと澄ました狐面でもって、意気揚々と現れる方が早かった。

「立村先輩、お久しぶりでございます。何度かご連絡いたしました」

「昨日も電話で話をした」

軽く流す。こうやってしゃちほこばっている姿こそが霧島の仮面であることを上総は夏休み一杯たっぷり思い知らされた。毎日何か用を見つけてはつかまるまでしつこく電話をかけてくる。取り付かれたかのように一方的にしゃべりまくる。そのくせ、飽きたらさっさと自分から電話を切る。この気まぐれぶりがどこまで学校で発揮されているのか、いまだに上総は把握できていない。

上総が杉本の前でケーキを手付かずのまま放置しているのを見つけたのか、霧島はちらっとそれを見やり、

「よろしければ、ご一緒させていただいてもよろしいでしょうか」

「いや、俺も今は相手がいるから」

——目の前に杉本がいるんだからさ、わかるだろそりゃ。

気づいていないわけがないにも関わらず、促されるまで知らん振りをしていたようだが霧島もわざとらしく咳払いをし、

「これは失礼いたしました。お久しぶりです、杉本先輩」

慇懃無礼に頭を下げた。学年最低嫌われ女子だとしても、一応は先輩、一応は姉の可愛がっている後輩、礼儀は守られねばならないと判断したからだろう。

さらに目ざとく霧島は、ケーキの隣りにおいてある、さっき受け取ったばかりのアルバムに興味深そうな眼差しを向けた。

「立村先輩、アルバムですか」

「そうだよ、五冊セットのものだけどさ」

「旅行なさったと伺いましたが」

「昨日話した。結洲に行って来た」

用意しておいてよかった。上総はかばんから結洲の粉末抹茶を取り出した。透明ビニールにかわいらしくまとめたものだ。本当は美里に渡すつもりだったが出し損ねた。

「ほら、これが土産」

「恐れ入ります。頂戴いたします」

丁寧に両手で押し頂くようにし、霧島は上総の隣りに陣取った。杉本が目の前で仏頂面したままにらみすえている。さっきまで上総とかち合っていた眼差しは、霧島を鋭く、ぶっこわしそうな刃に変わっている。警戒心ばりばりの、全身総毛立ちといったところか。

「先輩、よろしければ拝見したいのですか」

「だめだよ。これは旅行の記念写真じゃない」

「杉本先輩からいただいたからでしょうか？」

——なんで知ってるんだこいつ？

舌打ちしたくなる。どうやら霧島は、上総が杉本とアルバムをはさんでやり取りしている様子をどこかで観察していたに違いない。気づかなかった自分が愚かと言えばそれまでだが。その後タイミングを見計らって、どの方向から声をかければいいかなども計算尽くして「立村先輩！」とやったわけだ。

——まずいな、杉本またすねるよ。どうしようか。なんかいい言い訳ないかな。」

「立村先輩、このアルバムは先輩にお渡ししたものでございます」

杉本がいつもの一本調子な声で口を切ったのは、霧島との押し問答に限界を感じたあたりだった。それまでじっと上総と霧島のやり取りをにらみつけていたのだが、

「そんなに霧島くんが興味をお持ちであれば、減るものではありませんのでご覧いただければと思います」

同時に立ち上がった。霧島を厳しく全身ねめまわしたのち、

「どうせ、この内容をすべて、生徒会長に告げ口なさるおつもりかもしれませんが、私は決して後ろめたいことはいたしておりません。どうぞ、お好きに調理していただければよろしいのです。それでは、失礼いたします」

「おい、待てよ。まだ杉本、話、終わってないだろ？」

上総の止める声も聞こえないかのごとく、杉本は一礼した後くるりと背を向けた。

ぴんと張った背、静かに揺らぐポニーテールの長い先、白いショールの背中。

——あーあ、あいつすねちゃったよ、どうするんだよいったい。

隣りでいつのまにか、上総のケーキをくすねて舌鼓を打っている霧島を、上総はため息と共に見下ろした。そういえばまだ、飲み物を用意していない。

「あのさ、霧島。誰か生徒会かに見られたらどうするんだよ」

「どうもいたしません。僕は高校に内偵で向かっているといいことですから。嘘ではありません。それと、杉本先輩から許可をいただいたことですしこのアルバム、拝見してもよろしいですね」

深いため息とともに頷き、上総は霧島と自分の分サイダーを買ってくることにした。

自分の分の紙コップ紅茶はすでに霧島によって飲み干されていたからだった。

その一 高校一年始業式 (5)

どっかり座って置物の犬のごとく離れようとしない霧島。紙コップに注がれたサイダーを差し出し、上総は両手を組んでテーブルに載せた。ひと呼吸おいた。

「お前さ、今日生徒会の用事とかないのか」

「女子のみなさまがうるさいので逃げ出してきました」

「お姫様はいないのか」

当然、嫌味である。霧島はげんなりした顔で答えてきた。

「僕どもの相手で大変なようです。男子の出る場はありません」

——いろいろ面倒なんだろうな、けどさ。

一応頭を下げてこくこくサイダーを飲み干す霧島、その顔を覗き込みつつ上総は周囲のささやきを聞き取ろうとした。大学生メインの客層ではあるが附属中・高生も多い。今日は特に始業式で委員会や部活動もまだ始まっていないところが多いと聞く。さっきもなんとなくひそひそ声を耳にしたような気がしたのだが。

一学期のうちはそれでも霧島も人目を気にしてかなりとんがった言動をやらかしていたようだが、今はまだ夏休みの緩んだ気分がそのまま来ているらしい。

「時に、立村先輩」

「なんだよ」

「せっかくの逢瀬を邪魔してしましまして申し訳ありません」

「分かっているなら何も言うな。それでいったい今度何の報告だよ」

隠す気もない。杉本が立ち去った後の何一つのこっていない席を見やる。

「先日お話した通りですが、本日、我がクラスの新担任が正式に決定いたしました」

「やはりか？」

夏休みに上総の家で話していた、担任交代の件だろう。

「そうです。やはり狩野先生でした。クラス内はただいま、ざわめいています」

「そりゃそうだろうな。予告のようなものは全くなかったのか？」

「僕は生徒会ルートでいろいろと耳にしておりましたが、他の連中はほとんど初耳だったようです。男子の意見としては、それほどうるさくないだろうし好き勝手できると甘く見積もったものばかりでした」

「そう見えるだろうしな」

狩野先生の一見物静かな言動は、実際じっくり話してみてもほとんど印象が変わらない。ただ狩野先生に、担任持ってもらったわけでもないのに世話をかけ続けてきた上総としては、ただならぬものを感じているのも確かだ。中学卒業してからも、わざわざ上総と相性の合いそうなタイプの先生を見繕って紹介してくれたりといろいろ面倒を見てくれる。そのような細やかな対応が、霧島を始めとする生徒たちにも行われるのだろうか。

——けど苦労するだろうな、こいつにはきっと。

なんとなく予告編を夏休みに見せ付けられたような気がしていた。

「それはともかくとして、先輩なんですかこれは」

杉本梨南のお許しも出たとあって、霧島は次にさっさとアルバムの函を取り出し、一冊一冊丁寧にめくっていた。しょうがない、止めたくても大元の杉本に言われたことなのだからあきらめざるを得ない。先輩としての威厳なんて全くなし。

「杉本たちがこしらえた、漫画風の参考書。写真だから見づらいかもしれないけど、目を凝らせば文章もじっくり読むことできるよ。読めばいいさ」

「ご遠慮なく」

ふんふんと軽蔑しきった眼差しで斜め読みする霧島、上総を見上げ、

「こんな無駄な時間をなぜ費やすんでしょうね。杉本先輩もご自身の勉強があるでしょうに」

「学年トップに何言ったって無駄だってさ」

「それになんですか、この『舞姫』は。この安易なストーリー設定はふざけすぎてます」

「言いたいことは分かるけど、目的が違うんだ。杉本たちはある生徒ふたりのために、『舞姫』を分かりやすくまとめて読みやすくし、最終的には読書感想文を書くところまで持っていこうとしているんだ」

「読書感想文ですか？ 物好きですね。相手は女子ですか」

「そうだよ、女子だった」

桜田の友だちというりんりん、あっこを思い出す。顔の造形記憶残念ながらなし。

さっぱりわからないといった風に霧島はアルバムを一通り読みきり、函に五冊しまいこんで上総に渡した。

「これだけ無駄なプリント代を使用して何をしたいのか、僕にはさっぱり理解できません」

「理解してもらいたいと、杉本も思っていないから、いいんじゃないのか」

最初からそのところは上総もわかりきっていた。もともと霧島の想い人がかの佐賀はるみ生徒会長であるところから、杉本にとっての敵であることは決定していた。杉本の目からみたら上総が霧島と仲良くじゃれているということイコール、自分の敵として認定されている可能性もある。霧島のやりたい放題ぶりを目にするたび、卒業まで杉本にばれないよう振舞うなんてことは無理とあきらめ、いつかは来る暴露の時を覚悟していたのだがこんなに早いとは考えていなかった。

——さあさ、どうすればいいんだろうな。ご機嫌どうやって取るかがこれからの問題だよな。

ため息吐きたくなるのが本音だが、ばれてしまった以上しょうがない。

今は目の前の霧島が、何かをしゃべりたくてうずうずしているのを促すのみだ。

信じられないことだが、上総の敵陣地にいる連中に心酔しているこいつが、現段階で上総の弟分であることもまた事実なのだから。

「実は、昨日新しい情報が入りましたのでお伝えしようかと」

きよろきよろ周囲を見渡した後、霧島はつんと澄ました顔で上総に話しかけてきた。

霧島の「情報」とは決して侮れないルートのものであるので上総も耳を傾けざるを得ない。この夏

休み中いやというほど思い知らされたことのひとつでもある。

「俺に昨日電話掛けてきた後にまた、新しいネタが入ったのか？」

「その通りです。僕が立村先輩と話し終わった後、すぐに母の元へ電話がかかってきたのです。本当に偶然過ぎますが」

含みを持たせるような言い方で霧島は上総を射た。

「それと俺とが関係あるのか」

「あります。どなただと思いますか？」

上総は答えず、頷いて答えを促した。

「杉本先輩のお母さまです」

「杉本の？」

もう十分過ぎるほどばれているのだろう。自分の杉本に対する関心度の高さが夏の温度計と同じくらい目盛りが上がっていることを。もう隠す気もなくなった今、上総は黙って促すしかない。

「先輩、お聞きになりたいのではないのでしょうか？」

「だったらどうする」

「それなら、もう少しお付き合いいただけますか」

「わかったよ、何か飲み物買ってこようか」

「今度は珈琲が欲しいです」

——人の弱みにつけこみやがって……！

リクエスト通り珈琲は用意した。しかし、

「何もホット珈琲とは言いませんでしたが」

「黙れ、俺は冷たいものばかりで身体冷やすの嫌なんだ。健康にもよくないし」

恨めしそうに湯気の立つ珈琲を見下ろし、霧島はつぶやいた。

「珈琲だって健康によくないと母が話しておりましたが」

「家ではなかなか飲めないんだろ。ありがたくいただいてくれないかな。それで続きは」

上総にせかさされつつ、霧島は仕方なさげに口を開いた。

「母の会話は僕の部屋に筒抜けでした。襖を閉めておりましたのでたぶん気軽に話していたのでしょう。母曰く、近いうちに杉本先輩のお母上と直接ランチをご一緒する予定のようです」

「それが珍しいのか？」

自分でそう言ってみたけれども、確かに霧島の言う通り想像が少しつかない。一度だけ杉本の母という人に会ったことがあるが、今にも倒れそうな細く病弱そうな人だった印象だけが残っていた。杉本のような独特の感性の持ち主を育てたのだから、只者ではないだろう。もっとも近年の出来事により、精神的にぼろぼろになりつつあり、娘にもかなりきつく当たっているとも聞いている。噂では、

「泣きながら娘のために近所を土下座して周り、塩をまかれたというあのお方らしいですが」

「どうしてお前知ってるの」

「姉の言葉です」

もっともだ。杉本と霧島の姉とは良好な関係だ。もしかしたらそのつながりで母親同士も仲良くなったのだろうか。

「詳しいことは僕も把握できておりませんが、杉本先輩の将来に関して僕の母はかなり親身になり相談に乗っているようです。あの、進学先の話や殿池先生のことも」

「そうか、そういうことか」

「姉の愚かな振る舞いにより苦しんだ経験が、おそらく杉本先輩のお母上にも役立つのではとうちの母も考えたのではないのでしょうか。青大附中を出るとい道についても、姉と杉本先輩とのつながりは共通点があります。成績は別として、ですが」

霧島は意味ありげに微笑み、やっと熱い珈琲に口をつけた。

「もしや、先ほど杉本先輩とお話なさっていたのは、例の件に関するご報告ですか」

「例の件がなんなのか、たくさんありすぎてわからないけどさ」

上総は知らん存ぜぬを通すことにした。本当に選択肢が多すぎてわからないのだから仕方ない。

しばらく霧島の勝ち誇った口調での情報提供が行われた後、学食から出たのはそれから二十分後だった。まだまだ明るいもののそろそろ夕方にかかる時刻だ。急いで漕がないと家に着くのがかなり遅れそうだ。

「それではまた明日に」

一歩外に出たとたん、霧島の表情はりりしくとんがりだした。いわゆる「生徒会副会長兼次期生徒会長」の顔とも言う。上総と隣り合って歩くのも本当はまずくないかと思うのだが、霧島は意に介さず、

「大丈夫です先輩、僕は高校の情報を頂きにきただけです」

と言い放つ。これもいつまで通じるものやらとはらはらすのは上総だけらしい。

「思い出したら連絡します」

「いやいいよ。どうせ明日会うだろうし」

——いや絶対来るよこいつ。

自宅に戻り、風呂にお湯を張りながら食事の準備をした。夏休み中はほぼ料理当番の上総が担当していたので、比較的手の込んだものばかり作っていたが、学校が始まるとそうもいかない。父とも昨夜の段階でその話はある。したがって自分の分は軽くチャーハンをいためてそれで終わりにしている。父の分も用意はしたが、夏だし傷みやすいのもあるし、さっさと冷蔵庫に押し込んでさて終わりだ。

——霧島の奴、本当にあいつ大丈夫なのかな。

学食で、それも周囲の目をほとんどはばかりに我が物ぶるまいするとは想像しておらず、上総もかなり戸惑った。これでも気を遣ってはいたのだ。佐賀生徒会長を始めとする面倒な生徒会メンバーにこの、甘ったれかげんを見られたらいったいどう言い訳するつもりなのだろう。「高校の情報をもらいにきた」と言い張るつもりなのか。そもそもそれを佐賀たちが信じるとするのか。むしろ、

——霧島の立場の方が危うくなったりしないのか。生徒会長ほぼ確定だったのが、俺とつながりあるというだけでひっくり返らないとも限らないのにな。

霧島の野心家ぶりをこの夏休み中嫌と言うほど感じた上総としては複雑な思いが正直ある。ここまでおなか出してひっくりかえる弟分のような存在を側に置いたことがなかったし、その扱い方についても正直迷うことが多い。思わぬところでちょろちょろ顔を出し、気がつけばべったり隣に張り付いている。今日に至ってはなんと杉本梨南と二人きりの語り合いすら……霧島は「逢瀬」とのたまったが……邪魔しに来る。いつか狩野先生とでかけた猫の楽園で擦り寄ってきたしま猫を思い出す。

その一方で、杉本の敵である佐賀はるみにめろめろで、少し色めいたしぐさをされるだけでぼおっとしてしまうのが情けないというか初心といえいいのか、難しいところでもある。霧島

からしたら最愛の姫君の仇である杉本にわざわざ挨拶にやってくるのだからいい根性だ。しかも上総はもしかしたら佐賀にまた攻撃しかけないとも限らないではないか。忘れたとは思えないのだが、二月の評議委員会VS生徒会との最終合同会議の結末を。

食事が出来たところで湯船が一杯になったようだ。蛇口を止めてから急いでチャーハンを書き込む。今日は卵で綴じたのみ。さっさと入るとしよう。

電話が鳴った。

——はいはい！ りつむらくーん？

なんなのだ、この脳天気な声は。夏休み中は顔こそ合わせる機会があったものの電話越しではお久しぶりの響きだ。

「古川さん？」

——あらら、すぐ分かったの。

「気持ちわるいからさん付けやめようよ」

——お互い様ね。まあいっか。ねえ、立村さ、ちょっと今暇？

こずえが家にかけてくるのは珍しいことでは、実はない。一学期の杉本を巡るトラブルの際もいろいろとこんな感じで語らったりもしたものだ。中学三年間同じクラスで、数少ない気心知れた女子のひとり。貴重なつながりではある。

「いいよ。ちょうど夕飯食べ終えたところだし」

——早いねえ。そうか、早めに精力つけておかないと夜の彼女にいいところ見せられないか。

「古川さん電話切っていいかな」

——そうそう先走らないでいいの。持久力が肝心なんだからね。

相変わらずの下ネタ女王様も、現在は三年A組の評議委員を勤める身の上だ。上総も遠くから様子を伺うだけだが、それなりにクラスをうまく仕切っているし、女子たちからの信頼も厚いようだ。もっともスケベネタの洗礼を浴びせられたせいか男子たちがこずえのことを「女」として見ている気配はない。

「ところで、帰りもなんか、話があるとか言ってたけど、何か大変なことでもあったのかな」

下ネタ女王様の先手を取るため、上総なりにすぐ話を切り替えた。

「明日だと間に合わない話なのかな」

——それも考えてたんだけどねえ、ちょっとこの件は早めに相談かまさないとまずい内容なのよね。羽飛も美里も他のクラスだし、藤沖はご存知の通り、ほら、あっちの方に頭がいっちゃってて評議の仕事どころじゃないしね。関崎も。

ここでこずえは言葉を切った。

——規律委員を混ぜるのは危険かなと思うわけよ。

「となると、残るは人畜無害な俺だけか」

——だれが人畜無害だったのよ。ばかばかしい。あんたが一番のコバルト爆弾じゃないの。そんな寝ぼけたこと言ってないで少しはお姉さんのこと聞きなさいよ。でね、あんた今、立ってるの？

ぐっと息を呑む。

「何言ってるんだよ」

——あのねえ、勘違いしてる？ 別にあんたのあそこが立ってるとかなんとか言ってるんじゃないの。ちゃんと腰、落ち着けて話聞いているのってことだけなんだけど、何もう思春期の暴走状態やってるのよねえ。

「悪かった。古川さんに調教されてたからさ、つい先入観が」

こういうばかばかしい下ネタを交わせるようになったのは、ひとえにこずえのおかげだった。上総はすぐソファに腰を押し付けるように座り、

「準備は整ったから、すぐ話してもらっていいよ」

促した。

——今朝も麻生先生話してたけどさ、あんた、合唱コンクールのこと考えてた？

「別に、興味ないし。基本的に俺、関係ないし」

まずはあっさりと答えてみる。

——まあねえ、あんたはずっと指揮者担当だったもんねえ。D組時代も三年間そんなにもめなかったし、男子評議委員の指定席だったしねえ。

「揉めるような話、出てくるものか？」

上総なりに頭をひねって見る。合唱コンクール。高校に入ると毎年行われるご苦労様なイベントなり。指揮者にもぐりこめない以上はしんどくとも口を大きく開けて大合唱するしかない。憂鬱な行事ではあるが、あきらめもある。どうせ一ヶ月耐えればなんとかなる。

——それで私も夏休み中えらいことになってたんじゃないの。あ、あんたには話してなかったかな。てか、男子には全然話してないんだよねこのこと。

「藤沖にも関崎にもか」

——だからさっき言ったでしょが！ あのふたり使い物にならないって。

藤沖の応援団一直線は別にいいが、関崎に話していなかったというのは意外だった。

「それで俺に何を言いたいんだよ」

——そうそう、あんたくらいなのよね。こういうクラスがらみのごたごた話せる相手ってさ。ほんとD組が懐かしいよねえ。人材不足もいいところ。美里カンバック希望。

気持ちは分からなくもないので話をそのまま黙って聞く。

——あんたは知らなかったと思うけどね、夏休みの間、麻生先生から合唱コンクールの準備について下駄預けられてさ、しょうがないからいろいろ調べてたのよね。どんな合唱曲がいいとか、課題曲は一年が『恋はみずいろ』だし、自由曲何しようかなあとか。いろいろ調べてるんだけどね。

曲選びに悩んでいるのだろうか。こずえの性格上こだわりがさほどあるとは思えないのだが。合唱曲といってもいろいろあるし、好きな曲が多すぎるのだろうか。

「別に、古川さんが選んでも別に問題ないと思うけどな。みな従うよ」

——あのね、立村、そういう問題じゃあないの。今のは前菜、わかる？

「全然分からないけど」

はあっとどでかいため息が受話器の向こうで響いた。絶対、あれは、作っている。

——合唱コンクールに必要な要素を思いつく限り挙げてみな。

「指揮者、歌う人たち、審査員、それと、伴奏」

——大当たり。

こずえはゆっくり、繰り返した。

——その伴奏なのよ、問題はさ。

合唱といえは欠かせないもの、ピアノ伴奏。上総もすぐに白と黒の鍵盤を思い浮かべた。

「もしかして伴奏者選考で揉めてるとのことか？」

声を潜める必要はないけれど、ついささやいてしまう。電話の向こうでも同じひそひそ声が聞こえる。うまく拾えてはいる。

——鋭いね。全くもってその通り。まあね、どのクラスにも何人かはピアノ習っている子いるじゃん？ D組だってピアノ弾く子は決まっていたし、課題曲と自由曲手分けして担当すればよかったし、らくちんだったよねえ。ぶらぶらよねえ。

こずえの言う通りだった。中学時代は二年の時しか合唱コンクールに参加できない決まりもあり、伴奏者を選ぶのは一度ですんだ。女子の中で毎週レッスンに通っている生徒をふたり選り出し一ヶ月程度でものにしてもらえればいいだけのこと。もちろん演奏する側としたらいろいろ準備も大変だったと思うけれども、結果としては特に何かトラブルもなく無事終わったような気がする。

「あまりよくわからないんだけど、うちのクラスにはピアノ弾ける人がいないのかな。それあまり考えにくいんだけど」

——いるよ。いるいる。いっぱいいるよ。

「それ、男子、女子、どっち」

——女子にふたりは確実にいるよ。

「それならあとはそれで割り振ればいいんじゃないかな」

——だからそれで決まればこんな夜にあんたに電話かけてよこすわけないじゃん。まったくそんな早くフィニッシュしちゃったら彼女満足させられないよ。

「そっちの話はいいから、先を続けて」

こずえの下ネタを交わしつつも、上総なりにすばやく記憶を手繰っていた。合唱コンクールの存在自体あまり意識したことはなかったけれども、ピアノ伴奏者がいないことにはどうしようもないというのも事実である。テープで流して歌うなんて情けないこと許されるわけがない。全くピアノに関係する奴がいないのであればこずえの苦労もわからなくはないが、ちゃんとふたりいるのだからさほど悩む必要もないのではないだろうか。でもそれだと、確かに上総の元へ電話をいきなり入れて相談持ち込むわけがない。

——うちのクラスさ、ピアノ弾ける子がふたりいるって言ったじゃん。中学の頃は別々のクラスだったから二年の時にそれぞれ伴奏も担当したらしいんだよね。

だるそうな口調でこずえが語り出す。

「それ、誰」

——宇津木野さんと疋田さん。私も前々からふたりがすっごいピアノ上手だってことは聞いてたし、任せておけばいいよねって思ってたんだよ。

「任せられないって理由あるのか？ ないだろ別に」

——あるんだわそれが。話飛ぶけど、あのさ立村、十月の学校祭にピアノ弾ける子たち集めて発表会やるって話、聞ってる？

初耳だった。野に降りた上総には未知の話ばかりだ。

「そんなの聞いたことないな」

——今年から行くことになったらしくって、裏では面倒なやり取りがいろいろあるらしいんだけど、要するにある程度腕のあるピアノの弾き手さんたちを集めて学内の演奏会形式でみんなに聴いてもらいましょうよ、ってイベントなのよ。

「それはそれで聴きたい気するけどさ、それと合唱コンクールとどうつながる？」

上総も決して音楽は嫌いではない。いわゆる歌謡曲はあまり聴かないけれども、歌の入らない穏やかなイーजीリスニングミュージックやシンセサイザーメインのテクノ楽曲などはよくFMラジオでエアチェックしたりする。そのためにラジカセもタイマー予約できるものをお年玉で購入したりした。その他母の命令でクラシック音楽もBGMで毎日聴かされた。名曲というよりも空気のような感覚なので、心震えるといった感動はないにせよ心地よいと思う。さらに付け加えるならば最近、杉本梨南の好みに合わせてワーグナー中心にオペラも聴くだけ聴くようにしている。オペラはストーリーがあるので楽曲がぴんとこなくてもいろいろ考えたり語ったりできるのが楽しい。杉本が語る内容をつかめればいだけなのでそれ以上深彫りすることもない。

むしろ十月の学校祭でピアノ演奏会などあるのなら、杉本を口説き落として連れて行くこともいいのではないかとも思う。関崎と顔を合わせる可能性もあるのでそう簡単には行かないかもしれないがここは上総の説得力アップが必要になる。

——ちょっと、立村、あんた何妄想してるのよ。

「してないよ、それで」

意識が別の方向に飛んでいたのを千里眼のこずえには見抜かれていたらしい。怖い姉さんだ。

——宇津木野さんと疋田さんのふたりは別に仲悪いわけじゃないよ。特別親友同士ってわけでもないけどさ。ただ、共通点があつてさ、ふたりとも音楽関係の大学考えてるんだよね。

「音大か？」

さほど珍しいことでもなさそうだ。

——その辺はわかんないけど。小学校の先生や保母さんになるには必ず音楽の実技が必要になるしそのあたりかもしれないよ。どちらにしてもピアノを活かせる学部を目指してるわけよ。それで日々一生懸命練習しているんだけど、どうやらさ、あの子たちの先生同士でいろいろ難しい問題があるらしいのよね。

どこかで見たり聞いたりしたような光景が眼に浮かぶ。促した。

「先生同士の反目ってことか」

——そういうこと。その辺詳しいことはわからないけどさ。今のところ決まっているのはふたりとも十月の演奏会に出演決定しているってこと。今までふたりが並んで演奏をしたことなかったらしくってね、唯一の機会が二年の合唱コンクール伴奏だったんだよね。その時に、どうやら先生だち同士が妙にライバル意識燃やして面倒なことになっちゃったらしいってわけ。あの子に

だけは負けるなとかなんとか発破かけたり、あの子より下手だったとかいろいろ言われたりして、相当なもんだっらしいよ。怖いねえ。

「おおよその想像はつくよ」

話の概要がつかめてきた。宇津木野さんと疋田さんという女子についてはクラスに存在する程度の認識しかなく顔を思い出すのも困難だが、このふたりの上にいる教師たちがライバル心を露にしているため、生徒たちとしても心労激しいことは上総にもたやすくイメージが湧く。

——あの子たちもね、その二年の時と同じような展開が待ち受けているのにうんざりしているわけよ。仲は悪くないし挨拶はするけれども、やっぱり、比べられたら意識するでしょが。それでも今まではクラスが別々だったし、合唱コンクールも中学二年の一回こっきりだったし、それはそれでよかったじゃない。それがさ、高校に入ってからだと三年間延々とライバル視され続けてしまうわけじゃん？ もううんざりってことなのよね。

「でもさ、どちらにしても演奏会に出演する以上は比べられるのも避けられないんじゃないか？」

——それはもう、覚悟してるって。演奏会の目的が、えらい先生たちにも聞いてもらってどこの大学がお勧めかとか、こうしたほうがいいんじゃないとかダメ出ししてもらおうためのものらしいし、本人たちもそれは自分のためだし割り切ってる。けどさ、合唱コンクールの伴奏なんて本人たちのメリット全然ないじゃん！

「メリット、か？」

発想が飛びすぎてたまにこずえの言葉についていけなくなる。

——クラスのみんなからはそれなりに感謝されるだろうけど、いろいろコンクールとかイベントとかあるのに学校の行事だというだけでもう一曲弾かなくちゃいけなくなるってのはどういうことよって感じじゃん？ 私も子どもの頃ちょこっとピアノ習ったことあるけど一曲仕上げるのってめっちゃエネルギーいるよ。一年でやめちゃったけどね。それをあの子たち、ものすごい数練習しなくちゃいけないんだよ。一曲たって猫踏んじやった程度のものじゃなくて、ほら、クラシックのショパンとかリストとかベートーベンとか。ものすごい長い曲を弾くわけだしね。

「わかるなそれ、俺も親にやたらと長い曲弾かされたから想像はつくよ」

——え？ 立村、あんたなんて言った？

「だから、親に、弾かされたって」

なぜひっかかってくるのかがわからない。こずえがしつこく食いついてくる。

——立村、あんた、もしかしてさ、ピアノ弾けたり、する？

「まあ、それなりに。古川さんに話したことなかったっけ。俺が言いたいのはただ、宇津木野さんや疋田さんがたくさん曲を抱えて苦労するのは大変だろうなってこと」

——わかるよねえ。私が電話掛けてきた意味、やっとわかった？

「別の人探さないと厳しいってことは」

——そっか。じゃ、電話だけだとあれだしさ、とりあえず明日なんだけどあんた暇だって言ってたよね。

「うん、明日は大丈夫だけど」

こずえは突然、明るい声で上総に呼びかけてきた。

——美里と羽飛あたり声かけて、明日の放課後私ん家に来ない？ 四人でこの件、もう少しじっくり話し合いたいんだけどねえ。あ、もちろんお色気サービスはなし。

「そんなもの期待してないけど、ふたりにも話したのか？」

少し意外だった。この話は英語科A組の問題だから他クラスの美里や羽飛は別のような気がする。こずえの立場からするとむしろ、

「藤沖とか、あと関崎とかには相談しないのか？」

思わず尋ねてしまった。

こずえの返事は少しあいまいだった。

——まあね、本当はそっち方面での相談になるんだけどね。今の段階では藤沖はともかくとして、関崎を巻き込むのだけはね、やめときたいってところも、正直あるわ。

「規律委員だからか？ でもそれ関係あるのか？」

——いや、別にいろいろ考えるとこあるのよね。まあ、元D組メンバーで一度私の人生相談に乗ってくれたって、撥当たらない？

「古川さんにはお世話になったからな。いいよ、俺が役立つなら」

やはり頼られると男子たるもの、そそりたつものは、確かにある。たとえそれが下ネタ女王の姉御さまとしても。

その二 元三年D組四人組の秘密集会（1）

上総の予定は問題なかったのだが、こずえを始めとし委員会参加者のすべては二学期開始直後から放課後が埋め尽くされる羽目となった。予想できない事態ではなかったのだが、

「ごっめーん、立村、悪いんだけどさ、今度の土曜にみんなで集まるってのはどう？」

「それでもいいよ、俺は基本的に暇だし」

「悪いねえ、ほんとはさ、すぐに話し合わなくちゃあなんないんだけどさね。羽飛も同じ評議だし、美里も規律だしでやたらと呼び出しが多いんだよね」

——古川さん、ほとんど委員やってなかったから知らなくても当然だよな。

夏休み中もそれなりに集まってはいただろうが、やはり先生たちとがっぷり四つになり話し合う機会が増えるとなると、時間もタイトになるのは仕方ないこと。

——藤沖もそういうこと、古川さんに前もって教えればいいのにな。

こずえの相談をきっかけに上総なりのクラス観察を心がけてはいた。

合唱コンクールに向けて残り一ヶ月を切っていていまだ伴奏者が確定していない自体。

確かにこれは由々しき事態だろう。

——中学の時はどうだったっけな。

思い出してみる。青大附中二年D組時代の合唱コンクールはそれなりに盛り上がった記憶がある。何故声変わり真っ最中のこの時期に行うのかという疑問や反発がないわけではないし、最初は男子連中もいろいろとクラスから逃げ出したりもした。気持ちはよくわかるが上総の場合、男子評議委員イコール指揮者という重責がかかっていたのと、意外にもその指揮者の役割があっさりマスターできたことあってそれほど苦労はなかった。

——そうだ、清坂氏と羽飛がまとめてくれたんだっただよな。

結局はあのふたりプラス、こずえのトリオがうまくクラスメートたちを集めてくれたりなんかして、結局三位という地味な結果ではあったけれども無事に歌い終えた。もともと青大附中の場合は合唱コンクールというものを、クラス団結の機会とのみ認識しているようで、歌の上手下手はあまり関係ないようだった。むしろ特別賞……ブービー賞ともいうが……の「よくクラス一丸で盛り上がりましたで賞」を受賞したことのほうが、みな、感動したようだった。

——音楽委員が仕切る形に一応はなるけど、吹奏楽部員のための役職だもんなあれは。

指揮についても、音楽委員や音楽担任教師に教えてもらいなんとか形にはなった。

いわばゆるやかに、のんびりムードで行われたこともあって今まではさほどトラブルもなかったはずだった。さらに言うなら伴奏に関しても同様で、気がつけばあっという間にふたり、課題曲と自由曲の選択が決まっていた。

——とにかく、情報集めておかないとな。古川さんが大変だ、これだと。

夏休みの提出物は一通り出し終わり、ごく普通の授業の流れに沿って進んでいく。

同時に理数に関する補習も始まる。上総の場合はいわゆる数学中心のものだが、夏休み中の

個人面談を通して確認した限り、一年B組担任の野々村先生が細かく面倒を見てくれるという話に決まっているはずだ。学校が始まってから何度か職員室で顔をあわせたが、

「立村くん、来週水曜の補習なんだけど少し遅くなりますが行きます。分からないことがあればその時にまとめて聞きますから安心してね」

紺色の襟がぴったり詰まったワンピース姿で声かけされた。

「その時はよろしくお願いします」

「それと、立村くんに聞こうと思ったのだけどいいかしら」

小声で、他人に聞かれるのを避けるような態度で席に呼び出され、

「今回の自由研究読ませてもらいました。次回の個人面談でその点についても触れさせてもらいますので、よろしくお願いします」

——担任違うのにな？

一瞬戸惑うが、すぐに気づく。合同の自由研究を提出したのはC組の羽飛貴史だ。当然、他クラスの担任や教師たちも目を通すに決まっている。

「あまりいい出来ではないんですが、よろしくお願いします」

なんだか顔を見るのが恥ずかしい。美里に言われた「小説」のような内容をどういう風に野々村先生は読み取るのだろうか。国語の先生……一応理系が強いとはいえ……の目で読まれたら、きっと細かな粗が出てくるに違いない。

二学期開始後初めての土曜日。

「そいじゃーね！ また来週！」

こずえが明るく女子たちに声を掛け教室を出た。前もって約束していた通り、生徒玄関を出るまでは上総たちとの合流を感じられないようにしたいというのがこずえの考えだった。幸い一年A組の教室は生徒玄関から一番近い。急いで飛び出せば気取られずにすむ。

上総も適当にクラスメートたちと挨拶を交わし、すぐに玄関に走った。後ろから声をかけられた。羽飛だった。

「立村も、これから、古川んちか？」

「そういうこと」

一週間の間に、羽飛や美里とも土曜の予定についてはある程度話をしていた。

「なんも隠し事しなくてもいいのになあ。仲良く一緒に行けばいいってのに」

「いや、それが難しいところなんだよ」

すのこで上履きを脱ぎスニーカーに履き替える。羽飛と並んで歩いた。

「うちのクラスは男女、他のクラスと比べて少ないだろ。人間関係もいろいろありそうなんだ」

「どこのクラスも同じじゃねえの。あ、来た来た、面倒なクラスの住人その二が来たぞ」

駆け寄ってくる足音でわかる。上総と羽飛、ふたりで振り返る。ふたつわけの髪を思い切り揺らしたまま、美里が駆け寄ってきた。

「ごめーん。でもよかった。間に合った！」

「そんなに遅れてないから大丈夫だよ」

「それにしても美里、またクラスでドンパチやってんのかよ。ったく、お前ももう少し学習しろよなあ」

いろいろ会話を交わしながらも、三人組で横並びになり歩く。中学時代からこの隊列はほぼ変わらない。羽飛を真ん中に、上総が右隣、美里が左隣。美里は息を切らせながら、

「ほんっとうに面倒なんだからうちのクラス！ そんなことぐちったってしょうがないけどね。とにかく今日はこずえの家でしょ。この四人で行ったことなかったよね」

「そういえばなかったな」

「俺もねえよ」

そもそも、こずえは上総の記憶する限り、あまり友だちを家に呼ぶということが少なかったような気がする。男子連中のみなのか、それとも女子連中も含めてなのかその辺はわからないが。それを伝えると、

「そうなんだよね、最近だよ、こずえが私のこと家に呼んでくれるようになったのって」

改めて気づいたかのようにつぶやく。

「清坂氏が最近、となるとほとんど呼んでないってことじゃないのか？」

「かもね。でもね、こずえの家、マンションの五階なんだよ！ 景色いいんだから。最近引っ越したばかりだって言ってたけど、ええと最近って中三の時だから、それまで別の家に住んでたってことかあ」

「引越ししてたのか？」

「ちょっと待てよ、古川さん今年の年賀状住所変更してないだろ？」

男子ふたりが仰天するのを冷静に眺めつつ美里が答えた。

「引越ししても一年間は郵便物、ちゃんと転送してくれるから大丈夫。でもそうよね。来年の年賀状のこと考えると今日中に住所確認しといたほうがいいかもね。立村くん、住所録で気づかなかった？」

「あまりそんなじっくり見てないよ」

学校で配布されるクラス名簿の住所はそれほどじっくり見ずにファイルへ保存したはずだった。どうせ連絡するのだったら手帳の電話帳を見ればいい。すぐに写していたから古川こずえの住所変更など気がつくはずもなかった。

「立村くんなのに、気づかないってめずらしいね」

何気なく美里が上総の顔を眺めながら話しかけた。

「いつもだったらさ、じっくり住所とか電話番号とか、それからクラス文集の中とか確認して、ふつうじゃないってこと気づいたら私とかに聞くでしょ。それ、しなかったんだ」

「相手が古川さんだとさ、それに聞く相手もないし」

美里と羽飛が黙った。しばらくふたりは顔を見合わせ、同時に上総に頷いてみせた。

「D組じゃねえんだもんな、そりゃそうだ」

肩に軽く手を置かれた。羽飛が上総に向かい笑いかけてきた。

「ひっさびさのD組タイム、そいじゃ下ネタ女王様宅でおもてなししてもらおうとすっか！ こりゃ盛り上がるぞ！」

古川こずえ。中学三年間同じクラスでかつ、女子の中では美里の次に親しく語り合ってきた仲間だった。あまり女子と話をすることのない上総だが、数少ない女子の友だちであり、むしろいろいろと気持ちを許して語り合えるかけがえのない相手でもある。

いわゆる「下ネタ女王様」のキャラクターで覆い隠されているけれども、実はクラスメートの面倒見もよく、なかなか表沙汰にできない事件が起きた時も裏で立ち回ってこっそり解決したりもしているようだ。中学時代は主だった委員会に関わらず、図書局員としての活動のみだったこともあり目立たない扱いをされていたことは確かだ。しかし、実際元D組メンバーの女子でもっとも信頼を受けていたのはこずえではないか、というのが上総の意見だ。美里には申し訳ないが、敵を作らずしっかり包み込んでしまうテクニックは、お得意の下ネタ以上のものがあると思う。

それを再認識させられたのが、英語科A組の女子評議委員としての活躍ぶりを目の当たりにした際だった。一学期に起こったさまざまな事件の手際よい処理の仕方、および杉本梨南を含む下級生たちへの適切な接し方などなど。関わった上総の立ち位置からすると百パーセント正しいとは言いかねるけれども、本来こずえが置かれるべきポジションがクラスのまとめ役だったことは証明されたのではないかとも思う。

——けどさ、古川さん、親友の清坂氏も家にあまり呼んでなかったんだな。

意外といえればいいのか、やっぱりと言えればいいのか。

——前から気になってたんだけどな。古川さん、いつも事件のど真ん中に首を突っ込んで解決するのはいいけど、いざ自分のことになると決して中に入らせないってところあるよな。家の話も、俺にそっくりな二歳下の弟がいるとかその程度だし。

——家庭の事情が、ややこしいという噂聞いたことあるし、そのあたりなのかな。

すぐに頭を振って打ち消した。人のことをいえる立場ではない。家族事情がややこしいのは立村家も一緒だ。みなそれぞれがんばっているし、それでいい。

その二 元三年D組四人組の秘密集会（2）

一度でも行ったことのある美里がいるので、幸い路に迷わずにすんだ。

「ええとねえ、たぶんこっち」

「ほんとに大丈夫なのかよ」

「私の方向感覚信用してないよねふたりとも。ほーらあそこの突き当たりにあるマンション。学校から近いじゃない」

言われてみるとその通り、外装が煉瓦色でいかにも手が込んでいそうな雰囲気をかもし出している建物だった。十階建て。

「確か、五階って言ってたよな」

「そうよ。この辺でうろうろしてたらいいんじゃない。そろそろこずえも戻ってくるだろうし」

「え、中に入らないのか？」

上総が驚いて尋ねると、美里は大きくうなづいた。

「そうよ。ここもね、オートロックかかっているから、中に入るのにコツがいるんだって」

オートロックという言葉も聞くこと自体初めてだ。貴史と顔を見合わせながら自分の自転車を邪魔にならないよう隅に押しやり支える。事情は把握できていないにせよりっぱな家に住んでいるということだけは理解した。

「今日お土産、用意してきた？」

「一応は」

上総は結洲でまとめ買いした水に溶かして飲む抹茶の包みを四人分用意してきた。袋に十包入っているから足りなくなるということはずないだろう。そのことを話すと、

「そっか、じゃあ立村くんのお茶に合わせて、私たちのクッキーでお茶会だよね」

「んなもん買ったか？」

羽飛が首をひねっている。思い当たる節がたぶんないのだろう。

「うちの母さんのお中元のあまりを持って来たよ。おいしいクッキーなんだから。ほらね」

見ると美里の手提げには大きな丸缶が紙包みを取り去った形で納まっている。

「さーてと、こずえ早く来ないかな。ほんっと、暑いね。もう少しで九月なのにな」

「九月ったってまだあっちいだよ」

羽飛と美里のいつもの掛け合いを耳に流しながら、九月の言葉にふと思った。

——あと一ヶ月でふたりと同年になるってことか。

土産も準備してしばらくしゃべりっていると、ようやく自転車のきしむ音が聞こえてきた。

「あ、こずえだ！」

美里が振り返り片手を上げた。勢いよく滑り込んできたこずえに、上総と羽飛も頷きで返した。

「美里、ありがとね。こいつら絶対路に迷うよとか思ってたけど、ちゃんと連れてきてくれて」

「当たり前じゃない！ こんなに近かったらすぐわかるって！」

「とりあえず、こっちに自転車並べときなよ。盗まれやしないと思うけど、やはり安全なほうが
いいからね」

自転車置き場にまとめて並べさせた後、定期入れらしき茶色のケースを取り出した。

「今日は母さん朝から用事あって出かけているけど、弟がいるんだよね。まあ、いるもいないも
わかんないくらいおとなしいから、気にしないでいいよ。あとでピザ頼もうか」

「え、ピザ？」

思わず声を挙げる。宅配ピザを注文するということが。四人分、いやさらに弟君の分を考えると
五人分。これはかなりの出費だ。こずえは上総を見て笑った。

「なーに、立村どうしたのよ。あんたピザ嫌いなの」

「いや、注文するのは、なんだか悪いよ。お金かかるしさ」

「心配なしなし。この暑さでしょ。下手に手作りして悪くなっちゃったら大変だよ。それならち
ゃんと、安心したところから注文するのが一番。あとでみんなのリクエスト取るからね。まずはそ
れからだよ！」

——古川さん、それ、自分のお金じゃないのに、ほんとにいいのかな。

喉まで「だったら俺が何か、作ろうか」と出てきそうになるのをこらえた。美里たちがすっか
りピザのセットを真剣にセッティングし始めているのが聞こえてきたからだ。

「うーんとね、私はシーフードピザがいいな。油っぽくなければ健康によさそうだし」

「俺はこってりしたチーズに、アンチョビ乗せてとかかなあ」

「立村くんはどうする？」

あまり店屋物を取る習慣のない上総としてはただ、

「任せるよ。ふたりの選んだものを少しずつもらえればいいよ」

「立村くん小食ね」

びっくり目の美里から目を逸らし思う。

——その一方で杉本には「そんなに飢えてらっしゃるのですか」とか言われてるだけだな。

マンションはいわゆる「オートロック」と呼ばれる、番号入力の上で開錠されるタイプのセキ
ュリティ対策がっちりしたタイプのものであった。

「いつも思うんだけど、こずえのお家ってすごいよね。芸能人のお宅訪問みたいな雰囲気する」

「そうかなあ？ でも褒めてもらえるならうれしいよ。ここのマンション、うちの母さんがが
んばって働いて買ったものなんだから。結構こだわりはあるんだよ」

「お母さんが？」

また余計な問いかけをしてしまい、慌てて反省する。こずえは大して気にしていないようすで

「そうなんだよね、うち、母さんが稼ぎ頭だもんでね。男女平等のこの世の中においてまさに理
想だよ。男に寄生するだけが女じゃあないってことだよ」

「こずえのお母さん、かっこいいなあ」

羽飛はあまり食いつかず、靴を脱いで上がった後、ぐるっと辺りを見渡して、

「お前、どこで寝てるんだよ」

布張りの応接セットとその周りを囲んでいる鉢植えの数々、背の高いゴムの木ややたらと鉢数の多いサボテンやアロエの葉などを指差して尋ねた。

「まさかこんなジャングルで寝るわけないじゃん！　そこまで野生じゃないわよねえ。しっつれーいねえ羽飛。ちゃんと私の部屋はあるわよ。あるんだけどねえ、諸事情で非公開なのよねえ」

「諸事情ってなにかあるのか」

上総が尋ねると、大きく頷きこずえは三人を適当にソファへ案内し座るよう合図した。

「やっぱりねえ、私の友達でしょう？　不純異性交遊なんかされたらしゃれにならないじゃんってことで、友だちが来たら部屋に入れなくてここ、居間で過ごすようにとのご沙汰なのよね。私が野獣のような男子に食い散らかされたら大変なことになるわよってこと」

「いや、それ反対なんじゃねえ？」

羽飛の誰もが納得する突っ込みにも動じず、

「それにさ、今日はあえてここで話し合いする意味があるんだわよ。あとで分かるけど、まあいいよ。さあてと、これからピザ注文するけどリクエストプリーズ！」

三人がわいわいピザのトッピングにはしゃいでいる間、上総は居間の端にちんまり納まっているアップライトピアノに目を留めた。赤い木目のちいさなピアノには白いレースがかかっている上には巨大なフランス人形が上総たちをちょうど見下ろすように微笑んでいる。ここ最近、いじられた形跡は見当たらなかった。

その二 元三年D組四人組の秘密集会(3)

ピザが届き、こずえが弟の分を取り分けて部屋に持っていった。その間に部屋の品定めを三人でひそひそする。

「しっかしまじかよ。ほんとでっかいマンションだよなあ」

「でしょでしょ？ こずえじゃないけど部屋いっぱいが緑に覆われてるよね。ほら、向こうにはサボテンがまだどっさり並んでるよ。けどお花、ないね」

「部屋を暗くしたらまさにジャングル気分だな」

宅配ピザは想像以上においしかった。めったに食べることはないのだが、夏休み最終日に父と本当はこっそり頼むつもりでいた。上総の夕食作りをあえて労ってくれるためとの話だったが、脂っこいものを食べる気持ちがなぜかその夜はなくなり、ふたり静かにそうめんを啜って夏休みを終えたのだった。

「それにしても立村くん、ジャーマンポテトにしたのね。意外とこってりしたの選んだんだね」

「うん、さすがにおなかがすいたからさ」

戻ってきたこずえも含めて、コーラも飲みながらひたすら食べることに集中した。

「やっぱ、いいなあこういうの。うちの弟も来るようになって誘ってみたんだけど、やっぱしだめね。あいつずっと部屋に籠りっきりなんだもん。なんとかしてよね」

「あれ、こずえの弟くん、今年で何年だったっけ」

「中学二年なんだけど、やっぱりお年頃よねえ。難しいっतरらないわよねえ」

そう言いつつこずえは上総の顔をにらむ。当然言い返す。

「何を言いたいんだよ」

「やっぱりねえ、立村のご両親のお気持ちを実感する今日この頃なのよねえ。あんた、一生親に感謝して生きなさいよ」

「余計なお世話だ」

とはいえ、こずえの口調にはどことなくやさしいものが籠っていた。

「もうね、大変。食事も部屋に持ってって食べてるし、学校帰ったらずっとあのまんま出てこないし。どうすんだろう、高校入試。もう知ったことじゃないけどね。まあ十四歳ってあんな感じだよ、立村」

「だからなんで俺の顔を見るんだよ」

「悪いわね、いろいろあるんで私だって悩んでるんだから。少しは学校で労ってよね」

ちっとも労われたくなさそうな顔で、こずえは二枚目のジャーマンポテトピザにかじりついた。

「いや一食った食った。ピザって食い放題向きじゃあねえな」

「うん。それ言えてる。好みの分だけちょこちょこ食べられればそれでいいなって感じ。立村くんの選択は正しいって思った」

「どうせあとで別のもの食べればいいしさ。それより古川さんいいかな」

上総はかばんから粉末茶の包みを四袋取り出した。みやげ物を渡さねば。

「これなんだけどさ、この前結洲に行った時の土産なんだけどよかったら」
それぞれに渡した。

こずえが普段着の膝丈ジーンズと腕にフリルのついた青いTシャツに着替えて居間に戻ってきた後、上総の持って来た粉末茶を溶かしてしばらくだべっていた。語るべきことはたくさんある。

「でね、聞いてよ。うちの組の担任、もう自由研究一通り目を通したようなこと言ってるんだけどね、ずーっと特定の生徒ばかり褒めてるの！ちゃんと足のついたしっかりした研究をしているとか、自分の素直な感情を露にしているとかね」

「当然俺たちのは無視ってことだな、美里」

「そういうことよ。私なんてあの先生に出席以外全然話しかけられてなんかないもん！単純に貴史が自由研究をC組から出してくれたから読んでないだけかもしれないけどね。きっとあの先生には興味ない内容だと思うな。数字の羅列だもん」

「いや、もう読んでると思う。俺にこの前野々村先生、自由研究読んだって言ってたし」

「うっそお！なんなのそれ。すっごく頭来る！立村くんのを読んでいるてことは当然、私や貴史のにも目を通してることだよな？そりゃ個人面談で立村くんの内容だけ興味があったのかもしれないけれど、それって露骨だよな」

「いや、たまたまだと思うよ」

余計なことを口走るのはまずい。美里にとってB組の担任野々村先生はすべてにおいてむかつく存在。たぶん野々村先生もなんとなく距離を置いて接したいところがあるのだろう。奇麗事は言わない。相性の合わない担任と生徒はどこにでもいるものだ。

「一年間だけ我慢すれば、来年は別の先生に当たるし、それを待てばいいよ」

「そうそう、立村の言う通り！高校は英語科以外クラスわけがあるんだから、それはそれでいいじゃない。それに比べてうちはさあ、ねえ、立村、どう思う？」

「どう思うたって、それしかないじゃないかなとか思うけど」

水で溶いたお茶はやはり濃くて口がさっぱりする。口に合うか心配していたけれども、美里、羽飛、こずえも大満足してくれたようだ。

「うちの母さんと弟の分も残しとかなくちゃね。これ、ヒットだわ」

こずえは美里の隣りにちんまり座り、大きく伸びをしゴムの木を掴んだ。弓なりになる。すぐ手を離れた。

「さってと。じゃあ今日の議題なんだけど、私の人生相談に乗ってほしいのよねえ。羽飛、私の乾いた心を潤してよお」

もはや定番ネタと化した、こずえの羽飛溺愛フレーズ。羽飛も慣れたもので、

「ああ、どんと来い。ただし俺には鈴蘭優ちゃんがいる」

「わかってるって！しょうがないから立村、あんたも聞きな」

「頼んでいるほうがえらいつてどういうことだよ」

けらけら笑いこける美里が、手をたたきながら上総に声をかけた。

「なんか立村くんとこずえのコンビでなんかい委員会に入ってほしいよね。めちゃくちゃ面白そう！」

——清坂氏、冗談でもそれはきついな。

「とりあえず、古川さん、この前の合唱コンクールの件、進展あったら話してもらいたいな」
促し役はやはり、英語科クラスメートの上総が請け負わざるを得なさそうだった。

こずえはかがむように三人をそれぞれ見やりながら話し始めた。

「こんな怪談話すみたいに乗るじゃないんだけどねこの前みんなに話した通り。合唱コンクールのピアノ伴奏者決めでうちのクラスが揉めに揉めてるって話」

「ピアノ弾ける人に頼むだけじゃだめなのね」

美里が相槌を打った。

「そうなのよ。本当はうちのクラス、ふたりもその道進む女子いるし、任せればいいかなって思ってたけど蓋を開けたらとんでもなってことになっちゃったのよ」

上総に話した内容をこずえはかいつまんで説明した。

「そっかあ、大人の問題が絡んでいるわけなの」

「十月のピアノ発表会も控えているわけだし、それぞれの先生側としては、手のうちをここで明かしたくないってことみたい。ここだけの話だけど、えらい先生たちが発表会に来て個人レッスンとかも予定してるらしいし、場合によってはいろいろ進学に影響もあるみたいだからね。よくわからないけど」

羽飛がごろんとソファに伸びた。

「よくわからねえなあ、いつも思うけどよ、女子つつうのはなんでこうも面倒なんだあ？」

「女子がっていうよりも、周りの人たちがってことよね。大人って面倒よねえ。あ、それでなんだけど話の続き。この大混乱の状況をどう納めるか悩むに悩んだ結果、ここはやっぱり私がひと肌脱ぐしかないかなあとちらと思ったわけよ」

「古川悪い、お前脱ぐのは無駄だ、社会のためにやめとけ」

「ひっどーい！　じゃあ次回は羽飛、あんたのためにだけ脱ぐわよん」

どっひゃーとひっくり返る羽飛を横目に、こずえは上総にプラスアルファを語りかけた。

「この前電話で話したかもしれないけど、一応課題曲が『恋はみずいろ』なのよ。いいのかこんなセクシーな歌でとか突っ込みたいけどまあいいよね。あと自由曲は『モルダウの流れ』あたりでたぶん決まると思う。一年しかピアノ習ったことない私が二曲弾くってのは正直ハードル高すぎるけど、まずはこれで行ってみようと思うんだ」

三人、息を呑んだ。声が出ない。ただ黙ってこずえの顔を覗き込む。

あっけらかんとした、いつもの笑顔。

そう簡単に決着がつく内容ではないような気がする。

「こずえ、ピアノ、習ってたのって小学校一年の頃じゃない？　それから、お稽古はしてたの」

「してるわけないじゃん！　たまにアニメとか適当に耳コピーして弾いたりするけど。定番猫踏んじゃったが十八番！」

ちらと、ピアノを眺めやる。

「お前、率直に聞くが、伴奏できるほど弾けると自覚、あるか？ 小学一年ったら何年前の話なんだ？」

「まあはるか昔よねえ」

しみじみした表情でこずえが頷く。あせりはない。

「古川さん、単刀直入に聞くけど、一ヶ月で二曲伴奏する自信あるのか？」

「うふふ、ない」

舌をぺろっと出して、けろりとして言い放った。

「そうねえ、いざとなったら前に稽古してもらってた先生のところに一ヶ月だけ行こうかなあって思ってるよ。けどさ、ピアノの先生ってすごくおっかないんだよねえ。手、ぴしゃっと叩いたり、ちょっと間違えたらどなったりですごく怖いんだよ。だからやめたようなもんなんですね、過去のトラウマが蘇りそうな気配ありあり」

こずえはソファの上で胡坐を書いて、両手を膝に乗せた。胡坐ではなく、足をヨガのポーズに組みなおした。

「けど、しょうがないなあとは思う。それぞれの事情を聞くと無理じいできないしね。そりゃ私もはるか昔の記憶呼び戻すの大変だけど、うちのクラスの子って実はピアノを軽くやってた子ってあまりいないのよ。音楽はそれなりにたしなんているけど、なぜかバイオリンとか、フルートとか、ギターとか。せめてエレクトーンとかオルガンとかいらないかなとか思ったんだけどやはりね。それにピアノがうちにないとお稽古も大変だよ。幸か不幸か、うちにはピアノが埃かぶっているけどそれなりに働いてくれそうだし、まあここは私が普段出さない本気パワーだしてやるしかないよね！」

拍手しようがない。

誰も、素直にこずえの覚悟を称えられない。

——あまりにも、無茶だ。

羽飛も、美里も、顔に同じことを曇りの筆で書いてある。

——本当に誰もいないのか？ せめてふたりのうち一人だけでも口説き落として弾いてもらうしかないような気がするよ。それも二曲か？ 一曲だって大変だよ。

「こずえ、あんたは偉い、すごい、けどね、それとピアノの伴奏とは全く別だと思うよ。私も小学校六年までピアノ習ってたことあったけど、やっぱり、一曲仕上げるのって大変だもん。発表会で弾いたりしたことあったけど一ヶ月か二ヶ月くらいずっとお稽古で、それでも間違えるんだもん。大変なんだよそれ」

「そうかな、まあそうだよね。普通じゃないよ」

羽飛も頷いている。

「まあそのなんだ、お前が本業以外の裏技持っているってことはわかったんだが、ちょっと時間なすぎじゃねえか？ 古川、あのピアノ最後の弾いたの何年前だ？」

「二年くらい前かなあ」

「それまずいよ！」

ついに上総も押さえられなくなった。これはまずい。全力で止めるべきとのシグナルあり。

「古川さん、楽譜、もうもらったのか？」

「もらってないよ。来週、音楽の先生にコピーさせてもらうつもり」

「それじゃ間に合わないって！」

力を込めて説得するしかない。羽飛、美里の頷きにも支えられる。

「あのさ、俺が言える筋じゃないけど、ピアノはそう簡単に感覚取り戻せるものじゃないよ。古川さんは耳で聞き取りが出来るからある程度は大丈夫だと思う。でも、もし本気で弾くんだったら一刻も早く練習しないと間に合わないよ。俺もピアノ少しかじったことあるからわかるし、清坂氏も言う通りだから言うけど、毎日弾かないとすぐ忘れてしまうんだよ。出来ないとは思わないけど、ただ可能なら、足田さんか宇津木野さんのどちらかくどいて弾いてもらうほうがいい。せめて一曲だけでも持ってもらったほうがいいって！」

「うわーん、私のこと全然信頼してないんだーこいつら！ もう悲しすぎー！」

三人それぞれの説得もどこ吹く風、こずえは大げさに泣きまねをした後、

「よしわかった、じゃあ私の腕前をとくとお見せいたしましょうか。そうだ、立村、あんたそこまで大恩ある私にそこまで失礼なこと言い放ったんだったら、それなりのお仕置きってのが必要よねえ。美里、羽飛、どう思う？」

「そういう問題じゃねえと思うんだがなあ、美里どう思う？」

「うん、こずえ、弾くなら聞いてみたいけど、ねえ立村くん、どう思う？」

それぞれに見上げられて、上総はお茶の入ったカップを置いた。

「とにかく、弾くことが優先だと思う。ちなみにこのマンション、防音なのかな」

「ピンポン！」

意気揚々とこずえは白いレースのピアノカバーを跳ね除けた。

「それじゃ、私の見事な音色をみなの方、しかと聴くがよい！」

「ははあ」

羽飛のふざけた土下座で思わず笑いが洩れた。

その二 元三年D組四人組の秘密集会(4)

「ほーら、どうだ！ 恐れ入ったか！」

勝ち誇ったこずえの高笑いに羽飛だけがひたすら拍手とともに土下座し続けていた。美里も最初は不安げにピアノとこずえの背中を見つめていたが、だんだん真剣に聞き入り始め、弾き終えた後には拍手喝さいだった。

「こずえすごーい！ほんとに、ほんっとに二年間も弾いてなかったわけ？」

「お前なあそれほんとなら、天才じゃなかよ」

「まあね、もっともこの一曲でやめちゃったんだよねえ。発表会でもうやだ一っとか言っちゃって、親の反対も無視して退会届出してきちゃったんだよね」

こずえの演奏した曲は「人形の夢と目覚め」。エステンの作曲だ。耳で聞いた限りだと間違えたところはひとつもない。少しテンポが速すぎるところもないわけではなかったが、早回しのこずえの性格が現れている演奏だったと上総も感じた。

「で、さっきからすっごく失礼なことねちねち言いやがった立村くんはどうよ」

わざとらしく「くん」付けで呼んでくるこずえに、上総は尋ねた。

「他の曲はあるのかなとか思ったんだけどさ」

「譜面見て弾くのはこれでおしまい。あとはね、即興よ。たまーにやってたよ」

「即興って、どんなの」

「たとえばはやりの曲を適当にアレンジしてみたりとかね。でもピアノだとめんどくさいし、別に私、キーボード持ってるからそっちで弾いたりもするけどね」

「なんだあ、お前ピアノ二年間弾いてないんじゃないかと、キーボードやってただけじゃねえの。褒めて損したぞ」

あきれた羽飛の発言をよそに、こずえは細かく首を振った。

「だってさ、クラシックのやたら堅苦しい曲弾いたっておもしろくないじゃん！ それより好きな曲適当に弾いて歌ったりするほうが断然いいよ。美里には教えてなかったけど、それこそかくし芸で図書館合宿でご披露してたんだよ。バンド組んだりしてさ」

「ひどい！ 私全然知らなかった！」

美里がむくれるのを、慌ててこずえがご機嫌取りまくりなでなでしまくりするのを眺めつつ、上総はしばしピアノの鍵盤に目を向けた。

「どうしたよ立村、ずいぶんマジな顔してるじゃねえの。食いすぎたか」

「違うよ、ただ、それでもいいかなとか思っただけ」

「それでもって、古川を天下無敵のピアニストとして送り出すっつうことか」

「それもあるけどさ」

確かにこずえの腕前はばかにしたものではない。上総もさほど音楽の耳が出来ているわけではないからうるさいこと言えないけれども、「人形の夢と目覚め」を暗譜してしっかり弾けるところはさすがだと思う。むしろ、

「古川さんの記憶力はすごいな」

「あ、なんか言った？ 立村？」

「だってさ、六歳くらいに習った曲を十年経っても覚えているなんてすごいよな」

「まあね、ばかにしたもんじゃないでしょ」

「けどさ、二曲、一ヶ月で仕上げる自信は」

「だからさっき言ったでしょが。ないない。全然ないって」

あっさり白旗揚げた後こずえは美里と腕を組んだまま語り続けた。

「でも、やるしかないんだよ。やらなくちゃってこと。やりたいんだよね」

——でも二曲は無理だよやはり。

やはりたどり着いた結論はそこだった。

——記憶力もピアノを弾くセンスもある、けど、いきなり合唱コンクールの伴奏を任せられて二曲抱えるのはきついよな。一曲ならいいけどさ。必死にそれで専念すればうまくいくと思うけど、二曲はやはり、荷が重過ぎる。

上総は膝の上で片手の指を鬼のように立てて見た。ひっかくように、猫のように。何度か指先を動かしてみた。どうだろう、弾けるだろうか。古川こずえ程度には。

——たぶん、同じくらいには。

夏休み、母の実家でピアノに向かわされいやいや譜面とにらめっこさせられたことも。

いやいやながらも一週間で形にはなった。

「古川さん、いいかな」

「はいはい」

「どうしたの立村くん」

少し迷った。これ言ったら美里にまたすねられるだろうか。こずえには予告しておいたが。

「ひとつ提案したいんだけどさ。伴奏のことだけ」

「何よ。まだ文句あんの？」

「俺も、ピアノ弾いていいかな」

予想通り美里と羽飛がびっくり眼で上総を見る。いや、羽飛にいたっては隣りでいきなり額に手を当ててきた。熱なんてありゃしないのに。

「大丈夫か立村、そうとう頭がヒートアップしてるんだろなあ。おい古川、氷枕あるか？」

「貴史の言いたいこと、今回は賛成。立村くんピアノ弾けたっけ？」

「ごめん、今まで言ったことなかったんだけど」

覚悟して、こずえに伝える。そうすれば美里も羽飛もわかるだろう。

「小学校の頃から、長期休みの間、うちの母親の実家でいやいやピアノ練習させられてたんだ。男がピアノってあまりいい顔されなかったから今まで言わなかったけど、ごめん」

頭を下げて、恐る恐る三人の顔を伺う。

こずえだけはふむふむ頷いているが、美里が放心状態でピアノと上総を交互に眺め、「うそでしょ？」とつぶやいている。羽飛は上総の前で指をひらひらさせ「おい、どうした、なんかあ

ったのか、もうやだぞ、あんなこと」とか言い出す。なんだろうその「あんなこと」とは。

——そりゃあ、驚くよな。

結果として隠し事したことになってしまったわけだった。

「昨日電話した時もなんかそんなこと言ってたね、立村」

落ち着いているこずえが手でピアノに触れる許可の合図を出した。

「小学校の頃だと私と同じくらいに始めたってこと？ 十年くらいやってるってこと？」

「いや、厳密に言うとその前から。俺、幼稚園とか保育園行ってないんだ」

「それすごいキャリアじゃないの。で、あんたうちピアノあるの」

「ない、だから今まで言わなかった」

美里と羽飛が納得顔で頷く。

「じゃあ練習はどうしてたの」

こずえが一方向的に質問を浴びせ続ける。当然の内容ではある。

「夏休み冬休み、あと春休みだけ。年に三回。練習っていえるものじゃないよ。弾けるといってもイメージするほどじゃない」

「まあそうか、で、どこに習いに行ってたのよ」

「うちの親がずっとつききり。たぶん、古川さんの気持ちは少しだけわかるような気がする」

またも美里と羽飛が何度も頷く。

「いわゆるスパルタって奴ね。あーやだやだ。同志よとか言いたいけどさ、まだ聞きたいことあるんだから、聞くよ。それであんた、伴奏やりたいっての？ 天才ピアニストの私にたてつこうとも？」

笑いをこらえてわざと怒ったような口調で問い詰めるこずえ。相当楽しそうだと見える。

「古川大先生にはたぶん、かなわないと思うけど、判断してもらえると助かる」

「よーっし、じゃあとくと見せてみよ！」

芝居がかった口調で言い放ち、にやにやしなながらこずえは立ち上がった。しずしずと上総をエスコートして、ピアノの丸いすに座らせた。

「じゃあ、曲目は」

「ありきたりだけど『エリーゼのために』」

言った瞬間なぜかうしろの二人が腹かかえて笑い出している。特にひどいのが羽飛だ、なにも「うきゃきゃ」などと擬音発することはないだろうに。」

——この程度弾けたら、たぶん古川さんと一曲ずつ持って伴奏しても文句は言われないうちの二人だけだな。どうだろう、みんな。

拍手待たずに指を鍵盤に乗せた。母の実家のピアノとは違う、軽い弾き心地だった。

その二 元三年D組四人組の秘密集会(5)

——指先、軽いな。弾きやすい。

今年の夏休みは五日間だけ母の実家に居候した。肝心の母は例の結洲の会でほとんど顔を出さなかったし父も仕事でうまく抜け出していて、結局残されたのは上総ひとりだった。母の娘時代使っていた部屋をねぐらにして、ひたすら読書にふけていた。勉強はほとんどしなかった。毎年のことだし過ごし方も決まっている。祖父母も上総の扱いを心得ていて、本とお菓子とほんの少しの小遣いのみで放置してくれていた。暇つぶしのひとつに、ピアノのお稽古が含まれていた。母の部屋に鎮座ましていたアップライトピアノは、こずえのものとは違い指先が重く沈むようでそれが普通だと思っていた。

去年、おととしとかなり厳しく仕込まれたこともあって、なんとか「エリーゼのために」は暗譜していたつもりだった。本当はこずえと同じように、最近はやりのシンセサイザーミュージックを耳コピーで聞き取って思い切り弾きたい。ここはこずえに敬意を表して、クラシックで対抗する。

——本当はバロックっぽい方が好きなんだけどな。うちの母さんやたらと女の子めいた曲に拘るんだからさ。どうせ俺に弾けていうなら、少しは曲、選ばせろよな。

かなりとちりまくった気もするが、なんとか形にはなったはずだ。丸椅子に座ったままぐるりと回って三人の反応を伺った。みな、何か言葉を探すのに苦慮しているのが見え見えだ。拍手がない。しばらく沈黙のあと、遠慮するように美里が、

「立村くんのうち、ピアノ、ないんだもんね」

「そう、ほとんど練習してないよ。この曲も比較的最近覚えたけど、一ヶ月近くもう弾いてないし」

「古川もそうだけどな、立村もずいぶん記憶力いいじゃん」

羽飛が難しい顔をして上総に問いかける。

「けどこういうろてろてろてろとかいう曲、お前、本気で弾きたいと思ってるのかよ」

「別の曲だったらもっと本気で練習したかもしれないな」

「そう来るかい、あんたさ」

褒めるもけなすも判断しがたい雰囲気を通り越したのはこずえだった。

「立村に聞きたいんだけどさ、これだけ弾けるんだったらもっと早く言えばいいのにとか思ったりしたの、私だけ？ あんたからしたらピアノうちにないんだからしょうがないじゃんてのが本音かもしれないけどねえ」

美里と羽飛が互いに顔を見合い頷く。なんだかこのふたり、気がつくとうんの呼吸で頷いてばかりいる。

「まあなあ、正直俺も立村がこれだけピアノ弾ける奴とは思わなかったってのが本音だなあ。てか、あと誰か知ってるのか？ お前の最終兵器」

「別に最終兵器ってわけでもないけど、話す機会なかったしそれに」

結局三人とも上総の出来栄にはあまり興味がなさそうだ。とりあえずは、こずえに挑戦状をたたきつける程度には鍵盤をたたくことができる、と認識はしてもらえたようではあった。

「今回みたいなことがなければ、たぶん卒業するまで絶対言わなかったと思うんだ。俺もあまり人前で披露するとかそういうの苦手だし」

「とか言いながら、立村くん二年の合唱コンクールでは指揮者だったはずだけど、あれも十分目立ってると思うよ」

美里が茶化す。

「男子評議委員の義務だと思えば恥ずかしくもないよ」

「そういうことね」

のんきに交わしていくものの、なんとなくぎこちない。最初にこずえが「人形の夢と目覚め」を軽やかに弾いてのけた時の盛り上がりとは違う、どこことなく言葉をはばかりる雰囲気になる。上総としては、とりあえず「合唱コンクールの伴奏はなんとかこなせるかもしれない」ところを売り込みたかただけだったのだが、もう少し何か言ってほしいとも思う。

「立村、じゃあひとつ聞きたいんだけどさ」

こずえはしばらくソファの上で膝を抱えて考え込んでいた。時折「うーん」とうなりつつ、ふっと顔を挙げ、

「あんた、どうやって練習するつもりなの」

——そうだった、わかってたくせに、忘れてた。

盲点を突かれた。その通りだ。

「確かに、そうだよな。そうか」

「今頃自覚したわけ？ あんたさあ、男気出して私を姫君扱いしてくれたのはありがたいことだよ。まあできれば隣の誰かさんにバトンタッチしてもらいたいなんてことは言わないけど、素直にそれは大感謝セールだよ。けど、あんた私に言ったじゃないの。あと一ヶ月しかないんだって。二曲仕上げられるかって」

「ごめん、その通りだった。完全に抜けてたよな」

なんだかしぼんでしまいたくなる。勢いづいてこずえに手を差し伸べようとしたつもりが見事跳ね返されたという情けない結末ときた。かっこ悪いったらない。

「素直に認めてるならさらに言うけどさ。今、私、伴奏のことばっか頭にあると思ってるかもしれないけど、一応合唱コンクールだから歌があるんだよ。しかもうちのクラス人数がただでさえ少ないじゃん。そこで二人も抜けたらどうすんの。私はこれでもアルトパート、あんたはテノールだろうけど、合唱するにしても迫力足りなくなっちゃうじゃん。圧倒的に賞狙いは不利よね」

「賞狙い、って、古川さんもしかして、賞、狙ってるのか？」

思わず上総が問いかけると、こずえは「オーマイガット！」と万歳してみせた。

「あたりまえじゃん！ あんたさ、一応は合唱コンクールなんだからさ、コンクールだよ！

トップ取らなくてどうするのさ。ねえ美里、B組はどんな調子？」

いきなり振られた美里は慌てて思い出すような瞳で天井を見上げた。

「一応自由曲は『翼をください』で決まったよ。うちのクラスは伴奏者最初から決まってるから楽。ひとりで全部弾いてくれちゃう」

「楽だからいいねえ、で羽飛のC組は？」

「ただいま揉め中。あ、ピアノは問題なしなし。問題は歌いたい曲をいわゆる合唱もんにするのかいわゆるポップスっぽいもんにするかで大議論続いているぞ。いつになったら終わるんだなあ。めんどくせえ」

「鈴蘭優の歌はなしってことかあ、わかったわかった。どっちにしてもみんな、それなりに燃えてるじゃん？ D組だけはよくわかんないけど、うちのクラスはどうなるんだろ。やっぱこの機会に男女一緒に燃えたいじゃん？ いやね、別に、情熱の恋に身を焦がしたいんじゃないってさ」

「やはりそうか、そういうもんだよな」

しみじみつぶやくと、こずえが立ち上がり上総の頭を軽く叩いた。

「あのねえ、立村、またいじけるわけ？ 言っとくけど、あんたさすが自分で言うだけあってうまいよ。それはお世辞じゃないよ。どこかバンド入ってキーボードやんなよ。よかったら今度私とキーボードでセッションしよっか。とにかくあんたが第二の伴奏者候補に名乗り上げるのにふさわしくないなんて、ひとつことも言ってないっての！」

「あ、でも、だったらなんで」

「私が言いたいのはねえ、あんたの練習時間が取れない状態をなんとかしなくちゃってことなんだって！ 美里、あんたどう思う？ 私らのお婆かな弟をどうやって仕込めばいいと思う？」

「弟って、まあ、言いたいことわかるわ。こずえの言う通りよね」

美里がなぜか納得して考え込む。貴史も追従する。

「あのなあ、もしかして古川、もう、A組の伴奏者に立村を押し込むってこと前提で考えているのかよ？ なんか俺すげえいやあな予感びんびんにするんだけどな」

「え、けど古川さん、俺だと練習時間取れないからやはり無理だってこと」

上総が言いかけるのを、こずえは「シャラップ！」と叫び頭をかきむしる振りをした。「じゃじゃじゃじゃーん じゃじゃじゃじゃーん！」と擬音つきで頭を振り回す。

「まだ何にも言ってないじゃん！ そうなのよ、だから評議って面倒なんだってば！ ここを立てればあそこが立たない、肝心要の時には立たない、そういうことなのよお！」

一気にまくし立てた。

「そうなんだよ、立村と私が分け合って一曲ずつやれば、一番いいんだよ。あんたの弾いていると聞いててそれは確定済みなのよ。ただそこから先よ、先なんだってば！ うわーん、美里、羽飛、今からでもいいからA組にクラス替えしてもらえない？ まじ、今私頭の中が大パニックなんだからさ！」

「こずえ、大丈夫？ 落ち着いて」

反対になだめ役に回った美里を眺めやりつつ、羽飛は上総につぶやいた。

「やっぱ、初めての評議ってのは、下ネタ女王にとってもかなりしんどいもんみたいだぞ。ちょ

いと電池切れしてるんじゃない？」

同意の気持ちを持って頷いた。

「そう思う。古川さん、ひとりで抱えすぎだよ」

——誰か、手伝ってやれよ。

その二 元三年D組四人組の秘密集会(6)

明るく騒いではいるけれども、こずえもかなり参っているのだろう。

羽飛が気づいているくらいだから相当なものだろう。

「古川さん、落ち着いたか」

美里と冗談っぽく泣きまねしたりベートーベンのかきむしりポーズをしてみせたりとふざけているのを少し様子見した後、上総は声をかけた。

「私は最初っから落ち着いてるってば！ んもう、立村、あんた核心にやたら迫りすぎるからこっちだってもう頭痛くなっちゃったじゃん！」

それでも吐き出すべきものは吐き出したので、だいぶすっきりしたのだろう。挙げた顔は明るかった。膝を打って立ち上がった。

「じゃ、追加でさっき美里からもらったクッキーに手をつけるか！ 悪いけどあれもちょこっとうちの弟に回すけど、いいかな？」

「もちろんいいに決まってるじゃない！」

ほっとした声で美里はこずえを送り出した。

「ねえねえ、けどさ、ほんっと困ったねA組も。私ももし同じクラスだったら、前の先生のところにもう一度お願いして一ヶ月だけレッスンしてもらおうとかするけど、こずえのようにあれだけブランクがあったらきついよね」

こずえが席をはずした間に、美里が頬杖ついてつぶやいた。

「かといって、立村くんが担当したとしても稽古どうしようかってことになるもんね。ピアノがないんだもんね」

「そうなんだよな、俺もそれは気づかなかった。音楽室で練習できるとは限らないしな」

なんとなく、練習は音楽室のピアノを借りようと思っていたのだが、よく考えると吹奏楽の練習とか授業とかいろいろあるだろうし、同じ立場の伴奏者がいないとも限らない。必ずしもピアノを占拠できるとは限らない。

「ほんとは私もピアノ貸してあげたいんだけど」

「いや、いいよ。かえってお互い気まずくなるし」

「あっそっか」

去年の秋にやらかした羽飛との事件を思い起こしあえて断るしかない。美里はいいとしても、一緒にいる家族があまりいい顔しないだろう。

「でもなあ、お前、あれだけ弾けるならたぶんなんとかなるんじゃないかねえ？」

羽飛が脳天気の上総の肩を叩いた。

「誰かからキーボード借りて家で練習するってのはどうだ？ それともオルガンとかねえか」

「だめだよ貴史、オルガンとかエレクトーンとかはピアノとは違って鍵盤の感覚が全然違うの。なんとなくふわっとした感じなの。ピアノ慣れしている人ならそれでもいけるかもしれないけど、立村くんやこずえみたいな人にはだめだめ」

「うまくいかねえなあ。いい方法なんかねえか」

「そうなんだよねえ。立村くんが女の子ならこずえのうちに毎日通ってあのピアノ弾かせてもらうってのもあるかもしれないけど」

「そっか、じゃあ立村、明日からお前女装しろ」

黙って上総は羽飛の頭を押し返した。なかなかいい案が出てこない。

「おまたっせー！ さあてと、立村が持ってきてくれたお茶二杯目なんだけどね、今回ちょこっとアレンジしてみたんだ。どうかなこれ」

お盆にクッキーを華やかに盛り付け、四人分のグラスを新しく用意し、炭酸のしゅわしゅわ音が響く中テーブルに並べた。

「あれ、これどうしたの？ なんか雰囲気違うね」

「さっき何気なく見たらさ、サイダーがまだ冷蔵庫に残ってて、さらに冷凍庫覗いたらこの前うちで作って凍らせっぱなしのアイスが一人前ちんまり残ってたのよねえ。四人分には足りないけど、ほら、こうやってクリームソーダっぽくしたらなかなか豪華じゃん？」

茶にサイダーを足し、その上にたっぷりバニラアイスを盛り付けてある。ストローも刺さっている。どこぞの喫茶店の雰囲気が漂う。

「これいいな。すごく合うよ。ただ水に溶くより」

すぐに感想を伝える。甘ったるくなくて、それでいて炭酸の弾け具合がちょうどよくて頭がさっぱりする。

「ほんと、こずえすごーい！ これこずえが考えたの？」

「あたりまえじゃん！ せっかくお客様がいらしたんだから、おもてなししなくっちゃあね」

「ん、まじうめえ」

羽飛が一気に飲み干したのを、こずえは満足そうに眺めてまたすぐ美里の隣りに座った。

「でさ、さっきの件なんだけど、いいこと思いついたんだ。いい？」

いたずらっぽく口元にえくぼを浮かべ、まず上総を指差した。

「立村、確認なんだけどさ、あんた、二曲弾く根性ある？」

「曲があまり難しくなければ、覚悟はあるよ」

「練習場所だけだよな、ネックになってるのって」

こずえはつぶやき、次に美里に向き直った。

「あのさ美里、これから一ヶ月だけ、できるだけ私のうちに放課後遊びに来ること、可能？ もちろん委員会も関わってくるから毎日ってのは無理かもしれないけど」

「うん、規律委員会があまり忙しくなければできるだけ時間は作るよ」

「そっか、やっぱ頼りになるね美里は。そいと羽飛、あんたもどう？ 評議委員会がこれからどのくらい忙しくなるかにもかかってくるんだけど」

「うーん、そうだなあ。うちのクラスの合唱コンクールも関係してくるしなあ、約束が難しいけど、立村がいればなあ。やっぱ俺たち、野獣だもんなあ、がおがお」

「野獣でもいいんだけど羽飛限定なんだよねえ。まいつか。んじゃ説明するけどさ」

こずえは両手を組み合わせ、テーブルに置いた。

「立村が本気で伴奏に燃えてくれるんだったら、これから一ヶ月、うちのピアノを練習用に提供しようかなって思ったんだ」

こずえがいない間に美里が提案した方法だった。

「それ、さっき清坂氏に提案されたんだけどさ、やはりそれこそ男子がひとりくっついていくのはまずいだらう？」

「女装させるなんていうなよ」

羽飛の茶化しをこずえはストローで突き刺して制止し、

「そっちの趣味はないから。私、性癖ノーマルよん。けどあんたらの言う通り男子ひとりが私のうちに来て長逗留するのはやっぱまずいよ。うちの母さんも、なんてかそう、結構うるさいんだよね。不純異性交遊立村相手に起きるわけないじゃん近親相姦だよとか言いたいけど、そんなの通じないしね」

三人で頷く。こずえは満足げに続けた。

「わかってくれてるようでよろしい。けど、男子だけだったらってことなんだよ。今日みたいに男子ふたりいても女子がひとりいれば、問題ないんだよ。これ、抜け穴ね」

「抜け穴、なのか？」

こずえの言い方がよくわからない。上総なりにつぶやいた。

「最近、親のいない家にたむろうだけで注意される時代だしな」

「なにしみじみしてるの。とにかく、ここで私の提案なんだけどさ。この四人組でしばらく、私のうちで遊んでってもらいたいってことなんだよね。男女混合四人だったら大丈夫だよ。三人でここでしゃべっている間、立村ひとりがひたすらピアノに向かって音符を追っかけていけばいいのよ。美里と羽飛は私の濃厚サービスをたっぷり受けて昇天してもらいましょ」

「食いの濃厚サービスなら大歓迎だがなあ」

吹き出しつつも、羽飛が手を打った。

「けど、確かにな。これはすげえ。古川いいこと思いついたなあ」

「うちの母さんがいる時をできるだけ狙うから、内緒話やエッチなことはできないけど、でも目的がさ、立村の稽古場所確保ってだけだったらそれでいいじゃん？ まあもしかしたら音楽室使えるかもしれないし、状況変わるかもしれないけど、その線で行って見たらどうかなって思うんだよね。どう、立村、この案は」

改めて上総に再確認する。

——なるほどな。変な噂を立てられないように、古川さんのお母さんがいる時間帯を狙って四人で訪問し、遊びがてらピアノを弾く場所を押さえる、か。

これしかベストな方法がなさそうだ。こずえにあっばれと伝えたい。

「ぜひ、それでお願いします」

土下座はしないがきちんと背を伸ばし、最敬礼した。

「よしよし、よかったよかった。いい案思いついてやっぱ私天才じゃん！ あとさ、決まってからでよければ、私が使ってるキーボード今度持ってきなよ。私はピアノがあるからそっちで練習するし。キーボードとピアノは全然違うけど、でも弾けないよかましたよね」

「古川さん、そこまでもさ」

さすがに遠慮の言葉を口にするが、こずえは動じず首を振った。

「私もねえ、伴奏も覚悟したけど独学は絶対無理だし、だからってあの超おっかない先生ところにもっかい稽古してもらうなんてしたら、胃に穴開いちゃうよ。立村くらい弾ければたぶん大丈夫だと思うんだよね。んじゃ、明日にでも麻生先生に立村を伴奏者にするってことで話、つけるよ。麻生先生のことだからあなたの実力疑うかもしれないけど、その点は覚悟しときなさいよ。ま、あなたのエリーゼを聴かせてやれば一発だけどね。二曲、頼んだよ立村！」

上総の後ろに回り、こずえはぎゅっと両肩を押さえた。同時に指先でマッサージし出した。凝っているところにちょうど当たって気持ちいい。

「わかった、じゃあ俺は、ひたすら弾くことに集中する。古川さんがまとめ役に専念できるように、できるだけのことするからさ」

心地よすぎてつい、機嫌のいいことを口走ってしまった。今度は美里がこずえの後ろに回り拳骨でリズムカルに肩を叩いている。

「美里、せっかくだしあなたも何か一曲弾いてよ。覚えているのでいいからさ」

「いいの？ うん、じゃあ私、『砂のマレイ』の主題歌、自己流だけど弾いちゃうね！」

「こういうわかりやすいのがクラシックど素人の俺にはすげえうれしい」

羽飛の台詞に笑いをこらえつつ、上総は美里の奏で出す音色に耳を傾けた。

——もっと早く俺がピアノの話、していたら。

指がくるくる回るスピード感溢れる演奏だった。上総はふと思った。

——清坂氏ともっと早く、音楽の話ができたのかもな。惜しかったな。

その三 伴奏者面接（1）

こずえと打ち合わせではおいたが、やはりいきなり立候補というのはクラスメートも仰天するだろう。この点はこずえや美里、羽飛も同じ考えで、

「できるだけ早く、先生方に手を回し、違和感ない形で決定する」

方向でもっていったらどうか？という結論に達した。

「おっはよ、立村、それじゃあちょっとこっち来な」

月曜の朝、いつものように八時前に到着すると、待ち構えていたこずえにつかまった。

「悪いんだけどさ、これから先生たち行脚してもらいたいんだけどさ」

「行脚って、ああ、あれか」

手回しの段取りは前の日の段階である程度は煮詰めてあったので驚かなかった。ただ朝一番とは思っていなかったので少し戸惑う。すぐ上履きに履き替え二階の職員室に向かうことにした。

「とりあえずねえ、やっぱ担任でしょ。麻生先生のところ行こうか」

「了解、ただいまの時間で片付くかな」

「大丈夫。大抵先生たち七時半過ぎには来てるよ。ほら、菱本先生だってそうだったじゃん」

——思い出したくない名前だな。

夏休み最終日に締めのように現れた、暑苦しい青春野郎教師の面影を上総は頭から振り払った。こずえは気づかずに続ける。

「一応ね、夏休み中女子たちには伴奏者の話をいろいろと振ってたし、自由研究で集まるって流れで前振りはしてたから、宇津木野さんや疋田さん以外の方が弾くということで納得はしてると思うんだ。ただね、女子は理屈と感情が繋がらないから、そこがちょっとね」

「言いたいことは大体わかる」

まだ薄い日差しが廊下の窓から差し込んでくる。だいぶ過ごしやすくなり、外を歩いていてもどことなく風がたなびき心地よい。制服でも苦痛ではない。クーラーなんてなくてもいい、その程度の暑さに落ち着きつつある。

「でも、まあなんとかなるよ。あんたがあれだけ弾けるならね。私もさ、本当はピアノで神経すり減らすよりも歌いたいタイプだからね」

「そうだな、古川さんは指揮者の方が向いてる」

素直な感想を伝えた。

「ばっかだねえ、それはないない。とりあえずこれからの流れでいくと指揮者は藤沖。これは固まってる。藤沖もその点は了解しているから」

——やっぱり評議が自動的に上がるというわけか。

少しぴりぴりする。藤沖との関係が修復されたわけではないにせよ、一学期末の揉め事がきっかけで上総の方が見下ろす立場に変わりつつある。そのことを考えると露骨ににらみ合いということも避けられるのではとひそかに期待はしている。

「関崎は」

なんとなく気になったので聞いてみた。

「あいつはバスパートに置くよ。本当はねえ、男子の声がもっと響く歌にするってことも考えたんだけど女子が面白くないって言うし。『いざ立て戦人よ』あたり自由曲で考えたこともあったんだけどね、戦意高揚の歌だから教育上よろしくないのではって意見もあるし」

「ややこしい問題多いな」

合唱コンクールというものはこんなに面倒な問題が多いものだろうか。中学時代は指揮者一筋で通してきた上総としても、今まで見えてこなかったものが浮かび上がってきて正直驚いている。

「しっつれいしまーす！」

廊下いっぱい響き渡る声で挨拶し、こずえが先頭となり職員室に入る。こずえの言う通りすでに先生方のほとんどは揃っていた。一年担任中心の机の島を探す。麻生先生もいるし、野々村先生もいる。ほぼすべての先生が揃っている。

「せんせ、おっはようございまーす！」

「よお、古川も朝から元気だなあ」

朗らかに迎える麻生先生だが、上総が伴っているのを見つけて少し顔をしかめた。

「どうした、珍しい組み合わせだな」

「あのですねえ、先生。合唱コンクールの件でできるだけ早く話、つきたいんでいいですか」

こずえはちらちら周囲を見渡し、上総の背をぐいと押した。

「急ぎの用件は伴奏のことです。先生にもこのまえ相談したことなんですが」

今度は上総の肩に手を乗せ、

「諸事情により、今回二曲とも立村くんに弾いてもらうつもりです。本人も了解済みです」

上総も力強く頷いてやった。目の前で顔をしかめている麻生先生に、きっちり伝わるように見せ付けてやりたかった。

「どうした、古川、あのなんだ、我がクラスの誇るピアニストふたりを全力で説得するという展開じゃないのか？　なんで、その、いきなり立村が？」

後ろで野々村先生がこちらをのぞきこんでいるのが、視界の片隅で確認できる。知らん振りを決め込んだ。まずは説明だ。こずえに目で合図を送り上総なりに答えることにした。

「古川さんから事情を聞いて、承諾しました。クラスのために協力する気持ちはおおいにあります」

一学期前に散々嫌味を言われ、さらには「関崎の下働きになれ」などとほざかれたのだ。担任のご希望通り、きっちり一年A組のために全力投球してやろうじゃないかと宣言しにきたのだ。もっと感謝しろと怒鳴ってやりたいがもちろん、慇懃無礼に通す。

「そうか、その気持ちはありがたいが、その、なんだ、他にピアノが弾ける奴はいなかったのか」

こずえに再度問う。驚くのも無理もないとは上総も思う。おそらく今まで上総が鍵盤に触れたことがあるということも中学の先生方含め全く知らないはずだ。故意に隠していたわけではなく、単純に自宅ピアノがないし聞かれもしないからという話なのだが、現在それなりに弾くことができるというのはうそではない。

「ええと、弦楽器中心にたしなんでいる人は結構いるんですけど鍵盤専門って人はほとんどいません。小学校時代に中学受験をやめている人がほとんどですし。誰もいなかったら私も立候補しようかなって思ったんですけどね。なにせ小学校一年でドロップアウトしてますから無理無理。ね、立村、そうだよ」

「そうは思わないけど」

こずえには軽く返した。せっかくなので自分の考えを述べておくことにした。

「古川さんもしばらくブランクがあるわりには十分技量があるし伴奏者には適任だと個人的には思います。ただ、古川さんの場合クラスのパートを指導したりまとめたりする方が向いてます」

「ほお、断言するか」

「はい、彼女とは三年間同じクラスでしたのでその点は断言できます」

こずえが丸い目をしてわざとらしく「うわあ、立村珍しく私のこと絶賛してくれてる！」とうひょうひょ喜んでいる。悪いが無視する。素直な言葉だ。

「俺もさすがにお前が伴奏者として売り込みに来るとは想像していなかったが」

上総をいつものようにねめつけつつ、麻生先生は額をタオルハンカチでぬぐった。

「どのくらいピアノのキャリアあるんだ」

「キャリアというほどではありませんが、小学校に入る前から親にレッスンはしてもらっていました。自宅に練習設備がありませんので他の先生にはつきませんでした。長期休暇の間には母の実家で一週間程度毎日練習を続けています」

「あのお母さんか」

妙に納得されるのが正直面白くないが頷く。

「素人程度の練習に過ぎませんが、ある程度の曲をそらんじることは出来ます」

「たとえば」

ここでこずえが嘴を挟む。

「土曜日に、昔のクラスメートたちたくさん呼んで、臨時オーディションやったんですよ。そしてたら立村の圧勝。私ぼろぼろ、うわーんって感じ」

「そうかあ？ めんどくさいから勝ち譲っただけじゃないのか？」

こずえに対して話しかける様子はからかい調子で楽しげだが、露骨に上総に対して態度が変わるのがむかつく。それは演技とは思えない。

「でもしょうがないですよ。こいつ、エリーゼのために弾いたんですよ。この顔でエリーゼ、ですよ。ベートーベンですよ。恋ですよ。なんなのって感じ」

「エリーゼ以外には何、弾いた」

あの後こずえの家では何曲か披露したのだ。クラシックよりは最近はやりのテクノミュージック系楽曲を即興で弾いて、羽飛を含む三人から盛大な拍手をもらい、最後はこずえと青大附中の校歌をキーボードと一緒にセッションして盛り上がった。

「校歌に、テクノな。クラシックは他にはやってないのか」

「トルコ行進曲、ベニスの舟歌、あとブルグミュラーの練習曲とか」

一般的にピアノレッスンがどういう本を使うかはわからないにせよ、曲の名前はある程度知っ

ている。並べていった。麻生先生は首をひねっていたが、

「俺には曲の名前を並べられても全く見当つかないが、古川が見るからにはそれなりに弾けるといことなんだな、こいつが」

「そうなんですよ、思わぬところに逸材発見ですよ。これで宇津木野さんや疋田さんも安心して演奏会の方に専念できるし、立村はかくし芸用の新たな発見ができるし、私は思い切り歌えるし、クラスの優勝は狙えるし、いい事づくめですよ。あ、そうだ、一応練習環境なんですけど音楽室の他、私のうちのピアノも提供しようかなって話で進みます。これも昨日の段階でうちの母と相談して、男女混合で遊びに来てもらって、保護者監視のもとでやろうよってことまっています。つまり、不純異性交遊のご心配なし！もしご心配なら、うちの母から念書もらいましょうか？」

上総にとっては聞きなれているこずえのまくし立てっぷりだが、度肝を抜かれているのかいないのか麻生先生はただ黙って聞き入るのみ。だんだん先生たちが増えてきて空気もぬるんできたところで、膝を叩き、

「ここまで手を回しているのかいお前ら。詳しいことは後でもう少し聞きたいんだが、とりあえず今日、音楽の授業あるだろ？俺も肥後先生に伝えておくからそこで最終確認するよう提案しとく。お前らがやる気まんまんなのは担任としてもうれしいが、なにせ立村はダークホースだろ。クラスの連中が仰天する顔は十分想像つくだろ？」

「それはもちろんです。だからこんな早くに来ちゃったんです！」

親指で上総に向かいOKサインを送り、こずえはぺこりと一礼した。

「じゃあ、早いうちにクラスのみんなにもこの話伝えときます。んじゃ、つまり、三時間目の音楽の授業がいわゆる立村の伴奏面接って奴ですね」

上総も礼をした後、急いでこずえにくっついたまま職員室を出た。野々村先生がどういう顔をしていたかは確認し忘れた。廊下に出たとたん身体中の悪いものが全部出切ったようなすっきり気分にも包まれた。たぶん、窓辺から吹いてきた秋の匂いする風のせいだ。

その三 伴奏者面接（2）

麻生先生との会話は一段落し、急いで教室に戻った。タイミングよく関崎がD組から出てくるのを発見し、こずえが足早に駆け寄った。上総は自分のペースでさっさとA組の扉に手をかけた。いつものように何も話さずに席に着くと、

「おいおい、お前、まじ？」

男子がふたり近づいてくる。中学からの知り合いではあるけれど、積極的にしゃべる相手ではない。

「何が」

「お前すっげえ噂になってるんだけどなあ」

「出所女子」

親指の先で知らせる。

「立村がピアノ弾くってまじかよ」

——ああ、もうばれてるのか。

どうせ黙っていても時間の問題だろう。あっさり認めることにした。

「代わりにになる人いなかったら、そうなると思う」

「ちっ、これガセネタじゃねえのかよ。たまげたよなあ」

事実を認識した後、慌てて自分の席に戻っていったクラスメートふたりを見送り、上総は女子たちの様子を伺った。前々から気になっていた宇津木野さん、足田さんのふたりを観察する。今まで意識して顔を見たことなかったから誰が誰だかわからなかったのだが、ふたりとも髪がストレートで腰にかかるくらい長い。校則違反になるからひとつにまとめてはいて、宇津木野さんは首のところで、足田さんは耳のところに下がるようにそれぞれ個性を主張している。顔立ちも、申し訳ないが区別がつきづらい。たぶんふたりとも額をまるく出しているからだろう。

——別にピアノが上手だからといって雰囲気似ているわけでもないんだろうけどな。

はっきり言って上総も、ふたりが並んだら区別して呼ぶことはできないような気がする。

あまりにもそっくり過ぎる。

不思議なのは、今回の伴奏者辞退に関わる張本人であるふたりが一切無言であることと、周囲の女子たちの視線が妙にきついことだった。こずえから聞いているせいもあるが、もともとA組の女子はいまひとつ団結力に欠けるところがあるらしい。詳しいことはあえて知らないふりをしているが、こずえが今回美里から合同自由研究のお誘いを断ったのにはこのあたりの理由もあるらしい。本当は図書館の仲間と「青瀉のカストロ雑誌研究」を予定していたらしいが……本当か嘘だかわからない……いつのまにかクラスの女子たち中心でちゃっちゃとまとめてしまったとも聞く。

——けど、本当に俺で決まってしまっているのか？

なんだかまた、大荒れの予感がする。

「立村、おはよう、それとだ」

こずえと連れ立って入ってきた関崎が、上総を見るなり先ほどの二人組はお話にならないくらいの勢いで上総の前に駆け寄ってきた。後ろからにやにやしながらかずえもついてくる。関崎に正式発表したのだろうか。仕方あるまい。深いバリトンの響きで関崎は上総に尋ねてきた。

「今、古川から聞いた。本当に、受けるのか」

「何を」

「だから、クラスの伴奏だ。合唱コンクールだ」

「古川さんの言う通りだけど、まだわからないよ」

なんだかクラスの連中が聞き耳立てているような気がしてならない。いや、みな隠すことなく上総に視線を集中させているのだが。女子連中はこずえを除いて積極的に上総へ話しかけることはなく、むしろ避けるようなそぶりを見せることがほとんどで、今回のように興味深い目を向けることはそうそうない。もっとも好意とは思っていない。出来損ない元評議委員長を巡る環境は厳しいのだ。

「確かに、麻生先生には誰も伴奏者がいなかったら俺が受けるとは伝えておいた。古川さんはじめ、他の友だちにも協力してもらって練習が出来るよう準備しようと思ってる。でも、俺がそうなれば、の話だけだ」

「そうか、とうとうお前もその気になったか！」

破顔一笑、関崎が嬉しそうに上総の机を片手で叩き頷いた。

「合唱コンクールといえば燃えないわけないだろうとは思っていたんだが、やはりお前は本気だったんだな。やはりお前は」

上総があまり言われたくない最大の褒め言葉を口にした。

「心底、青大附中の評議委員長の誇りを持っているんだな」

「いや、そんなわけじゃないよ。どうせ落ちたし」

全く聞いていない様子の関崎を眺めつつ、上総は第二のため息を吐いた。隣りでこずえがささやきかける。

「女子たちにはもう、昨日の夜、電話で話しといたから余計なこと考えるんじゃないよ。悩みすぎたらはげろよ。はげはセクシーだけど、今はまだはやいよ」

——余計なお世話だ。

言い返す前に麻生先生が入ってきたので、まずは黙ることにする。クラスメートたちの不気味な視線もなんとか今は外れた。

「よおし、お前ら夏休みボケもそろそろ抜けたか？ 抜けてねえ奴いるだろ？ ほら、片岡、お前もいい加減眠そうな顔するのやめろ」

関崎の側の席でくっついて片岡が、困った顔で麻生先生に頷いている。

「全くなあ、それとそろそろテストが近いっつうことも覚えとけよ。実力テスト来週だってことお前ら忘れてたろ。五時間ぶっちぎりだ。それが終わったら、古川、今度何が待ち構えているかわかるな？」

いきなりこずえに話を振った。朝の会話の流れだろう。上総は身をこわばらせた。

「はい。テストは実力ですから期待しないでってところ。けどそれ終わったら一気に合唱コンクール突入だし、毎日朝練か夕練しなくちゃね」

「その通り！ お前らも部活やら委員会なんかで忙しいのは承知しているが、クラスのこともよく考えてくれよ。そうだ、お前ら合唱コンクールは初めてだろ？」

麻生先生はちらと上総に目を走らせた。ぞわりとする。

「青大附高の合唱コンクールは一年から三年まで全クラスが出場するんだ。去年までは全校生徒が自クラス以外に投票する形式をとっていたのだが、今年からは音楽専門の肥後先生が中心に審議をして最優秀賞を一クラス、その他学年内の優秀賞を各学年一クラス。極めてシンプルな形式なんだ。特別賞は今まであったんだが、今回からはなくなった。ご褒美は見た目には賞状だけに見えるだろうが俺も担任として何にもしないわけにはいかない。それなりの結果を出したからには特別な褒美を取らせる準備はあるぞ」

いきなり沸き立つ単純な一年A組。ひとり上総だけが取り残されているのはいつものこと。

——またわけの分からないラーメン屋に連れて行くとか中華料理屋とか、セットで公衆トイレ掃除させるとか、わけの分からないことするんだらうな。

くわばら、くわばら。そんなのだったら賞に洩れて静かにしていたほうがいい。

「先生、ひとつ聞いていいですか」

不意に、女子のひとりが質問を投げかけた。

「合唱コンクールには指揮者賞、伴奏者賞があると聞いていたんですが、なくなっちゃったんですか？」

「んなのあったの？」

「知らねえ」

またざわつき出す。単なる疑問のみが続いている。上総も聞いたことがなかった。

——指揮者賞と伴奏者賞なんてあるんだ。中学の時は何もなかったのに。

そういう情報がなぜ今になるまで入ってこなかったのか、そちらの方が少し痛い。

麻生先生はその女子に首を回して見せた。

「よく知っているなあ。詳しい事情ははしよるが、去年から指揮者と伴奏者の個別賞は廃止することにしたんだ。合唱だろ？ 合唱とは指揮者と伴奏者と合唱の三拍子が揃わないとむなしいだろ？ 総合芸術として評価すべきだという意見が多くなったんだよ」

「へえ、それ知らなかった！ けどそれだと伴奏する人張り合いないねえ」

何気なくこずえがからかう口調で上総をにやけながら見た。知らん振りを決め込んだせいか周囲の空気がどことなくぬめりを帯びていくのがありありと感じられて気味が悪い。

「伴奏者の場合は賞狙いでどうしても負担が大きくなるケースが多いのと、特定の生徒しか弾いてはいけないといったような雰囲気もあまりよろしくない、そういうこともあるんだよ。たとえば、今のうちに話しておこうか、今回の伴奏者なんだが、三時間目の音楽の授業で最終決定する予定となっている。エントリーは立村だけなんだが、誰もいないのか、本当に？」

女子の不気味なしらけっぷりと比べて男子たちのひゅうひゅう声が響く。

「やるよなあ立村、お前二年の時指揮者だったろ？」

「男子評議のお勤めなんだよなあ、ありゃ。ってことは音程取れるってことか」

「どうせ俺たち賞なんか狙える身分じゃねえし、ま、のんびりやろうぜ」

分厚い手による拍手も聞こえた。関崎がどっしり微笑みながら上総に励ましの眼差しを送っている。こずえも関崎と藤沖になにかしら声をかけている。坊主頭の藤沖は、無言のままただ上総をうさんくさげに見つめている。同じく、上総を敵視しまくっている片岡も同様だった。いつものパターンでは確かにある。

「もし、参加したいんだったらぎりぎりでもいいから手をあげるんだぞ。いいな」

妙な力を込めた言い方で、麻生先生は締めた。上総は横目でちらりと長髪的女子ふたりを見やったが、特に何か言いたげな雰囲気もなかった。少なくとも読み取ることはできなかった。

その三 伴奏者面接 (3)

英語科一年の野郎連中が冷静だったのには訳がある。

青大附高の芸術科目は音楽・書道・美術のどれかを選択する必要があるのだが、音楽の選択者は男子のみだとたったの四人。しかもそのうち三人は吹奏楽部ゆえという明確な理由が存在する。上総が音楽を選んだのは単純に、「美術より向いている」というそれだけだった。今思えば書道の方が向いていたのではと思わなくもないのだがあまり深いことは考えていない。

合唱コンクールに関してはさすがにみな、元気よく歌わないとまずいだろう、といった雰囲気になんとかあり、協力する意思は男子たちもそれなりに持っているようだ。夏休みの話題でも合唱コンクールについていろいろ話をする事があったが、決して「かったりーやりたくねえ」とか「練習女子に任せちまって逃げるか」とかそういうやる気なさげな発言はほとんどなかった。むしろ「女子めんどくせえみたいだなあ、古川姉御苦労してるぜ」とか「もうちょっとポップスっぽい自由曲ってのだめなのかよ」とか、わりと興味ありありで食いつく奴がほとんどだった。

特に合唱の出来不出来に対しては拘らないけれど、青大附高生たるもの学校行事があれば燃えないでどうする、そんなもったいないことしたくない、というのが基本姿勢。

ただしこれはすべて男子の場合だ。

上総の知る限り、女子はそう一筋縄ではいかない雰囲気のようにだった。

女子の場合は十五人中八人が音楽選択だった。それなりに習い事もしている生徒が多いのと、やはり多い吹奏楽部。青大附高のなかではないけれど他高校の連中とバンドを組んでいる子もいると聞いている。詳しいことはわからないが、とにかく音楽の耳が肥えているし、こだわりも強い。いや、強い「らしい」。あくまでもこずえの伝聞だが。

「うちのクラスはねえ、表向きおとなしそうに見えるけど結構みなプライド高いから、声かけるのも気を遣うよ。どうなんだろうねえ、あんたが伴奏者になっちゃったら、まともに歌う気になってくれるのかねえ」

三時間目前、音楽室に向かう途中でこずえに話しかけられた。いかにもたまたま一緒に歩いているという雰囲気をかもし出しているが、内容はなんとなく秘密のにおいがする。

「どういう展開になるかわかんないし、他の組の子たちもいるしね。ある程度覚悟はしときなさいよ。まあ、あんたに決まるのはほぼ九十九パーセント確定。奇跡的にあのふたりのうちひとりが気を変えないうちはね」

「変えてほしいのか？」

「それの方が楽じゃん？ 決まったら決まったでこれから勝負だからね」

こずえは音楽の教科書とノートを抱えて上総の歩く速さにあわせた。

「はっきりしてることはさ、あんたがしっかり『エリーゼ』弾かないとまずいってことだよ。今日の音楽の授業はたぶん、伴奏者の顔合わせみたいなところあるし、肥後先生もまあね、あまりやる気なさそうだけどやっぱり音楽にはそれなりに拘るじゃん？ あんまり音楽の神様を冒瀆するような弾き方はむかつくと来ると思うよ。あんた、そういえば楽譜は？」

「ないよ。暗譜しかできないし」

「あんた、本番にやたらと強いからねえ」

音楽室に入り、いつもの最後尾に座る。りつむらの「り」だから、比較出席番号順では後ろになる。C組との合同授業で計三十人。C組の男子は結構音楽選択者が多いのだがこれもわけがある。教師たちの陰謀で固められた男子評議三羽鳥が顔をそろえているというのが大きい。三人とも二年の合唱コンクールでは指揮者を勤めた経歴もあり、評議委員会で鍛えられた発声も身に着けていることありで、自然とその選択となったと聞く。ちなみに羽飛は当然のことながら美術選択なのでこの授業には顔を出さない。

「りっちゃん、りっちゃん」

南雲が上総を見つけてひとつ間を置いた前の席から立ち上がり近づいてきた。

「今日は朝から大変だねえ」

「もう噂流れているのか」

「そりゃあもう。すごいことになってまっせ」

本当は前の席が難波のはずなのだが、気にせず座り込んだ。隣のB組ならともかく、ひとつおいたC組にまで話が来ている以上、もう一年全クラスに知れ渡っていると覚悟した方がよさそうだ。

「うちのクラスの伴奏さんは最初っから決まってるしそれは何にも心配ないんだけどね。自由曲がまだ決まらないんだよな。そちらんほうが問題のような気、するんだけどさ、りっちゃんどう思う？」

「うちのクラスは『モルダウの流れ』でさっさと決まった」

たぶんこずえが夏休み中にどんどん進めたのだろう。音楽にこだわりがない男子たちと、拘る女子たちとの調整をどう取ったのかはわからない。

「古川さんが走り回って女子たちの意見をまとめたらしいと聞いているけど」

「さすが我らが誇る元青大附中D組の女王さま！ いやほんと、今はもうA組のまじ女帝と聞いているけど、すごいですね」

「古川さんに負担が行き過ぎているような気がするんだ」

普段から思っていたことがぽろりとこぼれた。

「あの無敵な女王さまに、いったい、なぜ？」

「うまく言えないけど、なんだかひとりで全部片付けていて、身体持つのかな」

「女王さまはやりたくてやってなさるんですからしょうがないっすよ。それよかりっちゃん、身体が持つたら自分のことじゃん？」

さすがの南雲も声を潜めた。

「やるからには一ヶ月死に物狂いでピアノにかじりつくつもりでいるけどさ」

「うちのクラスの伴奏さん、夏休み前から課題曲に命賭けてるよ。自由曲は決まったらすぐ取り掛かる必要あるし早く決めろって尻叩かれてる、うちの担任」

「早ければ早いほうがいいよな」

たぶん心配してくれているのだろうと思う。南雲は決して「心配だな、大丈夫か」といった表現をしない。むしろ軽く、さらりと、上総を気遣う台詞をふっと飛ばすのみ。それを受け取って紙風船を遊ぶように笑顔で受け取ることのできる、そんな言葉の持ち主だった。

女子たちが揃い始めるとまた視線が絡まり始める。南雲としゃべっているのが目立つのかもしれない。噂によると南雲が音楽を選択するらしいという噂が広がってから、C組の女子たちの多くがそれに倣ったらしいとも。いろいろあったにせよ、青大附中のアイドル規律委員長はいまだ健在である。さらりとした笑みと軽やかな語り口、過去現在問わずいつも女子たちをひきつける。

「では君たち、本日の授業は予定を変更して、来る九月末に行われる合唱コンクールの伴奏に関しての話し合いをお願いしたいのだが、いかがかな」

肥後先生……おそらく狩野先生よりは年上だが麻生先生よりは年下と思われる……が音楽準備室から現れてピアノの前で軽く手を打った。どことなくあんころもちのようなふっくら加減もさることながら、いつも清潔感のあるスーツをまとっている。今日も生成りのスーツに薄いピンクのシャツを身にまとっている。

上総の前にいつのまに陣取っている難波……これも教師の陰謀で音楽委員を任せられてしまった哀れな奴なのだが……が立ち上がり、いつもの理屈っぽい口調で説明しだした。

「現在、課題曲の練習は夏休み中どんどん進んでいるのですが、自由曲が絞り込めて以内状況です」

「それは困ったね。早く決めないと伴奏の人たちも大変だよ。それではA組は」

A組の男子音楽委員、小立（こだち）が立ち上がった。現状説明である。分かりきっていることだ。

「自由曲は『モルダウの流れ』です。今日中に伴奏者を決めてすぐに練習に入る予定です。実力テストが間に入るので時間が少し厳しいのですが」

「ずいぶん、のんびりしているね。合唱の盛んな学校では一学期の段階で曲を決めて、夏休みから稽古を始め、伴奏者も準備を整えているとも聞いているんだがね。それで先生たちからもお話を伺っている、伴奏者のことだけでも」

横に押しつぶした酒まんじゅうを思わせる肥後先生は、口調とは別の穏やかな眼差しで上総を見た。どうやら、麻生先生からはもう朝のニュースが伝わっているのだろう。

「立村くん、詳しい事情は後にして、まずは弾いてくれないかな。合唱コンクールの準備がA組もC組も大幅に遅れているらしいということだけは把握した以上、伴奏を覚えるのにはかなりがんばってもらわないといけないからね。少し緊張するかもしれないが、クラスメートの前で曲を披露する機会はそうそうないと思って、覚悟してやってくれたまえ」

——悪い先生ではないんだろうけど、「くれたまえ」って今時遣わないよな。

それでもおくびには出さず、上総は立ち上がりグランドピアノの前に立った。たぶん生まれて初めてグランドピアノに触れることになる。席の間を縫って歩く時、難波が、

「立村、本気かよ」

呆れ顔でつぶやいたのと、

「もっと早くわかってたら、評議のビデオ演劇に立村の生演奏入れられたのになあ」

勘違いした感慨にふけている更科と、

「いやーこれはめでたいっすよ、俺もう今からわくわくじゃん。羽飛も言ってたぞ、立村まじピアニストだってな。さっすが我らが評議の誇り！」

他の男子連中に向かって懸命に話しかけ場を盛り上げようとする天羽と。

南雲は楽しげに微笑んでいるだけだった。

——関崎がいないんだな。

ちらと席の顔ぶれを眺めて思った。

——あいつ芸術科目選択するとき、自分が音痴だと思いこんでいたから書道選んだって言ってたな。大いなる間違いだよあれ。

どうでもいいことを考えて、ぴくりと反応する心臓近くの筋肉をなだめる。目的は伴奏ができればいい、それだけ。ピアノが上手とか褒められる必要はない。ただ、九月までに弾きこなせばいい、それだけ。緊張なんてしなくていい。いいはずだ。

その三 伴奏者面接（4）

——鍵盤が重たい。

指で一音ずつ押すたびにどこか納まりの悪い感覚が残る。

母の実家で弾いたアップライトピアノとも違う、糊が鍵盤の裏に張り付いているかのようだ。それも接着剤というよりはいわゆる米を練ったような糊のような感じだった。

——弾きづらい、なんて言える身分じゃないけどさ。単に俺が下手なだけであってそれは分かりきってることだけどさ。

こずえの家で奏でた時のような心地よさは全くなかった。音を必死に追うだけで精一杯だった。救いなのは目立つところでのしくじりがほとんどなかったことだろう。もっともここにいる連中の半数は部活動なり習い事で音楽を聴きなれているはずだから、上総のごまかしもあっさり見抜いているだろうが。それが証拠に最後の和音が消えた後も全く拍手が沸かなかった。

「特に先生にはついていないという話を麻生先生から聞いたけどね」

「はい、家で親に手ほどきしてもらっただけです」

「いつ頃から」

「小学校に入る前からです」

麻生先生に話した内容をあらためて肥後先生に説明し直す。肥後先生に話すということは、音楽室内で座っている他の生徒たちにも上総のピアノ学習歴が露となることにもなる。一部の男子連中がふむふむ頷いたり話をしたりしているのが聞こえる。

「独学のせいかもしれないけれど、指の使い方が少し気になるな。悪い癖がついている。今から直すのはきついな」

横につぶした饅頭顔で気よさそうな肥後先生だが、言葉はきつい。

「もう少し早く決められるようだったら、誰か先生について練習することも提案したかったが、あと一ヶ月あるかないかでなかなか難しいね。全く弾けないわけではないというのはよくわかったが、今から二曲持つというのは、立村くん、かなりきついのではないのかな」

「出来る限りの手は尽くします。準備もしています」

できるだけさりげなく上総は答えた。きつくないなんて誰も思っていやしない。舞台度胸はあるけれど、得意の英語で答辞を暗誦したり集会で評議委員長挨拶に立ったりするのはわけが違う。しかもピアノの腕前を披露したなんてことは今までほぼない。

「君が本気でとりかかるつもりだったらもちろん力惜しまない。できるだけやさしい編曲の楽譜を探して今日の放課後にコピーして渡すよ。ただできれば、君の場合は誰か短期間でもよい先生についてもらったほうがいい。伴奏はソロで弾くのと違って歌声に合わせる必要があるから、それに見合った弾き方に絞って教えてくれる先生をどうにかして探したほうがいいね」

ここまでのどかな口調で続けた肥後先生は、上総に席へ戻るよう指し示した。ようやくここで男子中心の拍手が鳴り響く。もちろん女子のほとんどが無視なのはしかたのないことだ。中学の負の遺産だ、しかたない。

「お前なんで今まで言わなかった」

席につくのを待って、難波が振り返り上総に問いかけた。

「いや、言う機会なかったし」

「本条先輩からも聞いてなかったぞ」

「本条先輩にも言ってなかったから」

思い出した、そういえば本条先輩にもピアノに関しての話題を話したことがなかった。たぶんこの瞬間も知らないはずだ。

「まったく、もっと早くばらしとけば、つぶしいくらでも聞いただけ」

「つぶしって、何を？」

わけがわからず問い返すと、難波はそれ以上答えずに前を向いた。無視したわけではなさそう。すでに夏休みから準備万端の伴奏者女子が肥後先生に呼ばれて立ち上がり、ピアノを弾く体勢を整えていたからだった。

「瀬尾ちゃんよろしゅうに！」

天羽がからかうように声をかける。どうやら中学時代A組でピアノ担当していたのが彼女だったらしい。おかつ髪の子だった。当然上総は顔を覚えていない。

「では瀬尾さん、課題曲をさらっと弾いてみていただけますか」

「はい」

こっくり頷き、瀬尾という女子は譜面を全く見ずに「恋はみずいろ」をイントロからさらりと演奏し始めた。滑らかで分かりやすい音が音楽室中に広がっていく。

——弾いてみたい。歌うのはお断りだけどさ。

なにせほぼピアノど素人の上総が弾いた後なのだから、しっかり訓練している生徒の演奏がはるかに上なのは誰もがわかっていることだ。それが証拠に終わった瞬間すぐに男女入りまじった華やかな拍手が沸き起こった。

「やっぱ、格が違うよね、瀬尾ちゃんだと」

「そうそう。レベルが違うんだよね、あれとは」

A組の女子たちもささやいているのが聞こえる。いやわざと上総に聞こえるような言い方にも聞こえる。その中には宇津木野さんと疋田さんが混じっていないのだけ確認した。

——あれで悪かったな。

こずえが助言してくれた通り、こればかりは女子の感情の問題につきるだろう。いきなり血迷ったかのごとく「エリーゼのために」を引っさげて伴奏者に立候補した奴を受け入れるなんてそうたやすくできることではない。しかも、ふたりもはるか上の技量を持つ女子がいるというのに、だ。頭に来るのも当然だろう。

「瀬尾さん、聴かせてもらったよ。夏休み、よく練習したようだね」

「はい」

短く瀬尾さんは答え、自分に言い聞かせるように頷いた。

「だがこれからが本番だ。合唱は生ものだし、指揮者とうまくコンタクトを取りつつ歌声にひき

ずられないように自分でテンポを刻まねばならない。できるだけ歌とあわせる練習を多くしてそれになれてほしい。まだ今の状態だとピアノだけがでしゃばっている。言いたいこと、言いたいわかるね」

「はい」

瀬尾さんにはその意図がすぐ理解できたらしく、こっくり頷きそのまま席についた。

「あとは一刻も早く自由曲を決めることだ。これは大変だよ。曲を叩き込むのとあわせるのとならぬ方を一緒にしなくてはならない。難波くん、その辺は心得ているね」

「はい、本日中には」

難波がしゃちほこばって答えるのをみな、笑いをこらえるようにして周囲が覗き見ている。上総もそっと後ろから見下ろしてやった。さっきの仕返しだ。

——さすがだよな、かなりうまいよこの人。

あとで天羽にC組専属伴奏者・瀬尾さんの腕前を詳しく聞いてみることにした。わりと上総好みの弾き方をするタイプの演奏者だ。

「それと、君たちもご存知かもしれないが」

肥後先生が額の汗を拭きながら、全員を見渡した。

「十月の学校祭で、青大附高初めての試みとして、有志たちによるピアノの演奏会を行うことになったんだ。このクラスにも瀬尾さんを始めあとふたり、参加予定者がいるはずなんだが、そうだA組の宇津木野さん、こちらに来てくれないかな。それと疋田さん」

いきなり「A組の誇るピアニスト」ふたりの名を呼んだ。静かに立ち上がり控えめに前へ出るふたりを、穏やかに待ち受けていた肥後先生は、

「今日はせっかくだから、ピアノの発表会にしよう。ふたりとも練習に余念がないのはわかっているが、ここで軽くおさらいをしてみてもどうだろう？ まだだいぶ先のことだが、できるだけいろいろな人に君たちの音楽を知ってもらったほうがいい。どうだろう、宇津木野さんは確か『英雄ポロネーズ』だったね」

「あのう、先生」

宇津木野さんが戸惑って答えに悩んでいるのを、隣の疋田さんが代わりに答えた。

「まだ演奏会の曲は未完成なので、もしよかったら、『モルダウの流れ』弾いていいですか。それと、課題曲は、ええと」

宇津木野さんも気づいたのか、すぐに後を引き取って顔を挙げた。

「私も疋田さんと同じなので、譜面あれば『恋はみずいろ』弾きます」

そこから先の二曲演奏は、どう考えても上総に対する遠隔の牽制にしか思えなかった。

——初めてみた譜面を、その場で弾けるものなのか？

——『モルダウの流れ』ってこんなに手が込んでいるのかよ。前奏がこんなに長いのか。

まさに完璧。「一年A組が誇るピアニスト」ふたりの競演は終わった瞬間の二クラスまとめたブラボーコールでめでたく幕が下りた。上総の「エリーゼ」どころか、瀬尾さんの演奏すら影が

薄い。満足げに席に戻ったふたりに対し、肉まん音楽教師・肥後先生の講評はやはり、厳しかった。

「よく弾けているし素晴らしい出来だけど、伴奏ではなくソロの演奏だね。できれば演奏会のクラシックをきっちりと聴かせてもらいたかったが、まあしょうがないだろうな」

——伴奏ではなく、ソロの演奏？

疑問をはさむ間もなかった。前の席にいる難波が振り返り、
「無駄な比較対照するなよ」

一言、ささやいた。余計なお世話だ。

その三 伴奏者面接 (5)

——なんだか妙な雰囲気だな、さっきから。

あの音楽の授業から放課後に差し掛かるまでの一年A組に漂う違和感はなんなのだろう。

教科書をしまいこみ、まだ椅子に腰掛けたまま上総は評議たちの発言を待っていた。さすがに今日は正式発表しないとまずいだろう。藤沖とこずえが評議である以上、きちんと時間を取って説明するはずだ。それこそ評議の仕事でもある。

「えっと、悪いんだけどちょっとだけ残ってくれる？」

「えー？ 悪いけど今日用事あるから明日ね。あ、それか電話で決まったこと教えて」

「私もこれから部活だし」

ため息顔で「やっぱりこうだもんね、私もほんとは図書館当番なんだけどさぼってるんだよ」と愚痴を言うこずえだが、すぐ気を取り直し、藤沖と一緒にいる関崎に声をかけた。

「じゃあ女子はまた後でってことで、残れる人残って。藤沖もさすがに今日はいなさいよ。それと関崎、あんた、合唱コンクール経験あるでしょが」

「もちろんだ」

「問答無用まあいっか。さてと。今日はさ、合唱コンクールの大まかな練習予定を発表したいんだけど、みんなよい？」

それでも結構残っている。女子たちも十人はいるし、男子連中にいたってはほぼ全員揃っている。優秀だ。

「三時間目に音楽出た人なら分かっていると思うけど、とりあえずうちのクラスの伴奏は立村ってことで話が決まってるんだけど、それでいい？」

ぐわり、と生ぬるい空気にひたひたせまる。こずえは全く無視して続ける。

「夏休み中、私と直接話をした人たちなら分かっていると思うけど、宇津木野さんと疋田さんが今回は十月の学内ピアノ演奏会に集中してもらわないとまずいってことで残念ながら伴奏辞退になっちゃったわけ。うわーん、もったいなーいとか言いたいけどしょうがないよ。十月はみんなで応援に行くからね」

明るく話を持っていこうとするこずえの努力も届かない。どうもねっとりした恨みに近い感情が漂っているようで、その張本人たる上総は非常に居心地が悪い。男子連中は何も考えていないのが分かるし、詳しい事情なんて知ったことじゃないと思っているかもしれないのだが。なぜか女子たちのみ無言で不満を訴えているようだ。

「ごめんなさい」

宇津木野さんがおずおずとこずえの前に立ち、申し訳なさそうに頭を下げた。

その隣りに疋田さんも拳ひとつ低い位置に立ち、

「今回は、私たちのわがままでみんなに迷惑かけちゃって、ごめんなさい。いつかこの分、ちゃんとお返しするからね」

泣きそうな顔で訴えた。一見そっくりさんに見えたがよくよく観察するとそうでもない。宇津木野さんはあまり人と話をするのが得意でないらしく、反対に疋田さんはこずえに近い感覚で世

話焼きタイプのような。音楽室でもクラシック曲を演奏するなどといったクラスメートに猫の小判状態のことをするよりも、その場で伴奏を初見でさらってしまうと言う形を取るよう持っていたのも疋田さんだ。

「古川さんも、ごめん。あ、それと」

露骨に気まずそうな顔で上総を見た。座ったままの上総に宇津木野さんを伴い向かい合い、「立村くん、ものすごい負担かけてしまっでごめんなさい。本当に、助かりました。ありがとう」

ふかぶかと頭を下げた。急いで上総も立ち上がる。こういう時はきちんと礼を返さねば。

「いや、こういう時しか手伝えないから、あの、俺もほら、弾いた感じがあの程度だから、かえって申し訳ないんだけど」

誰もフォローしようとしめない。沈黙の女子たちがかもし出すむかつきのオーラとでも言うべきか。この感覚を上総は日常的に感じているのでむしろ慣れ切っている。しかし、あまり気持ちいいものではない。

「ごめんなさい」

また、宇津木野さんが目を伏せてつぶやいた。あまり深い追求はできそうにないということがなんとなくわかった。知らぬふりを通そう。

「それでなんだけど、問題は合唱よね。ご存知の通りうちのクラスは人数が少ないじゃん？ パートを分けるだけでも結構大仕事よね。まあそのあたりは、吹奏楽のみなさまにお手伝いいただきたいんだけどどう？」

「コンクールの合間になるけどそれでいいなら了解」

吹奏楽男子の多いA組。ありがたい。

「さっすが頼れる！ 私も音痴じゃあないと思うんだけどこのあたりはやっぱプロに任せたいねえ。それと、肝心要の指揮者。今までのパターンで行くとなると男子評議委員の指定席ってとこなんだけど、藤沖、あんた文句ある？ あんたがいないとバスパートがきつくなるってのはあるんだけどさ、受けてくれるよね」

「俺がか」

「そうだよ、大抵他のクラスもそうじゃん！」

どことなく息苦しさ漂う夏の匂い。上総は椅子に座りなおして様子を伺った。

「古川、異議ありだ。俺は指揮者向きではない」

丸刈りの頭を大きく振り上げ、藤沖ははっきり断りの言葉を口にした。

隣の関崎も口をぽかんと開けたまま硬直していたが、やがて、

「どうしたんだ、お前らしくない」

これもまた、きわめてありふれた言葉をかけていた。

上総が伴奏者になるよりもはるかな衝撃がA組連中の中を走り抜けている。

それまでむっとり黙りっぱなしの女子たちが勢いついたように問い詰めてくる。

「えー、ちょっとちょっと、話が違うよ。藤沖くんがやってくれるんだっいたらまあいっかって感じで女子たちも納得してたんだけど」

「そうそう、中二の時やった合唱コンクールも大抵評議がやったじゃん」

——いや、全員だったけど。

飲み込む、飲み込む。今の上総は評議どころか委員会に一切関わっていやしない。

「男女関係なく聞いてくれないか。俺の合唱コンクールにおける考え方を、今ここで伝えたいんだ。いいか、古川」

女房役の古川も、丸刈り姿の藤沖が肩をいからせて訴えるのを無碍にできなかつたらしい。最初はさすがに驚いていたようだが、すぐ気を取り直し、

「わかったわかった、じゃあ、あんたが大将ってことで藤沖、合唱コンクールについて語りなさいよ。その代わり納得いく理由がなければあんたが指揮者辞退なんていう非常識なこと受け入れないからね」

元青大附中生徒会長の藤沖は、やはり今も押し出しよく迫力のある姿を保っていた。前に立ち、汗を手の甲でぬぐいながら語り出した。

「合唱コンクールとは、クラスの団結を確固たるものにするために行われる学内イベントだということくらいは、ここにいる全員理解しているだろう。俺も最初は楽しみにしていた。お世辞にも美声を持つわけではないがな、ひとつのことに集中して素晴らしいハーモニーを奏でる感動はぜひ味わいたかった」

ひとりひとりに語りかけるように、身体の向きを代えつつ、

「だがうちの学校は意外と合唱に対するこだわりを持っていない。学祭が控えているせいといえればそれまでだが、よりによって伴奏者に負担をかけるようなピアノ演奏会を十月に行うなどといったスケジュールからしても明白だ。また、諸先輩方からも聞いたことなんだが、音楽担当の肥後先生が合唱コンクールというものに対して批判的だというのがひとつの理由とも聞いているんだ」

——あの肥後先生が合唱コンクール嫌いなのか？

初耳過ぎて驚く。上総とは違う。上の先輩たちとのつながりが比較的薄い……本条先輩除き……上総には、未確認情報である。男子たちが顔を見合わせてささやき合っているのだけが聞こえる。

「理由は今のところ不明だが、そのこともあり来年以降は合唱コンクール自体がなくなる可能性もゼロではない。いや、かなりの可能性でそうなるだろう。となると青大附高最後の合唱コンクールである以上、俺たちはこの貴重なチャンスを生かすため全力を尽くさなくてはならないことになる」

——合唱コンクールがなくなるのか？ それはそれで別にいいけど、肥後先生そんな子と考えている風には全然見えないな。

藤沖の話聞きながら頭の中を整理して見る。あいつが上級生受けよくありとあらゆる情報をかき集めていることはわかったが、それと指揮者辞退とのつながりが見えない。

藤沖は腹から重たい声を出して語り続けた。

「失敗する要因を出来るだけ減らしていきたい。だがたぶん大丈夫だろうとたかをくくっていた。なにせ過去の伴奏者がふたりもいるクラスだからな。しかも半端な腕前ではないという話を、噂で聞いた」

「藤沖、やめなよ」

こずえが止めるが無駄だった。藤沖は不意に関崎の顔を見て、すぐ腕をひっぱり前に引きづり出した。「おい、いきなりなんだ、おい」と関崎が戸惑った状態でギャラリーの前に立つ。

「合唱にとって伴奏は非常に重要だ。要といってもいい。それが今回は、やむをえない事情とはいえほとんどピアノに触れたことのない立村に任せられたということになる。はっきり言おう、それは緊急事態だ」

——何も大げさだな。一応弾けるって。

要するに上総とアイコンタクトを避けたいんだろう。露骨に嫌がられるのは仕方ないとはいえあまりいい気はしない。しかし周囲は妙に頷いている。伴奏辞退の二人組だけが困った顔して俯いているのみだった。伝わるものは伝わっているのだろう。

藤沖は上総をじっと見つめた。仕方ない、上総も受け止める。

「お前が自分から手を挙げたというのは俺も驚いたが事情が事情だ。頼るしかない。だが、最初で最後になるであろう合唱コンクールで全力を尽くさねばならない中、音楽の耳を持たない俺が指揮者として仕切るべきではない。これは評議だから指揮者、といった短絡的な発想ではない。音楽の流れとハーモニーをつかめる誰かでなくてはならない、そしてここにいるこいつが」

関崎の背中を藤沖はどんと押し出した。

「音楽的感性、およびクラスの要としてまとめる最強の指揮者になる。俺が保障する」

その三 伴奏者面接 (6)

周囲の連中がわざとらしく騒いでいるのと、わけがわからない顔をしたまま藤沖に食って掛かっている関崎を尻目に、上総は教室を抜け出さざるを得なかった。ラッキーといえばそれまでののだが、C組の難波がわざわざ上総を呼び出しに来てくれたからだった。

「悪いがこいつ借りてくからな。一応肥後先生に呼び出し食らってるんだ。理由はだいたいわかるだろ」

タイミングもぴったりだ。肥後先生が上総に放課後譜面を渡すという約束をしていたことを、ようやくここでみなが思い出し、こずえの、

「ああ、ホームズ様どうもどうも。悪いわねえ、隣のライバルだつてのに出来の悪い弟を面倒見てくれるなんてありがたいことじゃないの、ほら立村、あんたはさっさと行きな！」

突き飛ばすような言い方でおいだされたと言ってもよい。

——出来の悪い弟で悪かったな。

こずえに文句のひとつでもぶちかましたいが、残念ながらA組はただいま藤沖の関崎指揮者就任にあたるアピール演説にみな聞き入っている最中だった。関崎が助けを求めたような顔で上総をちらと見たが、知ったことじゃない。自分で何とかしろと言いたい。

「助かったよ」

廊下に出て三階へ向かい上総はまず難波に礼を言った。

「修羅場がちょうど始まったとこなんだ」

「お互い様だ、うちのクラスもこれからだ」

相変わらずぶっきらぼうに難波がつぶやく。黒ぶちめがねをはずし汗を拭く。

「自由曲を今日中に何とかしないとならないってのはきついぞ」

「どういう曲で考えてる？」

「合唱の定番曲でいいじゃねえかと俺は思う。だが、一部の奴らが妙にポップス系に肩入れして今から譜面探そうと間の抜けたことを言い出しているときた。あと一ヶ月だつてのに何考えてるのか俺には理解できるようで、できない」

「理解できるようで、できない？」

回りくどい言い方だった。尋ね返すとホームズ難波は髪の毛をかきあげるような意味不明の気障ポーズを決めた後、

「正直俺にはクラシックなんぞわからんし、合唱のよさも理解不能だ。音楽の感性などない奴だが、それでも耳に入ってくれば気分よく口ずさんだりもするわけだ。そういう気持ちになれる曲を選ぶとしたら、どう考えてもポップスになるだろう。合唱曲がつまらんとは思わない。ただ歌いたくならないというそれだけのことだ」

「でもさ、ポップスを選んでも楽譜はどうする？ それに四部合唱になるのか？」

「それも含めてただいま俺を除いたC組全員で大議論の真っ最中だ。俺もこれから肥後先生に呼び出し食らっているから抜け出したただけなんだが」

なんだ、難波も同じ穴の貉だった。少しほっとして笑った。

——ということは、羽飛も、天羽も、更科も、みな熱く盛り上がっているということなんだな。

三階音楽室にたどり着いた。廊下最奥の教室で、すぐ側に生徒相談室が設置されている。いつも授業で通うときは気にしたことなかったが、こういう場所にあるということは、

「放課後人気がない場所、という条件なんだろうな」

「確認は取れていないがそういう意味だろうな」

会話を交わしつつ、音楽室の扉を開いた。挨拶し中に入った。グランドピアノ奥の戸が開いて、おまんじゅう顔の肥後先生がひょっこり顔を出した。

「待ちかねてたよ。ふたりとも、こちらへ来たまえ」

——今の時代「来たまえ」とか使うか？

ちっとも毒のない口調で、かなりしゃちほこばった言い方をするものだから、正直戸惑う。悪意は感じないのだが、皮肉を言われていると邪推したくなる時もある。

「けど難波、お前はなんで呼び出された？ 俺は譜面のことがあるからだけど」

「今お前のクラスが揉めてるのと同じ意味だ」

なぞめいた言い方でごまかし、難波はすぐに奥の音楽準備室へと入っていった。上総もくっついていくしかない。それにしても放課後の音楽室はこんなに静かなものなのかと少し驚いた。てっきりだれかが練習しているものだと思っていた。

「さあそちらに座ってくれたまえ。さすがに喉も渴くだろう、お茶をどうぞ」

すでに二人分用意されている。グラスにアイス珈琲がなみなみと注がれている。見るからに冷たそうだが、部屋には冷蔵庫の類など見当たらない。

「いつも家からアイスクーラーを用意して一日分の飲み物を用意しているんだよ。水分補給は大切だからね。珈琲には僕なりにこだわりがある」

——なんだか、茶まんじゅうに番茶の方が似合いそうだな。

愛想のよい音楽教師・肥後先生はにこやかに振舞いつつ、口調だけはどこかのお偉方のような雰囲気をかもし出していた。やはり青大附高の先生はよくわからない。そのままどっかりと自分のパイプ椅子に腰掛けると、上総たちをほほえましそうに見つめた。

「最初に立村くんへ渡しておこうか。『モルダウの流れ』と『恋はみずいろ』、モルダウは比較的易しいバージョンの編曲を選んだけれど、決して子ども騙しのものではない。それと『恋はみずいろ』だがこちらは課題曲なのでみな同じ楽譜だが、『モルダウ』よりは耳になじみやすいだろうね」

——どちらも習ってるし、聞いているし、それに好きなメロディだし。

「ありがとうございます」

きっちり受け取り、頭を下げた。譜面をちらっと覗く。隣りの難波もちらちら見る。

「音楽の授業ではあまり詳しく確認できなかったのだけど、せっかくの機会だ。立村くんにピア

ノへの関わり方をもう少し教えてもらいたいんだけど、よろしいかな」

「はい、でも、ほとんど先生が麻生先生に説明されたのと同じ内容になると思います」

難波も首をひねったまま上総を興味深そうに見やる。

「就学前からということですよのかい」

「はい、母からかんたんな手ほどきを受けて、そのあとは休みごとに一曲ずつ仕上げていく形式を取りました」

「本当は指の訓練をする意味でも練習をしてほしいところがあるのだけれど、君の場合は少し特殊だね。しょうがないところもあるか」

自分に納得させるように肥後先生はつぶやき、上総に話を促した。

「それで、練習場所はどうするつもりかな」

「はい、クラスメートでピアノを貸してくれる人がいますし、キーボードも借りるつもりなので家での稽古はなんとかなると思います」

「キーボードは、そうか。全くないよりもあったほうがいいがな。まあいい、どちらにしてもピアノが必要なことには変わらない。そこで相談なんだけどね、立村くん」

肥後先生はグラス珈琲にガムシロップ三つ流し込み、ごくりと飲んだ。

「君も三時間目、宇津木野さんや疋田さん、瀬尾さんの見事な演奏を聴いたわけだし、かなりプレッシャーがかかっていると思う。正直なところ僕は、君がいきなりひとりで二曲弾くというのは普通だったら荷が重いのではという感想を持っている。そう感じることは事実だからしかたない。決して君を責めているわけではなく、音楽に携わるものとしての冷静な判断だ」

——だけどやるしかないんだよ、しょうがないだろ。

言い返すつもりもなく、こっくり頷き話を聴く。むかつくのは難波も同じく深い頷きを返すところだった。

「ただ、全くゼロからのスタートというわけではないし、立村くんの演奏には光る部分も確かにある。君は気づいていないかもしれないけれども、きっちりと感情が表現されている。全くの棒ではない。だから君が伴奏を担当するのはかなり面白いことになるよ。僕も、これも音楽で食べているものとして期待もしているよ。お世辞ではないんだからね」

——まあ、顔を見ていればわかるな、それは。

悪意全くない、のどかな口調。

「伴奏とは、合唱とのバランスが必要で、そここのところがソロ演奏とは違うところなんだよ。一曲ずつ演奏する分には先の三人にかなうわけがないかもしれないけれども、合唱というファクターがあれば、君の上達具合によっては周囲をあっと言わせることも不可能ではない。あえて自分がでしゃばるのではなく、押さえ徹底して歌に沿わせる。言葉ではありふれた表現になるが、一言で片付けるならば気持ちよく寝られる曲だな。それを目指すのも悪くない」

褒められているのかけなされているのかよくわからない言い方を肥後先生はし続ける。

「ただどちらにしても練習が必要なのは確かだ。幸い、今回の合唱コンクール伴奏者はみな自宅にピアノがある家庭のお子さんばかりだし、立村くんが望むならここのピアノを音楽室が開いている時であればいつでも利用してもいい。いやむしろ、空き時間を見計らってもぐりこんできて

ほしい。一応、吹奏楽の練習もここでやることもあるが、今の時期は場所の都合もあって青瀉記念館で行っているからその辺は心配なくていい。あとはできればなんだが、一ヶ月でもいいから誰か先生についてもらうことを考えてほしい。君はお母さんに教えてもらったということなんだが、指遣いについてはあまり細かい指導を受けていなかったみたいだね。僕も誰か手伝ってくれそうな卒業生を数人当たって見るよ」

「あ、あの、ありがとうございます」

こんなにしてもらっていいのだろうか。中学時代、お世辞にも音楽の成績はあまりよいとはいえなかった。実技はともかく、筆記試験の和音やコードに関してついて、数学の公式みたいな覚え方が出来なかったせいだ。直感で耳で聞き取り書いたり弾いたりの方はまだまだだが、諸事情で他人に公開したことはない。それに今まで目立たない生徒だったはずなのに、なぜここまで。

お礼を言うため口をもごもごさせている上総をよそに、今度は難波へ話しかけている肥後先生、話を切り替え、

「そして、難波くん。君にもこれから本気で一ヶ月、特訓してもらわねばならないね。理由はよく分かっているはずだよ」

「は、はあ」

さっきまで上総を面白おかしく観察していたらしい難波だが、いきなりあわを食い出した。今度は上総がじっくり見据えてやる番だ。手付かずのアイス珈琲を飲んだ。しっかり冷えていて、濃くて苦味がじわりと広がる。もちろんガムシロップは入れない。

「分かっているかね、難波くん」

肥後先生は頷きながら難波へ、かみ締めるように語りかけた。

「歌が苦手だから指揮者に逃げるという選択肢は決して甘いものではないよ。そのこともよくわかっているね」

——中学二年時の合唱コンクールの皮肉かよ。けど、C組の指揮者は確か羽飛じゃなかったか？ どうだったろう、難波なのか？

やはりC組もただいま荒れ模様のようなことだけはよく理解した。

その三 伴奏者面接（7）

しばらく説教されていた難波を待ち、音楽室を出たのは四時半過ぎだった。

「明日から昼休みと放課後を使って練習にいらっしゃい」

ありがたい肥後先生のお言葉で気が少し楽になる。一方で難波の苦虫噛み潰したような表情が妙に面白い。

「何があったんだよ」

「まあ見ての通りだ。まさか見られたとはな。玄関を出よう」

靴を履き替え、すれ違う部活動中の友だちと挨拶をし、難波とふたり肩を並べて歩く。まだまだ昼間だが影が濃くなってきたような気がする。

「C組には寄らないのか？」

「もう話も片がついただろう。あとで羽飛に確認すればいいことだ」

「お前が指揮者って、そんなに揉めるようなことなのか？」

伴奏者で揉めるA組、指揮者で揉めるC組、それぞれとは思いますが詳しい事情が側で聞いていても全くわからない。上総なりに質問したいことではある。

「壁に耳あり障子に目あり、これが俺の反省点すべてにつきる」

難波は歩きつつ、俯いたまま語り出した。

「伴奏者は問題ない。しかし自由曲で揉めているというところまではお前も知ってるだろう」

上総が頷くと、難波は拳を片方の手のひらで握り締めるようなしぐさをした。

「お前は知らんだろうが、うちのクラスは夏休み終わりの三日前あたりから有志が集まって練習を始めていたんだ。羽飛、天羽、更科、その他女子も交えるとかかなりの大人数でなんだが」

——ずいぶん早いな。やはりうちのクラス、遅いのかな。

別の心配が心をよぎるが、とりあえずは聞き役に徹する。

「課題曲をみな気合入れて歌ってみたが、どうも物足りないというのが正直なところだった。女子たちは結構音楽好きな奴が多いしその点、それなりに意見の食い違いがあったと、そういうわけだ」

「みな熱心だな。俺たちが中学三年の時、そこまでしたか？」

「しなかったんだが、盲点が見つかったんだ」

ここで難波は頭の後ろで両手を組み空を見上げた。

「俺はあの時、指揮者だった」

「男子評議が自動的にそうなったからな」

「そういう意味じゃない。指揮者だということはどういう意味かわかるか？」

「指揮者は指揮しないと」

「そういうくだらないボケかますな。天羽にどつかれるぞ。指揮者であるということはすなわち、観客に背を向けてひたすらタクトを振ることに専念していればいい。合唱の間もすることはひとつ、それだけだ」

「ああ、わかった」

思い当たる節がある。よくよくわかる。手を打った。

「歌わなくてすむ！」

「ご名答」

「でもそれとどう関係あるんだ？」

褒められても今ひとつつながりが見えず上総が促すと、難波は次に大きなため息を吐いた。

「すなわち、俺の歌声は今まで誰の耳にも届いていなかったということになる」

「それはそうだけど」

「歌えなかったということになる。すなわち、俺が筋金入りの音痴ということが判明したという結論に達したというわけだ」

——え？ 難波ってそんなに歌下手だったっけか。

青大附中の評議委員会時代もよくカラオケボックスには連れ立ってでかけたが、そういえば歌うことなどあまりなかった。大抵秘密会議ばかりやっていたし上総は全力でマイクを拒否していたし歌っていたのは天羽と本条先輩ばかりということであまり気にはしていなかった。音楽の授業でもそれなりに全員で合唱することはあるけれど、そんなに音程が外れている奴が混じっていると聞いたことはない。

「そう驚くな。俺もその時までは自覚がなかった。女子連中にぎゃあぎゃあ指摘されちまったのが運の尽きだったというそれだけだ。たぶん後期は音楽委員から逃れられるだろう」

そういう問題ではないような気もするが、黙って話を聞くことにする。

「野郎連中としてはそんなことどうだっていいだろうという意見がほぼ百パーセントだったのだが女子はやたらと合唱にこだわりを持つ奴が多く、それなら俺が指揮者に回り代わりに羽飛がパートリーダーも含めてまとめ役をやったらどうかという話にまとまった。誰も反対しなかったし俺としても大満足だった。その話がまとまったのが放課後、ついさっきだ。お前を迎えに行く前にそれだけ片をつけた。問題なく承認された。だが」

「何か問題、あったのか？」

音程が取りづらい難波を指揮者に回したらまずいのだろうか。

「間が悪かった。最終の話し合いをたまたま中庭でしていたんだが、その時に肥後先生が通りがかったような気がした。たぶんその内容を聞かれていたんだろう」

「そんなにまずい内容、話していたのか？」

興味深々で尋ねる。あまり肥後先生が神経をとがらせそうな話題はないような気がするが。難波はちらりと上総を見やり、人差し指でちょいちょいとタクトを振るまねをしてみせた。

「『どうせ中二の合唱コンクールと同じ乗りでいかにもがんばってます風に振っとけばいいよな。そんな誰も見ておりゃーせんよ』とかそんな話を天羽としていたんだ。たいしたことはない。お前もわかるだろ。そんなにハーモニーを作るとかなんとかそういうこと考えてなかつただろ」

「まあ確かに」

中学時代上総も指揮者を確かに担当したが、それなりに教えてもらって責任の重さはそれなり

に認識したつもりではいる。練習もした。ただそれほど神経はとがらせなかったような気がする。

「さっきの説教の内容、わかるだろう。つまり肥後先生は俺の安易な気持ちで指揮者を引き受けたことに関して、静かに怒りということなんだ。さすがにそこまでは俺も想像していなかった。たぶん自由曲が決まっていないことでねちねち言われるんだろうと思っていたんだが、まさか、俺を真剣に指揮者として仕込もうとしているとはな。しゃれにならない話だ、まったく」

「大変だな」

これ以上の言葉が見当たらない。難波には一ヶ月間、目を付けられた指揮者の定めとしてスパルタ指導を受けてがんばってもらうしかない。そう考えると、

「そういえばお前のクラスは指揮者は誰だ」

「ちょうどお前が来る寸前に、藤沖から関崎に代わった」

「あいつにか」

「藤沖の案だけどさ。最終決定までは確認していないけど、明日になったらわかるだろうし」

難波が二の腕をかきむしりながら唇をかみ締めた。上総をじっと見た。

「そういうことか。わかった。よくわかった」

めがねの奥の瞳が、どことなくぎらついてきたように見える。

「悪いが、合唱コンクール、全校優勝は-Cがいただく」

「お前本気でやるつもりなのか？」

関崎の名前を口にした段階で嫌な予感はしていたのだが、少し前までの指揮者特訓でため息をついていた難波とは違う、炎のようなものが立ちのぼっている」ような気がする。陽炎のよう、かもしれない。影もいつのまにか長く濃い。

「外部野郎にあっさり指揮されるA組に負けるわけにはいかないからな」

「あのさ、俺が伴奏弾くんだけどそれは違うのか？」

「当たり前だ」

それ以上難波は口を利かなかった。自転車置き場で別れるまでの間、ひたすら難波はリズムを「いち、に、っさん、と」とつぶやきながら指先で空に三角を描き続けていた。

その三 伴奏者面接 (8)

家に戻ってから夕食もそこそこに部屋へもどり、譜面に見入っていた。

——「恋はみずいろ」はなんとかなりそうだけど、問題は「モルダウの流れ」だな。

肥後先生がおっしゃったように「できるだけやさしい」ものであることはだいたい見当がつく。音楽室で他の女子が弾いた「モルダウの流れ」とは全く異なる前奏だったしそもそも短めに構成されている。

上総は何度か指を動かしてみた。ちょうど一ヶ月前に練習した「エリーゼのために」ともう一曲ブルグミュラー作名前不明の短い曲が指先に残っているのがわかる。

——「エリーゼ」はともかくもう一曲は一週間かそこらで仕上げたし大丈夫だと思うんだけどな。

とにかく右手はメロディと和音を覚えこませよう。できれば誰かにこの譜面をさらってもらい、テープに吹き込んでもらってそれを頭に叩き込めればいいのだが。いい方法ないだろうか。いつも母がテープに自分で弾いた曲を録音し上総はそれをひたすら聞き込んであわせる形式で習っていた。メロディさえ自分の中に入ればあとは意外とスムーズに弾き方を覚えられた。英語や他国語を覚えるのとほぼ同様のやり方だった。

——古川さんに頼んで、宇津木野さんか疋田さんに弾いてもらったものもらえないかな。明日聞いてみるか。ああ、それと。

学校の帰り道難波と話していた、指揮者のこと。たぶんあっさり承認されたであろう関崎の件だが、前もって一声かけておいたほうがよさそうだ。伴奏者にとって指揮者はやはり必要不可欠な存在なのだから。

電話をかけるため、居間に戻った。父がのんびりと冷たい缶ビールを飲んで和んでいる。置物として割り切り、背を向けて受話器を取った。

——立村か、よかった、俺のほうからも連絡するつもりだったんだ。

相変わらず深い響きを持つ関崎の声、貴重なバスパートがひとり欠けてしまう分どう対応するつもりなのか、こずえに聞いておいたほうがよさそうだ。上総はまず、確認を取ることにした。

「あのさ、俺が教室出て行ってからなんだけど、結局関崎が指揮者にきまったんだろ？」

——あれだけ熱く藤崎に勧められたら男子たるもの受けざるを得ないだろう。

少し戸惑いの残る言い方に聞こえた。

「そうか、ところで関崎は今まで指揮者やったことあるのか？」

——ない。全く経験がない。だから俺がしゃしゃり出ていいのかわからないが、どうなんだ、青大附属ではそういうのもありなのか？

「中学二年の時に合唱コンクールやったけど、あの時は俺でも出来たから多分大丈夫だよ」

脳裏に難波の苦虫噛み潰した顔がよぎるがあえて無視した。ついでに関崎へ、合唱コンクールに関する豆知識も伝えておくことにした。

「うちの学校、中学二年しか合唱コンクールに参加できない決まりになっていたんだ。だから俺

たちも一回しか経験してない。ただ高校については今のところ全学年が参加する形式で、順位は生徒投票とその他先生たちとの協議で決まると聞いている」

——やはり大掛かりなイベントなんだな。手抜きはできないというわけだ。

「どうだろう。それぞれのクラスによるんじゃないかな。ただうちのクラスはもともとクラス人数が少ないからさ。一人欠けるだけでもかなりのデメリットにはなるような気がするよ。関崎も本当は歌いたかったと思うけど」

——それはある。

カラオケでマイクを離さないこいつの姿を二回見たら、誰もが頷くに決まっている。

——立村は、指揮者やったことあると聞いたが。

「さっき言った通りあるよ。当時の男子評議は全員担当することに決まったし。言われた通りのこととしてただけだよ、たぶん」

自分でも二枚舌と自覚せざるを得ない。難波もそうだが上総がもし指揮者を担当するはめとなっていたら肥後先生にさぞ厳しい指導を受けることになるだろう。関崎も恐らくその洗礼を受けるはずだ。そんな気軽なことを言うよりも、C組男子連中が本気になって関崎を叩きのめそうとしているという事実を伝えるべきなんじゃないかとさえ思う。

——そうか、俺でもなんとかなるか。

「なるなる、関崎なら大丈夫だよ」

良心が痛む。あとは関崎の音楽センスにかけるしかない。恨むなら藤沖を恨め。

——ありがとう、立村はやはり頼りになるな。

関崎は話を変えてきた。

——今朝、詳しい話を聞けなかったんだが、古川に説得されて伴奏を受けることにしたのか？

「違うよ。誰もいないという話だったからそれならっていう、単純な理由だけど。俺程度でもなんとかなりそうだっていうのもあったし」

譜面読みの段階で若干の不安があることはあえて飲み込む。

——古川の家で稽古するのか。

「たぶんそうなる。それと、音楽室でも空いている時間使って練習してもいいという話になっているし。あと古川さんからキーボード貸してもらえるからうちでも練習できるし」

——本当に大丈夫なのか？

やはり誰もが考える疑問符。もっともだが平静を装い答える。

「大丈夫だよ。その読みなければ俺も引き受けなかったしさ」

——俺にピアノの素養があればぜひお前を助けたいんだが、残念ながら楽器の演奏能力はない。せいぜいリコーダーかハーモニカくらいだ。悪いな。

「悪くないよ。ただ、指揮者の関崎の負担になりそうでそれが申し訳ない。とにかく急いでメロディだけでも弾けるようにして、少しでも合わせられるようにするからさ」

——俺もなんとかして指揮者としての責任を果たすべくベストを尽くす。立村、よろしく頼む。ああ、そうだとだけ言っておかねばならないことがある。

「何？」

関崎はいったん口ごもるようなそぶりを見せたが、

——お前とこうやって協力しあえるようになるのが、俺は本当にうれしい。ありがとう。

「いや、そんなたいしたことしてないけど」

挨拶の後、電話を置いた。やはりあいつは関崎乙彦だった。

少し暑苦しいがやはりいい奴だ。

C組元評議三羽烏が本気でぶつかってきても、そう簡単にひっくり返せる奴じゃない。

「上総、お前伴奏やるのか？」

聞こえていたのは計算済み。上総は父に振り返りあっさり認めた。どうせばれるのなら早い方がいい。

「お察しの通り」

「ピアノだろう？ 練習できるのか？」

「今聞いてたらわかるだろ、全部説明したって」

「友だちの家に通うとか、キーボード借りるとか、音楽室使うとか言ってたな」

「それ以外どうやって」

父は枝豆をつまみつつ首をひねった。風呂からあがって間もないのだろう。シャンプーの匂いが強い。

「責任重大だろう。できるのか？」

「たぶん」

「母さんに連絡してもらった方がいいんじゃないのか」

これだけは避けたいパターンだった。すぐに首を振る。予定に計算済み。

「いらない。母さん今の時期ものすごく忙しいし、それに練習するとなると母さんの実家に行かなくちゃいけないし、その時間ももったいないよ」

「だからといって何もしないわけにはいかないだろう」

「だからそれも全部計算した上で引き受けたんだから、心配しなくていいってさ。譜面もらったけどそれほど難しくないし」

「無責任なこと言うな。合唱にあわせる伴奏というのは本当に難しいんだぞ。ただピアノが弾ければいいというわけではないんだ。まあお前が引き受けてしまったんならしかたない。誰か見てもらえる先生を探しておかないとな。一ヶ月だけ面倒みてくれる先生がいればいいんだがなあ」

言いながら父は、書斎にいったん戻り手帳を持ち出してきた。まだ電話の前のソファーによっかかっている上総を「ほら、どきなさい」と押しやり、すばやく手帳のページを繰った。

「これから知り合いに連絡して、土日の空いている日だけでもお前の面倒見てもらえる人がいるかを探してみるからな。まあ早いうちにわかってよかった。上総もこの一ヶ月は友だちの家でほたほた遊んでいる暇ないんだからな」

「父さん、さっきの電話聞いてたらわかってると思うけど」

電話をかけている父に一言付け加えた。

「これから最低週三日か四日は、クラスのピアノ持っている友達の家で練習するから、遊びに行くことはやめない形になるんだけどさ。大丈夫だよ、男女混合で保護者同伴だから問題起こるわけないよ」

説明など聞いていない様子だったお。父はすぐにつながった相手へ、事情を逐一説明した後、「そういうわけで、悪いんですが誰か土日、うちの息子に合いそうなピアノ教室を一軒、紹介していただきたいのですが、なんとかなりますかねえ。息子についてはいつも説明している通りの、ああいう性質の子です」

熱心に頼み込んでいる。

上総としては「ああいう性質の子」という表現が非常に気になった。

「父さん、俺のこと今かけた人にどう説明しているの」

受話器を置いた父に尋ねると、一言、

「お前が自覚している通りだよ」

きわめてあいまいな答えしか返してくれなかった。

その四 練習開始（1）

予定がどんどんずれていく。

「悪いなあ、今日はちょっと無理だな」

まず、こずえ宅でのピアノレッスン予定だが、最初に羽飛が一抜けた。

「お前も難波から聞いただけ？　うちのクラスのはちゃめちゃ振り。結局自由曲なんになったと思う？　あれだよ、あれ」

次の日、羽飛に玄関で呼び止められ、さっそく謝られた。

「自由曲か？」

「『砂のマレイ』の映画挿入歌にどうしてもしたいっつう強引勢力に負けちゃったよ。俺がてっきり指揮者やるもんだと思ってたら難波とバトンタッチさせられるし、俺が男子のパートリーダーになっちゃったんで毎日放課後練習するはめになっちゃったし、それになあ」

とか言いながら、羽飛の顔はかなり緩んでいる。楽しい、のだろう。

「天羽・難波・更科、三羽烏が相変わらず燃えてて暑苦しいったらねえよ。もう、俺の身にもなれっつうの。もう昨日の夜も電話が天羽からかかってきてな、『絶対勝つぞ！』とか気合入れようとするんだぞあいつら。そういう奴だったか、中学時代」

上総が首をひねるのに満足したのか、羽飛は拳を軽く握り、振った。

「ま、こういう風な乗りも嫌いじゃねえけど、困ったよなあ、たぶん放課後俺、敵に塩送るようなことしてるとか言われちゃうから古川宅へのご訪問あまり付き合えねえかもしれねえなあ。まあ、誰か、美里あたりでもついてってくれるだろ。じゃあな」

事情が事情だけにしかたない。一年C組の「打倒！　外部生！」魂は想像以上にでかいようだった。

美里も昼休み、わざわざ謝りに現れた。

「こずえ、立村くん、ごめんね。私も合唱のことだけど、ちょっと毎回付き合うの無理っぽいんだ」

「これまたどうしてよ、やっぱり規律だと忙しいの？」

こずえがいぶかしげに尋ねるが、美里はふっとため息吐きながら続けた。

「うちのクラスの人たち、合唱大好きで毎日でも練習したいんだって！　C組と一緒によ。特に女子たちが美しいハーモニーを奏でたいそうで、ぜひ放課後、土日合わせて集まりましょうって盛り上がっているの。主に評議の人たちとね」

「ふうん、静内さん、合唱好きなのね」

「そうよ。何考えてるんだらう。しかもね、彼女が指揮やるのよ？　ふつう、男子だよ、指揮者って。それがいつのまにか彼女が指揮者なんだから。まあそうよね。伴奏者だって立村くんがなるくらいなんだから女子が指揮者になっても不思議なんてないんだけど。だから、クラス全員が練習しなくちゃいけない雰囲気になっちゃってね。私も、たぶん抜けられそうにないの」

「あーあ、つまんないの、美里がいないのは寂しいなあ。しくしく」

「ごめんね、でも、毎日じゃないと思うし、何回かは行けるよ。立村くんもごめんね。どうにかして誰か別の人、連れてこれるといいね」

「やはり女装するしかない状況かもな」

ぽつりとつぶやくと、こずえに思い切り頭を叩かれた。

「気色悪いこというんじゃないの！ けどさあ、そうなるとどうしよか。うちのクラスもこれから本格的に練習しないとまずいだろうし。あんたも、あれでしょ。肥後先生が音楽室のピアノ使っていて話になってるみたいだしさ。どちらにしても早いうちにキーボード持ってくるから、それでとことん訓練しなよ」

「ありがとう、たぶん大丈夫だと思う」

上総はふたりに、簡単な練習計画を伝えた。あつという間に決まったことがある。

「一ヶ月だけ練習を見てくれる教室を紹介してもらえそうなんだ。うちの親が頼んでくれて、俺もよくわからないんだけど、今度の土曜に挨拶に行く予定なんだ」

「よかったね！ あつという間に決まったね」

美里が手を叩く。

「合唱にあわせるにはもう少し時間もらいたいけれど、これから二週間くらい音楽室で集中して弾くつもりだからたぶんなんとかなりそうな気、するよ。譜面見てたぶんこれならって感じもあるし」

「うわー、すごいなあ立村、あんたそこまでずいぶんなこと言うじゃん」

美里が教室から出ていった後、こずえは上総に向かい時間割を指差した。

「それじゃ、しょうがないね。とりあえず平日は学校で練習ってことでよい？ 土日がそのピアノの先生とこなんだよね。うちもクラスで練習することになるだろうしさ。それに、あんた大学の授業と補習も抱えてるじゃん？ 計算してみるとそんなに練習する暇ないんじゃないの」

つつこまれて初めて気づくことばかり。その通りだ。意外と少ない。

思わぬ落とし穴だらけで、始まってからただ戸惑うばかりだった。

合唱のパート分けでまだ手間取っているようだが、さすがにそのあたりはこずえが手際よく進めている。上総から見ると藤沖の手抜きぶりが丸見えであきれてしまうほどなのだが、一学期の出来事を考えればそれも理由があるのだろう。その代わり、関崎がこずえにこき使われ右往左往しているのが笑えてしまう。

「とりあえずそんなわけだからさ、あんたも実力テスト終わるまでの間は待っててよね。それ終わってから、みんなで各パートの練習してもらうのにだいたい二週間くらい、伴奏はぎりぎりでも大丈夫だからね」

その温情をありがたくいただくことにし、上総は放課後を待って即座に音楽室へと急いだ。肥後先生も勧めてくれたことだし喜んで弾くことにする。

音楽室には誰もいなかった。実力テスト前の静けさというべきか。大抵試験一週間前は部活が停止になるものだが、勉強のためという理由付けさえあれば教室を貸してもらうのはそれほど問題がないらしい。一学期末のあの事件だって、視聴覚教室を生徒有志で大嘘ついて借りたという

展開なのだから。

上総はグランドピアノの反対側にちんまり置いてあるアップライトピアノに近づいた。最初からご立派なグランドピアノに触れる気などない。練習だったらアップライトで十分だ。さっそく近づいて蓋をあけてみる。だいぶ痛んではいるが手入れのきちんとなされた鍵盤がつやつや光っている。

小さな椅子に腰掛けて、指先を置いて見る。譜台にコピーの譜面を開いて置く。

「モルダウの流れ」の右手部分を、少しずつ指で弾いて見る。一音ずつ、たどたどしく、指がなんとなく覚えこむまで何度も繰り返す。譜面を見た時も思ったのだが和音が多いせいかな右手の旋律だけでもなんとなくうまく奏でられたような感じがしてくる。

次に左手だけで弾いて見る。これも何度も。右手の曲が聞こえないとどうしても無機質な音の並びにしか感じられず、上総にとっては左手部分を覚えるのがもっとも苦手な時間だった。それでもある程度繰り返せばなんとか形になる。なんとなく、他国語を覚える時のやり方に似ている。

——母さんに知られたら大変だよな。父さんも黙っててくれたらいいんだけどさ。

母のやり方はまず、上総に右手と左手の旋律を録音し、最低五十回は聞き続けるように厳命する。その後ピアノでそれぞれまねて弾かせた後、今度は両手合わさったものを録音して聞かせ、それをまねさせていく。いったいこれが正しいピアノの教え方なのかは見当つかないが、なんとか上総も「エリーゼのために」にたどり着くことができた。

しばらく指を慣らしていき、最初の四小節だけ両手で合わせて見る。

ゆっくり、できるだけゆっくり。頭の中にイメージした旋律がうまく重なり合っていく。

だが、いまひとつじっくりこない。スピードがなさ過ぎるせいだろうか。

扉がいったんかちりと音を立て、すぐに閉まった。

——先生かな？

上総は立ち上がり、礼の準備をした。しかし誰も入ってこなかった。代わりに音楽準備室からにこやかに、肥後先生が、

「立村くん、来てくれてるんだね。よかったよかった。せっかくだから珈琲でも飲んでいきなさい。あとで少し見てあげよう」

そう呼び込んでくれた。

その四 練習開始（２）

「ちょうどタイミングよかったね。テストの前三日間くらいはほとんど音楽室に誰も寄り付かない。こうやってゆっくり話せるのもこれからはそうそうなくなるだろうしね」

珈琲を勧められ、静かにいただく。肥後先生は机の上で楽譜をめくりながら、
「テストが終わればどのクラスも合唱コンクールの自主練に忙しくなるし、ピアノももしかしたら取り合いになるかもしれないね。僕も少しかたんに考えていたところがあって君には申し訳ないのだけど、すでに夏休みから合唱の練習に励んでいるクラスもいるようで、音楽室を貸してほしいと申し出が増えてきている」

上総の顔を見て、また穏やかに微笑む。

「ただ立村くんの場合は少し特別だし、できるだけ優先して練習してもらうよう場所は整えておくよ。多少他の生徒たちからは嫌味な視線を向けられるかもしれないがそのあたりは我慢してくれたまえ。それとだ。指揮者たち集めて講習もしなくてはならない。みな、これから一ヶ月は大変だよ」

ということは、難波も関崎もさぞびびりしごかれることになるだろう。

「高校の合唱コンクールは本格的なんですね」

控えめに感想を述べると、

「そうだね、確かにみな一生懸命だし毎年楽しみにしている人もたくさんいるようだね。特に団結力のあるクラスは大変だ。朝、夕それぞれ練習に余念なく、肝心要の勉強を全部居眠り時間に費やしてしまっているケースもあるみたいだと先生たちからは聞くよ」

そこまで人事のように肥後先生は語り、

「時間がもったいないから、まずは弾いてみようか」

まだほとんど手のついていないアイス珈琲を机に置いたまま立ち上がった。

肥後先生は上総の隣りに座り、何度か右手のメロディを繰り返させた後、左手のパートと一緒に引いて音を重ねてくれた。

「次は左手も同じ要領でやってみよう。それと、指使いはきちんとあわせるように。何度も言うようだけど、どうも君の指遣いが気になるんだ。人差し指と中指を入れ替える。このタイミングを覚えてもらわないとな」

なんとなく勘で弾いていたところもあるのだが、肥後先生にはどうもそれが気になってしかたなかったらしい。言われる通りにあわせるが、なかなか慣れない。

なんとか「恋はみずいろ」最後まで曲がりなりに最後まで行き、次の「モルダウの流れ」の譜面を開いたところで、思い切って聞いて見ることにした。

「先生、この曲のテープとかはありますか？」

「テープ？」

「いつもは最初テープで曲を何度も聞いて頭に覚えこませてから弾くようにしているんですが、それだと問題ある感じでしょうか」

一応お伺いを立てて見る。子どもの頃から同じパターンで習っていたこともあり、そのパターンを崩されるのがどうも落ち着かない。

「テープで覚えるというのは少し邪道なような気もするが、君の親御さんはそのように教えてくれていたのかな」

母のやり方を簡単に説明すると先生は首をひねりながらも、

「だが耳で覚えるのも一理あるな。そうだ、僕が弾いて録音しておこう。それを何度も聞いて覚えるなり、まだクラスみんなに合わせられないうちはそのテープで合唱の練習をしてもいい。君に関しては特別にそうすることにしよう」

——俺に対してはすべて特別なんだな。

ひいきされていると思われてもしょうがないのだが、自宅にピアノのない上総にとってはかなり切実な頼みでもある。一ヶ月でまがりなりにも形にするためには、なりふりかまっていられない。

「だが、今日すぐというわけにはいかないから、テストが終わってから渡すことにするよ。僕もさすがに腕が鈍ってきているからね。最近ピアノとはご無沙汰なんだ」

「モルダウの流れ」もそれなりに最後まで弾き方を教えてもらい、気がつけばもう五時近くだった。二時間近く個人レッスンを受けたというわけだった。いくらテスト前とはいえ許されるものなんだろうか。他の生徒からしたらずるいとか言われそうだ。

「先生、ありがとうございます、あの、それと」

余計なことかもしれないがやはり気にかかる、尋ねておく。

「他に、上手な人がたくさんいるのに、なんで僕にここまで教えていただけるのでしょうか」

「そうだね、上手な人は本当にたくさんいる学校だよ。青大附属はね」

にこやかに、それでも鋭いことをまるやかに肥後先生は語った。

「僕もそのために、十月の演奏会を企画したんだよ。君も知っているだろう？」

知らないわけがない。上総は頷いた。

「今まではピアノを得意とする生徒たちが伴奏を担当するのが常だったし、今年もほとんどのクラスがそうだよ。僕の知る限り、ピアノを持っていない生徒が伴奏を行うのは一年A組くらいだな」

前にもそんなことを繰り返し言われた。俯く。

「君も知っているだろうが、ピアノに自分の人生をかけて練習している人は本当にたくさんいるんだ。そこにはさまざまな事情がある。だが、ピアノを弾くことイコールが必ずしも伴奏を弾きたくてならない、ということではない。たくさんの課題をそれぞれの先生たちから与えられて毎日練習し将来に向かって必死に努力をしている」

よくわからないが、音大目指して勉強している生徒もたくさんいるらしいとは聞いている。幼稚園や小学校の教諭を目指すために練習している人もいるらしいとはこずえの話。

「合唱コンクールの伴奏はもちろん誇り高いステータスという人もいるだろうし、僕は決してそれを否定しない。ただね、自分の生活をピアノに注いでいる人たちの中には、それが少しわずら

わしく感じる人も少なくはない。かといって代わりに弾ける生徒がいないとどうしようもない、そういうさまざまな事情から仕方なく引き受ける。そういう生徒たちもたくさんいる」

——そりゃそうだろうな。

上総は頷いた。確か肥後先生は、合唱コンクールに対して懐疑的だったとか聞いたことがある。

「僕は正直、合唱コンクール自体をなくしてその代わり別の形で何か音楽に関係した行事を何かできないものかと思うことがよくあるんだ。まだ高校一年くらいだと男子は特に声変わりもまだ落ち着いてない生徒が多くて歌うのに苦労しているのをよく見かける。そういうものよりもむしろ、身近に音楽を楽しめるようなイベントを考えたほうがいいんじゃないのかなと、そう思う。でも、今回立村くんのようにピアノを日頃触れていないにも関わらず伴奏に挑戦しようとする生徒が出てきた。これは面白いことなんだよ」

「面白い、ですか？」

頷き、上総に楽譜をまとめて手渡した。

「立村くんの今回のお役目は、ただ伴奏を行うだけじゃない。たくさんの人たちに、ピアノ専門の生徒さんたちではなくても楽しんで伴奏にチャレンジすることができるということを知らしめる、スポークスマンのような立場なんだよ。君にいきなり難しいクラシックの楽曲を弾くことができるとは思っていないし求めてもいない。君のクラスの素晴らしいピアノのソリストたちを超えてほしいとも思っていない。ただピアノを弾くのがなんとなく好きで、それでもチャレンジしてみたいから手を挙げてみた、そういう気軽な気持ちでもしっかり伴奏をこなせるんだということをアピールして、次回からは今まで控えめにしていた生徒たちも立候補してもらえようようにしたいんだ。音楽はね、専門家だけのものじゃないんだよ」

——どういうことなんだろう？ 俺ってそんな重たい任務あてがわれてるのか？

半分以上意味不明だった。芸術家の考えることは正直わからない。画家もそうだが、音楽関係者も。

「ベストを尽くします」

お礼を伝えて頭を下げるに留めた。とりあえず肥後先生も上総を気に入ってくれたことだけはなんとなくわかった。それだけは感謝したかった。

その五 野々村先生との補習時間（1）

実力テストは本当に実力の結果で終わった。夏休み中それなりに宿題と格闘したとはいえ、上総の場合数学と理科については羽飛からコピーをもらっただけで終わったようなもの。いわゆる勉強とは程遠いところで片付けている。五教科丸一日かけてテストを受けたわけだが、もう今更何を考えるつもりもない。これが実力だ。

本当は今日、ゆっくりと音楽室でピアノの練習に励みたいところなのだがいかんせん数学の落ちこぼれゆえに補習をさぼるわけにはいかない。テスト直後といういいのか悪いのか分からないタイミングにいらいらしてくるところもあるがしかたない。さらに今日は野々村先生も様子を見に来てくれると約束してくれていたし、なかなか簡単にはいきそうもない。幸い、肥後先生は五時半まで音楽室を空けてくれていたと言ってくれたので、補習が片付き次第すぐに直行するつもりではいる。

補習教室としてあてがわれている一年B組の教室に急いだ。数学中心の補習授業は毎回教室が指定されるのが慣わしだった。珍しく今日は美里のクラスときた。あまり入ったことはない。

「立村か、その辺に座れ。このプリント解けるか」

数学担当の新倉先生に会釈し、プリントを一枚もらう。すでに教室には同じく補習を受ける予定の生徒たちが五名ほど席についていた。固まらずばらばらに座っているのは夏休み中の個人面談にも似ている。あまり交流する機会もない。手伝いに来てくれている大学生たちが分からないことを聞くためにうろうろしている。上総の顔を見て顔をしかめる人もいた。男子ばかりだった。

「君たちはこのグループ中心に見てやってくれないか。あと、立村だけはあとで野々村先生がいらっしゃるのでその時に相談してくれ」

——やはり来るんだらうな。

楚々とした風情の野々村先生が数学を得意とする国語教師という、想像を超えた人物ということに上総はまだ慣れていない。いや、野々村先生そのものと話したのは実質個人面談のみ、あとは立ち話にとどまる。狩野先生の後輩と聞いているがどのように指導してくれるのかがまだ把握しきれていない。

今までは他の生徒たちを覗き込むようにして教室内をうろついている学生たちが、上総のことも含めて面倒をみてくれていた。教師を目指す学生たち中心にボランティアで高校の生徒たちの勉強を手伝うというのが本来のところだ。しかし、上総の数学能力が彼ら学生たちの予想を大幅に下回る出来だったこともあって、一学期はいろいろきつい言葉をぶつけてきたものだった。

——こんなの小学生でも説けるだろとか、数学じゃなくて算数だろとか。

——中学によく入れたなその頭と数学センスでとか。

悪意はないのかもしれないが、心がどどんきしんでいくような音が聞こえてくるようだ。自分から質問することも補習後半は少なくなった。もっとも数学担任の新倉先生も、上総の出来の悪さについては愕然としたようだった。今では数学の授業中、上総には一切当てず、飛ばして進

めている。それはそれで本当は助かる。

与えられたプリントは、たぶん中学レベルのものなんだろうとは思いますが未知の数列ばかりだった。文章問題が全くないので読み取る部分もほとんどない。でも解くしかない。

「失礼します、立村くんは来てますか」

しばらくX、Y、等号不等号それぞれと格闘していると、扉が開き同時に女性の声が響いた。人が少ないのでよく聞こえる。新倉先生が教卓から立ち上がり、

「来てますよ、それでは野々村先生、あとはよろしくお願いします」

押し付けるようにして、すぐに他の生徒たちひとりひとりに話しかけ始めた。上総に声は届かない場所だった。はじかれたような位置に座ったのがまずかったのかもしれない。廊下側の一番前の席だった。

「遅くなりごめんなさい。今日のテストはどうでした？」

少し息を切らしているようだった。白の丸襟ブラウスに紺のタイトスカート姿で野々村先生はすぐ上総の隣りに腰掛けた。

「いつもの状態です」

言葉少なく答えるしかない。

「大丈夫よ。夏休みの宿題は全部提出したのでしょうか？」

——全部、写しだなんて言えないよな。

言葉を飲み込んだまま、野々村先生に改めて頭を下げた。

「今のプリントはどう？」

黙って手渡す。十問中今だ二問しか進んでいない。野々村先生はさっと目を通したがすぐに、「後回しにしましょう。先週も話しましたが立村くん、提出された自由研究のことで少しお話ししたいのだけど、いい？」

数学の頭痛い説明を聞かされるよりはよい。上総はシャープをおいて手を膝に乗せ、野々村先生に向かい合った。

「よろしくお願いします、でもあまりいい出来ではないかもしれません」

「講評はまた別の先生方からいただけるはずですよ。でも今話したいのはそういう堅苦しい話ではないの。せっかく時間があるのだから、あの文章をまとめて書くきっかけなど少し聞いてみたいと私個人が興味を持ったことなの」

別に隠すようなことではないのだが、研究仲間にあの清坂美里が混じっている以上穿った見方をされてしまいそうなのが怖い。しかも美里からは、合唱コンクールでまた女子たちを巡るバトルが勃発しそうな情報ももらっている。うっかり口を滑らしたら、それこそ「敵に塩を送る」展開にならないとも限らない。

できるだけ、自分の作文のみに絞る。気をつけねば。

とはいえ事実関係だけは話さねばならなかった。新倉先生が学生たちと談笑しながら他の生徒たちを指導している声をよそに、上総は一通り自由研究のテーマが決まるまでの経緯を説明した

。C組の羽飛がああ見えて美術好きだとか、三人組は中学時代からのつながりだとか、半分以上はふたりの力作で上総が担当したのは妄想の産物だとか。

「立村くんは面白いこというわね。妄想、というのもまんざら外れているわけではないのかもしれないけれど」

野々村先生が声を押さえて笑い、ふとまじめな表情を浮かべた。

「私、立村くんの自由研究を読ませていただいた時、明らかに小説を意識して書いたのかなとおもったのだけど、そうかしら」

「いえ、小説とは思ってません。ただ、仲間のふたりはそう感じたようです」

美里に「小説命」とか言われてしまったのだから、野々村先生を感じ方も間違っているわけではない。たぶんそうなんだろう。

「これはあとで麻生先生から講評の際に説明されるでしょうが立村くんはこれからもっと論理的な文章を意識するよう指導される可能性が高いと思われます。物語としては本当に引き込まれたのですが、それが研究につながるのかどうかということになるとクエスチョンマークがつくところも指摘されてしまうのはしょうがないことでしょう」

——やっぱりな。

おくびにも見せずじっと拝聴する。野々村先生はしかし首をかすかに振った。

「それとは別に私も読んでみて気になったのは、立村くんが本当に書きたいことを無理に押さえ込んで無理やり分析しようとしてみて、バランスが崩れているのではといった部分です。うまい表現ではないんですけどね。十枚の原稿用紙に無理やり押し込めているだけのようで、息苦しさを感ずります」

「息苦しさ、ですか」

「そうです、本当はこういう表現だけじゃない、もっと自由に書きたいこと、語りたいたことがあるはずなのに自由研究という枠の中に押し込めた内容で終わらせようとしているような、そんな感じがします。いわば、あの十枚の原稿用紙は予告編であり、本当は紙の裏側に深いものがあるのでは、そんな気持ちはどうしても、ぬぐえずにいました。言いたいこと、わかってもらえる？」

「難しすぎて、少し厳しいです」

小さい声で答えたけれど、なんとなく野々村先生の訴えたいことは理解できるような気もした。作文にも小説にもなりそこねた「妄想」。羽飛の作品そのものに対するとしての熱いパッション、美里の数値に基づいた細かな分析。それらとくらべて自分の作文は当の画家に思いいれが深くないせいもあってかきわめて一般的な話に徹しすぎていた。

「書くのだったら、まったくのノンフィクションにしてしまうのも手だったのでは？ たぶん立村くんはグループでの自由研究という枠を意識しすぎていたために窮屈な文章を書き止めたのではという気がしてなりません。せっかく面白いテーマを見つけたのに、もったいなさを感じました。その辺りが今回、評価がわかれてしまった理由かもしれません」

「あの、先生、いいですか」

恐る恐る上総は尋ねてみた。

「今回提出した自由研究の評価がそんなに低かったのでしょうか？ 僕の作文のせいで」

上総ひとりが罵倒されるのならまだしも、仲間ふたりも道連れにしたらしゃれにならない。野々村先生はしばらく言葉を搜していたようだが、静かに頷き、

「研究ではなく創作に切り替わってしまったために、というのはあります。初めから創作作品として徹底的に掘り下げるというやり方のほうが、本当はよかったのかもしれませんがね。一読者としての私は、十分楽しみましたけどね」

——どうしよう、羽飛、清坂氏、悪い、俺が悪かった！

自由研究で高い評価を得られた生徒には当然それなりの扱いを受ける。美里もそのあたりの野心が見え隠れしていた。担任野々村先生とのバトルも関係しているのかもしれないが、羽飛同様かなり力を入れていた。しかし上総がわけの分からない妄想作文をぶちこんだがために、低い評価を受けてしまったとなってはこの責任、どうやって取ればいいのか。

その五 野々村先生との補習時間（2）

自由研究の話を切り上げた後、野々村先生は上総の手こずっていた二問目の問題をさらさら解いて説明してくれた。三問目、四問目も同様だった。しかしいかんせんその説明自体が日本語として入ってこない。決して難しいことを言っているわけではないのだろうが、頭の周りに硬い城壁が張り巡らされているようでいくら叩いても響いてこない。

「立村くん、この問題だと難しいかしら」

手ごたえのなさを感じられたのか、野々村先生は不安そうに上総を覗き込んだ。

「すみません」

「謝らなくてもいいの。でもそうね、この問題は立村くんには不向きのような気がします」

じっとプリントを見下ろして、

「今回初めて補習の内容を見させてもらったけれども、やはりやり方を変更する必要があります。来週までには新倉先生とも相談して別の方法を考えるようにしましょうか。それともうひとつ、気になることがあるのだけど」

折り目正しく手を膝に置き、野々村先生は尋ねた。

「この前、合唱コンクールのことで麻生先生と話しているところを偶然耳にしてしまったのですが、立村くんが伴奏を担当するのは決定したの？」

やはり聞かれていたのだろう。わかっているが自分から説明するのは気恥ずかしい。

「はい、今日もこれから音楽室でピアノを弾かせてもらう予定です」

「肥後先生が見てくださってるのね」

「昨日は二時間、練習を見ていただきました」

「テスト前なのに？」

まじめな顔で問われるとまた謝らなくてはいけないような気持ちになる。

「合唱コンクールはどのクラスも真剣に取りくむ行事だし、一生懸命なのはよいことですが、ただお家にピアノがないといろいろ不便でないかしら」

みな口をそろえて心配してくれるがもう腹をくくっている上総に怖いものはない。

「友だちがキーボードを貸してくれる予定です。それで家では練習するつもりです」

「でもキーボードだと鍵盤の感覚が全然違うでしょうし」

何で誰も彼もが上総に伴奏への不安を植え付けようとするのだろう。なんだか正直いらいらしてるところもある。一番楽天的なのは確かに当の本人である上総なのだが、ある程度ピアノの稽古も途切れ途切れながら積んでいるし、まあなんとか「エリーゼのために」くらいはとちらずに弾けたのだからと安易に発想しているところもなくはない。

「私、少し不思議に思ったのですけれど、なぜ立村くんは今までやろうとしなかった伴奏に興味を持ったのかしら？ 中学の合唱コンクールでは伴奏ではなく」

「評議委員だったので指揮者でした」

「でも今回、A組には他に弾ける人いなかったの？」

——だからいなかったからこうやって立候補したいんだけどな。

同じことを繰り返すのは正直面倒だが、野々村先生がここまでの経緯を知っているわけがないので仕方なく説明する。そう、誰も代わりの伴奏者がいなかった。これにつきる。

「十月のピアノ発表会が関係しているということなのね。今年初めての企画だからみな、一生懸命に練習しているしこれ以上負担できないところがあるのかしら」

「僕も、直接他の人たちに聞いたわけではないのではっきりしたことは言えませんが、みなピアノが本当に上手な人たちばかりですし集中したいのかもしれない。難しい曲を弾くためにはそれなりの準備が必要だと思います」

上総はここまで言い切り、

「僕も、歌うよりは弾くほうが正直、気が楽です」

今まで口にしたことのなかった本音を、ちょこっとだけ出してみた。

野々村先生は腕時計を脈の部分で確認し、ノートをまとめて立ち上がった。

「少し早いのですけれど、今日の補習はここまでにしましょう」

「いいんですか？」

まだ別グループの補習チームは和気藹々と二次方程式について語り合っている。野々村先生が立ち上がったのをいぶかしげにみな見つめている。ついでに上総が座っているのもじろりとらんでいる。

「野々村先生、もう終わりですか」

新倉先生が声をかけてきた。

「はい、立村くんの件についてはあとでまた連絡しますので今日はここまでにいたします。少し気になることがあるので」

きっちり一礼をした後、

「音楽室に立村くんを連れていってきます。肥後先生にもお伝えしたいことがありますから、それでは失礼します」

気になることを一言付け加えると、しずしずと扉を押した。上総に振り返り、促すように頷く。上総もしかたなく、新倉先生と他の学生たちに頭を下げると野々村先生に従った。

——肥後先生にお伝えてなんだろう。また俺が伴奏やるの無理だとか言うつもりかな。

どうも野々村先生の言動をまだ捕らえかねている。本当は上総が落ちこぼれてしまっている補習の状況を確認し、場合によっては手伝ってくれるつもりだったのかもしれない。少なくとも上総はそのつもりで受ける覚悟だった。しかしふたを開けて見ると実際数学の面倒よりも自由研究や合唱コンクールのことばかり。うまく言えないのだがいわゆる個人担任に近いようなつながり方をしようとする。青大附属の先生たちが距離を積極的に縮めるタイプなのはいろいろな場面で知っているつもりだが、それでもやはり意外である。

——どっちにせよ、俺が明日以降やらなくちゃいけないのは。

ため息と共に覚悟をする。

——自由研究で一泡吹かせてやると盛り上がっていた清坂氏と羽飛のふたりに、土下座することだよな。俺にひっぱられて評価下がったなんて言ったらたぶんあのふたりのことだから責めた

りはしないかもしれないけど、でもきっと、いや絶対、悔しいよ。清坂氏なら泣くかもしれないな。

すれ違う生徒たちの「さようなら！」の挨拶に笑顔で会釈しながら、野々村先生は上総の隣りで静かに微笑んだ。一重瞼の落ち着いた表情が隣にある。

「私も、音楽は結構好き。ピアノではなくエレクトーンを小学校の頃習っていて、中学受験の準備と同時にやめてしまったけれど、たまに弾いたりしますよ。友だちの結婚式とかに」

人前でさらせるくらいなら相当弾ける、という認識でいいのだろうか。

「だから演奏を聴かせてもらうのは本当に大好き。この機会ですし、肥後先生にお願いしてそのレッスンを見学させてもらえないかしら」

——いや、こちらに断る権利なんてないんだけどさ。

昨日の肥後先生直々のレッスンはテスト前でかつ生徒たちがほとんどおらず、吹奏楽部の練習も……もちろん肥後先生が顧問に決まっている……しなくてもいい時期だからだろう。ああいうわかりやすいレッスンならもっと受けたいし、もしピアノ教室だったら習いに行きたいとも思う。だが人に、野々村先生のまん前で「指遣いが違うのでもう一度やり直し、ほら、僕のやり方をよく見て覚えるんだ」などと言われているのを見られるのはかなり、いやめちゃくちゃ恥ずかしい。数学の問題ならまだ、最初から上総の能力外だと割り切っているのもその気持ちも半減しているが、ピアノについてはまだプライドがちょこっとだけ残っている。」

「でも、本当にまだ、全然弾けてないのでできればもう少ししてから」

「いいの、今だから見ておかないとわからないものもあります」

野々村先生は意見を引っ込めようとせず、とうとう音楽室にたどり着いた。扉の中から合唱らしき歌声が聞こえる。どこかのクラスが練習をもう始めたのだろうか。

「失礼します」

野々村先生が扉を開き、その後ろから覗き込み、その集団が見慣れた奴らということに次の瞬間気づいた。女子たちのソプラノパートだけだったから気づかなかった。「恋はみずいろ」を、一年C組の生徒全員が集まって熱心にパート別練習に勤しんでいた。背を向けている男子のひとりが空に三角形を熱心に描いている。羽飛らしき男子が数人歌詞を読んで歌合せをしている。まだ上総が来たことに気づいていない。

「やありっちゃん」

のんきに声をかけてきた南雲に目で合図を送り、上総はまっすぐアップライトピアノの場所へと向かった。

その五 野々村先生との補習時間 (3)

間が悪いと言うしかない。先日難波と帰り道話したことをもう少し頭の隅っこにおいておくべきだった。青大附属のシャーロック・ホームズの鋭い頭脳……かどうかは別としても……が目的を定めた今、即座に行動を開始するというのはすでに予想通りだったはずだ。羽飛にも早く連絡を入れておくべきだった。そうすればC組連中の動きも掴んで今日この場で野々村先生の家来みたいにおずおずと音楽室に向かうこともなかったわけだ。

「立村、どうした、あっそっか、お前も練習せねばなんないもんな」

いたってのんきに羽飛が近づいてくる。野々村先生には適当に頭を下げ、

「たまたまうちのクラスでパート練習をしていただけなんで」

ときっぱりあっさり説明する。確認はしていないが、羽飛も野々村先生にはあまりいい感情を持っていないはずだ。美里からたんまり愚痴を聞かされているだろうし、その言動には羽飛もあまり共感できないものが多いだろう。上総とはそこが違う。

「ありがとう。じゃ、立村くん、あのピアノで練習しましょうか」

みな、興味津々と言った表情でじろじろ視線をぶつけてくるのが分かる。C組の男子連中は評議三羽鳥や羽飛、南雲、その他何名かは昔からの知り合いばかりで挨拶もする仲だ。ただ女子は……まあ元青大附中三年D組メンバーも何名かいるわけで……あまり好意的な視線とは言いがたい。またいつものパターンでひそひそしているのが聞こえる。

——なんで野々村先生、わざわざ俺にくっついてこようとするんだろう。肥後先生に用事があるなら時間をずらしてくれればいいのに。補習が早く終わったのはラッキーだけどさ。

「ごめん、こっち側で弾かせてもらうから、気にしないでもらえると助かる」

「わあったわあった、じゃ天羽、やるか俺らも！ さあさあC組はグランドピアノに集合だ！
ってなことで、まずはパート練習やるぜ！」

へらっと笑い、貴史はさっさとC組の生徒全員を呼び寄せ、難波になにやら説明しながら両手を打ち鳴らし始めた。天羽も難波も上総に軽く指で合図を送っている。まあ気にするな、とそんな感じだろう。

向こうがそうならこちらはそっとアップライトピアノを開く。鍵は開いていた。

「肥後先生が開けてくれたのね」

ひとりごとのようにつぶやき、

「向こうは向こうで集中しているようね、さあ、がんばって」

——どうでもいいけど今日の採点、いいのかな本当に。

朝一時間目が国語の試験だったから、まさかとは思うがもう丸を付け終わったなんてこと言わないだろうか。何かぴりぴりするものを首筋に感じながら、

「あまり、真剣に聴かないでもらえると助かります」

小声で答えた。弾けるわけがない。そんなに肩越しにじっと見つめられた状態で。

「そいじゃあ、いくぞ、んじゃ、ホームズ指揮頼んだ！」

「まかせろ！」

天羽と難波のやり取りと共に響き渡るアカペラの「恋はみずいろ」。まだピアノ伴奏をつけない状態らしく、途中でいったん切っては別の生徒たちが、

「ちーがう！ 音がひとり、違う人いるの！ もう一回歌ってみて！ ハーモニー美しくなあい！」

などと文句を付け出す。男子たちも女子たちの指摘には耳を貸さないが、天羽や「まあまあみんな、仲良くやろうよ。ね、あとでみんなで学食でアイス食べようよ」などとのどかに間を取り持つ更科の声でみな、また繰り返し歌いだす。相変わらずピアノの演奏はない。瀬尾さんはまだいないのだろうか。

つられないように、目をつぶって雑念を払い、改めて鍵盤を見つめる。

メロディはたぶん、自分の中に昨日の段階で蓄積されているはず。そう信じよう。

どうせまだ稽古して二日目なんだから。覚えられるわけがない。

上総は弾き始めた。

楽譜を見つつ、つかえながらもゆっくり最後まで弾くことができた。グランドピアノ周りで何度も同じパートを練習し騒いでいる連中を参考にしながら、メロディの流れをつかめたのは収穫だった。

「二日目、よね？」

隣りでまた首をかしげるようにして上総に尋ねる野々村先生、お世辞を言うでもなくただ不思議そうに、

「どうやって覚えたの？」

「昨日、肥後先生に教えていただきました、それだけです」

「それにしても覚えが早いわ。私もまさかもう最後まで弾けるようになっているとは思わなかったもの」

野々村先生は指で譜面立てに置いた楽譜に目を通した。

「楽譜の読み方は学校で習ったのかしら」

「学校に入る前に、母から教えてもらいました」

——音符ひとつでも間違えると思いきりひっぱたかれたけどな。

「初見演奏の練習をしたことは？」

「いえ、ないです」

「うちでのお稽古ではどのように曲を覚えたの？」

「母が弾いた曲を何度もテープで聴いて、それから楽譜に合わせて指動かして覚えました」

——急いで暗譜しないと昼のおやつもらえなかったんだよ！

幼年時代のピアノ稽古の思い出がどんどん記憶に映し出される。甘い思い出よりも、あの頃から始まっていた母との壮絶な日々には思わず頭が痛くなる。

「私が甘く見すぎていたようです、ごめんなさい。立村くん、本当にピアノを弾くのが好きなのね。でも、こんなに好きならなんでお稽古に通わないのかしら」

野々村先生は何度も語尾に「かしら」をつけて尋ねてきた。

「母の意向です」

——俺の性格上よその稽古場に練習しに通わせるなんて恐ろしいことはできなかったんだとさ。この前、『おちうど』のおかみさんたち相手に思う存分俺の悪口言い放ってたの、悪いが全部聞かせてもらったんだけどな。

「もったいないわ。お母様のご意向ももちろんあるのでしょうけれども、独学だけに留めるにはあまりにももったいなさ過ぎます」

——たぶん月謝がもったいなかっただけだよ。母さんああ見えて人に対してはけちだから。

上総の家庭の事情を知らない野々村先生には申し訳ないが、ピアノを習いたいという気持ちは今のところ全くない。父が探してくれた先生のところには一ヶ月だけなら通うつもりだが、そのまま延々と続ける気はない。それこそ、私立中学で月謝の他に親への負担をかけたくないし、第一それこそピアノがない。練習しようがない。合唱コンクールが終わればこずえから借りる予定のキーボードも返すし、継続することはどう考えても難しい。

「僕は、今のままでいいと思っています」

次の楽譜「モルダウの流れ」を譜面立てに置き、上総は野々村先生を見上げそう答えた。その瞳に、どこか同級生の女子たちと同じような眼差しを見つけて、思わず戸惑った。

——清坂氏には悪いけどさ、どう見てもこの先生、嫌な人には思えない。ただ、やはり。なんとなく、そりの合わない答えだけは浮かんできた。

——えこひいきは、たぶんしてしまうタイプの人なんだろうな。それはわかる。今、ほんとに。

その五 野々村先生との補習時間（4）

何度か間違ったところをさらい直したり、「モルダウの流れ」の譜読みを手伝ってもらったりして時間は過ぎていった。やはり自分ひとりだと進まないものが誰かの手助けをもらうだけであったという間に進んでいく。数学の問題よりもピアノ関連のほうが野々村先生には向いているのではないだろうかと思ふ。

「立村くんはたぶん耳で覚えているのでしょうかね。曲を何度も繰り返し聴いてそのテンポに合わせて譜読みを進めていくという方法を取っているのであれば」

「たぶん、そうだと思います」

「でも、合唱コンクールではせっかく譜面を持っていけるのだし、譜面を読みながら練習した方が効率的ではないのかしら」

もちろんそれは分かっているのだが、いかんせん上総は、

「僕は数えるのが苦手なので、丸ごと覚えてしまった方が楽なんです」

絶望的な答えをかえした。あっさり引き下がってくれと思いきや、野々村先生は頑固に、

「いえ、でも私は譜面を大切にしたいほうがいいと思います。もちろん暗譜できるほど練習するのに越したことはありませんが、つい度忘れしてしまい演奏中に手が止まってしまうことも考えられます。そのためにぜひ譜面を読めるようにしてほしいのだけどどうかしら」

「読めなくはないんですけど、得意でないという程度です」

一応は目を通してリズムやメロディーを追うことは出来る。ただ下線がいっぱい引いてある音符がどの音かを探すのが面倒くさいという程度のことだ。早いうちに適当に曲を覚えて暗譜し乗り切ることさえできればたぶん、大丈夫なのではと思っている。

やはり不満があるようで野々村先生はまだぶつぶつぶやいている。

「せっかくここまで弾けるのに、基礎のところ弱いともったいないわ。誰か見てあげる人いないのかしら」

——なんで俺の練習を見るたびみな同じこと言うんだらう。

それでも野々村先生の説明は分かりやすい。たぶん上総が数学の基礎にたどり着いていさえすれば先ほどの補習説明も問題なかったのではないかと思う。野々村先生は直接弾いて教えるわけではなく、懸命に楽譜の音符を両方指差して、すぐに両手で弾けるよう指導しようとしている。このやり方は初めてで正直驚いたが、なんとなく腑に落ちるところもあって素直に試して見ることにした。片手ずつ練習していくよりもすぐメロディが身体の中に納まっていくのが分かる。

その間、ライバルC組の練習は反対側においてあるグランドピアノ中心に着々と進んでいる様子だった。なぜか出てこない肥後先生。外に出かけているのだろうか。よくわからないがピアノの鍵が開いているのであれば遠慮はいらないだろう。それはC組の評議である羽飛も、元評議三羽鳥も、その他の連中も同じ思いらしかった。

ピアノの手を止めて、改めて唄に聞きいると、野々村先生がいぶかしげに尋ねる。

「どうしたの、練習は」

「いえ、どうして伴奏しないのかなと思っただけです」

ずっと不思議に思っていたのだが、C組連中はひたすらパート練習に勤しみ、途中声をそろえたりもするけれど基本、ピアノの音色は聞こえない。最初、伴奏役の瀬尾さんが来ていないだけなのかとも思ったが、何気なく振り返って確認した限りちゃんと混じっている。合唱のパート練習も手伝っている様子だ。

「せっかくあれだけ揃っているんだったら、早く伴奏に合わせればいいのになとか思ったんですが、合唱の練習には決まりがあるんでしょうか」

「そうね。確かに私もそれは不思議に思っていました。でも、他のクラスのことを口出ししてはいけません」

自分に言い聞かせるような口調でつぶやき、野々村先生は上総にピアノ練習を続けるよう促した。

「まだ、まだまだ歌にあわせるには練習が必要です。立村くんはもっとすべきことに力を注いでください。それが今、すべきことなんです」

——ごもっとも。

だいたい一時間くらい練習を続けていた。当然のことながらC組連中も音楽室にたむろい続けているわけであり、野々村先生もまだ張り付いている。

——野々村先生ほんとに俺につきあっていていいのかな。

少し心配になってくる。補習時間から熱心に指導してくれる国語の先生だが、内容が数学でありかつピアノとくると、いったい何のためにここにいるのかがわからなくなる。上総の個人的面談教師であることは確かだが、何もそこまでひとりの生徒にくっついていなくてもいいんじゃないだろうか。なんだかこのままだと美里にまたひねられそう。証人の羽飛もC組グループにいるし、どちらにせよ謝らなくてはならないことがひとつあるし、いろいろと気が重たい。

——タイミングよく、職員室に戻ってもらえないかな。

その一方で指導は分かりやすいのだからたちが悪い。実際、たった二日で両手弾きができるようになり、それなりに形にはなってきた。自分でアピールした分は決して大げさではないという証明はできそう。あとはなんとかして練習場所とキーボードを借りるなどして対応すればなんとかかなりそうだが。野々村先生はどうもこだわりがあるらしい。

「とにかく、もっと基本に戻らないと。一ヶ月あればある程度は直せるのではと思いますから、肥後先生にもその点ご相談しなくては」

——じゃあ肥後先生、音楽準備室にいるから行って話をすればいいのにな。

それでいて全く上総から離れようとしない先生に、どうにかしてタイミング見計らってお引取り願う方法はないか、ひたすら考えていた。

後ろから声がかかる。振り返ると羽飛をはじめとする男女C組一同が興味津々といった風に上総の向かっているアップライトピアノに近づいてくる。練習が一段落したのだろうか。しかしクラス全員が寄ってくることはないだろうに。軽く頭を下げた。

「さっきからさ、お前の練習聞こえてくるけど、まじお前、もうこんな弾けるの？」

「うん、なんとか、教えてもらって」

事実だし頷く。野々村先生がいなければもう少し砕けた答えもしたいのだがそういうわけにもいかない。野々村先生はやはり動こうとしない。静かにC組全員の顔を眺めている。

「すげえー、りっちゃんやっぱ才能あるじゃん！」

割り込んでくるのは南雲だった。野々村先生の中に割り込むようにして鍵盤を覗きこみ、
「さっきからさ、りっちゃんの弾いている音聞いて、まじ初めての弾きかたじゃねえわこれとか思っちゃってさ。結構シンセサイザー系とか得意？」

「結構どころかかなり好きだよ。即興で弾いたりしたいな、とか思うし」

羽飛が頷いている。実際奴の目の前で弾いてのけたのだから。

「けどお前、おととい譜面もらったばかりだろ？ 俺が証人だが」

指揮棒を握り締めたまま難波が反対側から覗き込む。

「そうそう、立村ちゃーん、なんであの評議委員会全盛時代にその特技を見せ付けなかったんだよん水くせえじゃん。ピアノの絡んだビデオ演劇できたらうになあ。本条先輩悔しがるぞぜってえ！」

明るく盛り立てようとするのが天羽。相変わらずだ。あまりにも褒められていると女子たちの間に漂う空気がまずくなるものだが、その点は更科がすぐに対応している。

「まあ、立村はうちにピアノがないからしょうがないよなあ。俺、さすがにピアノのない状態で立候補する勇気ないよ。瀬尾さんいてくれて助かったよね。感謝感謝」

結構C組の鉄板ぶりは手ごわそうだ。こずえたちには悪いが、合唱コンクール全校優勝はあきらめたほうがいいような気がする。

「立村くん、周りの人が褒めてくれるからといってこのままではやはりよくないわ」

水を差す発言をしたのはやはり野々村先生だった。ずっと上総のつながりある友だち連中と、また冷ややかな眼差しで眺めている女子たちに聞こえるように、

「他の、真剣にピアノを弾いてきた人たちのことを考えると中途半端な形で伴奏するのはよくないと思います。ピアノがご自宅にないのであれば音楽室を利用することもひとつですけど、できれば私が少し出来る限り観てあげたいのですけれど」

静まり返った。

——あの、野々村先生、今、なんと言った？

言葉も出ない。上総が凍り付いている中、野々村先生はさらに話を続けた。

「もちろんうちのクラスのこともありますけれど、ただあまりにも差がある状態だと学校側のコンクールとしてもやはり難しいものがあります。自己流だと限界もありますし、肥後先生もいつもレッスンが可能とは言えません。ですから私が時間のある時に」

——いや、それは無理、絶対無理。先生、自分のカリキュラム全く頭に入っていないだろ？ てか、正気じゃないよ、その発想！

上総も知らないわけではない。青大附属の教師たちはどう考えても通常の負担とは思えないくらい生徒たちに関わろうとしてくる。夏休み最終日の菱本先生がよい例だ。同席していた父が説教してしまうくらいに教育に暑苦しいほどの情熱を燃やしていることはよくわかっている。しかし、同時に教師という仕事が雑務の嵐であり、生徒たちと顔をあわせている時だけではないということもさまざまな場面で耳にしている。少なくともひとりの生徒にべったりくっついて個人レッスンしようとするだけの時間が野々村先生にあるとは、どう考えても思えない。そんなことしたら一年B組の生徒たちはどうなるのだろう。上総も美里に縁を切られるほど野々村先生にひいきされたいとは思えない。

「あの、先生、お気持ちはありがたいのですが僕も、土日に関別の先生にレッスン受ける予定でいますので」

言いかけた。そのとたん女子の声が勢い割り込んできた。高音、そして和音。

「先生、それなら私もお願いします！」

ぎょっとした顔で野々村先生がその声を探した。探すまでもなく、その声の主は女子たちのまとまりの中を割って飛び出してきた。

「私、今事情があり先生についていないんです。立村くんが個人的に教えてもらえるということであれば、私にもその権利、あるはずです」

「瀬尾さん？」

名前を、恐る恐る尋ねる野々村先生に、瀬尾さんは強い口調で訴えた。上総のことは目に入っていない様子だった。

「ピアノは家にありますが実際練習する暇はありません。他の演奏会出演する人たちと違って伴奏もしなくてはならないというのはかなりの負担です。もちろん、簡単な楽譜だからといわれればそれまでですが、演奏会にその他の曲を二曲練習するというのは本当に負担なんです。それなら、私も、個人レッスンしてもらえ権利あるのではないのでしょうか？ 生徒はみな、平等なはずです」

——どうするんだよ、これ。もう俺の手に負えないよ。

やはり思ったとおりだった。ものすごい剣幕の瀬尾さんに飲まれたかのように野々村先生は襟を直して、早口に瀬尾さんへ答えた。事務的な口調だった。

「ごめんなさい、瀬尾さんの事情は初めて伺ったので私ひとりの判断では難しいわ。とりあえず肥後先生に相談してきますね」

慌てて音楽準備室に向かいノックをするが返事がなかったらしく落胆の様子だった。そのまま、挨拶もせず足早に音楽室から飛び出していくのを、上総とC組一団はあっけにと取られて見つめるだけだった。

その五 野々村先生との補習時間（5）

収集つかなくなりそうな状況をあっさりまとめたのは天羽の一声、
「ほんじゃま、今日は悪いけどテスト後なんで少し羽根伸ばしていっか。羽飛悪いが今日の練習はこんなところでよいだろ」

自主練習の解散宣言をしてくれたのと、
「俺もこれから肥後先生探して指揮者特訓を頼まねばならない。明日も放課後自主練やるからそれまでにはなんとか形にするぞ」

難波が握りこぶしをこしらえて熱く訴えるのと、
「とりあえず今日は合唱もだいぶまとまってきたから、きりのいいとこでいいんじゃないかな」
更科のいい意味で無神経なのほほんさ。

元・評議男子評議三羽烏それぞれのやり方でなんとかC組連中は音楽室からのろのろ出て行ってくれた。もちろん、瀬尾さんの発言やそれに続く野々村先生の理解不能な言動に関しても、主に女子たちからは不快感溢れる発言がちらほら聞こえていた。ピアノの前に腰掛けたままの上総にもそれはすべて聞こえていて、

「なんだろ、野々村先生ってさ、すっごいひいきしまくるって美里も怒ってたよね」
「うん、確か外部の子で、評議やってる子、あの子ばかり褒めてて美里についてはすっごく無視してるって」

「けどさ、今のってちょっと妙じゃない、だって相手がさあ、あの立村くん相手だよ」
中学時代の美里との関係が知られているゆえにぎしぎししてしまう言葉だらけだった。
「瀬尾さんの言い分ももつともだと思うよ。そりゃ立村くんはピアノないから多少は融通利かせなくちゃいけないってのもわかるけど、でも伴奏者だけひとり特訓ってのはおかしいよ絶対。瀬尾さんが怒るのもわかるよね」

「でも、瀬尾ちゃんさ、妙なこと言ってなかった？ 今先生についてなかったって？ 瀬尾ちゃんは確か、十月の学校の演奏会出るよね？」

——それ、俺も気になってるんだけど、どういうことなんだろう。

本当ならば、余計なことを無視して瀬尾さんを捕まえて、先ほどの発言をもう少し詳しく確認したかった。野々村先生の先走った言動はともかくとしても確かに上総ひとりをひいきする形の練習は、反発を買うのもしかたない。ただ、瀬尾さんも自宅に……おそらくだが……ピアノを持っているだろうし演奏会に出るだけの実力を持っているにも関わらず先生についてないというのは、いろいろ難しい問題があるに違いない。事情を聞けばうまく別の方法を見つけてとりなすこともできるんじゃないかとか、そんなことを考える。ただ上総は瀬尾さんという女子と今まで全く話をしたことがない。それにいつのまにか音楽室からも彼女の姿は消え去っていた。確か泣いてはいなかったような気がする。

「じゃあ、りっちゃんまたね！」

南雲にも軽く挨拶を交わし、いつのまにか残ったのは評議三羽烏プラス羽飛、そして上総の四人のみとなった。向こう側のグランドピアノは閉じられたまま、上総の目の前にあるアップライ

トピアノはそのまま鍵盤を光らせている。

「まあ、おつかれさん。とんだ騒ぎだなこりゃ」

羽飛は上総の肩を軽く叩き、片手でピアノの鍵盤を適当に叩いた。不協和音あり。

「まず確認してえんだけどな、なんで美里の担任と一緒に来たんだ？ 俺よくわからねえんだけどな」

「補習があってその流れだよ。頼んだわけじゃない。肥後先生にも用事あったみたいでそのついで」

感情交えず上総も答えた。さすがに野々村先生が一方的に張り付いてきたなんてことを言えはしない。

「へえ、んじゃ、立村がプライベートレッスン頼んだっつうわけじゃねえんだな」

「当たり前だろ。それ以前に野々村先生があんなにピアノに詳しいなんて知らなかったし」

「けどなあ、一時間もべったり特訓されてたら誤解されるぞ。それも一対一だろ。瀬尾が切れるのもまあ、わからなくはねえな」

「俺もそう思う。瀬尾さんには悪いことしたなって思う」

そこで天羽が静々とふたりの間を割り込むようにすり抜け、会話に入る。

「瀬尾ちゃんの事情はよくわからねえけど、中学の合唱コンクールではA組で伴奏やってくれたし、めちゃくちゃうまくったことは確かだよなあ。無理に野々村女史にレッスン申し込まなくてもいいような気がするんだが、ま、これがジェラシーなのかねえ。どう思うホームズ？」

ずっと片手で三角を空に書き続けている難波が我に帰ったように、

「俺を呼んだか」

またまた割り込んでくる。もちろん更科もにこやかに張り付いてくる。

「お前さんの鋭い脳細胞で、合唱コンクールにおける謎の部分をはっさばっさと切り分けてもらえねえかなあ」

「事実関係がもう少し詳しいことわからないと俺も何も言えないが」

難波は両腕を組み考え込み、天井を見上げた。

「ひとつだけはっきりしている事実は俺たちが見たものだけだ」

「おい難波、結論だけ言えよ」

面倒くさそうに貴史がせかす。更科がまたころころと、

「そうそう急がなくていいだろ？ 羽飛、ただいまホームズの頭脳鋭く回転中なんだからさ」

「そうは見えねえがなあ」

「せかすなら情報をよこせ、羽飛」

ぐるぐる旋回しだした難波は、ふと更科をじっと見つめ、また天井を見上げた。

「今、たどり着いた真実はありふれていることだが憶測に過ぎない。それでもいいか」

やがてゆっくりと、まじめな表情でその場にいる三人に語りかけた。

「まどろっこしい言い方するなよなあ」

「羽飛黙れ、てかホームズ、ここにいる俺たち五人のみの秘密にするってことでどうだ、話してもらえねえかのう」

せかさず、促す天羽。あっさり頷き、難波は腕組みしたまま、上総に言い放った。

「とりあえず結論だけ言っとく。立村、お前はあの先生に目を付けられてるぞ」

また更科をちらと見たがすぐに上総に向き直り、

「どういう意味かはまだ特定できないがな」

——目を付けられてるって。

言われた意味が全く分からない。上総はまず難波を、次に天羽、更科、羽飛とそれぞれの表情を伺った。みななんとなくわかったように頷いているということは、それなりに見えたものがあるのだろう。

「どういうことかな、一応、野々村先生は夏休みの個人面談の担当だからそのあたりの兼ね合いもあるのかもしれないけれどさ」

「あっそっか、お前、個人面談あの先生だったのかよ」

元評議の連中にはそういえば話していなかった。羽飛だけが納得顔で、

「俺はとっくの昔に知ってたがな」

つぶやいているのが聞こえる。

「すべての生徒に個人面談の担当が当たるはずだが少なくとも俺はここまで面倒見てもらうようなことはない。立村、今日は数学の補習があったんだよな？」

「そう。そのこともあって、補習の手伝いしてもらえるとということになったから、それで話をしたんだけど、その時に伴奏の話になってさ」

上総は決して嘘を言っていないのだが、並んでいる連中の表情にはなんとも言えない複雑な笑みが浮かんできている。いったい何を妄想しているのかと問い詰めた。

「でもほんとにそれだけだよ。俺は今まであの先生と夏休み前までは一度も話したことなかったし、何か目を付けられるようなことした記憶も全くない。まあ、俺の数学の成績が救いような状況だから、たぶん学校側で業を煮やして数学の得意という噂の野々村先生を担当にしてくれたんじゃないかな、くらいは想像してたけどさ」

「あの先生国語だろ？」

難波が問い詰めてくる。嘘ではないので答えること可能。

「個人面談の時に聞いたけど、数学のほうが本当は得意らしくて、それで俺の成績のこともあるから手伝ってくれるとかいう話にはなった。ただそれはあの先生が決めたことじゃなくて、学校側がトータルで考えてくれたことらしいけど」

「お前の理系感覚は崩壊してるからな。補習の件についてはまだ俺も理解できる。けどなんだ？」

なんで音楽の伴奏の手伝いまでなんでしゃしゃり出ようとするんだ？」

「俺もそれは不思議なんだけど」

心底謎だ。難波がどういう推理を組み立てているのかが全くわからない。情報提供だけはしようと思うが、それよりも何よりも明日以降どうすればいいかというのが取り急ぎの問題のような

気がする。

「ただ、さっきお前らが合唱の練習している間に俺も野々村先生に伴奏いろいろテクニック教えてもらったけどさ、確かにわかりやすいんだよ。片手ずつで練習するよりも、最初から両手で合わせて稽古したほうが早く進むとか、暗譜よりも譜面読みに力を入れたほうがいいのか。うちの親に仕込まれた時よりもはるかに理解できたから、たぶんそちらの知識は豊富なんだと思う。今回の合唱コンクールも全校クラスで唯一ピアノが自宅にない伴奏者が俺だから、通常状況ではないと教師として判断したんじゃないかなと思う。そこから出た発言だと俺、解釈してるんだけど、間違ってるか？」

誰も何も言わない。イエスかノーかくらいははっきりしてほしい。ついあせりで続けてしまう。

「けどさ、正直なこと言うと俺も第三者からしたらえこひいきされていると思われて当然だと思う。もちろん野々村先生は善意で言っているだけだと思うけど、担任持っている先生にそこまでおんぶに抱っこなんてできないよ。肥後先生にも昨日いろいろ教えてもらったし、音楽室もピアノ使っていいと言われているし本当に助かるけど、でも野々村先生に特訓してもらおうというのはむしろB組の人たちに申し訳ないと思う。絶対清坂氏怒るよ」

「まあもっともだ。美里はぶち切れるな」

羽飛は上総の肩をぽんぽん叩きながら頷いた。

「それだけじゃない、伴奏担当の人たちだってそれぞれの事情があるんだろうなということは聞いてるし、さっきの瀬尾さんの話じゃないけど演奏会の負担もかなりあるんだろうなという気がする。俺だけピアノがないという大義名分でもってひいきされることに納得がいかないのはむしろ当然だよ。うちの親に頼んで今、一ヶ月だけ見てもらえる教室探してもらうことになってるし、古川さんからキーボード借りてうちで練習するし、暇があればここで稽古するし、それでなんとかやっていけそうな気がするんだ」

「まあそうだな。練習二日であれだけ弾けるようになってたら、余裕じゃねえのって気はするわな。立村ちゃんよ。でもなあ」

歯切れの悪い言い方でもって言葉を濁す天羽。難波も結論を言おうとしない。静まり返る音楽室内で不意に更科が上総の真正面に入り込んだ。ピアノをふさぐ格好となる。

「どうした、更科？」

「ホームズも天羽も言いづらそうだから、俺から言っちゃっていいかな」

ぶっきらぼうに難波が「勝手にしろ」とつぶやき、天羽もポケットに手を突っ込んで「あいよ、ほらきた更科！」と空掛け声をかける。反応はもちろんない。羽飛もわけのわからなさそうな顔で「言っちゃえば」と促すのみ。

「直感なんだけどね」

辺りを見渡し、更科は上総の膝元までしゃがみこんだ。他の連中も上総を囲むようにして固まり出す。

「あの先生なんだけど、学校では先生の顔してるんだけど、立村の前では普通の女子の顔にもど

っちゃってるんだよね。さっきの、特別レッスンの話持ち出した時とか、瀬尾さんに食ってかかれた時とか。あの先生何歳だっけ」

「二十五歳くらいじゃねえの、一浪してるだろ」

天羽の返事にわが意をいたりとばかりに頷き、更科はたっぷり雰囲気を持たせて言い切った。「俺たちとあの先生とはせいぜい十歳程度しか変わらないんだよ。そういう気持ちがあったとしても、不思議ないって」

その六 鍵盤めぐり（1）

一年A組の合唱練習は九月に入ってから本格的に始めることにする。評議・古川こずえの判断だった。誰も文句を言う奴はいなかった。

「他のクラスはすごい盛り上がってるみたいだね。誰とは言わないけどね」

「C組、あれなんなのさ。羽飛もなんか最初引きずられてたみたいだねあつという間に飲み込まれちゃったもんねえ」

目の前でこずえが額をたたきながら美里に話しかけている。ふたり並んで歩いているその後ろに上総は黙って従っていた。先週と同じ土曜日の放課後。違うのは羽飛の姿がないことと、自転車を押して歩いていることくらいか。

「けどB組はどうなのよ、そっちも結構合唱コンクールに命かけてるんでしょ。誰とは言わないけど評議の」

「そうね。担任と一緒に燃えてるね。けど今日は私、最初から用事あるって言って抜け出してきたから大丈夫。先週約束したことだもん、いきなり昨日練習提案されても困るよね。知ったことじゃないわよ」

ふくれっつらで……美里の顔は見えないが……文句を垂れ続ける美里。気持ちはなんとなく分かるので口を挟むつもりはない。

「けど立村くん、音楽室で毎日練習してるんでしょ？」

振り返った美里はいつもの笑顔で話しかけてくる。二つわけの髪型を揺らしている。

「ピアノが空いていればだけど。今日は三年二クラスが伴奏つきで練習することになってたみたいなんだ。たぶん九月になったらゆっくり弾けなくなるだろうな」

一緒に音楽室を覗きにいったのだから、ふたりともわかっているはずだ。今度はこずえが立ち止まった。

「なーに、陰気くさいこといってるのさ。最初からそれわかってたでしょうが！ さてさてA組は来週まで歌の練習はなし。短期集中型でとことん突っ走る予定。その間に関崎もなんとかかんとか形にしてくれるろうし、問題はこいつよ、ねえ」

「まだ四日しか稽古していないようなものだしさ。いきなりあわせろと言われてたらそりゃ困るよ」

「わかったわかった、あんたには帰り、ちゃんと約束のぶつを渡すから、それで毎日練習しなさいよ。一日の終わりのお勤めも控えなさいよ」

一瞬言われた意味がわからず首をひねると、

「あんた知らないの？ 勝負事前日一週間はしっかりエッチ控えるのが決まりなんだからね。終わったら思いっきり抜きゃあいいの。まだ今は練習前だからいいけれど、そのことはよっく覚えておきなさいよ！」

「古川さん、今、何時かよく考えよう」

上総は空を指差した。八月最後の青空が、冷たい風と一緒にまるやかに広がっていた。

三人でのんびりと自転車を押しながら歩き、二度目の古川宅訪問となる。先週の段階で約束し、それから出来る限りこずえの家でピアノを弾かせてもらう予定だったがさまざまな予定変更も重なったためだいぶ間が空いてしまった。美里も最初は付き合えそうにないようなことを話していたが、いろいろ思うところもあるのだろう。あえてライバルA組の手伝いをしについてきてくれている。もともと上総をこずえ宅に呼ぶには女子と一緒にないといわゆる不純異性交遊の誤解を受けないとも限らないという、至極ごもつともな理由がある。

「古川さんのお母さんは今日、うちにいるの？」

「いるよ。あんたたちが来るって聞いて、張り切って料理してる。あ、うちの弟は今日用事があって夜まで帰ってこないよ。一度くらいちゃんと挨拶させたかったんだけどねえ」

「それじゃあ、ねえ、立村くん」

美里は上総に近づき、小声でささやいた。

「お土産なんだけどどうしよう」

「俺もそれ考えてた。向こうに見えるケーキ屋で買っていこうか」

「そうだね、賛成！」

さすがに手ぶらで行くのは気がひける。本当は美里と相談したかったのだが、この二日間いろいろと悩むところがありあえて顔をあわせるのを避けていたと言ったほうがよい。なにせ美里はB組の人間なのだから、あの担任がらみのことも触れるのが正直辛い。もともと美里に罪はないわけで、こうやって話してほっとするところもある。まったく、まったく。

「こずえ、ちょっと悪いんだけど、私たち買い物忘れてたから、先におうちに行ってて。私、道わかるから、立村くんを迷わないように連れていけるしね！」

「えー？ 気を遣わなくたっていいのに」

ふくれっつらのこずえに上総も促す。

「いや、いいよ、俺も少し清坂氏と話があるしさ。別に古川さんはずしてって意味じゃなくて、いろいろと」

「ああ、そうですかそうですか、私は無視ですか、ってね。でもまあいっか、いいよ、じゃあ私先にうちに帰ってるから、早く来なさいよ！」

含むものを感じたのかはわからないが、あっさりこずえは引き下がってくれた。ありがたい。これで少しだけ、時間稼ぎができる。

通り道側のケーキ屋は一坪程度の狭い店なのだが、先週の帰り道に何気なく覗いてみて気になるものがあった。特に美里はカットフルーツをゼリーにたっぷり詰込んだケーキらしきものに御執心だったのを上総は覚えていた。価格も大ききの割りに手ごろ。こずえと自分らふたり、およびこずえの母、弟も含めてちょうどいい手土産になるだろう。

「よし、これで大丈夫。立村くん、ちょっと割高になっちゃったかもしれないけど、半分もらうね」

すぐに美里が半額分を計算してその金額を上総が払った。

「ありがとう、いいところ見つけてよかったよ。清坂氏はいいい店見つけるのうまいよな」

「まあね。あ、そうだ、立村くん」

ドライアイスを入れてもらい、少し重たくなったケーキ箱をぶら下げたまま、美里は店から出るならすぐ上総に質問を投げかけた。

「ほんっとにたいしたことないんだけど、聞いていい？」

「いいよ、なんでも」

いつか来るだろうとは思っていた。美里の耳にも届いていないわけがない。C組クラス全員の前で野々村先生がさらけ出した謎の言動と、そこになぜかA組の上総が混じりこんでいたということ。羽飛がどの程度まで説明したのかはわからないが、他ルートからもまた別の情報が流れ込んできている可能性がある。もちろん上総にやましい気持ちはこれっぽっちもないので堂々と説明する気持ちはある。

「水曜のこと、って言ったらわかるよね」

「だいたい。聞きたいこと聞いてもらえれば全部答える」

「そっか、じゃあ聞いちゃうね」

ちっとも気にしちゃいないといった風に、唇を尖らせ美里は上総の顔を覗き込んだ。

「うちの担任が立村くんにわけのわからないことしたって、ほんと？」

「羽飛の話したことでほとんど合ってると思う」

「え？ それだったらとんでもない話になっちゃうよ。場合によっては私、立村くんひっぱたいっちゃうけどなあ。だってね、貴史言ったんだよ。いきなり立村くんを連れてうちの担任が音楽室にやってきて、一時間みっちりピアノレッスンして、その後でさらに練習を毎日やるとかわけのわかんないこと言い出したんでしょ？」

「だいたい合っているけど、羽飛は肝心のこと言うの忘れてるよ」

そうだとは思ったが、訂正しておかないと本当にひっぱたかれそう。

「その後ちゃんと俺の方から断ったよ。B組のことを後回しにしてまで俺の練習を見てもらう必要ないってことをさ」

「大丈夫、聞いている。心配しないで。立村くんがちゃあんと拒否したことはわかってるもん」

ひっぱたかれずにすむ証拠に、美里はいたずらっぽく微笑んだ。

「けど、なんでだろうね。うちの担任、なんで立村くんをひいきしようなんて思っちゃったんだろうね。十歳も年下の生徒に変なこと思うわけ普通ないし、何か裏でいろいろあるのかなとかつい思っちゃった。貴史ってばね、思いっきりありえないこと言うんだよ？ 立村くんのことを野々村先生が本気で好きになっちゃって、めろめろになっちゃって乙女心丸出しにしてるなんてね。笑っちゃう。そんなわけ絶対ないじゃない！ 年下だったって限度あると思うよね」

「俺もそう思う。他の一部の男子も勘違いしているみたいだけど、それだけは絶対にありえないよな。たぶん、俺のピアノのレベルがひどすぎて心配になっただけだと思うよ」

そうとしか思えない。少なくとも難波、更科の言葉にあるような妄想が存在しているわけなんてない。上総もこの三日間ほどは出来る限り野々村先生とすれ違わないよう教室から最小限出ないようにしていた。国語の授業が当たってなくてよかったと心底感謝した。普通目意識しないで見ることできるほど、上総は人間できていないと自覚している。

そう、ありえない。絶対に。

——更科のケースは、本当に、例外中の例外なんだしさ。

その六 鍵盤めぐり (2)

美里の先導で迷うわけもなく無事こずえ宅にたどり着いた。入り口までこずえに迎えに来てもらい、ものものしい鍵を開けてもらい、その後はまっすぐエレベーターに乗り込んだ。

「うわ、もしかしてあんたたち、お土産用意するために遅れてきたって奴？ だから気を遣わないでいいんだってば！ もう余計なことしてさあ」

手土産の包みに目を留めて察したのか、こずえに責められてしまう。

「何言ってるのよ。先週だってピザご馳走になっちゃったし、そのくらい当然よね」

「けどそんなことされたらさあ、気軽に呼べなくなっちゃうよ」

「自分たちの食べる分だけ用意しただけだし、気にしないでよ。それよかここのケーキ屋さん、すっごくフルーツが詰まっているケーキなんだけど、一度食べてみたくなあい？」

結局はお菓子の話で盛り上がり機嫌を直すこずえ。上総はふたりのおしゃべりから少し離れ、エレベーターの「開」ボタンを脇で押していた。

「さすがレディファースト、よしよし」

褒められてもうれしくないが、自分もさっさと降りる。こずえに促されて玄関の戸を開けると

「いらっしゃい、ようこそ！ 美里ちゃんどうぞどうぞ。それと、ええと貴方は」

貴方、ときた。上総の顔を見て華やかに微笑む女性が迎えてくれた。

「立村と言います。古川さんとは英語科の同級生です」

「何気取ってんの、母さん、この子ね、いつも言ってるでしょ、あの子にそっくりなクラスの男子がいるってこと。それがこいつよ、立村もあんたそう緊張しないでさ、どうせあんたの本性四年前から我が家全員にはばればれなんだから、さ、入った入った！」

「そうそう、立村くんね、卒業式の英語答辞は聞かせてもらってびっくりしっちゃったわ」 —— 古川さんのお母さんとはどう見ても思えないよな。

改めて一礼し、美里と一緒に上がりこむ。こずえの母と思わしき女性は、パーマをかけた髪をくるりとアップにし、飾り物一切なくきっちりとまとめていた。華やいだ雰囲気はあるのだが、化粧っ気はあまりない。

「ところで、お食事はまだなんでしょ？ 手巻き寿司でよければ召し上がれ。そうだ、お姉ちゃん、居間で食べるでしょ。お皿出すの手伝ってちょうだいな」

「オッケー！ ということで今日は手巻き寿司パーティーなのでした。ではではふたりとも中に入ってちょうだいよ。あんたたちはゆっくり手足伸ばしてていいんだからね」

美里と顔を見合わせる。なんとなく、手伝ったほうがよさそうな気がするのだが、

「いいのいいの。客は客らしく振舞うのが義務なんだからね」

結局言いくるめられ、美里とふたり居間に座って待つことになった。もちろんこずえのお母さんにはケーキを直接、美里のほうから手渡してもらった。

「ということで、なんか豪華なお昼ご飯になっちゃったね」

「先週はピザで今週は手巻き寿司、となるとやはり来週は何か用意しないとな」

「そうだね、ご馳走になりっぱなしになるのよくないよ。それに立村くん、来週一回だけじゃないでしょ、これから何度もピアノ弾かせてもらう話なんですよ」

「たぶんそうだけど」

斜め前のアップライトピアノを眺めやる。先週と違うのは山積みになっていた古いピアノ教則本がのけられて、いつでもピアノを弾くことのできる環境に整えられているところだった。つやつや蓋も光って歓迎してくれている。ジャングルのような草木も見慣れると落ち着く。緑はやはり、ほっとする色だ。

「あ、そうだ。清坂氏に俺のほうから謝らなくちゃならないことがあるんだ」

二人きりでないと話せないことを思い出し、上総は美里に呼びかけた。

「なによいきなり。さっきのことは謝る必要ないよ」

「それじゃないんだ。自由研究のことなんだけどさ」

野々村先生に絡んでくる話なのでどう持ち出すべきか迷ったが、話すなら今だろう。

「補習の時に、たまたま自由研究の話になったんだけどさ」

「あの先生、またしつこく立村くん絡んできたわけ？ よくわけわかんない！」

「絡んだわけじゃないと思うけどさ」

あとでいろいろと面倒になることを考えれば、今のうちに思いきり美里に怒られておいたほうが身のためだという判断からだった。事実を伝えることにする。

「その自由研究なんだけど、どうやらふたりのまとめは問題なさそうなんだけど、俺の文章が今ひとつ、その、論理的な部分に欠けていたみたいで思い切り評価を落とされたらしいんだ」

「ふうん、それで」

不機嫌そうに美里がつぶやく。でもわざとらしさ漂っているところみると、本気ではなさそうだ。

「俺だけじゃなくて、たぶんその評価、羽飛と清坂氏にも回ってしまう可能性があるからまずいなって。それだけなんだけど、本当にごめん」

「あのね、立村くん、謝らなくていいって言ったでしょ。ほんっとうにしつこいようだけどね」

美里は首を振り、テーブルに頬杖を着いた。上総に向かって指でちょいちょいと指差した。

「私ね、自由研究のことは最初っから気にしてないよ。当たり前でしょ。どうせあの担任に目をつけられているの私なんだから、私の文章評価するわけじゃない！ 何で私のことあそこまで変な目で見るとらうって不思議でなんないんだけどね。ただちょこっと気になるんだけどあの先生、私経由で立村くんのこと、聞いてるのかなあ」

「清坂氏経由で？ 意味がわかんないけどさ」

「ほら、同じクラスで三年間評議で一緒だったってことよ。中学から高校でなんらかの申し送りは行われてるはずだし。もしかしたら立村くんにあの先生がやたらと拘るのは、私のことをいろいろ根掘り葉掘り探り出すためかもよ。私の弱み捕まえようとしてるのかも。なんだかやだなあ」

さすがにそれは美里の被害妄想のような気がする。止めた。

「それはないよ、いくらなんでもあの先生大人だから、そんな、おとなげないことしないよ」
「大人げない？ あんな露骨なえこひいきする教師のどこが大人なのよ。けどね、さっき立村くんが思いっきりきっぱり断ってくれたってこと聞いて、個人的には溜飲下がったわ。うん、大丈夫。このくらいなら平気だもんね」

どうやら美里の考えとしては、「野々村先生は美里を敵視していていつか首根っこ押さえようとし、そのためにあちらこちらから手を回して情報を集めている。そのひとりが中学時代いろいろ因縁のあった立村の存在」というように推理しているらしい。

——やめとこう、これ以上清坂氏を刺激するのは。確かに人の好き嫌いが露骨に出やすい先生だとは思ったけど、そこまで清坂氏をいじめようなんて普通しないよ。

「おーまたっせ！ じゃあそろそろ立村、あんたに手伝ってもらおうわよ」

酢飯の入ったおひつが運ばれてきて、次に大皿の刺身が、卵焼きが、なぜかきゅうりやトマトが、それぞれテーブルに並べられていく。美里とふたり、入り口で受け取り並べていくうちに四人分の食器がすべてセットされていった。

「やっぱり、こずえのお母さんすごいよね。手際よすぎ」

美里が上総の耳元にささやいた。

「でも四人ってことは、これからこずえのお母さんと一緒に食べることになるのかな。変なこと話さないようにしなくちゃね」

「わかってる」

だが、たぶん、こずえ限定で下ネタは制限されないような気がする。うっかりひっかかって変なこと口走らないようにしなくては。保護者同伴の食事はやはり、気を遣う。

最後に手で裂いた山盛りの海苔がテーブルの真ん中にどすんと置かれた。

「さあ、おいしいわよ。手巻き寿司はいくらでも食べられるから、遠慮なく召し上がってね！ 私も参戦するわよ！」

——参戦、かよ。やはり、この人、古川さんのお母さんだよな。

食べる気まんまんでエプロンつけたまま居間に乗り込んできたこずえのお母さんを迎え撃つ気力もなく、上総は美里とならんで静かに席についていた。

その六 鍵盤めぐり (3)

手巻き寿司の魔力は偉大だった。あっという間におひつのご飯は空っぽになり、あまった海苔にかまぼこや果物や刺身のあまりなどをくるんでひたすら食べ続けるのみ。いつもだったらここでいろいろ馬鹿話に花を咲かせるところなのだろうが、

「さあさ、いっぱい食べてね。ところで美里ちゃん、今クラス別々になっちゃったけどみんなとうまくやってる？　なんか面倒よねえ、女の子同士ってねえ、お姉ちゃんもそう思うでしょ」

などと話を盛り立てるこずえ母の存在で、つい上総ひとり無言になる。こういう時に羽飛がいれば楽だろうにと思わなくもないのだが、観察するのも必要という判断のもといろいろ眺めやることにする。

「ほんっとに面倒ですよ。なんだか中学時代に戻りたくなっちゃいます」

「みんな仲良しだったもんね、菱本先生のクラスの時は本当に楽しそうだったもんね。高校になるとみないろいろ忙しくなるし、大変なのよね。あ、そうそう立村くん？」

いきなり上総に話が振られて慌てて背を伸ばす。もちろん手に持っているのりとくるんだきゅうりは小皿に戻す。

「はい、なにか」

「いつもうちのお姉ちゃんのテストの手伝いしてくれてるのよね。クラスで英語が一番なんでしょう？　青大附属の英語科でトップというのはすごいことよね」

「いえ、それほどでもないです」

「なーに遠慮してんのよ、事実言ってあげてるんだからさ、もっと堂々としなさいよ！　ったくねえ、母さん、思わない？　この態度あいつに似てるって。私いつも言ってるのがこいつなのよ」

「ああ、うちの王子様ねえ。確かにねえ。もう少し英語ができればねえ」

「英語以前の問題じゃん、あいつは！　もう、今日さ、せっかくだったら一緒にご飯食べて少ししゃべらせてみたかったんだけどね、立村とさ。面白かっただろうなって思うんだけどどう思う美里？」

「こずえの弟くんとでしょ？　うーん、どうだろう。立村くんはあまりうれしくないよね。自分の鏡を見るようなものじゃない？」

どう答えても失礼にあたりそうなので、あえて食べ物のみで口をふさぐことにした。どうも女性ばかりが揃うと、息苦しくなる。いや美里とこずえだけならばまだ平気なのかもしれないけれど、明らかに自分よりも年上の異分子女性が混じると、かなり辛い。こずえのお母さんが苦手というわけではなく、年齢というものさしの差だ。

「さってと、おなかいっぱいになったとこでだけど、本日の命題いくよ。母さん、悪いんだけどこれから三人でピアノレッスンに専念するから、ちょっと三人だけにしてもらえるかなあ」

食器類を下げ終えた後、こずえが切り出した。台所へ向かうらしいこずえのお母さんは少し怪訝な表情を浮かべた。

「私がいちゃまずいのかしら。別に隠し事しているわけじゃないでしょう？」

「するわけないじゃん、この面子で。けどねえ」

こずえはピアノの蓋を開けた。つややかな鍵盤が光っている。

「昨日話したじゃん、うちのクラスの合唱コンクールのこと。立村がピアノ持ってないのに伴奏者になっちゃったから、練習場所提供しなくちゃってこと」

「前から聞いてるわよ。ぜひぜひいらしてってあんたに伝えたじゃない」

「だからさあ、私が言いたいのは、まだ稽古して一週間も経ってないのよこいつ。母さんわかるでしょ。ろくすっぽ弾けないのにさ、みんなにご披露なんてことまだできそうにいないじゃん。今は稽古の時期なんだしさ」

上総が口を挟む間もない。こずえお得意のマシガントークが炸裂している。話を聞いているこずえのお母さんは表情を緩め始め、上総を楽しげに見つめた。

「はいはいよくわかってますよ。あんたよりもその辺は専門家ですからね」

「まだ雨だれ状態のぼてぼて弾きしかできない状態で母さんに聴かれたくないってのも、あるじゃん、そうだよ、立村、ちょっとあんた返事しなさいよ」

——いや、返事をしたらまたどつぼにはまるからやめとく。

あえて飲み込み。頷くだけにする。

「何も私だってこんな面子で3Pなんて発想ないしね。母さんそっちの方は安心していいよ。ま、気になるんだったらこっそり扉にガラスのコップくっつけて聴くくらいならOK。とにかく練習中なんだからそこそこ、気遣いしてよね」

笑い出したこずえの母はやれやれといった風に娘を見やり、

「しょうがないわね、そんなんなら大人は退散するとしますか。別にガラスのコップはくっつけるつもりはないけど、さっき美里ちゃんたちからもらったケーキを運んでいくくらいは許してもらえるわよね」

「そりゃあもちろん！」

なんだかそこまで気を遣ってもらわなくてもいいような気がするが、実際こずえの言うことは正しい。なんとか両手で弾けるようになったとはいえまだまだ先は遠い。こずえと美里は事情を理解してくれているので上総のたどたどしい演奏も耐えてくれるだろう。しかし、初対面のこずえ母の前でその姿をさらけ出すのは辛いものがある。

「さってと、うるさい大人がいなくなったところで」

盗み聞きされている可能性ももちろんあるが、その点は深く考えないことにする。

「立村、あんた楽譜持ってきた？ まずは弾きなよ」

「ありがとう、遠慮しないで弾くよ」

ちゃんと許可も得たわけなので、さっそくかばんからファイルを取り出し、譜面立てに立てかける。二曲分がまとまっている。

「じゃあ最初は、『恋はみずいろ』弾いてみなよ」

リクエストにお答えする形でさっそく鍵盤に指を走らせて見る。譜面を読みながらゆっくりと

弾く。なんとかつつかえずに進むことができた。

「うわあ、立村くんがんばったじゃない！　すごい、すごい！」

美里が満面の笑顔で拍手してくれた。なんだか照れくさい。一方こずえは、

「まあ、一週間しか経ってないならこれだけできればってところかな」

「辛い評価だな。否定しないけど」

「だってさ、あんたもう一曲あるんだよ。『モルダウの流れ』こっちはどうなのさ」

勢いで二曲目に進む。こちらはなかなか手ごわい。思いっきり和音を弾き間違えたりなんなりしてしまう。やはり難しい。

「こっちはまだかあ」

「こずえ、それかわいそうだよ。まだ一週間しか経ってないんだよ。立村くんもすごく練習したんだなってことよくわかるよね」

努力を認めてくれているのはありがたい。美里の言葉は救いだが現実は厳しい。

「あのさ、立村、できればさあと一週間で歌と合わせられるようにしたいんだけどそこまでやれる？」

こずえの問いに思わず考え込む。そりゃ無茶だ。

「そんな非現実的なこと言うなよな」

「いやね、できれば来週から合唱の練習を開始するつもりなんだけど、たぶんみな部活が忙しいとか、演奏会準備とか、あと塾とかいろいろ理由つけて参加できない子が圧倒的に多いような気、するんだよね。今日美里が逃げ出したみたいに大嘘つく子とかも」

「悪かったわね」

美里にはかまわずこずえは腕を組んで頷く。

「うちのクラスなんだけど、知れば知るほどいろいろ面倒な事情もちの子が多いってことが判明してね。私も毎日放課後残るよう声かけるつもりだけど、全員揃うのって物理的に無理なのよ。だったらさ、昼休みとか時間使える時にパートごとでもいいから集まって練習ってことが必要になるわけ。その時にあんたの弾いた曲がテープに入っていれば、その場で即練習できるじゃん？」

「そういうことか、なるほどな」

「そういう細切れの練習を積み重ねないと、かのC組連中を負かすことは難しいと思うのよねえ。だからさ、立村には悪いんだけどもう少しピアノのお稽古がんばってもらって、その上でテープに吹き込んでほしいわけよ。そのためにあと一週間でなんとかならない？　ターボエンジンかけてもらえないかなあ？」

「ただ、一週間だろ。あまりにも無理過ぎだよ。独学でやるには限界あるよ」

「やっぱり野々村先生に見てもらおう？」

美里と一緒に無言の抗議をする。

「あっそっか、そのことも気になってたんであとで教えなさいよ。とにかくじゃあ、ここでとこ

とん弾きな、繰り返し弾いて練習して、今日帰る時には『モルダウ』も両手で最後まで弾けるところまで持っていきなさいよ！」

——古川さんもそれなりに準備進めてるんだな。

協力するつもりはある。もちろんテープを吹き込む準備はしたい。上総はすぐにピアノに向かい、『モルダウの流れ』をゆっくりと弾き直し始めた。目標は、とにかくつかえなくて録音レベルまで持っていくこと、これしかない。

その六 鍵盤めぐり (4)

高校生三人でわいわいやりながらピアノを弾いているうちにだんだん時間が過ぎていく。途中でお約束のフルーツゼリーたっぷりのケーキが届けられ、もちろんこずえがお母さんを丸め込んでおっぱらい、一休みすることにした。

「あーあ、やっぱりこれおいしいよね！ 立村くんどう思う？」

「うん、甘ったるくないからいくつでも食べられるよな」

「やだよ、あんたになんかあげないよん。羽飛なら別だけど！」

あほっぽいやりとりを続けつつ、添えられた紅茶をいただく。本格的なセイロンティーだ。舌に響く。

「うちの母さんね、こういうの結構好きなんだよね。人をもてなしたくってなんない性格なのよ。だから本当は、私たちのところに割り込んできたくてなんないんだよ」

「わかる、そんな気する」

「でもね、今日はさすがにまずいでしょってことで。そうだ、ところでちょうどいいところ、あんたに話しておきたいことがあるんだよね」

こずえはあつという間にケーキを平らげ、皿をお盆に重ねた。まだ上総と美里は半分しか手をつけていない。美里はともかく上総が残しているのは単純に、味わいたいそれだけだ。

「俺に？ クラスのことか？」

「そうよ。例の水曜の件。もううちの女子たちが大騒ぎでさ。男子たちは一部C組連中覗いて白けたもんだったけど、私、ずっとどっかのテレビレポーターみたいに情報集めまくってたんだからね。えらいこった」

「そんな騒ぎだったかな」

首をひねる。上総自身の中では大騒ぎだった野々村先生との一件だけど、次の日A組の男子連中からはそんなに突っ込みを受けなかった。関崎を含め他の男子たちもあまり人の色事に興味を持つ奴が少なかったからかもしれない。もっとも考えてみれば、A組の男子連中は藤沖の恋愛沙汰についても話題にしようとしなない。もともとどうでもいいと思っているのかもしれない。上総にとってはありがたいことである。

「女子はねえ、情報回るの早いからね。美里も木曜の朝、すぐ聞いたでしょ」

「貴史が水曜の夜にわざわざ私のうちに来て教えてくれたよ。なんなんだか」

それは知らなかった。上総が美里を静かに見つめると、口を尖らせて、

「だってしょうがないじゃない！ 私が貴史の立場だったとしても、たぶん教えにいったと思うよ。あたりまえじゃない」

「でも、A組には来なかったよな、木曜と金曜は」

「だからそうなの！ 貴史から聞いてたから、たぶん立村くん私に言い訳するのめんどくさいだろうなと思って今日まで延ばしたの。当たり前でしょ！」

確かに上総の性格を美里は熟知している。

「お見それしました」

「わかってればいいの！ でも、ねえ、こずえ、私が一緒にいて聞いてもいいことなの？」

恐る恐るといった風に、でも隠したらただじゃおかないといった凄みも利かせて美里が尋ねる

。

「でなかったらここに呼ばないって。あのね、実はさ、私、C組の伴奏やる子、ええと誰だったっけ、元A組の子で」

「瀬尾さんか」

「あんた名前覚えてるんだ。珍しいね。そう、その瀬尾さんの事情をとある情報筋から聞いてきたんだよね」

含みを持たせ、こずえはフォークを握り締めつつ語る。

「野々村先生のごことはまあ置いといて、瀬尾さんなんだけど、なんであの子がいきなり食ってかかったかってことみんな気にしててねえ」

「そりゃ気にするよ。本当にびっくりした」

野々村先生がらみの年上の視線に関していろいろ追求されるかと思いきや、話がそれていて少しほっとした。上総もむしろ、謎の憤りを見せた瀬尾さんの事情の方がはるかに共感できる話題だと思う。

「彼女ね、中学卒業までは音大目指すつもりでピアノ続けてたんだって」

こずえはさらりと語り始めた。

「けど、高校に入ってから方向転換したらしくて、ピアノも別の先生につくことにしたんだって。この辺ややこしいんだけどね、最初瀬尾さんが習っていた先生は音大進学を目指す専用の子たちが集まる教室だったらしくって、あきらめることにした瀬尾さんとしてははずらい場所だったらしいのよ」

「そうなんだ。私も瀬尾さんって話したことないからわからないけど、確か中学時代は音楽委員三年間やってたよね」

「そうなんだ、全然知らなかった」

影が薄い女子ということだけは把握した。

「でさ、方向転換したのが四月と考えてもう九月。五ヶ月しか経ってないわけよ。音大に行ったらものすごく学費かかるだろうし、レッスンだって大変だって宇津木野さんや疋田さんから聞いたことがあるけど、ほんとはんぱじゃないみたいだよ」

「だいたい想像はつく。芸事を本気で突き詰めたらそうなるよな」

上総も頷く。どういう事情かはこずえの話を詳しく聞かないと分からないが、子どもの頃から一筋に目指してきた道をあきらめねばならないというのは想像以上の苦しみじゃないかと思う。金銭的な負担というのは断念の理由になるだろう。

「で、これは又聞きなんで本当かどうかはわからないんだけど」

こずえは声を潜めた。いかにも女子の内緒話に紛れ込んだ居心地の悪さあり。

「そこのピアノの先生が、中学卒業後に瀬尾さん呼び出して、あんた才能ないからやめなさいみたいなこと、言ったらしいんだよね」

「うそ、そんな、ひどいこと言われたの？」

美里が口を覆って息を呑んでいる。

「そうそう。ただその先生の方針を知っている人からすると、才能のない人に無駄なお金をかけて音大受験勧めたってかえって不幸になるから、宣告は早いうちにと判断みたいなんだよね」

「引導渡したってことか」

「そう。そのピアノ教室では毎年中学卒業あたりにそのあたりの宣告が下されるらしいんだよ。もしその教室が趣味の範疇で稽古する子中心だったら、瀬尾さんもこんなに落ち込まなかったかもしれないんだけどね。居場所なくなっちゃったんだろうね。それで今は別の先生を元の先生から紹介してもらってのんびり続けてるってわけ」

すっかり紅茶が冷めている。飲んだ瞬間の苦味に目が覚める。

こずえは続ける。

「まあわかんないよ。のんびりって言ったけど瀬尾さん自身は一生懸命今でも練習してるんだろうし。ただね、うちのクラスみたいに、学校の演奏会優先だから合唱伴奏辞退しますなんて発想はなかったんだろうね」

「でも、瀬尾さんも確か、十月の演奏会出るんだろ？ 肥後先生がそんな話していたけどさ」

音楽の授業でそんな話をしていたような気がする。上総が尋ねると、

「瀬尾さんはまだ自分が音大あきらめたなんてことを周囲に言いふらしてないからね。言う必要もないってこと。知らない人もほとんどだし、肥後先生も中学時代の実績からして当然目指すもんだと思ってエントリーさせたんだろうね。立村、あんたには絶対お誘いこないだろうけど、そういうレベルの演奏会なのよ。けど、瀬尾さんはもう階段から降りてしまっているわけだから、そりゃ複雑よね」

頬杖をつき、ため息を吐く。

「理由はよくわからないけど、いろいろ辛いんだと思うよ。周りはよかれと思って勧めたことなのかもしれないけど、気持ちの整理をするにはなかなか時間がかかるもんだよね。肥後先生や野々村先生が立村を一生懸命教えようとしてて、あんたもそれなりにがんばって、和やかに稽古している中で、自分だけが無視されちゃったっぽい気持ちになったんじゃないかな。そんな気しないかなあ」

美里がこずえに向かい大きく頷いた。上総をじっと見上げるようにして問いかけてきた。

「立村くんなら、わかるよね」

「言葉にできないよな、それだと」

「そうだよな、立村くんなら、そうだよな」

鍵盤に目をやった。白と黒の鍵盤が並んでいるだけの楽器で、こんなにもひとりひとりの物語が奏でられている。

その六 鍵盤めぐり (5)

曲がりなりにも女子の家に夜遅くまで居座るわけにもいかず、五時少し前にこずえ宅を出た。自転車置き場までこずえが大きなキーボードをソフトケースに入れて、背負うためのバンドもセットして運んでくれた。思っていたよりも巨大だ。背負って品山まで帰ると考えるだけで気が重くなる。

「まあまあそれがあんたの定めってとこ、男の子なんだからめげるんじゃないよ」

ため息吐きながらバンドでしっかり斜め掛けしてくくりつける上総を、こずえと美里が笑いながら見ている。

「けど、自転車で運ぶのって大丈夫？」

「たぶん、大丈夫。明るいうちに戻ればそれでいいし。それにギターとか剣道の道具とか自転車で毎日運んでいる奴だっているんだから、たぶん」

とはいえ、かなりふらつくのも確かだった。バランスを保つのもやっとでサドルにまたがり、一足お先に上総は品山に向かい漕ぎ出した。

ピアノの稽古が目的とはいえ、結局半分以上はこずえと美里とのおしゃべりに費やされたものだった。もちろん邪魔しにきたとか文句を言う気はないけれども、やはり練習量が足りなくなりそうな不安もあったりする。

——けど、本当にいろいろあるんだな。ただ伴奏弾いているだけじゃないんだな。

A組クラスメートの宇津木野さんと疋田さんの事情を聞いた時も驚いたが、今日の瀬尾さんの話も身につまされた。中学三年卒業の段階で、夢に引導を渡されるというのはかなりしんどいんじゃないだろうか。こずえがどういうルートでその情報を仕入れてきたのかは知らないが、瀬尾さんの立場からしたらあまり人に知られたくない秘密だろうに。興味津々で聞き入ってしまった自分にも罪悪感を感じる。

——俺みたいな何にも弾けない奴と同じ場所で伴奏するなんて、考えてみたらものすごく屈辱なのかもしれない。宇津木野さんや疋田さんは詳しいこと知らないけどたぶん音大かどこか目指してるんだろうし、それなりのレッスンを重ねているだろうし。本当だったらそういう人たちと切磋琢磨したいのに、よりによって俺なんかと比較なんて悔しいだろうな。

家についてから荷物を解き、身軽な格好に着替えてさっそくキーボードを取り出した。

こずえの家で見せてもらった時よりもはるかに大きく見える。電源コードでつなぎ机の上に乗せてみる。電源を入れて鍵盤の「ド」を押して見る。しっかりした音が出た。窓を閉めないともまずそうだ。次に和音の「ドミソ」を、「ドファラ」をそれぞれ両手で弾いて見る。下手したら近所騒音迷惑になりそうだ。

——練習の時は全部閉め切ってやらないと絶対苦情くるよな。

本当はヘッドホンがあるといいのだが。できるだけ音を最小限に絞り、窓も閉め、カーテンもぴったりあわせた。楽譜を開き、「モルダウの流れ」をゆっくりゆっくり弾いてみた。両手で合わせて、どちらかというとな野々村先生が教えてくれた通りに進めてみた。

なんとしても、来週中にテープ録音ができる程度に仕上げねばならない。上総に与えられた使命はなかなかきついものがある。

途中灯りをつけて手元を明るくし引き続けていると、玄関で物音がした。時計を見ると七時半過ぎだ。キーボードで練習しているうちに思ったよりも時間が経ってしまったようだった。夕飯の準備が出来ていない。そういえばそろそろ腹も空いて来た。どうせラーメンにベーコンと葱を載せて終わらせようと思っていたところだ。上総は台所に向かった。ちょうど玄関を上がってくる父が、疲れたように自分の肩をもんでいた。

「早く帰ったの」

「悪いか。その顔だとまだ食事作ってないだろ」

「ラーメン作るつもりだけど、父さんの分も一緒に用意しようか」

「当たり前だろ。お前ひとりで食うつもりだったのか。そんな殺生なことしないだろ」

軽口をたたきつつ、台所でラーメンどんぶりを用意する。鍋に火をつけてゆだらせて、ついでに麦茶も沸かす。まだ冷たい麦茶が恋しい季節は終わりそうにない。

父はかばんを書斎に置き、パジャマに着替えて食卓に着いた。

「もう着替えたんだ」

「今夜はお前を迎えに行く必要ないからな。麺が伸びる前にまず食べよう」

出来立てのラーメンをつつきつつ、父と向かい合ってひたすら食べ続けた。しょうゆラーメンの味付けが少し濃すぎたような気がして、やたらと麦茶をお代わりしていた。

「お前にしては大雑把な味付けだな」

「疲れてるだけだって」

「何か疲れることしたのか？」

「してないよ。友達から借りてきたキーボードを弾いてただけ」

こずえの家に遊びに行ったことは略しておいた。女子の家に訪問するなんてことは、やはりあまり聞かれたくない。たとえ下ネタ女王様であってもだった。

父はたいして興味も示さず、ラーメンの汁を一口二口啜り、

「ところで、上総」

呼びかけた。上総も残りの麺を箸でかき集めていたが、すぐ顔を上げた。

「どうしたの」

「明日のことなんだがな。少し予定が変わった」

「予定って、ピアノの先生のことかな」

勝手に父が決めたことだったので適当に流していたのだが、知り合いのピアノ講師を頼って一ヶ月お世話になるということで話が決まっていたはずだった。

「そうだよ。明日お伺いする先が別のお宅となったんだ」

「別？」

言われた意味が分からない。

「まず平らげろ。これから話す内容は、こうやって汁を飛ばしながらしゃべるもんじゃないからな。しかし、とんでもない展開になったもんだなあ」

ひとりごとのようにつぶやく父の様子を見る限り、面倒な展開になりそうだということだけはだいたい見当がついた。台所で洗物を済ませ、上総は何杯目かの麦茶ポットを持って居間のソファに腰掛けた。父がもちろん真向かいに座っていて、夕刊にじっくり目を通してている。

「話って何」

早く部屋にひっこんでキーボードを鳴らしたいしシャワーも浴びたい。父を促した。すぐ目を上げた父は、上総を上から下までじっくり観察するようにし、

「ま、いいだろう」

また独り言をつぶやいた。向き直り、両膝に手を当ててかがむようにし、

「ピアノの先生なんだが、思うところあって、ある人をお願いすることにしたんだ」

「ある人って誰。俺の知ってる人？」

「知っているわけないだろう。お父さんが昔からお世話になっている方なんだが、お前のことを話したらぜひ手ほどきしたいとのお申し出をいただいた」

ずいぶん父の言い方がへりくだっているような気がする。違和感がある。

「その人、ピアノの先生？」

「いや、長年趣味で続けていらしたと伺っている。何度か演奏を耳にしたことがあるが、趣のある弾き方をなさるお方なんだ。趣味の範疇で独学で進んだとはおっしゃっていらしたが、もともと筋がよかったんだらうな」

なんだか父の説明のしかたが、あいまいすぎてイメージがわからない。父にしては珍しいことだった。

「今年の春に長年勤めた企業を定年で退職なさってから、悠々自適の生活を送っていらっしゃるんだが、たまたま昨日お会いする機会があった。仕事がらみだったが、昔からお世話になっていたこともあってたまたまお前のピアノ伴奏の話をしたんだよ」

——どういふ話だろう、また俺が馬鹿だとか間抜けだとかそういうことばかりだろ。

あまり面白いことではない。用心に越したことはない。

「お父さんも本当はこの方にお前のようなお世辞にも上手とは言えない奴を紹介するのはなんだか申し訳ない気がするんだが、向こう様が若い世代と触れ合う機会を強く求めていらしててね。まあ、お前は音楽を専門に勉強したいわけでもないし、なによりもその方のお人柄に触れることがきっとためになるはずだし、ずうずうしくも今回は甘えさせていただくことになったと、そういうわけなんだ」

「よくわからないけど、父さんの先輩に当たる人？」

「先輩なんてもんじゃない。本当だったらお父さんが直々にご縁をいただける方ではないんだ。お前には想像つかないかもしれないがな」

——とにかく、偉い人、ということか。

「だから、上総、明日八時半にお伺いすることになるが、きちんとした格好で身支度整えておきなさい。本当は制服が一番いいんだらうが、お前の一張羅のスーツを着なさい。そのくらいの礼

儀は守るべきだよ。それと」

父にしては珍しく、怖い眼差しだった。

「あの方の元へヶ月お世話になる以上は、手抜きなど絶対にするなよ、下手なことしたら家から追い出すくらいのことはするからな」

——父さん、なんか目つきが違うよ。

「わかった。でも、明日、八時半に行くの？」

「違う、八時半にお会いするから、出発するのは七時半だ。そのつもりでいつもの時間に起きろよ、早めに今日は寝なさい」

とにかく、やたらと面倒くさいことになりそうだという予感だけはびんびんとした。ぴりぴりした父の口調から逃れるため、上総はさっさと風呂を沸かしにいくことにした。もちろん、キーボードの練習は念入りにしておかないとまずそうだ。

その七 老師訪問（1）

いつもなら七時くらいまでベッドでごろごろしている日曜日。夜中までキーボードと格闘し続けていたせいかまだまだ眠い。年に一度もないことが起きている。

「上総、まだ寝てるのか、早く起きろ」

「起きてるよ、まだ七時前だろ」

六時半に父が部屋のドアを開けいきなり布団をひっぺがすなんてことは、母が出て行ってからはまず一度もない。寝起きなのかそれとも別の要因なのか、とにかく父の機嫌がすこぶる悪いことは確認した。しかたなく身を起こす。

「文句言われなくても起きるけど、もう少し言い方あるだろ」

「寝ぼけてないで早く着替えろ。それと、もちろんシャワーも浴びて身綺麗にするんだ。今日は普通のところに行くんじゃないからな。昨日も話しただろ」

「わかってる。言われなくてもするから、早く部屋から出て行ってくれないかな」

向こうがそう出るならこちらもそうする。きっぱり追い出してやった。

——いったいなんだろ。昨日から妙に父さんおかしいぞ。

今日の午前中、朝八時半にピアノを教えてくれるという日くありのお宅に訪問することはもちろん頭の中にあるし、準備もしている。少なくともかばんに財布や楽譜のセッティングは済んでいる。でもどう考えても七時目覚ましでも問題はなさそうな内容に思えるのだが、なぜそんなに父はいきり立っているのだろう。もう少し言い方があるはずだ。こちらもしっかり言って面白くない。

着替えを用意してさっさとシャワーを浴び、丁寧にドライヤーをかけて自分なりに髪の毛を整える。本当だったら女子がするようにマニキュアもしてやろうかとか思ったりもしたが、もちろんそんなものはない。朝食の準備のため台所に向かうと、すでに父がきちんとしたスクランブルエッグと牛乳、それにトーストを用意していた。

「遅すぎる。早く食べてスーツに着替えなさい」

「言われなくてもそうする。黙ってくれないかな」

嫌味を放って急いでかぶりつく。塩も胡椒もなしというのはどういうことだろうか。文句を言いたいのが我慢する。父も通常の状態ではないようで、珈琲を啜りながら指先をテーブルにおいてパタパタ打ち鳴らしている。これを母のいる前でやらかしたら半殺しに遭うんじゃないかと上総は思うのだが、全く気にしていないらしい。

「洗物はこちらでしておく。とにかくきちんとした格好しろよ」

「結洲で着たスーツでいいだろ。夏物だけど」

「あれなら恥ずかしくないな。それでいい。それと上総」

時計をはめながら父が上総を呼び止めた。

「今日は、お父さんがすべてお前の代わりに話をする。だから質問されるまでは挨拶以外余計なこと言うなよ。何度も昨日言ったことだから分かっていると思うが」

「しつこいくらい言われてるから、死んだって口利かない。それで文句ないだろ」

全く、何度繰り返せば気が済むのだろう。余計なこと言うな、もちろん正しいけれども、昨日の会話中に五回以上は出てきた内容だ。客宅で失礼がないように振舞うことに依存はないし、上総も好き好んでおしゃべりしたい性格ではない。しかしそれにしても、

——そんなに俺が何かやらかしたら、首でも飛ぶようなことあるのかな。なんかおかしいよ。父さん異常だよそれ。

少なくとも普段の父の態度とは違う。もともと父は人に対して礼儀はわきまえているけれども、過剰なほどへりくだる性格ではない。権威に対する反骨心のようなものを見せることはあまりないけれども、納得いかないことには丁寧に反論する。例を挙げれば夏休み最終日の菱本先生相手の対応、大抵はあんな感じでいなす。だが、今回だけは一体なんだろう。まるでどこかのお城に連れて行かれて王様と謁見するような雰囲気だ。

——そんな相手をわざわざ自分の息子のピアノの先生にしようなんて発想が普通ないよな。なんだろう。もしかして父さん、どうしても断れない事情があるのかな。面倒な付き合いとかいろいろあるのかな。よくわかんないけどだからといって、俺にばかり文句言うのはやめろよな。まあ行くからにはきちんとご要望にこたえてやるけど、うちに帰ったらとことん追求してやるからな。覚悟しとけよ。

心の中でのみ口汚くののしることにする。さすがに父に反抗する場では、今はない。これから出かける先はどうかのお城ではない、単なるピアノにお詳しいどこかのお偉い方なのだから。それなりの礼儀は守る。

ネクタイもきちんと締め、靴もきれいに磨き、上総が意識する限りは完璧な身なりに整えた。結洲の会に手伝いした当日着たスーツなので、まだあまり手を通していない。すぐにクリーニングに出したし、ほぼ新品状態と言い切っていいだろう。

「まあ、そんなもんだろ」

頭からつま先までまじまじと見つめ父も及第点を出してくれた。その父もほぼ同様のスーツ姿なので後ろ姿だけ見ると見分けがつかないかもしれない。普段のカジュアルなジャケットではない。これから結婚式か葬儀かどちらかに出席すると言って通用しそうだ。

「忘れ物もないか」

「ない。夜のうちに準備してるし。楽譜、財布、筆記道具、手帳、ハンカチ、ティッシュ、これで問題あるかな」

「了解」

さすがにそれは文句がないようだった。

「それともうひとつ、今のうちに」

「だから余計なこといわないから安心しろよな」

「それじゃない、上総、今日のことなんだが」

父は首を振り、上総の肩に手を置いた。

「しつこいようだが今日のことは、絶対に母さんに話すなよ」

それは言われてなかった。聞き返す。

「どうして」

「わかるだろ。お前のピアノの手ほどきしたのは誰だか考えればな」

「母さんだってことはわかるし、俺もしゃべる気最初からないけどなんで」

「ああ、それはだ」

そこまで言いかけて、父は何度も上総の肩を叩いた。

「結論だけわかっていればいいんだ。しゃべるな。それだけだ。理由など考えるな。お前はとことんシンプルに、ピアノのことだけ考えてろ」

——わかってるけどさ。でも何で。

どうしても「なぜ？」だけは消すことができない。これ以上父と口論するのもいやなので、上総はすぐ玄関に出てさっさと靴に履き替えた。父の車でいったいどこに連れていかれるのかわからないが無難に振舞うつもりではいる。

七時五十分。父が運転席に乗り込んだ。隣の助手席でシートベルトを締めて待っている上総に、

「いいか、上総」

またしつこく確認をしようとする。ここまで繰り返されると上総としても、馬鹿にされていると思わざるを得ない。返事をしないことにして横向いた。

「話、聞こえてるのか」

「聞こえてるしもう耳にたこができるからもういいよ」

「親にそれはないだろ」

「子どもに常識なしって何度も確認するのもないだろって言いたいよ」

乱暴に父がアクセルを踏んだ。生命の危険を感じそうな運転の荒さだった。シートベルトは必要だ、絶対に。

——けど何でだろう。そんなに、神経ぴりぴりさせるような相手なのかな。

表情を読み取られないように、外を眺めながら上総は思いを馳せた。曇り空で涼しさが増す朝の天気で、スーツでもそれほど暑苦しくない。昨日よりは過ごしやすいだらう。

——そんな面倒くさい相手に習いにいくくらいなら、キーボードと学校のピアノで十分な気もするけどな。けど音楽室のピアノもそう借りられないし、古川さんの家も週に一度が限度だらうし。学校は学校でまた事情が面倒な人が多いだらうし。そう考えると習いに行っても確実に教えてもらうのが一番いいんだらうけどな。まあ確かに母さんに頼むのだけは避けたいってのは、あるな。

品山を抜け青潟市街地に入ると父の激しいハンドルさばきもだいぶ落ち着いてきた。同時に父の横顔もいたって普段のものに変わってきている。正気に戻った、と言ってよい。

「父さん」

「どうした」

「確認しておきたいんだけどさ」

恐る恐る、ご機嫌を損ねないように父に尋ねた。

「挨拶はもちろんきちんとするけど、ピアノに関する話は聞かれたら答えてもいいよな」

父は黙った。赤信号でいったん止まった。

「そうだな、礼儀を守るんだったら、聞かれたことにきちんと答えればいい。ピアノ以外でも、学校のこととか、委員会のこととか。お前の先輩に当たる方だから、きっとお知りになりたこともたくさんあるだろうしな」

憑き物が取れた状態でもって父は答えてくれた。穏やかで決して声を荒げることのない、上総が一番よく知っている父の姿だった。

その七 老師訪問（2）

海岸線をそのまま走り続け、青潟市街から少し離れた家に到着したのが八時十五分を回ったところだった。約三十分程度。車には幸い酔わずにすんだ。

——かなり寒いな、ここ。

温度差がかなりある。スーツを着てきて正解だった。父に促されて後ろから歩いていく。二階建ての邸宅だが取り立てて見るべきものはない。よく住宅地で見かけるものとはほぼ変わらない。ただ、庭が広く、テーブルなどがすえつけてある。二階のベランダから見下ろせそうだった。

「上総、わかっているな」

「十分に」

短く返答し、父のすぐ後ろにくっつく。呼び鈴を父が鳴らす。

「おはようございます。お約束しておりました立村です」

ドアホンごしに「どうぞお入りください」と女性の声がある。真っ黒い、重たそうなドアを開きそのまま待っていると、奥から年配の男性がゆったりと現れた。

「お待ちしてましたよ。立村さん、さあどうぞ。それと君の？」

「おはようございます、それとこれが先日お話ししました、息子の上総です。お世話になります」

ちらと父は上総を見やった。挨拶しろ、の合図だろう。

「立村と申します」

そこで父のささやき声が飛んだ。

「フルネームで挨拶しろよ」

しまったしくじった。慌てて続ける。

「立村上総と申します。初めまして。本日はよろしく申し上げます」

舌打ちしたような顔をしている父に目で謝ろうとするが無視される。目の前の年配男性はにこやかにふたりを見比べて、

「朝からそうぴりぴりしなくても大丈夫だよ、立村くん。まあとにかくあがってゆっくりお茶でも飲もうか。それと上総くん、だったか」

じっと上総の中を探るようなまなざしで、

「飲みたいものは何かあるかな」

尋ねてきた。さっそく質問ときた。どうすればいいんだろう。素直に「いえ、何でもいいです」とか「朝は牛乳かオレンジジュースにしています」とか「今の時期はまだ麦茶ですよ」とか答えればいいのか。さすがにそれはまずいだろう。

「あの、お任せいたします。恐れ入ります」

「遠慮しないでいいんだよ。さあどうぞ。お待ちしてましたよ」

白髪をつややかに整えた穏やかな男性は微笑みながら向かって左側を手で指した。背を向けた隙に父がささやく。

「あとはお父さんがなんとかするから、お前は黙っているよ」

「もちろんそうするって」

今のように質問を投げかけられたらどうしようもないというのに。

いわゆる居間のような部屋に案内された。「の、ような」というのはちらと見えた隣の部屋が完全なる客間だったからだ。よくわからないが由来のありそうな銅像とか絵画とかが飾られていていかにも、だれか偉い人をもてなすような雰囲気か漂っていた。上総たちが案内されたのは、その隣りにある少し気さくな感じのする部屋で、ソファーとピアノ、本棚が並んでいた。

「立村さんと私の仲だから、ざっくばらんにいきましようか」

「いえ、そんなもったいない」

父がやたらと固くなっているのが気になる。とにかく合わせることにする。奥から同じ年代らしき女性が現れ、慌てて挨拶する父に対し笑顔で、

「立村さんの息子さんにお目にかかれるとあって、主人も心待ちにしていたんですよ。今日はゆっくりしていらしてくださいね」

お茶をふたりに、上総にはオレンジジュースを置いて出て行った。

「家内も、若いお客さんが来るのは久々で若返っているらしいよ」

「いや、そのめっそうもありません」

「まあまあ、じゃあさっそく本題に入るとするか。立村さんの息子さん、上総くんと言ったね」

「はい」

礼儀だけを頭において答えた。まっすぐ目を見て、膝に軽く握りこぶしで手を置き、背を伸ばす。母に仕込まれた礼儀どおりにいく。

「そう硬くならなくていい。しかし、こうやって見ると立村くん、君によく似ているね、顔かたちというよりも雰囲気かな」

父は照れくさそうに微笑を浮かべ、ちらと上総を横目で見た。

「今月で十六になります。先日お話した通り、現在は青大附属のお世話になっていますが、僕の血を引いているせいかお世辞にも出来のいい方とは、言いがたいものですね」

「謙遜しなくていいじゃないか。青大附属は私の母校だよ。確か卒業式では英語答辞を読み上げたと聞いたがね。知り合いが今年の卒業式は盛りだくさんのイベントで実に楽しめたと話していたよ」

——ちょっと待て、ってことはもしかして、俺のあの答辞も噂で聞いてるってことか？

背筋がぞくりとする。目の前のお茶に手をつける気持ちにもなれない。

父も堅いながら静かに上総について語り続ける。

「そののところだけはなぜか親の血を引かなかったようで、語学の耳は持っているようです、ありがたいことに。将来はそちらの方面にでも行ってもらって、たまには僕の仕事の手伝いでもさせようかとか、いろいろ考えますね」

「耳がいいのかな、だったら音楽も得意だろう？」

上総に問いかけてこられても父との約束上答えることができない。俯いているとやはり父が代わりに答えてくれた。

「さあどうなんでしょうか。彼の母親にあたる人が長期休暇を使って定期的にピアノの手ほどき

を行ってまして、それなりにドレミの音を聞き取ることはできるようです。ただ今までは何か稽古事をさせるとか運動チームに参加させるとかそういうことはありませんでしたし、正直今回この子がなぜ、伴奏要員に立候補しようと思ったのか理解しかねるところがありますね」

ちろちろ見ながら上総について語る父。嘘ではない内容だった。

「そうか、特に部活動もされてないと伺ったがどうなのかな」

「そうですね、ご存知の通り、青大附属は委員会活動が活発なもので中学時代は評議委員会中心でいろいろやってきたようです。集団活動が苦手なところもあるのかもしれませんが」

「では高校では」

「高校も、今のところは帰宅部を堪能しているようで、昨日の夜から毎日キーボードをいじって遊んでいます。それなりに、伴奏をすることへの責任は感じているようです。お世辞にも出来るいい子とは言えませんが、よい友だちに恵まれる運だけはあるようです。それほど積極的に物事に参加するタイプでもないんですが、自然と周りに助けられてなんとかやり遂げているといえますか。それもまあ、彼の持つ運なのでしょうが」

——なんだか褒めてるのかけなしてるのかわからないけどまあいいや。

心でつぶやきつつ、改めて目の前の初老男性をじっくり観察する。まだ名前も確認していないのでなんとお呼びすればいいのかわからない。見た感じは穏やかだがどこことなく目の奥が鋭いようにも感じる。見た感じいわゆるゴルフウェアのようなポロシャツファッションで決めている。白いポロシャツの胸には、どこかのブランドのマークが小さく刺繍されている。客間のある家ということは、たぶんそれなりに裕福な家のご主人なのだろう。

「運ですか、それは立村くん、君も少なからずあるはずだよ」

「おっしゃる通りです」

また父は座ったまま一礼した。

「合唱コンクールの伴奏か。私のいた頃はそもそも合唱コンクールというイベント自体がなかったから最近出来たのかな。しかしなぜ、ピアノをほとんど稽古していないのに君の息子さんが立候補する気になったのか、そこのところが興味あるね。上総くん、ぜひ聞かせてくれないかな、君の口から」

ちらと、父に目を走らせた。またこわばった顔で受け止める父に、

「少し、息子さんと話をさせてもらえないかな」

釘を刺してきた。

——どうするんだよ、父さん、俺がしゃべることによってどうせなるんだろ？ どうしゃべれって言うんだよ？

目で合図をしたいが父も戸惑っているようで何も返してくれない。ただ、

「あの、ただいかんせんうちの息子はあまり人と話すことが得意ではなく、かえって失礼にあたることを口走るやもしれませんし」

などとわけのわからない言い訳をしている。やはり上総に出来る限り貝になってほしくてならないのだろう。しかしかなうわけもない。

「いや、立村くん、君からは十年以上彼の成長過程について聞かせてもらっていたじゃないか。私も家内も、実はこの日を待ちわびていたんだよ。少し彼とゆっくり話させてもらえないか、いいだろう？」

もう無理だ。父には帰ってから土下座して謝ろう。なるようになるしかない。上総は父に頷いて合図し、

「よろしくお願いします」

静かに答えた。

その七 老師訪問 (3)

話の流れから言って、父とこの老紳士とがいわゆる「師弟関係」に近いものを持っているのではと感じてはいた。おそらく上総の存在も事細かに情報を得ているに違いない。父が母と日くつきの離婚をしたことも、立村家の常識はずれな家庭環境もすべて知っているに違いない。

——どういふことかはわからないにせよ、命まではとられないんだしまあいいか。

詳しい事情を昨夜の段階で父から聞いていたらもう少しかしまったかもしれない。しかし何も知らない、それが強み。本番に強い自分の根性、とことん見せてやろうかと思う。

「上総くんはこれまでピアノに触れる機会はほとんどなかったのではないのかな。それがなぜ、いきなり合唱コンクールの伴奏を受け持とうと考えたのだろう」

何度も問われたこと、答えは決まっている。

「はい、本来であれば僕以外にも演奏の上手な人たちがたくさんいたのですが、十月に予定されている学内の演奏会を優先させてほしいとの強い希望があり、伴奏者が空席になってしまいました。僕もクラスではあまり役立っているほうではないのでこの機会に少しでも手伝えればと考えた次第です」

優等生の答えだとは思いますが間違っていないと思う。

「そうか、青大附属では演奏会をまだ続けているのか」

「いえ、演奏会は今まで行っていなかったようなのですが、今年になり初めて音楽担当の先生が企画したものと伺いました」

隣りで父がちらとにらむ。口がすべっただろうか。目の前の老紳士はふむふむ頷きながら上総の説明に聞き入り、

「かなり昔のことだからねえ。僕が知る限り、青大附属では毎年学校祭で音楽発表会を血から入れて行っていた記憶があるんだよ。そうだね、その中にはもちろん合唱も含まれていたけれどもピアノのソロ演奏がほとんどだったような気がする。時代が変わるごとにいろいろ方向性が違ってきたのかもしれないね」

となると、合唱コンクールの方が後付けということなのか。肥後先生が企画したというよりは、かつての形に復活させようとしているだけなのかもしれない。老紳士は続けた。

「僕の知っている青大附属はね、ひとりひとりの得意分野を生かすための教育に力を入れていて、ピアノをはじめとし、音楽も和楽器などさまざまな演目を用意して学校祭で発表の場を用意していたはずなんだ。となると、やはりよくあるクラス一丸となつてのイベントに様変わりしたのかな」

答えに困る。上総なりの答えはある。たぶんその通りだろう。

「曲は、どんなのを弾くのかな」

「はい、課題曲が『恋はみずいろ』、自由曲が『モルダウの流れ』です」

かばんから楽譜を取り出し、老紳士に渡した。受け取った紳士はじっくりと楽譜に目を通し、「課題曲と自由曲が逆かと思ったのだが。本格的な合唱曲ではないんだね。まあ、『モルダウ』

もよい曲だが」

「あまり拘りはないようです」

また父からきつい目でにらまれた。だからなんでそんなにいらいらするんだろう。

「そうなんだね。校風が少しずつ新しい方向に変わってきているのはむしろ喜ぶべきことなのかもしれないが、しかし驚いたよ。そこでこの楽譜で練習をしているのかな」

「はい、音楽室と、友人宅をはしごして、また別の友人からキーボードを借りて家で練習しています」

いたって普通のことを答えると、大きく老紳士はため息を吐いた。

「キーボードはピアノと違いタッチの差などがあるけれども不安はないのかな」

「ないといえば嘘になりますが、引き受けた以上はきちんと結果を出すつもりです」

「出す自信は？」

答えに迷う。父が割り込む。

「おそらくクラスの仲間たちも、上総のピアノ弾きレベルは重々承知しているでしょうから、あまり期待はしていないですよ。かえってそれがこの子には気楽なのかもしれません」

「そうかい、上総くん、正直なところはどうなんだい」

さあどうする。答えは決まっている。言い切ってやりたい。しかし隣りの父がどれだけ青ざめるかが恐ろしい。

「上総？」

何か言いたげな父と目を合わせた。帰りの車では大喧嘩になりそうだ。

「昔から本番には強いのでなんとかなると思っています」

額を押さえる父には悪いが、こればかりは本音だった。

——青大附中受験、卒業式英語答辞、文句あるかよ。

老紳士は上総の顔をとっくり眺めつつ、笑いを抑えきれないように何度も頷いた。

「相当腹が据わっているね。だがそれだけではないだろう？ もしこれがバイオリンだとか、フルートとか、どう考えても君の一夜漬けでは出来そうにない楽器相手だったら」

「もちろんそれは断ります。ピアノならまだ、ある程度は勝負できると考えたからです」

「勝負？」

ふっと老紳士の眼差しが厳しく見えた。すぐに解けた。言葉を間違ったろうか。

「父が先ほど話しておりました通り、小学校に入る前からピアノの手ほどきを母から受けていました。ある程度は自分のレベルも測ることができるつもりです。伴奏ならではの難しさがあることは承知していますが、それも含めて僕にできることなのではと見積もったところがあります」

「なるほど、勝ち目があると判断したわけなんだな。それならさっそく、今からここのピアノをぜひ弾いてもらおう。今日はそれが目的なんだからね。その上でゆっくりと改めて語ることにしようか。立村くん、それでいいね」

最後の一言は父に確認を取った。もうあきらめたのか、弱弱しい笑みで父は答えた。

「僕の教育がどれだけ失敗だったかを披露するようで心苦しいのですがよろしくお願いします」

——悪かったな、立村家の失敗作で。

父が上総に火をつけたくてならないのか、それとも妙に自分がいきがりたいだけなのか。

正直区別がつかない。自分でもなぜ、初対面の相手に背伸びした言葉を返してしまったのかわからない。思い返してみてもなんと自信ありげな言い方だろう。何様とか思われてもしかたない。

——まあ、間違えなければいい。好き勝手に弾いてやるさ。

譜面があればへまはしない。上総は誘われた黒いアップライトピアノの前に腰掛けた。隙のない磨き上げられたピアノの鍵盤が、冷たく光っている。指先を乗せ、深呼吸した後にゆっくりと「恋はみずいろ」から弾きはじめた。

古川こずえが「なんでこんな下ネタたっぷりの歌、合唱コンクールの曲にするかねえ」と勘違いした発言をしていたが実際の歌詞は決してそんな勘違いする内容ではない。ただ男子たちには「結ばれる」とか「愛し合って」とかそういう響きがどうも照れくさくなるのも確か。言われてみれば、そう思えなくもない。

曲が終わり次に「モルダウの流れ」に進んだ。こちらは「恋はみずいろ」と違いいかにも伴奏曲で旋律が和音で覆われている。その点弾きずらいところが正直あって、自分でもまだ指が動いていない。ただ時間の問題だろうという気はしている。

老紳士は静かに上総の脇に立ち、かがみこんで尋ねた。

「学校の先生にはご指導いただいているのかな」

「はい、先生たちには親切に教えていただいています」

「一週間でここまで譜読みできれば立派なものだ。あとはそれぞれに感情を上手に盛り込むことと、指揮者と息を合わせること、これがテーマだね。合唱についてはこればかりは集団練習を積むしかないが、もうひとつのテーマなら僕でもお役に立てそうだ」

時折光る鋭い眼差しをちらちらさせつつ、穏やかに老紳士は上総と、父とに告げた。

「立村くん、来週も同じ時間に上総くんを連れてきてもらえるか。今日からさっそくいろいろと彼に伝えたいことがあるんだが、一日、二日だと難しい。幸い合唱コンクールまではあと何週間あるか、だが」

「今日入れて三回ほど、です」

父が上総の代わりに即答えた。

「まずは始めてみてからにしようか。どうも私にはね、上総くんがなんとなく自分の感情をすべて押さえ込んできていて、それを吐き出す場所を探し続けているような気がするんだ。今の演奏もそうだし、話してくれた内容もそうなんだが。確か上総くん、君は今までお母さんに教えてもらった以外の稽古事は一切していないという話だったが」

「はい、その通りです」

事実なんだから仕方ない。答えるとまた父がわけの分からないことを言い出し頭をかいている。

「よい機会だよ、立村くん。これから行う予定の三回のレッスンはぜひ、君にも立ち会ってもらいたい。必ず、気づきがあるはずだからね。上総くんだけじゃなく君にもね」

思わず父と顔を見合わせた。これはどう考えても、予想外の展開だ。父の仕込みでは決していない。それが証拠に、父の答えは、

「そんな教えていただけるとは、そんな、あの」

言葉がぐちゃぐちゃ、動揺しているのが手に取るようにわかる状態ときた。

「めっそもない。もったいないことをおっしゃらないでください。こんな何もできないポンコツの息子に、こちらこそ恐縮です」

——息子を謙遜するにしてもここまで言うかよ、ポンコツで悪かったな。出来の悪い息子って今日、何回言った？

つくづく、間違えなくてよかったと思う。真夜中までキーボードを机において両手弾きを繰り返したかいがあったというもの。感情なんて考えている暇なんてない。とにかく、指を動かす。暗記するまで動かす、それしか考えていない。

——これから毎週、父さんの前でピアノの練習しないとまずいつてのかよ。ああ、なんかそっちの方が拷問だよな。だから何もしないでいいってあれだけ言ったのに、なんだよ父さん。結局自分で自分の首絞めているだけじゃないかよ。

はっきりしているのは、ピアノの鍵盤を上総がそっと鳴らしたことがきっかけで、父を巡るパンドラの箱が開いてしまったらしいということだった。

その七 老師訪問 (4)

老紳士のピアノに関する指導はごくごく自然なもので、取り立てて何がというものはなかった。教え方が下手だとかそういうわけではない。今まで上総が習ってきた肥後先生、および野々村先生の説明とほとんど変わらないというだけだった。

「このメロディは少しゆったりと力を抜いたほうがいいね、後半の盛り上がりに向けてエネルギーを溜めていくようにして、最後の『モルダウ』の部分に重なるように」

などと、ピンポイントのアドバイスをを行うのみにとどまった。

すでにある程度曲が指に入り込んでいることもあってつい、先走りたくなってしまいくせがあったことに気づかず、これからはバランスよく弾いていかないとまずい。この点を意識できたことは収穫だったと思う。何度か繰り返し通しで弾いて行くうちに、なんとか形は整ってきたような気がする。「恋はみずいろ」に関しては途中の間奏の部分がまだ手こずってしまっているところがあり、もう少し集中して練習することを薦められた。

「一番しか歌わずに終わるというやり方も、いや、どうかと思うが、学校の方針だししかたないだろう。だがせっかくの聞かせどころを楽しめずに終わらせるのはよくないね」

上総が察するに、おそらく老紳士の考えは曲のテクニックよりも「感情」を込めて弾くことを重視してほしいということのように思えた。それが証拠に途中何度か和音をとちっても特に何も指摘してこなかった。かわりに「モルダウの流れ」後半部分は何度も弾きなおしを指示された。あまりにも淡々としすぎているからだそうだ。

その間、父は無言で聞き入っていた。何も声がしなかったから、たぶんそうだ。

「みなさん、お茶がはいりましたよ」

ご主人の奥さまらしき女性が現れて声をかけてくれるまで、部屋に閉じこもって約一時間半、ピアノと格闘していた。それほど長いとは思わなかったが時計を見上げた時ちょうど朝十時を回ったところと気づいた。

「熱が入ってしまってすっかり時間が経つのを忘れてしまったよ。とりあえずここまでにしておこうか」

「ご教授、ありがとうございます」

立ち上がり、改めて礼をした。楽譜立てをたたんでピアノの蓋を閉じた。

「いや、私もひさびさに人にもものを教える楽しさを思い出したよ。立村くんも、将来楽しみな息子さんを持ったね」

上総からするとお世辞そのものにしか聞こえない。一方「立村くん」と呼ばれた父は恐縮しまくり、やたらと湯のみを握り締めている。

「いや、あの、僕の方こそ息子をここまで導いていただき、恐縮しています。感謝の言葉が見つからないくらいです」

「いやいや、まだまだこれからだよ。一通り彼のピアノの技量は把握したから来週からはもっと深いところを進んでいけそうだね。上総くん、とりあえずだ。うちのかみさんが用意したホッ

トケーキでもいかがかな。ささやかだが味は保障するよ」

「恐れ入ります」

上総もちろん頭を下げたが、父のお辞儀の方がほとんど敬礼に近かった。

朝ごはんはすでに消化が終わっていたようで、奥さまお手製のホットケーキの匂いに思わずつばが出てくる。腹が鳴りそうだが父にまた「お前、食べることしか考えてないのか」とかいやみ言われそうなのであえてこらえた。

「さあさ、どうぞ。それにしても立村さんの息子さんはお話を以前から伺っておりましたけれども本当に立派にお育ちになったわね。男親としてご苦労なさったかいがありましたわね」

内庭のベランダに案内された。玄関に上がったときには気づかなかったのだが、この家には内庭が用意されていて、そこからさるすべりの鮮やかな花や盛りが過ぎたとはいえまだ現役のひまわり、色の濃い目のしぼみかけた朝顔などを愛でることができる。さほど広い庭ではないけれども、やさしい色合いの草木が枝を伸ばしているのを眺めているとなぜかほっとした。

「秋ですね」

父がさっきまでの過剰な緊張感を少し解きつづやいた。老紳士も答えた。

「そろそろ萩、次にききょう、菊、さまざまな秋の花がお目見えする頃だ。この歳になると薔薇のような華やかな花よりも、いわゆる秋の七草のような野草をのんびり愛でるほうが心休まる、そういうものだね」

「わかります。僕もそれは感じます」

「上総くん、君はどう思う？」

また上総に話を振られた。どう答えるべきか迷うが、もう父も上総に発言をまかせているような感じがする。思った通り答えることにした。

「僕もあまり、花はよくわかりません。ただ、花屋さんで売っているものよりはこういう花の方が好きです。いわゆる野草のようなもののほうがいいような気がします」

「野草か。そうだね、私もそう思うよ。立村くん、わかるかい」

ホットケーキに手を付けず膝に手を置き、老紳士の言葉を聞くのみ。

「申し訳ございません。勉強不足でお恥ずかしい限りです」

「いや、謝ることはないよ。せっかくだからホットケーキのバターが染みとおらないうちに急いで食べようじゃないか。さあ、どうぞ」

気さくに話しかけてくれる老夫妻の前で、上総はナイフとフォークをしっかりと持ち、粗相しないように丁寧に切り分け口に運んだ。父も続いた。紅茶はシンプルな味わいで、朝飲むのにちょうどよかった。ホットケーキが自然と口でとろけてくる。

草木のかすかなざわめきが聞こえる中、老紳士は手を止めじっと上総の顔を見つめている様子だった。気づかないふりをしていて、

「上総くん、君はずっとお母さんから習ってきたとっていたね」

尋ねてきた。急いで飲み込み、

「はい、長期休暇のみです」

答えると、

「今まで何かスポーツをしたいとか、習い事したいとか、そういう気持ちになったことはないのかな」

さらに問われた。答えは決まっている。

「あまり意識したことがなかったのと、中学に入ってからには委員会活動が忙しかったのもあってそこまで考えたことはありませんでした」

事実をあっさり答えた。

「それはもったいなかったね。ということはだ。今回の合唱コンクールという突発的な出来事が起きなかったら、君もピアノをこんなに熱心に練習しようとは思わなかったわけなんだね」

「たぶんそうだと思います」

答えてみて改めて実感する。

「これまで君にとってピアノは、君のお母さんとの接点に過ぎなかったというわけなのかな」

「母との接点はたくさんあるので、そのひとつに過ぎないといった感じでした」

これも事実だった。ピアノは確かに仕込まれたけれども、それ以外にも茶道のさわりやら料理やら家事やら、いわゆる嫁入り準備に近いことは母からすべて手ほどきされてきた。その一方、運動関係の活動には体育の授業以外参加したことがない。品山小学にはそれなりに運動部が存在していたけれども最初から上総の意識からは消えていた。青大附属においてはひたすら評議委員会に没頭していたので、年に一回の球技大会……主に卓球……を除外すると全く接する機会はない。

「お母さんに教えてもらっていた時、ピアノを弾くのは楽しかったかな」

「いえ、あまり。母は非常に厳しい人だったので、習っている間は正直辛いところがありました」

突然父が鋭い目つきでにらんでくる。だが事実だ、本当に事実なのだからしょうがない。その一方で老紳士はゆったり微笑んでいる。

「そうか。今回の合唱コンクールで伴奏に選ばれたことについて、君のお母さんには報告は？」

「してません。母は仕事の関係で忙しいことがよくわかっていますし、楽譜を見た感じだとたぶん、なんとかかなりそうだと思ったのでまだ伝えていません」

「それでは、上総くん、もうひとつ聞きたいのだけれども正直に答えてもらえるかな」

もう行くところまで行くしかない。父がまたぴりぴりし始めたのを感じつつ腹に力を込めた。これが度胸というものだ。

「お願いします」

「今、ひとりでピアノを弾いていて、素直にどう思った？ お母さんと稽古している時と比較するとどうかな」

「もちろん楽しいです！」

父がナイフを取り落とし、慌ててテーブルにもぐっている。と同時に思い切りすねをひっぱたかれた。蹴り返してやりたいが人様の家ゆえさすがに控える。本音なんだからしかたない。そうだ、うれしい、楽しい、時間を忘れてしまう。昨夜真夜中までキーボード相手に「モルダウの

流れ」と格闘していた時も、こずえの家で「エリーゼのために」やら校歌セッションやったりした時も、音楽室で肥後先生や野々村先生に見てもらっていた時も、そして、

——さっきの稽古も、もちろん。

力がふうっと肩から抜けていくようだ。上総は感じたことをそのまま、ホットケーキと紅茶の香りに包まれたままもう一度、自分の中につぶやいた。

——母さんがいないところでピアノ弾くことがこんなに楽しいことなんだって、本当に気づかなかった。あの、伴奏の話が来るまでは。

その七 老師訪問 (5)

しばらく父と老紳士との間で仕事に関する会話が続き、そろそろと立ち上がったのは十一時半過ぎだった。

「思わず長居をしていしまい、せっかくのおくつろぎのところを失礼いたしました。また来週も同じようにというのが、心苦しいのですが」

言いかけた父を遮るように、老紳士は微笑み返した。

「いやいや、今回は私の方が立村くんにわがままを通させていただいたようなものだよ。この歳になるとなかなか純粋なつながりを得ることが難しいのでね。特に上総くんのような年頃の人たちとはね」

上総にも腰をかがめるようにして顔を覗き込んだ。何も、背が低いことを思い知らせなくてもいいだろうにと思うのだがあまり気にはしていないらしい。玄関から車までわざわざ夫婦で見送りに来てくれた。

「まずは、一週間しっかり練習していらっしゃい。来週にはもう少し気の利いた準備をさせていただくつもりだがね。君のお父さんと一緒にゆっくりと音楽について語ろう。上総くんにはもう少し、おいしいものが必要だと思うからね」

「あの、うちの息子にそんな、お気遣いなく」

また慌てる父に、老紳士はそっと肩に手を置き、

「私も、君と日常でゆっくり話ができることを、心待ちにしていたんだ。リタイアした後の楽しみのひとつだったんだよ。君ももう仕事のことなどどこかにおいて、ゆっくり語ろうじゃないか」

乗り込む前に上総も一礼した。老紳士はあらためて上総と父とを見比べるようにして眺め、

「それにしても、よい息子さんを得たね、立村くん」

車が動き出すまでの間、ずっと見送ってくれていた。かすかに潮の香りが漂ってきた。そうだった、忘れていたがこの家のすぐ側には海が広がっていたのだった。縁に埋もれていたせいかわかり忘れていた。

海岸線を進みつつ、しばらく父とは口を利かなかった。

——相当怒らせたかもしれないな、父さん絶対ぶち切れてるよな。

横目で何度も覗く。シートベルトのはまり具合を直している振りをし何度か様子見する。父の口は一本にしまり、まっすぐ前を見つめている。

——けどさ、向こうから何度も俺に話しかけてくるからしょうがないじゃないか。それに、こちらだってそれほどまずいことは話さなかったよ。少なくとも失礼に当たるような発言は控えたしな。どうすればよかったんだよ、あの場所で。

海が見えなくなり市街地に入ったところで初めて父が口を切った。

「いったい、何言い出すんだか、まったく」

「悪いけどちゃんと礼儀は守ったつもりなんだけど、文句あるのかよ」

「ある、おおいにある」

吐き捨てるように父はつぶやき、ハンドルを荒く切った。

「お前なんで、母さんの話にあんなのっかったんだ」

「別に乗っかるような話なかったよ。母さんのことってなんだよ」

ぴんとこなくて何度か尋ね返した。

「ピアノのことを聞かれた時、なんで母さんと一緒に稽古したことをべらべらしゃべったんだ」

「困るようなことしゃべってないけどな」

だんだんあのことかと思当はついてきた。ピアノを弾くのが今は楽しいかどうか、の一言だが、別に足を取られるようなことはしていないつもりだ。

「ピアノを弾くのが楽しいと答えてどこいけないんだよ」

「何もあんなに目を輝かせて、母さんから解放されて喜んで見せることはないだろ？」

あえて冷静を装っているのであろう。上総も知らないわけではない。父にとって母の存在は「離婚」なんていう形式を乗り越えた深いつながりがあり、できれば即刻、再婚のため婚姻届を握り締めて市役所に飛び込みたいに違いない。母に関しての侮辱的な行為は上総が息子であっても許されないことだとは承知しているのだが。

「俺は何も言わなかったけど」

「瞳が物語ってるっていうんだ。もうまったく、ひやひやさせやがって」

「父さんひとりであせってるだけだろ。それと、今のうちに聞きたいんだけどいいかな」

「なんだ」

老紳士宅に滞在している間、ずっと不思議だったことを質問することにした。

「これからあの先生のこと、どうお呼びすればいいのかな」

「え？」

戸惑った風に父が上総を見たがすぐに目を正面に戻した。

「だってさ、あの家表札なかったよ。たぶん父さんが紹介してくれるのかなと思ってあえて聞かなかったけど、最後まで苗字がわからなかったしさ」

実際、今の段階でかの老紳士の名前を確認していない。父も昨夜は名前を教えてくれなかったけれども特に気にしてはいなかった。しかし玄関に表札がないと全く見当つけようがない。

「そうだな、お前にはまだ教えてなかったな」

「来週から通うことになるんだったらなおさらだよ。『先生』だけだったらかえって失礼じゃないかなって気がするし」

「確かにそうだな」

父はしばらく黙り込みスピードをゆっくり落とした。国道沿いのコンビニエンスストア駐車場に車をつけた。

「待ってなさい。確認してくる」

「何を確認する必要あるの」

「だからお前の質問を今のうちに確認する必要があるんだ」

——父さん、なにあせってるんだらう。

急ぎ早に車から降り、入り口にある緑の公衆電話へ駆け出していく父を目で追いながら、上総は改めてその「先生」と呼ぶべき人のイメージを整理した。

——父さんがあんなにへりくだって話す人。

なんとなく「立村くん」と父を「くん」付けして呼ぶところからして、あいまいな師弟関係のようなものがあるのかもしれない。また、上総には把握しきれなかったが青潟における教育問題や企業の動きなどを父と真剣に語っていたところを見ると、仕事がらみのつながりなのだろうとは想像できる。

——でも父さん、俺が知っている人たちを見る限りあんなにへこへこしないよな。俺も文句言える立場じゃないけど、何度言った？ 出来の悪い息子ってさ。何か弱みでも握られてるのかな。

実際、紹介されてレッスンを受けた限りでは穏やかで感じのよい紳士だったし、これからピアノの稽古限定で通うのだったらそれでもいいと考えている。ありがたく受け取ろう。しかしなぜ、父もおまけにくっついてこなくてはならないのだろうか。上総からしたら、教えてくれる人に細かく指導されるのは気にならないのだが、外野からわいわい欠点をあげつらう輩の方がむかむかすることこの上ない。まあ、母ではなく、父だから余計なことは言われないうちが、現状先が全く見えないのもまた事実。

——それにしても話がどんどん、俺と父さんの思惑を無視して進んでいるような気、するんだけどどうしたんだらう。

「さあ帰ろう」

ついでにコンビニでポテトチップスと冷たい缶コーヒーを買ってきた父。運転席に座りシートベルトを締めた後告げた。

「帰ったらまず、先生にお礼の手紙を書きなさい。それと、次回からお名前を『印條』先生とお呼びするんだよ」

「いん、じょう？」

苗字なのだろうか。珍しすぎる。父が上総の問いの前に答えてくれた。

「先生がそう呼んでほしいとのご希望なんだ。余計なことは考えず、印條先生とだけ覚えておけばいい。いいか、余計なかんぐりするなよ」

缶コーヒーはそのまま、ポテトチップスの袋を端だけ開けて上総に勧めた。

「向こうだと食べた気しなかつた。うちに帰ったら今度こそピザを注文するぞ。上総、食べたいトッピングがあれば今のうちに考えておきなさい」

「父さん、何か、した？」

おそるおそる上総が袋に手を突っ込みながら尋ねると、

「お前にとってもお父さんにとっても、こんな機会は一生に一度、まああるかないかだしな。せっかくなの縁だ。無駄にはできないよ。お前の下手なピアノを毎回聞かされるのはきついものがあるがな」

何かふっきれたような笑顔を見せた。

その八 関崎との呼吸（1）

次の日から合唱の練習も細々と始まり、クラスもなんとなく各パートごとに集まって音あわせなどを行っている様子だった。上総がひたすら鍵盤を叩いている間に関崎とこずえのふたりがそれぞれのやり方でクラスをまとめているのが伺える。

「で、みんな、これからなんだけど提案していい？」

朝、先生が現れる前にこずえがクラス連中の前で呼びかけた。

「あのさ、みんないろいろ忙しいことはわかってるし、みんなで一気に練習するのは難しいと思うんだ。朝練習も考えたけど毎日はきついしね。それで考えたんだけど、帰りの会を使って一日一回だけ合唱するところから始めようと思うんだけど、どうかな」

面倒そうな男子たちのため息、女子たちのどこか冷めたそぶり。

「まあまあみんなそうそっぽむかないでよ。まあ来週あたりからは本気でやんなくちゃまずいから、放課後練習か朝練習かどちらかやるよ。けどいきなりじゃあつらいし、エンジンあつためるってことで、どう？」

「それならすでに全員揃っているから、朝の段階で歌わせてもらえばどうだろう」

関崎が考え込みながら発言した。

「みなそれぞれ事情があるだろうし部活動に参加している奴もいる。それなら放課後よりも朝の時間二曲歌って、必要に応じて夕方というのは効率的じゃないか」

「けど朝は忙しいよね。それに歌って終わりってわけでもないし」

こずえが言いかけたところで、麻生先生の脂ぎった顔が扉から覗いた。

「お前ら朝から元気だなあ。まあいい、とりあえず号令かけろ。それと古川、悪いが今朝は合唱の練習いったん置いて俺に時間をよこせ」

藤沖の号令でみな礼をし席に着いた後、麻生先生は出席簿を立ててぐるりと全員を見渡した。

「実力テストの結果はみなそれぞれ思うところがあったようだが、まあ夏休みどう過ごしたかを考えればそんなもんだろ。クラス平均点は上がったがただだぞ。いったいどれだけお前ら遊びほうけていたんだ」

否定はできない。英語のトップ指定席以外は上総も人のことが言えない。

「とはいえだ。夏休みのいわゆる自由研究がなかなかみないもの作っていて、担任として俺は非常にうれしいんだ。いや、読物としてみなよく出来てるぞ。お前らの悲惨な答案にマルつけるよりはな。それでだ」

麻生先生はここで息を溜めた。

「今日は、報告がある。その自由研究を先生方全員で読みまくった結果、関崎のまとめた『青潟の石碑地図』が高い評価を得て学校図書館に製本して保存されることになった」

関崎がぼかんとした顔で、口も半びらきのまま硬直している。近くでこずえがひらひら目の前に手を揺らし、

「おーい、どーしたー！ 目、覚ませ！」

とからかっている。また後ろから片岡があどけなく笑いかけている。隣の藤沖が関崎の肩に手を置き、

「すごいぞ、関崎、さすが外部生のスターだ」

何度も叩いている。男子連中がみな関崎の榮譽を祝福しているのがよくわかる。上総も本当ならばそれなりのお祝いを伝えたいのだが素直に声をかけられない。

「本当ならば何作か素晴らしい自由研究を選んでその上でコンクールを行おうという予定だったんだ。だが先生たちと協議を重ねた結果、今回のトップが関崎をはじめとする有志による作品であることが動かない以上、もっと他の奴のものについては別の次元で考えるべき内容なのではという結論に達した。ある意味、お手本なんだ」

——お手本か。関崎、どう思っているんだろう。

ひがみでもなんでもないが、関崎が外部生ふたりと組んで足で調べたという「青潟の石碑地図」以上の自由研究が出てこなかったという事実が信じられなかった。上総もちらりと内容を関崎から見せてもらったが、単に写真をたくさん集めてさまざまな歴史に触れ、その上でスクラップしたような内容に見え、とりたてて独特なものを感じられなかった。まじめな関崎ゆえに手抜きはしなかっただろうし、その意味での迫力は確かにあるかもしれない。一緒に活動した外部生たちの力ももちろんあるだろう。しかし、本当に、それだけなのか。あの程度だったら言ったらなんだが、中学時代誰かかしら手を出していたような気がする。

——まあいいか。ああいうのが好きな先生がきっと多かったんだろうし。

羽飛や美里と一緒にまとめた自由研究も、前もって野々村先生から辛い評価が予告されていただけにショックはない。まあしょうがない。あんなもんだろう。ただふたりには申し訳ない、それだけだ。ただ、

——本条先輩がもしここにいたら、めちゃくちゃ落ち込むだろうな。本条先輩のような独特な個性はきっと、今の青大附高では受け入れられないかもしれないし。

合唱コンクールが片付いたら本条先輩に会いに行ってみよう。ふと思った。

夏休みもだんだん遠いものとなり、授業もたんと進んでいった。気がつけば放課後。

「藤沖、お前どこに行くんだ」

「悪い」

言葉少なに藤沖が教室を出る。見送る関崎とこずえが話し合っている。

「俺が言えた義理ではないが、藤沖、大丈夫なのか」

「さあね。私も何も言えないよ。ただ、しょうがないってことよ」

詳しい事情通のこずえはわざと話を逸らすようにして、女子たちのグループに駆け寄っていった。月曜、火曜、そして今日は水曜。三日連続で手の空いた男女を集めて、短い時間だけパート練習を行っている。全員揃うのを待つのではなく、短期集中で声をかけて終わったらさっさと解放する。できるだけいやみなく来週以降の猛練習に持っていきたいのだろう。

眺めつつ関崎が上総に尋ねてきた。隣りにいる。

「古川はさすがだ。ああやってさりげなくクラスの要となるわけだ」

「あの人はいつもそうだけどさ」

「五分程度きっちり歌って、適当に褒めて、解放する。しかも褒める」

「古川さんは男子の褒め方をたまに勘違いしている時あるけどさ」

「まったくだ」

ふむふむ頷いた。同時に上総の手を指差した。

「ところであれだ。お前、練習しているんだろ？」

しているのか、ではない。していると決め付けている。その通りなので答える。

「それなりにやってるよ。たぶん、来週中にはテープ用意できるくらいには弾けるようになると思う」

「テープとはなんだ」

怪訝な顔で問う関崎。やはりこずえの頭の中での計画だけらしい。軽く説明した。

「クラスの練習用の伴奏なんだけど。今週中に一通り弾けるようになったら、何本かテープに吹き込んで、あんな風に時間のある時に曲を合わせて歌ってもらおうようにしようって計画しているらしいんだ」

「歌を合わせるとはどういうことだ？」

全く知らないらしい。少し細かく説明することにした。

「今はまだ、アカペラで合わせているけれどやはりピアノの伴奏があるなしとではだいぶ違うだろ。まだ俺も指揮者のお前に合わせられるだけ弾けないからもう少し待ってもらいたいところなんだけどさ、でも、歌のほうは出来る限り早く合わせられるようにしたほうがいいよな。今、C組なんて毎日朝と放課後、音楽室を押しえてクラス全員で練習しているし、それにはさすがに負けたくないんだと思う」

「そうか、そこまでみな本気なのか」

まずい、関崎を勘違いさせたらまた別の方向に突っ走ってしまう。方向転換を試みた。

「いや、でもうちのクラスはそういうのが向かないと古川さんわかってるんじゃないかな。あまり早すぎると中だるみしてしまうから、二週間だけ集中してもらおう方向で考えているんだと思うよ。そのほうが緊張感あるし、俺も関崎もそれなりに準備ができていだろうから安心感もあるしさ」

いきなり毎日練習しろとか言い出されたらたまったものではない。こいつは言い出しかねない。腹の中ではたぶん今のゆっくりペースを心配しているようにも見える。だが、クラスの女子たちを巡る複雑な事情や藤沖の諸事情なども考えるとやはりまずい。

「そういうことか。確かにそうか」

関崎は上総の顔を見た。いきなり手をぴしゃりと叩いた。

「どうした？ かなり本気で叩いただろ？」

冗談だとは分かっているが、手の甲がかなり痛い。関崎はすぐ頭を下げた。

「悪い。俺も今、突然思いついたんだが」

拳を作り、軽く振った。

「俺とお前もできるだけ早く、指揮者なり伴奏になれたほうが良いということがよくわかった。す

なわち」

「何？」

つかめず問い返す上総に、関崎は力強く言い切った。

「立村、できるだけこれから、ふたりでピアノに合わせる練習をしよう。時間は規律委員会とバイトの隙間を縫う形になるが、できるだけ都合はつける。クラス全員がそれぞれの形で準備をしているのなら、俺たちも早めに息を合わせたい。どうにかして一緒に練習したいんだが、どうだろうか」

その八 関崎との呼吸 (2)

関崎のありがたい申し出に一瞬退いた上総だが、

「ありがとう、たださ、今日、これから補習があるんだ」

言い訳をすぐ見つけて笑顔で返すことができた。

「ああそうか、毎週水曜はそうなんだな」

「数学と理科のプリントを解き続けなくてはならないんだ。結構ハードで、それが終わってから音楽室に行こうと思ってる」

「ピアノの練習か」

「そう、たぶん少し遅くなったら人も少しは減っていると思うから、ピアノも空いているんじゃないかなと思うんだ」

実際嘘ではない。月・火曜ともに音楽室を訪ねてみたが、四時半くらいまではかなり混みあっていてピアノの蓋に触ることも難しそうだった。しかたなく図書館で時間をつぶしてもう一度覗いてみたら運良く占領することができた。三十分程度しか練習できなかったとはいえ、弾けないよりはずっといい。

「そうか、俺も一応、肥後先生から呼び出されて指揮棒の振り方を習っているんだがなかなか大変だな。意味があるんだと言うことに初めて気づいた」

指揮者の指導の方がもっと大変なのかもしれない。難波の話も重ねて考える。

「どちらにせよ、立村とは一度きっちり練習をする必要があると俺は思うんだ」

——あまり急ぐ必要もないと、俺は思うんだ。

こずえが女子たちに声をかけて回っている間に上総は教室を出た。本当は今週の土曜日にまたピアノの稽古をさせてもらう予定だったこともあってその打ち合わせをしたかった。いつまで経っても終わりそうにないので、さっさと補習の行われる一Bの教室に向かうことにする。先週は野々村先生とのいろいろよしなもあって気まずさもなくはないが、すれ違って礼をする時にはなんでもなさそうなのでたぶん忘れたのだろうと判断することにした。難波や更科がすねに傷あるゆえにぴりぴりするのもわからなくはないのだが、あまり余計なことを考えないようにしたほうがよさそうだ。

教室に入る。まだB組の連中がうろうろしていて、一方で補習組の生徒たちもひとりふたりと集まってきている。なんとなくまとっている空気が違う。顔見知りの友だちに、

「あれ、立村どうした？　うちのクラスになんか用か？」

「補習で来ただけだって」

声をかけられてあっさり答えるのみ。みなあっさり頷いて教室を出て行くのは上総の事情をよくよく知っているからだろう。意外に思ったことなのだが野々村先生の謎の振る舞いについてもあまり余計なことを尋ねる奴がないのありがたい反面不思議でもあった。

とりあえずB組連中が全員いなくなったのを見計らって、廊下側の最後尾に座った。

「失礼します」

最初に現れたのは新倉先生ではなかった。声を耳にした時思わず身体が硬直する。

「新倉先生ですけれども、少し遅くなるとのことなのでプリントだけお預かりしてきました。全員の分を用意してありますので各自取りに来てくださいね」

まだアルバイトの大学生たちも集まってきていない。珍しい状況だ。野々村先生は凜とした風情で、ブラウスに紺のタイトスカート姿で佇んでいた。

「それと、立村くんにはこちらから課題をお渡ししますので少し待っててくださいね」

「はい」

と、しか答えようがない。他の生徒たちも……男子ばかりだが……気味悪そうに上総を見やる。決して自分のせいではないのだが、「えこひいき」の匂いがしてもしょうがない。一応、個人面談の担当の先生なのだからしかたないといえばそれまでなのだから。野々村先生は他の生徒にすべてプリントを手渡しして、急ぎ早に上総の前席の椅子を引きこしかけた。すぐに立ち上がり、机を上総のと向かい合わせにした。

「こうしたほうが説明しやすいから、そうさせていただきます」

遠慮したり手伝ったりする前に野々村先生はすばやく座りなおし、上総にプリントを手渡した。一枚のみ。問題の数は四題のみ。意外と少ない。

「今からこの問題の答えを渡します。そのまま、黙って写してください。写し終えたら言ってください。また同じく紙を渡しますのでまた書き写してください」

野々村先生は上総に何も書いていないわら半紙を何枚かひらひらさせた。

「この問題、覚えてる？」

「なんとなく」

さすがに一週間前に出題された実力テストの問題くらいは記憶に残っている。解けたかどうかは別として。当然答えは間違っていた。

「実力テストの問題ですか」

「よく気づきました、えらいえらい」

なんだか子どもっぽい褒め方をいきなりされて、あっけにとられてしまう。野々村先生はちらちら他の生徒たちの様子を伺いつつ微笑みながら。

「テストで一番大切なのは復習なんです。でもみなそれをおろそかにしてしまい点数だけに一喜一憂しています。しかたないことなんですけどね。でも、せっかくこういう時間があるのですから、今はこの問題の答えを丸暗記してしまい、最後には花丸をつけてしまいましょう」

——花丸、ときたかよ。

やはり数学の得意な先生の考えることにはついていけない。野々村先生は続けた。

「きっと、今まで立村くんは数学や算数で花丸をもらう機会がなかなか少なかったと思います。初見のテストの場合はそういうものでしょうか。でも、一番大切な、『解き方を覚える』ことさえできれば、立村くんのなかでは十分満点をつけていいことなの。私たち教師が目指しているのは、テストの点数だけではないの。その後には十分な花丸をつけてあげられることなの。わかるかしら？」

「つまり、復習が必要、ということでしょうか」

おずおずとたどり着いた答えを口にしてみると、野々村先生は大きく頷いた。

「そういうことなの。立村くん、あなたに必要なのは、数学でたくさん丸をもらう経験です。私が数学でお手伝いしたいのはそういうことなの」

——わからない、何がなんなんだか。けど、まあいいか。

無理に難しい問題に頭を悩ませて爆発しそうになるよりも、とっくの昔に答えが分かっている内容をさらった方が楽に決まっている。書き写すだけであればいくらでもできる。

「やってみます」

上総は言われた通り、答えをそのまま写し続けた。中学の修学旅行で経験した写経を思い出した。一枚はあっという間に埋まり、野々村先生がすぐに紙を補充してくれた。裏表にそのまま筆写し続けていくうちに決まった数式の文字だけがどんどん身体に染み付いていくのを感じた。また一枚、また一枚。紙は気がつけば十枚ほど積み重なっていった。

「そろそろ飽きたでしょ。今日はここまでにしましょうか」

いつのまにか新倉先生およびアルバイト学生たちが集まり、教室内はにぎやかに盛り上がっていた。集中しすぎたせいか気づかなかった。顔を挙げて新倉先生に頭を下げ、プリントをたたもうとした。止められた。すべてを机の上に並べると、赤いサインペンを取り出し、いかにも小学校の先生がつけるような花丸をでかでかと描いた。見ているだけで恥ずかしい。花丸が一枚、二枚、三枚と積み重なり不気味な花畑に見えた。

「あの、ありがとうございます。でも書き写しただけです」

「いいえ、私も見ていたけど最後の一枚は立村くん、全く答えを見ないで書いていたわ」

すぐに取り出し、上総の目の前に差し出した。

「きちんと頭の中に入ってきた証拠です。丸に値します。大丈夫よ」

「でも」

言いかけた。遮られた。全く関係ない話に引っ張られた。

「立村くん、ところで今日はこれから、音楽室に行くの？」

かなり強引な話の切り替え方である。

——どう答えたらいいんだよ、まったく。

一週間前の音楽室の光景が蘇る。

——そりゃ行くよ。行くつもりだけどまたこの先生着いてくるつもりなのかな。冗談じゃない。またタイミング悪くC組連中がいたらどうするんだよ。教えてもらえるのは助かるけどそういう問題じゃないんだよ。それにこの先生も自分の立場意識してるんだろうか。女性の先生が男子をえこひいきなんてしてるなんて勝手に思い込まれたらB組でも大変なことになるのにさ。

何か、よい言い訳を考えねば。何か、あるか。

その八 関崎との呼吸 (3)

——どうやって離れようか。

プリントの花丸が焼きついて離れず、その一方で側に微笑みながら寄り添っている野々村先生の扱いに悩む。いい断り文句が見つからずなんとなく音楽室へ向かうのだが、やはり周囲の視線が痛い。事情通のものもいるのだろう。陰でひそひそ話をしている輩もいる。

——なんだか誤解されるのも無理ないよな。

自分にとって生まれて初めて数学の問題で花丸をもらえたのだが、それはあくまでも書き写したことに対するものであって意味はない。ただその一方で、自分でも経験したことのない不思議な感覚が沸くのも事実だった。

「あの後は立村くん、ピアノのお稽古は？」

「はい、日曜に父のお世話になっている先生のところへ行っていて、いろいろ教えていただきました。あと何回かはお伺いすることになると思います」

「それはよかったわ。このあたりの教室なのかしら」

「いえ、海沿いのお宅で、僕もあまりよくわからないのですが、趣味でピアノをたしなんでいらした方と伺いました。会社を退職なさってから時間があるということでのご提案でした」

「そう、だとすると、ピアノ教室というよりも趣味の範疇でということかしら」

「おそらく、そうだと思います」

かなりあいまいに言葉を濁したつもりではある。父の仕事と直結した関係の先生である以上、機密事項もそれなりにあるような気がするし、印條先生……なんだかこのあたりも偽名のような匂いがする……あまり名前を知られたくないのではないかという憶測もある。

「その後はどうしているの」

「はい、友だちから借りたキーボードを使って毎日通して練習しています。あとは音楽室が空いていればピアノ弾かせてもらってます」

事実ではあるのであっさり答えた。答えながらも逃げ道ばかり探している。どうにかして野々村先生をうまくまいてしまえないだろうか。音楽室にたどり着く前になんとか。

階段を昇りながら、一度立ち止まり話しかけてみる。

「先生、今日はお忙しいでしょうから僕ひとりで練習します。お気遣いいただきありがとうございます」

「いえ、いいの。私も先週中途半端に終わったので申し訳なくて」

「でも、また先週のように別の人たちが」

C組の瀬尾さんの問題のことを考えると申し訳ないのと面倒くさいのとで頭がごっちゃになる。とにかくなんとかしたいのは野々村先生とふたりで音楽室に入っていくことを避けたいだけ。階段踊り場の窓から射してくる西日がまぶしい。

「あのことは、肥後先生ともお話して希望者がいるようであればその折に教えることにしました。私も先週話したけど、エレクトーンを少したしなんでおりましたので多少はみんなのお役に立てますしね。でも、本格的に練習している人と立村くんとの立場は又別のものになりますし、私

もプロのテクニックまでは教えられませんしその差はあります」

——いや、そういう問題じゃないんだよ。あのさ、なんと言えればいいんだか。

後ろ向きに思わず階段を昇ってしまう。不思議そうな目で上総を見つめる野々村先生の表情に何を読み取ればいいのかわからない。とにかく、上総のピアノの技量が心配なことはわかった。なんとかしてやりたいという思いやりも理解した。しかし、これ以上はやはりひいきにつながるし互いのためにならないのではと思う。

上総は振り返り、ふと音楽室の前を見やった。

見覚えある姿があり。

無骨な横顔、他の男子とふたりで肩を並べて語り合っている。

——関崎か！

考える余裕はなかった。階段を駆け上がりながら呼びかけた。向こうもすぐに気づいたらしく、うれしそうに手を挙げた。

「関崎、待ったか？」

一瞬戸惑った表情を見せた関崎と、その隣りの男子だが無視してまくし立てた。後ろの野々村先生に聞こえるように、

「ごめん、これから一緒に指揮と伴奏を合わせようか。補習終わるの待っていてくれて助かったよ。すぐに入ろう。ちゃんと楽譜持ってきたからさ」

関崎の隣りにいる男子が何かをささやきかけている。関崎も凍ったまま、

「どうした立村、俺を待ってたのか？」

きょとんとした顔で答えた。もちろん当然の反応だとはわかっているが上総もここで手を抜くわけにはいかない。さらに畳みかけた。腕を掴んだ。なれなれしいがしょうがない。

「さっき話してただろ。やはり俺も、指揮と伴奏をあわせる練習だけはきっちりしなくちゃいけないと思ってたんだ。なんとか通しで二曲とも弾けるようになったから。誰か音楽室にいるのかな」

ピアノが奏でられているのが聞こえる。「翼をください」だ。合唱コンクールがらみの曲であることはわかるのだがどこのクラスだかはわからない。自由曲に選ばれやすい曲であることは確かだ。

「ああ、今、B組がいる」

関崎が目線を音楽室の扉に目をやりながら答えた。

「全員ではないんだが、グランドピアノを占拠しているようなんだ。俺もB組の女子に用があるのでこうやって待っているんだ」

——B組か。

つい、後ろを振り返る。野々村先生がいつのまにか音楽室の前に立って声を聞いている。あっけにとられて三人……名前を知らない男子のひとり……で野々村先生の様子を伺うと、

「そういうことだったの。ごめんなさいね。クラスの練習ということであれば邪魔しないほうがいいわね」

それだけつぶやき、上総に微笑みかけた。

「でも、立村くんだけはできるだけ何らかの形で練習できるようにしたほうがいいので、その点は麻生先生や肥後先生にも伝えておきますから。練習がんばってくださいね」

気になったのは、その眼差しの中に関崎の存在が全く感じられなかったことだった。

足早に去った野々村先生の後姿を目で追いながら、関崎がつぶやいた。

「B組の先生なのに、自分のクラスの様子を見に行かないのか」

「生徒の自主性を優先しているんだよ。いろいろ事情があるようだし」

一呼吸おき、上総は改めて扉を細く開き覗き見た。B組の待ち合わせ相手ということになると、当然指揮者担当の静内菜種だろう。美里が混じっているのかもしれないが、好き好んで待っているとは思えない。音楽室内には十人もいなかった。男女混じっていて、その中になぜか東堂がいた。美里はいなかった。

——清坂氏はいないのか。でも規律委員の関崎が暇だってことは委員会がらみの欠席じゃないみたいだな。

何度も声を合わせて発声練習をしている。それを無視する格好でなにやらピアノを弾いている気配もあるが、よくよく見ると別の学年の女子らしかった。つまり合唱は一年B組の男女有志十名ほどプラス指揮担当の静内菜種、その他ピアノ練習のための他学年女子一名。それぞればらけて練習に励んでいる。一番重要な点、アップライトピアノは蓋が閉まっている。つまり、使える。

。

嘘から出た誠でもいい。上総は振り返り、関崎に呼びかけた。

「ピアノ空いてるし、入って練習させてもらっていいかな」

「お前、そんなに本気なのか」

関崎の表情が見る見るうちに明るく輝いた。こんな喜び顔を見たのは久々だった。

「立村、わかった。全力で協力する。お前が本気でやるんだったら、俺も指揮者として義務をきっちり果たす。練習しよう。古川とも相談して、できるだけ早くクラス全員での練習に持ち込めるようやってみる。俺も正直自信がなかったんだが、せっかくお前がこんなにやる気になっているんだったら、それに付き合わないわけがない」

——なんだか大嘘言ってしまったんだけどな。

両肩を揺さぶらんばかりに関崎は何度も上総に語りかけ、はっと気づき隣の男子に、

「そういうわけで名倉、せっかくだから音楽室で待ってようか。俺は今からこいつと合唱の指揮と伴奏の練習をする。その後静内と一緒に学食あたりで自由研究のことについてもう一度話し合おう。それでどうだ？」

——そうか、自由研究の仲間同士で待ち合わせをしていたということだったのか。

一気に謎が解けた。ふたりの話し合いには用がなく、上総はすばやく音楽室にもぐりこみ、B組の集団に一礼し、グランドピアノの女子先輩にも軽く頭を下げ、まっすぐ奥のアップライトピアノに走り寄った。

「立村か、ピアノの練習か」

「そう、ごめん、邪魔しないようにするからさ」

「OKOK、お互いさまだよん」

東堂の呼びかけがなぜか心地よい。B組の女子たちがいつもの上総に対する冷ややかな眼差しを投げるが関係ない。明るい西日が差し込む教室で、アップライトピアノの蓋を開き、上総はすばやく楽譜を立てた。関崎が続いて入ってきて、B組の静内らしき女子と話をしているのだけをちらと見た。微笑みあっているのだけ確認した。

その八 関崎との呼吸 (4)

それにしてもあぶなかった。いろいろな意味において、
——B組の人たちがいるとはな。

救いなのは美里が混じっていなかったこと。この点だけは助かった。わらをも掴む思いで関崎にしがみついたはいいが、美里と静内とのにらみ合いが続いている状態で音楽室に入ろうものならまたどんぱちが起きぬとも限らない。いや、どちらにしてもB組担任の野々村先生が上総を露骨にひいきするような顔してくっついてきたら、また別の問題が起きるのも確実。どちらにせよ、今は回避できてなによりだ。

取り急ぎ、時間もあまりないしピアノの練習に没頭することにする。こずえから借りたキーボードもかなり役に立つのだが、やはり押した感触がピアノとは全く異なる。やわらかい感じと言えばいいのだろうか。思い切り叩いてその力の強弱による違いがない。ペダルも踏めないのどことなく音色がぶっきらぼうなまま。その点本物のピアノだと、下手な演奏でも少しは色がついてくるような感覚が確かにある。

「恋はみずいろ」から弾きはじめてみることにする。グランドピアノの前に座っている女子も何か聴き慣れない曲を一生懸命練習している。同じ部分の繰り返しのようだ。何度も和音を確認するように弾いている。B組グループとは全くの別世界にいる。

「立村、これ、自分ひとりで練習して弾けるようになったのか」

いつのまにか関崎が後ろにいる。ピアノの木目に映っているのですぐ気づいた。

「厳密に言うとそうじゃないけど、まあ、ある程度は」

「だったら、本番まではなんとかかなりそうなのか」

「弾くだけならたぶんね。ただ、これから合唱と合わせなくてはならないからさ」

だから関崎に手伝ってもらおうつもりで呼んだんだ、そう言い掛けた。関崎が遮った。

「一応指揮の方法は先生から習ったんだが俺には全く何がなんだかわからん。本当なら歌うだけに専念したかったのだが、藤沖があそこまで言うのなら仕方ない。なんとかしなくてはならない」

関崎なりにいろいろ考えてはいるのだろう。ただ上総も指揮者を一度経験したことがあるけれどもそれほど大変だったという記憶はない。たぶん他の同期だった男子評議たちも同じ感想じゃないかと思う。

「俺の記憶だと伴奏の時誰も指揮者のほうなんて見てなかったような気がするな」

「それはないだろう？」

「いや、そうだったと思う。みんな好き勝手に合わせて歌っていたし俺がやってたのは歌うタイミングを計ることと、とりあえず盛り上げる時は手を大きく広げるとか、最後とめるところを間違えないようにすることくらい」

確か、そうだった。誰からも文句は出なかった。

「本当にそれでいいのか。俺たちも合唱コンクールは経験したがかなり熱心にやったぞ。とりあえず合わせてみるか」

「そうだね」

改めて「恋はみずいろ」を弾き直した。関崎の方を見る余裕はない。まだ楽譜と鍵盤のみ見つめるに留める。関崎が一生懸命両手で縦線を描くように振り始めたのだけは確認した。B組連中の細かいハーモニーとグランドピアノの全くかみ合わない伴奏練習と「恋はみずいろ」のなだらかなリズムとが混じりあい、うるさくはないがまだらな音色が響き渡った。

「だいたいこんなところだけど、ちょっと弾き間違えた。ごめん」

かなりゆっくりすぎるくらいゆっくりと弾いていたのだが、和音を押し損ねたところが何箇所もある。それでも止めるわけにはいかないので一気にラストまで押し切った。

「俺もよくわからないんだが、指揮者のほうを本来は伴奏が見てやるんだろう」

「そう。本番ではそうしないと」

関崎は腕を組み首をひねった。

「とにかく俺がやらねばならないのは、曲を完璧に覚えて、どのくらいのスピードで持っていくかを決めないとまずいということだな」

「そうだね。テンポは関崎が決めてくれないとまずいよ。俺もそれに合わせられるかという問題もあるんだけど。中学の合唱コンクールではとにかく、スピードだけは歌いやすいようにするよう練習したよ」

「テンポか」

しばらく上総の座っている椅子の後ろを何度も往復していたが、

「ひとつ思ったんだが」

切り出した。

「やはりここは歌がないとつかめないだろ」

「確かに、合唱とあわせたらまた変わってくるだろうしさ」

「だったらこれから俺が歌って見る。立村、それに合わせてやってみてもらえないか？」

——え？

頭の中が蚊に刺されたようにじんわり熱くなってきた。思わず振り返って関崎の顔をまじまじと見つめてしまった。関崎は別段ふつうのことを話しているようなつもりでいるらしい。

「そんなに変か？ いや俺としては、実際歌のテンポがどのくらいかを確認するなら生歌でやるほうがずっといいと思うんだ。俺も正直、歌がうまいとは思わないが、それなりに記憶はある。ああそうだ、『モルダウの流れ』ならフルでいける」

「関崎、あのさ、それ、ここでか？」

ここは少なくともカラオケボックスではない。

「それに他のクラスの人もいるしさ。ピアノ練習している人もいるし」

「いやみんな歌っているか弾いているかだろ。それぞれ別々だ。気になるなら断ってくる」

上総が止める間もなかった。関崎はまずB組でいろいろ指導中の静内菜種に駆け寄り、何かを説明していた。笑顔で静内が頷くと今度はグランドピアノの女子に何かまた挨拶をしている。そちらは無表情で頷いている。とりあえずなんとか承諾は得られたようだった。戻ってきた関崎は

すぐに上総に親指を立ててOKの合図を送り、

「みな、少し待っててくれるそうだ。すぐやろう。『モルダウ』は弾けるか」

「たぶん」

「恋はみずいろ」と違い、「モルダウの流れ」には少し手を焼いていたがそんなことは言えない。上総は呼吸を整え背を伸ばした。後ろを振り返り軽く会釈でB組およびグランドピアノの女子に返した。と同時に、弧をそのまま持ってくるようにみな興味深げに近づいてくる。なぜか、東堂がにやにやしている。

「関崎いったい何言ったんだ」

上総が小声で問い正すと、関崎は当然といった風に胸を張った。

「せっかくだったら本番と近い雰囲気の方がいいから、聴いてもらえないかと頼んだんだ」

「ちょっと待てよ、それまだ早いだろ？」

慌てる上総を自信ありげに関崎は制した。

「大丈夫だ。どうせ練習だ。失敗は早いほうがいい」

「そういう問題じゃないって！」

こいつはいったいどういう思考回路をしているのだろうか。やる気に溢れて合唱コンクールに向かってまっしぐらに進んでいる、それは悪くない。初めての指揮者としても怖気づくことなく努力と根性で突っ切ろうとしている。しかし、またもその中に引きずりこもうとするのか。一度や二度ではない。関崎とからんでからというもののこういうパターンがあまりにも多すぎる。

「関崎も歌うの好きだよ」

近づいてきた静内が関崎に話しかけ、肩を軽く叩いている。上総には目を向けようとしない。他の女子たちも声こそかけないが関崎だけに視線を集中させている。一方男子連中は上総を見ながら、

「へえ、立村ピアノ初公開じゃん。見ものだぞこりゃ」

などと茶化している。もろ、見世物状態であることに代わりはない。

——あの野郎、あとでとことん文句言わないとな。クラスでもまだ弾いてないってのに！

しかたなく指を鍵盤の上に載せ、指を思い切り長く伸ばしつつ弾き始めた。なんとか最初は間違えずにすんだのが救いだ。できるだけテンポが速くならないように意識しながら、関崎の歌声に合わせてリズムを刻んだ。関崎の声質については、二回もカラオケボックスで一緒にさせてもらったのだからよくよくわかっている。さらに音程に崩れがないことも、非常によく響く歌声ということも。聴くだけでいかに関崎がのりのりなのかがよくわかる。こいつの歌好きぶりはマイクがなくても十分いける。二度あることは三度ある。もう疑いなし。

無事弾き終えた後、一瞬の間があり、B組連中からの大きな拍手とため息、上総が振り返るとグランドピアノ側からも上級生の女子が笑顔で激しく手を叩いているのが見えた。

「やるなあ、関崎、指揮者なんてもったいない、なんで合唱にまわらなかったの。私だったら絶対そっちに回したのに」

「うちのクラスにはよんどころない事情がある。しかたないんだ」

いつのまにか顔を出している名倉も、関崎に向かい手を差し伸べている。どうやら握手を求めているらしい。夏休み自由研究最優秀トリオの称えあいをぼんやり眺めていると、上総の肩を叩く奴が何人かいた。

「立村、まあ落ち込むなって」

顔見知りの奴ら、特に東堂がへらへらしながら話しかけてきた。

「うちのクラスみたいにやる気ありすぎな方が珍しいんだって。他のクラスも似たようなもんだからそんななあ、めげなくたってなあ」

口々に慰める。慰めるということは結論はひとつということになる。

「東堂、ひとつ聞きたいんだけどさ」

「はいはい」

機嫌よしの東堂に、上総は念のため確認した。

「もしかして、うちのクラスになら勝てる、と確信したんじゃないのかよ。伴奏もこの程度だし、歌がうまい奴は指揮者だしてことで」

「そんなひがむなよなあ。ま、ある意味事実ではあるけどねえ」

B組男子連中のみ、大笑い。ため息つくしかない。とりあえずここでわかったことは、関崎が青大附高のマイスタージンガー候補であることと、それに伴う上総のピアノ能力があまりにも差がありすぎるということだった。

その九 レコーディング（1）

関崎の歌声は一夜明けてあっという間にクラス中へと広がった。もちろん上総が伴奏でお付き合いしていたこともそれなりには伝えられたが、A組の女子たちにはどうでもいいことだったらしい。今までは遠巻きに眺めていた女子の数名も、

「関崎くん、昨日歌ったんだって？」

「B組の子たちが絶賛してたよ！ すごく上手だったって」

「今度音楽の時間に歌うべきだよ」

などと囲み、口々にたたえていた。実際彼女たちも関崎のソロを聴いたことあるのかどうかは疑問だが、たぶんそれなりに噂にはなっていたのだろう。からかい調子ではなくかといってまじめに褒めるのでもなく、自然な笑顔で語りかけている。

「いや、やはり指揮をするには自分でも音が取れないといけないからな」

まっすぐ返すのはやはり関崎の性格だった。しばらく女子のあしらいに戸惑っている様子だったが、坊主頭の藤沖が現れて、

「さすがだな、またお前の伝説が響き渡ってるぞ、朗々とな」

「何がだ。俺はまじめに合唱コンクールのために」

「わかっている十分にだ。それはそうとこのクラスでは公開しないのか？ 俺たちはみな待ち構えているんだが。そうだ、提案なんだがそろそろうちのクラスでも合唱の練習を本格化させないか？ B組もそうだがC組の猛りっぷりたるやすさまじいものだぞ。朝・昼・夕ととにかく時間があれば歌い続けている」

「来週からと古川からは説明を受けている。俺もそれでいいと思う」

「いや、遅いだろう！」

今まで全く口を挟んでこなかったくせに、こういう時だけはいきなりの評議委員面をする藤沖。いい根性しているとひそかに上総は思う。

「いいか、とにかく早めに俺たちは前に進まないとならないだろう。俺がお前を見込んであえて推したことが間違っていないという証明はできた。さてさて、これからだぞ、目指すは優勝だ！」

——無理だって。

上総は背中で熱く語り続ける藤沖の声を聞いていた。関崎を真の友として認め、A組を変えるための秘密兵器として押し出したことは素晴らしいしさすがとも思う。だが、上総からしたら応援団とその他いろいろにかまけてほとんどクラスの行事をこずえにまかせっきりというのが何か間違っているような気がする。決してこずえの手際が悪いとは思わないがただでさえ面倒な事情を抱えているA組クラスメートの面倒を見るのはひとりだとかなりしんどいはずだ。

「まあまあ、藤沖もそう燃えなさんな。あのねえ、私だって本当は早く練習始めたいよ。わかるよそのくらい。でもさ、みんないろいろと面倒な事情がてんこ盛りなのよ」

いつのまにか顔を出していた古川こずえが藤沖の頭を撫で回す。

「世の中には短期集中型が向いているグループもあるのよ。たぶん私が見る限りうちのクラスは

そちらのタイプよねえ。それにさ、私思うんだけどね、さっさと早いうちにデモテープを作っておけば練習しやすいんじゃないの。そのデモテープを作るためにまずは立村の伴奏を完成させる必要があるんだよね。それまであともうちょっと必要ってとこ？」

ひょいと上総を見るこずえ。あまり話に誘ってほしくないのが本音だがしかたない。言うことは藤沖前でも言う。

「今週いっぱい、時間もらえれば、たぶんある程度は形になると思うからそれまでもう少し待ってもらえるかな」

藤沖が関崎に問いかけるような眼差しを投げる。

「俺も立村の意見に賛成だ。昨日合わせてみたができればもう少しうまくなってからのほうが歌いやすいんじゃないかという気がした。俺ひとりの判断だが」

「だが、伴奏が完璧になるのを待っていたらいつまでたっても始まらないだろう」

上総には見向きもせず関崎を説得し続ける藤沖。相当恨みが深いと見た。

「ならどうすればいいだろう」

「俺に提案がある」

藤沖は立ち上がり、女子たちの一団に声をかけた。

「すまないが宇津木野、疋田の我がクラスの誇るソリストおふたりに相談がある」

宇津木田さんと疋田さんが同時に振り返った。怪訝な表情をしている。

「どうしたの？」

「今日の放課後なんだが、悪いが一瞬だけ助けてもらえないか」

首をふたり顔合わせながらかしげ、疋田さんが問い返した。

「ピアノのことなの？」

「無理には言わないが、この関崎の独唱に伴奏をつけてもらえないか。それと、昼休みのうちに俺もテープを買っておくから、古川、肥後先生からラジカセを借りてきてもらえないか」

いきなり話を持ってこられたこずえも目を白黒させたまま、

「なんなのいきなりあんた、何スイッチ入ってるんだか。いわゆるさかりがついたって奴？」

とかいつもの下ネタも今ひとつ冴えぬまま。藤沖は特にかまうでもなく宇津木野さんと疋田さんに向かい、

「昨日、関崎があのごつい顔にしては想像できないような美声をB組の連中の前のみで披露したと聞いて、どうしてもそれを確認したい気持ちがある。だがまだ中途半端なピアノ伴奏で奴の歌を観賞するのはどうも好かん。そこで、ふたりならば関崎を包み込むにふさわしい伴奏をしてもらえと思う。もちろん合唱コンクールの諸事情については古川からもよく聞いているし無理はしない。だが、せめてA組の中だけでも本物の伴奏というものを頭に焼きつかせたいんだが、どうだろう。忙しいところ申し訳ないが協力してもらえないか」

頭を下げる藤沖に、宇津木野さんと疋田さんはふたり近づいてひそひそ相談を済ませ、改めて関崎に目を向けた。

「ごめんね、いきなりでびっくりしたかもしれないけど」

こずえもフォローを入れようとする。

「ただ、まあここだけの話だけど、私も関崎がひとりでカラオケでのマイク離さずにいる姿は拝見してるんだよね。まじ、ほんと、うまいんだから。たぶんB組の子たちが驚いたのもそこにあると思うんだよ。私、音楽のことよくわかんないけどね、ただ、ピアノを本気で弾いているふたりに伴奏してもらえたら、関崎も うれしいんじゃないかな」

こくっと、背の高い宇津木野さんが頷いた。少しびっくりしたように疋田さんが丸い目で見

る。

「私も、そんなに関崎くんが上手なら、ぜひ伴奏してみたいな」

様子を伺っていた疋田さんも小柄な身体を大きく動かして、

「宇津木野さんがそういうんだったら私も付き合う。立村くん、楽譜ある？」

上総が口を開く前にこずえが即答した。

「大丈夫、こいつさっきから机の中に楽譜突っ込んでて、朝学習終わったらひたすらじっくり見入ってたよ」

「でも練習とかしないとまずいんじゃない」

小声でつぶやく上総をすぐに遮り、疋田さんが答えた。

「私たち、初見であの程度の曲、いつも弾いてるから放課後見せてもらえれば十分間に合うと思うよ」

宇津木野さんも頷いた。「初見」とは、いわゆる初めて見た楽譜を弾く、ということだろうか。昨夜もひたすらキーボードで同じところばかりひっかかって練習していた上総には信じられない能力である。

「よし！ なら今日はみな、無理にとは言わん。クラスで時間が少しでもある奴集まって、関崎の独唱と我がクラスのピアニストを愛でる会を行おう！ 古川の言う通り合唱は短期集中型だが、本物を耳にするしないとでは全く違うぞ。それとだ、この独唱会は特別に俺がカセットテープを一本私費で負担する。録音するぞ。そのテープを聴きながら最初はとことん練習だ」

関崎がすっかり困惑した面持ちで上総に問いかけた。

「決してお前を下手だとは言ったつもりないんだが、完全にこのままだと誤解される。俺としては一週間かそこらであそこまで弾けるようになった立村も相当だと思うが」

「いやいいよ。事実なんだから」

男女ともに盛り上がっている藤沖の演説を聞き流しながら、上総は答えた。

「それに俺も、あのふたりのピアノでの伴奏は録音したいしな。昼休み、自分用にテープ持ってくるから、関崎悪いけど各二回、歌ってもらえると助かるよ」

その九 レコーディング (2)

本来は内輪の話だったはずなのだが、噂は昼休みを迎える前にすべてのクラスへ流れたらしい。上総のことはとにかく、あの関崎がということで。

「そうなのですか。面白いねそれは」

こずえと一緒にラジカセを借りるため許可をもらいに音楽室へ立ち寄った時、肥後先生にも興味深げに言われた。

「関崎くんは今回指揮者として参加と聞いたが、自分で歌いたいと考えるとはなかなか目の付け所が違う」

「そうなんですよ先生、うちのクラスで前代未聞の外部スターですからね、あいつは」

顔をかすかにしかめるのを上総は見てしまった。もちろんラジカセはステレオタイプのものを快く差し出してくれたのだからそれはそれでいい。ただ、先生の視線がどことなくこずえに対しての苦手意識を浮かび上がらせてくる。女子が苦手、というわけではなくこずえの持つキャラクターに、と言ったほうが近いだろうか。気づかないふりをしておいた。

「二曲彼が歌うだけならそれほど時間もかからないだろうし、せっかくの機会だからピアノ一台は押さえておくよ。ただ他クラスの人たちの都合もあるからね。終わったら席をできれば譲ってほしい。それとだ、立村くん」

機械的にこずえへ要望を伝えた後、肥後先生は上総に語りかけた。水色のシャツに蝶ネクタイを結んでいる。あまり、学校の先生がするようなファッションではない。

「今回は宇津木野さんと疋田さんという、外から見ても優れたピアノの弾き手が演奏してくれる。こういう機会はそうそうない。録音して何度もまねすればいい。必ず得られるものがあるはずだよ」

「はい、お言葉に甘えてそうさせていただきます」

上総も同感だった。今の段階で他クラスの伴奏者と比較して自分のレベルが低すぎることはいやというほどわかっているつもりだ。誰が上手か下手かくらいの聞き分けはつく。テープで録音してもらえれば、関崎の歌はとにかくなんとなくテンポをつかめるような気がする。

「それじゃ、六時間目終わったら来まーす！」

元気よく飛び出していくこずえに続いて上総も音楽室を出た。途中、生協でカセットテープを一本購入し教室に戻ると、それまでずいぶんぎやかだった女子たちがふっと黙ってそれぞれ席に着いていった。まるで、というか上総のいつものパターンというか、

——俺がいるといろいろ面倒なんだろうな。

に、尽きる。

麻生先生にも藤沖がすでに話を通していうようで、

「藤沖の発想にもたまげたが、関崎が喜んで乗ってくるのもびっくりだ」

帰りのホームルームでけたけた笑いながら言い放った。

「できれば俺もお前らのミニコンサートを楽しみたいところなんだが残念ながら会議がある。録

音してくれるというのならば、後で聴かせてもらえるもんだと信じたいんだが、期待していいのか」

「先生、それ無理よ。音楽は生ものだから、足を運ばなくちゃ」

こずえがまぜっかえす。

「それがたやすくできるようなら俺も教師なんかやってないぞ。とにかくだ、我がクラスのピアニストふたりの名演奏もぜひぜひなんらかの形でお目にかけてくれることを楽しみにしているぞ。どうせ合唱コンクールでは」

ここまで言いかけて、すぐに気づいたのか麻生先生は話を逸らした。

「まあ早く練習するに越したことはないがな」

一言、きっぱり告げて号令を促した。

——わかってるさどうせ。俺の伴奏だと期待するも無駄だってことだよな。俺も反対の立場だったらそう思う。

当たり前すぎて腹も立たない。授業中からずっと一部の女子たちがひそひそ話に盛り上がり何か注意されていたが、聞き耳立てた限りでは関崎の噂ばかりのようだ。具体的な内容はよくわからなかったが、すでにクラス女子たちの間で関崎の評価がうなぎのぼりだということだけはよく理解した。取り急ぎ、二人のクラスピアニストに楽譜を渡すべく立ち上がると、隣りからこずえにひったくられた。

「あのさ、なぜそういうことする？」

「悪いけど私、預かってくよ。それと関崎、ちょっと来な」

楽譜を取られたままぽかんとしている間に、こずえはすばやく関崎を呼び寄せた。何も考えていないような顔で、

「どうした、これから音楽室に行かないとまずいだろう」

「その前に楽譜、楽譜。あんたもおいで。あ、立村はここで待ってな。一緒に行くからさね」

上総を取り残したまま、ふたりは教室の隅で話をしている宇津木野さんと疋田さんに声をかけた。これからの本番を迎えるにあたって、まだこのふたりは楽譜を見ていないはずだ。たしか『初見演奏』とか言っていたが、それはいくらなんでもきついだろう。

「ねえねえ、これ立村からぶんどってきたんだけど、この楽譜、今のうちに目通ししておきたいかなと思って」

「ありがとう、古川さん助かる」

小柄な疋田さんが受け取って、せいたかのっぼの宇津木野さんに、

「ほら、曲、どうする？ 今度は私が『恋はみずいろ』弾くから、『モルダウ』にする？」

などと打ち合わせている。全くの初見で行うわけではなく、まじまじと立ったまま楽譜を手に取り読み比べている。

「まあ立村でもなんとか弾けるようになったってことだからそれほど難しくないよね」

「うん、そうだね。早く見せてもらえたから大丈夫。それと関崎くん」

関崎に向かい、また疋田さんが楽譜を見せつつ説明した。

「歌のタイミング、私もできるだけ合わせるつもりだけどスピードが合わなかったらあとで言ってね。何度でも弾き直すから」

「私も」

小声で宇津木野さんもはにかみ気味の笑顔を見せる。関崎は言葉に詰まっていたが、すぐに、「ありがとう。俺としてもカラオケ以外で歌うのはそうそうないことなんだ。生演奏というのは贅沢だが、昨日立村と組んだ時も気持ちよかった」

「生が好きなのねえ、生、が」

淫靡な言い方をさりげなくしてこずえは茶々を入れた。

「立村のレベルじゃないからねえこの二人。ま、ふたりとも大変な時なのにわざわざ手伝ってくれて本当に感謝！ ふたりが弾いたところは録音して、あのへっぽこ伴奏者に耳たこになるくらい聞かせてしごくから安心してよ」

——礼儀として否定してくれないのかな。

上総が様子を伺っていることにも気づかないのか、一Aピアニストコンビは納得した顔でこっくり頷いていた。関崎だけがちらと上総のほうを見た。

「あれ？ こずえ」

開けっ放しの教室に飛び込んできたのは美里だった。すぐ上総に気づいたのか、手を振ってきた。雰囲気はどことなくこわばっているのを感じたらしく、すぐ上総にささやきかけた。

「これから音楽室なんでしょ。うちのクラスでもすっごい噂になってる」

「清坂氏も来るか？ 他のクラスも音楽室で練習しているみたいだしひとりくらい混じってても目立たないよ」

少し考え込んだが、美里は首を振った。てっきり関崎とこずえに声をかけるかと思ったが、「やっぱりやめとく。けどね、立村くん」

まっすぐ目を見た。上総にだけ聞こえる声で、

「立村くんが一生懸命練習しているってこと私は知ってるよ。もし他の人たちに変なこと言われたら、私絶対、言い返しに行くからね。いつでも声かけて」

笑わず、きっぱり言った。

「ありがとう」

「じゃあね、土曜日、またね」

美里が教室から出て行くのを、こずえも関崎もほとんど感知しなかったようだった。見送ったのは上総だけだった。

その九 レコーディング(3)

音楽室の入り口が開け放たれている。三階の階段を昇り立ち止まると声をかけてきた奴がいる。

「立村、ギャラリーすごいことになってるぞ」

難波だった。かばんを引っさげてめがねを押し上げている。

「そんなにすごい噂になっていたのか？」

答えて音楽室の中を覗きこむ。すでにA組の女子たちが集まっていて、グランドピアノを占拠しつつ、宇津木野さんと疋田さんを囲みわいわいやっている。それだけならわかるが、なぜC組の女子たちも、またなぜかそれ以外の男女も混じってうろついているのだろうか。A組男子たちもちらほらいることはいるがすべてではない。

「天羽と更科もそろそろ顔を出すはずだ」

「なんで？」

繰り返し尋ねる。上総の頭の中において、今回のイベントは単なる合唱コンクール用のお手本録音に過ぎない。関崎に男子の音取りをしてもらい、ピアノはまさにプロなみ……と上総には感じられた……の腕前であるふたりの演奏をカセットテープに収め、来週以降の集中練習に活用するためのものだ。合唱の場合、どうしても女子の声に引っ張られてしまいがちというところがある。そのために男子のパートをしっかりと歌ってもらい、それに合わせて練習するのは効果的だと思う。

——少なくとも、コンサートじゃないだろう。

「偵察は欠かせないからな。また現場での確認が何よりも大切だ」

難波はまたわけのわからないことを言う。

「でもC組は今日も練習だろう？」

「もちろんだ、ほらほらおいでなさった」

階段を見下ろすと天羽と更科のふたりがふうふう言いながら昇ってくる。

「立村も来てたんだ」

のんきに更科が子犬の笑顔を見せる。

「当たり前だろ。俺だってテープ用意してるんだからな。うちで練習するのに必死なんだ」

「まあ、お前があせるのもわからなくはねえが、なあ」

天羽が軽く背中を叩いた。

「のんびり行こうぜってとこで、まあいきましょうか」

気づいた。羽飛はいなかった。

中に入ってみるとA組女子たちの一部が責めるような眼差しで見る。気づいたのかすぐに天羽たちはC組グループに混じりこみ、けたけた笑っている。A組男子たちを探してみたが親しく話す奴はいない。しかたなくC組男子グループに割り込んでみる。

「そろそろ真打は」

「遅いな」

関崎がまだ来ない。ついでに古川こずえもいない。

「たぶん古川さんと打ち合わせしてるんじゃないかな。あと藤沖あたりと」

「それはあるある」

すでに準備が整っている巨大なラジカセにカセットテープをセットした。自分の分を優先して入れさせていただく。あとでこずえが入れ替えるだろう。いじくっているうちに、一瞬空気が静まるのを感じる。戸口を眺めやる。なんと麻生先生他数人、教師陣の登場ときた。しかもその中には野々村先生までいる。その後ろには静々と関崎、古川、そしてタイミングを少しずらす感じで静内菜種が姿を現した。

——静内さん、か。

B組女子は彼女のみ。美里はいない。

「それではただいま会議を一時休止して、一年英語科が送るハプニングミニコンサートと行くわけだが、まずは紹介だな」

ずいぶんかしこまった言い方をする麻生先生。苦笑している他の先生たちをよそに、脂ぎった顔をさらにてかてかにして、

「まず、我がクラスの誇るピアニスト二名、そして今回特別にソロデビューを果たす関崎。これだけお客さんに集まってもらったら燃えるだろう、な、関崎？」

「もちろんです」

きっぱり、すごいことを関崎は言い切った。やはり茶々を入れるのはこずえだ。

「公開本番だもんねえ、そりゃ燃えるよねえ」

「こら、古川お前も女の子なんだから」

叱る麻生先生、笑う先生たち、ひとりだけむっとした顔をしている野々村先生。妙なコントラストだった。ちらと上総を見て、野々村先生はすぐに目を逸らした。

ピアニストふたりが関崎を挟むようにして並び、生真面目に礼をした。音楽準備室からは肥後先生が現れ、わざわざマイクとコードを用意してラジカセにつなぎ、足元に置いた。

「迫力があるほういいからね」

なんなのだろう、この盛り上がり方は。やはり何かが違う。

「では、初めてくれるかな」

「はい」

関崎はふたりのA組ピアニストに頷いてみせた。すぐに疋田さんが「恋はみずいろ」を軽やかに奏ではじめた。音色は触れたとたんふんわり風船玉が浮かぶようなイメージ。関崎と顔を合わせてこくっと合図を送る。関崎もすぐにメロディーに乗っていった。普段の関崎ではない、やわらかな響きが音楽室に満ちた。

——こいつ本当に、中学時代音痴だと思ってたんだよな。

そこにいるみな、息を呑みただ聞きほれている。関心のなさそうな連中は最初から音楽室になんか来ないわけで、当然ここにいるメンバーはそれなりに音楽なり、合唱なり、伴奏なりに興味

を持っている。関崎の喉から響き渡る歌声が何を描いているのかを感じ取れる者だけが揃っている。だから、ただ黙る。耳を澄ます。それだけだ。

歌が終わる。一瞬の静寂は本物、拍手鳴りやまず。思わず頬を赤らめる疋田さんに関崎がふかふかと礼をする。二言三言、何か言葉を交わし、すぐに宇津木野さんにバトンタッチする。なぜかふたりとも関崎の顔を見て微笑みかけている。女子たちも笑顔でふたりの交代する姿をあかず眺めている。呼吸を整え、次に流れる曲、「モルダウの流れ」を宇津木野さんと目で合図しつつ待っている。

ゆったりと流れていく大河が目の前に広がるような深い音色。最初の疋田さんとは違う重厚な雰囲気。曲のイメージもあるだろうが、先週音楽の授業で聞き比べた限りではあきらかに宇津木野さんの方が表現力に勝っているような印象がある。上手下手というよりも軽さ重さ、の違いかもしれない。どちらにせよ、上総には手の届かない世界であることには変わりがない。

それにあわせたのか関崎の歌声も、最初の滑らかさよりもさらに深さを求められているようだ。最初は少し戸惑ったのかもしれないがすぐに調子を捕らえ、途中宇津木野さんと頷き合いながらまた声を響かせた。カラオケボックスの雰囲気とは違う、ずっと大人の声といえいいのだろうか。

——どう考えても、関崎に音痴だと思わせた中学教師は変だよな。

上総は、見知らぬ水鳥中学の音楽教師の感覚に疑いを持ちつつ、ピアノの音をひたすら数えていた。どうしても、どちらにしても、どうやっても届かない。

——みんな、俺が伴奏やるってことに決めてしまって、後悔してるだろうな。

拍手止める奴なんていなかった。

数人腕を組んで頷く奴もいないことはなかったが、女子はほぼ百パーセントが拍手だった。気がつけばいつのまにか上級生たちの聴衆も増えている。いや、驚いたことにかの結城先輩までいる。激しく両手を打ち鳴らしているのが誰かと思ったら、案の定だった。

「関崎さっすがすげえわ」

「お前、本当に指揮者でいいのか？ ソロパート作る必要ねえのか？」

「合唱にしちまったらかえってもぐっちまうし、指揮者というのもありかもしれねえけどなあ」

A組男子連中も、藤沖が肩を抱き、側で片岡が目を輝かせて拍手し続け、同時に麻生先生が頭をかかえるようにして、

「ああ、なんだろなあ、うちのクラスにはこういう隠れた才能がばりばりあるってのになあ。これこそ合唱コンクールで出すべきだよなあ。藤沖どう思う？」

「俺も賛成です。関崎、これからはお前が我がクラスのマイスタージンガーだぞ」

「藤沖、マイスタージンガーってなんだ？」

——関崎、ワーグナーの「ニュルンベルグのマイスタージンガー」知らないのか？

喉まで出掛かってやめた。無駄なことだ。オペラ、さらにはワーグナー好きの誰かさんを思い

出したってしょうがない。上総はカセットテープを別のものに入れ替えた。自分用とクラス用を作ってもらわけだからもう一度三人に再演してもらう必要があるわけだった。

その九 レコーディング (4)

しばらく再開のタイミングをうかがっていたがどうも関崎はじめ演奏者ふたり燃え尽きたような顔をしている。恐る恐るこずえを捕まえて、

「もう一度、やってもらいたいんだけどだめかな」

ささやいてみたが、肩を竦められた。

「立村あきらめな。無理だよ、なんなのあの、三人の達成感ある顔、見なよ。最高の一発って感じじゃん。二発め、三発めったってそりゃ無理よ」

「やはりそうだよな」

聴いている途中で正直あきらめてはいた。やはりあとでこずえに頼んでテープをダビングしてもらうしかあるまい。その時は自分のカセットテープを持ち込んでケーブルでつなぐ必要がありそうだ。

「おい、忘れてた、立村」

ふと関崎が思い出したかのように上総を呼んだ。同時に他の生徒たち、および先生たちもこちらを向いた。

「何か」

「お前に頼まれてたこと忘れてた、悪い。これからもう一度歌わないとまずいだろう」

真顔で言う関崎に、また周りの観衆がざわめき出す。期待が感じられそうな雰囲気ではある。本人はやる気満々なんだろう。しかしふたりのピアニストたちが戸惑ったように顔を見合わせている。

「なんでそれやんなきゃいけないの」

問いかけたのは静内だった。さっきまで楽しげに関崎へ声をかけていろいろ語らっていたのだが、さすがに思いがけない展開だったのだろう。不審そうに尋ねる。

「ああ、さっき、立村に自分の練習用にもう一本テープを録音してほしいと頼まれていたんだ。それで一本目は保存して、二本目は入れ替えてと、そういうつもりだったんだ。立村もさっきテープ入れ替えてただろ？」

目ざとい。が、なんとなく側でじとりと見つめる静内の眼差しにびくりとしてしまう。

「いや、いいよ。あとで古川さんにテープダビングさせてもらうし。それに関崎も疲れているだろうしさ」

上総も笑顔を作って首を振り答えることにする。隣りで静内も同じことを言う。

「こういったらなんだけど、関崎、あんた調子にのって喉壊したらどうするの。少し養生しなよ。無理することないじゃないの」

「だが約束したからな」

「約束なんて、あんな」

言葉を切り、ちらと上総に視線を向ける。明らかに苦手意識が満杯の眼差しに思わずひく。いつもこの人にすれ違うたび思うのだが、あまり特長がないというか、見てすぐ忘れそうなタイプ

の顔立ちをしている。くせのない、といえば褒め言葉なのかもしれないが、美人不美人という切り分けとは全く別の意味で、存在感が薄い。かといって発するさばさばした言葉遣いや美里を絡めたいろいろな出来事なども加味すると、比較的クールなタイプの女子なのだろうと想像はしている。

「自分を大切にしながらことよ。ね、そう思うよね」

さっとA組の女子たちに向けて放つ言葉。それにみな悔しいほど素直に頷く。A組だけではなく、ご相伴したC組、その他の人々も。

「そうだよねえ、結局立村くんのためだけって冗談じゃないよねえ。ふたりとも一生懸命この時のために全力投球したんだから」

ふたり、とは宇津木野さんと疋田さんのことだとわかる。

「義理、ないわよねえ」

麻生先生も間を取り持つ形で上総を含めて声をかけてくる。

「まああれだ、今日はこのあと別のクラスが稽古控えているんだし、今日はさっさと引き上げないか。練習するなら教室でやればいいだろう。テープについてもまああれだ。こういっちゃなんだが立村にここまでの技量は誰も求めてないだろう。お前は自分のできるところまでやればいい。それは関崎も同様で、新たなチャレンジの指揮者準備に時間を費やしたほうがいいんじゃないかな」

「ですが、やはり約束は」

さらに言い募る関崎を頼もしげに見つめる藤沖が、肩をまた抱くようにする。

「いいじゃないか。また続きは教室でやろうじゃないか」

なんとなくそれで流れが決しそうになったその時、前にひとり、するすると出てくる女子がいる。見覚えはある。いや先週の焼き直しかもしれない。

小柄な女子が関崎の前に立った。

あの時と同じだった。

野々村先生もじっと彼女を見つめて凍り付いていた。

瀬尾さんが、無表情なまま関崎に語りかけた。

「伴奏が大変なら私が代わりに弾いてもいい？」

「え、あ、あの？」

全く接点のない女子に話しかけられることに、関崎はまだなれていないらしい。すっかりどもってしまっている。

「私もちょっとなら初見演奏できるし、楽譜見ればある程度のところまではいけるから」

少し上総と離れたところで天羽が合いの手を入れる。

「瀬尾ちゃん、どうした、ピアノの練習で勝負かよ。まだまだ勝負の時は早いぞ」

全く相手にせず、瀬尾さんはすぐに宇津木野さんと疋田さんから楽譜を受け取った。ひったくったと言ったほうがいい。ふたりもすっかり瀬尾さんの勢いに飲まれてしまったようで言葉もない。

「ピアノを一曲弾くとなると体力を消耗するのは私もわかる。だったら代わりに私が弾いてもいいよね。目的は録音するだけなんでしょう。同じ曲ならそれでいい？」

みな、ぽかんと口を半ば開いた状態だった。野々村先生が遠慮がちに割り込んだ。

「瀬尾さん、あの、先週はごめんなさい」

「先生には関係ありません」

ぴしゃりと跳ね除け、瀬尾さんは唇をかみ締めたままグランドピアノの前に座り、高さを調節した。ペダルに足を乗せ、静かに、

「マイクの準備をお願いします」

関崎に頼んでいた。

「なら俺も歌って、いいのか」

「もちろん！」

ここで初めて瀬尾さんはにっこりと微笑んだ。

話の転がり方にしばらくついていけなくなった男子連中、女子の一群から少し離れたところで、野々村先生はじっと瀬尾さんの弾き始める姿を見守っていた。A組女子たちがひそひそ話をしながらそれでも関崎の歌が始まるころには黙りながら見つめている。一方お膝元C組では「瀬尾ちゃんさっすが！」「プロだぜやっぱし！」「我がクラスの最終兵器だわな」などと天羽・難波・更科中心にささやき声が膨らんでいる。たぶん録音されているんじゃないだろうか。

関崎の歌声は、他の連中が心配することもなくいっそう伸びを増した。もしかしたら一回目はリハーサルだったのではないかと思わせるほどだった。そのくせ、顔には陶醉感がなくただひたすら生真面目に口を動かしている。

——うちの学校に合唱部とか歌を歌う感じの部活ってなかったかな。

なんだか関崎が進むべき道は、生徒会でも委員会でもなくて、そっちのほうなんではないかと思わずにはいられなかった。

「恋はみずいろ」と「モルダウの流れ」二曲が終わり初めて気がついた。

——しまった、伴奏全然聴いてなかった。せっかく弾いてくれたのに。

関崎の歌だけに頭がすべて集中してしまい、伴奏のよしあしを全く感じる間がなく終わってしまっていた。明らかに上総よりはうまいことだけは把握したが、宇津木野さんや疋田さんのような曲の盛り上がりというのも、旋律の美しさという押し出しもなぜか全く感じなかった。いつのまにか、さらりと終わっていた。拍手にそれすら溶け込んでしまっている。笑顔いっぱい一礼し、肥後先生からお褒めの言葉をいただき、C組男女それぞれから勝利の雄たけびで迎えられている瀬尾さんがどういう個性を持って曲を弾きこなしたのか、上総には気づくことができなかった。

その十 あねおとうと（1）

一年英語科ミニコンサートが行われて二日経つても、今だにその熱気は冷める気配などなかった。クラス全員が集まって確かなる「音楽の真実」を見てしまったのだからしかたのないこととはいえ、

「うちのクラス、他にも吹奏楽やってる奴とかいっぱいいるんだからそいつらも含めてまたああいうのやりたいよね」

「ほんと、観客だったら楽しいよね絶対！」

今まではなんとなく「上手」としか思っていなかった宇津木野さんと疋田さんのピアノ演奏がそれぞれ個性のはっきり分かれたものだったということから始まり、関崎の深く響く歌声などもクラス全員の前で明らかにされたというわけだった。こずえも関崎のカラオケマニアっぷりを他の女子たちに話していなかったわけではなかっただろうが、実際目の当たりにするとそれぞれ思うところもあるらしい。

「関崎くんはねえ」

「すごいよねえ」

もともと外部生の中でも本人の意図とは別に目立ちきっている関崎のこと。女子たちも最近はなぜか関崎に対して熱いまなざしを送ってきているようだ。もっともそのことを気づいているとはどうも思えない関崎、相変わらず外部三人組で行動してはいろいろと自由研究について話し合っているようだった。上総が直接確認したわけではない。図書館でたまたま盗み聞きしたらしい女子たちの噂からすると、全くもって勉強の話しかしていなかったらしいと、だけのことだ。つまりまだ、恋心の混じる気配はなしということか。

「立村、これからどこに行くんだ？」

「古川さんの家でピアノ弾かせてもらうつもりなんだ」

土曜の放課後、上総がかばんに教科書とノートをまとめて廊下に出ようとする時、関崎に呼び止められた。

「そうか、練習しているのか」

「当たり前だよ。あんなすごい聴かされたら、俺もプレッシャーだし」

冗談めかしてつぶやいたつもりだったが関崎は真に受けたらしく、

「いや、俺もこの点はお前に誤解させてしまったようで申し訳ない。俺としてはただ、立村の参考になればと考えていただけだったんだが、かえって縛り付けるようなことになってしまった。読み違いだった」

「関崎は悪くないから気にするなよ。俺が練習すればいいだけの話なんだからさ」

あのミニコンサートで変わったことを上総に絡めて言うならば、

——一年英語科の合唱コンクールは、本来レベルの高いピアノ人材が揃っているにも関わらず、結局自宅で練習するのも困難な奴がちんたら弾くに過ぎないみじめなもの。

という現実をクラスメートたちに突きつけたということだろうか。実際上総にとってはこの二

日間針のむしろとまではいかないけれども静電気ぴりぴりしそうな環境にいることは自覚していた。否定は全くできない。比較対照外、とも言う。

「自分が指揮者として練習する以上、お前にとことん合わせる。一緒にがんばろうな」

関崎はあまり深いことを考えていないようであっさりと答えた。自分のかばんをぶら下げて上総と肩を並べて教室から出た。

こずえと美里とは人目を避けて直接古川邸マンション前にて待ち合わせる予定だった。本当ならばそろそろパート別練習から全体練習に切り替えなくてはならない時期なのだが、あえて上総のピアノ演奏が整うまで時間を稼いでもらっている。こずえともその点の打ち合わせはしてある。とりあえず、最後まで弾くことが出来るレベルには持っていくということだ。

「明日もピアノの先生に習いに行ってくるから、月曜からは普通に伴奏できるレベルにたどり着ければな」

「家ではどうやって練習しているんだ？ 古川から借りたキーボードか」

「それだけじゃない、この前のテープあるだろ。あれを毎日聴いてる。ひたすら聴き込んで、少しずつ耳慣らしているんだ」

風がひんやりする。空は青空なのになぜか遠く感じる。ふたり合唱コンクールのことでしばらく語らった。

「耳慣らしとはいったいなんだ？」

興味深げに関崎が尋ねてくる。

「ピアノの練習方法。毎日のようにひたすらテープで音を何度も聴きとって、それをまねて、なんとなくこんな感じかなって練習していくとなんとかなるんだ。関崎の歌にひっぱられそうになるけれども本番は全員の合唱だからその点覚悟もできるしさ」

実際その通りだった。家に帰り、改めて録音させてもらったC組瀬尾さんの演奏を何度も聴きながら、キーボードを叩いた。今日もこずえ宅で聴きながら美里含め意見をもらいつつ練習しようと思っている。

「そうなのか。だが俺が思うに立村」

何度も、同じことを関崎は訴えてくる。

「お前は別にあのふたりと同じレベルを求める必要はないんじゃないかと思う。俺もピアノの世界はちんぷんかんぷんだが、たぶん音大かどこか行くつもりなんだろう。そういう奴は毎日五時間くらいピアノを練習して、スパルタ音楽教師にしごかれて毎日苦労していると聞いている。それも小学校入る前から厳しい特訓 ともな」

いかにもステレオタイプな音大を目指す学生の姿に関崎は描いた。

「ずいぶん詳しいな」

「いや、学校にひとりかふたりはそういう奴がいるだろう」

関崎は続けた。

「俺からすると耐えられたもんじゃないが、そういう音楽漬けの生活を送っている人と、こういったらなんだが自己流で練習している立村を比較するのはやってはいけないことだということのもよ

くわかっている。俺は、お前が自分から伴奏をやりたいと言い出したことそのものに価値があると思っている。たとえどんなにテンポを崩そうが間違えようが俺はお前を責める気などない。とことん俺がフォローする」

自信たっぷりに言い切る関崎を、上総はため息をこらえて微笑み返した。

「ありがとう。恩に着る」

——相当こいつ、俺のことは見くびってるというか、まあ事実を見ているというか、なんていうんだろう。全く、本気でやらないとまたこんな言い方されて慰められるんだろうな。関崎、本気でそう言ってるから、下手なこと言い返せやしないよな。

改めて決意した。冗談じゃない。意地でもこの二日間で完成させてやる。

かばんの中に納まった楽譜はすでに頭の中にしっかり刷り込まれている。暗譜まであともう少し。

関崎と校門前で別れ、上総はそのまま真っすぐこずえの住むマンションへ向かった。

ひとりで歩いているとやはり秋風の冷たさを芯で感じる。半そでが少し辛い。そろそろカーディガンを持ち込もうかと本気で思う。

——けど、あのテープで本当によかった。

まだ誰にも口にしていない本音をひとり歩いている間考えた。

——宇津木野さんや疋田さんのような感情溢れる弾き方だったら、たぶん俺にとってお手本にはならなかったよな。まねしようがないしさ。

まだ青々としたプラタナスを眺める。隣りをすり抜けていく高校生、中学生たちがたくさん。同じ高校の連中はいなかった。

——初めて聞いた時も思ったけど、瀬尾さんの弾き方が俺には一番しっくりくるかもしれないような気がする。あの人の弾き方ならなんとか、まねられるかな。ずっと目立たないように、気づかないように。下手じゃないけど、あまりこれぞっていう個性が特出してなかったような感じがするんだよな。何度聞いても、関崎の歌だけがどっと押し出されていて、伴奏は弾いているんだかどうだか分からない。けど、うちのクラスのふたりだと関崎よりもピアノのうねりに飲み込まれるようだし。

偶然の産物とはいえ、上総としては瀬尾さんに心から感謝している。とりあえず自分の目指すべき方向はこちら。いるかいないか分からないくらい控えめに、それでもしっかり旋律を保たせる。これで行こう。

その十 あねおとうと (2)

「遅かったね。また何か呼び出しされたの？」

美里が駆け出して迎えてくれた。羽飛も一緒かと思ったのだがいなかった。

「いや、ごめん。けど羽飛は今日は？」

「貴史ねえ、今日はお昼食べてから合唱コンクールの特訓なんだって」

予想通りの言葉だった。美里はどうでもいいというふうにつぶやく。

「C組本気でやってるからね。特に難波くんが燃えてるんだって。それに女子たちもこの前、ほら、瀬尾さんのことがあったじゃなあい？ あれがきっかけでクラス一丸になっちゃったんだって」

すでに美里にも関崎のコンサートに関する情報は上がってきているようだった。いや知らないわけがないとも思っていたのだが。かばんに入っているカセットテープがかたかた返事しているかのようだ。

「瀬尾さんにはもう感謝しつくせないな。あのテープがなかったらえらいことになってた」

「そっか、立村くんにとっては練習用テープなんだもんね。そうかそっか」

気持ちを切り替えるような表情を見せ、美里は上総のとなりに並んだ。

「じゃあ行こっか。きつとこずえ待ちかねてるよ。それと、今日は私、お母さんからチョコクッキー焼いてもらってきたから、お土産は気にしないでいいよ」

「俺もうちから、紅茶の缶持ってきたから、一緒に渡そうか」

やはり手土産は欠かせない。笑い合い、マンションの入口に向かった。

すぐにエレベータで昇り、すぐ降りた。

「清坂氏はB組の練習とかはあまり参加しないのか」

「してるよ。でも今日はこっち優先したの」

「それまずくないか。B組だって真剣にやってるって話噂で聞いているし」

「そうね、そうかもしれない。来週からは参加する。けど今日は立村くん優先でいく」

あっさり交わし、玄関の呼び鈴を押した。

「ごめーん、遅くなっちゃって。立村くんもいるよ」

——ちょっと待ってて。

こずえの声が聞こえると同時にドアノブがかちゃかちゃ鳴り、すぐに開いた。

「お待たせ。それにしてもまた羽飛欠席？」

「しょうがないよ。あのC組だもん」

いかにも大げさながっかりポーズを見せる私服のこずえに、上総も言い返す。

「悪かったよ。俺も次回はちゃんと連れてくるよう説得するから」

「あんたにそんなこと期待してないってば。まあとにかく、今日は盛り上がるよ。期待しててよ」

テンションが高いこずえの姿は決して珍しいわけではないのだが、今日はやたらとふんわりし

たスカートはいているし、ブラウスもこれまた珍しくふりふりのレースもの。こういう服を着たこずえを美里は見たことあるのだろうか。小声で囁いた。

「古川さん、ああいう服着るの見たことある？」

「ううん、ない。かなり、びっくり」

「だよな」

すぐに靴を脱いだ。脇に揃えて置こうとして気づいた。黒いつややかなローファーがやはりきちんと並べられていた。ということは先客ありか。

「こずえの靴じゃないもんね。サイズ違うもん。二十一センチなんて」

美里も断言した。こずえには気づかれぬよう部屋に続いた。

「さあ、どうぞどうぞお入りなさいませ、それと今、母さんうちの弟の部屋で看病の真っ最中。移すともずいからご挨拶出れなくてごめんねってメッセージあり」

こずえは早口に伝えた後、居間ジャングルの扉を開けた。

「お待たせ！ さあお二人ともお待ちかね、さあさ」

先に美里が入り、素っ頓狂な声を上げた。背中で中の様子が見えない。思わず覗きこもうとした瞬間上総も凍りついた。叫ぶのもわかる。

「あ、あの、これ」

「これなんて失礼じゃないのさ、さ、早く挨拶しなよ。久々でしょふたりとも」

居間に入り、部屋一面に並んでいるゴムの木サボテン鉢その他緑にうもれた中、上総は一言、なんとか絞り出した。

「霧島さん、お久しぶり」

「ゆいちゃん、元気だった？」

ソファーにはセーラー服に紺のスカーフを結んだ霧島さんが静かに微笑んでいた。髪はふわふわした天然パーマをポニーテールに結い上げている。かつて青大 附中にいた頃と同じ髪型そのものではあるのだが、どこことなく突き刺さってくるような棘がなくなっているような感じがした。一目でそれだけ感じ取った。

「けどゆいちゃん、今日どうしたの？ もしかしてこずえ呼んでくれたの？」

霧島さんが答える前にこずえが素早く説明した。

「半分当たりってところ。今日、美里も来れるかどうかわからなかったじゃない。B組で練習するかもしれないからって。だから男子と一対一ってのはどうよとか思って、それだったら私の前々からの計画をこの機会にやっちゃおうってことで、ゆいちゃんをお招きしたの。立村ひとりだったらピアノの練習に没頭してもらって、私ら女子ふたりで思いっきり甘い話したいなとか思ったわけ」

「私が来ないって思ってたんだ、ひどいな、ずるい」

ふくれそうになる美里をこずえは素早くなだめた。

「あのね、そういうわけじゃないんだってば。ったくもう、今日美里が来てくれたからラッキーも倍じゃない。ね、ゆいちゃんもそうじゃない？」

この部屋に入って初めて、霧島さんはこっくりうなづいて笑顔で答えた。

「そうよ、こずえちゃんのおかげで美里に久々に会えたし。私も嬉しいの、それに」

行き場をなくした上総にも、天使のごとき微笑みを分けてくれた。ありがたや。

「立村くんにも、この機会にきちんとお礼を言わなくてはならないと思ってたの。うちの弟のことを面倒みてくれてありがとうってこと、なかなかこういう機会でないとなんと向かって言えないし」

——やはりあいつのことか！

顔色が変わったのかもしれない。息が止まりそうになるのをこずえが助けてくれた。

「やっぱそうよねえ。ゆいちゃんの弟のこといろいろ、これから先の相談として聞きたいと思ってたんだ。この機会、立村が居てくれるのはありがたいよね。ゆいちゃん、私たちが混じっててもまずくない話だよ、それ」

「もちろんそうよ。できれば、ふたりにも客観的に話を聞いてほしいの。その上で立村くんにも相談したいことがあるから」

かろうじてなんとか上総が口にしたのは、

「俺にできることがあるとは、正直思えないけど、役に立つならそれなりのことはするよ。ただ、相手もいることだしさ」

「わかってるわ。そのこともわかっているから、今日、ここに来たの」

見たことのない霧島さん、といった雰囲気だった。今まで上総の知る霧島ゆいとは「青大附中の美少女アマゾネス」であり「天使の微笑と同時のからっぽ脳みそ」とか外見と学業成績の低さ、もしくは桁外れの気の強さとがセットで語られる存在だった。評議委員で三年間一緒に活動してきたこともあり彼女の性格にはかなり振り回されてきたところもある。一番の被害者は三年間コンビを組んできた更科かと思われるがあいつも、

「キリコは単純だよ、ちゃんと自分を認めてほしいってこと訴えてるからそれをすれば素直に言うこと聞いてくれるし、扱う分にはすっごく楽だよ」

とか手のひらで結構かるがる転がしていたところがある。

評議委員としてのクラス内での仕事ぶりは認められていたがいかんせん、あまりにも青大附中の生徒として認められないレベルの成績が災いし、青潟市内の私立高校に推薦入学という形で去った。しかし、それからまだ、半年しか経っていない。

——たった半年で、こうも変わるのか？

まじまじと改めて霧島さんの顔を眺めやる。弟によく似た顔立ち、それが変わるわけではない。制服、もちろん違う。しかし、口調といい今まで上総の知る、男子たちへの強い競争意識のようなものがするりと抜けているような気がしてならない。かつての霧島さんなら上総を一目見るなり自分の方から、なにかかしら辛辣な言葉を投げってきたんじゃないだろうか。それが、こずえが促すまでずっと静かに微笑むだけ。かつて、

——霧島さんはこうやって静かに壁の花としてにっこり笑っていて、見つめているだけで十分価値のある人なのにな。

と密かに思った上総の本心をそのままなぞっているがごとくだった。

その十 あねおとうと (3)

「悪いんだけど今日はスーパーのお惣菜パーティーね」

こずえが用意してきたのは食パンとバターとハム、そしてポテトサラダ。飲み物はオレンジジュースと烏龍茶のそれぞれ紙パック。

「そういえば弟くん大丈夫？」

ちらっと聞いたこずえの弟の事情について、先に美里が尋ねる。

「いやねえ、学校で季節の変わり目のせいかやたらと風邪が流行ってるみたいなのよねえ」

「インフルエンザにしてはまだ早いよね」

「なんだかわからないけど、結構流行しやすいらしくって、今のところうちのママンがひたすら看病、ご機嫌取り。全くおぼっちゃまはめんどくさいっらないわよね」

そこで上総を横目で見ると。

「何か言いたいことあるのかよ」

「別に。ただね、やっぱり弟を面倒見るのって大変よねえ」

今度は霧島さんに話を振る。霧島さんもひとつ、頷いた。

「最近それは思うわ」

「最近？」

思わず上総も問いかけてしまう。霧島さんは続けた。

「うちの場合もともと仲があまりよくないからあまりあいつのことを考えたことなかったの。でも、家の事情とかいろいろあるし、そうなるとうちの思っているところはあるかもしれない」

——家の事情か。確かに。

霧島弟の口からここ数カ月しつこく説明されているさまざまな家庭事情が影響しているのだろう。想像はつく。ただ姉である霧島さんからするともっと言いたいこともあるだろう。あとで少し探りをいれてみようとは思っている。パンをひと切れ手に取り、バターを塗ってハムを挟む。本当はこの程度のもてなしが一番気楽でいい。ただ、ポテトサラダの味付けが妙に濃すぎるような気がした。

「ゆいちゃんも大変だよねえ。あ、そうだ、ゆいちゃんは今、学校で部活かなんか入ってる？」

「入ってない。興味ないし」

「じゃあ委員会は」

「入るわけじゃない」

ここまでの会話を霧島さんは憤ることなくたんとと交わしている。それが上総にとっては信じがたいことでもある。今までのパターンでいけば、霧島さんはこずえを相手に、

「当たり前じゃない！ あんな頭の悪い学校で何部活入れっていうのよ！ 私だって青大附中卒業生としての誇りがあるんだから！」

くらい言い放ちそうなイメージがあった。成績が悪かったという現実はずいといいても、青大附中にかつて在籍していたことは事実。卒業までした。私立可南女子高校……弟曰く「女子刑務所」……とか馬鹿にされている悔しさだってもちろんあるだろう。

「でもどこの弟もおんなじね。お母さん大好き。お母さんに甘えたいのよ。だから何かあるとはい水、はいりんご、はい枕ぬるくなったから替えて、とまあその連呼」

「わかるわかる」

穏やかに微笑む霧島さんにかつての「C組の美少女アマゾネス」の面影は完全に消えていた。

しばらく食べ続け、霧島さんの近況を美里とこずえのふたり中心に聞き出しているのをなんともなく聞いていた。もともと上総は霧島さんと特別仲が良かったわけでも悪かったわけでもない。単なる評議委員としての付き合いでありそれ以上ではない。本当だったらさっさと理由つけてここから席を外したほうがいいのかもかもしれないとも思う。

——けど、霧島さんも俺に霧島のこと話があるとか言ってたしな。

たぶん霧島弟が現在の状況を知ったら激高して何しでかすかわからない。かなりのマザコンであることは本人も自覚しているようだし、上総もそれに対して何か言うことはない。ただ、霧島さんが姉として何か思うことがあるのなら、秘密厳守の上で確認したほうがよさそうだ。タイミングを待った。

「でさでさ、可南では新しい友だちできた？」

「ひとりだけいるわ」

美里も興味深げに話を持っていく。

「どんな子なの？ 私たちが知ってる子でいうとどういうタイプなの？」

「真面目な子」

ぶつ切りで霧島さんは答える。愛想がないわけではないのだが、言葉を選んでいるような雰囲気がある。

「頭良いのかな」

「いいと思うわ。今の段階で学級委員任されてるし」

「学級委員なんだね」

評議委員ではない、そのあたりの微妙な違いを感じ取る。

「素直でやさしくて、ちっともいばらない。クラスのいろんなタイプの子から好かれている、かつての私と正反対のタイプ」

少し伏せ目になった霧島さんをこずえが慰める。

「なーに言ってるの！ ゆいちゃん嫌いな奴いるわけないじゃん！」

「ありがとう」

言い返さずに霧島さんはお礼を言った。ささいな言動が上総にとっては驚きの連続と、さすがにそこまで言えはしない。

「でも、彼女を見ているとなぜ私がC組のみんなから評価されなかったのかがわかる。なんであの頃に、もっと早く気づかなかったんだらうかって思うことがあるの」

「ゆいちゃん嫌われてないってば！ でなかったらみんなあんなに卒業式で泣かなかったじゃない！」

美里も力強く拳握りしめて訴える。それでも霧島さんは首を振って続ける。
「私があんな人間でなければ、青大附属から退学させられないですんだのよ」
「退学じゃないんだってば！ ゆいちゃんちゃんと卒業したじゃない！」
一生懸命訴える美里の言葉を、無理に言い返さず霧島さんは一言、
「そうね、美里の言う通りよ」
とだけ返した。

場が湿気ってしまったのもなんなのでということで、こずえが食べ終わった皿やフォークを一
通り片付けに行った。残された上総と美里、そして霧島さんは手元のウーロン茶をグラスに注
ぎ合った。間を持たせるのがこずえ抜きではなかなか難しい。美里も何度か霧島さんに話しかけ
ているのだが、どうも噛み合わない。かつてのエネルギーな霧島さんをイメージして話しか
けても、やんわりと交わされてしまう。手応えのなさに美里も戸惑っている様子だった。

「でも、こずえちゃんから聞いたけど、立村くん今度合唱コンクールの伴奏するの？」

同じく穏やかに霧島さんは上総に問いかけてきた。

「そうなんだ。事情は全部聞いているかもしれないけれど、そういうことになったんだよな」

「クラスに疋田さんいるのに？」

かつてはC組伴奏担当だった疋田さんの名を出した。

「ピアノの世界は難しいことが多いし」

「でも、誰か説得しようとしなかったの？ 私がもしいたら、たぶんちゃんと話をしたのに。
でも宇津木野さんと同じクラスだものね、いろいろランク付けされてしまうのが嫌だったのか
しら」

「たぶんそうだと思う。でもあのふたりの演奏聴かされると、自信なくすよ。今日も古川さんに
そのテープ聞かせてもらおうと思うんだけど、すごいよ、とにかく」

霧島さんは少し考え込むように手のひらを見つめた。

「ピアノ習っていない立村くんが担当するということは、私レベルの弾き手でもよかったという
ことになるのかも」

「そうよ！ だからゆいちゃんが居てくれたらって！」

上総は美里を目で制した。逆効果だ。幸い霧島さんは気づかぬように話し続けた。

「私が知っている限りなんだけど、疋田さんはいつも宇津木野さんと同じコンクールに別の先生
のところから参加していて、上位争いしていたと聞いたことあったの。だからライバル意識持っ
ていて、それであえて牽制したなんてことは」

「俺もそれ思ったけど、なんかあの二人仲がいいみたいだよ」

直接思ったことを告げた。合唱コンクールに振り回されはじめてから観察してきたことをその
まま素直に。

「なんか、ふたりで最近是一緒に行動しているようだし、ピアノを演奏する時も疋田さんがいろ
いろと宇津木野さんを立てたり面倒みたりしているような感じがする。面倒見いい性格なんだろ
うな。古川さんもふたりがそれほど仲良しという感じはしないとか言ってたけど、俺の目からし

たら十分友だちだよ」

「そう、とすると」

霧島さんがゆっくりとひとつの憶測を述べた。

「あのふたり、友だちになりたかっただけなのかもしれないわね。ライバルじゃなくて、仲良しになりたかったから、上下関係が出来上がってしまいそうな合唱コンクールの担当なんてしたくなかったのかも。私の想像よ」

その十 あねおとうと（４）

上総にとっての本題、ピアノレッスンに向かう。

といっても女子三人はひたすらおしゃべりに没頭してくれていて、かえって都合がいい。本当はこずえもふたりを連れて部屋にこもりたいのだろうが、それこそ男子ひとりを居間に残すわけにはいかないという現実もあるわけだ。

「じゃあ立村、あんたひとりで勝手に弾いてなよ」

こずえのお許しも得て、上総はピアノと向かい合った。楽譜を立てる前に自分の顔が正面に映り込む。もうひとりの自分がいるような気がした。

——こちらはなんとか暗譜で行けそうだな。

最初にさらったのは「恋はみずいろ」だった。メロディがわかりやすいのですぐに覚えられたというところもあるが、肥後先生が選んでくれた楽譜が極めて簡単だったというのが上総もなんとか形にできた理由だろう。キーボードで毎日一時間から二時間は練習しているが、やはり得意な曲を優先して弾いてしまう癖がある。

関崎の歌声と女性らしい響きの歌詞とがなぜかぴたりと合っていて弾きながら驚いた。やはり関崎は心底歌うことに向いているのだろう。本当に指揮者に回してよかったのだろうか。やはりソロパート必要なのではないだろうか。

「立村くん、よくここまで弾けるようになったね」

拍手はないが、美里が褒めてくれる。振り返った。

「なんとか。俺にとっては奇跡かもな」

「ほんと。でも立村くんなら大丈夫だと思ってたから実はそんなに心配してなかったんだ」

こずえと霧島さんがほうと目を見て美里を見る。いかにも信じられないかのような眼差しはやめてほしいと思う。

「だって、『エリーゼのために』あれだけ弾けるんだもん。ね、あんな長い曲を先生につかないでひとりで練習してるんだもの。すごいよ。私も小学時代ピアノ習ってたけど、自分ひとりじゃ続かないよ。誰かに教えてもらわなくてもここまでできるって」

「いや、それ大げさ。今回に限っていえばいろいろな先生に手伝ってもらったから」

あえて野々村先生の名は出さず、美里もそれ以上つっこまなかった。

「でもさ、これからが問題だよ、歌に合わせる必要が出てくるし、楽譜じゃなくて指揮者見なくちゃいけないしさ」

指揮者について触れていいのか迷ったが、不自然なのであえてそのまま突き進む。美里も顔色変えずにそのまま話を受け入れてくれる。

「指揮者、関崎くんなんだもんね。がんばってるよね」

「本当によくやってる」

「うちのクラスもなんか一生懸命練習始めてるみたいだけど、私を含む何人かが集まれないってことでさうとうおかんむりの様子なんだよね」

話を逸らすつもりなのかたまたまなのかはわからないが、そのまま続ける。

「もちろん私だって真面目にやるつもりだけど、今日は都合があるんだものしょうがないもんね。あーあ、でもなんかやっぱり逃げるわけいかないなって気するから、あすの稽古には出るつもり」

こずえと霧島さんは少し離れたところでふたりだけのおしゃべりに興じている。おそらく美里を放っておこうという思いやりのような気がする。そのあたりの気遣いできるのがこずえの本質だと上総はよく知っている。

「あす、B組の練習があるのか」

「うん。さすがに今日さぼってあす休むわけいかないしね。私もソプラノパートだし、合唱するのも好きだし、頑張るつもり」

あまり深いことを言うつもりはなかった。そのまま上総は次の曲で難関の「モルダウの流れ」楽譜を広げ直した。

「本当はこっちのほうが課題曲っぽいのに。変な学校だよ、青大附高って」

ひとりごとのようにつぶやく美里には返事をせず、上総はゆっくり前奏に入ることにした。かたんな楽譜なのかもしれないが、演奏者によって全く表情を帰る音色を上総は理解しているつもりだった。ゆっくり、深く掘り進む。

——こちらの曲の方が俺には向いてるかもな。弾けるかどうかは別として。

決して「恋はみずいろ」が苦手というわけではなく、単純に好みの問題だ。なんとなく「恋はみずいろ」の歌詞が男女の恋愛を匂わせるような甘酸っぱさがあり、口を大きく開いて歌うには抵抗があった。いや、共感がどこかし難いところがある。反面、「モルダウの流れ」の歌詞は男子にとっても歌いやすい。大きくいえば「愛」なのだろうがそれが「祖国愛」であり「自然への愛」「生きていく人々への愛」と広がっていき、決してひとりの「恋愛」につながっていない。そこで安心するところがある。

曲途中のふくらませかたについては、先日のミニ・コンサートの宇津木野さんの演奏を参考にした。手が届くわけもないけれども彼女が弾いている時確かに大河が見えたような気がしたからせめてそれをなぞりたい。瀬尾さんの弾き方よりもはるかに深い音色だった。

「立村くんはこっちの方が向いてるよね。なんかそんな気がする」

美里は立ち上がり、弾き終わった上総の隣に立った。指一本で鍵盤を押す。重たい音がした。

「自覚あるよ」

「やっぱりね。なんか立村くん、自分の気持ちをそのまま注ぎ込める曲を探し当てたって感じがするんだよね。上手い下手わかんないけど、それだけは伝わってくる」

「まだまだ。『モルダウ』は難しいよ。他の人たちが弾いたのとか聴き比べているけど全然感情の入り方が違うんだ。やはり世界が違うなあってさ」

「よくわかんないけど、私は立村くんの弾き方、好きだけどなあ。もう少し、繰り返し弾いてよ。私黙って聴いてる。嘴挟んだりしないから」

——つまりは練習しろってことだよな。

美里の耳からしても、「恋はみずいろ」と「モルダウの流れ」との出来栄えの差は明白だったので。気持ちを切り替えてもう一度最初から弾き直そうとした。その前に美里が不意に呼びかけた。

「立村くん、私、歌っていい？」

「歌える？」

こんな伴奏で、と言いかけた。

「もちろん。中学校の音楽の教科書に載ってたじゃない。ちゃんと歌詞覚えてるってば。ほら、もっかい、最初から弾いて」

美里のパートはソプラノだった。キーを上げたほうがいいのか悪いのかわからない。きっと美里は合わせてくれるだろう。それに任せて上総も鍵盤に指を走らせた。曲のテンポが早くなるように、とそれだけは気をつけた。背中がだんだん人の気配で暖かくなってくるようだが振り向かずに弾き続けた。ピアノにふたり、人が映っている。

「美里、ソロうまいじゃん。さすがカラオケで鍛えてるねえ」

「そんなんじゃないってば！」

いつのまにかこずえと霧島さんがふたり、美里のそばに寄り添っていた。最後まで弾き終えた時、女子っぽくじゃれあっている。

「ねえ、ゆいちゃん、一緒に私たちも歌おうっか。確かさ、ゆいちゃんいた時、C組の合唱コンクールの自由曲、『モルダウの流れ』じゃなかったけ」

霧島さんの反応を見ると、いつの間に乗ってきている。かつてのおきゃんな雰囲気をもどりかけているようにみえたがやはり消えている。

「そうね、この曲なら歌える、きっと」

「そいじゃ、お抱えピアニストにもっかい弾いてもらわなくっちゃあねえ。ゆいちゃんと美里はソプラノ、私はアルト、ほら、さっさと弾けっての！」

背中をどつかれて、しかたなく上総はもう一度鍵盤に指を置いた。

その十 あねおとうと (5)

何度か女子たちの歌声に合わせて弾いていくと、どのあたりで呼吸をおけばいいのか、だいたいどのくらいのテンポで進めればちょうどいいのかが少しずつ飲み込めてくる。

「このくらいでいいよ。助かった、ありがとう」

「私もひっさびさにこんなに大きい声で歌ったなあ。あーあ楽しかった！」

「ほんとね」

「もう、こんな豪華メンバーでの合唱コンサート誰も聴いてないんだもんねえ。もったいないっ
たらないよ。さてと、喉も渴いたし水分補給するとすっか！ ねえ、美里、ちょっと手伝ってもらえるかな」

「いいけど」

こずえが美里を連れてジャングルな居間を出たあと、上総と霧島さんとが残された。

ソファの真ん中に腰掛け、手を丁寧に膝の上で重ねている。

「立村くん、今のうちにいい？」

「いいけど、あいつのことか」

尋ね返した。同時にこずえと美里の行動のわけが飲み込めた。あえて黙ったまま話を聞く。霧島さんは真面目な顔で上総をじっと見た。同級生っぽさのない、大人びた眼差しだった。色っぽさなどない。ただただきっちりとしている。

「そう。真のこと、面倒見てくれて本当に感謝しているの。この前電話でも話したけど、私の母も」

「たいしたことしてないけど、助けに少しでもなっているんだったらそれは嬉しい」

「たぶん、弟は私のことを獣のうおうに馬鹿にしているでしょうけど、そのことはわかりきっていることだししょうがないと思っているの。私も青大附中にいた頃はあいつのことをとことん憎んでいたし、今でも好きになったわけではないし。でも、ある程度距離を置けたせいか、家族のひとりとしては見方が変わったわ」

——一番変わったのは、霧島さん、あなただと思うんですが。

喉まで出かかった言葉を飲みこんだ。かつてのアマゾネスがなぜこうもおしとやかな女子に変貌してしまったのだろう。いわば「見た目に釣り合う所作」とでも言えばいいのだろうか。もともと天使の容貌を持っていた霧島さんが男子たちに張り合っ
てぎゃあぎゃあ戦っていた姿を見ていた上総としては、その格差に気持ちがついていけない。

——難波はこの姿を見てるのだろうか。

毎日霧島さんの家の前を通ったり時には通って様子を見たりとかしているらしいが、詳しいことは聞いていない。知らないことはないだろう。むしろその変貌の様を野郎仲間に報告しようとしなかったのがすべてを物語っているとも言う。

「でもなぜ、あんなに立村くん
に懐いたのかしら」

「わからない。なんでだろうな」

——まさかエロ本で向こうが鼻血吹いてて焦っていたところを助けたなんてこと言えるかよ。

あえてごまかした。やはり言っているいいことと悪いことがある。

「真くんは、俺のことをなんか話していたのかな。たぶんろくでもない話だと思うけど」

「言っていないわ。真はあまり友だちのことを話したりしないし、もともとと同じ年頃の友だちがものすごく少ないの。ああいうふうに見下したような話し方するから、嫌われていくのも無理はないわよ」

「確かにな」

家族も霧島真の性格について、野放しにしていたわけではなかったということか。

「立村くんは真があんなに懐いていることを知ったのは、学校の先生たちからの報告のようね。両親共々仰天してたわ、真に同年代の友だちがいると聞いたことと、相手がなぜか立村くんだったことと。私も驚いたわよ。だって、立村くんのことを真は評議委員時代あれだけ攻撃してたじゃない。それがなんでって」

「なんでだろう。俺もよくわからない。気がつけば話をしたってそれだけだけど」

霧島さんはまっすぐ、身じろぎせずに淡々と語り続けた。

「それも接点なんて、ないじゃない。真は中学二年だし、立村くんは高校一年だし。校舎も離れているし、特段委員会にも入っていないんでしょう。美里がら聞いたけど」

「なんでかわからない。向こうとしては評議委員会に関しての情報が欲しかったのかもしれないとか思ったけどそのくらいだな。実際委員会の話なんてすることあまりないしさ」

「そう。不思議ね。でも、どちらにしても立村くんのうちに遊びに行きたがったり、連日夏休み中、男のくせに長電話したがったりとあいつの変わり方はすごかったのよ。だから、見たでしょ。立村くんの家に遊びに行った時、母と相談してお土産持たせたの」

思い出した。なぜかスパゲティー調理するためのセットをひとまとめ。普通、男友だちの家に手土産にするようなものではない。結局それらは上総がほぼひとりで調理して霧島に食わせたのだ。その間、霧島は皿を運んだりするだけでほとんど役たたずだった。

「あの時は全部料理したよ。たぶんあいつ全然家で料理なんてしたことないだろうなとは思ったけどさ」

「当たり前じゃない。料理できるなんて私の知っている限り立村くんだけじゃない」

確か、この前の電話では美里から聞いたとも話していた。ある程度女子として知っていることも多いのだろう。あえてごまかした。

「言われてみるとそうか。でもそれで思い出したんだけど、聞いていいかな」

「どうぞ」

「本当に真くんは、友だちってそんなにいないのかな。いくらなんでも、ゼロってことはないだろ」

霧島さんの答えはあっさりしていた。

「ここに住む前に、祖母の家で暮らしていたのだけどその頃はそれなりにいたみたいね。連絡とっているところなんて見たことないけど。でも、青澗に戻ってきてからは全部縁が切れているよ。私も、真が家に友だちを連れてきたところなんて見たことないもの」

「生徒会に入ってもか？」

「立村くん、委員会と生徒会とは感覚が違うのよ」

きっぱりと言い切った。

「私たち評議委員同士はいろいろあったけれども、それなりに濃密なつながりがあったと思う。喧嘩もしたし嫌われたりもしたけれど言いたいことは言い合えたし。でも、生徒会はなんとなく雰囲気が違うよね。うまく言えないけれど、仕事という割り切りがなされているみたい。仕事の付き合いだからプライベートには持ち越さないっていう感じ」

「でも、上の先輩たちからはかなり買ってもらっているみたいだけだな。俺はともかく、天羽たちも」

口をすべらせた。霧島さんの顔がひきつるかと思ったが、全く動じた気配はなかった。

「そうね、様子見ている限りだけど更科くんもあいつのことを気にかけてくれているみたい。更科くん、相変わらずなのかな。まだ、都筑先生との関係隠してるのかな」

やはり、三年間の評議としての相棒だけあって事情は知っているらしい。当然といえば当然か。知っている限りで答えた。

「相変わらずみたいだよ。夏休み、元男子評議同士で海に行って花火で遊んだりしたけど、その時遠くから都筑先生が来てたみたいだしさ」

「下手したら法律違反で先生、首になってしまうかもしれないのに。そこんところうまくやりなさいよって言うておいて。ほんと、更科くんにはいっぱい迷惑かけたけど、評議をやっていたおかげでいい思い出たくさんあったから」

「霧島さん？」

問いかけた。どうしても聞いておきたいことがひとつあった。

「青大附中で評議委員やっていて、正直、どうだったのかなって気になっていたんだ」

「どういうこと？ 聞きたいわ」

不思議そうに霧島さんは上総の方に身を乗り出してきた。

「評議委員会で三年間過ごしていて、楽しかったのかなとか、そういうことだけど」

うまく言葉にならず上総がさらにつなげようとするのを霧島さんは遮った。

「立村くんの聞きたいことはわかるわ」

凜とした眼差しで、まっすぐに。

「私はあの学校で三年間過ごしたことを後悔してない。青大附中では少なくとも私には価値があると思えたから。能力がある人間だと信じてこれたから。賢い友だちやなんでもできる人たちと出会えて、嬉しかった。でも、半年経った今ならわかるの」

強い言葉だった。

「私の居場所は、青大附属にはなかったの。僻みじゃなくて、本当に」

たおやかな物腰は変わらずに霧島さんは微笑んだ。

その十 あねおとうと (6)

なんとなく、こずえと美里の思惑は感じ取っていたこともあり、ふたりが戻ってきてからはなんともなしの無難な会話に止めた。一度もこずえの母が顔を出さぬうちにお暇の時間となり、四人でマンションの外に出た。

「じゃあさ、悪いけど私ゆいちゃん送ってくから、あんたたちふたりで先に帰りなよ」

嫌がるかと思ったが美里はあっさり頷いて、

「うん、わかった。じゃあね。ゆいちゃんまた今度ゆっくり話そうね」

笑顔を振りまき霧島さんに話しかけた。霧島さんもすでに気品あるお嬢様の風情で、

「美里も、元気でね」

とだけさりりと答えこずえと一緒に背を向け、歩いて行った。確かにそちらの方面が「霧島呉服店」の存在する商店街方面ではあるのだが。

「立村くん、行こう。あーあ、それにしても今日は楽しかったね。思いっきり歌っちゃたよ！」

「ほんと、歌があるのとないのって違うよな」

ふたり肩を並べてのんびり歩き始めた帰り道。途中、青大附属の校舎前を通りすぎ、何人か顔見知りの生徒とすれ違った。話す程仲がよい相手はいなかったので挨拶もしないままでいた。美里も同様だったらしく、

「部活でみんなこんなに遅いのかな」

後ろから追い越していく自転車組の姿を目で追っていた。

「委員会かもしれないな」

「ううん、それないない。今日規律委員会ないもん」

それはわかっている。関崎も、南雲も、参加していないのだから。

「でもね、合唱コンクールに燃えている人はたくさんいるかもね。貴史たちもそうだし、うちのクラスもそれなりらしいし」

「B組はかなり気合入っているような印象あるけどな」

正直な感想を述べた。

「違うの。単にうちの担任と評議同士の癒着に尽きるの。なんでだろうね。静内さんとうちの担任とがいつもべったりおしゃべりしててね、そのとぼっちりがみんな私に来るんだけどどうしてって感じ」

——単に気が合わないだけなんじゃないかな。

美里に激しく抗議されそうな気がするのでここでやめておく。一方美里は口を尖らせつつさらに不満を述べ続ける。

「私何も悪いことしてるつもりないのになんであんなに噛み付くんだらうね。ほら、私たちの自由研究あったじゃあない？ そりゃ、未熟かもしれないよ。頭のなかでまとめただけの文章かもね。でも、いかにも私たちの作品を当て馬にして静内さんたちのものを褒め称えるのってなんでって気、しない？」

「そんなことされたのか？」

少し気になる。B組の担任が野々村先生であることは承知しているけれども、そんないやみっ
たらしいことをする人にはどうしても思えない。まあ、かなり変わった価値観の持ち主だとは思
うが、数学が得意な人が普通の頭脳なわけがないし、それはしょうがない。上総の思い切り偏っ
た価値観ではあるが。

「そうなの。聞いてよ立村くん。この前決まったじゃない、自由研究の評価が高かったからって
、製本してもらえって話。もちろん私たちは外されたけど、まあがんばったしいいかなって思
ってたの。研究している最中もものすごく楽しかったし、ね？」

「うん、そう思う」

否定などするものか。

「それに静内さんたちの研究ももちろんすごいレベルの高いことしていると思うし、青潟の石碑
めぐりと歴史研究だっけ？ 内容も濃いんだってことは想像つくよ。読んでないけど、すべての
場所に足を運んで取材してたんでしょ。文句なんてないしやっかんでなんかない。けどね、それ
を褒め称えるのになぜ、『中には地のつかないテーマを選んで自分の頭の中だけですべて構成し
、架空の物語でもって完結させようとする作品もありましたが、背伸びしすぎていてかえって
心に届かないものを感じました』って言う？」

「清坂氏、聞きたいんだけど、それ本当に俺たちへのあてつけなのかな？ たまたまじゃないの
かなって気がするんだけどさ」

聞き返す。美里の言い分だけではどうもぴんとこない。幅広い意味での批判に過ぎないような
気もするし、いささか自意識過剰なんじゃないかとも思える。

「違う、絶対そう！ だってこの話しながらうちの担任じっと私を睨みつけるようにしてたもん
。私をターゲットにしてたってわけ。もう頭に来るよね。言い返してやろうかと思ったところで
鐘が鳴ったからうやむやに終わっちゃったけど」

美里の愚痴はまだ続いている。しばらく聞き流しつつ、上総は自分の中に野々村先生の発した
、と思われる言葉を噛み砕いた。

——背伸びしすぎていて心に届かない、ということか。あの先生の言いたいことって。

野々村先生の実際接した時に感じる人柄と、美里から聞かされるえこひいき教師のイメージと
がどうも噛み合わない。美里を疑いたくないのだが、どうも被害者妄想が強すぎるのではないか
と思わずにはいられない。むしろ、静内菜種に対するさまざまな嫉妬じみた感情が飛び火してい
るだけなのではとも感じる。

——どうしたんだろう清坂氏も、なんだか合唱コンクールのことも含めて苛立っているみたい
だよな。今日も、霧島さんに一生懸命話しかけるけれどいなされてしまって落ち込んでるようだ
しさ。いろいろ辛いのもかもしれないけどな。

美里の価値観に共感できない場面は中学時代からしょっちゅうだったけれども、だからといっ
て嫌いにはならない。正反対だったとしても、それでいいと思えるつながりが確かにあるから。
でも、今の美里の思い込みがかたくなすぎることにはどう対応していいかがわからない。とりあ

えず、野々村先生の問題と静内菜種に関しての件は分けて考えたほうがいいんじゃないだろうか。

言うだけ言ってすっきりしたのか、美里は上総にいたずらっぽく微笑みかけた。

「ごめん、立村くん面白くないよね、こういうこと」

「聞いてるだけだし、意見言わなくていいならいくら言ってもらってもいいよ」

「そっか。そうだよ。立村くんうちの担任にいつの間にか鼻屑されちゃってるんだもんね」

特段怒った風もなく美里はカバンで上総をつついた。

「そんなわけじゃないけどさ。たまたまだよ、向こうだってそんな気なかつただろうし」

「わかってるってば。たぶんうちの担任は真面目で一生懸命で地道に頑張っている人が好きなだけ。私みたいな要領だけで乗り切ってるように見える生徒や、こずえみたいにエッチ話で盛り上がるタイプは虫唾が走るほど嫌いみたいよ」

「ということは、今日の霧島さんみたいなタイプが一番のタイプかもな」

無理やり話を逸らした。美里もすぐに乗ってきた。

「ゆいちゃん？ あっそか、立村くん、ゆいちゃんやっぱり変わったって思ったよね？」

「半年前の霧島さんかって、本当に自分の目、疑ったよ」

一番の驚き事項だった。美里が気づいていないわけないと思ったのだがやはりそうだった。一気にまくし立てた。

「そうでしょ、私もびっくりしちゃった。夏休み初日に一回電話かけたことあったけどあの時から変だったのよね。私がいろいろ遊びに誘おうとしても行かないって断られちゃったし。けどこずえの誘いには乗ったのよね。なんでだろうね」

「まあ、霧島のこともあったんだろうな」

余計なところに話を持ち込まないようにするため、わざと弟のことを持ち出した。美里は気持ち良くらい乗ってきてくれる。

「そうだよ。こずえもそう言ってた。霧島くんがあれだけ立村くんに懐いていたからお礼言いたって言ってたみたいだしね。さっきもたくさん話したんでしょ？」

「わざわざ二人きりにしてくれたおかげで、それなりに」

さりげなく触れてやった。気づいていないわけがない。もっとも嫌味のつもりはない。美里は天を見上げて「なあんだ」とつぶやいた。

「気づいてたんだね。あっさりすぎる」

「でもおかげで、あの家のきょうだい関係がなんとなくつかめたよ。霧島さん、やはり長女なんだな、弟をそれなりに心配しているんだよな、当の弟はなんにも気づいてないみたいだけどさ」

「そう、でもね、立村くんそれよりどう思う？」

美里の視点は上総の考えとはまた別のものらしい。話がどんどんずれていく。

「ゆいちゃん、なんかすっかり元気なくなっちゃったね。別人みたいになっちゃった。可南できっと、辛い思いしてるんだらうなって、なんか悲しくなっちゃった」

——え？

女子から見るとそんなふうに見えるのだろうか。控えめに感想を述べた。

「確かに青大附中にいた頃と比較すると、おとなしくなったよなって気はするな。更科も今の霧島さん見たら目を何度もこすって幻かって思うんじゃないかな」

「更科くんだけじゃないよ、天羽くんも、元C組のみんなも」

なぜか難波の名前は出さなかった。

「あの、なんにもしゃべらない、おしとやかゆいちゃんが本来のゆいちゃんだなんて誰も思わないよ。きっと、みんなに馬鹿にされているあの学校で自分を押し込めてるんだよね。私も元気出してもらいたくっていろいろ話しかけたけど、だめだった。ずっと落ち込んだまんまだった。悲しいよね。一番輝いてたゆいちゃんがどっか行っちゃったって」

「輝いてた？」

繰り返すと美里は何度も頷いた。心底、という意味らしい。

「もし、今のゆいちゃんが外部入学で青大附高に入ってきて、私、中学時代と同じ感覚でゆいちゃんと友だちになれたかなって疑問に思ってるんだ。きっと無理だったなって。ゆいちゃんの男子に負けずなんでも強気でぐいぐいいくところ、私、すごく素敵だと思ってたもの。あんなお上品に、可愛い話し方するゆいちゃんはやっぱり自分を出してないんだって思うの」

美里のいじらしく言い募る姿に、上総は何を伝えればいいのかわからなかった。伝えるべきかどうか判断がつかなかった。

——霧島さんは、青大附中に自分の居場所がなかったと言ってたんだけどな。

やはりこの言葉は、誰にも伝えてはならない秘密なのだと改めて自覚した。

その十一 聴き比べ（1）

あっという間に日曜日の朝が来た。早く起きて身支度するのはいつものことだけど、違うのは父も上総よりはるかに早く目覚めていることだった。目をこすりながら洗面所に向かうとわざわざ匂いの薄い整髪剤を手にとって髪の毛になでつけている父がいる。

「早いな」

「あ、おはよう、ございます」

普段言わない「ございます」まで口走ってしまうくらい意外だった。

「すぐに洗面所空けるから待ってなさい」

「いいよ、急がないし」

部屋に戻り、昨夜遅くまでいじっていたキーボードに電源を入れて見る。さすがに近所迷惑だからボリューム絞って弾いていたのだが、音が鳴らないと今ひとつ練習した感覚が残らない。かばんに楽譜を入れ、ついでにテープも押し込んだ。昨日こずえから借りてきた我が英語家ピアニストふたりによる演奏テープも一緒に入れた。元のテープではなく、ちゃんとダビング済みのものをだった。

——聴き比べると確かに三人とも全然違うよな。

どちらにしろ上総の手には届きそうにないレベルの演奏だとはわかっているが、やはり松竹梅の差ははっきりあるような気がした。

顔を洗ってさっさと食卓についた。簡単にいつものコーンフレークを用意した。面倒なのでひとにぎりレーズンを混ぜ合わせるだけにした。父と無言でひたすら食べた。時間は六時半。問題なく七時過ぎに出発できそうだ。

「なんとかなりそうか」

こちんと皿の音が鳴り、全部平らげた後父は上総に質問した。

「たぶん、なんとかなると思う」

「練習はしてるか」

「してるよ。当たり前だろ」

「夜中まで賑やかだったものな。まあいい。今日もしつこいようだが印條先生には礼儀正しく振舞うようにしてくれよ。この前はまさにはらはらさせられっぱなしだったからな」

「俺は常識の範疇で行動してただけだってば。父さんひとりがあせってただけだろ」

「そう言うな。お前も調子に乗りすぎてたぞ。まあいい、どちらにせよピアノの稽古だけはしっかりするんだぞ」

——わかりきってること言うなよな。

朝の時間が経つにつれて父のぴりぴりメーターもだんだん上がってきているのがわかる。普段は物静かな父がこんなにいらいらするのを見るのはそれほどない。一体あの印條先生が父とどういつながりを持っているのか興味深いところではあるが、そうそうしっぽを出すとは思えない。上総としては息子として最低限の礼儀を保てばいいだけの話だ。

「それとだ、上総、もし今日、印條先生から母さんの話を振られた時にはな」

いきなり父の声音が変わった。低く、深く。

「大丈夫だってさ、母さん最近うちに来ないだろ。忙しいんだって言っとくよ」

「そういう馬鹿なこと言うな！」

声を荒げた父を、上総は思わずまじまじと見た。テーブルが少しだけ揺れている。

「確かに最近母さんは忙しいかもしれないが、お前のいない間しょっちゅう父さんに連絡をよこしている。お前のことを忘れていないわけじゃない。そういうことをきっちり頭に置いておけ。まかり間違っても、母さんがいなくてせいせいしたとか、母さんがいる生活はのびのびできるとか血迷ったことを決して口にするなよ！」

「なんで」

父にまで気を遣いたくない。はっきり尋ねてやる。

「別に俺は嘘言ってるわけじゃないのに、なんでそんなに苛立つんだらうな父さん」

「お前のほうこそ一方的に母さんのことを避けすぎてるんじゃないのか」

「避けてないよ。避けてたらなんで結州に手伝いに行くんだよ」

「そういう問題じゃないだろ。とにかく、母さんは戸籍上はともかく、父さんとお前と家族であることには変わらないんだからな。それがわからないようだったら車の中から叩き落とすからな。覚悟しとけ」

「ああ、覚悟しとくよ、ごちそうさま」

上総は立ち上がった。ふたりぶんの空の皿をひったくり、台所で水洗いした。台所の窓を締め切ったままだったので開けて空気を入れ替えた。水道の蛇口をひねり思い切り水を流した。これで思い切り頭冷やせと父には言いたい。ぶっかけたい。

気まずい雰囲気は三十分近く続いても、出発することには変わらない。持ち物一式を確認し、スーツに着替えて黙ったまま上総は車の助手席に乗り込んだ。父もそのあとにすぐ運転席へ滑り込みシートベルトをつけた。上総がそっぽ向いているのに気づいたらしく、

「何子どもみたいなことやってるんだか」

ぼそりとつぶやいていた。知ったことじゃない。今日も秋の空は爽やかだが、もう長袖で十分過ごせる時期であることは確かだった。通り道にトンボが飛んでいるのを見かけた。

父がカーステレオでテープをかけようとしているのに気づいた。片手でハンドル、片手でカセットテープ入れをいじっている。傍目から見て危険としか思えない。それまでずっと黙っていた上総だが、身の危険を感じた以上しょうがない。父に話しかけた。

「父さん、テープなんてかけないでいいよ」

「うるさいな、お前に用がなくても父さんには必要なんだ」

「普段何もかけてないくせに」

やはり気詰まりなのだろうとは思う。ただ運転する父にはハンドル握ることに専念してほしい。

「テープ探すなら、言ってくれば俺がやるって」

「お前に探せるわけないだろ」

「だったら、俺の持ってきたテープかけていいかな」

「テープなんか、お前持ってきたのか？」

驚いたふうに、それでも目線は赤信号に留めたまま父は尋ねた。まだ青湊市街に入ったばかり。もう少しドライブに時間がかかりそうだ。

「同級生に頼んで合唱コンクールの曲を弾いてもらったのがあるんだ。練習替わりにしたいからかけていいかな」

思いついたから言っただけだったが、部屋以外の場所で聞きたい気持ちもある。車という密室のなかだったら集中して聴き取れるかもしれない。

「そんなテープあるのか」

「クラスにピアノ弾ける人がふたりいて、あと男子で歌の上手い奴がいる。お手本用に頼んだテープなんだけど。俺が弾いたわけじゃないから、下手すぎて気分悪くなんてことはないよ」

少し渋滞にぶつかったらしい。なかなか進まない。もっともまだ七時二十分くらいなので到着に余裕はある。父はゆっくりアクセルを踏みつつ答えた。

「わかった、せっかくだから聴かせてもらおうか。これからお前のさみだれをいやという程聞くわけだし、耳を消毒しとかないとな」

——ひどい言い草だ。

むっとしつつも否定できない現実がわびしい。上総はカバンからテープを取り出してカーステレオの口に押し込んだ。

背中のカースピーカーから流れてきた「恋はみずいろ」の音色と男性ボーカルによる響きある歌声。改めて無言のままふたり聴き入るのみ。父は歌の出だしで一瞬目を見開いたようだが、すぐに視線を道路の向こうに置いたまま運転に専念した。幸い、安全運転で揺れることもなくなだらかに車は進んでいた。A組バージョンの演奏で、次にすぐ「モルダウの流れ」へと雪崩込む。足田さんと宇津木野さんの演奏がいかに豊かな感情の伴ったものなのかが上総には強く伝わってきた。少なくとも瀬尾さんの演奏には欠けていたような気がする。

「お前、今弾いていた人たちを押しつけて、本当に伴奏するのか」

「そうだよ。押しつけたわけじゃないけど」

テープを入れ替えて瀬尾さん伴奏バージョンを再生しようとした上総に父が尋ねた。

「ほんとにお前のクラスは災難だな」

しみじみ父はつぶやいた。

「親としても責任問題だな、これは」

その十一 聴き比べ (2)

あまり快適ではないドライブも事故なく目的地に到着した。テープをケースにしまい直してカバンにしまうと父が見とがめた。

「どうして持ってきたんだ」

「必要かなと思って」

「練習するだけだろうに」

「いや、上手な人の曲を参考にすれば、少しはうまくなるかなと思っただけだって」

やたらと父はつかかってくる。何が面白くないんだか。

一週間しか経っていないのに海から吹き付ける風は痛いくらい冷たかった。父がまた丁寧にドアホンを挨拶すると、すぐに入口が開いた。印條先生の奥さんが笑顔で迎えてくれた。二度目ということもあり、上総に対する接し方も少しくだけていた。

「さあさ、お待ちしてたのよ。上総くんいらっしやい。立村さんもまあ、朝早くから恐れ入ります。主人は今、準備してますのでしばらくお待ちくださいね。部屋にご案内しますのでどうぞどうぞ」

恐縮しつつ父が先に靴を脱ぎ揃え、上総もそれにならった。入ったとたん漂ってくるのはかすかなハーブ草の香りだろうか。

「もうよろしい？ 立村さんおふたりお連れしたわよ」

部屋の扉前で奥さんが呼びかけると、「入りなさい」と機嫌よさげな声が聞こえる。父がまた一礼し、ドアノブをひねる。中に入るとすでに部屋は明るく開け放たれていて、ピアノも蓋がいたまま準備されていた。

「お待ちしてましたよ、立村くん。上総くんも先日はわざわざ手紙をありがとう」

「いえ、こちらこそ」

一応父に従って、お礼の手紙をしたためたのだが、いたってありきたりなことしか書かなかった。一度お会いしただけでさらさらと筆が走るようなタイプではない。父がまたぴりぴりしそうな予感がしたので、投函する前に一応推敲を頼んでおいた。間違いはないはずだ。

「では、さっそくだが稽古に入ろうか。立村くんはお茶が入るだろうからゆっくりくつろいでもらいたいな。さ、上総くん、準備はいいかな」

「はい」

目的はひとつ。一切ぶれない。父にちらと牽制の視線を投げておき、上総はカバンから台紙に貼り付けたコピーの楽譜を取り出した。先週よりはたぶん、まじに弾けるだろう。いや、そうでなかったらいろいろ困る。触れて二回目の鍵盤は、初めて弾いた時よりも自然と指に馴染んでいるような気がした。

一通り上総が演奏するのを隣で座ったまま聴いていた印條先生は、開口一番、

「『モルダウ』の方は良くなっているね」

予想外の言葉を放った。上総にとっては拍子抜けだった。なにせ二曲連続で弾いたがほとんどミスタッチがなかったのが「恋はみずいろ」で「モルダウの流れ」はもう和音から何からぐちゃぐちゃな仕上がりだった。難易度が違うというのもあるのだが。

「注意深く弾く必要があるところもあるが、歌いやすさや聴きやすさからすると少しずつ仕上がってきている印象があるよ。それに比べると『恋はみずいろ』はかなり苦労しそうだね。今ひとつ、掴みきれてないような気がするんだが、そうじゃないのかな」

言葉に迷う。いや、目の前の父がまた苛立ちそうなので言葉を選ぶのに迷う、といった方が正しい。やはり父が助け舟を出してくれた。

「素人の考えですので恐縮ですが、今二曲息子が弾いた内容だと、最初の方が間違いもなく無難にこなしていたようなんですが、やはり違いがありますか」

「そう、確かに無難なんだよ。立村くんも本当は気づいていると思うんだがね」

含みを持たせた言い方を印條先生はする。つかみどころがない。上総の隣でじっと楽譜に見入り、

「譜読みはきちんとできているし、音感も人並み以上にあるようだからたぶん無難にこなすことはできる。ただ、人に伝わるような表現ができているかどうかとなると、私は『モルダウの流れ』の方が上のように思うね」

「まあ合唱コンクールレベルですし、息子にそこまでのセンスを求めるのは難しいかと思いますが」

謙遜しているのか馬鹿にしているのかわからない言い方で父が口を挟む。いつのまにか奥さんが父のために飲み物を運んできてくれたらしく、時々グラスに口をつけている。

「いやいや、いくら君の息子さんだからといってそこまで卑下するのはよくないよ、立村くん。君も本当は感じているはずなんだよ。まだ二回しか会ったことのない私が上総くんのことをある程度読み取った程度のこと、父親である君も理解しているはずだ」

——何がなんだかわからないよ。

自分のことをまな板に載せて、わかるようでわからない言葉でもって論じている様子は実際魚として扱われている上総にとって面白いものではない。「恋がみずいろ」に物足りなさがあるのであれば、どういう弾き方をすればいいのかを教えてもらいたいと思う。少なくとも上総は、テープを何度も聴きかえしては真似すべきところは真似して、関崎の歌声でおおよそのところは合わせてみてイメージしたつもりだった。

「まあ、あとでゆっくりその点は語り合うことにしよう。技術的な部分から先にいくとしようか。上総くん、では問題の『恋はみずいろ』をもう一度最初の前奏のところだけ弾いてもらえないかな。そこでゆっくり直して行こう」

言われた通り前奏を両手で弾いた。特に変わったことは言われなかった。音をなめらかに。ふくらませるように。聴かせるように。ごくごくありふれたことばかりだった。

一通り弾き方に関するレッスンは三十分弱で一段落した。

「まずはひとやすみしよう。それからもう一度しっかり練習することにするか。上総くん、お父

さんと一緒に飲みなさい」

見ると父の隣には、白い液体の入ったグラスが用意されている。

「ヨーグルトドリンクのようなものだよ。よくカレーの付け合せで飲むものがあるだろう」

「ラッシーですか」

父が膝を打つ。お互いに頷き合っている。

「そうそう、本場のラッシーにはかなわないが我が家では健康のためにヨーグルトを泡立てて朝一番飲むようにしているんだよ。上総くんは乳製品大丈夫かな」

「大丈夫です。今日も牛乳とコーンフレーク腹いっぱい食わせてきましたから」

ありがたく飲み干した。ヨーグルトドリンクはしっかり冷えていて適度にすっぱくて気持ちいい。甘いものよりやはりこちらのほうがいい。

「腹持ちのよいものはまたレッスンを終わってからにしよう。ところで先ほどの話、蒸し返すようなんだがよろしいかな」

印條先生は自分のヨーグルトドリンクを口にしつつ、上総ににやりと笑いかけた。どう返事すればいいのか父の顔色を伺いつつつむいてみる。

「ぜひお聞かせください。僕も自分で自分がかめていないのもありますからね」

また穏やかに父も返す。かなり砕けた言い方に聞こえる。

「そうだね、まず前回と今回、上総くんのピアノの弾き方を見てきて感じたことを現段階でまとめるとしようか。さすが、お母さんの仕込みがよかったのか基本的なところは身につけているし、さらに独学するだけの能力もある。これは大事なことだよ。人から教えられるのを待つのではなく、自分で学ぶべきものを取捨選択できるというのはね。ちゃんとひとりで譜読みもし、ここまで仕上げたのは彼の努力だろう。だが、ね」

ここでいたずらっぽく印條先生は父を指差した。

「立村くん、ここはやはり男親として感じてもらいたいことなんだよ。君も上総くんくらいの時、何を考えていたか、何に飢えていたかを考えればね」

「僕の高校時代を思い起こせば、ですね」

ふっと飲み込めたような表情で父は軽く微笑んだ。ちらと上総にもその微笑みを分けるように見た。

「もちろんこの年頃の男の子は照れもあるだろうし難しいところもあるのは、いかんせん私も高校生経験者なのでわからなくもないよ。だが、上総くんの場合は何か伝えたいことがあふれんばかりに身体の中に詰まっているのに、なぜかそれを押さえ込んでいるようなところがある。いや変な意味ではないよ。それもまた青春。だが、今ピアノで表現する機会があるのならば何かを一気にさらけ出すようなものがあってもいいんじゃないかなと感じた次第なんだ」

印條先生は続けた。上総に向かい、笑いを消した。

「『モルダウ』ではその気持ちがそれこそ波打つがごとく溢れているのを感じることができた。それがなんでだろう、『恋はみずいろ』では他人事のように、そんなの知らないよといった雰囲気しか感じられなかったのはなんでだろうね。合唱コンクールで完結するものと言われればそれまでだが、せっかく君の感情をピアノというものでさらけ出す機会をもらったんだ。誰にも責め

られない形でなら、利用しないではないだろう？」

——利用？

ますますわけがわからなくなった。印條先生という御仁、やはり上総には謎が多すぎる。腑に落ちた顔で上総をにやけながら見守っている父にも思い切り足を蹴飛ばしてやりたい気持ちしかない。

——要するに「恋はみずいろ」は無難すぎてつまらないってことか。もう少し派手に弾けってことなのかな。それはそれで、なんだか難しいよな。

とりあえずは拝聴するにとどめた。

その十一 聴き比べ (3)

印條先生の教え方はお茶をはさんだあとも特に変わりがなかった。

ごく普通にテンポを整えたり、和音を強弱つけて押すようにするとか、他の先生たちの説明とはほとんど変わらなかった。「恋はみずいろ」も「モルダウの流れ」もそれは同様だった。上総がずっと弾き続けている間父も口を挟むことはなかった。

——どう違うたって、まあ、確かにそうだよな。

上総なりに解釈したのは、単純な「好き嫌い」の問題に過ぎないのではということくらいだった。確かに「我が祖国」を想い歌う「モルダウの流れ」と、普遍的とはいえ「愛」という言葉をたくさんの意味を込めて歌う「恋はみずいろ」とでは、共感度が違う。だがその溢れんばかりの感情がどこにあるのか、ということになると意味がつかみかねた。とりあえずは激しくするところは激しく、優しくするところはやさしく、の流れでいいのではと自分なりに判断した。

「よし、今日はここまでにしようか。そこで来週の日曜が合唱コンクール前最後のレッスンとなるわけだが、立村くん」

先生は父に斜になり問いかけた。

「見た感じだと暗譜もほぼできているようだし、ここから先は歌に合わせる方が優先になるだろう。本当はもう少し深いところまで進めたいんだがどうだろうかね」

「先生にお任せいたします。僕は音楽に不案内ですから」

「いや、とりあえずは目標のコンクールが終わってからにしよう。それにしても自分ひとりでよくここまで練習したものだ。家にあるのはキーボードだけなのかな」

そのとおりなのであっさり答える。

「はい、友だちから貸してもらいました」

「そうか。本当だったらもう少し本格的なピアノが用意できるといいのだが、急な話だったしね。そういえば先週上総くんは、お母さんにテープで教えてもらったと話していたような気がするんだが、もう少し詳しく話してもらえないかな」

上総が話す前に、父がさっそく割り込んで語りだす。

「ご存知のとおり上総はどうも聞き取りの耳が普通以上に備わっているようです。語学が得意というのも、もしかしたらそのせいなのかなと最近親としても思っているところなんです。ただ、上総からしたら意識的にしていることではなさそうですね。今朝車の中で聴かせてもらったテープがあるのですが、クラスでピアノが非常に上手な生徒さんに頼んで、歌つきで演奏してもらったものを何度も聞き込んでいるようです。上手とは言えませんが、それなりにとちらないで弾けるようになったのは、耳から来る練習を重視していたからかもしれませんね」

「テープを用意したのか、面白いね。ということはここに持ってきているのかな」

父の顔を見て、頷かれたのを合図に上総は鞆から取り出した。

「少し興味があるので、聴かせてもらってもいいかな」

たぶんこういう話の流れになるであろうことは上総も想像していた。父があの手紙の存在を偶然にせよ知った以上、話題としてあげてくるだろうとはたやすく考えられたし、それ以上に上

総も、音楽に詳しい印條先生の反応をぜひ聞いてみたかった。厳密にいうとピアノ伴奏よりも、関崎の声が入ったバージョンという独特のものでどういうイメージを持つのだろうかということだ。大人たちは少なくとも、上総の同級生という以外のフィルターを持たずに、裏のドラマなど一切感じることなく曲を聴くことになる。その際どう感じるのかを、単純に確認してみたかった。

テープは印條先生の手により、壁にかかった小型のテープデッキに収まった。この部屋にはステレオらしきものが見当たらなかったのだが、テープが回りだして初めて気がついた。部屋の二隅上に同じく小型のスピーカーが備わっていた。しかも音が部屋全体によく響く。テープ録音時の近くにいる生徒たちのささやき声すら拾っている。あまりにもかすかで上総も気にしていなかったのだが、いったん「恋はみずいろ」の演奏が終わり拍手が途切れたタイミングで、

——立村くんじゃ、ねえ。

とかいう声まで入っている。誰かはわからないにせよ、あまり気持ちいいものではない。大人たちふたりにまるまる聞かれているのだからなおのことだった。

「いやこれは面白い。次は『モルダウ』かな」

印條先生は上総と父を交互に見ながら、楽しそうに聴き入っている。音が割れない程度に関崎の歌声が響き渡り、同時に『モルダウ』を演奏した宇津木野さんのピアノ演奏が激しく波打つように部屋いっぱい満たす。音楽室のミニコンサートでつっ立ったまま聴いていた時とは違う自分の中の鼓動に驚く。

「テープ一本目はこれか」

「実はもう一本あるようでして」

父がまた促す。印條先生がまたテープを入れ替える。

「上総の話だと、今のテープはクラスでピアノを専門に習っているお嬢さんふたりが手分けして演奏したもののようです。いろいろ事情があるようで上総にお鉢が回ってきてあたふたしているわけですが、もうひとり別のクラスの同じくピアノが上手な生徒さんがいらしたようで、録音中ぜひにと立候補したとのことなんですよ」

「ほほう、上総くん、もう少し詳しく話を聞かせてもらえないかな」

——あまりプライバシーに触れるようなこと話せないよ。

戸惑うものの、さすがにある程度はしゃべらねばならない雰囲気諦めた。個人名はもちろん出さないようにする。

「はい、実は、クラスで練習する分と僕が個人的に聞いて練習する分と、二本のテープが必要ということもあって二回録音させてもらう予定でした。ですが、今お聴きいただいたふたりのピアノ担当者が全力尽くしてしまいもう一度弾くのは辛そうな雰囲気でした。そこで隣のクラスの、同じくピアノ伴奏担当の女子に頼んだのが次のテープです」

上総が言い終わると同時に、今度は瀬尾さんの弾く「恋はみずいろ」が流れ始めた。

「そうか、聴き比べか」

印條先生は難しい表情で黙ってテープに耳を傾けた。一本前の演奏を聴いている時とは違い、

少し厳しい顔に見えた。瀬尾さんのピアノの影でやはり女子たちのささやき声が聞こえるが今度は関崎の歌声に潰されて一切意味が確認できなかった。

「上総くん、ありがとう。これはいい話のきっかけになったよ」

テープを取り出し上総の前に置いた印條先生はソファーで真向かいのふたりを見つめた。

「立村くんも、だいたいどういうことかは想像ついただけだろうが」

「はい、僕も音楽の耳はありませんが、なんとなくそれぞれの技量の差は感じました。まあうちの息子に比べたらとそんな偉そうなことは言えませんが」

「技量というよりも、気持ちの溢れ方だね」

印條先生は上総に問いかけた。

「上総くんはこの三人のピアニストの中でどのタイプが素晴らしいと思ったのかな」

「最初のテープの、『モルダウ』を弾いた人です」

「やはりそうか。立村くんは？」

父も同様だった。

「そうですね、息子と一緒に。やはり一本目の『モルダウの流れ』はもうソロで聴きたい内容でしたね。いやもっとも、歌も荒削りですがいいですね。どうも上総とは親しい友だちのようですが」

最後の一言は上総をからかうような口調だった。

「三人意見が一致したようだ。この人がどういうお人柄かはわからないが少なくともピアノ上で自分自身をさらけ出して歌いこんでいるという気がする。ついでに言うとテープ全てにわたって朗々たる歌声の彼も、難しいことを言えばいろいろあらもあるだろうが聴く人を惹きつける何かがあるね。上総くん、それは君もそう思うだろう？」

「はい、歌っている友人は中学時代自分でも音痴だと思っていたようです。僕からしたら信じられません」

みな大笑いの後、ふと印條先生は真面目な顔でさらに尋ねた。

「ところで上総くん、二本目のテープの演奏者はひとりだろう？ 他のクラスの伴奏者とかで」

「はい、ほとんど初めて楽譜を見て演奏していたそうです。これも僕には信じられません」

「この人の演奏はどう思う？」

——正直なところ言っているのかな。

迷う。瀬尾さんのピアノは決して嫌いではない。素直でわかりやすく練習の参考になる。一番聞き込んでいたお手本のようなもの。ただ、こうやってよいスピーカーで聴き入ってみるとどうしても、別の感情が湧いてくる。どうせ誰も知らないのなら言ってもいいだろう。

「上手下手は僕にはわかりません。ただ、この人の演奏が僕には一番のお手本になりました」

あえて曖昧な言葉でごまかしてみた。しかし突っ込まれた。鋭い。

「オブラートにくるまないではっきり聞かせてもらいたいんだがどうかな」

しょうがない。本音を言うことにする。父を怒らせることもないだろう。他人事なんだから。

「僕が言える立場じゃないんですけど、実際生で聴いている時、彼女が弾いていることをすっか

り忘れて歌を聴くのに集中してました。一本目の『モルダウ』の時は歌も伴奏も聞き入りました。その差はあるかもしれませんが」

「これは面白いことを言う。立村くん、君の息子さんは鋭い視点を持っているね。さすが」

何を褒められたかわからないがそれは父も同様のようだった。戸惑ったように、

「あの、こいつのどこが」

問いかけると、

「つまり、二本目の弾き手さんは『お手本』止まりなんだよ。わかるかな。上総くんにとって音を拾うための『お手本』としては問題ないが、心を惹きつける程のパワーがない。その一方最初に弾いたふたりの演奏は、もちろん若いなりの物足りなさもあるがそれ以上にピアノの音色に感情がこもっている。あえて最初の『恋はみずいろ』の人については僕も触れなかったけれどもこの人もピアノを弾くのを心から楽しんでいるのが伝わってくる。レベルの差はもちろんあるかもしれないが、一本目のお二人はどういう形にしてもピアノを弾くのが楽しいんだろうね。聴いている方もほっとしていられたんだ。もちろん、歌う彼の声もなかなか良かったがね」

「確かあれだろう、青大附高に外部から入ってきたという子だろう？」

上総に父が質問してくるがここで答える必要はないと考えあえて無視した。印條先生の話に集中する。

「私が言いたいのはね、上総くん。今上総くんの演奏は二本目のテープの人とほぼ同じ感触なんだ。どうも聴いていて、楽しくない。特に『恋はみずいろ』はね。せっかく二週間もあるんだから、そこのところをゆっくり掘り下げてみてはいかがだろう。ほら、立村くんも、ここまで話せば息子さんにも伝えやすいのではないのかな？」

困惑した父がうつむいて頭を掻いているのが、上総には不可解だった。

その十一 聴き比べ (4)

父と印條先生との会話がまた仕事絡みに切り替わったこともあり、上総はしばらく楽譜を眺めて時間を潰していた。そのうち印條先生の奥さんのお声がけもあり、少し早めながらインドカレーのランチをいただくことになった。十一時で昼ご飯というのもどうかとは思いますが、それなりにエネルギーも消耗したこともあって入る場所は確保できている。

「主人が話しておりましたが、上総くんは本当に筋がよろしいって」

また見え見えのお世辞を頂戴する。頭を下げてナンをちぎり、銅の皿に乗せられたレンズ豆のカレーをつけて貪り食う。父がまたしかめっ面をしているようだがしかたない。下手に会話してどつぼにはまらないようにするにはそれが一番いいのだ。

思った通り父が代わりに謙遜してくれた。

「いえいえ、お恥ずかしい限りです。まことに出来の悪い息子なもので」

「そんなことないですよ。上総くんはお父さん似で熱心で何事にも熱心だし、自分ひとりでやるべきことをきちんと考えて次の手を打っていく、それはなかなかできることではありませんよって」

言葉を引き取って印條先生は、優雅にナンをちぎった。

「先ほどのカセットテープ録音の経緯にしてもそうだよ。どうすれば合唱コンクール当日までに自分の力を引き上げられるかを計算し、そのための方法を自分で選んでいる。青大附属の校風が自主性を育てるところにあるのかもしれないが、できない子は教えない限りなかなか意識できない。上総くんは違うね。ちゃんと自分で動こうとする」

「恐れ入ります。まあこの子はもともと、委員会活動などで自分なりにいろいろな経験を積んできたところはあるかもしれませんが。青大附属の委員会活動は先生の手を離れた部分で生徒たちの判断でさまざまなイベントを運営できるところがあるようですし、その影響は多分にあるのかもしれないですね」

「全くだ。私の学生時代もまさにそうだったね。変わったところも多いのかもしれないが、そういう生徒たちの自主性を育てる校風は今だにそのままなんだね」

しみじみつぶやきながら、たっぷりカレーを載せて口に運んだ。父にヨーグルトドリンクのおかわりを勧めようとする。

「いえ、僕はこれで十分いただきました。いつもながら美味しくいただきました」

「ところで立村くん」

また父がぴくりと反応する。印條先生には気づかれていないかもしれないが隣にいる上総には父の怯えぶりが手に取るようにわかる。

「上総くんと二人暮らしともなると食事の準備も大変だろう」

「いえ、それがありがたいことに、妻が実にしっかり家事一式を上総に仕込んでくれたおかげで、今のところ不自由したことはありません。男所帯ですしさほど気取った料理を作る必要がないのですが、人並みにはできる方でしょう」

「だが、上総くんも高校に入ると勉強も大変だろうし、それに加えて家事ともなるとこれは負担

が大きいぞ」

「いえいえ、このあたりも実は、忙しい時に備えたいこの子の母が手伝いに来てくれるのでさほど苦勞はありません」

ずいぶん父は力強く母に関する話を説明する。くどく感じる。もちろん上総は黙ってカレーのルーをスプーンですくっている。かなり辛いけど豆中心なのもあって胃もたれしない。

「立村くん、どうも君は無理をしているようだね」

ため息混じりに印條先生は父を見つめ、首を振った。

「君の昔の奥さんは確かによくできた方なのかもしれないが、やはり年頃のお子さんのそばから離れるというのは、何度も言うようだが無責任なのではないのかな。上総くんのようにこれだけしっかりしたお子さんだからいいようなものの、なあ」

奥さんは黙って微笑んでいるだけ。父は顔色変えずに穏やかに言い返す。

「幸い上総ひとりでするのでなんとかなっているところもあります。ふたりめがいたらどうなっていたか、はよく考えますが」

「そうだろうそうだろう。そうだ、ところで上総くん、せっかくお近づきになったのだからもう少し仲良く話をしたいのだがいいかな」

——まずいいのかもな、どうしよう。

父をちらと横目で見ると、無視された。別のことを考えているのだろうか。仕方ない、礼儀を守るつもりで答えた。

「よろしくお願いします」

「君は今月で十六歳と聞いたが」

誕生日までもう少し日にちがあるのだが細かいことは考えずはいで答えた。

「私が君くらいの頃だと、好きな女の子のことをバンカラ気取ってちろちろ見たり、悪口言ってみたり、恋文渡したりなどいろいろしていたが、君たちの世代はどうなのかな」

「あの、それは」

急いで頭の中を整理してみる。

「僕たちの友だちが、ということでしょうか」

「いやいや、君が、だよ。人のことはなかなかわからないものだ。上総くん、君は誰か、好きな女の子などいるのかな」

——なんなんだこの人、いったい……！

思わず父の顔を見た。父も上総をすぐに睨みつけ、すぐにバトンタッチして印條先生に答えてくれた。ありがたい。こういうところが父である。

いや、甘かった。即、後悔した。

「先生、最近の子どもはかなりませているようでして、上総も例外ではないようです」

とんでもないことを口走り始めたではないか。ひょうひょうとした態度で、なんにも考えていない様子で、でも頭の中は大回転していることは上総にだけ見え見えで、

「ほう、父親から見た上総くんがかね」

「さようです。上総はこの通り見た目は大人しそうですが、結構学校からの呼び出しが多い子どもでもありますよ」

——父さん、何考えてるんだよ！

いきり立ちそうになるが父の足で蹴飛ばされ黙るしかない。

「なるほどなるほど」

「思春期はいろいろと面倒なことが多いものだ」と改めて思い知った次第です、まったく。ただありがたいことに、クラスのよい友だちに恵まれたというのと、やはり先生のおっしる通りそれなりの意識する相手もいたようで、だいぶ支えてもらっていたようですよ」

にやり、と笑う。上総はスプーンを皿にのせ、全身の力を込めて父の足をテーブルの下で踏んづけた。父の顔色全く変わる気配なし。

「いわゆる恋人という存在なのかな」

印條先生は上総と父を交互にみやりながら意味深に笑った。顔をうつむけるしか上総にはなすべがなし。父が一方向的に語り続けるのを忌々しく聴き入るしかない。

「さて、こればかりは上総に確認するしかありませんが、なにせ僕もこの子の年頃からまださほど離れたわけではありません。ここでぐりぐり追求するのも野暮ではないかと思う次第です」

——野暮ときたかよ。だったら最初から言うなっるのがわからないのかよ。

「男の子としての先輩、確かにそうだ、よくわかる」

「ですが、面白いものでして、やはり好みというのは親によく似るものだと感心するおとも多いです、いろいろ学校の先生方から上総の交友関係を確認しておりますと、友だちの好みからいわゆるそちらの関心など、どうしてこうも僕と重なるのかと、いわゆるDNAの神秘というものをひしひし感じます」

「例えばどんなふうに」

隣で上総が歯を食いしばり足を蹴りつけようとして空振りしている中、父はしれっとしたまま答えた。

「とにかく、気の強い子が好きですね。こればかりは僕の血としか言い様がありません。この子の母親と同じタイプとにかくこだわりがあるようで、全く困ったものです」

——言うことに事欠けば何言い出すんだよ！ この場で親子の縁切ってやろうか！

さすがに目上の方のお宅でそんなはしたないことはできやしない。上総はひたすら父親の横顔を全力で睨みつけるしかなかった。父も気づいていないわけがないと思うのだが、印條先生のにこやかな笑顔を受け止めているせいか、つらっとした表情を全く変えず楽しげに語り続けていた。

「気の強いタイプか。男の子はやはり、お母さんが永遠の恋人なのかもしれないね」

——それは絶対ありえないって！

叫ぶのをこらえるのにも限界がある。立ち上がり、できるだけ丁寧に印條先生の奥さんに、「すみません、お手洗い借りてもよろしいですか」

頭を冷やすために小個室に逃げ込むのが関の山だった。

その十一 聴き比べ (5)

海辺の風に見送られる形で車を走らせ、しばらく親子ふたり無言のままだった。曲など鳴らさない。印條先生と奥さんの満足した笑顔とは裏腹に、立村家の親子はひたすらぎすぎすした空気の中座っていた。

「いい加減機嫌直せよ」

「先に言うことあるだろ」

「今回はお父さんが悪かった」

——なんだよ口先だけでさ。

今度という今度は許す気などさらさらしない。あのあとも父の調子はそのままで、印條先生と楽しげに上総の過去やらかしたさまざまな出来事を肴にし盛り上がっていた。さすがに中学三年以降のことには一切触れなくてももらえたのが救いだが、生きているだけで恥さらしだった小学校時代の泣き虫伝説まで引っ張り出された時には正真正銘の殺意すら覚えた。

父は車をゆっくりすべらせた。窓辺から見える海は少し荒れていて緑色に波打っていた。

「大人同士の付き合いではああいう話題になるのもしかたないことなんだ。お前も子どもじゃないんだからわかるだろ」

「わからない、何様だよ。何が自分に似てるだよ、DNAだかなんだか知らないけど、勝手に人を決め付けるよな」

「だからあの時はああいう話題にしないと示しがつかなかっただけなんだ」

「示してなんだよ」

黙った父を横目に、上総は水平線をじっと眺めた。散々こけにされた自分のプライドがずたずたになった、というだけならさほど怒る気もない。そういうのは学校でいつもされていることだから腹も立たない。ただ、なぜと言いたい。

「つまりだ、印條先生はお前のピアノ演奏に何かが足りないと一生懸命おっしゃっていらしただろ。それなんだよ。ちゃんと弾けてるけれども、つまらない、個性が感じられない、教科書止まり、その理由はなぜか、そういう話なんだよ」

「それでなんであんな話になるんだよ」

上総も頭の中では理解しているつもりだった。印條先生の指摘はかなりの部分当たっていると思うし、ピアノの演奏に関して言えばすぐにでも直していきたいことではある。特に「恋はみずいろ」の盛り上がりは今ひとつ物足りないというのは自分でも感じていたことであり、練習をしていかないとまずいと反省したことしきりだった。あくまでも、ピアノに限って言えば、大変身になるお言葉ではある。

だが、しかし。

「だからってさ」

「お前の彼女について事細かく聞かれるのもしんどいだらうと思って親なりに考えて話したつもりなんだが、それでも不服か」

「当たり前だよ。なんだよあの嘘っぱち。妄想もいいとこだよ」

「妄想か。いやいや、お父さんとしてはまあ、あんなものかと思ってたんだがな」

思わずにらみつけたくなった。車の中は密室、心ゆくまで罵倒が可能。車はだんだん青潟市街地に差し掛かりつつある。いったん信号待ち。

「上総の好みはお父さんにそっくりだと思った素直な気持ちなんだがそれのどこが問題なんだ」

「どこでそれ確認したんだよ」

「そりゃあ、見てりゃ分かるに決まってるだろ」

最初は反省しているような面していたくせに気がつけば父もいつものように上総をからかいたがっている。要するに悪いことしたとは全く思っていないわけだ。もっというと、上総のことなどなんにも知らないくせに、今だ母離れしていないマザコンだと決めつけようとしている。悪いが上総としては、母親を「永遠の恋人」などと勘違いしたこと考えたことは生まれてこのかた一度もない。あくまでも戦う相手であってそれ以上の何者でもない。

知ってか知らずか父はとぼけた口調で語り続ける。

「この前連れてきた可愛い彼女、あの子も見舞いに来てくれたとか言ってたな。母さんがお相手したとか」

「何年前の話だよ」

ずいぶんねちねちしつこいものだ。中学二年の冬、クリスマス、たまたま美里を家に呼んで二人きりで食事しつつ話をしたことはある。もちろん昼間だ。やましいことは一度もないし、紳士としてきちりおもてなししたつもりだ。確かに当時は美里と「交際相手」であったことは確かだし、誤解されても仕方ないことかもしれない。その点は反省している。それこそこずえのように「親がいる状態で男子を呼ぶ」などという気遣いは必要だったと思う。しかし、しつこいようだがそれとこれとは話がまるっきり別だ。

「気の合う友だちがたまたま女子だったというだけで随分勝手に想像ふくらませてるよな、それも下衆の勘ぐりというかなんというか」

「ひどい言い方だよなあ。それこそ親に言う台詞じゃないだろう」

顔色変えず父はいなす。

「気の合う女子をわざわざ親のいない家に呼ぶとなったらそれは普通のことじゃないだろう？学校の先生たちにも公認きたら、そりゃ親としては気になるし挨拶もしたいさ」

ああ言えばこういう、全くつかみどころのない父のやり口だ。いつものこととはわかっている、やはり一矢報いたい気持ちも湧いてくる。自分より二十歳年上の野郎だと割り切れればもう少し何か言い返すこともできるのだろうが、いかんせん隣でハンドル握り鼻歌混じりの御仁は……しかも『恋はみずいろ』のメロディというのは……自分を生み出すきっかけをくれた存在に違いない。悔しいが父の持つほとんどのフォームが自分とほぼ一緒というのもまた認めざるを得ない事実だ。

「悪いけど、父さんの読みはほとんどが間違ってるんだけどな」

やるならこちらも覚悟がある。素知らぬ振りして言ってやる。

「ほうほうどんなところだろか」

「『気の強い女子』が父さんの好みだったのはよくわかってるし今更何も言うことないけど、俺が必ずしもそうではないということ。言っとくけど、父さんが俺の彼女だと思っている人なんだけど、とっくの昔に別れたってことは知らないんだな、きっと」

あまり口にはしたくないが、戦う以上は仕方ない。わざとつらっとした顔で言ってやる。

「そうか振られたか」

「俺のほうが振ったことになっている」

こちら表情変えず澄ました顔で言ってやる。美里には心底申し訳ないと思うのだが、今は父とのバトルのみ。心の中で土下座して謝っておく。

「振ったことになっている、か。一般的認識では反対ということか」

「そういうことかもしれないけど、そのくらいのこと気づかないで俺の好みがどうかああとか言われても、説得力ないよな」

「ふうんそうか。それなら聞くと、夏休み前わざわざ彼女が熱出してぶったおれたお前のお見舞いに来てくれた、というあれはなんなんだ？」

「仲のいい友だちが見舞いに来てくれてどこがおかしいんだよ。しかも別の友だちと一緒にだったってこと、母さんから聞いてないのかって言いたいよ」

あの時は羽飛が部屋に来てくれて、美里は無理やり母に喫茶店へ連れ込まれたという予想をせぬ展開だったはずだ。もっともそのあと終業式後に起きた出来事で美里はちゃんと上総の部屋までたどり着いたが、その時は羽飛や関崎もいたし、決してやましいことなんて何もない。父もいなかったしそここのところは流しておく。

「こういったらなんだが、別れた相手に随分とご執心じゃないか」

「悪いけどどこかの誰かのように別れた相手と今だに仲良く連絡取り合えるDNAは俺の中に取り込まれているので何も違和感ないんだけど」

思い切り皮肉で刺してやる。また信号で止まった。さすがにこれは留めか。

「よくわかった。お前がなんで『恋はみずいろ』を棒のようにしか弾けないかがな」

ふふ、と笑いをこらえつつ目線はまっすぐ道路の先を見つめて父は楽しげにつぶやいた。

「別れた彼女への未練だけならそりゃあさわやかな気持ちで弾けないよな、同じDNAを分け与えた者として、他人事とは思えないね。わかる、わかる」

その十二 九月十四日（1）

合唱コンクールまであと二週間を切った。朝と昼はパート練習、放課後は全員での合唱音合わせということでどのクラスもみな気ぜわしくなる。英語科一年A組も例外ではなかったしもちろん上総もそれに付き合わされるはめとなる。今朝も一通りテープでの稽古を終わらせた後、こずえの自画自賛を聞かされる。

「けどねえ、やっぱ私ってすごいじゃん？」

伴奏者の立場なので歌のパート練習には参加しないものの、空き時間を見つけては音楽室のピアノにかじりつく上総を、教室で迎え入れるこずえ。関崎も男子連中に一生懸命音の取り方を教えている。指揮者というよりも関崎のソロ練習に付き合わされているだけというような気もする。

「よそさんのクラスなんて大変みたいだよ。やる気なしなしモードで練習に参加してもらうのも大変だって話よく聞くし、女子たちがぶつり切れて怒鳴ったり、反対に男子たちが文句言ったりとか結構あるみたいなんだよね。それに比べてうちのクラス超優秀じゃん！」

「そうかな」

ぴんとこないが、少なくとも練習を理由なくさぼったりやる気なしの顔を露骨にさらけ出す奴はひとりもない。上総の憶測によれば、おそらく土曜日に行われた関崎ソロコンサートにつきると思う。あの本気ぶりを見せ付けられるとともに我がクラスピアニスト二人の競演に酔いしれてしまったゆえの本気だろう。もしかしたら合唱コンクールで入賞のチャンスがあるかもしれないとか勘違いしてしまった奴がいるかもしれない。いやそれはありえないだろう、伴奏者があれだからというのは別としても。

こずえは上総の席に近づいてきて一気にまくし立てる。

「みんな暇な時間に集まって、パート練習自主的にやってくれてるし、男子は関崎と藤沖が中心に立ってまとめてくれてるし。まああんたは伴奏だからね、話は別かもしれないけどさ」

この辺が少しひっかかる。練習はこまめに行っているのだが実は上総の伴奏と歌を一度も合わせていない。理由は簡単で、ピアノを押さえられないだけのこと。音楽室での練習も個人的な練習ならまだしも、クラス練習を行う際にはたいていピアノが埋まっている。しかたなく校庭で行ったり教室でテープを使って行ったりとかそんな感じだ。

「そろそろ合わせたいよな」

「そうだね、もういい時期かもね」

こずえはそそくさと藤沖・関崎コンビの席に移動した。何やら話しかけている。

「あのさ、今日の練習なんだけど、できれば音楽室でやりたいんだけどピアノ押さえられないかなあ」

「ピアノをか」

関崎がちらりと上総のほうを見やる。目が合う。頷く。こずえが続ける。

「やっぱさ、そろそろ立村のピアノと合わせて練習したいんだよね。テープでもいいけどさ、なにせ超一流の伴奏じゃん。それで慣れちゃったらやっぱ本番まずいよ」

「言いたいことはわかる」

藤沖が坊主頭をこくこくしながらつぶやく。馬鹿にしてくれるものだが否定はできない。

「だが、一昨日、昨日と音楽室を覗いたがアウトだっただろう」

関崎が腕を組む。実際手をこまねいていたわけではない。ただ先着順でたいていピアノが利用できない状態となる。上総がそれでも最終的に稽古できたのは、A組のクラス練習が終わったあと、音楽室に向かいアップライトピアノが空くまでねばりづよく待ち続けていただけのことだ。忍耐力の勝利である。

「みんなあんまり遅く教室に残れないからね。でもさ、一回くらいは生演奏で歌いたいよ。どう思うあんたら」

藤沖と関崎は顔を見合わせた。隣にはいつのまにか片岡も座っている。こずえとはどうも相性が合わないらしく無言のままではいるが関崎にだけは笑いかけている。結構露骨だ。

「俺は賛成だ。古川の言う通り伴奏に慣れておかないといろいろまずい」

「もっともだ。ならどうする」

伴奏者である上総を無視したまま話は進む。上総は背中で関崎と藤沖とのやり取りを聞いている。

「それなら、帰りの会が終わった段階で全力疾走してもらおうしかないだろ。元陸上部よ、一気に階段駆け上がって音楽室を押しえろよ」

からかうように藤沖が関崎を促す。関崎は生真面目に首を振る。

「いや、俺は規律委員だ。廊下を走ってはいけない」

「堅物だねえ。硬いのはあそこだけで十分なのにねえ」

笑えない下ネタをかましたこずえは、それでも満足したらしく関崎の肩に手を置いた。

「じゃあ、悪いけど廊下を走らないで全力徒歩で音楽室のピアノを占拠、よろしく。あんたならなんとかするでしょうよ」

「全力は尽くす」

重々しく関崎は答えた。

「立村くん、いる？」

前扉から聞きなれた女子の声が聞こえた。すぐに伸び上がって見る。相手がすぐにするりと教室に滑り込んできた。ふたつわけの髪型がするんと揺れる。美里が上総を見つけるやいなやすぐ席に近づいてきた。こずえおよび他の女子数人にも声をかけた後、

「ちょっと、廊下に来て」

「どうした」

「いいから、早く」

笑顔だが何か秘密めかした表情だった。目ざとくこずえも美里に近づき囁いた。

「あんたたちどうしたの、何かまた秘密の相談かしてるの、エッチだねえ」

「そんな、変なこと言わないでよ！ あとでこずえにも話すから！ 立村くん早く、ほら、こっち」

手招きしつつ、机を軽く叩く。何か楽しそうな気配あり。こういう時は素直に受け取るに限る。上総は立ち上がり美里についていくことにした。まだ八時十分過ぎ。一時間目にはまだまだ時間があるのだから。

生徒玄関のロビーに腰掛けた。他の生徒たちがどんどん流れ込んでくる。部活の朝練習後の生徒たちも体育館側から汗を拭きながらやってくる。賑やかな時間帯だった。

「立村くん、今日は何の日か自分でもわかってるよね？」

唇をきゅっと上げ、美里は意味ありげに上総の目を見つめた。

「それは、まあ、一応は」

言葉を濁す。自分にとって意味のある日ではある。

「実はね、昨日貴史と一緒にね」

ごそごそ、白い花柄の手提げから何やらものを取り出す。マガジンサイズの大きめ紙袋だった。

「私が代表で渡すってことになったの！ 立村くん、お誕生日、おめでとう！」

両手ですっと差し出した。何か賞状を受け取るような感じだった。思わず卒業式ののりで手を出し頭を下げそうになった。美里は吹き出した。

「何よ、もう笑っちゃう。立村くんには今これが絶対必要だって私と貴史の結論なんだから！ ほら、すぐ開けてみて！」

「ありがとう。じゃあすぐ開けるよ」

美里が上総の不器用な手さばきをまどろっこしそうに見守っていたが、すぐにひったくり、

「ほら、もう、私が開けるから！」

袋にセロハンテープの跡を残すことなく、綺麗に取り出した。雑誌大のノートらしきものだった。よくよく見ると表紙には英字新聞や切り抜きのイラスト、またシールのようなものがあつさり組み合わされている。いわゆるコラージュと呼ばれるものだろうか。受け取り改めてまじまじと見入る。分厚い表紙の上を図書館の本のように汚れよけのビニールシールで覆っている。表紙を開くと卵色の厚みある紙が屏風折りされて収まっている。

「ありがとう、これ、すごいな」

「でしょ？ これね、貴史と私の共同作品なの。この表紙のデザイン、材料は私、コーディネートしたのは貴史。私もやりたかったんだけど、貴史って美術のことになると異常な程燃え上がっちゃうから全部任せたのよ。けんかしたくないからね」

「確かに、否定できないな」

二学期以降は美術部一筋に生きることとした羽飛のことを思う。

「それでね、立村くんの誕生日何か買おうかって話をしてたら、ちょうど合唱コンクールじゃない？ 立村くん伴奏するでしょ。それだったらすぐに役立つものもいいよねってことになって」

何に使うのだろう。開いたり閉じたりしてみる。スクラップブックだろうか。美里と顔を見合わせると、すぐに説明をしてくれた。

「伴奏する人楽譜を持ち込むでしょ。楽譜ってコピーするじゃなあい？ そのままボール紙に貼り付けるよね。立村くんもセロハンテープと厚紙だったし。けどそれだとなんだか安っぽく見えちゃうなってずっと思ってたの。だったらこのくらいの大きさだったらまとめて譜面台に置けちゃうし、二曲分まとめて持っていけるじゃない？ すぐに役立つからいいなって思ったの。どうかなこれ、役立ちそう？」

——そうか、譜面ノートか！

考えていなかった。確かに美里の言う通り今まで上総は楽譜のコピーをセロハンテープでつなぎ合わせて、適当な台紙に貼り付けていた。人前で見せびらかすものでもないと思っていたからだった。だが、実際少し重みのある屏風だたみの手作りノートを開いてみるとコピーした楽譜の大きさにぴったりだし、二曲分貼り付けるには十分すぎるくらいのページ数がある。おそらく美里も上総の練習風景を何度か見てきて、見るに見かねたというところがあるのかもしれない。

「清坂氏、ありがとう、これは役立つよ。ほんとすぐ使うよ、それこそ今日にでも」

「ほんと？ 気に入った？」

「当たり前だよ。それにしてもすごいなこれ。表紙もセンスいいし使いやすいよ。羽飛もすごいよな。あとで学食でなんかおごろう」

満面の笑顔、ひまわりの微笑み。美里はすばやく上総の手からノートを受け取り袋に入れ直した。

「それと、今のうちに言っとくけど立村くん、楽譜の貼り付けは私がやるからね」

「え、どうして」

当たり前のように美里は言い放った。

「三年間見てるんだから当たり前でしょ。綺麗に貼り付けるためにはコツが必要なの。立村くん、こういったらなんだけど不器用だもん、あ、怒った？」

「怒りたいけど、事実だから許す。そのほうが助かるし」

無然としたふりして言い返した。

その十二 九月十四日（2）

——俺の誕生日なんて覚えてたんだ。

決して意外とは思っていない。中学時代はそれなりに互いの誕生日を意識しあったりもしたし、プレゼント交換もしたりした。しかしあの頃は曲りなりにも「付き合っていた」わけだからそれなりの意識があったはずだ。現在はいわゆる恋愛感情もない代わりにかけがえのない親友としてのつながりがあるのみ。ただ「誕生日」を祝うような感覚はもうとっくの昔に消えたもの思っていた。實際上総も、美里にはっきり目に見えるような形で今年の誕生日を祝った記憶はない。知らない振りして、ケーキをご馳走したかもしれないが。

教室に戻ると興味津々といった顔でこずえがまた近づいてくる。

「どうしたのよあんたたち」

「なんでもないよ」

「その袋どうしたのよ」

見ると他の女子たちも不審げに上総の手元をじっと見つめている様子だった。特に話しかけるでもないがささやきあってはいる。面と向かって尋ねるのはこずえのみだ。

「清坂氏とあと、羽飛からもらっただけ。席つくからどいてもらえないかな」

「なあに、あんた見せなさいよ。ほんと美里もなにこそこそやってるんだか」

「別に悪いことしてないし、俺がもらったものなんだからそうとやかく言われる筋合いないだろ」

美里もこずえに何か話したわけではないのだろうか。少し意外だった。親友同士の美里とこずえ、こっそり打ち明けていてもおかしくはないはずなのだが。

「隠し事してるってことは相当、後暗いことしてるってわけよねえ。やらしいわねえ」

「古川さんに言われたくない」

あしらって自分の席についた。とはいえたぶん、時間が経てばばれるだろう。こずえの言葉を借りるならば「後暗いこと」なんて全くしていないわけなのだから。美里も楽譜を貼り付けるとかなんとか言ってくれているし、どうせ気づかれることなのだから無理に隠す必要もないといえはばない。ただ、

——関崎の前じゃ、やはりな。

誤解を招く可能性大だろう。そのあたり美里が計算していないとは思えない。あの後関崎が美里に対してどういう形で振ったのか、そのあたりは最小限の話しか聞いていないので上総もつかめていないが、少なくとも昔の交際相手と現在の片思い相手が雁首並べている環境で、周囲を誤解せしめるようなことはできれば避けたいだろう。

もしばれたらばれたで、羽飛と美里との合同制作作品として補足説明しておく必要がありそう。どちらにしても羽飛を捕まえてお礼を早めに言うておこう。

六時間目の授業が終わるやいなや、即、関崎が姿を消した。

「おい関崎がいないがどうしたんだ？」

帰りのホームルーム前、麻生先生が教室をぐるりと見渡して藤沖に声をかけた。本来居るべき時間に関崎がいないということは通常ありえないことなので戸惑っている様子だった。打ち合わせ済みなのだろう、藤沖はすぐに答えた。

「実はこれから、音楽室で合唱コンクールの練習をするため早めにピアノを押さえておく必要があります。そのこともあり評議委員権限で関崎を先に送り出しました」

「評議権限と言われてもだなあ。気持ちはわかるが、一応はホームルームだろ？ まだ授業が完全終了したわけじゃあないんだが。あとでお仕置きぺんぺんだな」

そこまで言い終わったところで息を切らした関崎が後ろ扉から戻ってきた。全員、驚いて振り向く。麻生先生が呼びかける。

「関崎どうした。便所でも言ったのか」

「いえ、実は音楽室に行ってきたのですぐ戻りました」

——すぐ戻った？

てっきり音楽室でピアノの前に陣取り、全員向かうまでの場所取り要員だと思っていたのだが。関崎は息を整え、生真面目な顔で答えた。

「六時間目の授業が終わってから音楽室に行って肥後先生に頼んできたところです。今日はどうしても立村のピアノ伴奏で音合わせをしたいのでピアノを優先で貸してもらおうようお願いします。先生申し訳ございませんが、帰りの会を早めに切り上げさせていただきませんか」

大爆笑。関崎本人が真面目に語っているだけにそのずれかげんが極端で笑ってしまう。麻生先生も唇を歪めて懸命に吹き出したいのをこらえているのが見え見えだった。

「よくわかった。それでお前、なんで戻ってきた？」

「帰りのホームルームに参加するのは生徒としての義務です」

「義務か、関崎だなやはり。ということならわかった。今日はとりあえず連絡事項はほとんどないし、さっさと喉からしてこい！ 藤沖、号令」

間髪いれず藤沖の「起立、礼」が響き渡った。

——やはり関崎は先生に評価されるというか、取り入るのが上手いよな。

今更ながら上総もため息を吐く。鞆に荷物をまとめ、楽譜をファイルに挟み込みそそくさと教室を飛び出すことにする。関崎にはもちろん礼を伝えたが、一番の礼儀はやはり自分がきっちりピアノで演奏することだろう。宇津木野さんや疋田さんと比較できるレベルでない以上、そこまで行っている努力だけはしっかり見せつけたいとまずいのではないかと思う。一回か二回は練習したい。どうせ今日も放課後、他のクラスが帰った後に少し練習させてもらうつもりではいるけれどもだ。

——同じことを俺がやったら、さっそく嫌味を浴びせかけられているに決まってる。

いくら麻生先生が上総の両親に頼まれて厳しく接するように言われていたとしても、やはりある程度の本心は見えてくるものだ。わざとやっているとか言っても、本質として好きになれない生徒であることはなんとなく伝わってくる。菱本先生がどんなにかバーしようとしても、上総としては自分の直感を何よりも大切にしたいと思っているので無視をする。関崎はいい奴だし異論

はないが露骨な鼻屑にはむかっとくる、そのくらいの気持ちは許していただきたいものだ。

三階の階段を昇りきり音楽室に向かう。すでに先客がいるらしく扉を開けると顔見知りの生徒たちがグランドピアノのそばで固まっている。一年A組の男女生徒はアップライトピアノにて蓋をなでなでしている。とりあえずマーキングというところか。

「おお、立村、今日はお前らもここで稽古か？」

東堂だった。いつぞやの合唱練習メンバーとほぼ一緒だった。ということは、一年B組の練習もここで行われるということになる。上総は頷いてアップライトピアノを指差した。

「早めにピアノを押さえてもらったから、悪いけど一緒にクラス練習することになると思うんだ」

「まあお互い様ってとこよ。昨日、今日とさ、なぐっちらのクラスと一緒に一緒だったからまあ新鮮だわな」

つまり一年C組連中が毎回音楽室で合唱練習を続けていたということか。それにしてもすごいバッティングだ。B組とC組ということは、美里と羽飛が毎回顔を合わせていたということになる。何も聞いていなかった。

「けど、一年だけなのか？ 二年、三年はそういえばほとんど顔合わせしたことないけどな」

前から不思議に思っていたことを東堂にぶつけてみる。話をしているうちにこずえ、関崎、藤沖、その他A組B組面子が揃い始め、知り合い同士会話を交わし始めている。ちらと見えた限り、関崎もB組女子の静内菜種を捕まえて一生懸命手で調子の取り方を確認している。東堂は上総の肩をぼんぼん叩いた。

「まあ、俺の知る限りだと上級生のみなさんは公園とかいろんなとこで練習しているみたいだし、中には誰かの家を借りて集まったりするケースもあるみたいだねえ。それにここだけの話、合唱コンクールにここまで燃え上がる連中って実は一年のみみたいだって噂もあるんだわ」

「一年だけって、まさか」

ノンノン、と口ずさみながら東堂は小声で囁いた。

「去年の合唱コンクールがまあ、凄まじい荒れっぷりだったらしくって、現在の二年、三年はほとんどやる気をどっかに捨てているって話だわな。だからたいていバッティングするのは一年のみ。同じ顔ぶれ。それはそれで気楽ではあるがなあ。ただなぐっちはもう愚痴りっぱなしだわ。バイト遅れるからいつも怒鳴られてるってな」

「みつや書店でのバイト、そういえばどうしてるんだろう」

放課後の南雲のバイト先だ。いろいろ面倒だとは聞いていた。シフトがずれているとはいえ関崎と同じ仕事ではある。東堂は上総の肩に手をもたせかけた。

「ま、今度あいつの家で詳しく事情聴取したいわな。またあそこのハンバーガー持参で食おう食おう。そいじゃ俺たちも練習なんでまたよろしく」

東堂はグランドピアノのB組集団に再度混じり、他の女子たちへいろいろと話かけしていた。静内も楽しそうに語っている。関崎はA組連中を前に熱く歌い方指導に没頭している。上総もいそいでアップライトピアノの前に陣取った。

——しかしずいぶん馴れ馴れしいな。東堂は。

東堂が高校に入って以来、上総に対して距離を縮めてくることに正直戸惑いがある。東堂の親友が南雲だということは中学時代から誰もが知る事実だったけれども、上総にとってはどちらかというところ距離のあるクラスメートに過ぎない。南雲と友人であるイコール東堂も同じ濃さのつながりでは決してない。なのになんでか、東堂は上総のことをかなり近い友人として認識してくる。利害関係も全くないわけではないのでなんとなくそのままにしているが、かなり戸惑う。なによりも上総は身体に触られるのが死ぬほど苦手だ。上総と親しい友だちならばみな、気づいているはずだった。

——それにしても清坂氏どうしたんだろう、練習来ないのかな。

肩ごしに入口を振り返ってみたが、まだ美里の姿は見当たらなかった。

一足早くクラス全員の顔ぶれが揃ったのはA組だった。

「時間がないからすぐ始めよう。部活の練習を抜けてきた奴もいるからな」

藤沖の指示に従い、男女それぞれがゆるい扇型となりアップライトピアノの前に整列した。こずえがそれぞれの位置を調節し、

「みんなもう出来上がってるも一緒だし気楽に行こうよ」

と明るく声をかけている。聞きとがめた藤沖に、

「調子に乗りすぎるなよ、気が緩んだらどうする」

注意されているもののあっさり交わす。

「なーに言ってるの。うちのクラスに努力と根性なんていないの。みんな楽しくわいわいやってれば結果がついてくるもんだって。さ、立村も準備はいい？ あんたが上手に弾けるなんてだーれも思っちゃいないんだから安心してやりな。関崎も、タクトの準備は？」

「俺は手でいいと思っているが、やはり指揮棒がないとまずいか」

全く話のずれたところで返答する関崎。相変わらずののんびりしたムードが流れる中上総は関崎の手元をじっと見つめていた。一曲目の「恋はみずいろ」用」楽譜を並べたままだ。まだ美里からもらったノートには貼り付けていない。

「それならすばすば行くからな、立村、いいか」

「了解」

短く答え、手元が動くのを待った。少しタイミングがずれたような気がしたがなんとか前奏に進んだ。まだ指揮者側……関崎の手……を見るだけで弾くところまでは進まず、途中楽譜を見ざるを得ない。歌が始まり時々釣られて早く進んでしまいそうになり焦る。これが歌と合わせる時のはっきりした違いなのかもしれないと改めて思い知った。

——歌を聞かないで弾くほうが楽だけどそうはいかないのか。

関崎は両手を固く動かしつつもそれなりに上総側にも目を向けていた。結構早く指揮の手順を覚えることができたのだろう。そつなく進めているようにも見える。なんとか最後まで弾き終えたところですぐにこずえのダメ出しが飛んだ。

「あのねえ、全然テンポあってないよ。伴奏と指揮者。立村もそうだけど関崎、あんた自分でも少し早すぎるとか思わなかった？」

「このくらいでよくないか？」

意外といった顔で関崎がこずえに問い返す。

「いいわけないじゃん。歌ってて息継ぎかなりしんどかったようちら。もう少しゆったりさ、歌聴かせようよ。それとさあ、立村もあんた自分ひとりでいい気持ちになってるんじゃないよ。ひとりでフィニッシュするのは夜だけにしてよね」

卑猥な笑いが男子連中の顔に浮かぶがすぐに打ち消す。みな思い当たる節があるのだろう。こずえの下ネタにはみな、耐性がついている。女子はみな気づかない顔しているのでさほど空気も荒れない。上総はもちろん知らんぷりを決め込んだ。要するに歌に合わせて弾く努力をもっとせ

ねばというだけのことだ。

「けどみんな歌はいいよね。ね？ 男子もよくここまでみんな腹から声出してくれるよねえ。男前だねえ。それと女子のみんなも、ずっとパート練習一生懸命してくれたかいあったよ。宇津木野さんも疋田さんも、練習用のピアノ弾いてくれてほんと助かったよ感謝感謝」

ころっと態度を変えて今度は合唱組を褒め称えるこずえ。そばで無然としている関崎を上総はさりげなく声かけした。

「関崎、怒るな、あれが古川さんのやり方なんだ」

「何がだ。俺はそれほどスピード違反したつもりはないが」

「違う、合唱の人たちに言いたいことを俺たちに伝えて意識させようとしているだけだよ。俺たちよりも他の人たちのテンポがばらばらだからそれが気になったんだろうな。俺も悪かったけど、関崎はそれほど問題があるとは思わない」

「そうなのか」

かなり驚いた風に関崎はこずえを眺めやった。その間にも褒めたたえつつさりげなく各パートにダメだしをし、パートリーダーにもねぎらいの言葉を男女関係なくかけつつ進めていくこずえに、みな雰囲気もなごみつつ二曲目の準備が始まる。

「さあさ次、問題の『モルダウ』よね。立村、あんたいい加減音飛ばしたり和音ごちゃごちゃにするのなんとかしなさいよ」

「なんとかする。始めていいかな」

言い返すと今度は関崎を叱り飛ばしている。

「関崎も、この曲はおおらかな響きの曲だってこと、あんたくらい歌える奴なら理解してるでしょ。あんたが歌えない代わりにみんなにきもちよく歌ってもらえるようにしてもらわないと困るわけ。あんたも独りフィニッシュタイプだからさあ」

「古川、褒めてくれるのはありがたいが、独りフィニッシュというのはなんなんだ」

男子を中心にまた笑いをこらえる。関崎の生真面目さを知っているだけになんともフォローがし難い。あきれた風にこずえは頭を抱えてぐるぐる回した。

「じゃあさっさと行ってちょうだいな、さあさ行った行った！」

こずえにダメだしされた分を上総も、また関崎も意識して進めたおかげで、「モルダウの流れ」は特に問題なくおしまいまで弾き終えられた。まあ、間違いが全くないとは言えないし関崎の手を見ながら弾く程の余裕もなかったが歌声が重なったおかげで多少のミスタッチはごまかせたんじゃないかという気もする。

「まあねえ、立村のピアノの腕をもう少し磨けて結論よねえ」

やはり厳しいこずえのお言葉には頭を下げるしかない。言い返せやしない。女子たちもなんとなくこずえの言いたいところは認識しているようでみなにやつきながら上総を眺めている。

「てか、ねえ、もうこいつがこれ以上上手になるという見込みってあまりないと思うんだわ。だからさ、私思うんだけどもっともっと歌でカバーしないとさ、まずいと思うわけ。この歌だねえ、もっと後半のあたりの盛り上がりやをさ、ピアノの限界を超えてぐぐぐっと持ち上げる必要

あるのよねえ」

——えらく俺のこと叩いてるよな。

普段聞いているのならば言い返すが、おそらくこの場だとこずえなりに何か考えがあるに違いない。関崎が見るに見かねて言い返そうとしてくれるが腕をひっぱり黙らせた。

「だから、思うんだけど、男子パートをもうちょっと、ほんっとに悪いんだけどもうちょこっと腹から声出してもらえると、立村のあらもごまかせると思うんだよねえ」

「古川、つまり俺たちの声が小さいと言いたいのか」

藤沖がいらだち気味に文句を言う。こいつは意外とダメ出しに弱い。すぐにこずえは首を振る。肩もすくめる。

「なーにあせってるのよ藤沖、あんた、ちょこっと考えなよ。こんな新米ピアニストをこんなすっごい『モルダウ』みたいな大曲弾かせるわけよ。無理じゃん普通じゃあ。けどやっばうちのクラスだって優勝狙いたいじゃん？ 麻生先生だってなんかご褒美出してくれそうじゃん？」

「中華料理付きトイレ掃除だったらノーサンキューだがな」

爆笑した。思い当たる節があるらしい。不参加だった上総以外は。」

「そこんところはうちら評議の交渉にかかってくるんであんたも手伝ってよ。とにかく、ここは本気で一発優勝したいじゃん？ となると、マイナス部分をうちの持つてるプラス部分で隠す必要があるわけ」

「プラスとはなんだ、つまりは」

「合唱部分に決まってるじゃん！」

こずえは高らかに言い切った。

「うちで勝てるとこったら、ハーモニーのそこぐらいじゃん！ 指揮者も伴奏者も新米となったらあとはそこで勝負するしかないよ。それに、いっちゃんんだけどまじで上手いと思うんだよねえ、合唱だけは！」

「だけ」とのところを強調されると縮こまりたくなる。

「だからさ、ここんところを特に男子のみなみなさまにお願いしたいってとこよ。あんたたちならできるって！ ね、お願い」

最後は声を裏返して甘えるお願いポーズまで取られてしまい、その似合わなさに三度目の爆笑が湧いた。女子たちも吹き出している。あの下ネタ女王でなければ使えない技だ。

「要するに何を古川は言いたいんだ？」

やはり意味がつかめず戸惑う関崎に、上総は説明してやった。

「男子の声が小さすぎるからもっと恥ずかしがらずに腹から出せと。結論から言えばそれだけ」

「じゃあなんでそんな褒め殺しするんだ」

あっさり上総は答えを教えた。

「露骨にそんなこと言われて気持ちよく受け入れる気になれるか？」

関崎は腕を組んでしばらく考え込んでいた。

それぞれ二回繰り返して歌った後、

「よーし！ 今日はいっぱいさーん！」

めいっばいの笑顔でもって両手を振った。

「すごく実のある練習できたしね。それに来週いっぱいもっとやんなくちゃいけないしさ、気分がいいとこで今日はおひらきだよ」

「古川、まだ時間があるが大丈夫なのか」

評議委員の相棒である藤沖が顔をしかめて問いかける。自分の都合で指揮者を関崎に押し付けたわりにはずいぶん口を挟んでくるものだ。上総なりに思うところもあるがあえて知らんぷりを決め込んでいる。幸い今のところ、他のクラスの生徒たちは音楽室に来ていない。いや、覗き込んでいたのかもしれないが二クラスが真剣に練習していたのを見て諦めたのかもしれない。どちらにせよ、アップライトピアノをもう少し弾いていても良さそうだとすることは確認した。ありがたいことだ。

「ほらほら、あんたは暇かもしれないけど他の人たちはそうでもないんだからさ。急いでるならもう行ってもいいからね。またあす、やろうよ。それと藤沖あんたも本当は今日、このままでいいわけ？」

促されると藤沖も思い当たる節があるのか、

「そんなにいうなら、あすだな。あすこそもっとみっちりやるぞ、いいな」

なんだか脈略のない言い方でもってそそくさと教室を出て行った。関崎を道連れにしようとしたらしいが、あっさり断られてしかたなくひとりで去らざるを得ない様子だ。同時に数人が挨拶して出て行ったものの、残りのA組生徒たちは時間をもてあますかのようにそれぞれ仲良く語り合っていた。こずえもそれぞれのパート練習をするよう提案したりして、それなりに時間の有効活用を図っている様子。上総は関崎に話しかけた。

「女子のまとめ役は古川さんに任せておけば間違いないよ」

「どうしてそう思うんだ？」

「あれを見ていればわかるだろ」

目でささっと追って説明した。

「さっきの歌の練習でもわかるだろ、古川さんはとにかくクラス誰もが気持ちよく過ごせるようにいろんな言い方で持ち上げて、それでまとめようとしてるんだ。中学の頃からああだったしそれでほとんどうまくいったよ」

「だが古川は、中学時代一度も評議は」

「やってない。ずっと図書局一筋だった人だから」

問われてみるとその通りだが驚くことではない。上総と美里が組んで評議委員を勤めていた中学三年間、もちろん美里の尽力を否定するわけではないがこずえの陰での活躍ぶりを知らないものはほとんどいないと言っていいだろう。実際美里の持ち出した意見が女子たちから総スカンだったことも一度や二度ではない。たいていそこで険悪なムードになりそうなところをこずえがう

まく裏に回って話を付けたことがほとんどだった。

「それでいてあんなに手際がいいのか。もったいないな」

「だから今、水を得た魚のようにああなっているだろ？」

上総は説明を続けた。

「関崎が無理に女子たちの機嫌を取る必要はないよ。むしろ男子たち中心で動いていたほうがお互い楽だと思う。たぶん古川さんの口ぶりからすると、まだ今日の稽古では満足できてないっぽい感じがするんだけどな」

「そうなのか？ ちょっと待て。ならなんであんなに褒めまくる？ もう少し注意してもよいんじゃないか？」

大混乱しているのがよくわかる。たぶんそんなだろうと思っていた。関崎にはきっと女子の使う表と裏が理解できないだろう。そういう奴だ。

「さっきも言った通りストレートにそれを伝えても反発するだけで誰も聞く耳もたないよ。古川さんはそのあたりをちゃんと把握しているから、できるだけみんなをいい気分させて、その上で少しずつ改善しようとしているんだ。だから、関崎も気になるかもしれないけど、一切口出さないほうがいいと思う」

「立村が俺の立場だったらどうするんだ」

反対に問い返されたがすぐに答えた。

「もちろん、古川さんのおっしゃるとおりですと答えるさ」

無然としていた関崎も思わず笑いを堪えられないように下を向いた。

「その光景が目浮かぶな」

「そうだよな」

上総はすぐにピアノに向かった。楽譜を並べ直した。まだ貼っていないぺらぺらした状態のものを楽譜台に並べかえた。

「全部のっかるのか。譜面めぐりとかしなくてもいいのか」

「いいよ、どうせ暗譜するから」

手をいったん鍵盤の上に載せたまま振り返ってグランドピアノまわりの様子を伺った。他クラスの状況も本来であれば確認せねばなるまい。一年B組の生徒たちがここもまた全員揃って何度も同じパートを繰り返し練習している。どうも特定の箇所が気に入らないらしい。指揮者担当の静内が女子パート中心に「もっと音を高くして」とか「もっと声を出して」とか細かな指示を送っている。

「B組もやる気あるんだな」

思わずつぶやくと関崎が解説してくれた。

「ある。あのクラスも男女団結力あるからな」

——そうかな。

美里の姿を目で追う。いつのまにか面々の中に潜り込んでいてソプラノパートで頑張ってる様子だ。聞き分けはできないが。手抜きをする人ではないことは上総もよく知っている。

「静内も本当はああいう音楽などの華やいだイベントが好きではないんだが、やはり選ばれた以

上は責任を持ってトップを目指したいと考えているようだ」

「華やいでるかな、合唱コンクールってば」

関崎はなめらかに静内について説明した。

「お前たち内部生にとってはさほど違和感がないかもしれないが、俺たち外部からきた人間にとっては正直戸惑いがあるのも確かだ。静内はひとりでこつこつ石碑を見て歩いたり、歴史を研究したりとか、そういうことが好きな性格だから、全身に視線を集めるようなイベントはおそらく苦手だろう」

「でも、受けざるを得なかったということか」

「周りの、主に女子たちの強い支持を得たらしい。本人の希望では少なくともない」

——そんなに嫌われてるのか。

静内がではなく、美里が、だった。

まさかとは思いが突然美里と静内とがいがみ合うんじゃないかと、密かに息を止めてB組集団の練習を見守っていたが、特に何かがあるというわけでもなく無事に練習は一段落したようだ。最後に自由曲の「翼をください」を合唱したのをじっくり聞いてみた。関崎に感想を聞いてみようと思った。

「関崎、今の曲だけど、どう思う？」

「ぴしっと整っているな」

「歌いたくなるか？」

「もちろんだ」

自信たっぷりに関崎は答えた。歌いたくてならないのだろう。本当だったら関崎は指揮者よりも合唱パートに入ったほうがいいのではというのが正直な意見だが、事情が事情なのでしかたがないことでもある。

まだうろうろしていたA組の生徒たちもB組の練習を参考にしたかったらしく、パート練習の合間に振り返ってはじっくり見入っている。こずえも女子の何人かと小声で話をしながら、主に静内を観察している。

「古川さんと正逆のやり方だからな」

「本当はああいう風に細かく悪いところを指摘すべきかと俺は思うが、違うだろうか」

関崎がふと生真面目に口にした。

「静内さんのようにか」

関崎は目をそのまま静内に置いたまま語り続けた。

「そうだ。確かに古川のように相手を持ち上げる形での指導は悪くない。だが、それ以上に必要なのは、改善だ。どこが悪くてどこがいいのか、それを明確に指摘しないと俺たちも何をしていたのかわからないんだ。少なくとも俺たちに対して古川はそれをしてははずだ」

「まあ、確かにな」

——気心知れてるからってのもあると思うんだけどな。

上総のつぶやきは心の中のみ、関崎に気づかれるわけもない。

「立村の言い分も理解はできる。実際中学の時はそれでうまくいったというのならそれはそれでいい。だが、俺としては褒めるだけが必ずしもプラスになるとは思えない。悪いことははっきりノーと言うべきだ。今の静内のやり方は何が悪くてどうすればいいかを的確にする方法で、あれなら多少不愉快であっても納得するだろう。男女関係なく、だ」

——そうとも限らないけどな。だから古川さんすごく気を遣ってるんだよ。

たぶん、関崎には相容れない価値観なのだろう。なんとなくそれは気づいていた。だから上総なりに説明したつもりだった。。できれば今回の合唱コンクールだけでも何も口出ししないよう頼みたかった。だが、納得してもらえそうにない。こずえと違うやり方をあっさりやってのけている静内菜種という生徒がいる以上、それでなぜいけないのかとを感じるのも無理はない。

関崎が練習の終わった静内のもとへ近づいていき、いろいろと話をしている様子を背に上総はピアノに向かい直し、椅子を直した。高さを変えてみたらペダル踏みやすくなるかもしれない。少し低めに直してみた。ぺらんと落ちかけた楽譜も並べなおしていた。

「あれ、立村くん、まだ練習するの？」

美里が鞆と手提げを抱えて近づいてきた。こずえにも手を振って手招きしようとする。見るとこずえはA組の女子たちとまだ話をしているがまだ片付いていない様子だった。

「音楽室閉まるまでまだ間もあるから、もう少し弾いていくよ」

「そうっか。あ、そうだ立村くん、私のあげたノート、どうしたの？」

「あるよ、あとで楽譜貼るつもりだけど」

「早く出して」

机脇から椅子を引っ張り出し、美里は手を伸ばした。慌てて上総も鞆から袋を取り出す。

「ほら、貸して。これから練習するんだったら、見やすいほうがいいに決まってるじゃない。楽譜もちょうだい」

言われるがままに、薄い台紙に貼り付けた状態の楽譜を手渡した。すぐに美里は鞆から筆箱とハサミ、のり、定規を取り出した。

「綺麗に貼ってあげるから、待っててね」

「清坂氏、いいよ、あとで俺がやるから」

「今朝言ったでしょ。立村くんのぶきっちょぶりはね、三年間同じクラスだった私が一番よく知ってるの！今のうちにやっとけば、次に練習する時楽でしょ？ほら、黙って見ててよ」

「ごめん」

剣幕に吞まれて素直にうなだれるのみ。その様子を見つめているのが、関崎と一緒にいる静内菜種とA、B組ともにそれぞれのクラスメートたち。にやつきながら近づいてくるのがこずえひとりだった。

「あんたたちまた、なにいきなり図工の時間やってるのよ。あれ、この巨大なノートってもしかして美里が立村に？」

からかいながら美里の両肩に手を起き軽くゆらすこずえに、

「ちょっと、ぴったり貼りたいから邪魔しないで」

ぴしっと注意し、四角四面の台紙に丁寧に貼り付けた。バレン替わりに何度もハンカチを丸めて上からこすった。美里のいうとおりぴたりと収まった。

「ははん、これ、楽譜を貼り付けて立てるようになってことかあ」

こずえが関心したようにつぶやいた。やはりすぐ気がついたらしい。

「まだのりが乾いてないから触るときは注意してよ！そうだよこずえ。今日は立村くんの誕生日だし、貴史と一緒にプレゼント作って渡したの。それがどこか変？」

「変じゃないけどねえ。羽飛と作ったってわけ？」

まずい。こずえの本心は上総よりも羽飛の有無なのだ。美里はなぜ気づかないのかとつっこみたくなる。鈍感の振りをしているのか単純に気づいていないのか美里は平気な顔をして答える。「そうだよ。こずえには言わなかったけど、立村くんの誕生日が今日なのと、貴史もとにかく何か作りたくてならないってうずうずしてたから、この表紙を貴史にデザインしてもらって渡したの。立村くんも伴奏するなら、できるだけ見やすい楽譜で弾けたほういいしね」

「誕生日ねえ。あんた、今日が誕生日なわけ？」

今度はこずえが上総をじろりと見た。頷いた。

「そのとおり」

「ふうん、となると、あんたがとうとう私らと同じ歳になるってわけかあ」

「おっしゃるとおりでございます」

わざと丁寧に言い返してやる。

「弟じゃあないわけね。寂しいねえお姉さんも。とりあえずたいした隠し事じゃなかったってことよね。まあいいわ、じゃあ美里、私の誕生日もぜひ羽飛とプラスで何か芸術作品お願い。あ、パンツにオリジナルのイラストってのはさすがにパスね」

「なによこずえ、そんなことするわけじゃない！ もうエッチ過ぎる！」

上総からみればいつもの光景を穏やかに眺めるだけのことだった。

ごくごく普通の日常に過ぎない。

「清坂さん、悪いんだけどこれから女子だけ残ってもう少し練習したいんだけど時間大丈夫？ 今日は大丈夫よね」

いきなり割り込んできた声があり。三人で振り返った。関崎を後ろに従えた静内菜種が能面のまま見つめていた。関崎もぼかんとした顔で静内の様子を伺っている。静内は近づこうとせず、グランドピアノの前で呼びかけた。

「女子だけどうしても音が合わないの。特にソプラノパートが気になるんだけど、清坂さん忙しいみたいだしできれば時間の取れるときにまとめてやりたいんだけど、時間、あるよね」

ずいぶんねめっちゃ言い方だった。関崎が上総のそばに近づいてくるのに気づき、美里はすぐ立ち上がった。すでにノートへの楽譜貼り付けは終わっていた。

「いいけどどこでやるの」

「グラウンドの隅っこでやりましょう」

声がぴりぴりしている。あまり静内の声をじっくり聞いたことがないのだがどことなくヒステリックな響きがした。うまく言えないが、幼くした母の声といえは近いだろうか。

美里はのりとハサミをしまい、上総に楽譜ノートを開いたまま手渡した。

「じゃあね、また土曜にこずえのとこ行くから、そのときまたね」

「清坂氏、ありがとう」

上総は繰り返した。美里が静内と一緒に音楽室へから出て行くのを見守り、入れ替りに戻ってきた関崎へ声をかけた。ずいぶんとバツの悪そうな顔をしている。

「関崎、せっかくだからお前の指揮を見る訓練したいんだ。一緒に手伝ってもらえるかな」

ほっとした表情で関崎は上総と向き合った。おもしろくなさそうに扉を睨みつけているこずえにも上総は呼びかけた。

「とりあえずさ、俺と関崎には気に入らないところどンドンダメだししてもらっていいから、黙って聞いててもらえると助かるんだけどな」

しばらく黙っていたこずえも、気持ちを切り替えたように首と腕をぐるぐる回し、

「わかった、あんたら二人限定で鬼コーチになるからね！」

高らかに声を放った。

その十三 みずいろ（１）

「ごめんなさい！ ほんっとうにごめんね！」

合唱コンクールまであと一週間を切った金曜放課後、美里から両手を合わせて謝られてしまった。

「うちのクラス、土曜日は有無を言わず合唱の練習をするようにって命令が、担任から出たのよ！ いつもなんにもやらない担任がね、評議の子の言い分鵜呑みにして、全員絶対参加するようにって！ 私も土曜日以外はきっちり参加してたのにね。なんなんだろって思うよね」

美里が憤るのも無理はないが、仕方ないだろう。こずえもため息を吐くものの、

「しょうがないよねえ、大丈夫、私がなんとかするからさ！」

ぽんぽん肩をたたいて励ました。だいたいB組の面倒なしがらみに関しては上総も見当がついているので慰めるにとどめる。

「自分のクラスが大切なのは当然だし、清坂氏も気にしなくていいよ」

「せっかく私、約束したのに。それに、立村くんひとりで行くともずいんじゃない？」

不安そうに美里が唇を震わせる。こずえは胸を叩いて答える。

「大丈夫大丈夫！ 今、ひとつ、考えてることあるんだわよ。そのあたりはぬかりないからね。まかり間違っても立村に襲われるような危険なシチュエーションは作らないからね」

「こずえ、すっごくあんた、立村くんに失礼なこと言ってない？」

美里がまゆをひそめる。いつものことだ。上総は動じない。

「言ってないよ。ほら、立村、あんたもその意識があるってことよねえ」

「古川さんに言われたくないよな」

こずえが何を考えているかはわからないが、土曜日のピアノ稽古最終戦が行われるのはまず確定と見た。上総からしたらどちらにしても本物のピアノで練習できる貴重な機会を得られるのありがたい。

「羽飛もさ、今はC組ラストスパートでそれどころじゃないんだってさ！」

「そうそう、立村くんにも言ってたでしょ。貴史ね、立村くんが思った以上にピアノ上手になってるから、このまま手伝うと敵に塩を送ったことになっちゃうからってあえて控えているみたい」

「そんなことないのにな」

毎日必死に練習を続けたおかげでなんとか形にはなってきた。こずえの計らいで合唱との伴奏合わせもたくさんさせてもらいコツが少しずつつかめてきた。他の生徒たちも、音楽そのものにこだわる生徒たちは苦い顔をしているが、その他とりあえず歌えればいいや程度の感覚の持ち主にとってはさほどプレッシャーをかけるでもなくのんきに過ごしていられる。それはそれでまたありがたい。他の一年クラスと違い、あまり順位にこだわっていない……というか、別名諦めていると言った雰囲気、上総には救いだった。

次の日の土曜日、本来ならばA組もそれなりに練習をすべきところなのだがいかんせん他の部

活動もいろいろと準備が必要な時期とあって、なかなか集まりにくいときた。特に運動部の新人戦や練習試合など優先順位があきらかにそっち、という行事が多い。

「そんなわけであんたにとっては運がいいのか悪いのかわかんないけど、とりあえずはあんた、今日はひとりで来なよ」

こずえは耳打ちし、素早く鞆の中に教科書一式を詰め込んだ。四時間目が終わりすでに放課後。腹がすいたとあって学食で何か食べて行こうと思っていた。さすがに男子ひとりで女子の家を訪問するのは、あのこずえ宅であっても緊張が走る。

「あのさ、古川さん」

「あんた変な期待してないよねえ。誰がうちの弟みたいな奴を引きずり込んで童貞を奪おうなんて思うわけ？ いわゆる近親なんとかってやつじゃないのさ。あれれな想像膨らますのはよしなよよしな。ま、私もちゃーんと手を打ってあるから安心して来なさいよ」

「古川さん、何か完全に誤解しているようなんだけど、要するに誰か別の人が来る、ってことだよな？」

ここんところはきちんと確認しておかないとまずい。上総は繰り返した。

「古川さんのお母さんが怪しまない別の人、ってことでいいんだよな」

「しつこいねえあんたも。心配性なのはわかるけどそんなぴりぴりするんじゃないよねえ。ま、あんたがうちに足を踏み入れた瞬間どういう反応するかは私の頭にイメージされてるからさ。大丈夫だって、どーんと構えていらっしゃいな」

とりあえず、ピアノは問題なく弾くことができる。こずえの母を安心させるシチュエーションが準備されているはず。とりあえず誰かがいる。

「じゃあ誰が来るんだ？」

「内緒だよん。あ、大切なこと忘れてた。それとね、今日は悪いけどお土産一切いらないからね。変なもの持ってきたらあっ倒すからさ。腹も空かせたまま、野獣になって来なさいよ」

「野獣って、いったい」

上総が呆然とつぶやく前を、こずえは手を振りながら去っていった。隣で無言のまま関崎と藤沖がこずえを見送りつつ、

「俺たちもとりあえず、なんか食ったらパート練習するか」

残っている男子……ほとんどが帰宅部……に呼びかけていた。

美里がいなくてもさすがに古川邸への道は覚えたので迷わずに到着した。

とはいえ、緊張は解けない。

——このオートロックっての、なんか怖いよな。

恐る恐るボタンを押して、ドアの反応を待つ。特に返事もなく、すぐに開いた。そのままエレベーターに乗り込み、ひとりで降りる。方向音痴の自分がうっかり別の部屋に紛れ込んだらとんでもないことになる。胸のあたりとネクタイを何度か叩き、気持ちを落ち着けた。

——古川さん、誰かまた呼んでるんだらうな。先週のようにまた霧島さん呼んでるなんてことないかな。まさか西月さんとか、あと誰だらう、実は羽飛だとか。それとも俺の全く知らない人

かな。いやまさかとは思うけど、男ひとりだと危険だからって、古川さんのお父さんだったらどう反応しようか。

顔見知りでもさほどつながりのない相手と席を共にするのはあまり得意ではない。もちろんこずえの見事な人さばきぶりを知っているから信用はしているのだが、やはりスリルを楽しむ余裕はない。

ドアホンを鳴らした。身体中がどくどく言う。つばを飲み込んだ。

——どぞ！

迎えてくれた声は、こずえのお母さんのものらしかった。華やかさに包まれた声だった。

「さあさ、お待ちしてたのよ、立村くんね。うちのお姉ちゃんたちがお待ちかねよ」

——お姉ちゃん、たち？

機械的に礼儀正しく礼を返した。こずえは出てこない。複数形「おねえちゃんたち」になぜかこだわりたくなる。こずえが「お姉ちゃん」なのはわかるが、「たち」ということは誰か女子がいるのだろうか。少なくともこずえの父という線は消えたと考えていいのだろうか。

別名ジャングルじみた居間に通された瞬間、「おねえちゃんたち」の正確な意味にようやくたどり着いた。なんと簡単なことか。

——おねえちゃん、か。そうだよな。

にやつくこずえの隣に鎮座ましている、真っ白いフリルのエプロン姿の女子と顔を合わせた瞬間、すべてがすんと落ちた。テーブルにはすでに可愛らしくあしらわれたサンドイッチ、ミニケーキ、クッキー、いわゆる「アフタヌーンティー」もどきのセッティングが終わっている。まだ紅茶が入っていないだけ。

すっと立ち上がり、目の前のその女子はつつと上総の前に立った。上総のよく知る、目がはじけそうな程ぐっと睨みつけるその表情と、その言葉。

「立村先輩、お久しぶりでございます」

「杉本、なんでそこにいる？」

そういえば、二週間ほど杉本梨南とは顔を合わせていなかったことに上総は今更ながら気がついた。

その十三 みずいろ（２）

想像以上に合唱コンクール関係の準備が多すぎて、中学校舎へ顔を出す暇がなくなっていた。杉本とも二学期の始業式以来ほとんど顔合わせる暇がなかった。忘れていたわけではないのだが、気がつけばこんなに日が経っていたということだ。

「杉本、どうしてここに？」

「古川先輩のお宅へおよばれして本日で二回目でございます」

いつものまっすぐな口調もそのままに、杉本の鋭い眼差しは変わる事なし。

「二回目って、初めてはいつだよ」

「先週の日曜日です」

きっぱり答える杉本を制するようにこずえが割って入り、面白げに二人を眺めた。

「あのさ立村、あんたもびっくり仰天してるのはわかるよ。けどさ、もう少しもってなんてか、女子に対する接し方を考えなよ。さ、とにかく座りな。今日は女子っぽくティーパーティーって奴だけどあんたもそのくらいは付き合えるよね」

「付き合うもなにも、すごく華やかだな」

素直な感想だった。食事抜きで来るようにとのきつのご沙汰があった以上、上総としても従わざるを得ず、おそらくなんらかの昼ご飯が用意されているのだろうと予想はしていた。お土産も本来なら持っていくべきだろうと考え、実は鞆の中に頂き物のチョコレートクッキーを隠しておいた。しかし、この本格的なアフタヌーンティーの雰囲気たるや、いったいなんなのだろうか。

「でしょ。あんたも驚くと思ったよ。ほんとは美里も混ぜて作ろうかとか思ってたけど、美里がああいうことになっちゃったしってことで今回は杉本さんとふたり。うちの母さんも手伝ってたけど今回は思うところによりパスしてもらって、ほとんど飾り付けとかは杉本さんのお手製だよ」

改めて眺めると、クッキーにはホイップクリームが上品にあしらわれているし、サンドイッチも形が整っている。つまようじを差してあるのでそのまま軽く口に押し込める大きさで、男子にとっては少し物足りなさもあるが女子にとってはちょうどいい分量だろう。しかもよく見ると、オレンジやキウイ、ミニトマトやブロッコリーなどもお菓子の顔してクッキーの上に重ねられている。不思議なセンスと思えなくもないがこれが杉本の好みと考えれば納得する。

「簡単ですこのくらいは。ほとんど出来合いのクッキーを用いてこしらえました」

にこりともせず一本調子に答える杉本。目つきはきついまま。ずっと睨みつけられている。機嫌があまり良くなさそうだというのだけはわかった。

「杉本が作ったのか？　すごいな、手がこんでるよ」

「そうなんだよ、そりゃ杉本さん言うようにクッキーとかパンとか、スーパーで用意するにはしたよ。けどサンドイッチも杉本さん、口に一回で収まる大きさを研究して材料を整えたり、果物が足りないとなったら野菜で生のまま食べられるものがないからってブロッコリーをゆでたりとか、いろいろ工夫してたんだよ。それに、やっぱアフタヌーンティーってきたら紅茶じゃん？

立村、そのへんはわかるよねえ」

「社会のたしなみとしては」

こずえとやり取りしている間、杉本の表情は堅くこわばったままだった。何かを言い返せばいいのに、ただ黙って上総を見つめるだけだった。

「とにかく、今日はさ、せっかくだから杉本さんをお茶会して、その合間にあんたがピアノを弾くってとこでどう？ 杉本さんも音楽好きだよな」

促すこずえに杉本は身体を向けて、はっきり答えた。

「オペラは好きです。鑑賞するのであれば、ですが」

——自覚があるのかな。

誰もが知っていることだが杉本ひとは気づかなかった事実を。

——古川さんも、杉本が音楽を聴くことのみ、好きだということを知ってるのか？

こずえのお母さんは一度、紅茶ポットを用意してくれた後すぐに居間から出て行った。

「やっぱねえ、うちの弟いるじゃん？ あいつの体調全然落ち着かないもんだからさ」

「風邪が長引いているんだな」

「違う違う。風邪そのものは完璧治ってるの。ぴんしゃんしてるのよ。けどさ、甘えぐせっての？ そういうものがついちゃって、何かあると母さん母さんって甘ったれっぱなし。私には言わないんだよね、怖いから。怒鳴るから。甘ったれるなってね」

「目に見えるようだよな」

紅茶ポットは杉本がまずこずえに、次に上総にそれぞれ注いでくれた。白地にもみじ模様のあしらわれたティーカップに、まさに紅葉色の液体が広がり揺れる。

「誰がこのカップ用意したんだろう」

思わず感心して尋ねた。時期的に紅葉には間があるけれども、ちょうどいい。

「うちの母さんののに決まってるじゃん。おもてなしする準備くらい、いくら私みたいに大雑把女だったとしても意識するわよねえ」

「いやさ、季節感にこだわるってすごいよ」

「ずいぶん私のこと馬鹿にしてくれてるじゃあないの。まあいいけどね。そういうイメージで売ってる私だもんねえ。とにかく杉本さんがせっかく注いでくれた紅茶なんだから冷めないうちに手をつけようよ。とりあえず食うことが先でしょが」

「杉本、ありがとう」

お礼を言い忘れていたことに気づき、慌てて上総は伝えた。とってつけたような言い方になってしまったのではと少しはらはらする。また「立村先輩は礼儀知らずですね！」とか叫ばれてすねられるのだけは避けたい。特に、こずえの家では。

「恐れ入ります」

きっとした目で、杉本が返してきたのはその一言だけだった。

男子の食欲ゆえに、どうしても最初は食べることに徹してしまう。また杉本に、
「立村先輩はどうしてそうもいやしいのですか」

と怒られそうなくらいむしゃむしゃかぶりついた。一口サイズのサンドイッチとはいえ、実際食べてみるとからしバターとハム、レタスだけのあっさりしたものなのに何とも言えないくちどけ感を感じる。また「出来合い」というクッキーも実際食べてみて驚いたのだが、冷たく冷えていてしかも柔らかい。おそらくスーパーで販売されている箱入りのバタークッキーだろうが、中のクリームが溶けているせいかどことなくミニケーキを食べているような感触だ。さらに、「これ意外なんだけど、野菜って合うね。あまったるくなりすぎないでさ。杉本さんが野菜を付け合せにするって言った時ちょっとまずいんじゃないかと思ったけど、とんでもない、大当たりだよな！」

こずえが大絶賛した野菜との組み合わせ。とにかくいろいろ工夫を凝らした結果ということがよくよくわかった。結果、あっという間に皿は空っぽと相成った。

上総とこずえが合唱コンクールの話にしばらく花を咲かせている間、杉本はずっと紅茶を口にしながら黙って聞いている様子だった。これも珍しいことだった。いつもならなんだかんだ言ってびしびしと上総を責め立てる口調でなじるだろうに。

——やはり、去年の合唱コンクールでは辛い思いしたんだろうな。

今はいろいろあって元のクラスに戻されたけれども、去年はほとんどE組で過ごした一年だった。合唱コンクールも一応は参加していたようだが、実際どういう雰囲気でも過ごしたのかは想像するのみ。もしかしたら歌うことを止められていたのかもしれない。明らかに杉本の声がハーモニーを崩すであろうことは誰もが知っていたはずだから。

——けど、杉本もなんで全然しゃべらないんだろう。

突然、こずえが立ち上がった。お盆に皿一式をすべて重ね、紅茶ポットだけ残して、「さてと、これからお稽古タイムとなるわけなんだけど、私も美里とおんなじく、他の子たちと一緒にパート練習しないといけないんだよなえ」

「え、来るのか？ 誰か？」

「違う違うって」

一瞬身をこわばられた上総を、こずえは呆れたようにみやり笑った。

「そんなびくつくんじゃないよ全く！ 連れてくるわけないない。いやね、クラスの女子たちが自主練習したいって話をしててさ、私もちょこっとだけ顔を出したいなって思ったんだよな」

「自主練習をなさるのですか」

杉本がオウム返しに尋ねた。

「そうなのよん。私が声かけたわけじゃなくって一部の子がね、やっぱり頑張りたいって気持ちあって。それでさ、私もその心意気嬉しいってことで、差し入れだけしようかなと思った次第なのよ。あ、もちろんすぐ戻ってくるよ。お客さん迎えておっぴり出すわけいかなきゃ。けど、どうせ立村も一時間くらいはピアノ弾いてるだろうし、その間だけちょっと家、空けるけどゆるしてよ」

「古川さん、けどさ、そうなると」

問いかける上総を遮り、またにやにやする。

「立村、あんた今スケベなこと考えてたでしょうが。ちゃんと顔に描いてたよ。悪いけどそのご期待は無駄。うちの母さんに、時折部屋覗いてもらい杉本さんの貞操が守られるよう見張っててもらうつもり。母さんだってあんたたちを一日中見張るなんてこと、できるわけないからここの戸を開け放すだけだけどね。とにかく杉本さんが立村の野獣の本能の餌食にはならないように手はずは売ってあるから大丈夫」

「古川さん、今の話、ものすごく俺に対して侮辱的なこと言ってるような気がするんだけどさ。なんで俺が野獣なんだよ」

笑い話に留めつつ上総が抗議するのまどこ吹く風、つんと澄ました顔で杉本は丁寧に礼をした。

「かしこまりました。古川先輩のお言葉、謹んで承ります」

「じゃあ、悪いけど立村、ピアノ、勝手に弾いてて。杉本さんもよかったらこいつの下手っぴさに呆れて思いっきり叩きのめしてやってよ！うちの母さんが覗きにきたら、ついでに一緒に歌っててよ」

杉本はこずえを見送った後、そのまま上総をじろりと睨んだ。ずっとこの部屋に入ってから、杉本には睨まれっぱなしだった。いったいこの状態でどうやって野獣の本能を目覚めさせろというのだろう。

その十三 みずいろ (3)

——いったい何考えてるんだろう、あの人は。

取り残された上総と杉本梨南のふたりきりでしばらく紅茶の入ったポットを見つめていた。決して二人きりで過ごすのが珍しいわけではない。夏休みだってほぼ一日一緒だったこともあったじゃないかと思う。しかし、人の家で勝手の違う中取り残されるのとはわけが違う。こずえのお母さんが顔を出す気配も今のところはない。

「立村先輩」

「どうした」

「ピアノ弾かないのですか」

棒読みの口調で杉本が促す。ここで語られた合唱コンクールに関する事情は把握しているようだった。

「弾くよ。時間もったいないし」

「すぐお始めになれば」

冷ややかに聞こえる杉本の言い方、同時に向けられた眼差しも堅かった。こわばっていると置き替えたほうがいいのかもわからない。上総が立ち上がるのを待っているかのように動かない。急かされるように上総は楽譜を鞆から取り出した。美里がしわなく貼り付けてくれた楽譜のノートだ。杉本が目を留めた。

「これが楽譜ですか」

「そう。俺の誕生日に清坂氏と羽飛が作ってくれたんだ。見るか？」

テーブルの向こうで唇を結び見据えている杉本に手渡した。屏風だたみのノートを丁寧にめくり、吟味している様子だった。表紙を何度も丁寧に撫で、

「こちら手作りなのですね」

感心したようにつぶやいた。

「そうなんだ。羽飛はああ見えて絵や美術が好きなんだ。俺も知らなかったんだけどさ、最近は絵を描いたりする方にも興味があるみたいで、すべてデザインはあいつがいじってくれたんだ。お礼言ったらえらく自慢されちゃったけどな」

羽飛も上総に喜んでもらえたことが相当自信になったようでご機嫌だったようだ。C組訪問して実際のもを他の連中にも見せつけながら感謝を伝えたこともあり、天羽たちからも興味を持って同じく表紙をすりすりしてきた。ひとり、南雲だけは無関心を装っていたのが気になるがしょうがない。

「立村先輩はこういうモダンなデザインがお好きなのですか」

「好きと言われると難しいけれどな。ただ、もらったことは素直に嬉しい」

「絵、としては好きではないのですね」

しつこく杉本が食い下がってくる。最近杉本はこういうところが妙に目立つ。本条先輩の趣味とするマイコン道楽についてもそうだし、その他いろいろな面において。上総もなんとなくひっかかっていたのだがおちらも適当に流していた。

「もともと俺と羽飛とは美術の趣味が合わないからしょうがないんだ。自由研究一緒にやった時もそれは思ったよ。けどさ、ふたりが手作りで作ってくれたってところが何よりも感動するよな。それに、驚いたよ、俺の誕生日覚えてるなんてなって」

「ご友人なら当たり前のことではないですか」

きりりと杉本が言い切った。

「当たり前だったって、俺は友だちの誕生日すべて覚えてなんかないよ」

「立村先輩の能力を指しているわけではありません。羽飛先輩や清坂先輩レベルの方ならば、ということですよ」

「悪かったな、どうせ俺の能力は足りないってこと言いたいんだろ」

「私も覚えています」

「何をだよ」

わざと食いついてやった。少し言葉がすぎるんじゃないかと説教したいができるわけもない。さりげなくつつくだけ。杉本は即答した。

「九月十四日」

「え？」

また目に力をめいっぱい込め、杉本は上総を指差した。

「立村先輩の誕生日のことなど、常識ではありませんか」

——杉本も俺の誕生日、覚えてた？

不意打ちを喰らい絶句する上総をよそに、杉本は楽譜ノートを抱え立ち上がった。すばやくピアノの蓋を開け、楽譜立てに「恋はみずいろ」の分だけ広げて載せた。バランスよく広げた。

「お時間がないのですからお急ぎなさいませ」

命令には従うしかなかった。

杉本はピアノを弾く上総の隣に寄り添うように立っていた。しばらくじっと上総の指先を睨みつけていた。「恋はみずいろ」を一度通しで弾き終えた時も何も言わなかった。杉本の性格としては、感動しない演奏には無視で通すということが正直考えづらい。ということはお話にならないくらいひどかった、ということになるのだろう。

——もう少しなんか、柔らかく見るとかできないのかな。なんだか怖い先生に稽古付けてもらっているみたいだよな。

そっと顔を覗き込んでみる。相変わらず怒ったような表情のままだった。

「杉本、なんか言いたいことあるんだろ」

「別にございません」

「わかったよ、どうせ杉本はいい音楽ばかり聴いているから、俺の弾いてるところ見てていらいらしてるんだろ。顔に書いてるよ」

適当に嫌味をぶつけて「モルダウの流れ」に楽譜を合わせる。杉本がすぐに楽譜立ての位置を整えようとし、上総に問いかけた。

「私が楽譜めくりしましょうか」

「わかるか？」

「たぶんわかります。私も以前は習ってりました」

「そんなこと言ってたよな」

——音感がなくて結局挫折したらしいけどな。

理由はわかりすぎるほどわかるのであえて何も言わず、上総はそのまま任せた。

めくらせてみて気づいたのだが、やはり杉本は音に対する反応がどこかずれている。おそらく本人はごまかしたつもりでいるだろうが、とんでもないところで譜面をめくろうとする。上総はすでに暗譜が一通りすんでいることもあって杉本には気づかせないように弾き終えたつもりでいる。文句を言う気もない。

——やはり、これだと音楽の授業は苦痛だったんだろうな。でも杉本はオペラが好きなんだよな。ワーグナーだよな、ローエングリンだよな。

このあたりも正直謎なところがある。きっと自分がおかしな節回しで歌っているという意識もないだろうし、周囲からひどく音痴女と罵倒されたとしても高笑いして無視していたことだろう。もしかしたら、自分が実は歌が上手で相手がそのことに気づかないだけと思い込んでいるかもしれない。いや、その可能性がかなり高い。

「先輩、ピアノをなさっていらしたと伺いましたが」

「そうだよ。親に叩き込まれた。毎日練習しているわけじゃないからたかが知れてるけどさ」

「先輩程度の弾き方でよく合唱コンクールの伴奏などという大役を引き受けられましたね」

「さっき古川さんと話しているところ聞いただけ。しちめんどうな事情がいろいろあるんだよ」

「それにしてもあの程度では」

ずいぶん言い方が残念ながら否定ができない。一年英語科の皆々様にはこの程度で我慢していただくよう重ね重ねお願いするしかないのだが、いくらなんでも杉本にだけは言われたくない。そうだ、少なくとも杉本はここまでピアノが弾けるわけがない。マイコン売り場のキーボードを叩くことはすぐに覚えられても、奏でることはできない現実。突きつけてやろうかどうかどうしようか、迷った。

「じゃあさ、杉本ここまで一ヶ月で弾けるかよ」

「私は早い段階でピアノをやめましたから比較対象にはなりません」

「俺だって似たようなものだけどなんとかここまで持ってきたよ」

「先生たちから助けてもらったからでしょう。それに古川先輩にこういう風にピアノを貸していただきさらに、清坂先輩や羽飛先輩にもこのように楽譜を納められる台紙を用意していただき、すべてお手伝いしていただいたからではないのでしょうか」

「そりゃそうだけど、少しは俺の努力も認めてくれたって撥当たらないんじゃないか。俺だってそれこそ古川さんのキーボード貸してもらってうちで練習してるし、まあお世辞にもうまくはないけど、なんとか伴奏で迷惑かけないところまでは持ってきたよ。そこまで言うんだったらさ」

勢いで思わず飛び出した言葉に、自分でも驚いた。

「杉本が自分で確かめたらいいよ。俺が伴奏弾くから、杉本が歌ってみればいいんだ。ちゃんと

、どんな歌い方でもきっちり合わせてやるから。とりあえず課題曲知ってるだろ。中学の合唱コンクールでも歌った曲だし」

なぜ、こんなことを口走ったのかわからない。

——俺、一体何考えてるんだ？

自分で自分がかめめない。杉本に歌わせるということイコール、恥をかかせることにつながっているというのに。この部屋には誰もいない。だが戸は開け放たれている。おそらくだがこずえの弟およびお母さんはその歌声を聞くはずだ。杉本以外の第三者は上総と同じ認識でもって聴き入るだろう。

——どうせ断るよな、どうせ。

「そんな暇があればさっさとお稽古なさいませ」とか「先輩なんかの伴奏では私満足できません」とか「あのお方ならばともかくも立村先輩ごときと」くらい言うかもしれない。いや、そうしてほしかった。じっと見据える杉本の眼差しを、上総は正面から受け止めた。

「かしこまりました。『恋はみずいろ』であれば私も存じております」

杉本は上総の隣にぐいと寄り添い、じっと五線譜の間に綴られている歌詞にかじりついた。立ったまま、それを見ながら歌うつもりらしい。

「それなら弾くよ」

「お願いいたします」

冷やかに言い返し、杉本は上総のそばにぐいと寄り添い、前奏に耳を傾けた。弾いている時の肩に杉本の頬が触れそうで、思わず黒鍵から指が滑った。

その十三 みずいろ（4）

その歌声が流れ出した時、きっとソファの裏で両手を伸ばしていたゴムの木やサボテンたちはぴくりと目を覚まし身体をこわばらせたような気がする。

つんと澄ましたまま歌い続ける杉本の表情は、どこか遠くを見つめていて、楽譜のはるか奥深いところを見つめているようにも見えた。

上総はひたすら、その声に引きずられないように心してテンポを刻んだ。

できるだけピアノの音色をふくらませて、杉本の歌声を覆い隠そうとしてみた。

——気づいているのか。

今まで一度も、杉本に対して「お前は救いようのないくらい調子はずれの歌い方をする」と指摘したことはなかった。たぶん周囲から嫌というほど叩かれているだろうから、今更上総が何を言っても傷つくだけだと思っていたからだった。また、今まで杉本がこんなに声を張り上げて歌い続けるところをじっくり見たこともなかった。心のどこかで杉本が実は美しいメロディを歌い上げられる人間だと信じたかったのかもしれない。自分の目で、耳で、それを確認しない限りは信じない。そう決めていた。

いざ、その場で噂の歌声を耳にしてみて、実は周囲の人々が正しい評価をし真実を伝えていたことを知るはめになるとは。それも、自分の隣でひたすらうっとり幸せそうにたい上げている。もう曲がめたためにずれてしまい、上総も自分で何を弾いているのかがわからなくなってきた。ここには「ハーモニー」という言葉が存在しない。

——杉本は本当に、自分が正しい音程で歌っていると信じているのか。

ワーグナーのオペラをこよなく愛し、幼い頃から「ローエン格林」に憧れ手を伸ばし続け、それでもずっと届かぬ夢を見つめている杉本の姿は、一歩引いた立場から見ると極めて滑稽だ。憧れる王子様には無視され続け、親友として一緒にいたかった素敵な女子には同情と軽蔑の眼差しを投げつけられ、残るはこうやってドレミの音が取れない中必死に食らいついて弾き続ける上総のような役たたずしかそばにいないというわけだ。

——ピアノを弾くにしても、これだけ音をつかめないとなると苦労しただろうな。いや、先生の方がさじを投げたのかもしれない。杉本の性格上、諦めることはないだろうし。

同じく両手で奏でるのなら、メロディの存在しないマイコンのキーボードが杉本にはもっとも近く、愛おしいものではないだろうか。横目でちらと見やって思う。

——そういえば杉本、またあのマイコン売り場に行って打ち込みしたりしてるのかな。あそこのやたらといやらしい目つきで見ている店員はまだいるんだろうか。

「さあお疲れさま、お茶入れ直しましたから少し休んだらいかが？」

一曲目の「恋はみずいろ」がなんとか終わり、次の「モルダウの流れ」もそのまま突き進もうかと楽譜を開き直していた時だった。こずえの母がそろそろやってきて、今度は赤みのどぎついお茶を運んできた。香りからしておそらくローズヒップのハーブティーだろう。ふわふわした縦

巻きヘアでにこやかに。

「恐れ入ります。いただきます」

「いろいろお気遣いありがとうございます」

神妙に頭を下げ、一度ソファーに戻る。杉本は入口近くのソファーに腰掛け、静かに赤いお茶をすすった。上総も口に含み、かなり酸味の強い味わいに浸った。頭が少しすっきりする。

「お菓子も用意するわね。それにしてもうちのお姉ちゃんがふたりのこと褒めてたわよ」

思わず杉本と顔を見合わせる。こずえのお母さんはほがらかに腕を組んでみせ、

「立村くんはたった一ヶ月で、うちでピアノ弾けないのに一生懸命頑張って伴奏できるところまでもってきたって。私もずっと聴かせてもらっていたけれども、ほんとすごいわねえ。あっという間に上手になったわよ。合唱コンクールって父母に公開されてないのよねえ。残念だわ」

「あ、ありがとうございます」

過度なまでの褒めの言葉にひたすら恐縮する。さらにこずえのお母さんは、今度は杉本を褒め称える。

「それに杉本さんも、うちのお姉ちゃんをリードしてあんな素敵なアフタヌーンティーセットを用意するんだもの。もうびっくりしちゃったわよ。プロ中のプロよ。テーブルセティングとか、お母様が教えてくださったの？」

「いえ、私ひとりで覚えました」

礼儀はわきまえているがきっぱり杉本らしく答えた。

「すごいわあ、杉本さんはとても賢くて可愛ってうちのお姉ちゃんが大絶賛してただけあるわよ。本当に、杉本さんをお嫁さんにする人は幸せねえ」

空気が思い切り固まったことにこずえのお母さんは気づいているのかいないのか、上総がはらはらする間に、今度は大きなシュークリームを二人分、さらに盛った。

「うるさいお姉ちゃんがないあいだにお二人で召し上がれ！ さあ、ゆっくりおしゃべりなさいませ」

最後の「ゆっくり」に妙な力が入っているような気がしたがあえて気づかぬふりをし、上総と杉本は改めて深々と礼をした。

またふたり、顔を合わせる。杉本はしばらくこずえのお母さんが出ていったあとを見つめていたが、すぐに立ち上がった。ハーブティーはまだ残っている。まだシュークリームには手がついていない。

「どうした？」

「立村先輩にはお時間がございません。早くお稽古をお始めなさいませ」

「弾くよ、弾くけどさ」

「手が汚れたままピアノを弾くのは迷惑ですし失礼です」

「もちろん食べたら手を洗うよ」

「そういう問題ではありません。早くピアノの前に戻ってください」

がんとして受け付けない杉本のきつい瞳には勝てやしない。しかたなく促されるように立ち上

がる。本当はこれだけ大きなシュークリームにすぐかぶりつきたかったのだが。

杉本は「モルダウの流れ」の譜面を広げ、じっと歌詞の部分を読んでいた。不穏な気配あり。そっと尋ねてみた。

「どうした、杉本」

「この曲も中学の音楽教科書に載ってたものですね。歌詞は覚えております」

「いやいいよ、二曲は疲れるだろうし」

さっきの「恋はみずいろ」で十分すぎるほど杉本の歌声は堪能した。さすがに二曲も連続して聴くのは弾き手としてもかなりしんどい。

「いいえ、先輩がおっしゃったのですから最後までさせていただきます」

「するって何を」

「もちろん、歌うことでございます」

その表情には、自分の歌声が空気をがたがたに震わせる威力があるなどと一切思っていないということがよく伝わってきた。

「早く、おはじめなさいませ」

「はいはい」

腹をくくった。今は誰もいない。部屋の向こうにはこずえのお母さんとたぶん弟のふたりのみ。ここにいるのは上総と杉本梨南だけ。あの、笑ってごまかせないほどの強烈な音程のずれも、ハーモニーを一瞬のうちにぶち壊す声も、このピアノであれば受け止められるはず。上総は杉本の顔を座ったまま見つめ、すぐに楽譜へ目を移した。曲を奏でることに、ひたすらうもれた。

杉本の歌声が止まった。何か、ドアの向こうからかすかな言い合いの音が聞こえてくる。

「杉本？」

「聞こえますか」

一本調子に杉本が尋ねる。入口に視線を向けたまま。

「話をしてるのかな」

「違います、喧嘩のようです。文句をつけているようです」

「誰に」

「古川先輩のお母さまにです」

耳を澄ませると、確かに話の内容が耳に飛び込んでくる。男子の声らしきもので、ひたすら激しく母親を詰っているような雰囲気だ。じっと耳を傾ける。

——だから母さん止めるよ。あの騒音みたいな歌やめろって行ってこいよ！

——何わがまま言ってるの！ おねえちゃんの友だちなんだからそんな失礼なこと言えるわけないでしょ！

——姉貴ばっか気つかいやがって俺はどうでもいいのかよ！ 俺があんな超ど音痴な声聞かされて耳が腐りそうだったの誰もかわいそうだって思わねえのかよ！

——あんたも少し我慢しなさい！ そんなにいやならなんで学校行かないの？

——うるせえうるせえうるせえ！ やだったらやだ！ 早く黙らせろよ！ あんなの聞かされてたら俺、もう窓から飛び降りるからな！

「立村先輩、ピアノを弾いてください」

杉本は感情を一切浮かべず、上総に冷ややかな口調で告げた。

「先輩ひとりで、最初から弾き直してください」

「杉本、でもさ」

「私は疲れました」

そのまま杉本は半分ローズヒップの赤いお茶が残ったティーカップのもとへ戻り、そっと口を付けた。

その十三 みずいろ (5)

杉本はもう歌わなかった。

ただ黙って上総が何度も浚っていくのを聞いていた。

罵倒することもなくもちろん褒めることもない。

——振り向いたらまずいだろうな、やはり。

「恋はみずいろ」を五回、「モルダウの流れ」を十回。それぞれ繰り返した。暗譜しきれてなくとも楽譜を追えばなんとか途切れずに弾くところまではいけた。さすがに上総もここまで弾きまくると疲れが出てくるので休憩を入れることにした。とりあえずはこずえが戻ってくるまでの間はエンドレスで練習ができる と考えていいのだろう。

手付かずのシュークリームに目を留めた。杉本もまだ食べていない様子だった。

「先に食べてればよかったのに」

「礼儀ですから」

杉本らしい理由ではある。しかたないので上総が先にシュークリームを手づかみにしかぶりつくと、杉本は添えてあるフォークでパイの皮を丁寧にはぎ、品良く口に運んだ。

「器用だな」

「立村先輩のほうがマナー違反なのではないですか」

「しょうがないよ。俺は昔から不器用なんだし、杉本のような食べ方したらかえって皿を汚してしまうよ」

実際クリームが皮の縁までたっぷり詰まっっていて、食べごたえがある。かなり大ぶりのお菓子だがカスタードクリームがくどくないのであっさり平らげられる。そのあとすっかり覚めたローズヒップの赤いお茶を飲むと酸っぱくて口がさっぱりする。

「とりあえずはこんなもんか」

用意されていたウェットティッシュで手をぬぐい、ピアノに戻ろうと思っていた。実際このままだと本当に集中して練習できるのは今日が最後だろう。立ち上がり杉本を呼んだ。

「あのさ、杉本」

「もう邪魔いたしませんのでお稽古なさいませ」

「するけどさ」

やはり一言伝えておかないとまずいような気がしてならない。あれからこずえのお母さんも、もちろん弟らしき人も部屋には現れないままだ。もしやまたそれとなく注意されるのではと少しだけびくついてはいたが、今のところ二人きりでいられる状態だ。野獣になぞなる気はない。上総と杉本以外いない場だからこそ言えることを伝えておきたい。

「さっきのこと、気にしてるんだろ」

気にするな、とは言えなかった。やはり、多少は意識してほしい。杉本は唇を噛み締め、それでもクールさは保ち、

「別に、ささいなことです」

ぶっきらぼうに答えた。

「顔に書いてる。杉本は嘘を言う人間じゃないだろ」

「そんなことはありません！」

上総は杉本の座っているソファーに回り込んだ。隣を陣取った。迷惑そうに身を逸らす杉本などお構いなしに、

「傷ついたって言ったっていいのにな」

「私は傷ついてなんかいません！」

「だったらなんで、歌うのやめた？ 『モルダウ』途中なのに」

唇をぎゅっと結んだまま、杉本は目をカップに移した。手にとろうとした。

「ごまかすなよ。ほんとか嘘か、どっちなんだよ」

手を緩めたくない。誰もいないところだからできること。第三者が揃っているところだったら上総の行為は同じ嫌がらせに過ぎなくなる。杉本を馬鹿にする連中と一緒にくたにはされたくないけれども、いつかは言わねばならないことだとどこかで感じていた。

「私のどこが嘘だとおっしゃるのですか」

「さっき、古川さんの弟が話したことだよ。聞こえただろ。聞いてたはずだ」

「確かに聞こえておりましたがそれ以上の何ものでもありません」

「嘘言うなよ。はっきり音痴だとか言ってたところも聞いたんだろ」

「確かに、それは」

口ごもる杉本のふるえる目線に、上総の読みは当たっていると見た。きっと一年前の杉本であればためらうことなく「失礼な！消えていただけますか！」くらい上総に命令し、あっさり絶縁を言い渡すだろう。あの十一月、生徒会改選立候補申し込み最終日前の杉本ならば。だがもうあの頃の杉本ではないことを、そばにいる上総は強く感じ取っている。

——今の杉本ならば。

かつての、恐れを知らぬいくさおとめの杉本梨南ならば。さっき喚き散らしていたこずえの弟の罵倒も所詮嫉妬と鼻で笑っていただろう。青大附属に入学するはるか昔から、音楽の授業特に合唱のイベントなどで響きを買っていたに違いないのだから。自覚などせず、意地でも相手の耳が悪いためと決め付けて流していられただろう。

だが、今の杉本は違う。自分の願っている理想像にたどり着けないことを、音楽感性に溢れ、耳に優しく響く歌声で歌い上げられる自分ではないことを嫌というほど思い知らされている。

——新井林にも、佐賀さんにも、そしてあいつにも。

杉本の願う理想の自分には届かない、それを痛いほどわかっているはずだ。

——泣いてくれればいいんだ。それだけでいい。

そこから先の言葉は、上総がいくらでも用意できるものだから。

上総はじっと杉本の瞳を捉え、ゆっくりと伝えた。

「俺も、杉本は音程を取るのがものすごく苦手だと思っている。嘘、言いたくないから」

「どう言う意味ですか」

きつとした目で杉本は上総を見返した。怒りが浮かんでいるのがありありとわかる。

「さっきの古川さんの弟と同じ感覚で、聴いたってことなんだ」

どうか泣いてほしかった。怒鳴ってもいい。適度に殴られてもいい。

「お前のこと嫌っている奴らの前でこれ以上歌わなくたっていい。合唱コンクールみたいなところで黙ってろって言われたらそのまま口ぱくぱくする振りしてたっていい。けど俺とふたりの時だけは絶対あんなこと言わないし、他の奴らにも言わせないから」

何を言いたいのか自分でもわからない。杉本のある意味超人的な音程の外れっぷりはこれから先、合唱コンクールをはじめとする歌声を求められる場では大鬘 蹙を買うことだろう。青潟東高校に進学しようがなずな女学院に進もうが、どこに行っても同じことを繰り返すのみだろう。今までのように杉本が「自分は音痴である」ことを認めずに歩いていく限り、軋轢は消えないに違いない。

「杉本が音痴だという事実さえ認めれば、いくらでも道は見つかるんだ。勝てない舞台から降りることだってできるんだ。歌いたかったらふたりきりでカラオケボックス行っただっていいんだ。俺の部屋でキーボード伴奏で歌ったっていいんだ。ピアノをとうとう覚えられないのが悔しいんだったら、替りにマイコンキーボードを叩けばいいんだ。ピアノでつかかっているより、BASICとかいう言語をばたばた打ち込んでいる方がずっと杉本には似合ってる。夏休み、あっという間に覚えたところ間近に見た俺が断言するって！ だから」

きりりと目尻のつり上がった杉本が上総に何かを言い返そうとした時、玄関から賑やかしの声が聞こえてきた。

「たーだいま！ 今帰ってきたよん！」

こずえが元気いっぱいに戻ってきたようだった。

その十三 みずいろ (6)

「待たせちゃってごめんごめん。立村も思い切り練習できたんじゃないの？　なんか飲み物のおかわり持ってくるからちょっと待っててよ」

息を切らせて帰ってきたこずえも、上総と杉本とのどことなく息詰まる空気を読み取ったのかわざと明るくふるまいつつ居間を飛び出していった。

「立村先輩」

思い切った風に杉本が口を切った。

「今のことは、古川先輩には内緒にしましょう」

「そのつもりだよ、最初から」

上総が言わなくてもたぶん、弟がわめきたてる文句を聞かないわけがない。そろそろおいとまする時間にさしかかったようだし、楽譜を閉じて片付けることにした。杉本もそれからは何も言わなかった。

「あれ？　もう帰っちゃうの？」

「そろそろ遅いし、杉本も受験勉強とかあるだろ」

鈍感なのか、ふりをしているのか、こずえはぼかんとした顔で引きとめようとした。

「ちょっとお、待ってよ。せっかく私だってさあんたらふたりが寂しいだろうってことでダッシュで戻ってきたんだよ。それに、もうひとつ頼みたいこともあるしさ」

「なんだよそれ」

まあまあ、とこずえは上総がしまいかけていた楽譜をひったくった。

「さっきね、練習してた女子チームと話してたんだけど、やっぱりそろそろ本番に近い形で練習したいよねってことになったんだわ。で、関崎の独唱も悪くないけど現実はそう甘くないってことで、そうよ、立村、あんたに二曲弾いてほしいわけよ」

「弾くって、いつ？」

こずえはピアノの蓋を開き直し、楽譜を並べた。

「今。私も今からラジカセ持ってくるから、ここで録音させてほしいんだわ」

「俺が弾いたのを録音するのか？」

「そういうこと。一応あすも有志が集まって声合わせる予定らしくって、私もなんかわかんないけど参加することになった。立村、あんたはあす暇？」

「暇なわけないだろ。最後のレッスンに行ってくる」

「そっかそっか。そりゃしかたないよね。だったらしっかりしごかれてきなさい。とにかくあなたのピアノに合わせて歌う訓練をしたいのよね。テープはちゃんと用意してあるから、しっかり根性入れて弾きな」

そこまで上総をどやしつけたあと、別人のような笑顔でもって杉本に話しかける。

「杉本さん、ごめんねえ。こいつの話し相手で疲れたかもしれないけど、いつものことだと思って諦めてよ。それと、もう一度だけあいつのど下手なピアノの音色に耐えてもらえると嬉しい

なあ」

「私は構いません」

短く杉本は告げた。

——しかたないよな。まあいいか。少しでも弾く機会があるのはありがたいし。

もう一度ピアノに向かう。観客は二人のみ。こずえの用意したメロンスカッシュが三人分並んでいるが手を付ける気配もない。振り返りこずえに始めるタイミングをうなづいて伝えた。かちりと録音ボタンがおされた気配がある。五秒数えて、上総は「恋はみずいろ」のメロディーを奏でた。誰の声もなく、ただ静かな部屋のなかで。

後ろのソファでじっと身体をこわばらせているであろう杉本梨南の姿を背中を感じてみる。かすかな吐息すら聞こえてきそうな気配がする。ついさっきは空気をかき乱すような壮絶な歌の混じり合いで悲惨なできだったが、誰も何も邪魔をしないのであればほら、こんなにすんなりと弾くことができるわけだ。

——問題は、これからどうやってクラスの歌声に合わせてくかってことだけど。

いったん終えて次に「モルダウの流れ」に入る。

杉本の歌声でモルダウの汨濫としか思えないメロディと化したのもそれはそれ。何度か繰り返して弾いていくうちにどうやって盛り上げていけばいいのか、どのあたりでペダルを踏めば空気を膨らますことができるのか、なんとなくつかめてきたような気がする。少しテンポが早くなったところも無きにしも非ずだが、なんとか仕上がってきたと思う。

一通り弾き終えて、ラジカセの終了ボタンを押す音が聞こえるのを待った後、上総はこずえに話しかけた。やはり英語科A組の女王様には確認しておきたい。

「こんな感じでどうだろうか」

「うん、『モルダウ』はいいね。雰囲気すごいよ」

上総の読み通りの感想をまずはひとつ。苦言もひとつ。

「けどさ、やっぱ『みずいろ』はねえ。なんか物足りなさすぎるんだよ」

「棒のように弾くって言いたいんだろ」

「自分でわかってりゃいいのよ。てかさあ、別にうちらは宇津木野さんや足田さんレベルに弾いてくれなんて思っていないよ。ただ、『モルダウ』のはまり方に比べてなんで『恋はみずいろ』なんか腰が引けるよ。なに、据え膳食べぬは男の恥ってこと忘れてるんだかって」

「よく意味がわからないけど、要するに気持ちが入ってないってことはわかる」

こずえにも指摘されたとなると、「恋はみずいろ」の弾き方は相当つまらないものなんだろう。間違えないで弾いただけではこずえのお許しをもらえそうにない。恐縮する。

こずえはテープのB面を向けて入れ替え、巻戻した。

「とりあえずさあ、もう一回弾いてみなよ。それと、私はちょいとうちの母さんに呼ばれてるんで部屋出るけど、その間に『恋はみずいろ』だけもう一度録音しなよ」

「別に古川さんが戻ってきてからでもよくないか」

なぜそんなことをしたがるのか上総には謎だったが、こずえはすぐに立ち上がり杉本に向か

って、

「杉本さん、よかったらこの椅子使って立村が弾いている間隣でラジカセ抱えてボタン押ししてもらえるかな。少しこいつにはプレッシャーかけないとまずいよ」

それまで植木を載せていた木製の椅子を上総の隣にセッティングした。促されて座った杉本の膝に小さなラジカセを乗せた。

「ここの赤いボタンが録音するところ。再生ボタンと一緒に押すってのはわかってるよね」

「大丈夫です」

またまっすぐな口調で杉本は答え、カセットテープをくいと引き寄せた。

「じゃあ、曲が終わったら私も戻ってくるからちょっと二人の世界しててよ」

「何が二人の世界なんだか」

脈略のないこずえの言葉には戸惑うものの、自分でも問題点が存在しているのは承知している。こずえが部屋を出て行ったあと、上総は杉本の膝を指差して、

「俺が鍵盤に手を置いたら、ボタン押ししてくれる？」

頼んでおいた。杉本は静かに「はい」とだけ答え、指を赤いぼっちのついた録音ボタンと再生ボタンそれぞれにあてスタンバイしていた。

——どんな気持ちで聴いてるんだろう。

——杉本にはどういう風に聞こえているんだろうか。

——杉本はさっき、この歌詞どういう気持ちで歌ったんだろう。

ぐるぐる回る。杉本の顔を見つめ、合図を目で送り、そこから始める。音色は前に弾いたのと特に変わるわけでもない。違っているのはひとつだけ、杉本が黙って、ラジカセの録音ボタンを押して、そのまま静かに耳を傾けている姿がはっきり見えることだけだった。その目はまっすぐ、上総の横顔に向けられている。そらそうとはしなかった。

——こうやって弾いているのが関崎だったらって思ってるんだろうな。

関崎の類まれなる歌声を、杉本はまだ知らずにいる。

指揮者として大活躍するその姿も、見ることはない。

憧れの君を思い求める杉本が触れるのを許されているのは、よりによって上総のようなあぶなっかしい弾き方をして周囲にため息つかせているような奴しかない。杉本に現実をつきつけているのは、上総の言葉だけではなく、その存在なのかもしれない。たどり着いて、胸が突然激しく詰まった。横は見ない。気配とぬくもりだけ感じられればそれでいい。ぶつけどころのない熱いものが全身に沸き立ち、それを抑えるためにピアノの鍵盤を叩いて冷やすしかないことを、上総はその時初めて知った。

弾き終えた。杉本が終了ボタンを押した。

「どうだった？」

上総の問いに杉本は一言、

「私に答える権利はありません」

かたくなに、顔をこわばらせたまま答えた。

その十三 みずいろ (7)

ピアノの録音が一段落して少しクラスの話も情報確認したところでお暇することにした。こずえが上総と杉本を見送るべく一緒に降りてきて、

「あんたたち、一緒に途中まで帰るんでしょ」

水を向けるとすぐに手厳しく拒否された。

「私はひとりで帰らせていただきます」

「でも暗いし、あぶないよ」

日が落ちるのがここのところ一気に早くなっているのは確かだった。かなり薄暗い。上総もちろん杉本を途中まで送って帰るつもりでいた。男子としての義務だと思う。

「いいえ、結構です。古川先輩、本日はお招きいただきありがとうございました」

丁寧すぎるほど深々と頭を下げ、杉本は背を向けた。上総が声をかける間もなく、全力疾走で走り去っていく。それを見送りつつ、ため息を吐く。こずえが見とがめた。

「あんたたち、ほんと、私いない間何があったのよ」

「たいしたことじゃない」

事実を伝えてもいいのだが、こずえの弟を侮辱することになるのも気がひける。あれだけ美味しいお菓子ともてなしを受けて、家族の悪口を言うのもちょっとなんだと思う。口を閉ざすしかなかった。

勘づいたのか、こずえは上総を促して歩き始め、あっさりとお話を打ち切った。

「たぶん、うちの弟がぎゃあすかぴーすか騒いだのがあったんじゃないの」

「いやそれは」

「そうだよねえ。さっきもあいつにげんこつ一発喰らわせていたから今後は黙ると思うけど、こればかりは感性の問題だからねえ」

事情は把握しているのだろう。もう少し深い話もできそうでほっとする。

「あいつさ、別に音楽何か習ってるわけじゃあないんだけどね」

こずえは羽織っているジャンパーのポケットに手を突っ込んだ。

「聴くのはすんごく好きなのよ。ジャズとかクラシックとか。レコードもなけなしの小遣いで結構揃えてるしね。私があんたに貸したキーボードあるでしょ。あれはさ、弟のお下がり。私はほら、ピアノもやめちゃったしやる気なしなしだったからあいつのお下がりで十分満足なんだけど、音にこだわりがある奴はどんどんバージョンアップしてかないと落ち着かないんだって。やたらと高級なもん使ってるよ」

「古川さんが貸してくれたキーボードも相当いいものだと思うけどな」

「そうだけど、音にこだわるあいつにとってはおもちゃにしか感じられないんだって。よくわからないけどね。そんなこともあって、あいつは自分が対して上手に弾けるわけじゃあなくて、楽曲に対するこだわりだけは異常にあるの。自分の感性にぴたーとこないとぶちぎれちゃうってか。まあそれで、なかなか面倒なんだけどね」

——わかるような気がするな。

言いたいことを飲み込み、頷くだけにした。こずえは続けた。

「今回あんたをひっぱりこんでピアノ練習してもらおうかってのも、実はそのところに理由があったわけよ。後出しジャンケンで申し訳ないんだけど」

「そのところって、弟さんのことか」

つながりが読めず、問い返した。かなり闇が濃く、こずえの表情も陰って読み取りにくい。

「あんまり面倒なこと言いたくないんだけど、うちの弟さ、今いろいろあってうちで勉強してるのよね。学校にあんまり行ってないってか。うちで一日中レコード聴いてるかゲームやってるかそれとも雑誌読んでるかなんだけど。世の中の接点、っての？ それ全然ないわけ。こりゃまずいと思ってて、あいつの好きな音楽とかならちょこっと顔出したりするかなあとか思ってたわけよ」

「古川さん、ひとつ聞いていいかな」

かなり深刻な話に嘴挟むのは怖いがあえて言う。

「そんなに音楽好きだったら、俺のピアノの練習はかえってストレスが溜まったんじゃないか？」

杉本の歌声に匹敵するほど上総の演奏もそうとう凄まじいという自覚があるだけに。こずえは手と首を振った。

「大丈夫、あんたのピアノはまあ、耐えられたみたいよ。食事の時に、まあね、随分下手だとか言ってたけどあんなに切れるほどじゃなかったし。あんたがそれなりに上達しているのもわかってたみたいで、ずいぶんやるじゃないかとか褒めてたよ」

「複雑なほめ方だな」

あまりこずえの弟について詳しい話を聞くことはなかった。上総とそっくりだとか、手がかかるとか、せいぜいそのくらい。きっと上総と似たような面倒な性格なのかもしれないとは思っていたが、そのあたりの予測は当たっていたことになる。

「まあ、褒められたんだから少しは自信持ちなさいよ。身内だしかばうのもなんだけど、一応はあいつも社会的常識をわきまえてるし、うちの母さんもそうしつけてきているはずなのよ。腹がたっても部屋にこもるだけで人畜無害だからさ。けどね」

「今日だけは」

上総はこずえの横顔をみやった。

「そうなのよ、なんかが切れちゃったのよねえ」

大きなため息を吐いたこずえに、答えるすべもなかった。

——あの、俺の演奏ですら耐えられた古川さんの弟が、杉本の歌声にはがまんならなかったってことか。

こずえは立ち止まった。横断歩道前の街路樹だった。青みのある葉が数枚途上に落ちている。

「噂は聞いてたよ。杉本さんがいわゆる音痴だってことはさ。学内でも知らない人いないしね。あの子、二年の時にやる合唱コンクールでは絶対歌うなって言われてたのに無視したものだから受賞できなかつたって結構恨まれたってことも聞いてたし」

「そんなことあったのか」

気づかなかった。こずえはさらに語り続けた。

「杉本さん自身はたぶん、自分が音痴だってこと気づいてないんだろうね」

「さっき、確実に気づいたと思う。俺もはっきり言ったし」

「あんた正気？」

目を見開き背中をどすんとやられる。

「あんたさ、面と向かって言ったわけ？ お前音痴だから黙ってろって」

「伴奏に合わせて歌わせたのは俺の方だからそんなこと、言うわけないだろ」

「はあ？ なんであんた、杉本さんの歌声知ってたくせに、なんで歌わせようとしたの」

「聴いたことなかったから」

「怖いものみたさってことかあ。ほんっと、あんた、馬鹿だね」

また今度は頭をどつかれる。こずえと歩いているとこれはよくあるパターンなので怒らないでおく。

「せめて嘘でもいいからお前の声は可愛いよとか言っとけばよかったのにねえ」

「そんな心にもないこと言ったらかえって傷つくだろ」

「男子は全く、女心をわかってないねえ」

またたらたら恋愛講釈に入ろうとするこずえを上総は遮った。そろそろ横断歩道をわたらねばならない。自転車でそろそろ勢いよく品山に向かって走らねばならない。

「俺個人の考えだけど、古川さんの弟さんがはっきり言ったのはよかったと思うんだ。杉本も自分とは利害関係のない人たちにもそう聞こえているってことを知るのは、必要だと思ってたし。機会があればそれも杉本に言うつもりだったから古川さんが気にする必要ないよ」

「でもねえ」

「俺みたいな立場の人間が言ったほうが、かえって傷は浅くすむと思う」

「あんたみたいな立場？」

それ以上は答えたくなかった。上総は再度、

「本当にピアノ稽古させてもらえて助かった。本番までには完璧に仕上げるから。ありがとう」

きっちりと礼を伝え、自転車のペダルを踏み始めた。こずえがどういう顔をしているかはあえて確認しないことにした。夕闇に感謝だ。

——俺が杉本にできることったら、そのくらいだから。

その十四 印條先生の提案（1）

印條先生宅への最後のレッスンに向かう車の中で、上総は一言も口を利かなかった。父に苛立っていたわけではないし、朝ごはんも普通に食べた。ぴりぴりしている父の扱い方も三回目になると上総側もだいぶ慣れ、できるだけ余計なことを口にしないようにしてきただけだった。ただ、どうしてもそれ以上のことができなかった。

海辺の道をひた走り、印條先生宅へ到着した時に初めて声を掛けられた。

「どうした、車に酔ったのか」

「なんでもない」

楽譜をしまった鞆を抱え、上総は車から降り立った。初めて訪れた時よりも海風は激しく、もうそろそろジャケットかコートが必要となりそうな季節だった。もともと気温の低い街ではあるけれども、想像以上に冷え込む。

いつものように案内され、過去二回と同じようにレッスンが行われる。

印條先生は上総の演奏を二曲連続通しで聴いた後、

「もう、クラスのみennaと合わせたりしたのかな」

穏やかに尋ねてきた。

「はい、何度か歌と一緒に演奏しました」

「そうか、それならよかった。して、その感想は」

「難しい、です」

正直な感想を述べざるを得ない。自分で気持ちよく演奏しているのと、指揮者を見ながら必死に合わせるのとではわけが違ふ。肥後先生が「ソロと伴奏とは違ふ」と説明してくれた意味がなんとなく理解できたような気がしている。

「でも、弾くことは弾けるだろう」

「はい。金曜が本番なので、全力尽くします」

これも嘘ではない。昨夜も帰ってから、夜中までキーボードに向かっていた。車の中でしゃべりたくなかったのはその眠気が影響していただけだと思う。

「細かいところはおいおい伝えていくが、よくがんばった。この三週間君がどれだけ努力したかはよくわかったよ。特に先週話した『恋はみずいろ』だけれども、ずいぶん雰囲気が変わったよ。盛り上げ方のポイントを掴んだようだね」

「はい、自分なりに勉強したつもりです」

これも正しい。上総なりにいろいろな人……関崎、美里、こずえ、霧島さん、そして杉本梨南……の伴奏を勤めていくうちに、どういう風に音を載せていけば一番引き立つかが無意識のうちに感じ取れつつあった。もっとも杉本の場合は「いかにして突飛な旋律に引きずられないようにするか」が重要課題だったが。

「たくさんの友だちに協力してもらって伴奏させてもらい、いろいろ参考にしました」

「實際生の歌声で練習したということなんだね」

ここで父が口をはさんだ。

「ありがたいことに、上総にはいい友だちが本当にたくさんおります」

——まあ、否定はしないよ。

細かなミスやペダルの踏み方、同時に伴奏を行う際の心構えなどいろいろ説明を受けるうちにいつのまにか一時間経つ。印條先生の奥さんが暖かいコーヒーを三人分運んできてくれたのをきっかけに一旦休憩することにした。

「できの悪い息子ではありますが、こうやってみると三週間ですいぶん変わるものですね」

父がむかつくことをしみじみとつぶやく。上総が隣で睨んでいるのも知らぬふりで、

「最初はこういったらなんですが、コンクールの後担任の先生のところへ菓子折り持って謝罪に行かないとまずいんじゃないかと真剣に考えておりましたが、先生のおかげでなんとか最低限の仕事は果たせそうですね。いやいや安心しました」

「もともと上総くんは筋がいい子だし、飲み込みも早い」

「恐縮です。お世辞にも器用な子ではないのでいつもこういうイベントがあるたびはらはらさせられます。卒業式の英語答辞を仰せつかった時も、上総ひとりのほほんとしている中、僕ひとりでただ胃薬飲んでましたよ」

——猛烈に失礼なこと言ってるなこの人。

英語答辞はこうってはなんだが、お茶の子さいさいだったと言い切ってやりたい。自分で英作文すればまた話が変わったかもしれないが所詮出来合いの原稿だ。大したことじゃない。

印條先生は父の謙遜を楽しげに聞きつつコーヒーカップを持った。

「たった三回だし私もやっつけ仕事に近いことしかしていないわけで、正直上総くんには申し訳ないことをしたと思っているんだ。本当だったらもっと細かく手直しをしたり、曲もきちんとした練習曲を選んで指の訓練をしたりとか、すべきことはたくさんあるんだよ」

「いえ、それは」

父がまたへりくだる様子を眺めつつ、上総もコーヒーカップを手にし啜った。やはり美味しい。緊張する空気から開放されたといえればいいのだろうか。もちろん印條先生には感謝してもしきれない。やはり第三者からきっちり指導される時間というのは価値があるものだと実感する。

「そこで提案なんだが、立村くん」

印條先生は膝を打ち、コーヒーカップを置いた。父がまたぴくりとする。

「もし、君と上総くんがよければの話なんだが、これから先も上総くんにここまで通ってきてもらいたいんだ。もちろん今後は上総くんひとりだけでもいいし、都合のいい時間帯に変えてもらってもいい。ただ、せっかくここまで弾けるようになったのなら、もっとここからレベルを上げていくのも悪くないのではないかと思うんだ」

「え、先生、そんな、もったいないことを」

またあわあわと口を動かす父にはお構いなし、印條先生は上総にも語りかけた。

「いわば、この三回は体験レッスンと受け止めてもらいたいんだよ。私も今までピアノの弟子をとって教えるという経験をしたことがなかった。君のような少年を丁寧に指導するということ

も私にとっては初めてのことだったんだ」

「恐れ入ります」

頭を下げて様子を伺う。上総もこの先の展開が全く読めない。たよりの父が泡を食っている状態なので自分でなんとかしなくてはならないということだけはなんとなくわかる。

「だが、教える経験をして改めて気づいたのだが、教えるというのは自分で再度学んでいくこととイコールなのだという当たり前の真理に行きあたったというわけだ。自分ではごく当たり前のように弾いていたことが、教えてみると伝わらない。なぜ伝わらないのかを考えていくと実は自分で理論的に理解していなかったことに行き当る。上総くんとのやり取りの中で私は本当にたくさんのことを学ぶことができた。師匠と弟子、これは教えるという行為によって互いを高め合うということなのだよね」

——そうなのか？

今ひとつぴんと来ないが、とにかく結論はひとつのようだ。上総も静かに聞くしかない。

「君の一存で決めてもらいたいが、私としてはぜひ、もう少し君のピアノを聴いてみたいし、本当はもっと高いレベルで弾くことができることに気づいてほしいと願っている。もちろんプロを目指すとか音大に行くとかそういう話ではないけれども、趣味であればあるほどある程度の技量を得ることによって見えてくるものがたくさんあるはずだからね」

——どうしよう、ほんと、これどうしろって。

迷うよりなにより、自分で判断すべき内容なのだろうか。

——第一月謝どうするんだよ。払うのうちの親だぞ。

心を読み取ったのか、印條先生はすぐに触れた。

「月謝などは必要ないよ。それこそ週一回程度通ってもらえればそれでいい」

「そういうわけにはいきません！」

また父が慌てて叫ぶ。

「先生のようなお忙しい方に、うちの息子のようなこんなお世辞にも出来のよくない奴の指導などということをお願いするとは、本当に心苦しく」

「いや心苦しいならぜひ、私の希望を叶えてもらいたいな、そうだろう、立村くん」

「しかし、上総は今まで、それなりに自己流で学んできておりますし」

「そこが問題だよ、立村くん」

いきなり印條先生は厳しい口調に変わって父を叱りつけた。

「自己流には限界がある。芸事については最初できるだけきちんと真似て学ぶべきものだよ。こういっては失礼だが、上総くんにはおそらく君の前の奥さんが仕込んだものが残っているが、それによって悪い癖がついてしまっている。せっかくよい感性を持っているにもかかわらず、その癖によって上にいけないのは本当にもったいないことだよ」

「ですがあの」

「立村くん、これから君にも話したいことがある」

一気に空気が変わった。コーヒーの色が空気に混じったようだった。

——なんだよこれ、いったい何が起ころうとしてるんだか。

もう上総のピアノレッスン延長に関しての話題ではなさそうだった。息を潜めているしかない

。

その十四 印條先生の提案（2）

とりあえず、上総の意思は固まっている。

——父の許しがあれば、ピアノをこのまま続けたい。

母に教えてもらった時には感じなかったやる気のようなものが、今回の件を通じて奥底から湧いてくる経験ができた。またたくさんの友だちや先生たちを通じて、今まで見えなかったものが見えてきたり、クラスメートたちの抱えている事情などにも触れることができた。一番驚いたのはこずえ宅での霧島さんとの再会だが、今後弟と接していくにあたっての示唆も得た。もらえるものすべてぶんどって来たという感じがする。

——ただ月謝がな、どうなるんだろう。父さんもまさかただで習わせるなんて甘えたこと考えるわけないし。

気持ちはあるが、下世話な現実との折り合いをどうするか。

それと今語られつつある、父と印條先生との未知なる会話。

上総は息を呑み、耳を傾け続けた。

厳しい口調ではあるが叱りつけているわけではない。印條先生はほとんど這い蹲りそうな父の顔をじっと見据えつつこんこんと諭している。

「立村くんとは実に長い付き合いだ。君が二十代の頃からだから、もう十年以上になるわけか。上総くんの年齢よりも二年くらい少ないだけか」

「おっしゃる通りです」

「あの頃から君たち夫婦の教育方針を事あるごとに聴かせてもらっていたが、正直なところ私としては危なっかしさを感じていたよ。感じただけではなく何度か直接伝えたこともあったね」

「恐れ入ります」

「幸い、上総くんはこうやって青大附属中学に合格してたくましく青春を謳歌しているようではあるし、それはそれで素晴らしい。だが、本来思春期から青年期に移り変わる時期になぜ、母となる人がそばにおれないのか、それが私には何度考えても腑に落ちない」

「それもごもっともです。一般的な判断でないことは僕も承知しております」

へりくだりすぎ、そうっこみたいが父なりに考えがあって叱られていることなのだろう。我慢して聞く。

「立村くん、君の話だと、君のパートナーさんの考えは思春期こそ母離れをすべきということだったね」

「その通りです」

「もちろん、過剰な母子癒着は望ましいものではない。ある程度の年齢をすぎた段階でそれは考えねばならない。当然のことだ。しかし、君がその判断を下したのは上総くんが十二歳、と伺ったがそうなのかな」

「仰せの通りです」

ここまで印條先生は父に、上総の教育方針について逐一確認をし続けていた。この点は当事者

の上総も思うところがある。中学以降母が家から出て行ってくれた本音を言うと、非常にせいせいしたというものがあつたりもする。もちろん口に出せはしないが。たまに家に泊まり込みに来るとたいてい上総と母との口論が繰り返されるはめになるし、気分も決してよくはない。印條先生からすると、母がいなくて寂しがる息子の気持ちを思いつつ語っておられるのかもしれないが、心配ご無用とあっさり流したい本音もあるわけだ。

父は思慮深く、そっと切り出した。

「ただ、お言葉を返すようではあります但彼女、つまり上総の母にあたる僕のパートナーですが、戸籍から外れて以降も家族というつながりを捨てたわけではありません。いわゆる、一般的な家族の形とは異なることは承知しておりますが、それなりに良い関係を続けてきましたし、彼女の判断も息子を見れば確かに正しかったのではないかと思うことが多くあります。同年代の青年たちと比較すると、親馬鹿かもしれませんが身の回りのこともきちんとできますし今後万が一僕の身に何か起きたとしても、おそらく食いつなぐことはできるのではというところまでは育てた自負があります」

「立村くん、君が努力をしていなかったとは決して思わない。君は全力を尽くして上総くんの教育に力を注いできたしその姿は私も身近で見つめてきたからな。だが、やはり何か足りないというの、今回上総くんと接してみて感じたことのひとつではあるよ」

「それは」

「先週のレッスンでも君は感じたはずだよ。上総くんは『モルダウ』のような曲は十分感情入れて弾きこなせたが、『恋はみずいろ』のような純粋な愛情を描くような曲については今ひとつ物足りなさが残った。その感情がまだ育っていないようだよ」

——なんだよそれ、いや、それは違う、絶対違う！

叫びたいのだが、父が上総の反論気配を察したのか手で制する。

「親離れが必要な年頃とは言うけれども、本来必要な時期に無理やり引き離されてしまった以上、どうしてもいびつなものが残ってしまうのは仕方ない。私は決して君のパートナーさんが判断したことをすべて間違っているとは思わない。だが、ずっと密接に毎日顔を合わせて行う教育とその考えとは比較しようがないものなのではと首をひねらざるを得ない」

印條先生は重々しくそこまで語り、コーヒーを口に運んだ。

——ちょっとそれ誤解だって！

印條先生の言葉には思い切り楯突きたい。上総も過去いわゆる母子家庭、父子家庭、もしくは父母揃っていてもいろいろ問題を抱えている家庭の友だちと出会ってきている。立村家のように母の意思によってわけのわからない形で運営されている家族は珍しく、多くは複雑な人間関係のもとに置かれている。印條先生のお言葉通りであれば彼ら、彼女らはみな問題児化していないとまずいような印象があるが、少なくとも上総の知る限りみな自分なりに問題を消化しながら一步一步進んでいる。もちろん見えないこともたくさんあると思うしそれは上総も知らないことだらけかもしれない。だが、母がいらないというだけで自分を「かわいそうな子ども」扱いはされるのはたまったものじゃないと思う。ずっとそばにいらなくても、たまに現れてさんざんこき使われたり

するとしてもそれはそれ、自分にとっては自然なものだった。

——面倒な家庭事情といえば天羽どうしてるのかな、霧島さんもあいつが弟ということいろいろ面倒そうだし、あっそうだ、古川さんのうち結局お父さんっているのかな、いるんだろうな。

思いつく限りの友だちを思い浮かべつつ、心の内で思い切り首を振った。

隣で父はなんとかして反論したように唇を噛んでいる。だがうまい言葉が見つからぬようではある。その隙を突いて、印條先生はお説教を再開した。今度は上総に対してだ。

「上総くん、君は今ひとつピンと来ないだろう？ 君の顔を見ているとだいたい想像はつく。そんなことない、どこが哀れまれる必要あるのか、とでも思っているのだろうね」

——なぜ、そう心を見透かすんだろう。

「自分なりに楽しい日々を送っている自覚もあるだろうし、無理にお母さんがそばにいる必要もない。そう割り切っているだろう。君くらいの年頃であればそれはごく自然なことかもしれない。だがね、君はおそらくだが無意識のうちに母性を求めているはずなんだ。無意識、というところが大切だよ」

「いえ、僕は特にその、なんかその」

言い返そうとするが父に制される。頼むからこれ以上泥沼にするな、といったメッセージと読んだ。印條先生は続けた。

「わからなくていい。なくて普通だったものは与えられるまでその価値がわからないものだ。そしてもうひとつ聞きたいのだけれども、上総くん、君はお父さんがお母さんのいない中、どれだけ孤独だったかを考えたことはあるかい」

「いいえ、特にありません」

よくぞ言った、そう言いたげな父の眼差しで判断が間違っていないことを知る。

「それもまだ気づいていないからだね。君たちは私からするとまだまだ子どもなんだ。立村くんが僕の息子とすると、上総くんは孫にあたる。まだ、あがいていい年頃なんだ。そしてもっと幸せになってもいい、満たされてもいい年頃なんだよ。君だけではなくお父さんもね」

相槌打つにも迷う上総に、印條先生は留めを刺した。

「今日は上総くんもいることだしちょうどいい。先日説明したお嬢さんが昼前ここに立ち寄っていただけると連絡があってね。ぜひ、この機会に食事でもどうかと思うんだよ。家内もすでにポークシチューを煮込んでいてそろそろいい匂いがしてくる頃だ。美味しいものでも召し上がりながら、まっさらな気持ちで語り合うのもよいのではないかな」

「先生、あの、それは申し訳ございませんが！」

目を見開いた父の動揺ぶりたるや、上総の知る限りほとんど見たことのないものだった。激しく首を振り、どもりながら何度も、

「いえ、僕は、今はまだそのようなことは、いえ、先生が僕のことをお気遣いいただいた上でというのは重々承知しておりますがしかし、いえ今その気持ちには、そして息子も」

「いや、そんな固くしく考えなくていいんだよ。最初はお友達という流れでもいいだろう。それ

に上総くんともきっと、話が合うと思うよ。しっかりした、しつけのきちんとしたお嬢さんだしね」

もう父の哀願など全く屁でもないかの如く、優雅に印條先生はいなした。半分絶望の表情を浮かべ頭を抱えた父をちらと見やり、上総も心の準備をした。まだ現実味がないから、少なくとも今は父より落ち着いていられる。まさか、いやまさか。

——どう考えたって、これ、父さんの見合い話だろ？

その十四 印條先生の提案（3）

息子よりも父の動揺が激しく、上総も自分の気持ちを把握する余裕がなかった。

「これからテーブルを支度するので少しここで待ってなさい。上総くん、もう一度ピアノを弾いて見るかな」

「ありがとうございます。お願いします」

印條先生がピアノの蓋を開けていったん部屋から出た後、上総はソファからピアノ前の椅子に移った。じっと前かがみになり父に問いかけてみる。

「どうするつもりなんだよ」

黙っている。畳み掛けるしかない。

「俺もう知らないよ」

「お前にだって関係あることだろう。お母さんと呼ぶかもしれない人なんだぞ」

「そんな人、迎えるつもりなんてないくせに」

「子どものくせに黙ってる」

——こんな時にいきなり子ども扱いかよ。

上総はソファに座ったままの父に背を向け、ピアノの鍵盤に指を置いた。ほぼ暗譜が完了している「恋はみずいろ」を思うがままに弾いてみた。父の言う棒のような弾き方ではないと思いたい。少なくとも自分はまともに表現できたと信じている。弾き終えてからもう一度父に向かい、座ったまま詰問した。

「これ、前から話あったってこと？」

「お前の想像に任せる」

「けど今日の話は、初耳なんだよな。父さん全然そんなこと言ってなかったし、もしそうならとっくの昔に俺をここにおいて脱走してたよな」

「失礼なこと言うな。礼儀というものがあるだろう」

やり取りを続けつつ、上総なりに知りたいことを突き詰めていく。

「けど印條先生話してたよ。父さんに話をしたって」

「それは流れだ、話の綾だ」

「じゃあ聞くけどさ、父さんなんで今回印條先生のところに連れてこようとしたわけ？ こういう裏事情があったかどうかは知らないけどさ。最初別の先生のところに行くはずだったのに」

「大人にはなかなか難しいことも多いんだ。それに結果から言うと先生のおかげでお前も恥をかかずに済みそうじゃないか。それはお父さんに感謝すべきことじゃないのか？」

「感謝は、まあしてる。ありがとう」

認めるべきことはここで認めておく。

「でもさ、いきなり過ぎるだろ。単刀直入に言うところから父さん、その人とお見合いするわけだろ？ しかも子連れで」

「そんな大層なもんじゃない。単純に食事するだけだ。それ以上に何がある」

「そうか、食事だけか。じゃあ食べたあとこれから付き合うとかそういう気はないって考えてい

いんだよな」

「当たり前だろ。うちがどういう家族なのかよくわかってるだろうが！ それと上総、お前も鬼の首獲ったようにいばりくさるなよ。全く、そっちの方は奥手のくせに知ったかぶりするんじゃない」

「別にそんなつもりないけど。父さんの被害妄想だよ絶対に」

「とにかくだ、上総」

父はつかつかと上総の前に立ちはだかり、見下ろした。まさに鬼の形相だった。

「これからどういう話になるかわからないが、まかり間違っても母さんのことを悪口言ったら海に叩き込むからな。もちろん礼儀は守れ。余計なことはしゃべるな。あとは父さんがなんとかする。それとだ」

「まだ要求あるのかよ」

「一番大切なことだぞ。いいか、このことは」

しゃがみこみ、上総の頭に手をかけ、目と目を合わせて睨みつけた。

「口が裂けても母さんには話すなよ」

——これはもう、余計なこと考えなくてもなんとかなるな。

最初から父が初対面の「お嬢さん」なる人によろめくとは一瞬たりとも思っていなかった。なにせあれだけ母に執着している人だ。憎み合って別れたわけではなく、単純に上総の教育のためというわかりやすい理由ゆえの別居。なんとなくだが上総が成人して品山の家を出たら即、よりをもどすような気がしていた。

しかし、他の人たちからするとそんな悠長に構えている問題でもなかったのだろう。現に印條先生は父に向かい、母以外の女性を後添いに勧めようとしている。父も、当然上総も一切望んでいることではないが、一番大切な思春期の息子をおっぼりだして逃げ出した母に対する印象がよくないことは想像の範疇にはある。

しかしだ。

——人間、会って見ないと何が起こるかわからないよな。

一抹の不安が無きにしも非ず。父の好みにぴたりとあったいわゆる母によく似た女性をあてがわれたとしたら。しかも上総とも意外と相性があったりしたら。

——絶対はありえないんだよな。

いや、母タイプの女性は断じて上総の好みにあらずだ。あんな極端な性格の人はこちらからお断りしたい。しかし、父の好みがたまたま上総ともぴたりと合う可能性だってある。偶然がすべてを支配する、が上総の十六年生きてきた真理である。

上総は次に「モルダウの流れ」を弾いた。やはりこちらの曲が自分の波長と合う。

印條先生の奥さんに案内され、覚悟を決めた表情の父に従い食堂へと向かった。

料理の美味しさは折り紙つき。実は、ここに来る楽しみの半分はこのランチにあるのかもしれない。見事に餌付けされている。

「上総くんが喜んでくれるかしらと思ひましてね、昨夜からしっかり煮込みましたのよ」

「ありがとうございます。いただきます」

真っ白い皿に盛りつけられたビーフシチューをひとすくい口にしようとするが父に止められる。これだけ香ばしい空間の中で空腹を耐えろという方が拷問だが、事情が事情だ、しかたなくこらえる。印條先生もきちんとしたスーツに着替えている。ただ事ではない雰囲気漂っている。

「そろそろだね」

「恐れ入ります。あの、お差し支えなければお伺いしたいのですが」

父がおずおずと尋ねた。

「本日ご一緒させていただくお嬢さまは、先生とはどのようなお知り合いで」

当然知りたいことだろう。相手がいないうちに確認したいのも当然だ。印條先生は笑った。

「やはり気になるのかね」

「それはもちろんです」

「気持ちはあると見たが、そういうことなのかな」

「粗忽者ゆえに失礼があつてはと」

——情報、そう言えばほとんどゼロだ。

相手の女性に関しては一切教えてもらっていなかった。お見合いの形式はよくわからないが、一般的イメージだと台紙付きの写真を交換して好意を持てば、というパターンだろう。父の言動からしてそれがありえないとなると、全く未知の状態で接することになる。これは落ち着かない。父に同情するしかない。

「いやいや、心配めさるな。立村くん、紹介などする前にほら、いらしたよ。これからお連れするから、じっくりと語り合うがよい。上総くんもお父さんの未来を思うのなら、ここで笑顔でサポートすべきだな」

——すべき、なのか？

どう見ても父にはノーサンキューのようだが。印條先生と奥さんがふたりでお迎えに上がったところでふたり、顔を見合わせ大きなため息を吐いた。あとはいかにして「お嬢さま」をお迎えすべきか。どうやって失礼なく「ご縁がなかったこと」にすべきか。難しい問題だ。

扉が開いた。父とふたり立ち上がり、反射的に深い礼をした。顔を上げた瞬間自分の目に入った女性が誰かを認識し、全身が凍りついた。

「あ、あの、なぜ」

「上総どうした」

「あ、いや、その」

小声なので気づかれなかったと思いたい。笑顔を向けることはできなかった。その「お嬢さま」はグレイの品良いワンピースを身にまとい、静かな笑みを湛えてふたりを見つめていた。

「紹介するよ。先日お話した、昔の仕事の縁で懇意にしている立村和也くん、そして息子の上総くん。高校一年、君も彼のことはすでにご存知かもしれないね」

——ご存知もなにも、もう、知るだけ知ってるよ、この人。

今度は自分があわくっているのを父の隣で必死にこらえるしかない。まさか、こんなところで

、なぜ。

「申し遅れましたが、私、野々村弓絵と申します。青澗大学附属高校の教師をいたしております。上総くんのはいつも学校で、気にかけておりました。これからもなにとぞ、末永きお付き合いをお願いいたします」

野々村先生……もとい、弓絵さん……は父への挨拶を終えたのち上総に優しく微笑みかけた。

その十四 印條先生の提案（４）

出されたビーフシチューはたぶん香ばしかったのだろうし、味も格別だったのかもしれない。上総にはそのことすら全く感じられなくなっていた。ただ父と野々村先生の向かい合う姿を横目で見ながらひたすら食べまくるのみ。蓄えている、といったほうが近い。

「そうかい、やはり私の思った通りだったよ、なあ」

印條先生は笑顔で奥さんと語りつつ、ふたりを見やる。満足げなその表情、してやったりといったところか。話の流れからしておそらく父は必死に断っていたに違いない。あれだけ露骨に訪問前ぴりぴりしていたのも、今この場面を薄々予想していたかもしれない。悪いがリアルに思い浮かべると再現されるというどこかの説もあるし、これは父の完敗としか言い様がない。

——野々村先生、一体何考えてるんだらう。

時折野々村先生は上総に軽やかな笑みを送ってくれる。何が目的なのかよくわからないのだが、とにかく楽しげなのだ。上総の知る限り「立村」という姓はそうそうあるものではないし、しかも青潟大学附属高校在学中の息子がいる三十代半ばの男性という特定しやすいターゲットにまさか気づいていなかったとは思えない。

——この見合い話、いつ頃から仕組まれてたんだらう。

和気あいあいと父との会話で盛り上がっている中、上総ひとりはひたすら味のしない豪華な食事に没頭しながらひたすら考えるのみだった。大事件だ、一大事だ、どうしよう。

——父さんに話が来たのは先週あたりかな。とすると野々村先生への話も同じくらいか。印條先生は前々からうちの父さんと誰かを見合いさせて結婚させたくてなんなかったのか？ そのくらい気に入られてたってわけか。

今だに印條先生の正体が不明なままだ。父と仕事の関係で付き合いが始まったらしい。だが具体的に何者なのか……たとえば、どこかの有名な社長さんだとか、代議士だとか、密かに名の知られた芸術家なのか……はとんと見当がつかない。

さらに言うならなぜ、野々村先生と印條先生はつながりがあるのだろう。このあたりの事情も今だ話題には上がってこない。まさか、エレクトーンを教えてくれた先生だったとかいうことはないだろう。それとも学校の恩師だとか。

——しかし父さん、礼儀わきまえてるな。

せっかくご相伴しているわけだから、いくら気の乗らない見合いの席であっても軽やかな話題を提供するよう父はつとめている。野々村先生も適度に相槌を打ちつつ穏やかに微笑んでいる。いかにも見合いの席の令嬢といった面持ちだ。学校での教師らしさは感じられない。いや、もともとこの先生は教師という匂いが薄い人なのかもしれない。そんな気がする。二十五歳、ちょうど上総と十歳違い。

「数学を専門になさっていらしたのですか、意外、と言っては失礼かもしれませんが」

「みな、そうおっしゃいます」

——やはりこの先生謎過ぎる。

上総には一生縁がないであろう言葉を、野々村先生はさらりと語る。

「大学でも専門で学ぶつもりでおりましたが、あるとき突然、日本の古典の面白さに気がつきました。どの作品が、というわけではないのですが、数式と日本古来の言葉がイコールに感じられる瞬間がございました。その時に自分の進むべき道を見つけたような気がします」

——あのわけわからない方程式と古文とどこが繋がってるんだろう。

狩野先生もこの辺理解できるのだろうか。少なくとも上総にはついていけない世界ではある。古文が数列で綴られるおぞましい物語だったとしたら……いや、そんな世界で生活することなくて神様ありがとうとひたすら思わざるを得ない。上総は平らげた皿にスプーンを音たてないように静かに置いた。しかしかすかに かすれてしまったのもあって、大人全員からの視線を受けてしまった。まずいまずい。

「立村くんには、今ひとつぴんと来ないかしら」

野々村先生がいたずらっぽく笑いかけた。やはり馬鹿にしているんだろう。いじけたくても引っ込めない。曖昧にごまかす。

「申し訳ありません。僕の勉強不足です」

「そんなことないわ。この場でお伝えするのもなんですが、実は私、上総くんの個人面談担当として夏休みから親しくお話させていただく機会がありますの。そのこともあって、本日はお父様とゆっくりふだんの上総くんの様子を伺えるのではと、楽しみにしてまいりました。先生にはお伝えせずに失礼いたしました」

「なるほど。すでに上総くんと弓絵さんとはお見合いが成立していたというわけだね」

もう、穴に潜りたいっただけ。しかしテーブルの下にしゃがむことすらできない。

「これはまた、改めてお詫びをせねば。不出来な息子で学校のみなさまには多大なご迷惑をおかけしているのは重々承知しております。お恥ずかしい限りです」

少しほっとした表情がよぎったのを上総は見逃さなかった。これは、たぶん、きっと。

「いいえ、そんなおっしゃらないでください。むしろちょうど良い距離で上総くんと知り合えたのもきっと何かの縁かもしれません。ただ、ひとりの生徒としてではなく、独特の感性を持つ人として意識することができて、私、本当に嬉しいんです」

——ちょっと、待て、野々村先生。今、なんかとんでもないこと、誤解招くようなこと口走ってるよ。そんなに自分の見合い相手を持ち上げたいのかよ。悪いけどうちの父さんは俺のことをとことん鼻で笑っているからちっとも効果ないよ。それに、野々村先生ちょっと、絶対、これまじいよ！

「どうしたの？」

また野々村先生がふんわりと微笑む。もうこの人の休日時間に教師のエキ스는ない。

ただひたすら焦る。

——うちの父さんの好みでないことはわかってる。絶対その点は大丈夫だ。今も最低限の礼儀

でもって野々村先生に恥をかかせないよう振舞っているけれど、言い寄られたら露骨に振りたいタイプだよ。野々村先生は。

少なくとも「数列と古文が同じ言葉」という感性にはきっとついていけない。

その他、野々村先生の語る言葉には、隣で聞いている上総も一瞬反応に悩む部分が多々出てくる。第一、上総のことを「独特の感性を持つ人として意識」というのは何を意味しているのだろう。確かに担任ではなかった。個人面接の担当でこれからいろいろお世話になることは理解している。生徒の教育のことも案じて、今回見合い話にかこつけて父と接触しようとしたのだろうか。しかし今日は野々村先生にとってもプライベートタイムだろう。いくら青大附属の教師たちが滅私奉公するタイプの人々が多いことはわかっているけれど、いくらなんでもこの場において、ということは考えにくい。

——いや、何よりもどうするんだよ明日から！

一番恐ろしいのは、あす以降学校でどう振舞えばいいのかという現実的な問題だ。

ここでは「野々村さんのお嬢さんである弓絵さん」で語ってあげればそれですむ。十歳というとかかなり年上ではあるけれども姉弟として通じない年齢でもないしまだ自然に振る舞える。しかし一歩学校に入れば、野々村先生は一年B組の担任でかつ、上総にとっては個人面接担当教師。教師ということは上総の中学時代やらかしたよしなから始まり最近麻生先生から流れてくる鬻蹙物の現在進行形出来事も把握しているに違いない。

さらに言うなら、

——清坂氏の担任なんだよ、この人は！

背筋が寒くなる。美里から毎日の静かなバトルについてはよく聞かされている。えこひいきが凄まじく、外部生である静内菜種ばかりを可愛がり、美里に関しては「男子にうつつを抜かしているふしだらな娘」……美里談……のレッテルを貼っているという。上総からすると確かにこの先生、えこひいきしやすいというか個人の感情に流されやすいタイプなのではと思う。自分がひいき対象にされているからなおさらだ。美里の観察は概ね当たっている。しかし、

——清坂氏の担任、ということは、中学時代俺といろいろあったということも知ってるだろうし、学校でちょくちょく話をしていることも知ってるだろうし。いやもしかしたら清坂氏が不良になったのは俺のせいだとか勝手に想像してたりしないか？

美里が不良化なんてありえないにも程がある。しかし野々村先生の脳内ではそんな展開が繰り広げられているのではないだろうか。同時に、そんな問題児である美里と、なぜか上総とがそれなりの関係だったということを果たしてどう認識しているのだろうか。

——どちらにせよこれ内緒にしないと絶対まずいし、いやこの縁談自体ぶっこわさないとみんなが不幸になるよ。父さんは母さんぞっこんで野々村先生眼中にないし、野々村先生は真面目な人だから下手な振られ方したらきっと傷つくよ。印條先生たちも父さんや野々村先生のこと可愛がってるだろうからくっついてほしいだろうけど、下手にご縁がなかったことにすると人間関係に傷が付きそうだし。それに俺はどうするんだよ。あす以降どうやって野々村先生に挨拶すればいいんだよ。見合いが流れたあとも知らん顔して数学教えてもらえってのか？ 俺はそこまで

鋼の心臓持ってないよ。それに、なによりも。

げに恐ろしきは美里のこと。

——清坂氏にこのことばれたらどうするんだよ。さすがに今回は縁切られるぞ。

その十四 印條先生の提案（5）

おふたりだけでごゆっくり、という見合いの定番時間がやってきて、上総はもう一度印條先生の部屋でピアノレッスンを再開した。一応は「結婚」前提としたお見合いの席でもあるし連れ子にあたる上総がいないところで話し合うべきこともあるのだろう。

——父さん、どう出るつもりなんだろう。

ピアノを弾いている間、頭を離れない疑問。

——絶対タイプじゃないってことは証明されてるんだけど、野々村先生がどう出るかなんだよな。そればかりは全く予想つかないよ。

幸いだったのは、ピアノの特訓中印條先生は一切父たちに関わる話を振ってこず、ひたすら練習に集中してくれたことに尽きる。もし「上総くん、お父さんたちを応援してあげようとは思わないのかね」などと聞かれたらとんでもないこと口走ってしまいそうな気持ちになる。猫かぶりにも限界がある。

——母さんに隠さないと、ことだよな。

おやつ時間に差し掛かり、再度お茶とケーキのもてなしがなされた。上総も再度父たちと合流してケーキにかぶりつくことにした。一般的なショートケーキで、クリームが軽めであっという間に平らげた。

「おふたかた、いかがだったかな。いろいろ楽しんでいらしたようだけでも」

「立村さんにリードしていただいて、心地よい時間を過ごすことができました」

野々村先生のほうから先に発言あり。父も、

「いや、さすが青大附高の先生だけあって、野々村さんは聡明な方ですね」

当たり障りのない感想を述べている。男女の仲に発展する見込みがあるかどうかをうまくごまかしているように、上総には聞こえる。印條先生は特にこだわることなく紅茶のおかわりを勧めた。

「先生、ひとつお願いしたいことがございますが、よろしいですか」

二杯目の紅茶に手を付ける前に、野々村先生が涼やかな表情で提案をした。

「できれば、少しお時間をいただいて、上総くんとお話をさせていただきたいのですがよろしいでしょうか」

父の表情が一瞬こわばったように見えた。すぐに間に入った。まずいと思ったに違いない。

「いえ、息子とは学校でいろいろお世話になっているようですし」

——父さん説得力ない言い訳だよそれだと。

上総がはらはらしているのも顧みず、父は懸命に野々村先生の提案に反対しようとしている。しかし無駄だ。すでに印條先生と奥さんにもこやかに許可を出している。

「それはいい考えだ。上総くんも、まさに当人同士と考えるべきだからね」

——確かに当人だけどさ。本当にわかんない、この先生、俺には未知すぎる。

もう流れに従うしかなかった。唯一救われたのは、父が野々村先生に惚れているような気配を

一切感じさせなかったことだった。身内だからと勝手に思い込ませていただくと、絶対にこの展開は「ご縁がなかった」ことになるはずだ。信じている。

上総がそんなことを思いつつも静々と野々村先生とテラスに出た時、海辺から吹き付ける風は午前中よりも和らいでいた。日が照りつけてきたようだ。

「このくらいのお天気がちょうどいいわね」

「はい」

隣で目の前に広がるさまざまな木々を眺め、緑色とかすかに黄色みがかかった色が混じり合っている様子に目を留めた。紅葉も近いだろう。

「ところで立村くん、今日は驚いたでしょう？」

いきなり直球で切り込んできた。文系の情緒と理系の切れ味、両方を持つ人だ。慌てて答える。

「もちろんです。まさか、野々村先生が」

父の見合い相手だったなんて、と答えるべきところか迷い、言葉をとどめた。

「私もお話を先生からいただいた時は驚きました。まさか立村くんのお父さまとこういった形でお目にかかることになるとは思いませんでしたしね」

「でも、僕の父であることはいつ頃に」

上総の予想通りの答えを返してくれた。

「青大附高に通っている息子さんがいらっしゃると伺ったので、すぐに気がつきました」

「では、なぜ」

確認したいのはやまやまだが、卒業するまでの三年間は「教師」と「生徒」としてお世話にならなくてはならない。うっかり妙なことを口走りたくはない。

野々村先生はテラスの椅子に腰掛けた。上総を誘った。向かい合って座る。学校の机と椅子ではないがほとんど気分は個人面談と変わらない。緊張が走る。

「立村くんと接するようになってから、ご家庭の教育方針なども含めて一度ご両親とお話しさせていただければ、とは常々考えていたことは確かです。そのことはきちんとお父さまに伝えてあります」

テーブルには何も並んでいない。風だけがそよぐ。

「目的は別のものでしたけれども、今回私はあえて利用させていただいたというのが本当のところですよ。でも、誤解しないでほしいの。ゆっくりお父さまとお話しさせていただいて、お互いよいお友だちになれるのではという実感を得られたのも事実なんです」

「誤解しようが、ないのではないですか」

やはり理系感覚が染み付いている人の思考回路にはついていけない。どうやら野々村先生は父を最初から「ご縁がなかったこと」にしたらしい。確認ができてほっとしているのは実は上総の方だ。しかし、それだけで終わりそうもない、残響音のようなものはなんなのだろう。

野々村先生はずっと上総と真正面に向かい、いつぞやの個人面談と同じ雰囲気やさしく語り

かけた。上総も身体を堅くして受け付ける。

「安心してほしいの。私は立村くんのお父さまと現在のお互いの状況について情報交換をしただけ。決してここから先、ご家族の生活を乱すようなことは考えていません。たぶん、心配だったかもしれないけれども、そのことだけは約束します。ただ私が今日先生のもとにお伺いしたのは、最初にお伝えした別の目的があったからなの。立村くんの学校生活についてもっと、深く、何かよい手助けができないかどうかを考えていたからなの」

「先生、大丈夫です、学校で十分それはしていただいていますから」

「いいえ、違うの。学校側では限界があります。私は青大附高の教師ではありますが、立村くんの担任ではない以上、口を出せないこともたくさんあります。でも、仮に私とお父さまとが『お友だち』だとするといかがでしょう？」

「お友だち、ですか」

ますますわからない。だんだん自分が瀬戸際に追い詰められていることだけは確かだ。

「そう、お友だちだったとしたら当然家族の話に触れることもあるでしょうし、お友だちの息子さんである上総くんにも接することだってきっとあるでしょう。職業柄機密事項を漏らすことはしませんが、そんなことがなくても十分、お友だちとして理解しあえることはたくさんあるはずですよ」

「先生、その『友だち』って、つまり、父と、ということですか」

——つまり何か？ 野々村先生はもしかして父さんと「お友だちから始めましょう」というのりで付き合おうとしてるのか？ ってことはどちらにしても将来何かあるって可能性あるのかよ。うちの母さんのことも知ってるのかよ？

「そうよ。だってお父さまにはあなたのお母さまがいらっしゃるわけですし、私としてはお友だちになるのが自然でしょう？」

——母さんの話も、もう通ってるってわけかよ？ じゃあなんで？

上総の思惑を知ってか知らずか、野々村先生は学校で決して見せない愛らしい微笑みを浮かべた。

「これから学校の外でお会いする時には、上総くんと呼ばせてもらっていいかしら？ それと、私のことは学校以外では先生と呼ばず、『弓絵さん』と呼んでいただけるとうれしいわ」

——俺が名前と呼ばれることを死ぬほど嫌ってるってことは、きっと知らないんだろうな。

もう運命と思って諦めるしかない。諦念の中、上総は答えた。

「学校以外であれば、お任せします」

——弓絵さん、って呼ぶのか、これから。どうすればいいんだろう。

その十五 家族団欒（1）

帰りの車中でも父の表情は険しいままだった。

「父さん、どうするつもりなんだよ」

全く無視のまま。上総は助手席のシートベルトを合わせながらしつこく尋ねた。

「なんではっきり断らなかつたんだよ」

「しょうがないだろう。お前と縁のある先生なんだから」

「それとこれとは別だろ」

父がなぜそんな曖昧な言い方でごまかしたのか、上総にとっては謎だった。本来なら一言「ご縁がなかった」の一言で終わるはずなのに、だ。

「父さんああいうタイプ苦手だろ」

「親にそれ言うか」

「だってしょうがないだろ」

「それよりお前は一体、野々村先生と何話をしてたんだ」

やはり気になるのだろう。車窓から見えるどろどろの海を眺めながら上総は答えた。

「教える気なんてない。それなりにプライベートだし」

「まさか、母さんのことなど言わなかつただろうな」

「そこまで常識知らずじゃないよ」

野々村先生の話からすると、いわゆる結婚を目的としたお付き合いには発展しなかつたという認識でいいのだろう。ただ、上総とのつながり……まあ、個人面談の担当教師でもあるし……も考えて「お友だち」から始めることで決まったらしい。露骨に振って上総に野々村先生から嫌がらせされるのではという不安もあったのかもしれない。

——まあ、わかるけどさ。けど俺も明日からどうすればいいんだよ。

印條先生もご機嫌よさげに、

「まだまだお互い知り合う必要があるよ。これから少しずつ話し合うといい」

と、仲人らしい言葉を発しておられた。上総にとって一番肝心な問題は、今後ピアノを印條先生のもとで続けられるのかという点なのだが、そこには結局行きつかなかつた。

「どうなんだ、正直なところあの先生はお前から見て」

「いい先生だと思う。生徒間での相性はいろいろあるし意見は分かれているかもしれないけど」

無難な答えを返した。父はハンドルを青潟市街地に切った。

「担任でないから詳しいことはわからないか」

「国語の先生だけどうちのクラスは受け持ってないからどのくらいのレベルかもわからないよ。ただ数学が得意だったのが何考えたのかいきなりうちの大学の国文科に入って教師になったってことは、別ルートから聞いている」

「父さんも確認した。ご本人からな」

たぶん野々村先生に関する情報は上総も父もほぼ同じ内容の気がしてきた。となると上総なりに知りたいことをもっと引っ張っていくことにする。

「野々村先生が話してたけど、父さん、うちの母さんの事情も話したのかな」

「もちろんだ。父さんひとりでお前を産んだわけじゃないからな」

ものすごくグロテスクな言葉だが、あえて知らんぷりをする。

「今でもしょっちゅう行き来してるとか、ほとんど家族ってことも話してるんだろ」

「当たり前だ。立村家で誤解されやすい内容は逐一丁寧に説明済みだ」

慣れている、さすがだ。

「それならもう断ったも同然、だよな？ そうだろ？」

かすかな希望を持って再度尋ねる。

「母さんのことはわかっているんだったら、そもそも縁談成り立たないだろ。父さん、そのことは信じていいんだよな？」

「上総、そう急くな」

父はため息をついてカーステレオのボタンを押した。サンバのリズムが流れてきた。父の好みとは違う。なぜテープを持っているのかが謎ではある。

「父さんも今、一番いい方法を考えているんだ。少し黙ってろ」

——黙ってろって言われてもさ。

印條先生とのつながりもあってすぐに「ご縁がなかったこと」にはできない以上、カモフラージュのような形で付き合わざるを得ないのだろう。野々村先生もなんとなくそんなことを匂わせていた。一応は「お友だち」づきあいから始まり、上総が卒業することに自然にフェードアウトさせていきたい、そう考えているのかもしれない。

——けどそんな都合よく行くかよ。

野々村先生に関しては、父に興味があるかどうかまでは把握できなかったにしても、上総に対してはずいぶん積極的に接してくる。さすがに「上総くんと呼ぶわ」には腰を抜かす程驚いたが、父の友だちの女性として割り切るよう思考回路を変えることで乗り切ろうと覚悟はしている。

——けど、ほんとどうしよう、清坂氏にばれたら。

一番恐れている点。何も悪いことをしているわけではないし、上総はむしろ巻き込まれているだけだ。しかしすでに野々村先生からひいきのターゲットになっているのではと噂が出ている以上、これ以上の展開があると上総も身が持たない。おそらく美里は激怒するだろうし、上総とも友だちとしての縁を切りたがるかもしれない。自分の敵に通じている友だちなんて一番信用できない奴じゃないかとも思う。

——どうすれば一番丸く収まるんだろう。

「そうだ、上総」

突然父が大きな声で叫んだ。車の中は窓がしまっているから外には聞こえない。

「なにかいいこと思いついたの」

「ああ、そうだ。これから久しぶりに家族で食事しないか？」

「家族って誰だよ。俺と父さんと」

「もちろん母さんだ」

——母さんに内緒にしろって言ったのどこのどいつだよ。

上総が密かにあきれているのも気づかず、父は意気揚々と告げた。

「これから公衆電話で母さんに連絡を入れるから待ってなさい。都合がよければ車で拾っていきましょう。それとだ、上総、これから母さんが乗り込んで来る前に、ひとつ作戦会議をしようか」

「作戦会議って、大げさだな」

「いや、今回はさすがに大ごとだからな。念には念を入れて準備をせねばならないだろ」

よくわけのわからないことを父は述べたのち、

「これから野々村先生はうちにしっかり関わってくるおつもりだし、それなら母さんにも紹介する必要があるだろう？ 母さんはお前の親なんだからそれは自然だろう？」

「まあ、そうだけど。でも担任じゃないし」

麻生先生に裏で通じていることについては恨みしかないが担任である以上連絡し合うのは当然だと思う。しかし野々村先生はB組の担任のはずなのだ。

「だからだ。担任でもない先生が関わってくるということであれば、なおのこと母さんだってお前の将来のことも含めて先生に相談したいだろう？ 当然の考えじゃないか」

「父さん、悪いけどそれ、母さんの考えを想像しているだけであって、確認してないだろ」

冷静につっこみたい。信号が変わりすいすい道路を走っていく中、父のテンションは上がる一方。止めようがない。

「お前よりは母さんの思考回路理解しているつもりだがな。とにかく、これから母さんに電話をかけて、何時頃だったら都合がいかを確認しよう。今日は日曜だし母さんも仕事、暇だろう」

「いや、ものすごく今忙しいと思う」

上総はあっさり答えた。

「発表会関係はたいてい日曜だし、母さんまたその手伝いに出てるよきっと。青澗にいないかもしれないし」

聞いちゃいなかった。父はコンビニを見つけて駐車場につけると、駆け足で緑色の電話に駆け寄っていった。遠目から見て、父が早くテレホンカードを差し込んでいるのがわかる。

——何考えてるんだろ。母さんに話すなんて、暴挙だよ、絶対に。

その十五 家族団欒（2）

——どうか母さん旅行してますように、出張してますように、とにかくうちにいませんように。

父が何を考えているかはさておいて、上総は全力でそれだけ祈っていた。

——このままだとなんとなくとんでもないことになりそうな気がする。

何が、というわけではない。野々村先生の予期せぬ登場も絡んで父が頭を抱えているのはよくわかる。なんとかしなくてはならない事情というのも理解している。しかし、そこでなぜ母をわざわざ呼び出す必要があるのだろう。

——父さんのほうだろ、絶対に母さんには言うな、内緒にしろってしつこいくらい箝口令出したくせに今度は自分の方から連絡するわけか。陰でどういうやり取りしてるかはあえて聞かないけどさ、もう何があっても知らないからな。

と、言えない。一番関わっているのは上総なのだから。上総は楽譜を鞆にしまい直した。あの、羽飛と美里のハンズメイドノートと共に。

コンビニから帰ってきた時の、父の笑顔にすべては終わったと感じた。

「よかったよ、母さん今日は家にいる。すぐ来いと言われたよ」

「仕事今日なかったんだ」

万事休す。上総の願いは叶えられそうもない。もはや転がる石の加速は止まらない。車に乗り込みふかし始めた父に尋ねると、

「運良くな。こういうことはめったにない。母さんの部屋に行くのも久しぶりだし、ゆっくりお茶でも飲むとするか」

——そんなのどかな環境かよ。

母のアパートにはしょっちゅう足を運んでいる。父がついてくることはほとんどなく、たいてい上総ひとりで立ち寄るのみ。部屋の掃除をひとしきり手伝わされたり、荷物運びや大道具・小道具作りにひっぱられたりと体よくこき使われている。

「父さんは母さんの部屋行くことあるの」

「ないな。用事があると母さんの方からいつもうちに来てくれるからその必要がない」

まあ、一応は別れた亭主なのだから、元妻の家を訪れるなんてことは一般的によい感情で見られるものではない。上総もそのあたりは理解しているつもりでいる。

「じゃあ父さん、玄関で待ってるつもりなのかな」

「いやそんなことはない。何も入るなと言われたわけじゃない」

もう父は母のアパートに足を踏み入れてくつろぎたい気持ちで満ち溢れている。断られることは十中八九ないとは思う。でなかったら呼ばないだろう。しかし、あの母のこと、何を考えているかわからない。平気で父を玄関口に座らせたまま、ひとりで紅茶を飲んでいる姿だって余裕で想像できてしまうのだ。

久々に母と会えるのが相当嬉しいのか、スピードも制限速度ぎりぎりまで上げて走っている。母のアパートは青潟市街のど真ん中。家賃はできるだけかけたくないある程度の広さは欲しい、という母のわがママが通った二階建ての木造建物だった。茶色くペンキで見栄えよくしてある。「それにしてもいつもながらすごい家だな」

車を目の前の駐車場につけ、すぐに降りた。特に作戦会議のような会話もなかったのが気になるが父なりに考えるところはあるのだろう。

「父さん」

「なんだ」

「今日、特に母さんに話してはいけないことってないかな」

「お前もある程度はわかってるだろ。あの先生たちのことは内緒だ。あとは父さんがなんとか説明する。絶対下手なことを言うなよ。まあ母さんのことだからお見通しかもしれないがやれることはやるんだぞ」

「それ、よくわかんないな」

あれこれ話しながら鉄筋の階段を登る。まだ青い落ち葉が一枚張り付いている。錆び付いた階段を昇り最奥の部屋に進んだ。ブザーを父が鳴らす。

すぐに開いた。母が髪の毛を軽くたばにしたすっぴんの状態で戸を開けた。二人の顔を見やり、

「どうしたのよいきなり。ほら、入って」

いつものようにつつとんげんに上総たちを迎えた。

「いきなり悪かったな。休みだったのか」

「そうなのよ、珍しく今日はフリーなの」

母はまだ部屋の中で半袖の紺ワンピース一枚で過ごしていた。久々に入る母の部屋は小奇麗で片付いてはいるのだが、調度品から何から何まで実にシンプルすぎる。殺風景といった方がいい。いわゆる華やいだ雰囲気というのがないとは言わないが最小限で、玄関に飾る花もない。そのまま部屋に入るとそこにはカーテンを作り替えたであろうベットカバーに覆われた折りたたみベッドが潜んでいた。こたつテーブルが真ん中にでかでかと居座っている。テレビはない。その代わり小さなラジカセとレコードプレーヤーがセッティングされていた。

「随分ものを減らしたね」

「そうね、実家にだいぶ送ったから。必要だったら送ってもらってるわよ。和服はほとんどそんな感じ。でないとタンスにうもれてしまうから」

たわいもない話を両親交わしている。とりあえず父も部屋に入れてもらえたところで、出された麦茶をそのまままずは飲むことにする。母が箱ごと菓子を持ってきて、

「この前手伝いにいった会の蒔物でもらったバウンドケーキがあるし、それでも食べる？」

遠慮なく箱から取り出し、ナイフで切り分けた。ざっくりと三等分。大きい方はもちろん母が、次に父が、上総が一番小さい分をもらうことにした。これもいつもの立村家のルールだ。

しばらく団欒らしき穏やかな雰囲気に包まれ、それぞれケーキを平らげて夕暮れ色が窓から差

し込んできた頃、父はおもむろに切り出した。

「ところで、沙名子さん」

父はいつも母を「さん」付で呼ぶ。もちろん返す母も、

「なんでしょう、和也くん」

「くん」付で返す。正直、子どもの前でしていいのかが迷うところだが日常である以上しょうがない。

「あんたたち男ふたりが雁首そろえていきなりうちに来るなんて言い出すんだから、何かあるんだろうなくらいは思っていたわよ」

「さすがですな、沙名子さん」

父は両手を組み、こたつテーブルの上に乗せた。足は伸ばしたままだ。上総だけ無意識に正座している。これも癖だ。母の前ではくつろぐのがまだ苦手だ。

「実は、沙名子さんに頼みがあるんだ」

「なあに、早く言いなさいよ」

じれったげにテーブルを指で叩く母に、父はいつもののんびり調子で告げた。

「今週だけ上総の、ピアノの練習を見てやってもらえないかな。実はこいつ、学校の合唱コンクールでなぜか伴奏を引き受ける羽目になってしまい、今いろんな先生の手助けをしてもらってなんとか形になるところまできたんだよ。ただ、どうもな、ひとつ突き抜けないんだよ」

——ちょっと待てよ、父さん、まさかこんなところで何また。

あれだけやめてくれと頼んだはずなのに、父の考えは全く読めない。はっと頭が熱くなるのを覚えた。何ふざけたこと言い出すんだらう？ もう印條先生の手も借りてだいが仕上がったと褒めてもらったばかりだというのに、何をいきなり？ まさかそれが、父の計画だったのか？ でも何が目的で？

母の反応は予想通りだった。目を見開き、まじまじと上総を見つめながら、

「合唱コンクールの伴奏？ 上総、あんたが？」

——母さんそうすっとんきょうな声出さなくたっていいだろ！

「父さんの言う通り」

なぜこんなところで父の思惑が読み取れず、ただ母の反応は予想通り。上総は頷き、改めて正座の形を作り直した。

「クラスにピアノ弾ける子いなかったの？」

「いたけどいろんな事情で担当できなくて、俺にお鉢が回ってきた」

混乱している頭の中を気取られぬよう、少しぼんやりした感じで答えてみた。

「曲は？」

「自由曲が『モルダウの流れ』、課題曲が『恋はみずいろ』」

「それ、課題曲と自由曲逆じゃないの？ なんなのその選曲誰が決めたの」

「学校の先生たち。みんなそれ言うけど、正真正銘この順番」

母が額に手をあて、深いため息を吐いた。父を睨むようにして、恨み言をば。

「なんで和也くん、もっと早くそれ言ってくれなかったのよ。本番いつ」

「金曜日。校外の人には公開しない形式だから、学校の中だけで終わる。父さんいうほど大きさじゃないよ」

「上総、あんたもうほんっと、なんにもわかってないのね」

この馬鹿息子！くらい罵倒されるかと思っていたが、母にはおとなしい反応だった。

「詳しい話、聞かせてちょうだい。今日どうせ車でしょ。夕御飯も一緒に食べましょう」

その十五 家族団欒（3）

——父さんががなぜ、「合唱コンクールの伴奏」という切り札を出したのか。

母に半ば襟首掴まれるような形で台所に引き摺られ押し込められ、ひとり真っ赤なナポリタンを作らされるはめと相成った。締め切られた母の部屋にて父がどういふ話をしているのかは知るよしもなく、上総は三人分のパスタを茹で上げた。さあこれから今度は手のついていないケチャップの蓋を開ける。

換気扇を回しトマトとひき肉の匂いが立ち込める空気を入れ替える。それにしてもなんで母はこんなシンプルイズベストの環境で満足できているのだろう。最低限の料理道具しかないのはなんでだろう。品山のうちの方がはるかに手の込んだ道具だらけなのだが。

——やっぱり、未練なんだろうな。

たっぷりこしらえたトマトソースに麺を合わせからめている間、上総は扉の向こうにいる両親の心理を読むべく耳を澄ませた。全く声が聞こえてこないところみると内緒話か、どちらにしても上総には聞かれたくない話をしているに違いない。それなら上総も出来立てのパスタの前でのんびり自分なりの推理を組み立てさせていただく。

——しょっちゅううちに来ているとかいっても所詮は別れた夫婦だからな、うちの両親は。たぶん、印條先生のように母さんのことを悪く言う人とかに父さんもいらいらしてただろうし、なにより母さん自身の身勝手な行動に頭に来てたのがまとめてどんときたんだろうな。

野々村先生と父の並んだ姿を思い出して見る。似合わない、絶対に。

——印條先生も父さんがあの先生に合うって本当に思っていたんだろうか。穏やかで優しい人のほうが父さんも幸せだと思ったんだろうか。ついでに俺も母さんいなくて寂しいから母性愛がもらえて嬉しいとか考えたんだろうか。なんだか完全に誤解されてるけど、うちの父さんはあの母さんのようなわけわからないきつい性格でないとどうしてもいやなんだよ。俺も疑問だらけだったから周りで考えることはよくわかる。

——それに、野々村先生も清坂氏が言う程いやな性格だとは思わないけど、でも十歳ったら兄弟姉妹でも全くない年差じゃないだろ？ 姉と言っても通じるよな。お互いにそれ、嫌だと思おうよ。少なくとも俺は全力で逃げる。

野々村先生の性格についてはあえて何も触れないことにする。そこまでよく知らない。頼むから名前と呼ぶなんてことはやめてほしいけれども避けられない以上覚悟するしかない。ただどうやって父はこの修羅場を乗り切るつもりなのだろうか。まずは様子見るしかない。

「誰か、戸、開けて」

木製のお盆に二人分の皿を載せて中のふたりに声をかけた。開けてくれたのはやはり父だった。

「ちょうどいい時間だな。父さんの分はどれだ」

「どれでもいいよ、早く運んで」

父がこまこまと皿を並べる。一方母は手帳を広げてなにやら真剣に考え込んでいる。せっかくのナポリタンも興味がなさそうだ。別に冷めた状態で食べるのは構わないのだが、あとでまずいとかなんとか罵倒されるのだけは避けたい。

「悪いけど、俺の分持ってきたらさっさと食べるから」

断っておいた。母の機嫌を取るのは父に任せることにする。飲み物があるかどうかみたら、ミネラルウォーターと麦茶ポット、牛乳パックが入っていた。迷ったが麦茶と牛乳をそれぞれ用意した。

「上総、悪いけど紅茶入れてくれる」

「食べてからでいいだろ。麦茶で我慢しろよな」

無視してもいいがあとでうるさいのでティーポットで沸かす。父が見かねたのか立ち上がり、「お前早く食べたいだろ。父さんがやるから座ってなさい」

無理やり部屋に座らされた。母と二人。露骨に嫌な予感がする。

「いただきます」

さっさと手を合わせて食べ始めることにする。出来はまあまあだと思う。母も口をつけながら、手帳から目をはなさない。普段の母にしてはマナー違反の行動ではあるが注意などしない。自分に火の粉がかかるのは避けたい。

「上総、確認したいことがあるのだけど」

「何か」

きた、とうとう母の尋問が始まった。一気に平らげて父の入れてくれた紅茶……見た感じスーパーの特売品としか思えないティーパックだったが味は正直どうでもいい。

「さっき和也くんから聞いた話だけど、あんたうちでピアノ練習しているそうね」

「クラスの人からキーボード借りて弾いてる」

「それだけで間に合ってるの？」

「そのほか、学校の音楽室でピアノ使える時に弾いてる」

「それなりに弾けるようにはなったと聞いたけど、この前の夏休みに練習した『エリーゼのために』くらいは、どうなの」

「よくわかんないけど、音楽の授業で『エリーゼのために』は弾いたよ。それで、俺に決まったようなものだし」

「あんたのレベルで間に合うような合唱コンクールってあるのかしら」

母は不思議そうにつぶやきつつ、だいぶ覚めたナポリタンをフォークに巻きつけた。味に文句を言わないところを見ると、まずは合格点なのだろう。胸、なでおろす。

「和也くんの感想だと、あんたの弾き方には感情がないそうなんだけど、自分ではそのところどう思ってるの」

「棒のように抑揚がないってことだろ。認めてる」

「クラスの子たちと合わせたりはしたの」

「もう練習始めてる。指揮者とかクラスのまとめ役の人が頑張っているからなんとかかなると思う」

「あんだ、ほんとのんきねえ。あんなに練習の時は露骨に嫌がってたくせに、自分で伴奏に立候補するなんてどういう風の吹き回しかしら」

「クラスに協力しただけだけど、なにか」

しばらく淡白なやり取りを続けていたが、母は突然きっぱりと、

「わかったわ。それなら上総、明日学校何時に戻る予定？」

質問した。背中がぞわりとする。来るものがとうとう来た。避けたいので逃げる。

「遅いと思う。クラスの人たちと練習するし、俺も音楽室が閉まるまで稽古してるから、夜六時か七時」

それまでしばらく黙っていた父が、余計な口をはさんだ。

「そこまで遅くならないだろう。自転車でだと六時前到着か」

「そういうことね。了解」

父に目配せした後、母はとうとう一番恐れていた言葉を放った。

「金曜まで品山に泊まるつもりだから、そのつもりでいなさいよ」

「なぜ？」

間抜けな質問だとはわかっている。どつぼにはまったこともわかっている。あきれ果てたように、母はまた父と顔を見合わせつつ答えた。

「プロ並みにお上手なお嬢さんたちの中にあんだみたいなあぶなっかしい弾き手が混じってたら、クラスのみなさんが恥をかくわけよ。全く身の程知らずっただけでもないけどそのやる気は認めるわよ。あんだもそれなりの覚悟を持っているわけなら、私の多少の指導は許されるわけよね、わかるしょ、上総」

——許されないって！

食べ終えたあとのナポリタンが胃に持たれてきた。いい油使ってないからかもしれない。上総は紅茶を口に運びつつ、ぼんやりと五本指で数えた。」

——月・火・水・木・金、五日間か。

ひとりのうのうと、すっかり冷め切ったパスタを美味しそうに食べている父を上総は恨みをいっぱいためて睨みつけてやった。結局目的は、母を連れ込む、そこに尽きるというわけか。目的のためには息子も利用する、そういう父なのだから。

その十五 家族団欒（４）

止めることは最初から諦めていた。父を急かして家に戻り上総がまずしたのは部屋の掃除だった。しばらく母がご無沙汰だったこともありかなり家事は手抜きしていた。父も文句を言わなかったし男所帯の気楽さで多少散らかしっぱなしのところもあり。しかしながら今はそんなこと言われるわけもなく、ただひたすら生ゴミやら古新聞の整理やらでてんてこ舞いだった。

父は手をこまねているのみ。しばらく上総の働く様子を見つめていたがやがて自分の書斎に戻った。やはり罪悪感あるのかもしれない。当然だ、反省しろ、そう言いたい。

——要するに母さんをうちに呼び寄せる機会がほしかっただけだろ。ああいう見え見えなことやらかしてそれにひっかかる母さんもなんだろう。さっさと交わして無視してくればいいのにさ。もう合唱コンクールまで一週間もないんだし、別に母さんの特訓なんかなくたって平気なんだから。俺のピアノの腕なんてたかがしれてるんだから、そんなこと気にしないでのんびりやればいだけだっただけなのに。何いきなり。

明日、月曜の夜あたりに荷物持ってやってくるであろう。せめて朝ごはんくらいは担当してもらえるとありがたい。こちらだってピアノの練習ばかりやっているわけではないし、さすがにそろそろ勉強もやっておかないとまずい。その他いろいろ考えることもある。風呂に入ったらさっさと自分の部屋にこもって、キーボードに電源を入れるとしよう。そうだ、忘れていたがキーボードを返す時、こずえに何かお礼の品を用意しないとなるまい。女子だしやはりお菓子がいいか。そのあたりこずえと親友の美里に確認するのが一番よさそうだ。

——いや、清坂氏はちょっとな。

明日から何事もなかった顔で野々村先生と接しなくてはならない身の上、美里の鋭い追求をどうやって誤魔化せばいいだろう。羽飛にも当然話せやしない。いや、青大附属関係者には口が裂けても言ってはいけないことばかりだ。

台所の床ぶきを念入りに行い、牛乳を一杯コップに汲んで飲み干した時だった。

車の気配、家の前に停まる気配、少し間があり玄関の呼び鈴が鳴る。

壁にかかっている時計を眺める。午後十時半。

——まさか。

嫌な予感がまさに的中する瞬間。

——本気かよ。

上総が玄関に向かう前に父が飛び出していた。玄関の鍵を開け、晴れ晴れとした声で呼びかけていた。

「沙名子さん、待ってたよ」

「悪いんだけどちょっと車の荷物運ぶの手伝ってもらえる？」

男ふたりに対し、髪の毛をまとめていかにも外出するような格好で現れた母は、
「なんで来たの？」

上総の質問も無視し、すぐに後部座席を指差した。

「あんたはそこに置いてあるものを運んでちょうだい。あんたの部屋に今すぐ」

続けて父には、

「この荷物は着替えだから私の部屋ね。今日はそれほど荷物ないから楽だわ」

トランクを一抱え運ばせている。ほとんどじいや扱いされている哀れな父の様子見しながら上総は言われた通り車の後部ドアを開けた。座席を覆うばかりの巨大な長いダンボールで埋め尽くされているのに息を呑むが取り急ぎ引っ張り出す。どうやって母はこの大荷物を押し込んだのかが理解不能だし、さらに自分の部屋に持っていかねばならないというのがさらにわけわからない。

力仕事が一段落した後、上総はふたたび家族団欒を楽しんでいる両親の様子をのぞきに行った。予定では明日からのはずだったが、もう母は前倒しで始める気まんまんだ。その気まぐれさがいつものことと言われればそれまでだが、振り回せるこちらの身にもなってほしいと思う。とりあえず、部屋を掃除しておいたのは正しかった。これしかない。

「上総、さっきの荷物だけど荷解きした？」

「まさか、あんな大きな荷物どうしろって。部屋狭くなるよ」

「どちらにせよあんたは私に感謝することになるから、早く部屋に戻ってダンボール開けてきなさい。それから改めて私に何か文句があれば言いに来なさい、いいわね」

——なんだよ偉そうに。

今の上総の部屋は、こずえからかりたキーボードもあってかなりものが増えつつある。あまりものがない環境のほうが好きなだけに、また余計なものを押し込まれるのは勘弁してほしい。取り急ぎ部屋に戻り、中を確認することにした。確認して明らかに迷惑千万な代物と確認ができれば、即、居間に戻って文句をたらたらぶつけることができるわけだ。ガムテープでしっかり留められたダンボールをハサミの先使って切り開いていった。

開いてみて、我が目を疑う。

——これ、もしかして。

詰め物もなにもない、ただまるのまま押し込まれているのみ。黒と白の鍵盤がそのまま顔を出している。少し使い古されているようだが綺麗に磨き上げられている。その下に用意されているのは組立式の設置台。ちらっと見た感じだとかなり奥深く押し込まれている。ハサミを机において、改めてひとつずつ取り出してみる。パーツをひとつひとつ、並べてみる。鍵盤をじっと見やる。こずえから借りたキーボード楽器とは違い特段何かの機能がついているわけではないが、鍵盤の数が格段多いことだけはわかった。組立説明書を広げてみて、「電子ピアノ」の文字を目にして初めて理解した。

——電子ピアノ、ってこれ、もしかして、母さんが？

組み立てるのもほどほどにして居間にかえ戻った。頭の中が真っ白くなり、次に曲が流れ、次に揺れる。

居間でのんびりお茶を飲みながら語らっている両親を目の前に、何を口にすべきか迷った。出てこなかった。母の悠々たる笑みにすべてが手の上で転がされているだけと知る。

「母さん、あのさ、あれ」

「そういうことよ」

また父に微笑みかけ、ゆっくり足を組み直す。

「どうして、あれを」

「まずお礼くらい言いなさい。それからよ、こちらに来なさい、説明するから」

「ありがとうございます」

反射的に礼をいう。なんだか心がこもっていないような口調になってしまったが、母は特に気にするでもなく上総をソファのひとり席に座らせた。父も満足げにうなづいている。どうやら確信犯と見た。

「あんたたちが帰ってから知り合いの方に連絡してみたら、お嫁に行ったお嬢さんの古い電子ピアノが残っているという話を聞いたのよ。偶然だけど面白いわね。もうすでに本物のグランドピアノに買い換えたのでお役御免だったみたい。場所塞ぎでもあるし粗大ゴミで出すよりは気持ちも楽だからということですからすべてもらってきたわよ」

「けど、そんないきなりなんで」

「あんたもなんでなんでってしつこく問い詰めるのやめなさい。まあこれもそうね、いろいろお付き合いがあるとその流れでいろいろな情報が入るのよ。私もまさか、あんたのためにピアノ買う羽目になるとは思っていなかったけど、私もまああればあったで弾くこともできるし。本物のピアノとは音も響きも全然違うけど、ないよりはましじゃないの？ ちょうどあんたの誕生日プレゼントにもなるしね」

父が口を挟んだ。立ち上がりながら、

「組み立て、手伝うか。明日から練習厳しいぞ。今日のところはゆっくり寝て、これから四日間のしごきに耐えて、まあ頑張ることだな。父さんも夜食を作るくらいは協力するからな」

上総の部屋にそのまま向かう。追いかけてようとして、上総も立ち上がった。やはりこれは何か言わねばならない。言うべきだ。

「母さん」

じっと見つめた。ふっと力が抜けたような表情をしている母に、上総は深く礼をした。

「すぐ弾くから。ありがとう」

返事を待たず、すぐに背を向けた。組み立てて、一刻も早くその音色を聴きたかった。鍵盤を重ね押しした時の響きを確認したかった。

その十六 かしましき隣組（1）

次の朝は母から逃げ出すように学校へ向かい自転車を漕いだ。下手したら早朝から練習させられるかもしれないがそんな近所迷惑になることなんてしたくない。さっさとコーンフレークをかきこんで、まだ母が寝ている間に飛び出した。

寝る前に軽く弾いて見たが、やはりこずえの貸してくれたキーボードとは全くもって音が違う。電子ピアノとはいえ、学校で練習しているアップライトピアノとほとんど変わらない感触あり。本当はもっと練習したかったのだが、張り付くであろう母の存在が少し重たすぎてちょっと距離を置きたくもなる。

——まさか、本当にピアノもらえるなんてな。

人からの貰い物だとか、若干埃っぽいとかそんなのは気にならない。これから先、印條先生のもとに通うことになれば……もっとも父との関係がどうなるかにもよるが……毎日時間を区切ってそれなりに練習をすることになるだろう。ただ話がまた予想しない方向に進んで、母のレッスンを押し付けられることになるかもしれない。それはなんとしても避けたい。

青湯の早朝はだいぶ冷えてきた。ブレザーで漕いでも身体が暑くなりすぎない。

校門に入り、芝生やグラウンドのあちこちで合唱の練習をしているらしきクラスの集団を見かける。他の学年だろう。たいていラジカセを用意して音を合わせている。どこも同じことをしているのだろう。さて一年A組もどこかで練習しているはずなのだが、残念ながら上総にはその情報が入ってこない。こずえや関崎がそれなりにやり取りしているのだろう。取り急ぎ生徒玄関から教室に寄り鞆をおいて行く。他にも鞆をおいている生徒はかなりいるのだが姿がない。きっと部活の朝練習なのだろう。

運がよければ音楽室に潜り込めるかもしれない。たいてい音楽室は朝早く空いていることが少ないのだがさすがに合唱コンクール一週間を切っているのだったら少しは肥後先生も融通してくれそうな気がする。楽譜を持ち、一年B組の教室前を通り抜けようとした時だった。

「先生、これ以上私の友だちの悪口言わないでいただけますか」

聞き覚えのある声が響き渡った。思わず立ち止まった。しっかり扉が封じられているが、はっきりと聴き取れる。廊下には上総ひとりだった。

「悪口じゃないのよ、清坂さん。ただ、あなたのとっている行為はクラスのみんなを傷つけているわけですし」

「私はちゃんと練習に参加しています。義務は果たしています。現に今日もこうやって朝連に来ました。勝手に別の場所で練習しているのは静内さんたちの意図でしょうが私にその知らせは入りませんでした」

美里のぴりぴりした口調がいやでもつんざく。上総の他に誰もいないことだけが救いだ。どうも今朝はB組メンバーの合唱練習が美里を除いた連中のみで行われていたらしい。しかも言い合いの相手は、

「野々村先生、確かに私は一時期練習に参加しなかったこともありますしその点は反省しています。ただクラスの行事に参加しないとか協力しないというわけではありません」

「それはわかっているのよ。ただ清坂さん、あなたはどうも誤解されやすいと思うの」

「どういうことでしょうか。友だちの手伝いをしたりすることでしょうか」

ぞくりとする。明らかに上総はどこかのパーツで関わっているはずである。手元のしゃれた楽譜ノートをがっちり抱える。野々村先生の口調も穏やかそうに見えるがどこかぴりぴりしている。昨日語らった際に浮かべた謎の微笑みとは百八十度異なる。

「私も中学時代は評議委員してましたしクラス一丸でイベントに参加する必要は感じてます。ですが、先約があってどうしても参加できない日もあります。私の場合は、友人と先約があり、どうしても最初のうちはさぼったと思われるもしかたないかもしれません。でも、最初からやる気が全くないというように決め付けるのは間違っています」

「清坂さん、今朝あえて早く教室に来てもらったのはね、私も担任として一度きちんと清坂さんと話をしておきたかったの。静内さんがクラスをまとめるために力を注いでいることも、そのために疲れ果ててしまっていることも」

「評議委員であればそれは当然です。分かりすぎるほどわかります」

——清坂氏のいうことは正しすぎるほど正しいよ。

野々村先生には悪いが、廊下で立ち聞きしている上総としては美里の肩を持たざるを得ない。「私も彼女のやり方が間違っていると思ったことはありません。当然ですが協力もしているつもりです。ただ、外部生の方にとっては戸惑うことも多いかもしれないと思って入学当初いろいろアドバイスしたつもりでしたが、それがよけいなお世話だったのかもしれないという反省は確かにあります」

「そうね、その自覚はあるのね」

——野々村先生結構いうこというよな。

恐ろしいものだ。上総、および父に向けられた上品な微笑みと重ならない。

「清坂さんは善意のつもりだったかもしれないけれども、もともと静内さんは自分で切り盛りできる人だったからかえってうっとおしかったのかもしれないわね」

「そのこともありますから私なりに規律委員の立場で協力は惜しまなかったつもりですが、結局静内さんには伝わらなかったようで残念です」

——清坂氏、喧嘩売ってるよ、どうするんだよいったい……。

話のつじつまを合わせていくと、おそらくだが野々村先生は美里を早朝なんらかの理由をつけて呼び出し、突然の個人面談を行おうとしたらしい。一方美里は合唱コンクールのクラス朝練があるものだと思い込んで教室に入ったところ、野々村先生に説教されるはめになったというわけか。もともと美里と野々村先生との相性はよくなかったし、クラス練習も最初のうちは上総の手伝いもあって休むことも多かったのかもしれない。こればかりは上総の責任としか言えないし、申し訳なく思う。今思えば誰か別の奴を誘いこずえ宅での練習を行えばよかったのかもしれない。そこまでさすがに頭が働かなかった。

しかし、美里の言い分が正しいとするならば、クラス評議の静内も随分やることやるものだ。美里を除くクラスの女子たちを集めて別の場所で練習し、あえて無視を決め込んだということか。もしそうだとするならば、女子の陰険さに震え上がるしかない。ただこれは美里の思い込みであって実はたまたま連絡がうまくつかなかっただけかもしれない。一方的な判断は禁物だ。

——それ以前にこのまま話し合いしてていいのかよ。まだ八時前だけど、部活の朝練習している奴だっただくさんいるし、そもそもB組連中だっただそそそ集まってきたても不思議ないだろうし。うちのクラスだったださ、そそそ誰か来るだろうし。

やはり盗み聞きしているのはよくない。上総はそっと自分のクラスに戻ろうとした。

「静内さんは真面目な人なの。一生懸命過ぎるところはあるかもしれませんが。純粹過ぎて異質なタイプの人を受け入れにくいところがあるのは確かかもしれません。ただ、清坂さんの行動はクラスの人たちに誤解を招く可能性が大だったのではとも思いますよ。クラスよりも他クラスの男子たちを優先しているように見せたり、そういうところで必要のない誤解を静内さんがしてしまった可能性はあります」

「失礼ですが野々村先生、私のことを相当誤解なさってらっしゃるようですね」

美里のぴんとはった声に、上総は身動き取れなくなった。A組の教室で扉をほんの少し開けて、耳を澄ますのみ。

「母からも聞きました。私が不純異性交友をしているのではないかとご心配いただいたと伺いました。お気遣いいただきありがとうございます」

思いっきり皮肉をまぶせたあと、

「私とそのような交際をしている相手とは、C組の羽飛くんでしょうか、それともA組の立村くんでしょうか。それともまた別の相手でしょうか」

——清坂氏、何、考えてる？

身体を斜にして隙間からB組の美里の姿を透視してみる。もちろん無理だが、長年見守ってきた美里の凜々しい立ち姿だけは思い浮かぶ。

「そういうわけではないのよ、ただ私も、女子はデリケートだから、一番大切な時期ですし」

しどろもどろの野々村先生に向かい、美里はあくまでも美里らしい言葉で矢を放った。

「羽飛くんも立村くんも、私にとっては中学三年間を共にしたかけがえのない友だちです。彼らが男子だからというただそれだけの理由で私にそのような疑いをかけるということは、彼らふたりを侮辱することになります。私は断じてそのことに抗議します！」

その矢が野々村先生に刺さったかどうかはわからない。確実なのは扉を閉めた上総の手が完全に震えていたことだけだった。刺さったとすればきっとそこだ。

その十六 かしましき隣組 (2)

美里の宣言を耳にしてからその後の記憶があまりない。教室に戻ってきたクラスメートたちとそれなりに話をしたはずだし、関崎とも無難に挨拶をしたはずだった。こずえとも朝の爽やかな下ネタ攻撃を交わしたはずだ。いつもと変わらない朝であり、そこから続く授業も昼休みまで特に何かが起こるでもなかった。普通に給食を食べ、昼休みの合唱練習も、上総は伴奏役だから聞いているだけで済む。

——清坂氏は、本当に、そう思っててくれたんだ。

何度も本人から直に伝えられていたけれども、信じられなかった言葉。

——あんな、クラスの担任にまで言い切れるほどに。

ずっと耳の中、旋回し続けるその言葉。

さすがに盗み聞きしていた立場だし、美里にお礼の言葉を伝えるつもりはなかった。

美里だってまさか上総が扉の向こうで聞き耳立ててたなんて知ったら赤面するか激怒するか、とにかく普通の反応では済まないだろう。さらに上総側にはもうひとつ、絶対に秘めておかねばならない事情がある。隠すつもりではいるけれども、何かの表紙で野々村先生に「上総くん」なんて呼ばれているところを見られたら身の破滅だと思う。

——どういう事情かわからないけど、俺としてはできるだけ清坂氏がふつうにしてられるように振舞うのが一番いいのかもしれないな。

まずは静観することにした。どうせA組には美里の大親友たるこずえがいるし、ある程度の事情はそこからもれてくるだろう。関崎と親しい静内菜種の存在が少しやっかいだが、上総とは面識もないし気にすることはないだろう。

「立村くん」

女子に呼びかけられることは特定の相手を除いてそれほどない。振り向くと真後ろに宇津木野さんと疋田さんのふたりが並んで立っていた。上総に用事があるのだろう。ちゃんと顔見て待っている。

「何か、用？」

「少しだけいい？」

小柄な疋田さんが思いつめた表情で上総の様子を伺う。

「いいけど、何か」

なんとなくよくない予感を感じるが、しかたない、できるだけ自然な顔で受け入れることにした。背高のっぼの宇津木野さんは黙っている。言いにくそうな内容だということだけは予想がついたので、上総の方から廊下に出るよう促した。

「あの、立村くん、伴奏のことなんだけど」

廊下の窓辺に立ち、通り抜ける他クラスの生徒たちを脇に流しながら上総は疋田さんの話を聞いた。ふたりとも目つきが堅い。睨みつけるような悪意はないが、決意が鋼鉄状態といえいいのか。少しだけ恐怖を感じる。

「もし、立村くんが大変だったら私たち、一曲ずつ担当してもいいの」

疋田さんが両拳を握り締めたまま、すっと顔を上げた。

「私たちのわがままで立村くんにはいろいろ迷惑かけてしまったけど、本当に大変な思いをさせてしまって、申し訳ないって思っているの。私も宇津木野さんも」

隣で宇津木野さんが、やはり真面目な顔で頷いた。すぐに疋田さんが引き継いだ。

「八月半ばの段階では私も宇津木野さんもとても辛くって、どうしても私たち、一緒に比べられるようなところで演奏したくなかったの」

「それ、古川さんから聞いている」

さらっと答えた。

「こずえちゃんに頼んだら、誰かクラスにひとりかふたりはピアノ弾ける人がいるはずだしって探してくれたんだけど、まさか立村くんだとは私たち、思ってなくて」

「いや、それ、話聞いて、俺の方から手を挙げたようなもだし、気にしなくても」

口を挟みかけた上総に、

「音楽室で一生懸命練習しているとか、わざわざ短期でピアノを習いに行っているとか、こずえちゃんの家におじゃまして練習しているとか、いろいろ話を聞いてて、私、自分たちのことばかり考えていて、こんなに迷惑かけているなんて思わなくて、それで」

「そんなことないよ、弾く程度はできたし、それだけで」

「でも、頼むべきじゃなかったと思う！」

いきなり宇津木野さんが首を振って、はっきり発言した。

「そんな、人に迷惑いっぱいかけて、伴奏から逃げ出した私が悪いんだと思う」

「いや、悪くないよ、あの、俺も本当は合唱するよりピアノ弾いているほうが性にあっていていると思うし」

妙に二人がへりくだって頭を下げる姿に、ぼこぼこした違和感がある。

なぜ、本番まで一週間もないというのにいきなりわけのわからないこと言い出すのだろう。もっと早く言い出したのであれば上総も納得できるのだが、よりによってこんな時期になぜ、そう、いきなり自分たちが弾きたいと考えを翻したのだろう。

そろそろ鐘の鳴る頃だ。腕の時計を覗き込み、わざとらしく話を切り上げよう。

「確かに俺もあまり上手じゃないことは自覚しているし、宇津木野さんや疋田さんのようにすごい演奏はできないけれど、でもそれなりにやることはやってる。少なくともこれ以上クラスに恥をかかせないように練習はするつもりだから、それにさ」

せっかくの善意をつつかえすようで申し訳ないとは思う。きっと二人の方が断然素晴らしい演奏をする保証付きだし、上総がここであっさりやめて頭を下げたほうが丸く収まるのかもしれない。だが、せっかくここまで積み重ねてきたもの、家にも今は電子ピアノが鎮座ましている。ありがたくはないけれども臨時講師が我が家で待ち構えている。ここまで準備整えた状態でいきなり、あの話はなしにするのはやはり抵抗がある。

「あれ、どうしたの？ 立村くん」

B組の教室からひょいと顔を出した美里が近づいてきた。たまたま上総たちの話し合いしている場所が美里の視線とちがったのだろう。びっくりしている宇津木野さんと疋田さんに美里は笑いかけ、

「何か深刻そうな話、しているようだけどもしかして合唱コンクールの伴奏のこと？」

「聞こえてたのか？」

「あんな大きな声で話したら当たり前じゃないの」

美里は上総の腕をブレザーの上から突き、女子ふたりに首を振って安心させるような口調で話しかけた。女子だし多少の面識はあるのだろう。

「私もね、立村くんの練習を何度かこずえんちで見てたけど、本当にどんどん上手になってたよ！ 最初、『エリーゼのために』弾いていた時はそれなりだったけど、日を重ねるごとにどんどんうまくなってらなあって。私も小学校卒業までピアノ習ってたし、ある程度はわかるつもりだけどね。だからこずえもA組の評議として、立村くんピアノまかせていいかなって思ったんじゃないかな。私も、もしこずえと同じ立場だったらそうしてたもん」

「清坂氏、いいよ、そんな」

なんだか美里が暴走しそうで、よりによってこんな場所ではまずいとも思う。適度に牽制をかけてみる。もちろん上総を褒めてくれているのはありがたいのだが、目の前のふたりがピアノの技量に関して疑問符を浮かべているのも否定できない事実だったから。

美里には通じなかった。さらにぺらぺら続ける。

「十月には学内演奏会あるし、きっとそちらの方も大変だと思うんだ。だから立村くんのように、めったにチャンスもらえない人のためにも伴奏は譲ってあげたほうがいいよ。私、伴奏よりもむしろ演奏会で宇津木野さんのピアノ聴きたいもん。一度クラシックですごい曲弾いてたことあったよね？」

——そんなことよく覚えてるな、清坂氏。

上総には記憶にない。まくしたてる美里が黙るまで待つしかない。

「清坂さん、違うの、あの、私たち」

「あ、鐘が鳴るね。じゃあ、また後でね、立村くん。ごめんね、割り込んじゃって」

何か言いたげな疋田さんと宇津木野さん、そして上総を廊下に取り残し、美里は大急ぎでB組の教室に戻っていった。

しかたない。美里にかき回された分はフォローするしかない。上総は頭を下げた。

「ごめん、清坂さんも悪気があって言ったわけじゃないんだ。けど、今回だけ伴奏やらせてもらえるんだったら、来年以降はもう、ふたりに返す。それ、約束するから、ごめん」

そこまで言った後、上総も教室に戻った。A組ピアニストふたりの表情が暗かったことはあえて気づかないふりをした。

その十六 かしましき隣組 (3)

合唱コンクール前最後の音楽授業が終わった時、肥後先生に放課後呼び出された。

音楽室に向かい他クラスの生徒たちがピアノを奪い合って演奏しているのを横目で見つつ上総は、奥の音楽準備室へと向かった。なんだか嫌な予感がする。きっとたぶん、あのことだろう。わかっている。

自分がどうしようもなく下手なのはわかっているし、周囲からも不安がられているのはわかる。きっと親切心から来た申し出なんだ。頭では分かっているけどすっきりしない。

——そうだよな。ピアノ専門にずっと練習してきた人からしたら、俺がいくら練習したとしても物足りないだろうし、それに完璧に合っているともいえないしさ。

放課後の練習も上総の弾いたテープを用いることになり、結局生ピアノと合わせることができるのはせいぜい一回あるかないか。どうしようもない。

なんとなく宇津木野さんと疋田さんと接するのも気が引ける。もともと女子と話をするのも特定の相手を除いてそう得意ではない。

——でもふたりがやる気出してくれたのだったら任せてもよかったんだろうか。

いや違う、それは逃げだ。思い直す。

——俺だってそれなりに練習してきたんだからさ。いまさら合唱に回されるのはたまったもんじゃないし。

あれからいろいろ考えたけれども、自分からふたりに伴奏を任せるというのはやはり間違っているような気がしてならなかった。どちらにせよもう伴奏者を変更するなんて非常識なことが通じるわけがない。たとえ、上総がろくすっぽ弾けなかったとしても。

「立村くん、少しいいかな」

肥後先生はピンクのワイシャツ姿で上総を迎え入れた。穏やかに笑っているが、何か腹に一物ありそうだ。身体がこわばるのを感じる。

またクーラーボックスから冷やした紅茶のポットを取り出し上総のカップに注いでくれた。

「合唱コンクールまで、もう少しだね」

「はい」

「今日の授業でも、よく弾けていたよ。よく練習したんだね」

「ありがとうございます」

最初はねぎらい。ありがたいことではあるけれども、そのまま受け取ることにはできない。まだ用心したまま、上総は冷たい紅茶を飲んだ。すでにいろいろな先生に教えてもらっていることや、最近母にしごかれていることも伝えてある。

「君の努力は必ず報われるから、心配してないよ。当日楽しみにしているよ」

——あれ、先生てっきり俺を外すつもりで呼んだんじゃないのか？

肥後先生が何かを言いたそうにしていたのは、たぶん上総に伴奏者から降りることをすすめる

つもりなのだろうと思っていた。あのピアニストふたりが申し出るくらいなのだから音楽教師の肥後先生も何か言いたいことあるのかもしれないとも。先生に言われたら悔しいがそのまま従うしかないだろう。その覚悟できた。

「あの、それでは僕が弾いていいんですか」

「弾かないつもりだったのかな」

おもしろそうに肥後先生が尋ねる。何かを聞き出したそうだった。ということは、上総ひとりの取り越し苦労だったというわけか。

「そういうつもりではありません」

「いやね、今日君に来てもらったのはひとつ、伝えたいことがあったんだよ」

肥後先生は紅茶を飲み干した次ぎ直した。

「立村くんは、宇津木野さんと足田さんに何か言われなかったかな」

取り越し苦労どころではなかった。もろにポイントついてきたではないか。答えに迷う。その間で一瞬のうちに見抜かれてしまったらしい。肥後先生はこくこく頷いた。

「答えなくてもわかっているよ。ふたりが僕のところにも陳情にきたからね」

——それほんとかよ！

信じられなかった。あの申し出の日からしばらくあのふたりとは話をしていないがやはり、上総の伴奏にがまんがならなかったのだろう。やはりあの時黙って受け入れていればよかったと後悔するもあとの祭り。背中から頬が熱くなるのを感じる。

「立村くん、ふたりも立村くんを傷つけてしまったのではないかと心配していたし、その上で彼女たちも譲れない部分があるということで僕に話に来たということなんだ。君は悪くないし、むしろこのまま当日は伴奏をしっかりと勤めてほしい。ただ彼女たちも君のピアノの腕前をばかにしてあんなことを言ったわけではない。それだけはわかってほしいんだ。今からその説明をするよ」

気がつけばまた、冷たい紅茶が上総のカップにも継ぎ足されていた。

「音楽を愛するもの、僕もそのひとりだ」

肥後先生はたっぷり間をとってそう語り始めた。

「音楽好きというものはね、少しやっかいな病を持っている。まあどの芸術や技術においても同じなのだが、崇高のレベルをどのような場所においても求めてしまう性がある」

「崇高ですか」

「そうなんだよ。ここは青大附高、いわゆる教育の場。その場所で行われる合唱コンクールにおいても、音楽教師である以上いや音楽を愛する以上、最高のハーモニーを奏でてほしいと強く願っているんだ。たとえ生徒のみなさんが単なるイベントのひとつと受け取っていてもね。全力つくしてほしいし、できる限りの美しい歌声を聴かせてほしい。もはやこれは本能だね」

上総が頷くのを満足げに見つめ、肥後先生は両手を指揮者のように振った。

「その一方で、限界があることも理屈ではわかっている。まだ変声期が終わっていない生徒もちらほらいるし、音楽自体が苦手な生徒もいる、いわゆる音程が取れない生徒もいるし、僕の経験

だと耳が不自由な生徒もいた。彼ら彼女らは全力を尽くしてくれたし、もちろん努力も重ねていた。今回のように、立村くん、ピアノが自宅にはなかったにもかかわらずさまざまな方法で練習している生徒もいる。僕は『教師』としては君を含む生徒たちを心から応援するし、誇りに思う。これも本心なんだ」

——何が言いたいんだ？

上総が首を傾げると、肥後先生はまた頷きつつテーブルを指先で叩いた。

「ハーモニーの美しさと生徒たちの価値ある努力。それがイコールになりさえすれば最高の合唱コンクールになるだろうし、順位はともかく心に残る音色を奏でられる。だがいかんせん、こればかりはなかなか不等号マークがついてしまうことも事実なんだよ。何が言いたいかわかるかね、立村くん？」

——わからないよ。

上総が返事をせずにいると、肥後先生はうつむきつつ、ゆっくりと、

「僕はね、立村くんのピアノが決して出来が悪いとは思わない。君は全力を尽くしている。できる限りのことをしている。いやそれ以上だと思う。だがそれは僕の『音楽教師』としての見方であっていざ学校を出た瞬間どうしても許せない一線が生まれる。決して君のせいではなく、自分の求める完璧な音色と程遠いことが許せなくなる瞬間がある。具体的にいうと、ピアノの発表会でまだドレミもたどたどしい幼子が『きらきら星』を一生懸命弾き終えて満面の笑顔でもって挨拶したら僕は全力でねぎらいの拍手を送ると思う。どれだけ頑張ってきたかがわかるからね。ただそれを、自分の聴きたい音色かと問われれば残酷だけどノーと言わざるを得ない。その違いといえば、わかるかな」

「なんとなくわかります」

すっと落ちた。そういうことか。

「宇津木野さんと疋田さんは子どもの頃からピアノの英才教育を受けていたと聞く。良い先生について一生懸命練習してきた。またその過程で磨かれた音楽への感性で自分の求めるハーモニーというものに強いこだわりが生まれてきたんだ。音に対する感性が鋭すぎて、ずれすぎている曲や歌が許せなくなってしまっているんだ。もちろん合唱コンクールの目的も理解している、立村くんが今回あえて立候補してくれたことには感謝しているんだよ。ただ、どうしても音楽のハーモニーが自分たちの求める音ではないことにストレスを感じてしまっている。そう感じる自分自身も許せない。ふたりとも自分みずからまいた種であることを自覚していて、その責任を取るためにあえて、あのような申し出をしたというわけなんだ」

「つまり、僕の弾いた音色では、あのふたりの求めるハーモニーには届かないということでしょうか」

声が震える。わかっている、突きつけられるのが辛い。

「誰が弾いてもきっと同じことを言ったかもしれないね。プロの伴奏専門ピアニストを頼まない限りあのふたりは満足できないと思うし決してこれは立村くんの問題ではない。僕もふたりの意見は一通り聞いた上で伴奏者変更は認められないということと、今回はそのハーモニーのなかで折り合いを付ける努力を求めることにした。同時に立村くんにもふたりが悪意を持って君に申し

出たわけではないということを伝えておく約束をした」

「悪意、ではなくて」

「そう。悪意ではない。ふたりはただ音に対して鋭敏過ぎるだけなんだ。だが、社会に出れば決して美しい音以外のものを浴びせられることになる。今のうちに慣れておく必要があるし、ふたりには別の視点で今回学んでほしいことがたくさんあるからね」

肥後先生は締めた。

その十六 かしましき隣組（４）

わかってはいるんだが。

——やはり直接言われると、痛いよな。

自転車を漕ぎつつ暗い帰り道をひた走る。

あまりにも上総のピアノ能力が低すぎるからということは想像していたけれども、A組ピアニストふたりの感覚は上総の理解をはるかに超えていた。

下手過ぎて聞くに耐えないから、代わりにやってあげたい、そのあたりでの声かけならばまだ上総の断り方でも角が立たなかったかもしれない。しかし、それ以上の、

——本能として耐えられない。

となると言葉を失う。上総が努力を続けていることをふたりともわかってきていて、感謝もしている、でも本能が受け付けない。その音が空間にあふれることそのものが、許せない。

——もっと先に言ってくれればよかったのにさ。もっと早ければ俺だってちゃんと引いたのに

。

今更ながらずんずんと突き上げてくるものはなにか。罪悪感とは思いたくない。

「上総、ほら、早く食事済ませてお風呂入ったらすぐに練習するわよ」

まだ六時過ぎだということにもう母が手ぐすね引いて上総を待っていた。わざわざ玄関の車庫前でうろうろするくらいだ。もたもたして怒らせたらずい。一目散に玄関に飛び込み、すでに用意されているハンバーランチを一気に流し込んだ。やはり母の料理は上手だと認めざるを得ない。ちゃんと火が通っていて、そのくせ固くない。

「何時くらいからうちにいたの」

「五時頃よ。打ち合わせが早く終わったからすぐにこっち来て、あとは料理の準備とかいろいろしてたわよ」

母は風呂場に走り、すぐに戻ってきた。

「お湯が冷めないうちに早く入りなさい。あんたが上がるまで片付けものしているから安心しなさいよ」

「何、安心って」

「決まってるじゃないの。あんたの部屋に勝手に上がり込むことしないわよってことよ」

——少しはプライバシー保護の意識芽生えてきたのか。

母もそれなりに上総対応については学習しているということかもしれない。

だいぶ熱いお湯につかりさっぱりしてから、母を伴い自分の部屋に入った。鞆から楽譜を取り出している間、母は上総のベッドに腰掛け、部屋中を注意深く観察し、

「あのキーボード貸してくれたお嬢さんにお礼しなくちゃいけないわね」

すでにお役御免となり、ケースごと立てておいてあるキーボードに目を留めた。

「弟もいる人だから、家族みんなで分け合えるクッキーみたいなのがいいかもな」

「美里ちゃんの友だち？」

「そう、親友だろうな」

電子ピアノの電源を入れながら上総は答えた。

「ならいい子なのね」

——下ネタ女王だけどな。

もちろん親に言っているいいことと悪いことは分けてある。上総は楽譜を広げ、

「とりあえず、通しで弾いてみるから、悪いところあったら終わってから指摘してもらえばいい」

それだけ伝え、「恋はみずいろ」「モルダウの流れ」を順番に弾き始めた。

——それにしても母さん随分おとなしくなったよな。

月曜の夜から稽古を見てもらっているが、数カ月前に「エリーゼのために」の練習をしていた時とは天と地の差、冷静そのものでかっと頭を沸騰させることもない。最初は何か企んでいるのかと上総なりに用心したのだが、どうもそうではないらしい。母の想像以上に上総のピアノの出来が満足行くものだったらしく、「ここはもう少し力強く弾いたほういいんじゃないの」とか「ペダルはゆっくり踏んだほうが効果的よ」とか、ピンポイントの説明に留まっている。最初からそう言ってくれれば、もう少し早くピアノを好きになっていたかもしれないと思う。本気で習いたいと小学時代からねだっていたかもしれない。

一通り弾き終え、振り返り母の顔を見やる。

「まあ、こんなもんじゃないの」

「珍しくあっさりだな」

「だってしょうがないじゃないの。今更怒ったってあんたの腕がピアニストレベルに上がるわけでもないし。合唱とは合わせて練習してるって言ってたわよね」

「一応は」

「そう、それならいいんだけど。ソロ演奏と違って合唱の伴奏はとにかく歌と指揮者に合わせて自分を控えるような形で弾いたほうがいいから、あんたの弾き方で十分よ。あとはそうね、指揮者の子とはしっかり打ち合わせしとくのよ」

おとなしくなったのではなく、諦めているだけだったのかもしれない。拍子抜けした。言われていることは間違っていないので拝聴する。母は続けた。

「指揮者の男の子は、初めてだと言ってたけどもどうなの、ちゃんとできてるの」

「どうだろう、慣れてないからな、あいつも」

上総の目から見て関崎の指揮者ぶりは、正直はてなマークがつく。テンポをしっかりと守っているとところはしっかりできていると思うのだが、それ以上に何か意識しているとは思えない。生きたメトロロームといった感じだ。隣組のC組練習を見ていると、難波の燃え方と叱咤ぶりが強烈すぎて、つい関崎の佇まいに不安を感じてしまうところもある。

「歌わせると見事なんだけどな」

「あら、その子歌上手なの」

「うまい。歌謡曲からクラシックまでなんでもいける」

カラオケの話はもちろん隠す。

「それなら指揮者よりもパートリーダー向きだったのかもしれないわね」

「俺もそう思う」

短く上総も答えた。来年は関崎を指揮者にするのではなく、パートリーダーにするか男声ソロパートのある合唱曲を探すかしたほうがいいかもしれない。藤沖にはなんとしても指揮者をあてがわねばならない。もしくは女子でもいいのではないか。それこそこずえにやらせるのが吉ではないのか。

何度か練習を繰り返し一休みすることにした。

「あんた何か飲む？」

「冷たいものがないな」

「もう寒いんだから、生姜汁にしときなさい」

——そこまで寒くないよ。

部屋を出て行ったあと、改めてピアノの鍵盤を押して見る。しっかりしたピアノの音がする。特に学校のアップライトピアノとの違いは全く感じない。それでも、

——あのふたりからしたら、全く違う音色なんだろうな。

聴き分けできない自分の耳に寂しくなる。

母も上総の演奏そのものを罵倒することはなかった。最初から高いところに達せないことを承知しているせいかもしれない。クラスメートたちも本心はどうだかわからないが、上総の演奏したテープを聞いてぶちぎれている姿を見たことはない。たぶん、それで歌えないことはない、程度の演奏と思ってくれているのだろう。

昔から本番には強い。準備段階ではいろいろ思い悩むこともあるが、いざ本番舞台に立つとほぼ百発百中、冷静にこなせる。多少ミスタッチしでかしたとしてもごまかす度胸はある。ただ、

——どちらにしても耐え難い音なんだろうな。

少なくともあのふたりにとっての上総の演奏は、我慢ができないものなんだろう。

そこに努力や感謝が交じる余地はない。肥後先生の言葉に従うならば。

「上総どうしたの、暗い顔して」

生姜汁のあつあつを持ってきた母が、上総の顔色をちらとみやった」

「なんでもない」

「あんたにしては珍しく緊張しているわけ？」

「してないよ」

適当にいなし、生姜汁をゆっくり口に運ぶ。最初いやいやだったけれども適度に甘く、身体に染み渡った。こういうのが欲しい気分では確かにある。母はまたベッドに腰掛けた。

「もう泣いても笑っても明日しかないんだから。ひとつだけ言えることは、上総」

同じく自分の生姜汁をこくりと含み、ふうっと息を吐いてから、
「全員舞台上がって、合唱が始まったらもうここから先はどんなことがあっても最後まで弾き続けなさい。舞台ってのはね、本当に何が起こるかわからない。天変地異があるかもしれない、演奏中に誰かが体調崩して倒れるかもしれない。でも、何があっても演奏しているあんただけは何がなんでも引き続けるの」

上総は黙って母の顔を見つめた。見つめ返された。自分に似ていると言われる瞳だった。
「それがあんたの役目。多少弾き間違えようが何しようが絶対に止まっちゃだめ。とにかく最後の一音までしっかり鍵盤を叩くこと。それをやり遂げられれば、あんたの下手な演奏でも十分仕事をしたことになるの」

——最後まで弾き続ける。

母の言葉に素直に頷けることはあまりなかったが、今だけは大きく首を縦に振った。

——俺にできることは、合唱をどんなことがあっても中断させないこと、最後まで歌い上げられるよう演奏すること。できる、やってみせる。

その十七 歌い出し（1）

いよいよ合唱コンクール当日の朝が来た。

——ほとんどぶっつけ本番って感じか。

早めに教室へ向かうと、すでに関崎、藤沖、こずえの三人が先客で語らっている。珍しい光景だった。一応挨拶を軽くして荷物を置き、楽譜を持って教室を出ようとした。

「あんたどこに行くのさ」

「音楽室。ピアノに触ってくる」

ふうん、といった風にこずえが頷いた。藤沖と関崎が顔を見合わせている。そりゃあ驚くだろう。この一ヶ月もの間周囲では上総がここまで真剣にピアノに練習に取り組もうとするとは思っていなかったのだから。家族はもちろんクラスメート、学校の先生まで巻き込んでよくぞここまでやり遂げたものだ。自分で自分を褒めてやりたい、というよりも自分のその根性に呆れてしまいたくなる。

音楽室に向かうとみな同じことを考えていることがよくわかった。手を慣らすため他クラスの伴奏担当生徒たちが列をなしている。諦めた。ちらと覗き込むと最後の仕上げで一生懸命弾いているのはC組の瀬尾さんだった。

——C組は本気出してるからな。すごいよな。特に男子連中がみな盛り上がっているようだし。天羽も羽飛も更科もいるし、難波の奴指揮者であれだけ命かけているし。

傍目から見ても難波の熱さはうざったいくらいだった。評議委員時代には陰を潜めていたのだが、練習の時から細かな声のバランスやらタイミングやら荒々しくダメだしに没頭している。それをうまくフォローするのが名コンビを組んでいる更科。やはり一年の優勝クラスはC組が本命なんじゃないだろうか。

すごすご階段を降りると、ちょうど一階の踊り場で羽飛がひとり体操に励んでいた。発声練習ではなさそうだ。声をかけた。

「立村、お前も今日まで長かったよなあ。うちのクラスの鬼の大特訓も今日で終わりだあ！」

「C組はすごいよな。勝てる気がしないしその気もない」

「とかなんとかいっちゃってまあ。でもまあ、今回は結構盛り上がりそうだな。おい、それはそうとこれ終わったら明日なんか食いに行かぬえか」

「そうだな。久々にピアノのことは忘れたいよな」

それと、と楽譜を閉じたノートを見せる。羽飛お手製のデザインを忘れさせるわけにはいかない。

「お、俺の名デザインをしっかりと愛用してるよなあ、さっすが」

「役立ってる。本当に」

本番もしっかり楽譜立てに載せてしっかり譜面見ながら弾くことにしている。暗譜はしたつもりだがやはり、この譜面があるだけで心が落ち着く。何が、というわけではないのだが、持っているだけで何か感触が違う。

「まあ、互いにやるだけやって、勝ち負け決まったら握手だぞ絶対に！」

「わかった、じゃああとで」

A組の教室に戻ると関崎が席に近づいてきた。指揮者の義務だろう。

「今日は全力尽くすぞ。お前の責任は重いが、俺は信頼している」

「お互い様だよ。足を引っ張らないようにするから。そのくらいはできるし」

「頼む。俺もお前が頼りだ」

様子見している他の女子たちもたくさんいるが近づいて来ない。たったひとり、こずえだけが藤沖に話しかけつつ上総にも、

「ほんとによくあんたも弾けるようになったよねえ。お姉さんは嬉しくて涙もんよ。さあ、あとは腹から思いっきり歌うのみだよ。思いっきり行きましょエクスタシー」

「古川さん、それは違うと思う」

朝から爽やかな下ネタ女王のお言葉を頂戴すれば、いつも上手くいくような気がする。上総は楽譜に目を通しながら、指先で机を鍵盤代わりに叩いてみた。沈まない鍵盤だがたぶん、大丈夫。頭の中に確かな音色が響くから。

一年の下馬評を噂で聞く限り、圧倒的にC組が全校優勝しそうな評価を得ている様子だった。二年、三年の上級生たちがなぜ話題にのぼらないのかが謎なところだが実は、今ひとつ乗りが悪いのだという。クラス分けが英語科以外毎年行われているためまとまりが今ひとつとか、伴奏者をめぐる面倒な争いが関わってきたりとかでいろいろ大変らしい。上総もたまに中学時代の先輩たち……主に本条先輩の同期ともいうが……から話を聞かせてもらい怖気立ったりもした。幸い英語科A組はそこまで凄まじい戦いはなかったはずだ。まあ、自分が何も気がついていないせいかもしれないけれども。

「さあお前らお楽しみの合唱コンクールの時間がやってまいりましたと、いうことだ」

麻生先生は秋も深まりつつあるのに額の油を拭かないまま生徒たちに言葉を放った。

「お前らが毎日練習していた姿は涙ぐましいもんがあったなあ。もう余計なことは言わん。徹底して喉からすまで歌ってこい！」

「先生、優勝したら何かご褒美もらえるって聞いたけどあれどうなってるの」

こういう時の茶々入れはこずえと相場が決まっている。麻生先生は腕組みしてこずえを睨んだ。

「古川、そういうのはあとからのお楽しみってことにするもんだろうが。あせるともらいが少なくなるぞ」

「やだなあ、ケチ」

クラスの空気が和んだ。上総がそっと教室内を眺めやると男子連中はみな楽しげに笑っている。思えばみな練習を嫌がって逃げ出す奴もいなかったし、みな関崎や藤沖の指示に従って大真面目に口を開けて歌っていた。よそのクラスだと男女大喧嘩になったとかいう噂も聞くが全くもって平和だった。伴奏する上総の腕前をあげつらう奴も表向きはいない。

——あのふたり、どうしてるんだろう。

気になるのでさりげなく外を眺める振りしてついでに宇津木野さんと疋田さんのふたりを目で追った。ふたり仲良くひそひそ語らっている。こずえが言うには「あのふたり仲良しというわけではない」はずだったのだが、この一ヶ月でいわゆる女子の仲良しコンビに収まったようにみえる。ピアノが上手な同士、馬があったのかもしれない。

——クラスの団結力が強くなったかどうかはわからないけど、ここまでまとめたのはやはり古川さんの腕だろうな。

こずえがけらけら笑いながら他の女子たちにささやきかけている。クラス割れすることもなく、無事まとめたのはこずえが夏休み前から女子たちの細やかな感情をすくい取り、早急に手を打ってきたからだ。早い段階で気づかなかつたら、上総が宇津木野さんや疋田さんを差し置いて伴奏に選ばれることもなかっただろう。不満がたらたらだったであろう女子たちひとりひとりに声かけして、褒めるだけ褒めてしっかりハーモニーをこしらえ、最後までアメとムチならぬアメをたっぷり与えて気分良く歌わせたその人心把握力、おそるべしといったところだ。

——それにくらべて、もう少し働けよ藤沖も。古川さんひとりに負担かかりすぎだろう。

いくら関崎が頑張ってくれたとはいえ、やはり評議たるものもう少しクラスに目を向けるべきじゃないのか。そう思いかけて上総は首を振る。とてもじゃないが自分がそれを口にできる身分では決してないのだから。かつての自分の姿は、たぶん今の藤沖と同じように見えていたのだろう。

——全校生徒のみなさん、全員廊下に並んでください。みな、椅子を持って整列し、一年生から順番に体育館へ集まってください。

放送委員の声がスピーカーからくっきり響く。全員自分の椅子を持ち派手な音を鳴らしながら出て行く。全員が教室から出て行ったのを確認し、上総は楽譜ノートを椅子の上に載せてそのまま男子最後列についた。関崎の後ろだった。指揮者と伴奏者は特例で最後尾の出入りしやすい順番があてがわれている。

その十七 歌い出し（2）

校長先生のお話、生徒指導担当教諭の注意事項、審査委員長である肥後先生の励ましのお言葉など続いている間に一年A組は舞台の袖にてスタンバイしていた。

なにせ一年A組。合唱コンクール開幕直後に歌うわけなのだから、半端な緊張感ではない……はずだった。伴奏者たる上総を除いては。

「随分お前落ち着いてるな」

顔に出したつもりはなかったのだが、関崎がずっと右手をぐるぐる回しながら問いかけてくる。こいつは見るからに気合が入っている様子が伺える。

「もうどうしようもないしさ」

軽く受け答えした。ふと誰かからの視線を感じたが気のせいとして片付けておくことにした。こずえが女子たちの肩をぽんぽん叩きながら、

「みんなよくがんばってきたから大丈夫！ もう最初から飛ばしちゃうよね！」

気分を和ませている。同時に男子たちに向かっても、

「あんたらも、麻生先生からのなんかわからないけれど貢物もらっちゃうために、溜まったものここで思いっきり出しなさいよ！ まさかと思うけど昨日自家発電しちゃった奴なんていないよねえ」

これもいつものように調子づけている。クラス連中はみな慣れたものだが、裏方に回っている生徒たちが渋い顔をしているところみるとこずえのキャラクターがすべての人々に受け入れられているわけではないことがよくわかる。広い学内そういうものだ。

「静かにしてください。まだ先生たちのお話が終わっていません」

しっかり釘を刺された。みな黙って時を待つ。

関崎がまだ手を動かしている。上総は近づき耳元に囁いた。

「ピアノの前からだと少し手が見づらいから、思い切り高く振り下ろして合図してもらえると助かる」

「こんな感じか」

切り捨て御免を思わせるようなざっくり切りを関崎は見せ、にこりともせず上総に確認しようとした。周囲、爆笑しそうになるものの、他の委員生徒たちの冷ややかな視線にみな言葉を飲み込んでいる。

「肥後先生のお話が終わったら音楽委員が合図しますので、後ろから一列で壇上に上がってください。列はきちんと、この前のリハーサル通りをお願いします。それと指揮者の方は全員が定位置についた段階でやはり音楽委員が手をあげて合図しますので、それに従って一礼し、そのあとで指揮台に上がってください。それと」

小声で三年の女子音楽委員が気ぜわしく指示を出していた。

伴奏担当の上総にも振り返り、

「伴奏者の方はピアノがほとんどカーテンで隠れてますので、挨拶はしなくていいです。その間に弾く準備を整え、譜面は早めに立てておいてください。譜面めぐり担当は誰かいますか」

広げっぱなしでよしの屏風折ノートに感謝だ。いないと答えた。ちょうど肥後先生が頭を下げて反対側の階段から降りていった。すぐに放送委員らしき生徒がマイクを幕の後ろで持ち、開会の辞を述べた。

「それでは、青潟大学附属高校合唱コンクールを始めさせていただきます。まずはじめは、一年A組のみなさんです。拍手でお迎えください」

響きある綺麗な発音で全校生徒に呼びかける。一方、一年A組連中に事細かな注意を続けてきた音楽委員女子はすぐに時計を覗き込み、きつとした眼差しで睨みつけ、

「早く整列してください、早く！」

と急ぎ立ててきた。結構慌ただしい。タイムテーブルがかなりしっかり組まれていると見た。中学時代評議委員会でも本条先輩がかなり細かく指示を出していたけれども、さすがに高校その上に行く。

——ちゃんと委員会別に役割分担されてる。まあそれが自然か。やっぱり本条先輩がいるといないとの違いなのかもしれない。

つい伴奏のことも忘れ、委員たちのてきぱき活動する姿に見入りそうになるものの、そんな暇など本当は全くない。

上総は丸いピアノ椅子に腰掛け、座る高さを調節した。ペダルに足をかけてみて踏みやすいかを確認し、楽譜を広げた。

外で拍手が聞こえる中、関崎が舞台正面に立ち几帳面に礼をする。

かすかに「あ、あいつ外部の面白い子だ！」とか「関崎くんだ！」とか、この半年間において関崎の名がどれだけ売れたかがよくわかるささやきが聞こえてくる。

——さあ、今日が総決算だ。最後まで弾き切ってやる。

たとえ思い切り弾き間違えようとも、へまやらかそうとも。

この件においてのみ、母の言葉は正しい、そう思う。

関崎が片手を上げ、上総の方に視線を投げた。

さすがに少しだけ息を止めた。

さっと空気をざっくり切り裂くように関崎の手が降りた。

——恋はみずいろ。

覚えていないくらい何度も奏でた前奏のメロディだった。体育館一杯にマイクで拾われた音色が広がっていく。弾いている自分自身で思っているよりもはるかに大きく不自然なほどに。聞き覚えのない他人の奏でるメロディに聞こえるけれども、確かに自分がここで弾いている。時々関崎の指揮する手を見て拍子を併せ、同時に楽譜に目を留め間違った旋律を弾いていないかを確認する。ペダルを踏んで音を膨らませる。母や印條先生が教えてくれた通りにたっぷり息を吸って吐くようにゆったりと踏んでみる。

——こうやって聞いてみると、やはり俺の弾き方は感情なさすぎだよな。

勝手に指が動いていくのをどこか遠くから見つめているような感覚が、舞台に立たされるたび蘇る。普段はちゃんと自分が一体化していてあたふたしてしまうのに、いざ本番となると演奏したり演説したりしている自分を観察しつつ、修正したりできる。卒業式の英語答辞もそうだった。今も鍵盤を叩いて響いた音色が心臓の音と一緒に響くようで、ただただ心地よい。あともう少しで弾き終わる。歌など知らぬ。ただそのまま、できればもう少し弾いていたい。なぜこの学校の合唱コンクールが一番しか歌わないのだろう。想像していなかった恨み言すら心によぎる。

——もっと早く、練習しとけばよかったな。もっと、気持ちよく弾けたろうにな。

やはり来月以降も印條先生のところへ通おう。どうやって父を説得しようか。最後の和音を響かせゆっくり鍵盤から離れた。たぶん、関崎の拍子とはずれていなかったと思う。

——やっぱり関崎が今後はパートリーダーで歌うべきだな。古川さんに来年説得してもらおう。

トップバッター組ゆえに誰も居眠りせず聴き入ってくれたようだ。舞台の袖からも聞こえるそれなりの拍手が観客席に溢れた。素晴らしき歌声のハーモニーだからというのではなく、ただ「お疲れ様」に似たたぐいのものだった。ピアノにかまけて合唱などほとんど聞いていなかったもので、ハーモニーが美しかったかどうかは判断できない。

——優勝狙えるかどうか、ってどこで判断すればいいんだろ。さあ次だ。

気は抜けない。次の「モルダウの流れ」譜面を広げた。

美里と羽飛の手作りノートは非常に収まりがよくてしかも見やすい。ふたりがどこまで上総のニーズを考えて作ったのかは確認していないけれど、ついさっきの「恋はみずいろ」をほぼ完璧……あくまでも上総の自覚分でだが……に弾き終えられたのはまさにこの楽譜のおかげだろう。上総はカーテンの陰から一年B組方面、及びC組方面にこっそり手を合わせた。

関崎がいったん指揮台から降り深々と頭を下げ、また台にあがる。

——あれ、あいつなんで一曲ごとに頭下げるんだろ？

確かに礼儀にかなっている。しかしこれから何クラス歌うかあとがつかえている状態でそれをするのは時間が無駄だということで控えるよう指示がでていなかったのだろうか。少なくとも中学の合唱コンクールではそうだったはずだ。上総もクラスの指揮者として二曲一気に、客に尻向けた状態で指揮し続けたはずだ。。附属上がりならばすぐ気づいているはず。

——俺が教えるべきだったのか？ いや、やはり藤沖だろこれ教えるのは。

関崎のおちゃめな行動にさりげなく笑いが起こっていた。もっとも関崎は特にプレッシャーを感じる気配も見せずまた片手を高々と掲げた。ちらと上総を見た。いかにも「俺は義務を果たしてるんだぞ」と言いたげな大げさな格好だが、きっと本人は大真面目なのだろう。まだ笑い声が聞こえる。たぶん、一年A組連中も心中にやついているに違いない。緊張がほどよく溶けているのかもしれない。よく取っておく。鍵盤に両手を置き、上総はピアノから上総は頷き、その手が降りるのを待った。

関崎の手が降りた。

深く、とことん深く。

「恋はみずいろ」よりも「モルダウの流れ」のほうが気持ちもとことん深く弾き尽くせるような気が弾き始める前からしていた。じんわりしたものが身体中に染み渡っていくように、それとも大河のうねりか。

上総は弾き始めた。前奏はさほど長くない。最初から少し強めに和音を鳴らし、力いっぱいペダルを踏んだ。身体と鼓動のリズムに合わせた。

関崎が歌い出しの合図を両手上げて行おうとしたその直後だった
歌始まる、その瞬間だった。

関崎が突然指揮するのをやめ、指揮台から降りた。上手に走り出した。同時に鈍い音が舞台上にはっきり響いた。

——何があった？

関崎、なぜ降りる？

歌い出す奴は誰もいない。指揮者がいきなり責任放棄したようなものだが、舞台の上では誰も動かない。一部の女子たちを除いてただつつ立っているだけだった。緊急事態が発生したことだけはわかる。ざわめきが生徒たちの席から聞こえるがまだ先生たちが駆け寄ってくる気配はない。

——誰か倒れたのか？ 貧血起こした人いるのか？

上総はひたすら弾き続けた。

近くにいた音楽委員の生徒たちが駆け寄るべきか否か迷い、立ち尽くしている。弾き続けつつも誰ひとり歌っていないことだけはわかる。それでも引き続けねばならない。それが自分の義務だ。それが伴奏者の仕事だ。誰ひとり歌わなくとも。

「立村、いい加減にしろ！ 弾くのをやめろ！」

目の前の譜面を舞台そでに駆け込んできた麻生先生の手により床に投げつけられた時、初めて上総は手を止めた。

「お前、クラスの仲間が倒れたというのに、助けに行こうともせずに弾き続けて、それでいいと思っているのか！」

血相変えて上総を怒鳴りつけたあと、麻生先生は舞台に駆け上がり、

「申し訳ありませんが、生徒の急病につき一年A組はこれで終了させていただきます。申し訳ございませんでした」

マイクを使わず頭を下げ、つつ立っている生徒たちを下手に降りるよう手で指示した。そろそろとピアノ側に降りてきてしゃべり続ける男子たち、そして泣きそうな顔をしている女子たちがいる。

「宇津木野さんが」

「どうしちゃったんだろう」

「貧血かな」

「関崎かっこよすぎ」

「こずえちゃん付き添ってたね」

みな、上総の一番知りたい情報を断片的に口走っていた。その中で足田さんだけが顔を覆い一目はばからず泣きじゃくりながら通り過ぎていく。

関崎とこずえのふたりがいなかった。

一番知りたいことを知っているふたりがいなかった。

上総は藤沖を呼び止めた。自分から声をかけるのは二学期に入って初めてだった。厳しい表情で立ち止まり、冷ややかに上総を見つめた。

「関崎はどうした？」

「あいつは、宇津木野を背負って保健室に走っていった。古川も一緒だ」

「何があったんだろう？」

「宇津木野が突然前にばったり倒れた。それを関崎が見つけて駆け寄った」

ちらと上総を睨むようにして、付け加えた。

「あいつは指揮よりクラスメートの体調を優先した。弾くのに没頭していて気づかなかったお前とは違う」

「確かに」

軽蔑の眼差しを上総は静かに受け止めた。非難されるのは当然だが、弾くことを選んだ自分に悔いはない。それでも、やはり喉もとが熱くなり、息苦しさを覚えてしまう自分の弱さに泣きたくなる。皮が向ける程下唇を噛んだ。

一年A組は合唱コンクール途中棄権という結果のもと舞台を降りた。

その十七 歌い出し（3）

合唱コンクールの大まかなタイムスケジュールは、

- ・午前中一年全クラス終了後、いったん休憩。
- ・二年全クラス歌い終わったあと給食。
- ・午後から三年全クラス。
- ・審査委員長肥後先生より最優秀クラス発表および講評。

高校の合唱コンクールがどのような形で行われているのか見当がつかなかったのだが、話に聞いたところおおよそこんな感じらしい。しかし今回のように第一陣から急病人といったハプニングが起これるとなると、当然時間も押す。一年A組はいったん生徒たちの動揺を鎮めるために教室へ戻るよう指示があった。これも本来であればすぐ体育館内の椅子に腰掛けて他クラスの歌声に耳を傾けるのがセオリーだが、

——女子がああの状態だと厳しいよな。

麻生先生の判断らしかった。事が起きた当初はただ呆然としていたA組の生徒たちも、状況が把握できるに従って女子の数人が激しくしゃくりあげだし手に負えなくなったというのも確かにある。疋田さんがしゃがみ込んだまま動けず、他の女子に支えられて教室に連れていかれたのも見たしもらい泣きしている子も多数いる。こういう場合に間に入るのが古川こずえなのだが、すでに宇津木野さんの付き添いで出ていってしまっているのでもうどうしようもない。男子連中は比較的のほほんとしていて、

「どうも俺ら不完全燃焼だねえ」

「優勝狙ってたんだけどなあ」

「まあいいや、先生もなんか哀れんでお恵みくださるだろう」

のんきなものだった。上総は楽譜を持ったまま教室に戻り、机しか残されていない教室でぼんやりと周りを眺めやった。最後まで弾けなかった「モルダウの流れ」のメロディを頭の中で再生した。

——最後まで弾くってことは、やはり大きなことなんだ。

母の言葉を噛み締める。どんなことがあっても弾き続けること、しかしそれは「友だちを思いやらない最低な行為」として断罪されている。もともと麻生先生の言葉なぞどうでもよかったし無視してもよかったのだが、指揮を放り出して飛び出した関崎を称える声が教室内でも圧倒的に多いとなると迷わざるを得ない。

「関崎くん、まじ王子様だったわ、ねえ」

「ほんと、いきなりだもんねえ」

さほどダメージを受けていないらしい女子たちは、関崎の颯爽たる駆け寄り方に感動が収まらないらしい。上総からしたら「いきなり投げ出した」としか思えないのだが、宇津木野さんが倒れる様子を誰よりも先に発見し、考えるよりも先に身体が動いたということにただただ心動かさ

れているようだった。

——これ、C組だったら大変なことになってるな。

もともと合唱コンクールへの情熱が満ち溢れていないA組だったから、倒れて舞台をぶち壊しにした張本人である宇津木野さんと関崎に対して責める言葉は聞かれなかった。ただひたすら、宇津木野さんのことを思っただけで涙ぐむ女子と、

「けど、やっぱり風邪かねえ。休めえねもんなあ」

さりげなく案じる男子たちの穏やかな声のみだった。

「何か俺たちももらえるようだったら、宇津木野さんにもあげたいね」

存在の薄い片岡が、藤沖にそんなことを話しかけていた。藤沖も黙って頷いていた。

一年A組の教室は体育館から離れすぎているせいか、すでに合唱コンクールが再開されているのかすらわからない。保健室に駆けつけた麻生先生が戻ってくるのにも少し時間がかかり、状況を把握できたのはそれからだった。

「お前らもショックがでかかっただろうが、宇津木野の体調も今樂觀できない状態なんだ」

顔を真っ赤にしてもどってきた麻生先生は、生徒たちを机に座るよう指示し、腕組みして状況説明を始めた。かなり厳しい。シリアスといった言葉が良く伝わる。

「普通の貧血ならしゃがみこむなり目立たないように後ろに回り込むなりできたはずだが突然気を失ってしまったようで、打ちどころが悪ければ最悪の事態にならないとも限らなかった。幸い関崎と古川がすぐに保健室へ運んでくれたおかげで今、車で病院に運んでいるところなんだが」

小さな悲鳴が聞こえた。足田さんが口を押さえ、目頭をハンカチで叩いている。

「足田も心配だろうしみなも同じ気持ちだろう。合唱コンクールという晴れ舞台で起きてしまったことだけに、複雑な気持ちの奴もいるだろう。だが、今は申し訳ないんだが、宇津木野の体調が回復することだけどうか祈ってもらえないか？」

「先生、関崎と古川も一緒に付き添いで向かったのですか」

藤沖の問いに麻生先生はすぐに答えた。

「俺もこれからすぐに向かうが、あのふたりがどうしても心配だからということだったのでな。保健室の先生も一緒にいる。そういうわけで、申し訳ないんだが少し気持ちが落ち着いたところでお前らも体育館に戻れ。お前たちのことについては他の先生にも頼んであるから、ちゃんと言うこと聞くんだぞ」

——なに子ども扱いしてるんですかって！

ここで当然飛び出してくるはずのこずえの茶化しも聞こえない。

みな、静まりかえっている。聞こえるのはただ、足田さんのすすり泣く声のみだった。

そそくさと麻生先生が教室を大股に出て行ったあと、入れ替わりで現れたのは野々村先生だった。腕時計を思わず覗き込む。もう、合唱コンクールが始まっていればB組の順番も終わっていていい頃だと今更気づいた。視線を合わせないようにうつむいていた。

紺のスーツ姿で髪の毛をひとつにまとめ、見た感じいかにも銀行員の雰囲気漂う格好。ふだん

の野々村先生といえばそれまでだ。たまたま今週は補習授業も免除されたこともあって、改めて野々村先生と顔を合わせる機会はなかったので胸をなで下ろしていたのだが、まさかこんな形とは。

——B組の一群が戻ってこないということは、体育館でずっと聴いているんだろうな。

「翼をください」がB組の自由曲だったはずだが、無事美里もクラスに馴染んで歌えたのだろうか。あの外部生・静内菜種は女子でありながら堂々とタクトを振ったのだろうか。見て見たかった気はする。

「麻生先生のピンチヒッターで今日は私が担当します。そろそろ一年生が全クラス歌い終わる頃ですが、十五分の休憩がいったん入ります。休憩が終わると同時に改めて整列し、私に従ってみな体育館に行きましょう」

微笑みは浮かべていなかったが、落ち着いてはいる。事情を把握はしているのだろう。ちらと野々村先生は上総に視線を向けたがすぐに元に戻した。

「みんな、気持ちとしては複雑かもしれませんが、でも、課題曲はみなしっかり歌えてましたよ。伴奏にもぴったり合っていて素晴らしいハーモニーでしたよ」

またちらと上総を見つめる。もしかしたらそれほど意味のある目線ではないのかもしれないが、事情持ちゆえにこそばゆい。ずっとうつむいたまま膝に置いた楽譜をなでていた。

「それとみなさんに、これは肥後先生からのお言葉なのですけれども」

野々村先生が、すっと背筋を伸ばし、足をぶらつかせている生徒たちにさらに呼びかけた。「残念ながら、今回『モルダウの流れ』をA組のみなさんは歌い切ることができませんでした。合唱コンクールである以上、どうしても棄権という形にならざるを得ません。ですがもし」

語気を強めた。

「みなさんが順位よりも、クラスの団結を求めて最後まで歌いたいと思うのであれば、三年クラスが歌い終わった後みなさんのために時間を割きたい、つまり『モルダウの流れ』だけでももう一度歌うのはいかがでしょうか、ということです」

——いかがでしょうか、っていったい。

クラス全員、何を言われたかすぐには理解できなかったようだった。いつもならつつこみ入れるこずえがないのでたた黙りこくったままだった。藤沖あたり何か反応しないのかと横目で睨んでみたが反応がない。

「野々村先生、よろしいですか」

上総は机から降り、野々村先生に呼びかけた。誰も返事しないのなら自分から行くしかない。楽譜を持ったまま一歩前を出た。なんだか目立つ。女子たちの眼差しが怖い。

野々村先生は答えずに優しく上総を見つめた。だからそれが恐ろしい。

「今のA組には指揮者が不在です。体調を崩した宇津木野さんに付き添って病院で待機していると伺いました」

いくらなんでも指揮者なしで合唱再開するというのは無茶だろう。関崎たちが戻ってくればまだしも、今は宇津木野さんの状態も詳細不明でとてもだかのんびりと合唱しなおすなんて気持ちにはなれない。もちろん上総も、まだ麻生先生の罵倒が心に響いている。

「でも、お昼には戻ってくるでしょう？」

「その段階で歌いたいと思える状態かどうか、正直判断つきかねます」

上総はまだピアノにかじりついていたので、もう一度チャンスがもらえるなら嬉しいと脳天気
に思えるところもある。しかし、目の前で宇津木野さんが倒れるところを見た関崎と、舞台上で
間近にいた生徒たち、特に疋田さんのショックの受け方を考えればとてもだが野々村先生のお気楽
な提案に乗る気にはなれない。A組生徒たちのあからさまな不快感はそのまま野々村先生に叩き
つけられることだろう。できればそのまま引いてもらったほうがいい。縁のある先生だけに、
陰口叩かれるのを聞くのはやはり辛い。

「立村くん、よく話してくれました。わかります」

ピントの外れた返事をした野々村先生は、そのあと小さく首を振った。

「ただ、私も肥後先生と同じ意見です。できればA組のみなさんには、全員揃っていない状態で
辛いかもしれませんが、その欠けた状態で何ができるかを見つめつつ、もう一度新たな気
持ちで歌うことを選んでほしいのです。どうしてもクラス全員揃わないと歌いたくないという判
断であればそれはそれで尊重します。もし話し合いが必要だということであれば、お昼終了まで
待ちますのでクラスのみなさんでじっくり考えて判断してくださいね。私は心から、A組のみ
なさんが歌う『モルダウの流れ』を聴きたいと思っています」

全員がぼかんとしたまま、何も発言できずにいる中上総だけが念を押した。

もう自分の立場として、義務と割り切ることにした。

「他の人たちが戻ってきた段階で判断していいでしょうか」

「そうしてください。みな、きっと気持ちは同じはずです。きっと倒れてしまった宇津木野さ
んも、みなさんがこんな形で終わってしまうのを決して望んではいないはずです」

またちらりと、野々村先生は上総を見やった。だから頼むからやめろと大声で叫びたい。上総
が懸命に面倒な事情をごまかそうとしているのに、あの先生は自分からベールを引き剥がそうと
する素振りを見せる。まさかとは思いますが、そんなに野々村先生は父のことを。

——野々村先生、そう俺の顔ばかりみてうちの父さんの面影探ったって虚しいだけなのに。俺
の外見は確かに父さんに似ているかもしれないけど、目は完全に母さんのものなんだから、絶対
あとで先生、傷つくよ。

クラスメートたちの上総に向ける気味悪げな視線に丸まりそうになりながら、上総はこれから
どうすればよいのかを大急ぎで考えることにした。野々村先生を信じるならば、関崎もこずえも
昼前には戻ってくるはずだ。その段階で評議の藤沖も交えて判断させればいい。それにしても、

——なんで藤沖の奴、なんにも発言しようとしなかったんだろう。

あえて藤沖にだけはきつい視線を送っておいたが奴は片岡を相手に、一方的に何かを語って
いた。もうあてにはならない、ということだけよくわかった。指揮者自体した段階で気づいてお
くべきだった。一年A組英語科はひとえに女子評議古川こずえの細腕だけで持っているという現
実を。

その十七 歌い出し（４）

野々村先生はその他いくつか教室待機に関する注意を与えた後、教室を出て行った。他クラスの担任だけありみな黙って聴いていたものの、扉が閉まるやいなやすぐに激しいざわめきに教室中が満たされた。今まで押さえていたものが溢れ出したようだった。

「まじ？ まじでまた歌わねばなんねえの？ もういいじゃんか」

「なんか気抜けたしねえ」

「どうせ優勝狙えねえんだったら何もしなくてもいいじゃねえの」

男子連中のささやきはほとんどが「もういいから早く帰ろうぜ」の一言に集約されているようだった。それなりに練習していたけれども、それほど勝ち負けにこだわりはない。むしろ関崎の一途さに引っ張られて、あいつの顔を立てるためにだけ頑張ってきてやってだけ。そんな雰囲気だった。

——なんだか関崎や古川さんがこの状況見たら泣くよな。

上総はもう一度自分の机に座り直した。給食時間の時にいったん椅子を持ち帰ることになっていて、午後もう一度運びなおすことになっている。どちらにせよ体育館に戻らねばならないことはわかっている。

——それまでに関崎たちも戻ってくるんだったらいいんだけどな。

一応、野々村先生に頼んだ通り昼休みまで相談する時間を稼いだ。評議のくせに藤沖が何も発言しなかったから仕方ないことなのだが、本来なら体育館に戻るまでの間に歌うべきか否かの話し合いを持たないとまずいのではないだろうか。関崎とこずえのふたりが戻ってくる前に結論を出したくないという気持ちが藤沖にはあるのかもしれないが、もう時間がほとんどない中こんなとろとろしていいものか。苛立つ。

——俺が話しているところ見てるんだったらさっさと話を持ち出せばいいのにな。

女子たちも、疋田さんが少し落ち着いてきたこともあってみなひそひそと語り合っている。話の内容はほとんど聞こえない。ただ男子たちとは違い、それなりに合唱をもう一度行うことについては考えてくれているようだ。話の端々に、

「宇津木野さん戻ってきたらもう一度、歌いたいよねえ」

「でも、クラス全員いないのはなんかねえ」

「関崎くん戻ってこないかなあ」

——結局関崎かよ。

結論、いつのまにか女子たちの間で関崎はヒーローである。しかも、倒れた女子へ自分の仕事を投げ打って駆け寄り王子のように手を差し伸べたというドラマまで演じている。歌声はマイスタージュー、もうここまで合唱コンクールの王子として完璧な奴はいないだろう。

——ここにいるのが関崎だったらもっとあっさり話が片付いただろうにな。関崎のことだからすぐに藤沖を説得して、「さあ早く参加しなそう！」とか言い出して練習を再開するかもしれない。そのくらいのパワーを持っている奴だし、逆らう奴もほとんどいないに違いない。

しかし本当にこんなぐたぐた話していいのか。休憩時間まで、あのふたりが戻ってくるまで何も考えなくて本当にいいのか。

「藤沖、これからどうするつもりでいる？」

しびれを切らしてしまった自分の負けだ。机の上の座り心地もよくなって、上総は滑り降り藤沖の席に近づいた。めったにないことだけに、周囲がざわめいた。上総と藤沖との不仲が中学三年後期から続いていることは誰もが知っている事実。一学期に多少のゆらぎがあったとはいえ、現在はつかず離れずの微妙な間隔を保っていた。

藤沖は両腕を組み、上総の顔をじっと見据えた。

「合唱コンクールのことか」

「さっき野々村先生が話していたことだけど、話し合い、しなくて構わないのか」

できるだけ穏やかに話しかけたつもりだった。置かれている自分の立場はもちろん承知している。上総なりに藤沖への礼儀も保ったつもりだ。もともとこいつの性格は嫌いではなく、中学三年後期のあの事件がなければ普通の友だちでいられただろう。今はそれに輪をかけて面倒な後輩事情が関係しているため、多少立場が逆転しているところもあるがそれはそれ、これはこれ、だ。

黙って俯く藤沖に、上総は畳み掛けた。

「先生にも話した通り、まだ指揮者の関崎も古川さんも戻ってきていない。宇津木野さんの体調がどうなのかも心配だよ。けど、せっかく肥後先生が提案してくれたことだから一度はみんなの意見、聞いたほうがいいんじゃないかと思うんだ」

「答えはお前が言っただろう。関崎がいない。指揮者がいない。お話にならない」

上総も承知している事実を藤沖は声ガラガラのまま答えた。

「合唱コンクールはクラスの団結を目的としたイベントだ。今のようにクラスメートが三人も欠けている状態で歌う気になれるか？ 俺はなれない」

少し不満そうな声がちらほら聞こえる。男子からも、女子からも。

「それに関崎も、宇津木野を助けるため結果的に指揮台から降りてしまったことになる。あいつの性格を考えればきっと悔しい思いをしていないわけがない」

「関崎は、きっとそうだろうな」

相槌を打った。藤沖のそばで他の男子たちも、

「関崎が一番燃えてたからなあ」

しみじみ思いつ話のように語る。藤沖はその相手たちに頷いてみせ、

「あいつがもしどうしてもやりたい、歌いたいと言い張るのなら俺も考えないことはない。だが、その磁石ともなる関崎がいない以上、今の面子で歌うことに意味はない」

「でも、決を取るくらいは必要なんじゃないかな」

やんわり、できるだけ感情を押さえて問いかけてみる。藤沖は顔をしかめた。

「立村、お前そんなに伴奏したくてならないのか。伴奏最後まで済ませないと気がすまないのか」

責め立てるような口調に切り替わる。思わずひるんだ。弱いところに刺さる。教室内のおしゃべりが一瞬やんだ。それをバックにして藤沖は問い詰めてくる。

「あえて何も言わないでおいたが、宇津木野が倒れ、関崎が飛び降りた段階で指揮者は消えたのだから伴奏者であるお前もやめるべきだったはずだ。なぜやめなかった」

「それが伴奏者としての責任だと思ったからだけど」

言葉弱く言い返した。藤沖は唇を歪めて笑い、すぐに怒りあふれる目を見せた。

「人の命よりも、伴奏が大切なのか」

「そういうわけじゃないよ」

「いろいろ意見はこれから出てくるだろう。関崎は確かに指揮を投げ出して合唱をむちゃくちゃにした張本人かもしれない。倒れたのを無視してタクト振るという選択肢もあいつにはあっただろう。こっそり倒れた生徒を先生たちが連れて降りてあとはそのまま知らんぷりして歌うという手だってあっただろう」

——何、こいつ攻撃してくるんだらう？

突き刺さる言葉なのが、上総には悔しい。言葉がない。

「だが、あいつの性格上目の前でぱたんと頭を打って倒れた同級生を無視して指揮し続けるなんてことはできなかったわけだ。あいつにとって一番大切なことはなんなのか、それを考えれば答えはひとつ。人の心がわかる奴なんだ、あいつは」

ふと周りを見渡すと、女子たちが大きく頷いている。いやな予感がする。

「合唱をぶち壊す代わりに、関崎を選んだのは人の命だ。宇津木野の容態が心配だが、少なくともあいつがすぐに気づいた分、応急手当も早くすんだに違いない。関崎は合唱を続けること以上に、クラスメートの危機を救う方が最優先だと判断した。これは指揮者としては失格かもしれないが人間としては当然の行いだらう。そう思わないか」

「否定はしない、関崎が悪くないとは誰も言ってないだろ。俺が言いたいのはそんなことじゃないって」

「一生懸命練習した成果を見せびらかしたいがために、倒れた奴がいて合唱になんかならない状態のなかひとり楽しく弾き続けるような奴と関崎と一緒にされたくない。俺も人のことは言えないが、少なくともこんな歯抜けの状態の中せっかくチャンスをもたらえたのだからとスキップして合唱コンクールラストに賭けるような気持ちにはどうしてもなれない。そう感じているのは、まともな神経を持つ奴ならほとんどそうじゃないのか」

そこまで一方的にしゃべり続け、藤沖はふと、力を抜いたようにつぶやいた。

「もっとも、あいつが戻ってきてやろうといえど、俺も考えを改める。だが、立村、お前の自分本位な発想だけは、絶対に受け入れられない。お前はただ、『モルダウの流れ』を自分の中で完成させたいだけであって、クラスメートのために弾きたいとは全く思っていないはずだ」

「それはさすがに言い過ぎだろ、藤沖、それは誤解だって」

言い募る上総を藤沖は切り捨てた。

「どちらにせよ、決を取る必要はない。みな今は、宇津木野の回復と、関崎の判断を待つのみだ。俺はそれに従う。指揮者は関崎だからな」

みな、顔を合わせつつも納得した表情でまたふだんのおしゃべりに戻っていくのがわかる。男子連中も、「おい立村にそれはまずいだろ」「こいつまじで練習してたんだぞ、わかってやれよなあ」とかかばってくれる奴もいる。もっともそれが嬉しいと思える程上総もプライドを捨てていなかった。無言で自分の席に座り直し、藤沖にぶつけられた言葉を一言一句噛み締めるだけだった。

弾けなかった「モルダウの流れ」の旋律がまだ、耳に響いている。

自分の中では完成できなかったその音色。

——そうだよな、見抜かれてるよな。

その十八 休符の時間（1）

廊下がわやわや言い出した。一年クラスの合唱がちょうど終わったところなのだろう。A組連中も外に飛び出した。校内放送でも、

「これから十五分の休憩に入ります。鐘が鳴る一分前にみな席についてください。椅子はそのままお願いします」

アナウンスが流れている。ということはA組で話し合う時間もほとんどないということだった。上総もさっさと教室を出た。とりあえず誰か捕まえよう。一番よいのは男子トイレで誰か、できればC組連中の仲のいい奴を見つけて合唱の結果を確認しようと思う。

「おお、立村お前どこ行ってたんだよ」

トイレで手を洗っていたらやはり読み通り、天羽が声をかけてきた。ベストな人選だ。することすませているので互いゆっくり話ができる。上総は廊下に出るよう促し、階段の踊り場に向かった。

「見ての通りだったんだけどさ、あの後うちのクラスが出てってからどうなった？」

「まあ、あんなもんでしょ」

握りこぶしを作り、にやにやしなながら天羽は胸を張った。

「お前さんとは大変だったようだがなあ、とりあえずみな普通に歌ってそれで終わりだったぞ。難波ホームズもすっかり名指揮者気分で気取ってやがるし、それ見ている方がめっちゃくちゃ笑えたがなあ」

「それは見たかった」

お互い笑った。想像がつく。

「最後にガッツポーズが出るってのがあいつの美学としてどうなんだとつっこみたいんだが、まあいいだろ。それなりに点数も出るだろ」

ということはC組連中みな実力を発揮したということなのか。ふと通り過ぎようとする男子がひとり、羽飛がいる。天羽が呼び止めた。

「羽飛、立村がな、合唱コンクールのあのあとの流れ知りたがってるんだけどな、説明してやってもらえっか」

「どうしたどうした」

すぐに羽飛も上総に近づいてきた、同時に天羽がバトンタッチするような格好で羽飛の肩を叩き、

「そいじゃ俺は、ホームズねぎらいに行ってくる。あとで打ち上げやろうぜ」

どちらに話しかけたのかはわからないがそれだけ言って階段を降りていった。忙しそうではある。

「C組良かったらしいけど、他はどうだった？」

通行する生徒の邪魔にならないよう窓辺に羽飛を呼び寄せ、上総は尋ねた。

「うちのクラスはまあ盛り上がったぞ。天羽も言ってただろ」

親指立ててGOOD！と見せる。上総の信頼するふたりがそう言うのだから確実なのだろう。

「正直、課題曲は静かだったけどな。自由曲に進んだとたん学校中が手拍子の嵐になっちまうし、難波ものりのりで観客煽るし、ありゃあもう合唱コンクールつつうよりも、コンサートの乗りだよな。いやあ、盛り上がったぞ」

「観客煽るって、けどそれまずくないか」

目を白黒させてしまいそうになる。もちろん想像はつく。一年C組の自由曲はアニメのエンディングだったと聴いている。かなり陰ではいろいろ議論もあったらしいし選曲には肥後先生も難色を示していたという噂も耳にしている。しかし、会場を一体化させたとなればこれは現場の勝利だろう。下馬評通り、今年是一年C組の優勝もありうるかというところではないのか。ただ、指揮者である難波が盛り上がり過ぎて会場を煽るとなると、コンクールの評価としてはマイナスになりそうな気がする。

羽飛は全く意に介さずといった顔をしている。

「まあな。うるせえ先生なら文句言うかもな。でもいいじゃねえの。みんなすっげえ楽しかったって顔してたしな。全力疾走はしたぞ」

「C組の気合は他のクラスと全然違ってたからな」

思わずため息つきたくなる。A組がもしここまで気合入った状態で練習していたとしたら、今頃みなお通夜だったのではないかとも思う。さっきまでいた教室の雰囲気は確かに不完全燃焼の燃えかすがないわけではなかったけれども、再チャレンジしようとするだけの気迫も感じられなかった。かえってそれがいいといえればいいのかもかもしれない。

「けどなあ、立村、お前もよく弾いたよなあ。課題曲」

「ああ、なんとか」

お褒めの言葉はありがたくいただく。

「まじ驚いたぞ、そのあとはな。指揮者が突然倒れた子のとこ駆け寄って支えているの見て、うちのクラスの女子たちため息ついてたぞ。なんか勘違いしてるかもしれねえけど」

「目の前で倒れたからあいつのことだ、きっとすぐ助けにいきたかったんだよ」

「お前が一生懸命弾いてるのに誰も歌わないってのはなんだと思ったけど、指揮者いねばしょうがねえよなあ」

「思い切り怒られたよ、うちの担任に」

思わずぼそりとつぶやく。羽飛にだけは少くく愚痴っても撥は当たらないだろう。

「なんでだ？」

「クラスメートが倒れたというのに自分の事しか考えないでピアノ弾き続けているのは非常識だと、まあそんな感じ。俺からしたら義務を果たしてただけなんだけども」

「あちゃあ、それは災難だなあ。まあ元気出せ、お前の根性は他の奴みんな認めてっから。うちのクラスの野郎どもも立村があすこまで弾けるとは思ってねえみただったしなあ。天羽や難波も、中学時代にお前あそこまで弾けるんだったらピアニスト殺人事件みたいなドラマを評議委員会ビデオ演劇で仕込めたのにとか後悔しまくってたぞ」

「隠しといてよかった」

なんだか落ち着いてきた。A組は確かに自分のクラスではあるけれども、本当の意味でほっとする瞬間が実は少ない。仲が悪いわけでは……一部を除いて……決してないのだが、こうやってしょうもない話をして笑い合い、肩から余計な力が抜けるということがほとんどない。今も羽飛と話をしていなかったら、もやもやしたものをずっとかかえてA組に戻らざるを得なかったと思う。

「立村くん、ここにいたんだ。探したんだよ。それともうひとりいるね」

背中から声をかけてきたのは、振り向くまでもなく美里だった。ひょいとふたりの間に顔を突っ込んだ。三人並んで階段を降りた。羽飛が美里の顔を覗き込みげんこつを鼻の前につきだしている。

「どーだ、まいったか、うちのクラスすごかっただろ！」

「悔しいけど認めるわよ。あんた付き合い悪くなったなと思ってたけどあれだけ盛り上がっちゃったらもう、最低でも学年優勝は決まりよね」

「清坂氏のそこは？」

上総が尋ねると美里は首を振った。空元気を出しているようだった。

「良くも悪くもあんなもんじゃないの。可も不可もなくって感じ」

美里にしては珍しくクールな口調だった。こういうクラスイベントで美里が活躍しないというのは上総にとって「ありえない」ことでもある。

「でも、練習してただろ」

「まあね。つくづく中学時代のあの情熱はどこ行っちゃったのかなって思うな」

遠い目をする美里にこれ以上突っ込むことはやめることにした。上総が黙り込むと羽飛がすぐにからかいかい口調で、

「もう合唱コンクールなんぞ過去過去。次は学校祭どうなるかってことだなあ。もううちのクラスなんてな、学校祭のクラスイベントどうするかで真剣に話し合い始まってぞ」

「早いね。立村くんそこは？」

問われた。学校祭なんてそんな、はるか先の未来に思える。反射的に答えた。

「うちのクラスはそれ以前に、今日歌いそこねた自由曲を歌わせてもらうべきか否かで話し合いすら始まってないけどな」

「え、なにそれぞれ」

思った通り食いついてきた。羽飛にもそういえばまだ話していなかった。ふたり興味津々といった顔で上総を柱に追い詰める。今日は責められてないので平気で話すことにする。

「うちのクラス、自由曲結局一小節も歌えなかつただろ。肥後先生がそれはあまりにもあんまりだから、全クラス終わったあとで賞から外れた形でもいいなら歌っていいって言われたんだ」

もちろん野々村先生からの伝言ということは割愛する。

「うわあ、肥後先生気が利くね」

「本当ならそうしたほうが俺もいいと思う。けど、今、宇津木野さんに付き添って関崎と古川さ

んが病院に行っているし、しかも関崎は指揮者だろ。いつ戻ってくるかわからないし、指揮者がいない中で無理やり合唱というのな」

「まああれだ、うちのクラスみたいに元評議が三人も揃っているんだったら話は別だがなあ」

羽飛がしみじみつぶやく。言いたいことはよくわかる。

「万が一難波がインフルエンザで寝込んでも天羽がいる。天羽が急性アルコール中毒で病院に運ばれても更科がいる。更科が不純異性交友で……」

無言で美里が羽飛の額を叩いた。こちらもつっこみたいことはわかる。

「とにかく評議三人いれば一人くらい倒れてもなんとかなると、そう言いたいわけだよな」

「でもそうだね、私たちの頃って男子評議は全員指揮の特訓してたもんね」

中学の合唱コンクールにおいては男子評議が指揮者を承ることに決まっていたから、それなりに特訓はされた。あの三人ももちろん経験者だ。

「いいこと思いついた！」

突然美里が手を打ち上総を指差した。

「それならね、立村くんが指揮者になればいいよ。それが一番いい」

「はあ？ 美里何無茶言うんだあ？」

いきなりの発想に羽飛が戸惑い顔をしかめる。

「伴奏いなくなっちゃったらどうするんだよ」

上総が問かけようとするのを美里は首を振って留めつつ、

「最後まで聞いてよ。つまりね、立村くん指揮やったことあるでしょ？ 評議だもん」

「確かに」

「それなりに練習したよね？ 少なくとも難波くん程度は」

「たぶん難波よりは、できるかもしれない」

「俺もそれは認める。中学でうちのクラスの指揮をしていたお前はあの瞬間のみ輝いていたぞ」

羽飛も力強く肯定する。何が「あの瞬間」なのかは聞き流す。

「それに立村くん、伴奏でピアノ弾いてるから曲のふくらましかたとかそういうのはだいたいわかるじゃない？」

「まあ、それは確かに」

美里の言いたいことが長い付き合いのせいかわずつじんわり染み渡ってくる。羽飛が首をひねっているのは別に、もしかしたらこういうことなのか、という芯のようなものが自分の中に刺さってくる。ちくちくと刺激してくる。

「だったら立村くんが指揮者代わりにやっちゃえばいいの。どうせ即席なんだから間違ったりしても文句言われないう」

「ちょい待て、美里、立村いなくなっちゃったらA組の伴奏いなくなっちゃうだろ。まさかアカペラでやれってのか」

「違うってば！ 立村くんならわかるよね、ここから先」

まだつかみかねているらしい羽飛を適当にあしらい、美里は小声で囁いた。三人にしか聞こえ

ない程度の低い声で、

「伴奏やりたがっている人いるじゃない、疋田さん。あの子に押し付けちゃえばいいのよ。だってひどいんだよ。合唱コンクール一週間で切ってるのにね、伴奏やっぱり私たちやるから立村くん降りてって要求してるんだよ？ あったまくるよね！ そう思わない？」

「立村、んなことあったのかよ、ひでえなあ」

上総は黙っていた。美里と羽飛のやり取りだけで十分答えが糸巻きされてくる。

「そうなのそうなの。あんまりひどい言い草だったから私も立村くんのことアピールしといたけど、そんなにやりたがってるんだっちはいってぽんって弾いてもらえばいいのよ。どうせ暗譜してるんでしょ。楽譜なら立村くんが私たちのあげたノート疋田さんに見せてあげればいいのよ。いやな顔するかもしれないけどその時はちゃんと言い放ってあげればいいの。ちゃんと努力している人間に対していきなりいいとこどりしようとするなんて最低だとかなんとかね。そのくらい言ったっていいと思うよ」

「すげえしっぺ返しだなあ。けど、立村、お前それはいくらなんでもあれだろ」

美里の言葉は半分以上カットして聞いていた。

必要な言葉だけを拾っていた。

上総は指を数えた。これから体育館に戻って二年の合唱を聴く。そのあとで給食、最後に三年の合唱。そのあとだとだいたい二時間ある。その間に関崎が戻るかどうかを読めない。こずえも同様だ。もし誰も戻ってこなかったとしたら……確かに。

——あと二時間から三時間、か。

決断にはまだ時間がある。ひとり静かに考える時間は、体育館でなら、ある。

鐘が鳴った。美里と羽飛に手を振りそのまま一年A組廊下に整列した。先頭を率いるのは評議委員の藤沖で自分は最後尾だった。ひとりで考えるには一番いい位置だった。これから一時間弱、ゆっくりと頭の中を整理することにする。

——清坂氏、ありがとう。

自分ひとりでは決してたどり着けない答えだった。あの日、美里が上総の援護射撃をしてくれたことにただ感謝したかった。いつもそうだった。上総がつまづきそうになるたび、美里はいつもそばで手を差し伸べてくれる。中学時代からずっとそうだった。

その十八 休符の時間（2）

合唱コンクール二年生の部が始まった。

一番外通路沿いの席に座り誰と話すでもなく曲に聴き入るつもりでいた。

もちろんそれなりに考えるつもりでもいた。

——清坂氏の言う通り、俺が指揮者になり疋田さんに伴奏を頼めば最も綺麗な形にまとまる。

美里の提案をじっくり検討しながら軽く目を閉じた。居眠りしたわけではない。集中したかっただけだ。二年A組英語科の合唱が始まる寸前で細目で眺めた。課題曲は聞いたことのない歌だったので今ひとつ馴染めない。

——ぶっつけ本番でできるかということ自信ないけど、「モルダウの流れ」だけであればだいたいどこで盛り上げればいいのかくらいはピアノを弾いた時の感覚でなんとかなるのかな。いや、指揮者がいなくても歌詞はみんな暗記しているし、ああいったことのあとだからってことで多少間違っても大目に見てもらえるだろう。賞狙いじゃないんだから。

かなり姑息な発想だとは思いますがしょうがない。上総がいきなりタクトを振ることになった場合、そう簡単に引き継げるとは思っていない。それでも指揮台に誰かがいるということが大切な点である以上それだけでも意味があるんじゃないかと思える。関崎が戻ってこない以上、全く誰もいない状態で始めるわけにはいかない。

——でも、受け入れてもらえるかな。

聞きなれぬ合唱曲の響きが、いつの間にか心地よく身体に染み渡る。さすが二年生になると声も揃い、みな美しい日本語を発しているのに気づく。英語科の場合は三年間同じクラスということもあるし、まとまりやすいということもあるのだろう。

——藤沖の考えがあの場合ではっきり申し渡された以上、楯突いてまで歌いたって奴はそういないだろうな。俺だって自分が関係ない立場だったらきっとそう思っただろうし。けど、なんかひっかかるんだよな。なんでだろう。

もっとも藤沖は、関崎の意思待ちだ。関崎さえ戻ってきてやる気を見せればあっさりひっくり返るだろう。本人もそう明言している。一番ベストなのは関崎が一刻も早く教室に戻ってきて肥後先生あたりに説得してもらおうことじゃないかと思う。きっと関崎の性格上あっさり受け入れ、男女みな引っ張ろうとするだろう。上総の発言には反発するかもしれないが関崎ならば話は別。一瞬のうちに空気の色が変わって盛り上がること間違いなし。

——そうなんだよな、俺じゃだめなんだ。

無難に二年A組の合唱は終了した。上手か下手かそこまで判断するだけの頭の隙間はなかった。最後まで歌い切る、そのことの重さ、それが今はたまらなく大きなスペースを占めている。外通路を笑顔で通り過ぎていく二年A組のみなみなさまを見送りつつ上総はそっと拍手を送った。

二年B組の一群が入れ替わりで舞台上に整列した。あまり上級生たちの情報には興味がなかったのだが、本条先輩世代の評議委員関係者が多く固まっているクラスということもあって、かな

りの熱唱が期待できるとの下馬評あり。上総も見知っている先輩たちが多く、いったん心して聴くことにした。どうも中学評議委員会出身者がひとつの組に固められるというのは上総たちの世代だけではないらしかった。クラス分けでも同じということであれば来年天羽・難波・更科の三人組がまたクラスメートとしてまとまる可能性も大だろう。

それがいいか悪いかは判断しかねるが。

指揮者も知り合いの男子先輩だった。さすが評議出身者手馴れている素振りで伴奏に合図を送る。前奏が流れる……と思いきや不意にそれが止まった。

「おい、なんだいったい」

隣の席にいた男子が上総をつつく。明らかに何かが起きたらしいが指揮台の先輩は冷静に腕で調子をとっている。やめようとしなない。

「指揮、し続けてるな」

「すげえ、先輩やっぱすげえよなあ。あの人評議だったよな確か」

附属上がりの生徒たちには中学評議出身者が誰かはほとんど把握しているはずだ。当然中学二年次の合唱コンクールで指揮者経験があるということも。男子評議イコール指揮者、この流れは崩れない。

ピアノの音が復活する気配もない。カーテンに隠されていて何が起きたのか見えない。マイクで通常ピアノの音を拾い体育館内に流す仕様なのだが、代わりにかすかなうめき声のようなものが聞こえてきた。二年B組の担任がカーテンの奥に入っていき、何かを話しかけている様子だが詳細は全く不明のままだった。

体育館内の生徒たちがざわめく中、歌声はそのまま当たり前のように流れ、かすかなピアノ周りの気配を打ち消していく。指揮台の先輩は心なしか大きく両腕を振りつつ、時々男子、また女子のみに合図を送りつつ盛り上げていこうとしているのが上総にも伝わってくる。最初はハプニングの連続に呆れ顔だった生徒たちも一気に引き寄せられるように見入っている。歌というよりも指揮者の身振り手振りであると同時に背中揺れに。

——先輩落ち着いてる。伴奏が復活しないのに、ずっと振り続けてるんだ。それに合唱もそのまま必死についていこうとしている。ハーモニーがどうかああとか言えないけど、少なくともちゃんと、最後まで進んでいる。

不意に誰かが後ろから手拍子を打つ音が聞こえる。

——誰だ？

振り返ろうとする間もなく、その手拍子はひとつ、またふたつ、みつつよついつつ、増えていく。釣られるように隣の男子も、また脇にいた先生たちも、その他の生徒たちも、みなタクトに合わせて手拍子を繰り返している。上総も慌てて続いた。

——指揮者の拍子がずれないように、助けようとしてるんだな。

誰がきっかけなのか、そんなことなどどうでもいい。今はただ、二年B組の合唱が最後までしっかりと歌い切ることができるようにと祈りつつ、痛くなるほど手を打つのみだった。

——もう少し、あと、もう少し。

とうとうアカペラで課題曲を歌いきった二年B組の指揮者は一旦降りて深々と礼をした。

——関崎の真似かよ、って言いたいけど、俺も同じ立場ならそうするな。

伴奏者が最後まで眠った状態で一曲終わらせたこと自体が奇跡だと思う。でもおそらく合唱コンクールの賞対象にはならないだろう。一年A組に続く棄権ニクラス目、こんな悲惨なコンクール今まであったろうか。知り合いの先輩たちの顔を思い浮かべ息が苦しくなる。こういう時本条先輩だったらどうしているだろう。

ねぎらいの拍手とともに、てっきり降りると思っていた指揮者の先輩は再び指揮台に登った。何も迷いなどないように見えた。再び生徒たちがざわめくが先生たちはにこやかにうなづいている。二年B組の担任教師も落ち着いてすぐに席に戻っている。ピアノの伴奏者はまだこもったままのようだった。

「おい、まさか、自由曲も歌うのかよ」

「たぶん、そういうことだと思う」

上総は目を先輩に向けたままつぶやいた。

「ピアノの人復活したのかな。なら続けるよな」

読みは外れていた。指揮台の先輩は同じように手を高く上げた。手を振り下ろした時も伴奏は始まらず、しばらくの沈黙の後みな歌いだしたのは「誰もいない海」だった。

「ピアノのいない歌、かよ」

面白くもない洒落を言う隣男子に上総は頷きつつ黙って聴き入った。

——伴奏なくても、コンクールの賞対象にはなるのかな。なるよな、きっと。最後まで歌い切れれば絶対に。

また同じく拍手が響く。メロディーの切なさとは違い、どこか明るく高らかな音がした。何をしなくてはならないのかが上総を含め聴衆たちには伝わっているのだろう。今やらねばならないのは伴奏者が何らかの事情で倒れてしまった中、最後の最後までしっかり参加し続けようとする二年B組の歌声を支えること。拍手がはたして助けになるのか、それすら上総にははっきり判断できないけれど、せめて応援する気持ちだけは届けたい。自己満足でも、せめて、最後まで。絶対に最後まで歌いきってほしい。それだけで十分だから、どうかもう少し、あと少し。

歌が終わった後もしばらく指揮者は振り続けていた。頭をぐるぐる回していた。異様にも見えるその仕草だが、ふっと終わりのポーズを取り、そのまま指揮台から降りた。振り返ったその顔は、思い切り歪んでいた。何を意味しているかが一瞬のうちに伝わり、先走った拍手もやんだ。

「聞いていただいたみなさん、僕たち二年B組を助けていただきありがとうございます！」

膝をついて、そのまま頭を下げた。土下座ではない。ただ膝から力が抜けたような格好だった。二年B組の担任が全速力で舞台に走り、膝をついたままの先輩の肩を抱いた。立ち上がらせるような格好を取り、後ろで同じく涙で頬を濡らしている男女生徒たちに目を向けた後、一緒に、「ありがとうございます！」

どら声で叫んだ。嵐のような拍手とはこのことかもしれない。体育館内が凄まじい拍手に満たされた中でひとり、上総の脇をすり抜けていく女子生徒の姿が見えた。顔を覆い、全力で体育館扉から抜け出していく様を上総は拍手を忘れて見送っていた。たぶん彼女が二年B組の伴奏者であり、何らかの理由でその責任を果たせなかったことは確かだった。理由を問う気はなかったけれども、感動を共有できる立場でない以上そのままピアノの前に座ってられる気持ちでないことだけはうかがい知れた。

その十八 休符の時間（3）

二年B組の出来事が強烈過ぎて他クラスの印象が薄いまま給食時間および昼休みに入った。これも上総が知らされていなかったことの一つなのだが、

「給食が終わったあとの昼休みは、通常二十分のところ三十分にします」

との放送が流れ、通常よりも十分延長されている。

「最初からああだったのか」

「さあね」

音楽委員に確認してもよくわからない顔をしている。どちらにせよ給食をさっさと食べ終われば比較的ゆっくり準備ができるということだろう。一、二年はすでにすることすませて気持ちも楽、腹もいっぱいになれば眠たくもなる。こんなのんびりムードの中、誰がその眠気を覚ますのだろう。いつの間にか皆、合唱コンクールの優勝候補最終予想に興じている。男子も女子もそれぞれの立場で語っている。

「二Bすごかったね！」

「ほんと、もろ泣けたよねえ。すごい、菅西先輩最高！」

伴奏なしで延々と指揮に興じた先輩をただ褒め称える声あり。

「あの先輩って中学時代評議だったよね」

「うん、あんまり目立たなかったけど。二年のクラスって評議の人たちがほとんど固まっているから団結力すごいって聞いたことある」

「そうなんだあ。でも、あの世代って確か本条先輩がトップだったんじゃ」

「そうそう、本条先輩が凄すぎてあまり名前覚えてなかったんだけどやっぱりすごいよねえ。伊達に評議やってるわけじゃないって感じ」

——評議はどの立場でもいい加減な気分ではできないよ。

給食のミートソースを平らげた後、さっさと下げて上総は廊下に出た。給食後の余裕が若干あるのならその時間を利用して歌うか否かの決断をするべきじゃないかと思うのだが、藤沖の姿がなく、当然麻生先生や関崎、古川の戻ってくる気配もない。

——形だけでもやっぱり話し合いすべきだと思うんだけどな。

だいぶ時間も経っているしみな、それなりに考えることもあるだろう。特についさっきの二年B組の一件を目の当たりにしたクラスメートたちに気持ちの変化がないとも限らない。少なくとも上総にとってはみしりと身体に食い込んくるものが確かにある。

しばらく廊下をうろうろしたが上総が話を持ちかけたい相手が誰も戻ってこない以上しかたない。上総は教室に戻った。見ると女子の数名が男子グループに、

「藤沖くん、どこ行っちゃったのかな」

「あいつ？ さあなあ。職員室か、それとも外で発声練習か」

などとそれなりの会話を交わしている。珍しく探し人が上総と一緒にきた。そっと男子側から

声をかけてみた。

「藤沖に何か話したいことあるの。俺も探してるんだけど」

「立村くんも？」

少し意外そうに女子たちが上総の顔を覗き込む。もともと上総と藤沖との不仲は彼女たちも知っているはずだ。

「合唱コンクールの、野々村先生が話していた例の件でなんだけど」

「立村くんも？」

「お前もかよ」

今度は男子連中も同時に声を上げた。なんとなく感触がよい。

「一応、昼休み終了までに結論出さないとまずいかなと思って」

「みんなで歌い切るってこと、よね？」

女子のひとりが小さな声で確認してきた。上総はもちろん頷いた。

「歌うかどうかは別として、形だけでも決を取る必要あると思ったから聞いたかったんだけどさ。さっき話をしたら藤沖は個人的に全員揃っていないと意味がないという考えだったようだけど俺はなんか違うなと思ったから、もう一度相談したかったんだ」

同じクラスでありながら女子たちの顔が今ひとつ認識できていない。自分でも困った部分なのだが、とりあえず表情を伺う限り上総の意見に露骨な不快感は感じていないようだった。ものすごく重要な部分である。

「けど関崎が戻ってきたらやるとか言ってただろ」

別の男子が口を挟む。

「でも関崎くんもこずえちゃんもまだ戻ってきてないし。間に合うのかな。あと二十分くらいしかないのに」

「そう、そこなんだけど」

上総は無理やり自分に話を引き戻した。

「戻ってきたら指揮者の関崎にも確認するつもりだったけど、この調子だと戻って来ない可能性が高いよ。たぶん宇津木野さんの体調のこともあるんだと思う」

みな黙った。ふと気づくと他の女子たちや藤沖以外の男子たちもずりずりと上総のそばに集まってきている。自分が蜜のような状態になったのかと勘違いしそうだがもちろんありえないので戒めつつ進める。

「藤沖の意見も一理あるしそれでもいいかとは思っていたんだけどさ」

ここで少し、手を入れてみることにする。皆聴き入っているのがわかる。中にはうなづいている奴もいる。主に男子。

「さっきの二年B組の合唱聴いていて、やはり最後まで歌い切るってことの重さみたいなの、やはりあるなとか思ったんだ」

「わかる、うんそれわかる」

おそらく合唱のソプラノパートリーダー担当の女子がしみじみつぶやいている。吹奏楽部の子だ。

「菅西先輩の機転も見事だったけど、成功した一番の理由ははクラスの人たちがみんなとにかくラストまで持っていきたい。そういう執念みたいなのがあったんじゃないかな」

「確かに、先輩たちほんとすごかった」

涙ぐんでいる女子もいる。手応えありか。男子たちもかつての先輩評議たち……本条先輩の陰に隠れて忘れ去られていたものの名前だけは記憶に残っている……の思い出をぽつりぽつりつぶやいている。

「本当は指揮者である関崎が揃ったところで藤沖と最終決断してもらうのが一番綺麗な形だと思う。本当ならそれが当然だけど実際いない以上この十五分以内にクラス内で決断するしかない。そこで藤沖に臨時でクラスの決をとってもらって、出るなら出る出ないなら出ないと意思表示すべきじゃないかなということで探してたんだけどさ」

「けど関崎くんがいないと指揮者、どうしよう？ さっきは指揮者がいたから無事終わったけど、うちのクラス、関崎くんがいないと形にならないよ」

「藤沖じゃだめなのか？」

男子、女子ともにごもつともな質問が飛ぶ。そうだ、藤沖が指揮をするという案もある。一応は評議なのだから当然だ。ちらと思ったのも束の間、

「いや、無理だ。あいつ指揮やったこと一度もねえよ」

元青大附中B組出身の男子が発言する。

「立村も評議だから知ってるだろ？ 藤沖、音楽からっきしアウトだぞ。練習してれば別だけどいきなり押し付けるってのはどうよ」

「そうか、ならば」

まだ藤沖を始め関崎、こずえともに戻る気配はない。残り時間はあと十分。追い風あり。

上総は全員の顔を見渡した。判別つきづらい女子たちの顔だがそこには上総の判断を待っている気配が確かにある。一方男子たちも、かたず飲んで待っているようにも見える。

「俺の提案、もしよかったらなんだけど」

念のため、女子たちの中に足田さんが混じっているかどうかだけ確認した。一番重要なポイントだった。やはりしっかりとした眼差しでもって上総を見上げている。

ふたつ心の中で数え、言葉にした。

「指揮は俺がやる。それと伴奏を、本当に申し訳ないけど、足田さんをお願いしたいんだ」

そのまま足田さんをじっと見つめた。はっと口を押さえるような仕草をした足田さんは、小柄な身体を震わせるようにして、ただひとり固まっていた。女子たちもさすがに驚いた様子で上総に質問をぶつけてくる。ただ責任を問うというよりも、「なぜ？」といった純粋な問いに聞こえた。

「立村くん、それ、本気で言ってるの？」

「そりゃ、立村くん評議委員長だったし指揮できるかもしれないけど、でも全然練習してないでしょ。指揮ってそんな甘くないよ」

「伴奏者いなくなって、二Bみたいに歌えるかどうかって私、自信ない」

上総は様々な問いを無視して足田さんに近づいた。小柄な足田さんは、そっと片手を口に当て

たまま、小刻みに首を振った。

「私、そんな、いきなり」

「ごめん、いきなりで非常識なのは俺もわかってる。けど、これも俺の勝手な想像なんだけど」
足田さんだけを上総はじっと見据えた。ずっと奥底にひっかかっていたもののかさぶたをはがすように、一気に言葉をほとばしらせた。

「足田さんも宇津木野さんも、俺には想像できないくらいの音楽感性の持ち主だから、きっと俺の演奏では満足できないってのは納得できるんだ。肥後先生からも説明してもらったし。それでも俺が今までの練習成果をどうしても発揮したいってわがまま通してここまできたけど、もしかしたら今ここで足田さんが伴奏に回ることによって、宇津木野さんも理想としているようなハーモニーになるんじゃないかなって気がするんだ。話、ぐちゃぐちゃでごめん」

口から手を外した足田さん、口が細く開いていた。取り囲んでいた女子たちが息を飲んでいる。男子たちが「なんじゃそりゃそのハーモニーっての」と確認し合っている。

「私たち、立村くんにひどいこと言っちゃったのは申し訳ないと思ってるの」

「そんなことないって」

か細く詫びの言葉をつぶやく足田さんを上総は押しとどめた。確認したいのはそういうことじゃない。

「さっきの二年B組、伴奏してた人これからきっと辛い思いするんじゃないかなって気がするんだ。どういう事情かわからないけど実際合唱を壊してしまったも同然だから。あのクラスは元評議の人たちがたくさん集まっているからなんとかフォローしてくれると思うけど、それと同じことをうちのクラスでも考えなくちゃいけないんじゃないかなって気、するんだけど、どう思う」

さらに押し進めた。みな、しんと静まり返り茶々入れる奴もいない。男女ともに。

「宇津木野さんも、事情が全然違うとはいえきっと苦しいと思うんだ。俺もよくわからないけど宇津木野さんの演奏は二回聴かせてもらって鬼気迫るって感じだったし、俺にああいう話を持ってきたということはきっと音に対するこだわりが強かったんじゃないかな。けど、結果としてああいう形になり合唱そのものが流れてしまったということは、宇津木野さんにとってもきっと悔しくてならないんじゃないかな。少なくとも俺だったら罪悪感のかたまりになる。どんなにA組の人たちが責めなかったとしても、あれだけピアノが好きな人だったら、なおのことだよ」

止めどもなく言葉が溢れる。ついさっきまで自分の奥底にうもれていたものが言葉で形作られていく。目の前の足田さんは瞳を潤ませ、ただじっと上総の言葉に聴き入っている。

「もし、足田さんがピアノの伴奏を引き受けてくれたら少なくとも俺よりは宇津木野さんが聴きたかった合唱ができるんじゃないかって気がするんだ。もう賞には届かないかもしれないけど、だからこそこういうイレギュラーなやり方が許されるところもある。ここで最後まで歌い切ることができたらきっと、元気になった宇津木野さんをみんな暖かく迎えられるんじゃないかな。賞とは別に、音楽としての完成形を作り上げるためにベストを尽くしたってことで。来年、英語科は三年持ち上がりでもっといいものを作ればいい。伴奏は来年以降ふたりに返すから」

息もつかずまくし立てた上総を、後ろから男女問わず「そうかもな」「やってもいいかもな

」「ま、賞とは関係ねえしな」「足田ちゃんのピアノ好きだし」「宇津木野さんもきっと元気になるし」それぞれのつぶやきが支えてくれるようだった。

足田さんが手を差し伸べた。口元がほんのり赤らみ、何かを決めたような瞳で、「立村くん、『モルダウ』の楽譜貸してもらえる？」

語りかけ、ぐるりと取り囲んでいる生徒たちを見渡し付け加えた。

「本番前に一度だけ弾く練習したいのだけど、私だけ遅れて入場してもいい？」

一瞬空気が止まったような気がした。同時に誰ともなく拍手が始まった。後ろなのか前なのか、一年A組の生徒たちが全員足田さんを囲み笑顔で称えているように見えた。

「ありがとう、よかった」

上総をねぎらう気配はなかったが、それでよかった。これから上総にはまだやるべき仕事が山のようにある。廊下から激しい足音が響き渡る。たぶん奴だ。待ち人だ。

後ろ扉が開いた。息絶え絶えの藤沖が、苦しげにもたれながら叫んだ。

「お前ら、大変だ、関崎ども今渋滞にひっかかっちゃったみたいで間に合わないかもしれん。申し訳ないが合唱は」

——こいつ、やる気だったのか。

瞬時に上総は藤沖へ告げた。

「藤沖、合唱に参加するか否かの決を今、ここで取ってくれないか」

「なんだと？ あいつら戻ってこないなら無理に」

「評議ひとりの判断ではなく、クラス総意を確認してくれないか。それと、結果がでてもし参加することになったら」

留めを刺した。

「A組クラス評議として、すぐに肥後先生か野々村先生に参加する旨連絡を入れてくれないか。それと肥後先生を捕まえて、ピアノを少しだけ貸してもらって練習させてもらえるよう頼み込んでもらえると助かる。足田さんを練習させたいんだ」

「足田を練習って、どういうことだ？ おい」

「俺が関崎の代わりに指揮者になる。伴奏は足田さんが弾く」

「そんなこと聞いてないぞ！」

「悪いけど時間がないんだ。多数決でいいからお前の仕切りで取ってくれ」

「なぜ立村、お前に命令をされなくちゃいけないんだ！」

怒鳴り返す藤沖に上総は即答した。

「それが評議の仕事なんだ。時間がない、早く進めてくれ」

最終決議の結果、藤沖を含め合唱参加に反対するものはいなかった。

上総を睨みつけた後、藤沖はそのまま教室を飛び出した。

鐘が鳴り、放送委員の促す声がスピーカーから流れる中、上総と足田さんを除いた一年A組の

生徒は体育館へ椅子を運び始めた。

その十八 休符の時間（４）

教室に残されたふたりが会話する間もほとんどなく、藤沖が野々村先生を連れて戻ってきた。この先生も一年B組の担任なんだがとつっこみたいのを飲み込み、上総は頭を下げた。

「遅くなり申し訳ありません」

「よく決断しましたね」

穏やかに微笑み、隣で仏頂面している藤沖にも笑いかけた後、野々村先生は上総の真正面まできた。じっと見つめてくる黒い瞳。とにかく時間が限られている以上、すべきことを頼みこむしかない。それができるのは今のところ上総だけのようだ。藤沖には頼れそうにない。

「うちのクラスの人たちはここにいる僕たち三人をのぞき全員体育館にいます。合唱そのものは今まで通りで問題ないと思うのですが、僕と疋田さんはやはりぶっつけ本番になるのが怖いので、音楽室を十五分程度貸してもらえませんか。一回だけ音合わせをさせてもらいたいんですが」

野々村先生は腕時計を脈のところで見た。首をかしげた後、

「三年生の合唱はだいたい一時間以内に終わりますから、かんたんに合わせるだけであればたぶん間に合うでしょうね。鍵はすぐ私が借りてきます。それと肥後先生からの提案なのですから」

不安げな疋田さんにも安心させるような柔らかい口調で、

「三年のみなさんが歌い終えたあとといったん休憩が入ります。せいぜいお手洗い休憩のようなものですから十分程度ですけれども。そのあと肥後先生の賞発表と講評で十五分くらいはかかることでしょう。そのあと、合唱コンクールの締めといった形で特別に一年A組のみなさんの『モルダウの流れ』を歌っていただく手はずとなります。だいたい一時間は余裕がありますね」

「ありがとうございます」

計算が苦手な上総でも、泡吹いて駆けずり回らなくてもよいことだけは把握できた。

「では、藤沖くんをお願いします」

野々村先生は次に、隣の藤沖へ声をかけた。

「職員室の事務係の人に頼んで、関崎くんと古川さん、麻生先生が戻ってきたらすぐに体育館に向かうよう申し伝えてください。そろそろ学校についてもいい頃なのですが、どうやら渋滞か周囲の車の事故に巻き込まれたかしているようで、到着が遅れているようです」

「では関崎たちは、参加は」

「難しい可能性が大ですね」

きわめてあっさりとして野々村先生が告げた。同時にがっくり肩を落とす藤沖。

「先生、宇津木野さんの容態は」

誰もが気になっているくせに誰も尋ねなかったことを、疋田さんがおそろおそろ口にした。野々村先生も言葉に困っている様子だったが、

「かんたんな処置を行ったとは伺っていますが具体的にどのようなものかとは、まだ。ただ生命に関わる病気ではないとの連絡がありました」

かなり曖昧な表現なのが、かえって不安を煽る。少なくとも疋田さんの表情は晴れなかった。

うつむいてため息を吐いている。

「藤沖くん、その連絡を終えたら体育館に戻り待機しててください。どちらにせよ三年合唱が終わるまでの間は動けませんので。休憩時間に入りましたら順次袖幕で整列して待っていてもらい、伴奏と指揮のふたりが揃ったところで舞台上がりましょう。そのあたりの段取りはこれから私が音楽委員の人たちに指示しておきます」

「一時間半だと、関崎たちも間に合うかもしれないか」

藤沖がぼそりとつぶやく。ここで野々村先生も明るく押す。

「きっと間に合いますよ。大丈夫です」

少しだけ元気を取り戻したらしい藤沖は、上総たちに目もくれず野々村先生にだけ一礼をし駆け出していった。指示にはきっちり従う性格なのだろう。

野々村先生は改めて上総と足田さんに告げた。

「では、音楽室前で待っていてくださいね。すぐ、鍵を取りに行ってきますので」

これまで上総は足田さんと直接話したことが数えるほどしかなかった。あえていえば月曜の伴奏交代提案の時のみ。実際それ以上の会話が思いつかないし、実は顔も今だに曖昧だ。今は一体一で話しているから判別つくものの集団だったらもう無理だろう。とりあえずはふたりで三階の音楽室に向かうことにする。もちろん楽譜はしっかり持っていく。

「さっきは、無茶な頼みごとを引き受けてくれてありがとう。本当に助かった」

「私も、できることあれば手伝いたかったから。こちらのほうこそ感謝しているの」

足田さんは小柄な身体をすくめるようにして、それでも上総の顔を見て答えた。

「宇津木野さんはピアノだけではなくて、音楽そのものを心底好きでいる人だから、立村くんの言った通り中途半端で終わらせるのは本意じゃないと思う」

「やはりそうだよな」

上総も改めて自分に問い直し、揺れがないことを再確認した。勢いであだこうだと喚いてしまったけれども、結論は変わらない。藤沖の意見に真っ向から対立してしまったけれども、どういう結末にせよ最後まで歌い切ることこそ一番大切なことじゃないかと思う。たぶん関崎も同席していたら、あいつのことだ、上総の考えに共感してくれたんじゃないかと思う。藤沖だってああ言葉を左右にしたのは言いだしっぺが虫の好かない上総だからであって、同じことを関崎が発言すれば決して反対はしなかつたらう。

「楽譜、借りていい？」

「ぜひ」

三階へ向かう階段を昇りながら、楽譜ノートを渡す。すぐに足田さんが開いて音楽室の前でじっと見入る。何度か指で譜面を触りながら片手で膝を叩くような仕草をする。黙って見ているとずっと顔を上げ、

「関崎くんとは伴奏の打ち合わせとかしていたの？」

いきなり問われた。

「細かくはないけれど、それなりにはしていた。けどお互い音楽に詳しいわけではないからお

おざっぱにだけどな」

もともと関崎はそれほど音楽に造詣深いわけではない。歌声だけは神のものだが、それイコール音楽と直結しない。本人がずっと音痴だと思い込んでいたのだから当然ではある。いきなり指揮者をあてがわれて最初は混乱していたようだが、とりあえずテンポだけ間違えないようにしてもらいたいということを伝えてそれで片付いているはずだった。

「課題曲ではとにかく、テンポを一定にしてほしいとだけ伝えてそれ以上のことは伝えてないな」

「やはりそうなんだ」

ぼそり、とつぶやいた疋田さんはまた大きなため息をついた。

「やはり聞きづらいよな。ごめん」

「違うの、私がどう弾けばいいかだけ考えているの」

問うのも失礼になりそうで上総が黙っていると、

「課題曲歌っていた時、テンポはきちり整っていたけれどもなんとなくみな歌いづらそうな感じがしていたから、そこ、なんとかしたいなと思って」

——歌いづらい、かよ。

全く頭になかった。おそらく関崎も同じはずだと確信している。疋田さんは目線を楽譜に置いたまま続けた。

「今からだと難しいかもしれないけれど、みんなが気持ちよく歌えるように弾ければいいな。『モルダウの流れ』は曲の盛り上がりがはっきりしているからそこさえ押さえればきっと、もっと、よくなると思う。私も気づいた時もっとはっきりみんなに伝えればよかった。こずえちゃんにも、もっとわかりやすく話せばよかった。ごめんなさい、今更だとわかってるけど、どうしても止まらないの。音楽の話になると私も、宇津木野さんも」

野々村先生が音楽室の鍵を握りしめて反対側の階段を走ってくるまでの間、疋田さんはずっと楽譜を見つめたまま、上総には理解しがたいメロディのこだわりを語り続けていた。ひとつひとつその言葉を耳に封じ込め、上総は右手でゆっくりと「モルダウの流れ」のメロディに合わせて拍子を取ってみた。自分で弾いた曲通りに、ゆっくりと。

その十八 休符の時間（5）

想像していた以上に疋田さんのこだわりは凄まじいものだった。

決して声高に文句を言うでもなく、誰かを責めるでもない。

ただひたすら、繰り返し弾き続ける。それも何かひっかかるものを感じると、

「ごめんなさい、立村くん、このところをもう一度合わせてもらえる？」

どこが疑問なのかよくわからないのだが五回以上は繰り返し先に進む。音楽にはど素人の上総にはわからないことだらけだが、とことん付き合うことにした。

最後まで進んだ後、今度は上総に向かって、

「立村くん、申し訳ないのだけど、最初の入り方をこのテンポで行きたいんだけど」

ピアノを弾いてそのリズムをぴたりと合わせるよう求められる。

「無理に、じゃなくていいから」

——いや合わせないとまずいだろう。

単に手を振って指揮台を埋めているだけではどうやら勤められそうにない。「モルダウの流れ」は決して速く弾くタイプの曲ではないのだが、疋田さんにとってはベストなスピードというものが体感できているようで、指揮者の上総にもそれを何度も求めてくる。

「もう少し、ゆったりと」

「少し遅すぎるので心持ち早めに」

「この溜めをもっとゆっくりと、呼吸をいったん止めるような感じで」

——あと一時間もないのにほんと間に合うのかな。

最初、上総にとっての「間に合う」は関崎およびこずえのふたりが学校に到着できるかどうかという意味合いだった。しかし、音楽室に閉じこもりグランドピアノと……疋田さんは当然のようにアップライトではなくグランドピアノに手をかけた……にらめっこして改めて気づいた。あまりにも足りない。時間も、自分が曲を飲み込む時間も。

——指揮者を舐めてはいけなかったんだな。

それでも自分で「モルダウの流れ」を一通り弾いていたからこそ、見えてくるものもある。あたためてお手本のような疋田さんの演奏をエンドレスで聴かされるうちに、

「お前の演奏は棒のようだ」

と父に揶揄された意味が理解できた。上総がずっと楽譜を間違いなく弾くことと最後まで演奏することのみを考えていたのに対して、疋田さんはまず歌う人たちがどうしたら声を出しやすく伴奏できるかをメインに置いている。突然押し付けられた伴奏だというのにあっという間に構成を組み立てて、限られた時間でベストを尽くそうとしている。

「本当は、みんなの歌とも合わせたかったのだけど」

「そうだね」

自然につぶやいてはっと気づいた。本当であれば月曜の段階で上総が決断していれば十分間に合った話ではないだろうか。さすがに膝をついて頭を抱えるわけにはいかないが、実はそれこ

そ完璧な展開だったのではないだろうか。

楽譜を覗き込みつつ、足田さんの鋭い指導についていきつつ、

——やはり伴奏は早い段階で譲った方がよかったんだよな。

後悔先に立たずとはこのことだった。あの時は自分で立候補した以上責任を果たしたいという気持ちが強かったし、なんとか間違えずに弾くところまでは仕上がっていたから足田さんと宇津木野さんとの申し出をきっぱり断ってしまった。もちろん来年以降は上総もおとなしく合唱の中に潜り込むつもりでいるが、今年だけはあれだけいろいろな人たちに世話を焼かせてしまった以上形にしたかった。たぶん一生に一度、あるかないか、といったところか。来年以降は否応無しに藤沖あたりか、もしくは女子でかまわなければ古川こずえあたりが指揮を担当することだろう。まあいい。「恋はみずいろ」だけでも最後まで無難に弾くことができただけでも十分、自分の勤めは果たしたはずだ。

「立村くん、細かい注文ばかりたくさん並べてしまっておめんなさい。あと気になるのが男子の歌は、本当であればもう少しボリュームが欲しいところ」

「ごめん、足田さん、それも無理」

指揮でなんとかなる部分は必死に練習するけれども、さすがに合唱部分はどうしようもない。上総ができるのは「ここんここはもう少しでかい声で歌えよ」とかその程度だ。ただ足田さんの言いたいことはわからないでもなく、全体的に女子が頑張ってる分男声合唱の響きが物足りないというのは確かにある。

「そうね、しょうがないか」

肩を落とし、また足田さんは「モルダウの流れ」後半のメロディを弾き始めた。

——そうだよな、そういう細かいところを詰めることが、本当だったらあと四日くらい余裕あればできたんだ。

「立村くん、足田さん、もうそろそろ休憩時間に入ります」

気がつけばもう一時間近く経っていたらしい。時計に目をやると野々村先生の言う通りちょうど一時間少しで二時を回ろうとしている。すっかり足田さんの熱烈特訓に付き合わされてしまわずと一時間立ちっぱなし。足がそれこそ棒のようだった。

「ご連絡ありがとうございます。あの、それで、関崎たちは」

野々村先生は上総の隣に寄り添うようにして、首を振った。

「まだのようです。もう間に合わないことを前提の上で準備しましょう」

それと、と付け加えた。

「肥後先生もA組のみなさんの準備が整ったところで講評に入るとおっしゃいました。最後の打ち合わせをする時間は若干あります」

「それならまだ、大丈夫ですね」

頬をほころばせる足田さん。何が「大丈夫」なのか、合唱関連に絞り込んで考えれば答えはひとつ、「完璧なハーモニー」のための指導ができるということになる。この一時間、足田さんと

上総との間に「モルダウの流れ」に絡んだ話題以外一切出てこず、ひたすら曲、指揮に没頭するのみだった。

野々村先生は特に気にすることもないうで、また上総をじっと見つめた。だから、父のイメージで自分を見ないでほしいと常々思う。

「疋田さんも根をつめすぎないようにして、そろそろ体育館に戻りましょう。楽譜は忘れてませんか？」

まだ未練ありげに疋田さんが楽譜を閉じる。野々村先生は鍵を持ったまま先に疋田さんを外に出るように伝え、上総には動かぬようちらと視線で制した。

「立村くんには連絡があるので、ここで待っていてくださいね」

——なんだかいやな予感がする。

たぶん疋田さん是对して疑問も感じず出て行ったと思うのだが、もしここに美里がいたら何が起きたかわからない。嫌いな先生ではないのだが家庭の事情が事情だけに、できれば一体一でのつながりは控えたい。しかしそうもいかない。礼儀と師弟関係。面倒だ。

「野々村先生、何か」

極めて落ち着いた振りをして上総は尋ねた。

「立村くん、よく耐えましたね」

「何をですか」

思わず問い返すと野々村先生は口元に優しいえくぼを浮かべた。

「きっと指揮者なしで立村くんが伴奏するものだと思っていましたから。まさか伴奏を別の人に譲るという判断をするとは、私も思っていませんでした」

——いや、これしか選択肢ないと思うけどな。

「立村くんがどれだけ一生懸命練習してきたか、私は少なからず理解しているひとりです。本当は、『モルダウの流れ』弾きたかったのでしょうか？」

——なんで、そんなこと聞くんだろう？」

100%否定はしない。ただ、早いうちに誤解だけは解いておくことにした。

「最後まで弾きたかったことは事実です。でも僕の判断に迷いはありません」

「どうしてそう言えるの？」

言葉を一瞬飲み込みそう問いかけた野々村先生は、上総の答えを待つ前に、

「私、今度の日曜も先生のお宅にお邪魔します。その時じっくりとその答えを聞かせてくださいね」

すっと背を向け、戸を開いた。さっと手を広げるようにして誘った。

「立村くん、行きましょう。みんなが待っています」

——野々村先生まさか、今度の日曜も父さんと見合いの続きするのかよ！

その十九 袖幕にて（1）

呼吸を整えて上総が体育館に戻ると、男子連中がどのクラスもくたびれきた顔して椅子に伸びているのが見えた。ほんの十分程度休憩なので椅子も体育館に置いたまま。座ろうとして思い出す。上総は椅子を運んでこなかった。

——まあいいか。どうせすぐに本番だし。

A組の誰かに声をかけようとしたところで、C組連中に捕まった。

「立村、お前どこいたんだ」

難波だった。一緒にいるのは更科だ。背中から声をかけられた。

「昼からいなかっただろ」

「まあ、いろいろあったよ」

説明するのも面倒でごまかした。とっぱじめの大事件を見ればだいたいのことは見当がつくだろう。そこまでしつこく説明しなくてはならないほど難波も野暮ではないはずだ。

「C組、かなり盛り上がったみたいだな。昼休みに天羽と羽飛から聞いたけど昨日のMVPは指揮者だったらしいとか」

「なあにふざけたこと言ってる」

少しむっとしたのか難波が口を尖らせると、「まあまあ」とばかりに更科が割って入る。

「ホームズいいじゃん、どっちにせよ学年一位はうちのクラス決定だし。あとはなあ、先輩たちの学年がなあ」

さらりと宥めているがよく聞いてみるとかなりとんでもないことを話しているようだ。もう自分らが最低学年優勝で決まりだと信じ込んでいる様子だった。もちろん狙いは全学年優勝に定めているのだろう。しかし、目の前には一曲目で失意の棄権となってしまった奴もいるわけだ。気遣いせよとは無駄かとは思うのだがしかし。

「三年の合唱はどうだった？」

「一番平和な時間だったよ。俺、思い切り寝ちゃった」

「全くだ。午前中が過激過ぎてさすがに俺も疲れた」

——要するに何事も起こらず無事に全クラス合唱が終わったということか。

「あ、そうだ。立村土曜の昼間、暇かなあ」

ふと気がついたように更科が上総に声をかけた。相変わらずの子犬的笑顔で、

「さっき、二年の先輩たち、ほら評議の先輩たちに声かけられて、いろいろあった一年と二年の元男子評議八人でカラオケ行こうよって話」

「それを最初に言おうと持っていたんだが。更科ナイスだな」

にやにやする更科から説明役を奪い取り難波は、

「天羽にもこれから確認するが、どうも二年の先輩たちが俺たちと合唱コンクールにおける件について、友好を深めたいからこれから飲もうという話で盛り上がっているんだ」

「友好を深める？」

一年上の元評議委員たちが上総の世代男子四人を集めて何か話をしたいらしい。男子だけだと各三名。全員二年B組に押し込められている。本条先輩の世代で本当ならもっと密着して付き合うべきなのだろうが、上総がなにせ本条先輩以外になつかなかったこともあって適度な距離が空いている。天羽たちがどうなのかは知らないが。

難波が周囲を気遣いつつ小声で囁く。

「俺たちのクラス団結力を見習いたいとお言葉だぞ」

「じゃあA組の俺は用無しだろ」

「そんなこと言ってねえだろ。いい機会だってことでお前も来い。土曜日空いてるか」

「たぶん」

日曜午前中だったらきっぱり断ることもできたのだが、先輩との付き合いを考えると仕方ないだろう。時間を空けることにする。ただ気になるのは、

「C組、打ち上げやらないのか？」

「今日のうちにやっちゃうだろどうせ」

なんだか会話の内容からすると、勝利を確信しているとしか思えない難波の言葉。

——まさかとは思うけど予想してない別のクラスが優勝かっさらっちゃったら、立ち直れないんじゃないだろうか。A組は全く関係ないとしても。

休み時間はすぐ終わった。椅子のない上総がそのまま立っていると藤沖、その他の男女が自分の席に向かおうとした。呼び止めようと口を開きかけると、

「A組のみんな、これから舞台の袖に整列しようよ」

疋田さんが自分から、小声ながらもはっきりと呼びかけた。思わずぽかんとしたまま口を開けている奴もいれば、「練習、してたんだよなお前ら」と上総と疋田さんを見比べる奴もいる。藤沖が上総をちらと見た。ちょうどいいタイミングだ。

「藤沖、悪いけど打ち合わせを全員でしたいから、疋田さんの言う通り舞台に袖に集合してもらえないかな」

「これから講評と聞いているが」

不承不承ながらも腰を上げ、動き出す藤沖。それに従い片岡、その他の男子たちも付いて歩く。女子たちも小声でいろいろ囁いているものの、やはりいろいろ考えることもあるのだろう。みな席を離れてばらばらに舞台の袖幕に隠れた。

一年A組英語科連中がみな袖幕に吸い込まれていくのをげげんな顔で眺めている生徒たちの視線を感じる。関崎と古川が揃わない状態、かつ宇津木野さんがいないとなると合唱そのものの迫力が欠けてしまう。ただでさえ少ない英語科において声のボリューム問題は大きい。

——どうやって並んでもらおうか。

全員幕の裏に揃ったところで、整列してもらうことにする。宇津木野さんと疋田さんが並んでいた列の空白を詰めさせるとやはり小ぶりに見える。しかたないことではある。自分たちが歌った時とは別の女子音楽部員がうつむくようにして舞台の上の肥後先生を見つめている。祈ってい

るようにも見える。

「みなさん、お待たせしました。生徒のみなさん、今日は素晴らしいハーモニーをありがとうございます。それではお待ちかねの、合唱コンクール順位発表を行います」

甲高い声を張り上げ、少しざわめきがちの生徒たちを制する肥後先生。

「順位は各学年優勝をひとクラス、その中から総合優勝をひとクラス。また印象に残ったクラスをこれから何クラスか表彰することになります」

かんたんに賞の振り分けを説明したあと、

「それでは、最初に各学年の優秀賞を発表します」

紙をもぞもぞと胸ポケットから取り出した。

「一年C組、二年D組、三年A組」

突然立ち上がって「よっしゃああ！」と叫んでいる奴がいる。声でだいたい誰かはわかったのだが複数混じっていることと、まだ全学年最優秀賞が出ていない状態で先走りすぎなんじゃないかとも思う。後ろで整列して手持ち無沙汰の女子たちがひそやかに、

「やっぱりC組に負けちゃったんだよねえ」

大きくため息を吐いているのが聞こえてくる。

——気持ちはわかるが天羽、難波、更科。そんな立ち上がって狂喜乱舞しなくてもいいだろが。

他クラスの発表時も半端ならざる騒ぎっぷりだった。あの二年B組のトラブルも同情票は入らなかったらしい。一生懸命と音楽の質とは別、という肥後先生の言葉も納得だ。三年A組は英語科だが実際どのような合唱なのか聞いていないので全くわからない。

「英語の歌だったね」

「やはり英語科だと一度はやらねばならない道か」

片岡が藤沖に、三年A組の歌ったらしい曲について感想を語っているのが聞こえてきた。なるほど、全部英語で歌うのか。それはそれでよさそうな気がする。

「それでは、この三クラスの中から一位を選ぶことになりましたが」

肥後先生の言葉でまた体育館が静まり返った。間をゆったりと持たせ、みなに落ち着く時間を与えた後、

「一年C組。さまざまな前例を打ち破り、新しいハーモニーを作り上げたことを高く評価した結果となります。おめでとう！」

自分からマイクをおいて、激しく手を打ち鳴らした。

その十九 袖幕にて（2）

肥後先生の講評は長い。まずは最優秀賞の一年C組がなぜ選ばれたのかその理由をくどいくらい細かく述べている。

「本来合唱コンクールという場において、一年C組のみなさんが選択したアニメ主題歌のような楽曲を歌うというのは極めて珍しいことで、いわば大冒険です」

——エンディング、じゃなかったか？

おそらく肥後先生もそのアニメを知らないのだろう。

「僕も最初は、歌の親しみやすさに飲み込まれてしまい失速してしまうのではと危惧していたのですが、今日聴かせてもらって実に驚きました。元気いっぱい合唱するだけにとどまらず細かな音程をぴたりと合わせるだけではなく、ひとりひとりが責任を持って自分のパートを担当しているといったものが聴く方にじわじわと伝わってきました。高校生が今出来ることを精一杯歌うことももちろん大切です。しかし今回の一年C組のみなさんは歌だけにとどまらず合唱としてきちんと通さねばならないところを手を抜かず丁寧に修正し、本日に至ったというわけです」

——ここまでべた褒めってことは、相当きつい練習だったんだろうな。

前の方からすすり泣きが聞こえてくる。ほとんどが女子の声だった。

他クラスのことについてもそれなりに説明をする肥後先生。気になったのが一年B組がなぜ選外だったかということだった。肥後先生の説明をまとめると、

「完成度を高めようとする努力は伝わってきたが、もう少し力を抜いた方が歌にふくらみが出てくる。次回の糧にせよ」

ということらしい。どちらにせよ上総は一年の合唱を全く聞いていないのでその評が正しいのかどうか判断しかねるところがある。あとで美里に確認しておいたほうがよさそうだ。

二年、三年とそれぞれのクラス評を述べ立てている肥後先生を横目で見つつ、自分のクラスの様子を見る。本当はここで最後の打ち合わせをするつもりだったが、肥後先生の話に聴き入るうちについ忘れてしまっていた。気がつくとも上総の代わりに疋田さんが合唱する生徒たちを捕まえて、ぴりぴりしながら、

「ね、お願い。男子パートはもっとお腹から声を出してもらわないと負けちゃうの」

「それと、息継ぎのところなんだけどもっと綺麗に」

とか、今さら指示してもどうしようもないことを指示出ししている。

「うん、でも、無理かも」

「もう今更どうしようもねえだろ。音外れようが知ったことねえじゃん」

なんだかクラスメートたちのやる気も半減しそうな気配だった。上総からすると疋田さんの溢れんばかりの情熱は、音楽室のピアノ鍵盤を触れた瞬間に湧き上がってしまったものだ理解している。とにかく、演奏することだけではなく音、そのものを深く愛している。音へのこだわりが強すぎたゆえに上総から伴奏を譲ってもらおうとした。目立ちたいからというわけではないだろう。聞こえる音色そのものを完璧なものに仕上げないと、疋田さんの音楽感性が耐えられな

かったと考えたほうがしっくりくる。

——そりゃ、俺だってもう少し音楽のセンスがあれば疋田さんの言う通りに指揮ができるかもしれないけど、もうあと、何分かで始まるのに、無理だよ、無理。

かえってまとまりかけたクラスメートたちの気持ちが削がれてしまうんじゃないかと、別のところが心配になる。こういう時こそ評議の藤沖が割り込んでたしなめるべきなんじゃないかと思うのだが、奴は体育館の入口方面をカーテンの隙間からちらりと覗き込み、いらただしげに足踏みしている。

——関崎たちを待っているんだな。

指揮者である関崎の決断には従う、そう言い切った藤沖のことだ。ぎりぎりまで関崎を待っていたかっただろう。一応おまけに古川こずえもいることはいるけれども、頭の片隅にも存在するかどうかわからない。どちらにせよ、それだけ藤沖も友情に厚くかつクラスのことを別の形で大切にしているのだろうと思う。

——けどさ、今優先することって違うよな。

しかたない、ここはまた、臨時で上総が入るしかない。肥後先生の講評も終わりに近づきつつある。そっと疋田さんに声をかけた。

「疋田さん、もういいよ」

「でも、立村くん、あともう少し声が出てくれればもっといい合唱になるのよ」

声を震わせる疋田さんと、戸惑ったまま口を尖らせている男子女子それぞれに挟まれる格好となる。上総は疋田さんに、一言ずつゆっくりと語りかけた。

「合唱はもう昨日の時点で出来上がってるし、今更細かいところを詰めろと言われても歌う方はきついと思うんだ」

「でも、せっかく最後のチャンスをもらえたのに」

さらに言い募る疋田さんから、残りのクラスメートたちへ。上総はじっとひとりひとりの顔を見据えた。女子は特にほとんど顔と名前の区別がつかないけれども、この時が来たことを受け入れてくれているように見える。男子連中もかすかながら気合が入っているような気配を感じる。このまま歌っても問題なさそうな 雰囲気だった。

「気を付けるところはひとつだけでいい。最後の『モルダウ』の大合唱のところだけど、ピアノと歌と一緒に終わると綺麗だから、そこだけぴたっと合わせられれば最高だと思う」

拍手が聞こえた。肥後先生が反対側の階段を降りていく

「疋田さんの言う通り、今回、トリで歌わせてもらえるというのは俺たちにとって貴重なことだと思うんだ。賞はもう決まってしまうし、全員ではないけど、でも、途中で途切れた『モルダウの流れ』を歌い切るということは、上手く言えないけどクラスの義務だよ。もし歌わなかったら、元気になって戻ってきた宇津木野さんに罪悪感をどっしり押し付けることになるしさ」

かすかに「宇津木野さん、そうだよな」「立村くんの言う通り」「責任感じちゃうよね、きっと」「いやあもう、賞取りレースから外された段階で罪悪感ばりばりだよ」とかのささやきが男女問わず聞こえる。

「こう言うのもなんだけど、英語科は三年間みな顔ぶれ一緒だし、今回は全員揃った形でしきり直せるよ。今度は疋田さんと宇津木野さんに伴奏任せるし、男声合唱のメインには関崎をおけば歌も引き締まると思う。それで指揮者がいないんだったら、責任持って俺が引き受ける。来年まであれば、それなりに音楽も勉強できるから、今よりはずっとまともにタクト振ることができるんじゃないかなって思う」

自分でも喋っていて信じられない言葉が溢れてくる。そばで音楽委員の上級生女子が、「それではそろそろいいですか。舞台に上がってください」

あっさり準備を促してきた。クラスの男子女子がみな、黙ったまま頷き、静々と列を作っていく。誰が指示するでもなく、自然と形がまとまった。藤沖もちらちらと外を覗き込んで上総の言葉を無視していたが、すぐにその輪へ加わった。

——関崎たち間に合わなかったか。

藤沖を責めることはできない。

放送委員のアナウンスに合わせて一年A組の合唱パートが全員並び立ったところで、上総は舞台の中央に向かった。聴衆と向かい合い、深々と礼をした。高校に入ってから体育館の舞台に立ったのは今が初めてだと気づいた。

指揮台に立ち、袖幕のピアノに手をかけている疋田さんとアイコンタクトを交わし、上総は息を止めたまま左手で合図を送った。

濃く、果てしなく深い音色がこんこんと湧き始めた。

その十九 袖幕にて（3）

——奔流。

打ち合わせた時はとことん歌いやすくすることだけを考えて練習していたはずの疋田さんだが、斜め下から響き渡る激しい音色はまさにうねりそのものだった。

——ソロの弾き方とか、肥後先生言ってたよな。

リズムがずれないように手を振りながら身体の中に注ぎ込まれる何かを感じつつ、上総はクラスひとりひとりの顔を見つめていた。緊張しているようにも見えるし、リラックスしているようにも感じられる。みな真面目であることだけは間違いない。音程を誰かが外したとかタイミングをしくじったとか細かいところで粗があるのかもしれないがそんなのはどうでもいい。今こうやって歌ってられることは、

——奇跡だよな。

舞台上上がる前に上総がまくしたてた言葉の通り、今この一瞬が、今朝の段階では想像つかないものだった。中学二年以来の指揮者に復活したことも、あの疋田さんが凄まじい気迫のもとピアノを奏でていることも、そして、

——関崎も、古川さんも、宇津木野さんのために姿を消したことも。

自分が演奏中にとんでもないところをしくじってしまう可能性は考えなくもなかったけれど、すべてが上総の想像をはるかに超える展開だっただけに今だ戸惑いが消えない。それでも指揮台から見下ろすクラス全員の口元には確かに「歌声」が響いている。誰も、口を開けたまま適当に流している奴はいない。

——それだけでも、ほんとにすごいことだよな。

その歌よりも、舞台袖から激しく響き渡る「モルダウの流れ」に押し流されるがごとく上総は空気をかき混ぜた。疋田さんの感じている旋律への想いを、少しでも歌声に重ねたかった。自然と自分の動作も大きくなっているような自覚もある。背中がかすかに笑われているような気配も感じる。どう見られているのか気にならなくもない。でもどうでもいいことだった。自分ではたどり着けなかった雄大な河の流れを上総は身体中に漂わせながらひたすら手を振り続けていた。

ふと、藤沖の目が指揮する上総の手の反対方向に向いた。そのまま固まったまま動かない。それでも歌ってはいるが少し気がそれたように見える。

——藤沖どうした？

気分でも悪いのか。いや、それにしても視線がしっかりしている。気にせずそのまま男子パートに声を張り上げるよう手を差し伸べた。同時にそろそろラストの「モルダウ」の合唱に差し掛かる。ここは疋田さんとも音楽室で何度も打ち合わせたところだった。歌はとにかくピアノと歌とがぴたっと合って終わればそれだけで十分価値がある、その点ふたりで意見が一致している。上総にとっては最大の山場である。

——どうせ終わったら礼をするし、まずはラスト行くか！

藤沖のことなどどうでもよくなった。上総は右手を高く上げ、左手をピアノ側に下ろした、そのまま手を開いたままずっと「モルダウ」の「ウ」の部分を長く保たせ、ゆっくり呼吸を整え、一気に両手を握り締めた。ずれなく、あまりなく、高く掲げた上総の握りこぶしに音色がすべて収まったような感覚が確かにあった。

手を下ろした時、背中に響き渡る拍手を感じた。

じっと男女それぞれの整列した姿を眺めやる。

——終わった。

余計な感情などなく、ただ単純な一言のみ。

ひとりだけそっぽを向いている奴など気にせず、上総が指揮台から降りた時、舞台後ろから誰かが飛び降りる気配を感じた。クラスメートたちがざわめき、それに釣られるように聴衆の生徒たちもあたふたと振り返る。藤沖が無言で壁際を走り抜けるのを最初上総は啞然としたまま見送ったが、やがてその意味を理解した。

「関崎くんじゃない？」

「こずえちゃん？ 間に合ったの？」

「関崎あと五分早ければなあ」

後ろでのささやき声も席の向こうのざわめきとに紛れていく。ピアノの前では見えないながらも疋田さんが立ち尽くしている。

上総は舞台上から、体育館入口でふたりの男子と女子が藤沖に迎え入れられ、笑顔で何かを語っているのを確認した。それが誰だかはもう他の生徒たちも把握している。なぜ藤沖がずっと視線を体育館入口あたりに揺らがしていたのか、なぜ礼もしないうちに飛び出してしまったのか、理由はもうわかりきっている。

——あと五分、だよな。間に合えば全員で歌えたのに。藤沖が悔しいのもわかる。

関崎が戻ってくるのをひたすら待ち続けていた藤沖。心底、関崎に友情を感じているのだろう。関崎がいなければこの場で歌うことを固辞したいとも言っていた奴だ。

——いや、まだ間に合う。

ほんのわずかの間に決断した。

「すみません、マイク、貸していただけますか」

舞台袖でコンクール閉会のアナウンス準備をしていた放送委員と音楽委員を上総はその場から呼び止めた。なんとなく袖に引っ込みたくはなかった。また視線が自分に集まる。

「会場の人たちにうちのクラスからお礼を言いたいので、少しだけいいですか」

「すぐ終わらせてくださいね」

上総の眼差しに何を感じたかはわからぬが、すぐに放送委員男子がマイクを指揮台脇に立つ上総へ持ってきてくれた。嫌味を言うのは音楽委員の女子のほう。何か恨み買うことでもしたのだろうか。

「ありがとうございます」

余計なことは考える暇などない。上総はすぐ受け取った。そのままマイクを叩き、スイッチを入れた。中学時代から操作には慣れている。マイクを握った上総にどよめきが起こる。

「今日、この場で僕たち一年A組に歌いきれなかった自由曲を思い切り合唱するお許しをいただきありがとうございます。今この場にいる全校生徒のみなさん、そして先生方に僕たちはクラス全員、心から感謝しております。そして」

じっと見た。入口でもちゃもちゃくつついている三人組を射た。早く舞台に連れてくればいいのか、藤沖はまさに使えない奴だと思う。

「今そこにいる二人は、合唱中体調を崩した人に付き添ったためにこの場で歌うことができませんでした。全員舞台に上がるまで少しだめ待ってもらえますか」

会場に呼びかけた。同時に湧き上がるのは拍手喝采。三年から、二年へ、一年へと波及していく。教師たちが立ち上がり、けなげなふたりと迎えにいったひとりを拍手で誘う。すっかり照れているのか関崎がこちこちになったまま舞台へ上がる。上総に近づき、

「お前いったい、どうしたんだ」

怒ったように尋ねた。悪いがこの一瞬のみ、上総ひとりで仕切らせてもらうことにする。

「関崎、そこでいい。立っててもらえないか。それと古川さんは真正面で」

「立村あんたさあ」

あきれたように囁くものの、こずえもすぐに合唱列のど真ん中に納まった。よくわかっている。全員揃ったことを確認し、上総はピアノに再度戻った足田さんに右手を伸ばし合図を送った。これも音楽室で決めたことだった。

「ありがとうございました」

和音が三度、品良く響いた。それに合わせて上総が礼をする。それに合わせて隣の関崎はきちんと頭を下げている。直角に身体を折り曲げたまま横目で様子を伺うと他の連中も真似をしている。たぶん関崎に習っただけだろう。

全員、舞台から降りた瞬間、女子たちが全員ピアノの前で放心状態の足田さんを取り囲み、

「足田ちゃん、よかったよ、ほんっとよかった！」

「足田さんのピアノで歌えて最高だったよ！ 勇気、出してくれてありがとう！」

「来年は絶対に足田さんだよ、伴奏絶対お願いだよ！」

中には抱き合うようにして労っていた。すぐ傍に本来伴奏担当だった上総がいることなど無視されている。一年A組の合唱コンクールに課題曲「恋はみずいろ」など忘れられて、たった今歌い納めた「モルダウの流れ」だけでしっかり刷り込まれたということだろう。

——結果よければすべてよしだよな。

一曲弾けただけでもよしとしよう。幕から抜け出そうとすると、突然背中をがっちり押さえられた。かなり重たい。女子の手ではない。振り向いた。

「立村、聴いてたんだ。ちょうど歌が始まる直前に体育館に入ったんだ」

関崎が声を震わせ、そのまま上総の肩に手を置いた。

「まさか最後に歌わせてもらえるとは思わなかったが、お前がしっかり指揮している姿を見た時、とうとう来た、そう確信したんだ」

ひとつひとつ、とつとつと関崎は語る。頬が紅潮している。男子たちがふたりを囲む。

「立村、お前復活したな」

——え？

熱い口調と共に差し出された手を上総はおずおずと握り返した。そうしないと雰囲気バランスが取れなさそうだった。それを口切りに、様子を伺っていた男子たちが我先にと関崎へ、そして上総へと手を差し伸べ始めた。中には上総になぜか「ありがとう」とお礼を言う奴もいた。一番驚いたのは、あれだけ露骨にライバル心を見せつけ口ひとつ利かなかった片岡が、涙ぐみながら上総に手を差し伸べたことだった。

その二十 残響（1）

大抵、合唱コンクール後はクラス内での健全な打ち上げパーティーが行われるのが慣例だと聞く。最優秀賞を手にした一年C組はもちろん、全力投球して納得のいったクラスは概ね、放課後を利用して学食でのお食事会という形で盛り上がる。先生たちも交えてということになるがもちろん生徒たちでの内々の何かがある可能性は否定しない。

「普通だったら俺もお前らの、涙が止まらない程の見事な締め何かしてやりたい気持ちは多いにあるんだよ。だがな」

帰りのホームルームで、病院からぎりぎりセーフで飛び込んできた麻生先生が噛み締めるように語りかけた。

「宇津木野の詳しい病状を今の段階でお前らに話すことは難しいんだが、かなりしんどい状態ではあるんだよ」

関崎とこずえが顔を見合わせ頷くだけで、誰も言葉を発しない。

「生死に関わるというわけではないのでその点だけは安心してもらいたいんだが、俺としては手放して盛り上がることができそうにない。本当にこればかりは担任としてのわがままなんだがな。お前らの努力の結晶を無にするような言い草で申し訳ないんだが、今回の打ち上げだけは、来年以降に延期ということでどうだろう」

廊下からはしゃぎ声が聞こえてくる中、一年A組の教室のみお通夜の雰囲気だった。反論する奴などいるわけがなく、誰もが納得している様子に感じられた。

「僕は賛成です」

評議の藤沖が図太い声で答えた。評議の義務だ。

「藤沖、わかってくれるか」

「ここで座っているクラスの人間はみな同じ考えだと思います」

——そうだな。

上総も異論はなかった。打ち上げなんて面倒なことはたぶんこずえがちゃっちゃと準備していたのだろうと思っていたし、義務として出席はせねばなるまいと覚悟はしていた。何もないのならかえって気が楽ではある。もっとも、宇津木野さんの病状が気にかかるのも確かなので、あとから関崎とこずえを捕まえて詳しい話を教えてもらうつもりだった。

「お前ら、本当にいいか？ せっかくクラス一丸になれたってのに、申し訳ない」

「先生、いいんです」

足田さんがか細い声で、まだ涙収まらない表情でもって麻生先生に尋ねた。

「それより、宇津木野さんのお見舞いにはいつごろ行けますか？」

麻生先生は難しい顔をしてしばらく黙った。沈黙が続いた後、

「残念だが、十月の学内演奏会には参加できそうにないだろうな」

遠まわしに、楽観できない旨を述べた。

重々しい雰囲気のもと帰りのホームルームも藤沖の号令で終わりとなり、麻生先生は足早に教

室から出て行った。残された一年A組連中も、息苦しさから解放されたのかおしゃべりが復活し、誰かかしらとまだ話し続けていた。教室から出て行くのは音楽委員と放送委員のみ、それ以外はまだ帰りを惜んでいる。

学校内打ち上げはやらないにしても、個人的に話をするだけならば控える必要はない。

上総も関崎を捕まえようとしたが、すでに藤沖が他の男子たちも含めて囲ってしまい入る隙間などなかった。事情に通じていそうなこずえを探したがそれこそ無理もいいところで、女子たちを労いつつ足田さんも含めて宇津木野さんの状態について丁寧に説明をしている。

「あーあ、っかしなんだ。本日のMVPを無視してなんだありゃ」

手持ち無沙汰で取り残された上総に、音楽選択かつ吹奏楽部所属の三人男子が近づいてきた。これから秋の高文連吹奏楽コンクールに向けてすぐ練習が行われるとかで教室から出るところだった。付き合いで上総も連なった。

「ほんとだな。立村お前すげえわやっぱ」

「元評議委員長をなめんなよってとこだわな」

音楽には耳が肥えていて上総の演奏には物足りなさを感じていたはずなのに、なぜかいきなりの褒め言葉。袖幕でもこの三人は上総に即、握手を求めてきた。

「麻生先生にはなんか言われたか？」

上総と麻生先生との不穏な雰囲気もなんとなく感じていたのか、ひとりが問う。

「ああ、一応、ねぎらいの言葉らしきものはもらった」

——よくまとめたな、の一言だけだな。

むしろ麻生先生は上総にそれだけ伝えた後、すぐ足田さんに近づき、

「足田のおかげでクラスが救われたんだ！　ありがとう、ありがとう、ありがとう！」

ありがとうの三連発ときた。それは決して大げさではないのだが、不公平感は確かにある。麻生先生は上総の性格を苦手としていることが手に取るようにわかるし、それはそれで構わない。ただ、第三者から見たら違和感は確かにあるだろう。

「でも、ほんと無事に終わったよな」

話を逸らすつもりで上総はつぶやいた。正直な実感だった。長い一ヶ月半だった。

「宇津木野さんのことだけは気にかかるけど、俺が伴奏しないでよかったんだなってさ」

「言いたいことはわかるぞ」

—A吹奏楽三人組が一緒に頷いた。音楽感性一緒だろう。かすかに傷つく。

「けど、お前よくまとめたよ、まじ感動したよ」

「だなんだ。ほんと俺もおったまげた。あのまま立村がなんにも言わなかったら、最後に歌わせてもらえるなんてことねえもんなあ」

否定しておいた。

「いや、誰かかしら言っただろうし」

「うんにゃ、そりゃねえよ」

即時切り返された。

「俺たちもてっきり藤沖がリベンジするもんだと思ってたんだが、あいつなんなの、腰の引け方

」

四人で周囲を見渡す。壁に耳あり障子に目あり。藤沖はいなかった。安心したのか三人とも声高らかに藤沖批判を始め、一緒にいる上総の方で目立たぬ場所への場所移動を行わねばならなかった。

「あいつ一応評議だろ？ 評議のくせになんで決断しねえんだよ！」

「それも元生徒会長だろ？ 立村、お前あいつといろいろあったって聞いたことあるけど、やっぱあいつの使えなさっぷりに頭来たんじゃないかねえの？」

「違う、それとは話が別だよ」

なんだか別の誤解が生じているようだった。しかし聞く耳持たない吹奏楽三人組。

「少し声を潜めろよ。下手に誤解されたらまずいって」

「いっつうの。どういう事情か知らねえけど、立村が合唱参加するって決断しねば、俺たちは廃人状態のまんまで体育館の椅子に座りっぱなしで終わり、心底お通夜気分解散になっちまったんだぞ。病人を責める気はねえけど、いくらなんでもありゃあなあ」

「そうそう、棄権になっちまったのはいいの、しゃあねえよ。最後まで演奏できねえんだから。けどな、せっかくもう一度歌える機会があって、完全燃焼する機会をもらえたってのになぜ藤沖、あんな曖昧な言い方するんだ？ 即時OKでどこ悪い？」

庇わないとまずそうだ。上総なりの説明を口はさむ。

「関崎たちが戻ってくるのを待ちたかったんだよ。指揮者は関崎だったし。合唱の最終決断は指揮者に委ねたかったんだと思うよ」

「そりゃ違うだろ！」

また吹奏楽三人組は口を揃える。

「舞台の上では確かに指揮者に従う義務あるよ。そりゃ俺たちだって承知してる。けどな、その以前に参加するしないを決める場合、民主主義に則ってまずはクラスの決を取るべきだろ。藤沖ひとりの一存で不参加にしようなんてふざけすぎてるぞ」

「そうだ、二年B組の例もあるように、極端な話伴奏者がいなくてもアカペラで歌うという荒業だって使えるわけだし、反対に指揮者がいなくても立村みたいに合図する奴だけいれば、出来はともかく歌うことは歌えるぞ。最悪の場合肥後先生を説得して臨時指揮者就任を頼むってのも手だろうしな。それが評議の仕事だろ？」

「関崎を待ちたいのはわかるが、実際いつもどってくるかわからない状態で決断を引き伸ばして逃げようってのが、俺にはどうもげせねえよ！」

「あいつ、本当に生徒会長やったのかよ？」

吹奏楽三人組の中学時代所属していたクラスはすべてA組だった。

つまり藤沖との接点は、中学時代、ない。

また中学A組の評議は天羽だった。

いわゆる「評議の仕事」は天羽の言動そのもので認識されている。

——確かにな。天羽だったら絶対に、俺と同じ判断してたよな。

——「評議の仕事」だよな、あれは。

ひとしきり言い放った後、吹奏楽三人組はそれぞれ上総に再度握手を求めた。二度目なので少し照れくさい。

「とにかく、天羽が立村のことすげえ買ってた理由はよっくわかった。見る目ねえ女子らには昼行灯扱いされてるかもしれねえけど、次回からはちゃんとフォローしとく、安心しろよ」

褒めているとも思えない言葉も混じっているがありがたく受け取った。三人を階段の二階踊り場で見送った後、上総はふたたび階段を降りた。今日は早く上がれるしさっさと自転車に乗って帰ることにした。どうせあすは昼から中学評議時代の先輩後輩交流会があるわけだし、その時に他クラス情報も交換することにしよう。

その二十 残響（2）

家に戻ってみると母の持ってきた荷物はすでに家の中から消えていた。今朝の段階でいつ母のアパートに戻るかは聞いていなかったの少し拍子抜けした。上総を待ち構えて根掘り葉掘り聞かれるのではないかと、自分なりにシュミレーションもしていたし、通常とは考えづらい展開に関する回答も自転車漕ぎつつ決めていた。

——まあいいか。久々に何も考えず寝るか。

夕方五時半。適当に野菜炒めでも作って平らげたらさっさと風呂に入って寝よう。

さすがに今日くらいは許されてもいいはずだ。

合唱コンクールが終わればあとは十月の学校祭が待っている。学校祭が終われば十一月の生徒会役員改選が行われる。それに伴いクラスの後期委員も選出となるはずだが、順調に進めば後期は関崎で決まりだろう。藤沖は応援団活動のため身を引くことになるだろうが、そうすると規律委員の座が空き、もしかしたらまた、

——俺が規律に入る可能性もあるのか。

南雲にも熱心に進められている規律委員への参加。おそらくB組も特別な変動がなければ規律は東堂と美里のふたりで決まりだろうし、全く知らない相手同士ではないし居心地は比較的好いかもしれない。もっとも規律委員の仕事が今ひとつイメージつかず、中学の感覚で見ると「青大附高ファッションブック」や手芸活動に熱心なのだろうかと思うのみだ。上総が入るスペースなどあるのだろうか。

——けどな、藤沖はまずいよ、あれは。

食事を済ませ洗い物を完璧に終わらせた後、さっさと一番風呂に入った。父が戻ってくる時間でもないし、母もいないのならば当然の権利だった。この一ヶ月はピアノの練習最優先のため風呂に入ってもものんびり両手を伸ばすような余裕もなく、カラスの行水状態だったが、今夜に関してはとことん身も心ものびのびできるというわけだ。

湯船に入り、天井を見上げる。

——俺じゃなくても評議だったら誰でも、クラスの意向を確認して、その段階で判断するよな？ なぜそれをあんなかたくなに断ったりしたんだらう。俺の意見だからか？俺がでしゃばり過ぎたからか？まずいとは思ったけどさ、でも誰も何も言わないんだからしょうがないだろ。最後まで弾くことにこだわり過ぎとか言うけど、伴奏者としたらそりゃ本能だと思うよ。結果として俺と疋田さんが立場を変えてなんとかなったけど、あのままなあなあにして終わらせていいとはどう考えても思えないよな。

本当は誰かに意見をもらいたかった。こういう時に本条先輩を思う。

——本条先輩に会いたいな。日曜になったら電話かけてみようか。またマイコンの話聞かされるのかな。

さっぱりして上がった後、部屋でこずえから借りたキーボードを手入れしていると電話が鳴

った。予想はしていた。関崎か、それともこずえかのどちらかだろう。

——立村か。

第一声で予想大当たり。関崎の晴れ晴れとした声を受話器から響き渡った。

「関崎、今日は本当に助かった。ありがとう」

——礼を言うのは俺の方だ。学校では慌ただしくて本当の意味での礼が言えなかった。悪かった。

「いや十分だよ。それより関崎に聞きたいんだけど」

——宇津木野のことか。

「そう。病院でかなり病状が重いと聞いたんだけどさ」

一番気がかりなことを尋ねた。電話の向こうで関崎はしばらく黙った。麻生先生にしろ、宇津木野さんのことに触れられると黙るということは、それだけ口にしづらいことなのだろう。

——俺も具体的な病状は聞いていない。すまない。

謝った後、思い切ったふうに、

——ただ、彼女の両親にあたる人から説明は受けた。精神的なものらしいとは聞いたので、手術を必要とするような病気ではないということだ。

「そうか、手術ではないんだな」

野々村先生からは「処置」をしたとの話を聞いていたのでもしや何かの手術を受けたのかと心配していたのだが、ただ「精神的なもの」というのが曖昧すぎてさらに不安がよぎる。

——とにかく、えらく頭を下げられてこちらも恐縮しっぱなしだった。とにかく昼飯だけでもということで無理やりご馳走されて、せっかく給食出ているのにいいんだろうかと思ったんだがとにかく食った。

「あれ、渋滞して遅くなったんじゃないのか？」

話が違う。戸惑いつつ確認する。

——俺も、宇津木野の体調がよくなった段階で学校に戻るべきだと主張したんだが、麻生先生および宇津木野のご両親にぜひにと引き止められてしまい、結局は担任の判断に頼らざるを得なかった。すまん。

「これはお前に謝ってもらっていい内容だな。とりあえず学食で何かおごれよな」

怒ってはいないけれど、関崎たちが美味しいものを平らげている間、上総はクラスの意見をまとめたり藤沖と対決したり足田さんのスパルタ特訓を受けたりと散々だったのだ。これは学食のハンバーグラunchをおごってもらう必要がある。たとえ苦学生でも容赦しない。

——バイト代入るまで待っていてくれ。

「冗談だって。気にしてないからさ」

——俺もそのあと一時頃に、麻生先生から合唱参加の話聞かされて大急ぎでタクシーに乗ったんだが、その時は本当に渋滞にぶつかったんだ。なんでも、前の車が玉突き事故を起こしたらしくて身動きできなかったんだ。途中で降りて学校までバスで行くことも考えたんだが、結局はタクシーの方が早いという麻生先生の意見でそのままで行った。結局、間に合わなかったのが俺

としては、死ぬほど悔しい。

「あと五分でも早かったら、とは思うよ」

嫌味に聞こえるかもしれないが本心ではある。藤沖が聞いたらさぞぶち切れるだろう。いやもう話しているのかもしれない。あすの反応が楽しみだ。関崎はふうと息をつき、

——ちょうど体育館の中に入った時、お前が指揮台で両手を上げているのを見た時、正直俺は何が起こったのか把握できなかつたんだ。麻生先生からは指揮者なしで行われる可能性もあると聞いていたが、まさかお前が、立村とは、想像してなかつた。古川も同意見だった。伴奏どうなつたんだと思つたが、疋田が担当することになつたんだな。

「そう。一時間くらいかけて疋田さんと音楽室でとことん音合わせしたし。疋田さんの注文はほんと多かつたからめちゃくちゃ大変だったよ」

——悪かつた。いくら謝つても許されることではないと思うが、本当に申し訳ない。

「だからそんな謝らなくてもいいんだってさ」

少し関崎をからかいすぎたかもしれない。食事をご馳走されたとは言うけれど、関崎の言うような豪華なランチではなく、単純に「これからどうするか、どうやって宇津木野さんの事情を説明するか」の相談だつたんじゃないかという気がするし、その場合ならクラスの代表として付き添つた関崎とこずえが話を聞くのも当然だ。一年A組合唱が行われることもおそらくその段階では麻生先生も聞いていなかったのだろう。仕方ないことではある。

——とにかく、クラスの奴らから事情は全部聞いた。立村、お前はすごい。心底尊敬する。今までお前を馬鹿にしていた奴も、すっかり見直したと聞いている。

「そんなことないよ。当然のことをしただけだつて。元・評議の遺産みたいなものだつて」

——元・評議か。

関崎は嘔み締めるようにつぶやき、

——そうだな。お前は評議委員長だつた。そのくらいお茶の子さいさいだな。

締めた。

その二十 残響（3）

父とは次の日の朝、やっと状況を説明することができた。昨夜は上総がさっさと床についてしまったので、父も好奇心を押さえるしかなかったのだろう。朝食のテーブルで根掘り葉掘り聞かれてもしかたあるまい。

「結局、お前が弾いたのは課題曲だけか」

「そう、棒のように弾いたよ。間違えはしなかった」

食パンにバターを塗りゆで卵とセットでかじる。父も自分でコーヒーを淹れながら、
「だが、災難だったな。そのお嬢さんも災難だったが、何はともあれ無事でよかった。その、指揮者の友だちが背負って病院に連れて行ったのか」

「友だちは保健室まで。実際は車で運んだはずだけど」

「だが今度はお前が久々に指揮者か。覚えてたのか？ ぶっつけで」

「一時間、ピアノ担当の人と打ち合わせたからなんとかかなったけどさ」

詳しく、とはいえあえて触れない部分もある。聞かれたところだけ無難に交わした。

どうせ日曜の午前中は例によって印條先生のもとへお礼を含めて挨拶に行かねばなるまい。しかも野々村先生がお待ちかねときたら、詳細がばれないわけがない。野々村先生は父と語りたくてしかたないようなので、上総がばたばたしていたところも全部伝えてくれるだろう。こちらからは説明する必要なしだ。

「まあ、お前には指揮者の方が想像つくがな。とりあえずこれ以上へましでかさなくてよかったよかった。ところで、キーボード貸してくれた友だちには何かお礼するのか？」

「一応、本人の家に送る時、何かクッキーとか詰めて贈ろうと思ってる」

こずえ宅に運ぶのも正直骨なので、許可が出たら直接自宅から発送するつもりでいる。こずえにはその他ピアノを弾かせてもらったりその他精神的にもいろいろと世話になったので、自分の知る限り豪華な菓子折りを選ぶつもりだ。家族三人で食べきれないくらい送ってもいいくらいだと思う。

「それがいい。それと、その、あの先生とは」

「日曜に、印條先生のお宅でお会いしようとか言ってたよ」

さらっと事実だけ述べる。父はそれ以上何も言わず、コーヒーを勢いよく飲み干し出勤していた。

朝肌寒いところはあるものの、羽織るものは必要ない。ブレザーが一番心地よい。

早めに家を出たのは、なかなか一対一で話を進めづらい友だちを捕まえる必要性を感じたからだ。たとえば羽飛、たとえば美里、たとえばこずえ、たとえば南雲などなど早朝でない別の友だちに取り込まれてしまう奴が圧倒的に多い。上総がその他大勢である以上先手を打つしかない。

学校に到着し、すぐに生徒玄関前のロビーで待機する。

只今の時刻、七時五十分。

「立村、あんた早いねえ」

読みは当たった。一番事情を聞きたい相手が玄関に現れた時、上総は手を上げて合図をした。こずえが靴を履き替えてすぐに近づいてくる。今日は土曜なので荷物も少なめだ。

「古川さんに会いたかったんだ。待ってた」

「これが羽飛に言われてればねえ」

「悪かったな」

相変わらずの軽口で挨拶を交わし、まずはロビーのベンチに腰掛けた。

「古川さんも今日は急ぎの用事があったのかなとか思ったんだ」

「まあね。例のことで後処理いろいろあるしね」

こずえはため息をつきながら両手を組みため息をついた。それほど気にはならなかったのだがこうやって合唱コンクール後の様子と見比べてみると、重庄も相当だったのだろう。表情が明るい。

「昨日の夜、関崎から電話もらったから事情は把握してる。大変だったよな」

「まあね。関崎と一緒に私もごめんなさいしとく。あんた関崎に昼ご飯たかったんでしょ。あれ、私の責任だから私が払うよ」

「あれ冗談だってさ」

いつのまにかこずえにも関崎との会話が流れているということは、上総との話が終わったあとすぐに連絡したのだろう。

「わかってるよそんなの。でもね、確かに私が悪かった。宇津木野さんのお父さんとお母さん、どうしても私たちにたのみたいことがあるからってきかなくてさ。それで麻生先生の判断もあって病院の食堂で食事しながら話したんだよね」

「そういうことかと思った」

「給食もあるし本当は無理してでも帰るって私が言い張ればよかったんだと、今思えばね。関崎は外部生だし、麻生先生のいうことは絶対だと思ってただろうし。私みたいな内部生なら先生たちの都合なんていくらでもなんとかなるってわかっているからもっとわがままいえばよかったよ。せめてあと五分よね」

「惜しかった、それだけは悔しい」

少し黙ったが、こずえの方から口を切った。

「立村、あんたさ、疋田さんと話、した？」

「したよ。一時間練習したから」

「そういうわけじゃなくてさ」

こずえは声を潜め、周りを確認するようにして身をかがめた。

「美里から聞いたけど、月曜に疋田さんと宇津木野さんから、伴奏替わるって提案されたってほんと？」

もうばれているなら隠す必要はない。過ぎたことだ。

「一応、そういう話はした。俺が断った」

「そうか。やはりね」

「ただ、そのあとで肥後先生に呼び出されて、ふたりの本意みたいなのを聞いて納得した」

「なにそれ」

伝えるのに難しそうだが、思い切って口にした。

「ふたりとも、音楽の感性が鋭くてどうしても理想的な音でないと耐えられないタイプなんだったことを聞かされて、それならしょうがないなとか思っただけだけど」

「私も、宇津木野さんのお母さんから説明聞かされたよ」

こずえはもう一度周囲を見渡し、

「悪いけど、いったん靴履いて外で話そうよ。聞かれたらやばいから」

外を指差した。

生徒玄関の外、芝生の端に立ったまま話を続けた。

「私もそのなに、音楽感性なんて持ってないからぴんとこないんだけどね」

前置きをしたこずえは、上総の前をいきつ戻りつしながら語り始めた。

「宇津木野さんは子どもの頃からピアノの才能を認められて音大目指してるんだよ。これ、中学時代から有名な話なんだけどね。将来は外国に留学することも備えて英語科入ったけど、別の塾でイタリア語やドイツ語も学習してるんだって」

「すごいなそれ」

「あんたは黙ってても独学できちゃうからいいじゃん。とにかく、音楽の才能がうちの学校にいる音大志望者の中でもダントツなのよ。これはあまり言いたくないけど、疋田さんや瀬尾さんとの差は天と地、なんだって。私からしたらみな上手いけど」

「俺も古川さんの意見と同じ」

いや、わからなくもないがあえて同意した。

「ただ、才能を持っている人にとっては音というものに対してもものすごい敏感らしくって、私にも予想できないところできーっとなっちゃうらしいんだよ。身も蓋もないこと言っちゃうと、汚い音は聞きたくないってこと」

「情けないが認めざるを得ないな」

「宇津木野さんも性格が悪い子じゃないし、自分の感性が人に迷惑をかけてるんじゃないかってことは自覚してたんだって。なら単純に伴奏担当すればいいじゃんってことなんだけど、例のあれよ。疋田さんのピアノの先生と彼女の先生とがバトルでさ」

「二重の苦しみてどこか」

「そういうこと。ただ、運がいいことに疋田さんとは同じクラスになって妙に気が合っちゃったみたいなんだよね。私も今まで知らなかったんだけど、疋田さんと仲良しになってからやっと救われたみたいなこと、言ったらしいんだ」

それは上総も感じていた。たぶんあのふたりは親友だ。

「いくらなんでも親友と、先生たちのバトルの駒になんかなりたくないよね。そこでふたりで相談して、今回の伴奏を逃れたいと申し出たってわけ。ここまではあんたも知ってる通りだよ」

まだ時間はある。生徒たちがどんどん生徒玄関に吸い込まれていく。

「ふたりとしてはたぶん、誰かそれなりのピアノ弾き手が出てくると思ってたらしいんだよ。疋田さんだってそりゃ、宇津木野さんと格が違うらしいかもしれないけど音大目指しててがんばってるんだから、合唱コンクールの楽譜はさらさら弾く自信あったと思う。実際楽譜初めてみてあっさり弾いてたもんね。その程度の曲なら大丈夫だろうと甘く見てたところがあったらしいんだ」

「そうしたら、予想に反する程の弾き手が登場したということか」

「ご名答。大穴すぎるよ。ふたりも私があんたに決まったってこと伝えた時卒倒寸前だったからね。それに加えて『エリーゼ』を弾いた時の見事な演奏力で失神しそうになったみたいだよ。とんでもない過ちを犯したんじゃないかと思って、それからずっとふたりとも針のむしろだったらしいんだ。これ、お父さんが話してたよ」

「そこまで言うかって気もするが、否定できないんだよな」

やはりピアノは精進しなくてはならない。帰ったらすぐに練習再開しよう。

「さあここからが大変よ。自分たちが逃げ出したために、自分たちが許せないタイプの音色が合唱コンクールで響き渡る羽目になっちゃったというわけ。もちろんあんたはがんばってるし、一生懸命努力している。だから尚更辛い。誰も責められない。責められるったら自分たちの感性のみよ。たぶんあんたに伴奏交代を申し出たのはその折り合いを付けたかったんだろうなってことよね」

「素直に受けとけばよかったと思う」

「もう過ぎてしまったことぶつくさ言うんでないの。どっちにせよあんたは精一杯弾いてるし文句のつけ所はない。疋田さんはそれでも納得して自分で消化する努力をした。けど宇津木野さんには、どうしてもそれが上手くできなかつたらしいんだ」

「俺の音色に耐えられなかった、と」

ふうっと息を吐く。こずえと同時だった。

「あんたも、杉本さん面倒見ているからわかるよね。もうこればっかは誰も責められないんだよ。あんたはクラスのため投げ出さないように全力尽くした、けど努力では」

「届かないところはあるよな。言われたよ、肥後先生に」

そろそろ制限時間もいっぱいのようなのだ。上総は生徒玄関へ向かうことにした。

「どちらにせよ、来年は伴奏をふたりに返す。それは決めてるよ」

「それとさ、ひとつ気になることがあるんだけどさ。あんた歌う前に変なこと言ったんだって？」

靴を改めて履き替えながら、こずえに問われた。

「立村、あんた来年自分が指揮やるって、宣言しちゃったんだよね？」

——そうだ、あれはまずかった。

今更ながら気づく。後悔あとに立たず。

「やはり、まずかったよな。ごめん」

「一応立場としては、藤沖も、関崎もいるんだからさ。ちょっと考えなよ。ど鬨だよ」

こずえは嘔き出しつつ、いたずらっぽく微笑んだ。

「でもまあいっか。あんたには伴奏よか指揮者の方が似合ってるしね。杉本さんに見せてやりたかったよねえ」

その二十 残響（４）

約束通り放課後は、元男子評議連中と一学年上の先輩たちとのカラオケBOX打ち上げに参加した。帰りのホームルームが終わるや否や、一年C組の評議三人衆が上総を迎えに教室まで乗り込んできたからだった。

「立村ちゃん、お待たっせ！」

天羽がにやにやしながら上総の肩を抱く。周囲から好奇の目が刺さってくる。

「悪いが、A組のヒーローをもらってくからな」

誰がヒーローなのかわからないが、難波がA組に残っている生徒たちへ呼びかけた。反応は怪しい。そりゃそうだと当の本人である上総は思う。

「立村、すごいよ。もう学校中立村のことで話、持ちきりだよ。しらけてるのA組だけじゃないかなあ」

周りに聞こえるよう上総に話しかける更科。なんだか恥ずかしくなりそうなことを言い募るのはやめてほしい。

「そんなに立村評価されているのか」

驚いたふうに男子たちが囁く。女子たちはみな、ちらと見て無視。一部の女子たちである程度上総を嫌っていない……好意ではない……グループは何か話をしているようだが聞きとれない。天羽が頷く。

「そうだよん、今朝はもちろん、最優秀賞獲っちゃった一年C組ブラボーが一番のネタなんだがな。トリを飾った元評議委員長と来たらそりゃあ驚くぞ。それも伴奏と指揮者を兼ねたとなったら、普通じゃあねえよな。二年、三年の先輩たちからもほら、立村、めちゃくちゃ声かけられてただろ」

「あ、ああ、確かに」

嘘ではない。実際、休み時間廊下をうろついていると顔見知りの先輩たちから、

「立村お前よくやったぞ！ 評議の面子を保ったな！」

「まじ、本条に見せたかったぞ。これからは女子選り取りみどりだろ」

と全く意味不明な褒め言葉を浴びせられて閉口した。現在は野に降りている上総だけでも、中学時代の「評議委員長」という肩書きが妙なところで影響している。

「な、だから俺の見込んだ男だったの、さ、行こうぜ、先輩がたがお待ちかねだ」

天羽が手を振り、後ろに従うように難波と更科が続いた。上総は関崎に、

「騒がせてごめん。またあとでな」

小声であやまり教室を出た。関崎も機嫌よく、

「そうだな、今度またゆっくりカラオケ行こう」

関崎が指定しても、もう誰も意外と思わない場所を指定してきた。

すぐに自転車で駅前の比較的明るいカラオケBOXに向かった。秘密会議を考える場合はそれなりに、少し町から離れた場所を選んだりもするのだが今日は昼過ぎということもあって、開放

的な雰囲気のお店を先輩たちが選んでくれたようだ。上総以外の三人が地図に強いこともあり、初めての店ながらすぐにたどり着いた。二年B組の菅西先輩の名前で予約が入っている。この辺はすべて天羽に任せっきりだ。

「お前ら遅かったなあ」

すでに飲み物とピザを注文してさっさと食べまくっている三人の先輩たちにまずは正座して礼をする。一応は礼儀だ。テーブルの隅っこに四人ちんまり座る。

「ほらほら、腹減ってるだろ、食べよ。天羽と難波はこっち来い、向かいには更科と、あと立村、お前端っこ行け」

「わかりました」

みな逆らわず言われた通りの席についた。ピザは今のところ一枚のみだが、これから追加できるという。また天羽が注文を取って電話をかける。

「そいじゃあ、今日は青大附高、合唱コンクールの裏打ち上げてってとこで無礼講で行くぞ」

全員分の飲み物が届いたところで乾杯の音頭を取ることになる。

「では今日は、やっぱり奇跡のアカペラ大合唱をやり遂げた、菅西に任せる」

「よっしゃ！」

あぐらをかいてくつろいでいた菅西先輩は立ち上がり、自分の分であるメロン色クリームソーダを片手に、

「ありえない程ハプニングの連続にもかかわらず、無事に合唱コンクールが終了したことを祝って、かんぱーい！」

「かんぱーい！」

めでたくみな、宴の始まりとなった。

元評議同士ということもあり、かなり遠慮なく話ができる。一番隅っこに追いやられた上総も、隣の更科からC組の合唱事情を詳しく聴かせてもらうことができた。目の前にでピザをひたすら食っている難波の見事な指揮者ぶりや、前日のクラス打ち上げの盛り上がりについても同様だった。

「そうか、それならすべてが上手く回ったんだな。聴きたかったな」

「すごかったよホームズ。自由曲のサビの部分でさ、席の方で確かに誰かが歌ってる気配あったんだよ。そしたらすぐにそっちの方にも指揮で促して、みんな大合唱。まじ感動したよ。なあホームズ」

「音痴だ音感ねえとかいろいろ罵倒されてきたが、ざまーみろってとこだな、全く」

極めてクールを装いつつも、褒められるのはまんざらではない難波。もう二切れ平らげている。上総はまだひと切れを消化するのにえらく時間がかかっているのにだ。

「まあ、そうだな。一年C組の功労者はやっぱり難波だな」

先輩たちが一斉に拍手すると、さらに舞い上がる難波。

「先輩たちはわかってくれててありがたいです。目指すは来年も指揮者目指します！」

「お、とうとう宣言しちまったか。音楽委員で行くか？」

「いや、クラス替えがあれば次回こそは評議狙いでいきます」

相当、評議以外の委員という立場が悔しかったと見える。更科がふくれつつらでつぶやく。

「そっか。ホームズは俺と同じクラスが嫌なんだなあ。いいよ、いいさ」

「なあに拗ねてるんだよ更科。お前には愛しいお姉さまがいるだろ」

今度は更科をからかう先輩方。当然のように更科は反論する。

「先輩違いますよ。俺のあの方はお姉さまじゃないんですよ。いいなずけって言ってくださいよ」

「わりいわりい。傷ついたなあ、更科も」

またげらげら笑う。ここでもしアルコールが入ったらもっと自制心とっぱらった話題になるのかもしれない。天羽が今度は、別の意味でスターである二年B組指揮者・菅西先輩にインタビューする。

「菅西先輩に聞いたかったんですが、結局あれ、なんでいきなりピアノ止まったんですか。気分悪くなっちゃまって弾けなかったとかそういう奴ですか」

「違う。たち悪すぎ、なあ」

ここに揃っている二年の先輩たちはすべてB組だった。青大附中出身の評議委員はすべて同じクラスにするという意図的な事情による。菅西先輩は天羽からつけあわせのサラダを取り分けてもらい、口に押し込んでから語り出した。

「ほんとはいたんだよ。もっと上手いピアノ弾きがな。ただ親の力とか面倒な事情とかがいろいろあって、弾けるって自慢はしたいけど実はど下手な女子が担当になっちゃったんだ」

「へえ、でもその人ピアノ弾けたんでしょ、一応は」

更科が口を挟む。菅西先輩は仲間たちと顔をしかめて頷きながら続けた。

「そいつは自分が上手だと思い込んでて立候補し、中学の時はそれなりに弾けたから大丈夫と思ってたんだろうが、今回選択した曲がめちゃくちゃむずかしいのなんのって。転調ありの、フラットどっさり譜面についてるの、十六分音符どっさりの、ってとにかく面倒な曲なわけ」

「ああ見た見た。確かにありゃあ、簡単に弾けるもんじゃねえなあ」

「先輩、でもそれだと肥後先生ももう少し簡単な楽譜提供してくれたりしないんですか」

難波が質問した。

「俺は立村が肥後先生から譜面を受け取るころ見てましたけれども、こいつに弾けそうなかんたんな楽譜選んでたみたいですよ」

「最初はそうしてたらしいんだ。先生もあいつの腕前をそう高く評価してなかったから、簡単なものにしようとしてたらしいんだが、プライドなんだな結局は。そんなバイエル終わるか終わらないか程度のピアノの腕前じゃないんだわよ私は！とか意地はっちゃまって、超難しい楽譜選んじまったらしいんだ」

「ひゃー、でも途中で、ほら、軌道修正とかしなかったんですかい」

天羽が突っ込む。

「したくても、できなかったんだよ。しようとしたらヒス起こしちゃうし、実際ろくすっぽ弾けねえ状態ってのは練習でばればれだったし。最後に俺も見かねて、隣のクラスの伴奏娘に頼み込

んでテープ録音してもらったんだ。どうせ幕の陰ならテープでもいいだろって。ところがさ」

また二年三人、がくっと肩を落とす振りをする。一年全員身を乗り出して聴き入る。誰もカラオケのマイクなど気にしじゃない。

「ところが、その伴奏担当に渡しちまったのが運の尽きだよ。当日持ってきたか？って聞いたら、なくしちまったと言いやがった」

「それ、わざとだったら村八分の刑じゃないですかい」

天羽が震え上がるように両腕で自分を抱く。

「ま、これは俺たちもまずったと思うんだがな、それをついか一っとなっちまってそいつを責めちまった。クラスの連中も同じくな。結局それが止め。ある程度はそれでも弾けていたのが全然すっ飛びしまって、ペケ」

「でも先輩たちは凄すぎます。カッコいいですよ。俺、客席で見ましたけどアカペラで完璧に歌い切ったって」

「更科は可愛いこというねえ。そうだよ、俺たち頑張ったよ。あれは奇跡だった」

頭を撫でられる更科を上総はちらと横目で見つつ、冷えたピザの二切れ目に取り掛かった。

「けどこれからが問題だわな。俺たちとすれば戦犯としか言い様のない伴奏者とこれからどうやってクラスメートとしてやってくべきか。ただいままじで悩んでる」

「どうなさるつもりなのですか」

やっと上総も口を挟むことができた。ふっと空気がこわばったのを感じる。何かまたしくじっただろうか。三人の一年男子が不安そうに上総を見やり、二年先輩たちはいらただしげな目線を投げる。

「どうしたほうがいいと思う、立村は」

「誰か、その人には仲のいい人とか味方はいるんでしょうか」

おずおずと尋ねる。本当はこの場で先輩たちに問う内容ではない。そのまま天羽たちに先輩たちへの相槌をまかせ、上総は黙って座っているのがベストだとかつての経験から学んでいた。大抵の場所には、本条先輩がいる。いつも本条先輩の隣で黙って座っていれば丸く収まる。ただ上総が自分自身で切り盛りしようとする、あまり雰囲気がよくなくなるというのも確かにあった。どうしてかはわからない。自分のタイミングの悪さだろう。

「いねえなあ、な？」

三人の先輩方が頭をつきあわせ首を振る。

「まあ女子だしそれなりに付き合いはあるかもしれねえけど、みな今回のことで見放しちまってるし、そもそもそいつ学校に出てきてねえよ」

「このまま引っ込んでてもらうのが一番楽な解決策ではある」

「まあな。けど現実そういうわけにもいかんだろうし。出てきたら出てきたで、俺たちも許せるかと考えると、そう心広くねえよなと自覚する。そんなわけだ」

そこまで三人語った後、また上総に問いかけた。

「じゃあ立村、お前ならどうするよ」

「俺なら、たぶん」

口ごもった。これ言っているんだらうか。でも仕方ない、拍手喝采の陰で顔を覆って駆け抜けていった女子の姿を見てしまった以上は。

「まずその人と仲のいい女子を探して、できるだけ付き添っててもらおうよう頼みます。その人がなんでできるわけもない伴奏に立候補したのか、理由があるはずです」

「理由か、んなもの調べてどうする？ 過ぎてしまったことなのによ」

「合唱コンクールは過ぎてしまいましたが、クラス替えが行われるまであと半年あります。その間、伴奏を失敗したという理由でクラスの居場所がなくなると、きっとその人は針のむしろじゃないかって気もします」

「だが、伴奏なしで歌って下手したら大恥かきそうになった俺たちの立場はどうなるよ」

もう引けない。言うしかない。どうしても目の前にたくさん映像が浮かんでしまう。特定のひとりの女子が浮かんでしまう。押し流されそう。隣で更科がつついていて、目の前では天羽と難波が口をぱくぱくさせて「やめろ」とつぶやいている。

「結果としては歌い終えたぞ。けどな、優勝はできなかった。これしんどいぞ。伴奏さえ揃ってればそれなりに結果出せたかもしれないのにな。ちくしょう、一年C組に負けちまったよおって泣きてえよ。まあ今回はお前ら三人の努力に免じて許してやるがよ」

和やかに戻そうとしている。それに乗っかれば本当はいい。なぜ自分がこんなにかたくなになってしまっているのかわからない。自分でなぜ抑えられないのかわからない。

「先輩たちは、心底尊敬します。あの場で、伴奏なしであれだけ完璧に歌い上げられるのは、どれだけ練習してきたかってことを物語っていると思います。俺が言いたいのは、そこからこぼれ落ちた伴奏担当の人をあのまま切り捨てていいかってところです」

「切り捨てねえよ。義務だよ、俺たち元評議だしいいじめはしねえ」

「ただ許せねえってことは、感じたっていいだろ」

「それは理解しています。でもどんなに自分のピアノを弾く力が足りないとわかりきっていても、どうしても弾きたい、何とかして結果を出したい、そういう気持ちは持っていたんじゃないかって気がします。結果は最悪だったかもしれませんが、なんでその人がそこまで伴奏にこだわったのか、それを受け止めることは、必要なのかなってそんな気がします。自分ではどうしようもない感覚や感性というのがあるんじゃないかとか、たとえばそんなこと」

「頭で考えるのは簡単だが、実際その場に立ってみろ。そんな仏様になんかなれねえよ！」

上総が語れば語るほど場の雰囲気さらに悪化していく。どうしてこんなに自分がいきり立ってしまうのかわからない。抑えられない。

突然難波が立ち上がりマイクを持ち、

「それでは一年C組の最優秀賞いただいた自由曲、『砂のマレイ』エンディング『スケルトン』を歌います！」

隣で天羽が歌詞ノートを必死にめくり、

「じゃあ先輩、せっかくだし俺もホームズのサブについていいですか？」

あどけなくアピールする。先輩三人があんぐり口を開けている中、一年男子三人の大合唱が始まった。三人並んで歌うのを聞き改めて、
——やはり難波は指揮者で生きるべきだ。
その思いを強くした。

「お前、いい同期に恵まれてるな。救われただろ」

先輩のひとりが上総に、吐き捨てるようにつぶやいた。

——こうやって助けてもらったのは、こいつらだけじゃない。関崎も同じことしてくれたな、古川さんとけんかになりそうになった時。

笑いと拍手の嵐に、上総の語り尽くした言葉も吸い込まれていった。冷えたピザはお世辞にも美味しくない。それでも黙るためには食べるのが一番だと改めて思った。

その二十 残響（5）

一年C組連中の盛り上がりぶりと反比例して上総の居場所はだんだん狭くなっていく。二杯飲み物をおかわりし、そろそろ二時間お開きという頃に、

「そうだそうだ、お前ら今日まだ暇か？」

「はい！」

元気よく更科が答える。天羽と難波も顔を見合わせ頷く。

「それじゃあこんなしけたとこでちんまり固まっているよりも、どっかでは一っとストレス発散しようや。とりあえず、ボーリングなんてどうだ？」

「賛成！」

またあほっぽく更科が手を上げる。こうやって空気を和ませる役割の更科を、先輩たちは結構ひいきにしている。ついで天羽が、

「じゃあ立村、お前どうする？」

「俺は、ええと」

口ごもる。この場で明らかに自分が異分子である自覚を持ってしまった以上、とてもだが和やかに会話する自信はない。一応、中学時代からそれなりに二年の先輩たちとはそつなく過ごしてきたつもりだったが、よく考えるとそれは本条先輩の後ろ盾があったからでありそれが無い以上、冷やかな視線で射られてもしかたがないのかもしれない。

「とりあえず、外に出るとするか。今日は俺たちのおごりだ。腹いっぱい食ったか」

——食べないと間が持たないし。

かたくなにカラオケで歌うことを断り、先輩たちも無理強いはしてこなかったこの場。

ほとんど上総はいないものとして扱われているような気がする。

合唱コンクールのトリを図らずも勤めるはめとなった一年A組の努力についてはある程度のねぎらいをもらえたものの、上総よりもむしろ、関崎の王子様の振る舞いに対する賛否が分かれ、

「あれはよかったのか」

「いやあれはまずい。動かして病気が悪化したらどうするんだ」

「だが指揮者がすぐに気づいたのは認めるしかないんじゃないか」

「棄権するよりも歌いなおすべきだったんじゃないのか」

といった極めて堅い議論となり、ここでもまた上総は蚊帳の外となった。

——やはり、俺の言い方がまずかったんだろうな。

たぶん、付き合わざるを得ないだろう。これから仕方なく、ボーリングで玉転がしをし、さびしくガーターの溝掃除に徹することになるだろう。本条先輩に教えてもらったのでやりかたは知っているけれども、楽しいとは思えない。でも先輩なのだから、しかたない。

支払いもすませ店を出た。先に先輩たちが出て、入口の自転車置き場でたむろっている。時計をやたらとちらちら覗いている。二年同士でこそこそと囁いている。

「そろそろか」

「だな、そろそろ来るな」

一年男子連中も自転車の鍵を外したりして準備を整えていた。小声で難波にどやされた。

「大馬鹿者！」

「ごめん、俺が悪かった」

「自覚しろって！」

気づいた天羽がすぐに割り込んできた。助けられた。

「まあまあ立村ちゃん、今日は思いきしストレス発散しようじゃないの。な」

「そうだよ、ひっさびさだよ、ボーリングってさ」

わざと明るく振舞うのがかえって上総には息苦しい。そっと縮こまってハンドルを握り締めようとした時だった。

「よおし、来た来た。ナイスタイミング！」

二年男子先輩たちが両腕上げて手を振っている。こちらに向かってくる自転車が一台見える。一年男子たちが背伸びして誰かを確認しようとしている。上総も難波の肩ごしにちらと覗き込み、瞬時に誰かを把握した。難波を押し分け、さらに前で手を振っている菅西先輩を押しやった。

「本条先輩！」

かなり礼儀知らずなことをしたにもかかわらず、二年先輩たちは上総に何も言わない。手招きしつつ、

「ほら、来たぞ、お前の兄貴分に甘ったれてこい」

「じゃあ、これでお勤めご苦労さん」

和やかに上総を前へと押しやった。

「悪いな、またこいつが面倒起こしたのかよ」

銀縁眼鏡の本条先輩は、私服の黒いシャツに白いベストという、かなり目立つ格好での登場だった。二年先輩たちと再会を祝した後、ちらと上総を睨んだ。

「本当はカラオケで一発派手に決めたかったんだが、学祭の準備でな」

「いやいや、無理させてこっちこそ悪いことしたな。今日はともかくあすまた飲もうぜ」

——先輩たち、もしかしてそれ、校則違反で捕まるんじゃ。

少しだけ不安を感じたものの、すぐ打ち消した。本条先輩に限って大丈夫だろう。

「あれ、本条先輩、一緒にボーリングいかないんですか？」

更科がまたチワワ顔で問いかける。本条先輩は首を振り、にやりと笑った。

「俺にはこれから、こいつのお守りという面倒な仕事が残ってるつつうわけだ。さあ行くぞ。さっさとついてこい！」

あっけにとられている一年男子たちも、すぐ二年男子先輩たちの視線で悟ったのか上総に手をかけて、

「さあ、行ってこいよ」

天羽の言葉にみな頷いた。

——なんだよ。まるで俺が本条先輩がいなくなるとなんにもできないガキみたいじゃないか。

「実際そうだろう。思ったこと全部顔に書いてるぞ」

途中でスナック菓子と飲み物を買込み、本条先輩の住むアパートに転がり込み、マイコンが鎮座ます部屋に通された。

「今日は俺も学祭の同好会展示で忙しいってのによ」

「すみません、けど俺が先輩呼び出したわけじゃないし」

「ほとんど一緒だろう。ったくもう。まあいいや。さっき菅西から聞いたが昨日合唱コンクールだったそうだな。で、またお前のことで大騒ぎしでかしたと」

「違います。確かにハプニングはありましたけど、俺のせいじゃないです」

むっとして言い返す。そのくらいしてもいいと思う。本条先輩は呆れたように両手を腰にあて

、

「ったくお前はガキンちょすぎだわな」

とため息をついた。

ポテトチップスの袋を開き、サイダーを注ぎ、まずは一息つく。本条先輩も机の上にちらばった紙をまとめ、風呂敷をかけたままのマイコンに電源を入れた。また派手な音をして立ち上がるのを待っている。

「まあいい。今日はどっちにせよバグ取りやんねばなんねえからな」

「なんですか、虫が出るんですか。この部屋で」

思い切り雑誌を丸めて頭を叩かれた。

「バグ取りってのはな、プログラムにミスがあったり入力間違いがあるんじゃないかねえかってのをチェックすることなんだよ。たとえばだ、RUNというプログラム用語がある。これは」

「走る」

「まあ、走らせる、ってのがどっちか言うと正しいがな」

英語科の上総にはプライドが少し傷つく言葉を言う本条先輩。相変わらずだ。

「それをうっかり間違えてRANなんかにしちゃったらそりゃ動かない。当たり前な真理だ」

「わかります」

「でだ。うちの学校の学校祭は十月に入ってからなんだが、幸いマイコン同好会の展示スペースをもらえたんでここでゲームセンターを開いてみるかと準備中というところなんだ。わかるか？

ゲームセンターってことは、プログラムが必要で、さらにそのプログラムはどうやって調達する？俺が全部指揮して作るわけだ。だがプログラムってのはとにかく長い。打ち込むのに骨だ。てなわけで俺としては毎日人差し指でぴこぴこ打ち込み作業を進めてるってわけだ」

「人差し指、ですか」

上総が遠慮がちに尋ねると、本条先輩は指を立てて見せた。

「しゃあねえだろ。それでも俺は早い方だ。でもうち間違いつてのはどうしても出てくるわけで、それがいわゆるバグになる。バグは単なる意味なしの間違いだけであればプログラムが走らないだけでそれほど害はない。だが、たまに暴走しちゃってそれ自体が消えちゃうってことも全くないわけじゃない。どちらにせよ、蚊やハエやダニやワラジムシはいないに越したことない。と

ということでこれから俺は網持って虫取りにかかるよ、そういうわけだ」

本条先輩が相変わらず青潟東高校でマイコンメインの青春を謳歌しているということだけは理解した。いつ頃なのだろう。学祭は。確認して予定を覚えておくことにした。

——杉本、連れて行くか。

口では「虫取り」とか言って上総を邪険にするような態度を見せたものの、やはりサイダーをすすってうなだれている姿は哀れに思えたのだろう。マイコンの画面を消して、上総の隣にあぐらかいて座った。自分のカップを目の前に差し出して、

「まあ、注げ」

命令した。言われるがままに注ぐ。

「さっき菅西から全部話は聞いた。とりあえずお前なりに無難に片付けたことだけは把握したしそれ自体は責められることじゃねえと思うが、なんでいきなり菅西どもにつっかかったんだ。全く、なんで俺がお前をなだめなくちゃあならないんだ」

「いや、そんなわけではありません」

突っかかってしまった理由を問われても、正直困る。自分なりにわかっているのは、菅西先輩をはじめとする二年男子先輩が、伴奏を投げ出してしまった女子生徒に対してあまりにも厳しい言い方で断罪していることに違和感を感じたということだけだった。

「菅西もさすが俺の同期、元評議委員は捨てたもんじゃねえだろってことでめちゃくちゃ誇りに思うってだけで済むんだが、お前なんでその伴奏女に同情する？ 個人的に知ってるのか？」

「いえ、知りません」

「じゃあなんでだ？ ははあ、お前、あいつに重ねて見てるだろ」

「誰ですかあいつって」

口にしてすぐに気づく。まずい見抜かれた。顔色変わったのを本条先輩にも悟られた。

「まったく、種明かしたのは簡単だってな。全くお前、あの子のことになったら我を忘れるんだもんなあ。俺は前から知っているが菅西たちは知らねえもんなあ。完全に情報不足っていうそれだけの問題だろ。ああわかったわかった。あとであいつらにもそう言っとく」

「何を言うっていうんですか！」

身体が熱くなっている。なぜこんなにパニック起こしているのか、なぜ本条先輩がにやついているのか、すべてが苛立つ。

「立村、よおく覚えとけ」

本条先輩は上総の頭に手をかけて、無理やり自分のほうに顔を向けた。

「あのな、お前がはらはらして見てよいのはあの子だけ。いいか、ひとりだぞ。よその子はよその奴が誰かかしら面倒見る。菅西たちだって口ではああ言ってるが自分のやらねばならねえことは承知してるはずだ。そうでなかったら青大附中の評議を三年間勤められるわけねえだろ、それだけの玉だ」

「でも、先輩たちは」

口ごもる。どう考えてもカラオケBOXで交わされた会話を聞いている限り、あの伴奏の女子

の未来は暗い。表面上は許されるかもしれない。だがその後の傷はどうなるのだろう。叫ぶこともできない、かといって言い訳すれば「自業自得」と罵倒されるのがオチだ。本当は口に出せない惨めさを抱えていてそれをごまかすために伴奏立候補したのかもしれない。自分には弾けないレベルだったとしても、もしかしたら奇跡が起こるかもと信じたのかもしれない。結局はせせら笑われ立ち直れないほどの大失態で消えていくにしても。

「おーい、もしもーし」

本条先輩が面白そうに上総の前で手を振る。

「ただだよ、お前また自分の世界に入っちゃってる。あのなあ、前から思ってたけど立村は心配性なんだよ。ひとりの例外女を見つけてしまったからそいつと他の連中が同じように苦しんでるんじゃないかって勝手に妄想してばかりいるんだろ。悪いが人間そんなやわじゃねえ。例外ひとりには確かにいるけどそいつを基準にして世の中の女全部見たら、神経燃えるぞ。まじでな。特にお前みたいな奴はだぞ」

——そんなこと言われたってしょうがないだろ、先輩見たいに凶太くなれたらいいけど。

「あのなあ、お前が相手のことを考えすぎるのは仕様だししょうがねえ。けどな、今は青大附高に俺がいないんだぞ。わかるか、この意味？」

首を横に振る。本条先輩は両手をあぐらかいた膝に乗せた。

「俺がいないってことは、通訳する奴が二年の中にひとりもないってことだ。英語科だしその意味は理解できるだろ」

「はい、なんとなく」

小声で答えると本条先輩はじっと上総を正面から見据えた。

「菅西も電話で話してたが、天羽たちはだいたいお前の思考回路を把握していてそこで上手くカバーするように動いているようだな。なんだよ『砂のマレイ』のエンディングかよ。自由曲が。ああやってあいつなりにお前をかばってやってるってことは覚えておけよ」

「わかってます」

「わかってねえよ。けどな、お前の言いたいことってのは俺の同期たちからするといわゆるドイツ語だったりアラビア語だったりする。全く通じねえ。じゃあどうするかってことで考えるのが世界共通語の英語というわけだ。お前が毎日浴びせられているあれな」

なんとなく身体の中に翻訳されてきているような気がする。

「英語だったら授業で勉強しているし日常会話程度ならなんとかなる。だからそれだよ立村。お前がやんねばなんないのは、他の奴らとの英語としてのコミュニケーションをもっと勉強しろってことなんだよ」

「それってなんですか」

「自分で考えろ。まあしゃあねえ。とりあえず菅西たちとのバトルでの答えだけ出しとくか。一番いいのはつらっとこいて無視する方法だが、それができねえんだったらあいつらが本当にどうしようとしているかを納得するまで聞くことだ。お前、自分の意見求められたらすぐべらべら喋っちゃっただろ。あれがまずい」

「え、でも先輩たち聞いてきたから」

本条先輩は首を横に振った。いかにも上総が何も分かっていないかのように。

「こういう時ほど先輩を立てろ。まあ口先では罵倒かもしれねえが、答え言っちゃまうとあいつらはそれぞれ頭寄せ合って、先生方と相談して、誰かフォローに回ってもらうよう話を付けるつもりだったらいい。下手したら登校拒否状態になっちゃまう可能性大だからな。そのへんは大人を混ぜて対応する方法で進めるつもりのようなんだ。それ聞いたらお前も安心するだろ？」

「最初からそう言ってくればいいのに、そんなことわかりません」

「ほらそうやってまた拗ねる。全く天羽たちもよくお前のこと面倒見てるよな。ガキ扱いするって怒りたいのもわかるが、ガキそのもののことばっかやらかしてるんだからしゃあねえだろ。週明けたら、菅西たちにはちゃんと頭下げて謝っとけ。俺もちゃんと話しておくからな。それとだ」

本条先輩は手元のコピー紙を十枚程まとめてテーブルに置いた。数字と英語の羅列がずらずらプリントされている。プログラムという奴だろう。

「お前、ピアノ弾けたって本当か」

「先輩に言ってませんでしたか。本当です。実際弾きました。一曲だけですが」

「そうか。それなら聞くが、当然鍵盤弾けるってことだな」

「あたりまえです」

「わかった、それなら今日のカウンセリング料払え。こっちこい」

肩を押されてマイコンの前に連れて行かれた。本条先輩は手元の紙を立てクリップタイプのファイルにはさみこみ、ディスプレイの脇に立てた。上総の目の前にちらつかせた。

「ミッションその一、このプログラムを打ちこめ」

「え、俺キーボード打ったこと全くないです」

何を考えているんだろう。本条先輩の顔を覗き込みからかっているのかを確認するが、不敵な笑いが浮かんでいるのみ。本気だ。

「打てるはずだぞ。立村わかってるだろ。ピアノってのはドレミのキーを指が覚えていないと打てねえってことをだ」

「もちろんわかってます」

「じゃあ、これからしばらくキーボードと格闘しろ。ブラインドタッチつうのができる奴がいるらしいが、そいつに聞いたら指に打つべき文字を覚えさせることで覚えられると聞いたぞ。とりあえずキーボード教則本ってのはある。それでも読んで、ここで打ち込め。そうしないと、今夜は帰さねえぞ」

放り投げられた「ブラインドタッチ教則本」という本をめくり、上総は改めてキーボードを見下ろした。淡い、灰色と白とが入り混じり一部うぐいす色のキーもある。いったいどこをどう打てばいいのかわからない。

「この本ぱらりと読んでみたんだがな」

本条先輩はわざわざめくって上総に見せつけた。

「ピアノが得意だと上達が早いんだと。悪いが俺は鍵盤楽器なんて鍵盤ハーモニカしかいじったことねえよ。どういう事情かわからんがせっかく伴奏で鍛えた腕だ、俺の偉大なるプログラムを

読み込むために、さあ、力を貸すんだ！」

ひたすらキーボードの両手打ちマスターに全力で打ち込んだ。最後までプログラムという名の文字列をを入力し続けるうちに、少しずつ要領が飲み込めてきた。ピアノの鍵盤とは全く異なる感覚だけども、気がつけば外がすっかり闇と化しいつの間にか戻ってきた里理さんが素うどんを出してくれた頃にすべて完了した。

「バグってなければこれで走るはずだがなあ」

本条先輩が「RUN」の文字を入力しうぐいす色のキーを叩いた時、ディスプレイに広がったのは七色の虹と、それを渡っていく動物たちの群れだった。

「もしかして『オズの魔法遣い』ですか」

「その通り。いつもシューティングじゃあ芸がねえ。学祭には女子もどっさり来る。野郎ばかり喜ばせても虚しいだけだからな。こういった女子どもが喜びそうなものも作ったと、そういうわけだ。ゲームじゃねえよ。デモプログラムだ」

本条先輩は画面を満足げに眺め、大きく伸びをした。すぐに割り箸片手にうどんを平らげた。

「この一週間打ち込みで徹夜だったからな、今夜は熟睡するぞ」

本条先輩は満足げに上総を横から見やり、肩を叩いた。

「お前が打ったデモは学祭本番で使うぞ。見にこい。それにしても両手打ちはまじ早いわ」

母からの、

「あんたちゃんと弾けたの？ 迷惑かけなかったの？」

おそらく来るであろうと思われたせつつきもなく、いつものように朝の身支度、シャワー、その他もろもろの準備を整えた。毎週日曜朝の習慣ともなれば、父がいらいらしないうちに行動するなどの知恵もつく。

「昨日は遅かったな」

「本条先輩のところに遊びに行ってた」

一応、評議委員会関係の人たちが絡んでいることはあえて言わなかった。

「あの、気持ちのいい青年だね」

「マイコンの打ち込み手伝っていただけけど」

「そちら方面に関心があるんだな」

車の中でシートベルトを締めながら話を続ける。朝七時半に出発というのもいつも通り。父に気になったことを尋ねてみる。

「そういえば母さんいつのまにか帰ったみたいだけど」

「忙しいんだそうだ」

まずい、機嫌悪くなりそうだ。母がもう少し長逗留してくれるのではないかと父も期待していたに違いない。甘い。あの人がそんなに立村家の男子を甘やかすなんてことはない。それにへたに今、いられたら大変だ。嗅覚の鋭いあの人のこと、すぐに嗅ぎつける。

「上総、お前、印條先生の話はしたか？」

「してない」

「あの、先生のことは」

「全然」

「上等だ」

父はほっとしたようにカセットテープをカーデッキに差した。上総も好きなタイプのイメージミュージックだった。少し目を閉じてまどろむことにした。

——立村くん、よかった、ほんっとにかっこよかったよ！

土曜の休み時間、美里がA組に駆け込んできて放ってくれた言葉。

——お前やっぱやればできるじゃん。ほら、俺からのご褒美。

羽飛が自分らのクラスで出たパックの野菜ジュースをぽんと手においてくれた。

——りっちゃん、おつかれ！ てなわけでそろそろ一緒にどっかで飯食わない？ 東堂もいっしょだけど、よければ俺の下宿でまたハンバーガーでもどう？

南雲も忘れた頃にさりげなく誘ってくれる。

なんだかんだ言って、元三年D組の仲間たちは上総を労ってくれていた。詳細を確認したわけではないけれど、他クラスではそれぞれの事情があるらしくまだ尾を引きそうな問題も多いそ

うだ。特に一年B組の状況は深刻で、合唱コンクール後団結が強まるどころかかえって揉め事が増えている状態とも聞く。

——清坂氏とあの、静内さんとのことかな。

あまり他クラスのことには関わりたくないのだけど、なんといっても美里が関係している。そう考えると話くらいは美里から聞いたほうが喜んでもらえるのかもしれない。できれば羽飛も同席してもらおうかとも思う。

——そうだ、杉本の受験どうなったんだろう。

——霧島も最近顔出さないけど、やっぱり忙しいんだろうな。

自分のことにかまけてしまい、後輩二人のことをすっかり忘れていた。まあ霧島については黙っていても向こうがその気であればずかずか近づいてくるし、杉本にいたってはもともと上総からちょっかい出さない限り寄って来ない。月曜以降に考えるとしよう。

ただ、とも思う。

——中学の話は高校にどんどん情報上がってくるけど、高校で起きたことって意外と中学には来なかったよな。俺も中学にいた時は高校の合唱コンクールでこんないろいろな面倒な事情が絡んでいるなんて思っても見なかったしな。

そう考えると今回上総が校内で見直される気配があったとしても、杉本には伝わらないことになる。こずえが言った通り、指揮している背中だけでも見てもらえれば多少の変化は感じてもらえたかもしれないのだが、いかんせんこれが校舎の分かれている悲しさ。杉本にとって上総は「出来の悪い不細工な、多少話のわかる先輩」のままなのだろう。

——そろそろ受験校絞る時期だよな。杉本は本当に、あのなずな女学院の推薦受けるんだろうか。それとも、青潟東高に出願するんだろうか。

もう十月ならイエスカノーくらいははっきりしているはずだ。あすにでも中学に迎えに行こう。捕まえて、「おちうど」へ連れ込もう。

「上総、着いたぞ」

軽く揺り起こされた。すっかり寝入っていたようだ。シートベルトを外しドアを開けると、完全に凍りついた風が吹き抜けてきた。やはり市内とは違う。厚めのコートを用意してもよい頃だ。楽譜の入った鞆を持ち、身をすくめた。

「やはり寒いな」

「コートそろそろ出そうか」

話しつつ、玄関で挨拶し、印條先生の部屋に通された。何度も触れたアップライトピアノは相変わらずつややかに輝いている。先生および奥さんがお茶を出してくれている間に上総は確認した。

「父さん、来週以降のことなんだけど」

「どうせ反対したところでお前はやる気なんだろう」

ひと呼吸おいて頷く。

「しょうがない。ただ母さんには余計なこと言うなよ。上手くこちらでもごまかしとくが」

「わかった。ありがとう」

いくら印條先生がただで教えてくれると申し出てくれたとはいえ、父としても鶉呑みにするわけにはいくまい。多少なりとも月謝が発生することだろう。ただでさえ金のかかる青大附高に通っているだけではなく、習い事の負担までかかるとなっては上総としても本気で取り掛かるしかない。たとえ趣味で、音大目指せるレベルどころか「棒のような弾き方」の矯正で終わったとしても、自分のできる限りのことを行う必要は絶対にある。

改めて印條先生に父とふたり挨拶し、座り直して合唱コンクールに関する報告を行うことにした。いろいろ話が入り組んでいるので父と上総が交互で説明することになる。

「そうか、それは大変だった。ドラマのような展開だったのだね」

「上総の場合、芝居じみた出来事に巻き込まれることが多々ありまして」

照れくさそうに笑いながら父は概ねの流れを説明してくれた。

「てっきり弾き間違えとかりピート変なところうつきでかけてしまうのかとか、そのくらいの心配はしましたがまさか、一緒に歌っているお嬢さんが急病になってしまうとは思いませんでした。その後、さらに上総が指揮をする羽目になるとも、いやはや、世の中何が起こるかわかりません。今回の件に関してのみ、僕は息子を褒めてもいいのかなと思ったりもしますね。まあ話を聞いている限りですが」

「褒めたまえ褒めたまえ。僕からも最大の賛辞を送るよ、上総くん」

穏やかに微笑みながら、印條先生は上総にウインナーコーヒーとピーナッツを勧めた。

「恐れ入ります」

「指揮自体はしてみてもうどうだったかな」

「上手くできたとは思えません。ただ」

少し考えて、父を横目で見て、答えた。

「脇で演奏してくれた、ピアノの上手な人の弾き方を聴いて、その気持ちをどうやったら歌っている人たちに伝えられるか、それだけは意識しました」

「この前聴かせてくれた三人のピアニストだね。何番目の人かな」

「最初の人です」

確か一番目が疋田さん、二番目が宇津木野さん、三番目が瀬尾さんだったはずだ。

「そうか、割と軽やかに弾くタイプの人だったね」

「僕もそう思っていたのですが、実際『モルダウの流れ』を弾いてもらったなら全く雰囲気は違っていました。音楽室で聴かせてもらった感じではなくて、なにかこう鬼気迫るといえるか、迫力を感じました」

正直な感想だった。こずえの説明を聞くまでもなく、宇津木野さんのほうが疋田さんよりも表現力ははるか上なのではという印象を前から持っていた。もちろん上手なことには変わらないのだが軽やかさというものが疋田さんの演奏における持ち味であり、上総個人としては宇津木野さんの溢れんばかりの感情叩きつけ 雰囲気に好感を持っていたところもある。しかし、実際会場に

響いた音色は、隠しマイクの影響もあるのかもしれないがある意味宇津木野さん以上の深みを湛えていたような気がする。その音に釣られる形で上総も自分の弾いた記憶と重ねて指揮をしていたつもりだった。

「本番に強いタイプなのかもしれないね。私も本当であればぜひ聴かせてもらいたかったよ。クラスのまとまりもしっかりしたようだし、勇気を出して伴奏者に立候補した甲斐があったというものだよ。よかった、よかった」

相好を崩し、印條先生は立ち上がり折り畳み形式のクラシックな机を開いた。立ててあった二冊の本を手に戻ってきた。

「先日、立村くんからありがたいお返事をいただいて私も本当に嬉しいよ。上総くん、これからゆっくり勉強していくことにしよう。そこで用意しておいたのだが、立村くんも一緒に見てもらえるかな」

大判の少し厚めの、青い表紙の本を開いた。いわゆる楽譜。「ハノン教則本」と「バッハインベンション」の二冊だった。見たことがない。さすがに「バッハ」がバロックの作曲家だということくらいは理解しているけれども、「ハノン」とは誰なのだろう。

「恐れ入ります、これは、いわゆるピアノのレッスン用のものでしょうか」

「その通り。上総くんの技量だとバイエルやツェルニーはものたりないような気がするし、その一方で基本的な指使いや訓練がなされていない恨みもある。『ハノン』は曲の面白みこそあまりないが指の訓練をするために有効な本だし、『バッハインベンション』は練習曲だが弾いていて楽しい。確か『ブルグミュラー 25の練習曲』も弾いたことがあると言っていたね」

「はい。『アラベスク』とか『貴婦人の乗馬』とか」

母に仕込まれたものを適当に並べてみる。

「それならもう一度さらってみても面白いかもしれないね。技量が上がってくるに従ってアラカルトでポピュラーミュージックを選んでもいいかもしれないし、また来年合唱コンクールも行われるだろうし」

「たぶん、もう伴奏を弾くことはないと思います」

上総が遠慮がちに口にすると、先生はゆっくり首を振った。

「まだ来年のことだしその時相談することにするが、また指揮者をやるのならばできれば曲を弾けるようにしておいたほうがいいね。いきなり『モルダウ』の指揮ができたのも、君が一生懸命練習していたから旋律が身体に染み付いていたからだろうと私は見ている。聴かせる機会は確かに少なくなるかもしれない。だが、指揮をする上ではプラスになるはずだよ。まあその時考えよう」

しばらく来週以降のレッスン予定を組み立てる作業に入った後、印條先生の奥さんが部屋に呼びかけに来た。

「みなさん、炊き込みご飯がちょうどいい塩梅ですよ。野々村さんのお嬢さんもいらしてますので、さあご一緒にどうぞ」

——とうとう来たかよ。

父の顔色を伺うが、さすが大人、感情を封鎖しているのがよくわかる。

「弓絵さんも今日、ぜひ私に相談事があるとのことだったのでお招きしたのだよ。楽しいひと時をぜひ過ごしてくれたまえ。上総くんも学校の先生などと思わず、やさしいお姉さんと視点を切り替えて、さあ行こうか」

この場では「野々村先生」ではなく「弓絵さん」と呼ばねばならない。身体がこわばるがもう行くしかない。

その二十一 弾き納め（2）

いくら上総が口先でいいこと言ったとしても、関係者である野々村先生……もといこの場では弓絵さん……が存在する以上言い訳なんてできやしない。

——そりゃ、それなりにすべきことはしたし、野々村先生にも協力してもらったし、感謝はしているけど、でもな、どうなるんだろう。

何かとてつもないへまをしでかしたわけではないしむしろ褒められてもいい内容だろう。ただ上総の場合は中学時代の問題がとてつもなく大きすぎることも確かだ。どのくらい中学担任・菱本先生から申し送りされているかはわからないにせよあまり知られたくないことも混じっているのは否めないだろう。

——頼む、父さん、上手く、相手を傷つけないように丸くおさめろよ。

いつも印條先生のもとでは洋食のランチをご馳走になるのが常なのだが、今日は珍しく和食で、栗が炊き込まれたおこわだった。栗の皮をむくのが面倒で上総は一度も作ったことがない。母もあまり得意ではない料理だった。

「弓絵さんにお手伝いしてもらったのよ」

——これは下手なこと言えないな。

薄い黄身がかかった色の栗にごまがかかっている。あまり勘ぐりたくはないのだがただの白米ではなくあずき入の赤飯というところに思惑を感じてしまうのは悪趣味だろうか。父の様子を再度横目で伺うが、とりあえずは紳士の振る舞いに徹している。野々村先生は台所に入ったままなのでまだ挨拶はしていない。食欲は湧いているのだが喉に通るかどうかは微妙なところではある。

「ちょうど、ご近所さんから収穫したての栗をどっさりいただいてね。とてもだが私たち夫婦では食べきれない。ぜひ遠慮なく召し上がってくれたまえ」

「恐れ入ります。遠慮なくいただきます」

父の挨拶に合わせて上総も頭を下げる。とはいえ、野々村先生が席につかない以上手を付けるわけにもいかず手持ち無沙汰にしていると、ようやくエプロン姿で現れた。すぐにふたり立ち上がり、頭を下げた。

「ご無沙汰しております。先日は息子の件でいろいろとお手を煩わせたようで」

父親としての挨拶を強調しているようにも見える。保護者の雰囲気や余計な詮索をさせないよとの意識だろうか。野々村先生は真っ白いエプロンを外し、紺のワンピース姿で微笑みながら座った。髪の毛を後ろにまとめているのは料理をする前提できたからだろうか。

「さあさ、弓絵さん、こんなに美味しそうにできたのだから、すぐいただかなくてはいけません」

「私、不器用なものですから奥様にすべて教えていただいたのですが、お恥ずかしい」

頬を赤らめるような雰囲気が、どう見ても学校で見る野々村先生のイメージと違う。担任ではないとはいえ、教え子に見られてさすがに抵抗はないのだろうか。

「そんなことはないですよ。弓絵さんはさすが手馴れてらっしゃる。家事一式しっかりとこなせるお嬢さんはそうそう今時いませんよ」

奥さんが話をもり立てようとする。どう考えてもこれは父に対するアピールだろう。上総なりに用心して、美味しくいただくことに専念した。口にふくふくとした栗を箸でつまみ噛み締める。甘く、柔らかく、そして適度に歯ごたえがある。さらにくすんだお赤飯も一緒に放り込む。甘くない、美味しい。

——栗があれば作ってみてもいいかもな。

ゆったり気分で食事も終わり、すぐにティータイムへと流れた。同じ青大附高の教師と生徒ということ、及びあの合唱コンクール直後、ということもあって話題がそこに集中するのはしかたあるまい。野々村先生はプライバシーに触れない程度に、詳細を説明した。ほとんど上総の話した内容と変わらなかった。

「上総くんは本当によくクラスをまとめ、合唱ができる状態にまで持って行っていました。私も最初、A組の生徒さんたちの雰囲気を見て心配になったのですが、すぐに上総くんが自分から声をかけて決断し、その場で伴奏担当の人を指名して一時間だけ練習し、その後すぐ本番でしたから。きっと大変でしたよね」

上総に微笑みかける。怖い。さっき飲み込んだばかりの栗のせいかわが痛む。

「先生のおかげです」

——まずい、ここでは弓絵さんと呼ばねばならないんだ。

言い直すのも間抜けなので黙っていた。野々村先生はそのまま続けた。

「印條先生のおっしゃる通り、担当してくれた伴奏の生徒さんは非常に感情豊かな演奏を披露してくれました。それに伴い、上総くんも旋律を理解した素晴らしい指揮をしてくれましたし、何よりもA組のみなさんが二人の想いを理解して、それゆえの美しいハーモニーとなったのではないのでしょうか。いろいろな事情で合唱コンクールの賞対象にこそ除外されましたが、それでも聴衆の心を確実に捉えた点においては一番だったのではと、個人的に考えます」

「ありがとうございます」

上総なりのお礼を伝える。まだ野々村先生には学校で一言も礼を伝えていなかった。

「そうなんだね。いや、本当に素晴らしい経験をしたようで私も嬉しいよ。立村くん、君の息さんはやはりしっかりしている」

「恐れ入ります。家で見ている限りこんなぼけっとした奴のどこがと思うことも度々あるのですが、周囲の方々に恵まれてなんとかここまでこれたようです」

——ぼけっとした、かよ。

息子貶しはいつものことにせよ面白くない。

「ですが、残念だったのは上総くんの弾く予定だった『モルダウの流れ』が残念ながらそれこそ流れてしまったことです」

野々村先生は上総を優しく見つめつつ言葉を繋いだ。

「事情が特殊ですし、致し方ないところもあるでしょう。ただ、私は印條先生から、また学校でも上総くんの並みならぬ努力を目にし、耳にしておりましたので、そのことだけが心にずっと引っかかっているんです」

「先生、いえ、それはもういいですし」

慌てて口を挟む。別にそんなことこだわっていない。指揮者で十分だと思っている。

「いいえ、これは上総くんではなく、一聴衆である私の意見です。そしてここから先は上総くん、私を名前で呼んでいただけますか？」

——ああ、とうとう来たよ。

もう万事窮す。観念した。

「はい、弓絵さん」

舌に乗せたその名前は、とてつもなく重たかった。大人たち……野々村先生と印條夫妻の満足げな笑顔に上総はまた、全身が凍りついていくのを覚えた。父だけが哀れみを持った眼差しを投げかけてくるのが救いだが、助け舟を出してはくれない。諦めている。

「そうだね、ここでは先生生徒という上下関係な抜きにしよう。これからはまた新しいつながりが弓絵さんにも上総くんにも生まれることだしね」

上総にとっては最悪の展開の予想が伺えるが、あとで父から事情聴取すればいいことだ。何度もつばを飲み込んで耐えた。

「印條先生、ひとつお願いします」

野々村先生は身を印條先生に斜に向けて頭を下げた。

「上総くんに私のためにだけ、『モルダウの流れ』を弾いてもらいたいのですが、先生のお部屋にふたりだけで入らせていただいてもよろしいですか？」

——ちょっと待てよ、先生、いや、あの、弓絵、さん？

大人たちは特に驚くでもない。驚愕しているのは上総だけだった。

「もちろんお部屋の扉は開けたままにしておきます。ただ私はあの場にいたものとしてどうしても彼に、『モルダウの流れ』を弾き納めてもらいたいのです」

「私たちも一緒ではだめなのかな」

愉快そうに尋ねる印條先生と、ほっとした顔の父と、妙に真剣な野々村先生。心では意地でも野々村先生と呼ぶことに決めている。

「先生たちはすでに上総くんの演奏を確認なさってらっしゃるはずですが。ただレッスンではなく、最後の演奏として、私も教師ではなく一聴衆としてしっかり耳に収めたいのです」

「そうかい、わかったよ。ただうら若き女性と年頃の少年だからね、部屋の扉だけはちゃんと開けておくように。もちろん、年寄りが邪魔をすることはない。ゆったり語り合うこともいいかもしれないね。そうだろう、立村くん？」

「そこまで息子の下手な演奏に心を留めていただいて恐縮です」

もはや父は息子を、生贄として差し出すつもりなのだろう。もう勝手にしろと言いたい。

「それでは、どうぞ。私たちはここで上総くんの演奏をゆっくり堪能することにするよ」

——これって強制連行みたいなもんだらう？

印條先生夫妻と父に見送られ、上総は野々村先生に誘われる形でピアノのある部屋へと向か

った。ちゃんと扉は開け放されていた。

その二十一 弾き納め（3）

印條先生の部屋に入り立ち尽くすの上総に、野々村先生は手馴れたふうにあっぴやうにアップライトピアノを開いた。かかっている黒いフェルトをたたむと、椅子をひき、

「こちらどうぞ」

微笑みつつ手で指し示した。

「ありがとうございます」

口にすべき言葉が見つからない。扉が開いているので圧迫感こそないものの、年齢の離れた女性とふたりきりというのは母でもない限りまずありえないパターンだった。しばらく座ったまま手を鍵盤に置くか迷っていると、野々村先生はすぐに隣のピアノ用丸椅子をひっぱりだし隣に腰掛けた。

「今は誰にも聞かれていませんので、安心してくださいね」

——いや、かえって緊張するんだけどさ。

本心を飲み込む。お礼を改めて言うべきか。実際野々村先生のおかげでクラスの統一が取れて合唱まで持ち込むことができたのだから、感謝すべきなのだ。ただそれは学校できちんと頭を下げるべきであり、もっというならA組の生徒とともに行うことなのではとすら思う。少なくとも、名前を呼び合う環境で、プライベートに片付けることではないはずだ。感情が少し乱れ気味でピアノを弾くタイミングすら失っている。

野々村先生はしばらく上総を見つめていた。おもむろに口を切った。

「実は、これから私も、印條先生のもとにお稽古に上がることになりました」

——野々村先生が？

用意していた言葉も消える。上総は急いで野々村先生に向き直った。

「ピアノのことですか」

「そうです。いつかお話したかもしれませんが、私は中学受験を迎えるまでエレクトーンを習っていた時期があります。しかしいろいろあり休止していて現在に至ります。時間ができれば再開するつもりでもともとありました、あえてこの機会にと印條先生へ師事させていただこうと考えました。驚きました？」

いたずらっぽく上総を見やる目線は、もはや学校の野々村先生のものではない。膝を突き合わせたまま、ただどもるのみ。

「あの、でも、印條先生はピアノの専門ではなかったと伺いましたし、あの、それに野々村先生は」

「弓絵さんと呼んでね」

「あ、あの、弓絵さんは」

舌がもつれる。エレクトーンとピアノとは鍵盤楽器とはいえほとんど別物といろいろな人から聞いていたのだが、本当にそれでいいのだろうか。

「印條先生と私とのつながりを簡単に説明しましょうか。私の父は印條先生がお仕事をなさって

らした頃の側近でした。本当に子どものころから家族に良くしていただき、それこそ家族ぐるみのお付き合いをさせていただいてます。私にとっては親戚のおじさまのような関係なんです。この点が伝わってなかったのかもしれないね」

「初めて伺いました」

父は知っていたのだろうか。もう少し説明がほしい。手抜きだと怒りたい。さすがに野々村先生……心の中ではかたくなにそう呼び続ける……にそれをぶつけるのはお門違いなのでやめておく。

「今回は、不思議な縁でこのように上総くんのお父さまとお近づきになりましたが、私にとっては様々なことへの目覚めのきっかけにもなりました。そのひとつが今回の合唱コンクールであり、ピアノであり、上総くんのレッスンであり、です」

「僕の、ですか」

名前はできるだけ呼びたくない。息が詰まりそうだが必死に受け答えする。

「そうです。きっと上総くんは私のことを、一年B組の担任で、国語教師で、かつ個人面談の担当の教師としか見ていなかったでしょうから戸惑うのも当然ですよね。学生時代の先輩だった狩野先生からもいろいろと事情は伺ってます。私のことを、ひとりの人間として認識しづらいのは当然です」

——わかっているなら、なんで。

まだ言葉が出てこない。頭の中は完全にミキサースタート状態。目の前の野々村先生がなぜ、こんなに接近してくるのがわからない。手を膝で握り締めた。

「さっき、印條先生にもお話をさせていただき、快く承諾していただきました。おそらく、上総くんの前後の時間にレッスンさせてもらうことになると思います。場合によっては待ち時間も含めてご一緒させていただくかもしれません」

——ちょっと待てよ、なんか俺の想像以上の出来事が勝手に進んでいるよ。父さんじゃないけど、ドラマ仕立てに仕込まれているような気がする。

本条先輩の言葉、「とにかく人の話を聞く」これに徹しよう。それしか道はなしと見た。

「学校ではいろいろな柵がありますし、それ以上に教師と生徒というはっきりとした枠があります。それは学校内の規律を守る意味で必ず必要なものです」

野々村先生は続けた。

「ですが、一体一のお友だちとして接していくに当たってそれは邪魔なものになります。学校内では難しいでしょう。しかし、お稽古事という全く異質の場所であれば話は変わります。私と、上総くんとは同じ先生についているお弟子さん同士であって、立場はピアノの上では対等なのです。むしろ、一ヶ月早くお稽古している上総くんの方が先輩にあたるかもしれません」

「いや、それは、ちょっと」

口ごもるが野々村先生は動じない。

「私がしつこいくらい、上総くんに私の名前をこの場では呼んでほしいと言うのはそれが理由です。私たちは、ピアノを学ぶ同じ生徒であって、上下関係はありません。学校に戻ればもち

ろん、私も立村くんと呼びますし一生徒として接します。でもこの場では、一体一でゆっくりと音楽や人生のことについて語り合える つながりを大切にしたいのです。ここまで、飲み込めました？」

——飲み込めた、たつて、人が同じならそう切り替えなんてできないだろ。

答えることもできずにいるのが情けないっらないのだが、しかたない。それしか対応できない。上総が知りたいのは、なぜそこまで、立村家に食い込んでこようとするのかという点だった。父にそこまでベタ惚れなのか。それとも別の目的があるのか。単純に上総を教え子として心配してくれているだけなのか。全くわからない。

しばらく黙り込む上総に、野々村先生は止めを刺した。

「これも実はお話するつもりでしたが、金曜の合唱コンクールの時、上総くんのお母さまと私とはきちんご挨拶しています。もし、別のことでひっかかりがあるようであれば、その点をご心配なく。本当よ。大丈夫だから」

様子を伺うように、わざとらしい明るさでもって語りかけてくる。

「母が？ でも合唱コンクールは一般公開されてなかったじゃ」

恐ろしさが二倍になる。今回の合唱コンクールは母に聴かれないですむという救いがあったからこそ好き勝手できたところがある。コンクール後母とは連絡を取っていないし出来についても話していないのだが、まさか、あの場にいたとは考えにくい。念のために確認する。

「一般公開はされていません。ただ、上総くんのお母さまはどうしても心配だからということでこっそりと覗かせてほしいというご要望でした。またこの件はあとで話してもよろしいという確約をいただきましたから、内緒の希望ではありません」

「母は、それで」

さぞ棒のような演奏の息子にぶち切れたのではないかと予想する。さらにあのトラブルについても、間近で見ていた可能性ありだ。ぞっとする。

「いったんご覧になった後、お昼すぎにもう一度いらっしゃいました。その時は私をご案内しましたので少しお話をさせていただきました。どのようなご縁かはお伝えしてませんけれど」

——見合い話ってことは隠してることか。

血の気がだんだん引いてくる。これで雄大なる心持ちで「モルダウの流れ」弾けっていいのか。あまりにも無茶だ。野々村先生は上総の本心を読み取ることなく語る。

「頑張って指揮をしている上総くんの後ろ姿をしっかりと見つめて、最後まで確認したあとすぐにお帰りになりました。本当に安心なさってらっしゃいましたよ」

——違っう、俺がめまい感じているのはそこじゃないてさ。

母と野々村先生との間にどのような会話がなされたのかは、今の話だけだと読み取れない。父との見合い話がきっかけとかそういうわけではないのだろう。ただ野々村先生は上総の母ということでお相手をしてくれたらしいし、その間に息子の成長過程などを語る可能性もあるだろう。まさかとは思っうが、そこで野々村先生のことを父を狙う泥棒猫だなんて思い込んだりしてないだ

ろうか。母はいったん敵と見定めたら怖い。とことん叩き潰す人でもある。野々村先生に限ってそういうことはないと思いたいのだが、願わくば単純に息子のことをひいきしてる先生とだけ認識してほしい。

——八方塞がりってこのことかよ、まったく。

いや、反対に気があって女友達っぽいつながりになっていたらそれはそれで面倒だ。母のことだから上総の過去の交友関係もべらべら先生に相談するかもしれない。その流れで清坂美里の存在についても熱くおしゃべりするかもしれない。そうなると上総だけではなく、美里にも被害が甚大な可能性が高い。どちらにしても上総の明るい未来は野々村先生経由では見えやしない。どうすればいいんだろう。

「上総くん、私のために、まずは弾いていただけますか？」

野々村先生はやさしく、上総に語りかけた。椅子を軽くピアノに向けるような仕草をした。

「コンクールでは上手な伴奏の方がたくさんいましたけれども、私はずっとお稽古の段階から見ていた、上総くんの『モルダウの流れ』をこの場で、私にだけ聴かせてほしいんです」

「下手ですけど、いいんですか」

間抜けな答えを返してしまったが、野々村先生は頷いた。

「だからこそ、聴きたいんです」

しかたない。逃げられない。諦めて上総はそのまま、白い鍵盤に指を置き呼吸を整えた。

——弾いている時だけはすべてがフラットになるよな。

すべてを振り捨てるように首を一旦振り、和音を深く、沈むほど深く押した。

豊かな大河の流れを感じながら、この一ヶ月触れてきた鍵盤の音色を自分の深いところに刻み込んでいった。助けてくれた仲間や家族や先生たち、伴奏を目指すことで知ることのできた人それぞれの音楽に対する愛情とつながり、下手なりに努力する意味のようなもの。いろいろな感情がマーブルのように混じり合い、今まで自分が感じたことのない溢れるような何かが指先にほとばしる。頭の中に浮かべた自分の指揮する手を見つめ、上総はラストの高いオクターブまで一気に走り切った。

——弾き納めだ、やっと終わったよ……！　一ヶ月長かった……！

力振り絞ったあとの達成感と脱力感が混じった状態で、上総は野々村先生の顔を見た。

——お礼を言わないとな。さすがにこれは立たないとまずいだろ。

立ち上がり、声をかけようとした瞬間、息を呑んだ。野々村先生の瞳が傍目にもわかるほど潤んでいた。いや、頬が濡れている。しかもハンカチなどで拭こうとしてない。そのままじっと上総を見つめている。

体調悪くしたのだろうか。それともあまりにもひどい弾き方でめまいを覚えたのだろうか。実際そういう人もいるから否定できない。思わず呼びかけた。

「野々村先生、大丈夫ですか？」

くすんだ声で、野々村先生は上総を諫めた。

「名前で、名前で呼んでください」

「ゆみえ、さん？」

戸惑いつつ呼びかけると、野々村先生……もとい弓絵さんはそのまま微笑んだ。

「もう一度ピアノを習いたいという気持ちにさせてくれた音色なのですから。感動しても、いいでしょう？」

上総は深く一礼した。

——終——

織切の音色

<http://p.booklog.jp/book/78588>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78588>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78588>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ